ナ（まきみつむ、たけのはなその、はかなきも、まことの道は、（いらざらめやれ）紫花玉（はなたまは、花のあれば、例の用君のゝとおほせられて）

はなごころ　ナ花心。うはき。あだごころ。うつりやすきこころ。御堂関白集（霞たつ、春の宮には、いそぎつる、はなごころは、人はやあるらん）源宿木（はなごころにおはする宮なれば、あはれとおぼすとも、いまめかしき方に、かならず、御心うつろひなんかし）

はなござ　ナ花御座。はなむしろに同じ。

はなごめに　ソ花込。はなながら。万廿（せが宿の、花橘は、波奈其米爾、たまにぞあがぬく、まさべくるしみ）

はなごろも　ナ花衣。さくらがさねのころも。はなのいろのころも。新後拾（けふをいへば、もやぬぎかへぬ、はなごろも、ちりてゆくらの、かさみなるらん）

はなごゑ　ナ鼻聲。なみだにむせぶこゑ。はなにひゞくこゑ。源柏木（あむくおしのごひ云々、御息所も、はなごゑにて、なりさまひて）宇拾十（聲ははなごゑにて、高くてものいへば、ひとうちひゞきてきこえける）

はなざかり　ナ花盛。はなのさかり。伊勢（年ごとの櫻のはなざかりには、その宮へなんおはしましける）

はなさき　ナ鼻先。めのまへ。うはべ。おもてむき。

はなざくら　ナ花櫻。やへざくら。はなのあかきさくら。詞花（くれなゐの、うすはなざくら、にほはずば、みな白くもと、みてやすぎまし）六帖六（はなざくら、いまさかりなり、おもひこし、かざしにしては、ちらばちるとも）源幻（ほかのはなは、一重ちりて、八重さくはなざくら、さかりすぎて、かばざくらはひらけ、藤はおくれていろづきなどこそすめるを）

はなざくら　ナ花櫻。かさねの色目の名。表は白にて、裏の青なるものをいふ。胡曹抄

はなし　ナ話。ものがたり。おきく物語（かやうのはなしをきゝさるとて、のち、意趣ものがたりなり）

はなしあひ　ナ話合。たがひにかたらふをいふ。

はなしあひて　ナ話相手。ことむかふき。はなしのとも。

はなしあふ　ワヒトリ四。話合。かたりあふ。ぎうぞんす。

はなしか　ナ話家。はなしを、たくみにするひと。また、むかしばなしなどをして、よきさりをするひと。

はなしかく　ワヒトリ。シ二。話掛。はなしをかく。

はなしがひ　ナ放飼。はなちがひに同じ。

はなしずき　ナ話好。はなしをこのみてするひと。

はなしたかげ　ナ花下陰。はなのきのかげ。はなのきさるさるげ。成通卿集（なるもなし、みすててかへる、そらもなし、はなしさるげは、身をつくしてん）

はなしづめ　ナ鎮花祭。三月にある祭なり。下文を見るべし。公事根源（鎮花祭、これは、大神、狭井の二祭なりと云々、春花のとびちる頃は、疫神分散して、人をなやまするゆゑに、かれをしづめんためには、この祭ありとかや。令義解にておこなはる）新拾（のどかなる、春の祭の、はなしづめ、風なきまれと、なほいのるらし）

はなしづめのまつり　ナ鎮花祭。はなしづめに同じ。

はなしとき　ナ話伽。はなしあひて、ことをかなさき。

はなしどり　ナ放鳥。はなちどりに同じ。

はなしね　ナ花稲。米を、紙につゝみて、木の枝にあまたつけたるものにて、幣のごとくにて、神にたてまつるものなりとぞ。夫木□（やまざくら、よしのまうでの、はなしねを、たづねんひとの、そでにつゝまん）

はなしべ　ナ蕊。はなのなかにあるちひさきすぢ。

はなしほ　ナ花鹽。やきしほの、はながさになしたるもの。

はなしやうぶ　ナ花菖蒲。はなあやめに同じ。

はなしやくろ　ナ花石榴。木の名。柘榴の一種にて、木、常のよりもちひさく、花は、八重にて、實をむすばず。

はなじる　ナ鼻汁。はなのあなよりながるゝしる。

はなじろむ　ワヒトリ四。鼻白。こゝろおくれす。おくしてみゆ。源花宴（さてのひとぐは、みなおくしがちに、はなじろめるおほかり。地下の文人は、まして）

はなす　ワカナ四。放。はなつに同じ。万四十（上野、佐野の船橋、登利波奈之、おやはさくれど、我はさかるかへ）

はなすすき　ナ花薄。をぞな、すゝきの、ほにいでたるをいふ。万九（めづらしく、きみがいへなる、波奈須酒伎、穂にいづるあきの、すぐらくをしも）

はなすすき　ナ花薄。かさねの色目の名。表は白にて、裏のうすむらさきなるものをいふ。胡曹抄、藻塩草

はなすすり　ナ鼻啜。すゝりなきになくをいふ。ものごとのこゝろにしみぐとしておぼゆることにする事なり。源松風（入道、例の、後夜よりふかうおきて、はなすゝりうちして、おこなひいましけり）

はなすぢ　ナ鼻筋。はなぐき。はなばしらのすぢ。はなのすぢの、まゆのあひだにかけてとほれるところ。

はなすひ　ナ花吸。鳥の名。めじろをいふ。薩摩にて、

はなずり　ナ花摺。はなをすりつけて、そのはなのいろにそめなるもの。壬生二品集（初萩の、ひとはなずりの、たびごろも、露おきそむる、宮城野のそら）

はなずりごろも　ナ花摺衣。はなずりのころも。新古（秋萩を、折でれすぎじ、月草の、花摺衣、露にぬるとも）

はなせきしやう　ナ花石菖。いはせきしやうに同じ。

はなその　ナ花園。はなのその。催馬楽（波名曾乃に、我なべてや、我なべてや、めざしたぐへて）

はなそのやま　ナ花園山。山の名。参河國、碧海の郡にあり。堀川百首（はなぞのの、岩間のこほり、とけながら、はなぞのやまの、みねのかすめる）

はなぞめ　ナ花染。つきくさのはなにてそめたるもの。また、さくらいろにうすあかくそめたるもの。古今（世の中の、ひとのこころは、はなぞめの、うつろひやすき、色にぞありける）續古（夏衣、たちかへてしも、わすられぬ、去年の、はなぞめのそで）

はなだ　ナ縹。染色の名。あさぎをいふ。名目抄。また、縹の色目にて、表裏ともに縹なるをいふ。抄　雁衣　新葉（うつりゆく、人の契れ、月草の、縹の帯の、結ぴたえつゝ）

はなだあゐ　ナ縹藍。縹の色目の名。はなだに同じ。

はなだい　ナ花鯛。たひのたぐひをいふ。土佐にて、

はなだいろ　ナ縹色。はなだのいろ。あさぎのいろ。

はなだか　ナ鼻高。てんぐをいふ。東国にて、

はなだかに　ソ鼻高。はなたかく。狭衣一（はなだかには、さらくしきさまにやあらんとぞおぼしそめらるゝ）

はなたちばな　ナ花橘。たちばなの、いまだ實はならず、花にてあるほどをいふ。古事記（かぐはし、波那多知婆那は、上枝れ、鳥ゐからし、下枝れ、人とりからし）

はなたちばな　ナ花橘。襲の色目。表は朽葉、裏は青なるもの。抄胡曹　又、綾色は、經黄は、緯萌黄なるもの。

はなたちばな　ナ花橘。名香の名。ぢんの一種なり。

はなだつ　ワヒトリ四。花立。はなさく。夫木三（妹が袂れ、まだ花ざゝず、蕾の中に、匂ふかりれ、風にしられて）

はなだて　ナ花瓶。はないけ。はながめ。

はなたらし　ナ鼻垂。おれものをいやしめよぶことぞ。

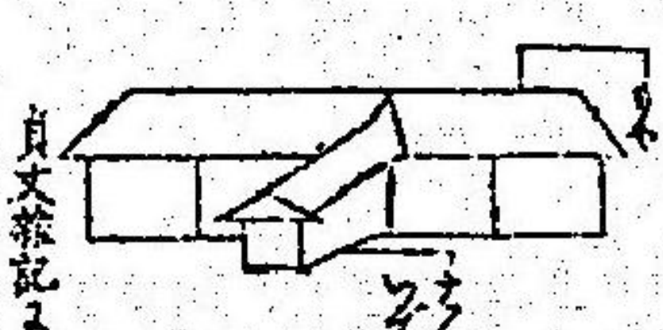
はなたりやまひ　ナ鼻垂病。かぜけ。かぜのやまひ。

はなたる　ワヒトリ四。鼻垂。すゞむな ながれいづ。枕草四（もののあはれしらせ顔なるもの、はなたる間もなく、かみて、ものいふこゑ、まゆぬく）

はなぢ　ナ衄。はなよりいづるち。和名（衄和名、波奈知）

はなちあぐ　ワカナニ。放上。はなちて、たかくあぐ。堤花ひゞけの（いかにくさみさてまつらせさまふほどに、かつらうさなぞ、はなちあげてうくをせさまひける）

はなちいで　ナ放出。やのむねの、ひきさちてつゞけたるところ。落窪一（寝殿のはなちいで、また一間なる、おちくぼなるところなんすませたまひける）



貞丈雜記に見えたる図

はなちうま　ナ放馬。はなちたるうま。また、のべなどに、はなちかひにしたるうま。蜻蛉（河面には、はなちうまどもの、あさりあるくも、はるかにみえたり。ひとおそれなり）

はなちがき　ナ放書。もじをつゞけずして、はなちてかくをいふ。空穂藤原（その次に、ならべて、はなちがきにかきて、おなじもじをさまぐにかへてけり）

はなちがひ　ナ放飼。はなちおきて、やしなふをいふ。

はなちごま　ナ放駒。はなちうまに同じ。万十（妹が髪、あげさゝむ野の、放駒、あらびにけらし、あはぬおもへば）

はなちじやう　ナ放状。ゆづりじやうに同じ。

はなちで　ナ放出。はなちいでに同じ。空穂樓上（かのひんがしのはなちでの、母屋ぶさうな、屏風たてて）

はなちどり　ナ放鳥。はなちたるとり。また、いけなどにはなちがひにしたるとり。万二（島の宮の、まがりの池の、放鳥、ひとめにこひて、池にかづかず）

はなちのかみ　ナ放髪。ふりさけがみ。散木（うなゐごが

髪を、とかさて、まきそめ川よ、淵瀬かはるな）

はなちるさと　ナ。花散里。名香の名。ぢんの一種なり。

はなつ　ワ。カケ。四。放。発。はなれしむ。いだす。ゆみをいる。てつぽうをうつ。催馬楽（はなぞのは、ぢれなれ波名天や、ぢれなれ波奈天や、めざしたぐて）宇拾廿（たぶやけはやく。声のひじり、声をはなちてまどろときは、うへのひじり、目をみあげて）

はなつ　ワ。カケ。四。放。のぞく。とりのく。蜻蛉（ひきさるぜさうなどもはなちたぐりさる、ひしくをとりたらふは、こちいはされて、われらひとりにてあれど）

はなつ　ワ。カケ。四。放。なくしものとす。源須磨（遠くはなちつかはすべきさだめなども侍るは、さまことなる罪はあるべきこそ侍るなれ）浜松三（おほやけはつみせられて。筑紫はをなされおもせしは）

はなつきに　ソ。鼻衝。はなをつきあはすより。おそひちく。宇拾四（潮のみちければ、吹いうきさりける室、はなつきは、すこしふきいださされさりけるほどは、干汐はひられて）平家卅六　資盛朝臣、大炊御門、猪のくまにて、殿下の出御は、はなつきはまゐりあふ）

はなつく　ワ。ヒトリ。四。鼻衝。かんざりをかうむる。空穂蔵開後（御こゝろまどひして御供はつかうまつりさるよし、ひとぐれ、みなはなつきをなされぬ）

はなつくり　ナ。花作。うゑきのはなをつくるひと。

はなづくゑ　ナ。花机。ほとけのまへのつくゑ。また、花香をすうる案なりともいへり。源榊（佛の御飾、花案のおほひなどまで、誠の極楽おもひやらる）

はなづつ　ナ。花筒。はながめ。はないけ。

はなづま　ナ。花妻。はなのつま。また、はなを、えらしみていふとぞ。万八（わか岡は、さをしか来なく、はつはぎの、花嬬とひは、来なくさをしか）

はなつみ　ナ。花摘。はなをつみとるをいふ。古今（三月の晦の日、はなつみより帰りける女どもをみて）

はなづら　ナ。牛縻。はなわともいふ。うしの、はなにとほすなはなり。和名（牛縻和名波奈都良）

はなであしらふ　ワ。カケ。四。鼻さきにあしらふ。こゝろにもいれずてあしらふ。おあん物語（世は時々おやものをとて、鼻であしらふゆゑ、腹もたてども）

はなどり　ナ。花鳥。はなととりと。後撰（花鳥の色をも音をも、いたづらに、ものうかる身は、過すのみなり）

はななでしこ　ナ。花撫子。襲の色目の名。表は、むらさきにて、裏はくれなゐなるものをいふ。滋藍草

はななは　ナ。牛縻。うしの、はなはとはすなを。万十六（馬にこそ、ふもだしかくもの、牛にこそ、鼻縄はくれ）

はなに　ソ。華。はなのごとくに。万十二（初尾花、波名爾みんとし、天の川、へなりにけらし、としのをながく）

はなにかく　ワ。カケ。シ二。掛鼻。ほこる。自まんす。

はなにほひ　ナ。花句。はなのにほひ。万二十（みわたせば、向峰上の、波奈保比、てりてたてるは、はしきたが妻）

はなねぢり　ナ。鼻捻。馬具の名。うまのはなをねづるもの。はねうまなどをおさむるにもちふるものなり。

はなの　ナ。花野。はなのさきたるの。但し、新葉集の、地名なりともいへり。万十（秋萩の、花野のすゝき、穂はいでず、わがこひわたる、こもりづまはも）

はなのあに　ナ。花兄。木の名。うめの異名。

はなのうてな　ナ。花臺。れんざい。はちすのうてなを見るべし。夫木雑（たちさらぬ、ちかひたのめば、おのづから、はなのうてなは、のぼらざらめや）

はなのえ　ナ。花枝。はなのえだ。源梅枝（花の枝は、いとゞこゝろを、とむるかな、人のとがめん、香をばつゝめど）

はなのえん　ナ。花宴。はなをもてはやすあそび。拾遺（梅花の本に、御いしたてさせたまひて、花の宴せさせ給ふに、殿上のをのこども、歌つかうまつりけるに）

はなのおとゞ　ナ。花弟。菊の名。きくの異名。夫木時（百草の、花の弟と、なりぬれば、やへくさのみ、みゆる白菊）同（幾千歳をも、白菊は、草のあるじと、なりながら、菊の花の、弟にて、いとゞ匂を、のべはみつ）

はなのかげ　ナ。花影。はなのひかり。菅万（はるかすみ、色の千種に、みえつるは、たなびく山の、花の影かも）

はなのかほ　ナ。花顔。はなのけしき。堀川百首（秋萩は、去年にかはらぬ、色なれど、なほ珍しき、花の顔かな）

はなのき　ナ。花木。灌木の名。にしきぎをいふ。上野にて、

はなのこゑ　ナ。花聲。はなのいふこゑ。はなよりいでける声。山家集（白川の、春のこずゑの、うぐひすは、はなのことばを、きくこゝちする）

はなのさきで　ソ。鼻先にて。こゝろにもいれずて。

はなのしまき　ナ。花風捲。はなをふきまくかぜ。はなをふきちらすかぜ。夫木四（海かけて、比良山おろし、ゆきかへり、花のしまきの、波たゝくみゆ）

はなのすがた　ナ。花姿。はなのけしき。はなのごときうつくしきすがた。拾玉（たなばたも、幾代の秋の、ほどまでか、花のすがたも、しぼまざるらん）

はなのそで　ナ。花袖。はないろごろも。はなぞめにそめさるそで。月清集（はなのそで、かへまくをしき、けふなれや、やまほとゝぎす、声はおそきに）

はなのたもと　ナ。花袂。はないろごろも。はなぞめにそめさるたもと。拾玉（をみなべし、なまめくさまも、目にたゞ、花のたもとを、ぬげる身なれば）

はなのつゆ　ナ。花露。うばらのはなを、かげぼしにして、らんびきにて、つゆにとりたるもの。常に、女の假粧をするとき、白粉をとく料などにするものなり。

はなのとざし　ナ。花扃。さくらの花にかこまれたるいへ。

はなのとぼそ　ナ。花樞。さくらのはなにてかこまれたるいへ。新古（これやこの、うき世のほかの、はるならん、はなのとぼその、あけぼののそら）

はなのひ　ナ。花火。はなをもやすひ。夫木廿（花の火を、櫻が枝に、たきつけて、煙となれる、あさがすみ哉）

はなのみやこ　ナ。花都。うつくしきみやこ。はなのごとくさかえたるみやこ。浜松三（大弐たづねとりて、花のみやこに率てかへりたまひにしかど）

はなのゆき　ナ。花雪。名香の名。ぢんの一種なり。

はなわ　ナ。塙。つちの、たかくもりあがりたるところ。やまのさしいでたるところ。奥儀抄三（武隈の、はなわにたてる、松だにも、わがごとひとり、ありとやはきく）

はなばいろ　ナ。花葉色。はなやまぶきに同じ。（西三條装束抄、飾抄）

はなたて　ナ。花楯。はなをつみているゝたて。

はなばしら　ナ。鼻柱。はなのあなのあひだのへだて。和名（黄帝内経云、水溝、在鼻柱下、和名波奈波之良）

はなはだ　ソ。甚。ほどをすぎて。いたく。いみじく。万七（甚多も、ふらぬ雨ゆゑ、にはたづみ、いたくなゆきそ、ひとのしるべく）土佐（かぢとり、けふ、風雲のけしき、はなはだあしといひて、船いださずなりぬ）

はなばたけ　ナ。花畑。はなぞのに同じ。

はなはだし　サブ。甚。ほどをすぎたり。のりをこえたり。この語は、今は、はなはだしいと、いひそへていふ。蜻蛉（例ならぬほどゝきすのおとなひにも、やすきそらなく思ふべかめれ。かしこまりを、はなはだしうおぼされば、つやゝかなる事は、ものせざりけり）

はなはだしい　サ。甚。はなはだしを見るべし。

はなはちす　ナ。花蓮。はなのさけるはちす。新六（露やどす、契もあるを、花蓮、猶玉こすや、浮葉なるらん）

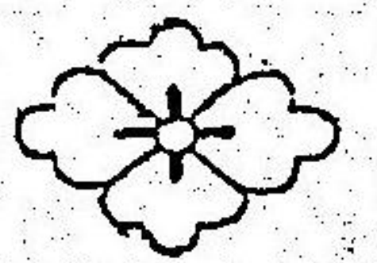
はなばなし　サブ。花々。はなやかなり。みごとなり。

はなばなと　ソ。花々。はなやかに。みごとに。うつくしく。狭衣一（くまなき日のけしきに、はなばなと、にほひみちたまへる御かほつきを、まばゆげにおぼして）

はなばなに　ソ。花々。はなごとに。後撰（をるからに、わが名はたちぬ、女郎花、いざおなじくば、花々にみん）

はなび　ナ。花火。とぶひのたぐひ。焔硝に、さまざまの薬をあはせたるものにて、高く、空にうちあげて、火のひかりにて、種々の物の形をあらはしいださするもの。

はなびし　ナ。花菱。紋所の名。はなを、よこにおしひらめたるさまにして、ひしのかたちにゑがきなしたるもの。



はなひせ　ナ。塞鼻。はなのつまり。和名（鼽鼻、釋名云、鼻塞曰鼽和名波奈比世、鼽久不通、遂至窒塞也）

はなびせんかう　ナ。花火線香。はなびのくすりを、こよりしべなどにつけたるもの。小児の、線香をたつるごとくにて、灰中などにたててともすものなり。

はなびら　ナ。花瓣。はなの、めぐりにひらめきいでたるもの。空穂藤原（はなざくらの、いとおもしろきはなびらに）和名（葩和名波奈比良、花木花片也）

はなびらもち　ナ。花瓣餅。はなびらのかたちしたるもちにや。永正狂歌合（はなびらもちのいしげなる氣味を、まやうくさん申しはべるべし）

はなびらゆき　ナ。花瓣雪。ゆきの、はなびらのごときもの。

はなひる　ワ。ヒトリ。カ一。嚏。くさめをなす。いにしへの諺に、人よりおもはるゝときは、くさめすといひ、また、くさめは、忌むことなりとて、くさみをきけば、旅立などをもつゝしむといへり。万十一（うちなげき、はなをぞひつる、つるぎたち、身にそふ妹が、おもひけらしも）古今（いでてゆかん、人をとゞめん、よしなきに、隣の方に、はなもひぬかな）和名（嚏和名波奈比流）

はなぶえ　ナ。花笛。うそぶくなどをいふにや。

はなふくあき　ナ。花吹秋。ながつきのこゝのかの日、菊の酒をのむは、花をふく事あるより、やがて、長月の事をもかくいふとぞ。散木（おしなべて、はなふく秋も、うつろへる、菊ならべえこそ、みすてざりけれ）

はなぶさ　ナ。花房。はなの、ふさやかにさきみちたるもの。また、はなびらのつきたるうてなをいふ。枕草子（めでたきもの、色合よく、花房ながくさきたる藤の、松にかゝりたる）和名（蕚和名波奈布佐一云花房承花蒂也）

はなまうせん　ナ。花毛氈。はながたなどあるまうせん。

はなまじろき　ナ。鼻を、すこしうごかすをいふ。うそぶには、あさがひて、こゝろにてはおさせらふをいふ。源少女（時はあらふ世の人の、下には、はなまじろきをしつゝ、追従しけしきどりつゝ、あさがふほどに）

はなみ　ナ。花見。はなをもてもやすあそび。おほかた、さくらにいへり。古今（わがやどの、花見がてらに、くる人は、ちりなんのちぞ、こひしかるべき）

はなみ　ナ。猪道。このならび。古事記（波那美波志）

はなみぞ　ナ。鼻溝。はなのまさのくぼみたるところ。

はなみち　ナ。花道。しばゐの、ぶたいにかよふみち。

はなみづ　ナ。鼻水。すゝばな。はなよりながるゝ水。

はなみどり　ナ。花見鳥。うぐひすの異名。（滑稽草）

はなみね　ナ。鼻梁。うまのはなぐき。和名（鼻梁俗云波奈美袮）

はなみやま　ナ。花見山。山の名。備中にあり。夫木（今ぞしる、ちらぬ櫻の、花見山、風もうらゝに、治れる世を）

はなむけ　ナ。餞。うまのはなむけ。竹崎五節絵詞（見送せべ、はなむけなどもあらんずらん。これより、御布施をまゐらせてこそ、祈はれなるべきあひだ）

はなむし　ナ。鼻虫。獣の病の名。鼻に、蛭のいでくるものにて、その虫は、鼻の孔よりもおほきなりとぞ。

はなむこ　ナ。花婿。むすめむこをよぶとなへ。

はなむしろ　ナ。花筵。うつくしくいろどりたるむしろ。

はなむすび　ナ。花結。はなをつくるをいふ。詞花（二條太后宮、ふりぞめの袴は、人の許は、花結はつくらしけるを、おもしろくむすびて奉れりければ）

はなんぼ　ナ。瓜の名。なうりをいふ。大和などにて、

はなめく　ワ。ヒトリ。四。華やぐ。ときめく。落窪物語（そのころ、時にあひ、はなめかせたまふ后おもしましけり）

はなもつやく　ナ。花没薬。香具の名。外國よりきたるものなり。そのさま、圓木を、ふたつにきりたるがごとくにて、長さ、一二寸ばかりもあり。このものは、もと、熱國の木の虫よりいでくるものなりといふ。

はなもみぢ　ナ。花紅葉。はなともみぢと。濱松四（鶯蝶はたえおれ、花紅葉をもてあそびて）

はなもり　ナ。花守。はなをまもるひと。夫木（すぎぬとや、おなこゝろし、花守の、なが猶はも、秋いあるらん）

はなや　ナ。花屋。はなうり。また、はなをあきなふいへ。

はなやかさ　ナ。華。はなやかなるさま。源宿木（まして、この頃は、世にひゞきたる御有様のはなやかさは）

はなやかなり　ケ。華。はなのごとく、きらくし。はなのごとくうるはし。枕草子（うるはしく、はなやかなる装束して、異物はくはで、佛の御おろしをのみくふが）

はなやかに　ソ。華。はなのごとくきらくしく。はなのごとくうるはしく。万廿（むらさきは、そめてしかづら、花八衢、けふみるひとは、のちこひんかも）

はなやぐ　ワ。ヒトリ。四。華。はなやかになる。源宿木（いとそなやぎきはりたまふ事かぎりなし。中納言、いよくうれしうよろこぶ）源柏木（なほ、はなやぎたるさまにて、つきて、ものこらひしたまふやどの）

はなやしき　ナ。花屋敷。はなぞのなどまうけたるやしき。

はなやなぎ　ナ。花柳。服の色目の名。表は白、裏は青。

はなやま　ナ。花山。地の名。山城國、宇治の郡にあり。拾遺（まてといはゞ、いともかしこし、はなやまに、しばしとなかん、とりの音もがな）

はなやまぶき　ナ。花山吹。服の色目の名。表は、淡紅に、

薄黄なる織物は、裏の黄なるをいふ。物具抄また、表は薄朽葉は、裏は黄なりともいへり。（西三條装束抄、胡曹抄、藤倫抄、雅衣抄）

はなよめ　ナ。花嫁。よめをよぶとなへ。

はならし　ナ。羽鳴。鷹のはらふ羽なり。雄鷹の、雌鷹は、鈴をみせんとて、そねくらべするをいふとぞ。（和訓栞）

はなり　ナ。放髪。ふりわけがみ。また、ふりわけがみのめわらは。万七（をとめらが、放髪を、ゆふの山、雲なたなびき、家のあたりみん）同十六（たちばなの、てらの長屋に、わがゐねし、童女波奈理は、かみあげつらんか）

はなる　ワ。ヒトリ。シ二。離。はなれぐになる。へだゝりてあり。そらのやうになる。この語は、地方によりては、はなれるを下一段にいふ。後撰（なきとびぬ、いづちかゆかん、時鳥、なほ卯の花の、かげはなれじ）竹取（蓬莱といふらん山はあふやと、海にこぎたゞよひありきて、わが國の内をはなれてありきまかりしに、或時は、波あれつゝ、海の底にもいりぬべく）

はなれ　ナ。距離。あひだ。あはひ。へだゝり。

はなれいそ　ナ。離岩。はなれたるいそ。夫木三十（朝まだき、沖の小島の、離岩、潮みちくらし、みえずなりゆく）

はなれうま　ナ。放馬。つなをはなれてそれるうま。

はなれごま　ナ。放駒。はなれうまに同じ。万十（妹が髪、あげざゝの野の、放駒、あれゆきけらし、あはぬおもへば）

はなれざしき　ナ。離座敷。おもやよりはなれたるざしき。

はなれじま　ナ。離島。くがよりはなれたるしま。夫木廿四（浪あらき、南海の、離島、たがため法の、船通ふらん）

はなれす　ナ。離洲。くがよりはなれたるす。夫木廿六（汐涸の、干潟の浦の、離洲は、鶴ぞなくなる、友呼ぶらし）

はなれそ　ナ。離磯。くがよりはなれたるいそ。万廿（波奈禮蘇に、たてるむろの木、うたがたも、ひさしき時を、すぎにけるかも）新六（あとたれど、おきのいろはへ、はなれそは、みどりかはらず、たてるむろの木）

はなれや　ナ。離屋。ひとざとよりはなれたるいへ。

はなれる　ワ。ヒトリ。シ一。離。はなるを見るべし。

はなわけごろも　ナ。花分衣。はなをわけてゆくころも。野邊などをゆくにいへり。万代（秋の野の、はなわけごろも、都まで、色はやつさじ、みんひとのため）

はなわらび　ナ。花蕨。草の名。岩陰などの濕地にむゆる草にて、高さ五六寸ばかり、葉のさま、蕨に似て、蕨よりもちひさくしてふとし。この茎、莖の末に、あまの枝さして、栗粒のごときちひさき花さく。

はなゑみに　ソ。花咲。ゑみほうつくしく。万八（夏の野の、さゆりの花の、花咲に、にふゝにゑみて、あはしたる、今日をはじめて、鏡なす、かくしつねみん）

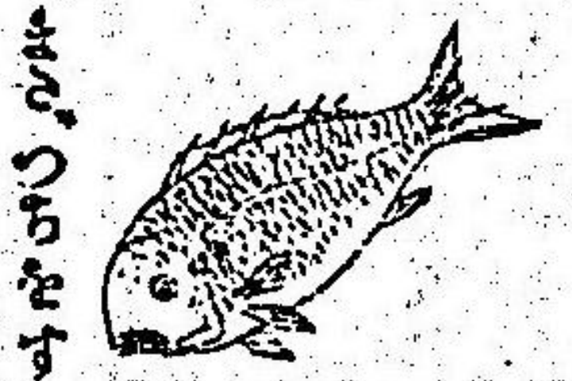
はなを　ナ。鼻緒。もののをしはつけたるを。また、あしだなどにすげたるを。調度歌合（徒跣たえ、はなをきれぬと、あらせずや、絡むしよする、うらなしにして）

はなをあかす　ワ。ヒトリ。シ二。鼻明。だしぬくに同じ。

はなをすすれ　ナ。鼻箭擦。はなをはすられたるさま。

はなをれ　ナ。鼻折。はなをれだひに同じ。

はなをれだひ　ナ。鼻折鯛。魚の名。あかをなるたひのたぐひなり。形、鯛に似て、頭よりも、色うすく、また、鼻すこして、そのさま折れたるがごとし。



はに　ナ。埴。ねばつち。あかつちさるつち。また、つちをすべてもいふ。和名（釋名云、土黄而細密日埴、和名波爾）

はにかみ　ナ。靦。はぶみに同じ。露鼠記（背云、波爾加美、又云伊岐々美）

はにかむ　ワ。ヒトリ。四。靦。はぶみす。字鏡（靦、波爾加牟、又伊女久）

はにさぶ　ナ。半插。つのだらひに同じ。和名（説文云、匜和名波邇佐布、柄中有道、可以注水之器也、俗用楾字、所出未詳、但和名之義、或説云、有柄半插其内、故呼為半插也）

はにし　ナ。盌。はじ。和名（椀和名、波邇之、今之埴盌木也）

はにし　ナ。土師。つちざいくを、なりはひとするひと。

はにつち　ナ。埴土。はにに同じ。神代紀（以埴土作舟）

はにふ　ナ。埴生。はにのあるところ。万一（草枕、たびゆく君と、しらませば、岸の埴生に、にほはさましを）

はにふのこや　ナ。埴生小屋。つちにて、めぐりをかこひたるちひさき小屋。万十一（をちかたの、赤土少屋に、小雨ふり、床さへぬれぬ、身にそへわぎも）

はにふのとこ　ナ。埴生床。ひらつちに、むしろなどしきたるところ。鎌倉右大臣集（旅のそら、なれぬはにふの、よるの床、わびしきまでに、もる時雨かな）

はにやすびめ　ナ。埴安姫。いざなみの命の御子にて、よ

ろづの土をつくりたまふ大神なり。

はにわ　ナ。埴輪。みさゝぎのめぐりにたてゝおくつちにんぎやうをいふ。いにしへ、貴人などのうせたる時は、その墓のめぐりに、人馬などを、いけながらうづみおりしを、後に、土人形にかへてたつる事となれり。和名（埴輪波爾和　山陵纏邊作埴人形立如車輪者也）

はにわり　ナ。半月。ひとつの身にて、男と女とのみちにかなるもの。下文を見るべし。和名（半月、内典云、五種不男、其曰半月、俗說云波爾和利　一云、謂其體男而不男、一月卅日、其陰十五日爲男、十五日爲女、名半月也）

はぬ　ワ。カケ。シニ。撥。すくひはらふ。すゑをあげてはらふ。この詞は、地方にては、はねると、下一段にもいふ。著聞十（高名のはねうま出来けり。姿頻久をめしてのせられたりけるに、ひとたまりもせずはねおとされ）

はぬ　ワ。カケ。シニ。刎。はらひきりはなる。この詞は、地方にては、はねると下一段にもいふ。平家二（入道のたまひけるは、きやつが首、さうなうきるな云々、その後、河原へひきいでて、頭をはねよとぞのたまひける）

はぬ　ワ。ヒトリ。シニ。跳。とびあがる。けるがごとくとびあがる。この詞は、地方にては、はねると下一段にもいふ。

はぬき　ナ。歯抜。はのやまひをなほすくすし。

はぬけ　ナ。歯脱。はのぬけおちたるひと。

はぬけどり　ナ。羽脱鳥。はのぬけたるとり。はねのぬけかはるころのとり。新六ゝ（夏草の、野擢がくれの、はぬけどり、ありしはあらず、なる日も身をなし）

はね　ナ。羽根。はのね。また、つばさ。また、とりの、みをつゝみたるけ。古今（白雲に、羽うちかはし、とぶ雁の、数さへみゆる、秋夜の月）和名（翮字亦作翮、和名八禰　一云羽根也）

はね　ナ。羽子。はごを見るべし。

はね　ナ。彈機。よろづのたうぐにつけてもちふるものにて、はじくちから、また、はねかへるいきほひあるもの。

はねうつ　ワ。ヒトリ。四。跳。はうつ。師光集（澤の面は、年ふる鮮の、千枝をへて、後はねうつ、鮎もなしとや）

はねうま　ナ。駻馬。あがりうま。あしをあげてはねをどるうま。著聞十（一條二位の許に、高名のはねうま出来けり）和名（唐令按、此間云、波禰無麻、突厩馬也）

はねおと　ナ。羽音。はおと。はたきをするおと。拾遺（まながどり、うなのふしぞら、とびたる、さぎのはねおと、おもしろきかな）字鏡（翻翸翼聲也、波禰於止）

はねかく　ワ。ヒトリ。四。羽搔。とりのはねがきのところ見るべし。拾遺（もゝはがき、はねかくしぎも、わがごとく、あしたわびしき、かずはまさらじ）

はねかづら　ナ。葉根蘰。はなかづらにや。万四（葉根蘰、いまする妹を、夢にみて、心の中に、こひわたるかも）

はねかへる　ワ。ヒトリ。四。跳返。そりかへる。はねてあともどる。

はねごろも　ナ。羽衣。はごろもに同じ。保憲女集（水鳥の、上にこぼれる、羽衣、いでいりあらふ、波の間もなし）

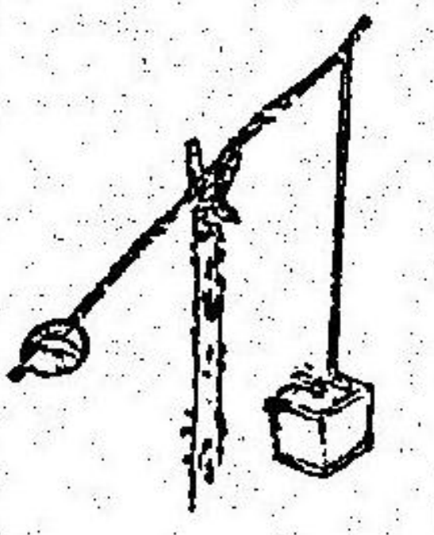
はねず　ナ。唐棣。木の名。にはうめをいふとぞ。されどさだかならず。万八（夏まけて、さきたる波禰受、ひさかたの、あめうちふらば、うつろひなんか）

はねずいろ　ナ。唐棣花色。染色の名。しろくしてあかみたるいろ。万四（唐棣花色の、うつろひやすき、こゝろあれば、年をぞきふる、ことはたえずて）

はねつき　ナ。羽根突。はごのあそびをするをいふ。

はねつく　ワ。カケ。シニ。羽根付。はねてうけつけず。

はねつるべ　ナ。桔槹。はねあぐるやうにしたるつるべ。柱をたてて、そしものうへに、横木をわたし、一方には、釣瓶をつけ、一方には、石をつけたるもの。



はねならし　ナ。羽習。はねのならし。後撰（木がくれて、五月まつとも、時鳥、はねならしせよ、枝うつりせよ）

はねならぶとり　ナ。比翼鳥。ひよくのとりのところ見るべし。栄花（花山）（はねならぶ、鳥となりては、ちぎるとも、人わすれずは、かれじとぞおもふ）

はねに　ナ。撥荷。はねのけたるにもつ。

はねのく　ワ。カケ。シニ。撥退。はぬるがごとくにてしりぞく。七一職人歌合（ゆみつくり、たまづるも、はねのけらるゝ、あらゆみの、おしかへしても、ひとぞこひしき）

はねのはやし　ナ。羽林。うりんけを見るべし。師光集（大将になりて、正月に、ゆきのふりたるつとめて、左大将のもとより、雪つもる、としのはじめは、はなのさく、はねのはやしを、などかたづねん）

はねまはる　ワ。ヒトリ。四。踏遶。はねてとびまはる。著聞十（すなはち、馬をひきいだされぬ。誠におほきにたかくして、あたりをはらひてはねまはりけり）

はねやく　ナ。跳厄。うしろやくに同じ。

はねやすめ　ナ。羽休。はねのやすめ。夫木二（いづちゆく、春の使の、雲の、はねやすめして、こゝはなくらん）

はねる　ワ。カケ。シ一。撥。すくひはらふ。はぬを見るべし。

はねる　ワ。カケ。シ一。刎。はらひてきる。はぬを見るべし。

はねる　ワ。ヒトリ。シ一。跳。とびあがる。はぬを見るべし。

はねをかはせるとり　ナ。比翼鳥。ひよくのとりのところ見るべし。玉葉（いきての世、死にてののちの、後の世も、はねをかはせる、とりとなりなん）

はねをならぶ　ワ。ヒトリ。シニ。比翼。ひよくのとりの、つばさをならべたるごとくにてあり。源氏桐壺（朝夕のことぐさに、羽をならべ、枝をかはさんとちぎらせ給ひしに）

はのじ　ナ。巴字。三月三日、曲水の宴をするをいふ。このとき、水のうへに、巴といふからもじをかく事ありとぞ。夫木五（おもひいでて、音をのみぞなく、ゆくみづに、かきしはのじの、春の夜のゆめ）

はのじのみづ　ナ。巴字水。めぐりみづをもいふ。はのじのところを見るべし。夫木五（かきながす、はのじのみづの、たえねて、そらはのみみな、はるのさつき）

はのはやし　ナ。羽林。はねのはやし。うりんけを見るべし。師光集（はのはやし、はなさくはるの、うれしさを、つゝむほどなり、たにのうもれぎ）

はのぼるつゆ　ナ。葉上露。はにのぼるつゆ。夫木廿（早いでて、門田に宿れ、秋の月、葉上露の、数やみゆると）

はゝ　ナ。母。いろは。をんなおや。伊勢（父はなほびとにて、母なん藤原なりける。さてなん、あてなる人にと思ひける）和名（父加曾、母伊呂波、俗云、父和名知々、母波々）

はゞ　ナ。幅。の。よこのわたり。よこのひろさ。

はゞ　ナ。馬場。うまをのるところ。

ばゞ　ナ。祖母。おほば。ちゝのはゝ。

ばゞ　ナ。老女。おうな。としおいたるをんな。

ばゞいい　サ。羞明。きたなきをいふ。小児の語なり。

はゝうき　ナ。羽箒。とりばうき。はねのはうき。

はゝうへ　ナ。母上。はゝをうやまひてよぶことば。源氏御法（むかし、大将の御母上うせさせ給へりしも、このごろのことぞかし、おぼしいづるはいとものがなしく）

はゝおや　ナ。母親。はゝ。をんなおや。

はゝか　ナ。朱櫻。木の名。かにはざくらに同じ。堀川百首（かごやまの、はゝかが下に、うらとけて、肩ぬく鹿は、妻懸なせそ）和名（朱櫻、一名、朱櫻和名、波々加、一云爾波佐久良）

はゞきく　ワ。ヒトリ。四。幅利。かたみせまくなし。

はゝかた　ナ。母方。はゝのかた。はゝのちすぢをひきたるかた。源氏紅葉賀（御ぶく、はゝかたは、三月こそはとて、つごもりにはぬがせたてまつりたまふ）

はゝかたのおば　ナ。外祖母。はゝのはゝ。和名（外祖母、爾雅云、母之妣爲外王母、母方乃於波）

はゝかたのおほぢ　ナ。外祖父。はゝのちゝ。和名（外祖父、爾雅云、母之考爲外王父、母方乃於保知）

はゝかたのおほをぢ　ナ。従舅。はゝのおほをぢ。和名（従舅、爾雅云、母之従父昆弟爲従舅、母方乃於保乎遅）

はゝかたのをぢ　ナ。舅。はゝのあにおとうと。和名（舅、爾雅云、母之昆弟爲舅、母方乃乎知、一云、大男兄、母方少男弟）

はゝかたのをば　ナ。従母。はゝのあねいもうと。和名（従母、爾雅云、母之姉妹曰従母、母方乃乎波）

はゞからし　サ。憚。はゞかるべし。濱松三（御おもてぶせなるべき事を、はゞからしうおぼせど）

はゞかり　ナ。憚。つゝしみてひかふるをいふ。後拾（あるらめや、身こそ人目をはゞかりの、関はなみだは、とゞまらざりけり）

はゞかりのせき　ナ。憚関。地の名。陸奥にあり。夫木（こえやらで、踏まく惜く、みゆる哉、紅葉の色は、憚関）

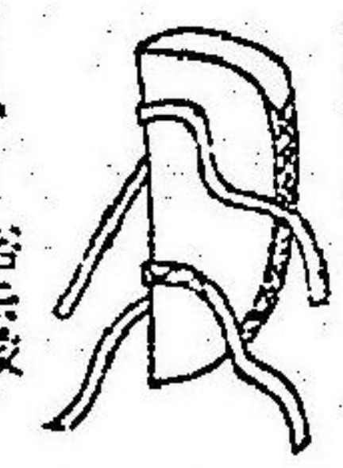
はゞかる　ワ。ヒトリ。四。憚。つゝしみてひかふる。おそれてつゝしむ。万廿（あめつちの、ゆゆき羽群、まくゆすら、なにのつてこと、たゞはしよけん）

はゞかる　ワ。ヒトリ。四。蟠踞。はゞひろがる。はゞあまりてあふる。散木（佛の御舌は、ひろくながくして、大空にはなん、はゞかるといふ事をよめる、御空にも、ふきはゞからし、おほくちの、まがみがはらの、木下風は）

ははかれひ ナ。鰈。魚名。うしのしたをいふ。越前にて。

ははき ナ。箒。ちりあくたをはらひやるだうぐ。箒木の枝もて、また蜘蛛（庭むくとて、はきをもちて、木のまにはたてるほどに）和名（箒、一名彗和名波々木）

ははき ナ。脛巾。きゃはん。旅人などの、みちをあるくとき、すねをまきつつむもの。蒂聞一（大臣の身に、そらふうこぶきを着して、長途をあゆみまゐりたる、ありがたき事なりと、心中に思はれて、ちとまどろまれたる夢に）和名（行纏、本朝式云、脛巾俗云波波岐）



ははきぎ ナ。帚木。木の名。下文を見るべし。袖中抄（むかしより、信濃国に、そのはらふせやといふところに、森あり。その森にてみれば、帚に似たる木の末のあるを、たちよりてみれば、その木もみえずとなん申しつたへたる）新古今（そのはらや、ふせやにおふる、ははきぎの、ありとはみえて、あはぬ君かな）

ははきぐさ ナ。帚草。草の名。ままくさに同じ。

ははきぼし ナ。彗星。星の名。ときとしてみゆる星にて、ひかりの、ながく、尾をひきて、帚のごとくみゆるもの。和名（彗星、其形如帚故也和名、八々木保之）

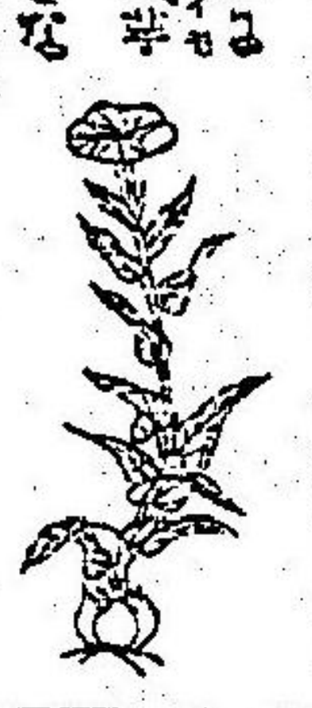
ははきもち ナ。帚持。ははきをもつとものひと。古事記

ははきもも ナ。帚桃。桃の一種なり。木のさま、枝のさま、帚草のごとくにて、実のあぢはひよしといふ。

ははく ワ。カケ。四。掃。はくをいふ。九州にて。

ははくそ ナ。黒子。ほくろ。ここにいでくるくろきちひさきほし。宇拾六（顔のほどに、ははくそといふもののあとぞさぶらひし）和名（黒子和名波々久曽）

ははくり ナ。貝母。草の名。蔓は、ほそながく、葉は、そのはに似て、秋の初、ひるがほに似たる花さく。さて、根は、芋のごときものありてかさなりつきたり。和名（貝母和名波々久里形似聚貝、故以名之）



ははこ ナ。母子。草の名。今はさるならず。或はいふ、和名抄は、薺蒿子をよみたれども、今、ははこといふものの、葉のかたちは、鼠の耳に似て、しらげみ。その花は、黄ばみて、蚕のごとくなれば、鼠麹といふものならんともいへり。三月三日の日、餅の中につきまぜる草なり。寶方集（三日の夜の、餅はくはじ、うらりけり、きけばよどのは、ははこつみけり）和名（薺蒿子和名波々古）文徳実録（此間、田野有草、俗名母子草、二月始生、茎葉白脆、毎属三月三日、婦女採之、蒸搗以為餻、伝為歳事）

ははご ナ。母子。草の名。ははこぐさに同じ。

ははご ナ。母御。ははを、うやまひてよぶことば。

ははこぐさ ナ。母子草。鼠麹。草の名。高さ六七寸ばかり、葉の状、すべりひゆに似て、薄くながくして、しろき毛のごときものあり。春夏の間、黄ばみたる花さく。いにしへ、母子をいへるもこれなり。母子な見合すべし。

ははごぜん ナ。母御前。ははを、うやまひてよぶことば。保元（母御前の、けさ、八幡へまうでさせ給ふは、それも参らんと申せば、みなぐせよ、ぐせば、みなこそぐせめ。一人もぐせじ。からみうらみまとて）

ははこそ ナ。母許曽。ははといふに同じ。

ははこもちひ ナ。母子餅。くさもちひ。ははこをつきまぜたるもちひ。和泉式部集（はなのさと、こころもしらず、春の野に、いろいろつめる、ははこもちひぞ）

ははこゐ ナ。母音。反切のとき、つぎにはよびいだすこゑ。

ははかし サ。フ。憚。はばかりもし。今物語（下臈は、いかでかと、はばかりしくいひけるを、なほせめとられて）

ははじ ナ。母字。反切のとき、つぎによびいだすもじ。

ははしろ ナ。母代。ははのごとくなりて、うしろみなどするひと。狭衣三（ははしろ、いとおもしろう、めでたうおもふこそ）宇拾五（二條の大宮と申しけるは、白河院の宮、鳥羽院の御母代におはしましける）

ははす ワ。カケ。シニ。遣。はらす。山家集（思ひすよ、よしある賤の、すみか哉、葛の紅葉を、軒にもたせて）

ははすゑ ナ。馬揆末。うまぞの、馬をのりすつるところ。

ははそ ナ。柞。木の名。おほきなるは、高さ二三丈ばかりなるもあり。葉は、かしその葉に似て、せまくしてとがれるが、秋の末にいたりて紅葉す。また、一種のものあり。今、ははそをよぶとぞ。古今（佐保山の、ははその色は、うすけれど、秋はふかくも、なりにけるかな）和名（柞和名由之、漢語抄云、波々曽、木名共作梳也）

ははそその ナ。柞葉之。ははそは、柞の葉なり。さて、ははにかけていふは、その音の同じければなり。万十九（ちちのみの、父のみこと、波播蘇葉乃、母能美己等、おほろに、心つくして、思ふらん、その子なれやも）

ははそはら ナ。柞原。ははそのはら。ははその、ひろくしげるところ。万九（やましなの、石田の小野の、ははそはら、みつつや君が、山路こゆらん）

ははそやま ナ。柞山。山の名。山城にあり。後撰（柞山、峰の嵐の、風を痛み、ふる言の葉を、かきぞ集むる）

ははだき ナ。鼯。むささびをいふ。京師にて。

ははおやひと ナ。母人。ははぎみ。ははうへ。ははびと。

ははうちち サ。疎。きこなきをいふ。小児の語なり。

ははとじ ナ。母刀自。ははをうやまひてよぶことば。万六（父君は、われはまなごぞ、母刀自は、我はまなごぞ）

ははきり ナ。嘲々鳥。鳥の名。形、もずに似て、とさかあり。また、舌ながくして、さきのところ爪のごとし。

ははなしご ナ。無母子。ははをうしなひたるこ。

ははびと ナ。母人。ははを、うやまひていふことば。

ははむ ワ。カケ。シニ。沮。ふせぐ。こばむ。さまたげす。

ははむ ワ。カケ。シニ。沮。ふせぐ。こばむ。さまたげす。

ははめとふ ワ。カケ。シニ。沮間。なじる。せめてとふ。せまりてとふ。字鏡（詰甚問逼貝、責也問也、奈是留、又波々女止布）

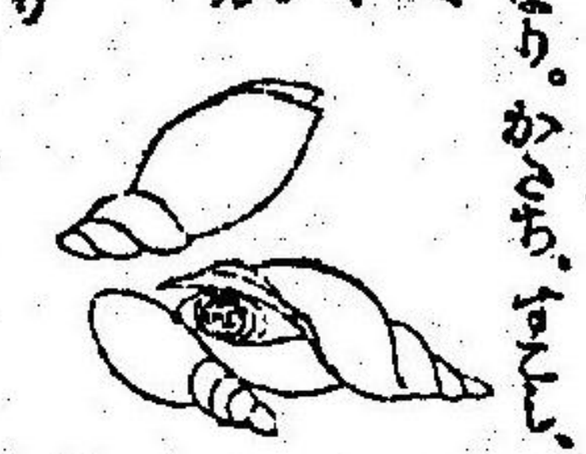
ははもと ナ。馬場本。むばの、うまをのりいづるところ。

ははる ワ。ヒトリ。四。広くなる。ものにはびこる。

はひ ナ。蠅。虫の名。はへに同じ。

はひ ナ。灰。ものの、ひにもえたるあとにのこれるもの。拾玉（罪もさぞ、きえせざるらん、うづみびも、はひのまには、たえせざりけり）和名（灰波比火燼滅也）

ばひ ナ。海螄。貝の名。螺のたぐひなり。かたち、すこし、田螺に似て、田螺よりもおほきく、殻も、また、田螺よりもかたくして、種々の文あり。常に、この殻は、小児の、まはしてもてあそぶものなり。



はひいで ナ。這出。かどのそと。はしりいでといふに同じ。夫木三十（かきどもる、みづそのおみな、庵より、はひいでの小田の、早苗とるみゆ）

はひいり ナ。這入。かどのうち。はひりに同じ。

はひいろ ナ。灰色。はひのいろ。しらぞみたるねずみ。

はひう ワ。カナ。シニ。匍匐。うづくまる。空穂藤原君（車のすされをかかげてのさまふ、はひえつ、これや、このをしみさまふ御むすめ也めり云々、すぐろくの幼しどちといひて、牛飼ども、たつぶみどもうちて）

はひうら ナ。灰占。つじうらのたぐひ。はひをかきならしてうらなひ。拾玉（ねざめする、よその埋火、かきのけて、とふもはひうらも、うき身なりけり）

はひえ ナ。延枝。はひいでたるえだ。散木（須磨浦や、渚にたてる、そなれ松、はひえを波の、うつ日ぞなき）

はひおくる ワ。ヒトリ。シニ。灰後。はひかへるといふに同じ。源末摘花（むらさきの紙の、年へにければ、はひおくれふるめいたるに、御手は、さすがにもじつよう、なかさざのすぢにて、かみしも、ひとしくかいたまへり）

はひおとし ナ。灰落。まきさむての、はひをおとすもの。

はひかへる ワ。ヒトリ。四。灰返。いろさむ。紫は、椿の灰をさすものなれば、灰かへるといへば、色さむる意になるなり。枕草六（むかしおぼえてふようなるもの云々、えびぞめのおりものの、はひかへりたる）

はひき ナ。波比岐神。おほとしの神の御子にて、たびとのゆくての道をまもりたまふ大神なり。

はひこる ワ。ヒトリ。四。蔓延。はひひろごる。ひろくなりゆく。寝覚女御集（はびこれる、葦の下ふく、風の音も、たれかれ今は、きくべかりける）落窪一（いかで、子うませんとおもふ。少将の君のはいでて、このあれもののはひこる事よとのたまふを）

はひさす ワ。ヒトリ。四。灰差。はひをいる。紫をそむるには、椿の灰をさす事あり。万十二（むらさきは、灰指ものぞ、つばいちの、八十のちまたに、あへる子やたれ）

はひしらがふ ワ。ヒトリ。四。相和。たがひにうらむとす。宇拾六（羅刹はひしらがひて、これを破りくひけり）

はひつくばふ ワ。ヒトリ。ロ。蹲踞。つくばひてかしこまる。盛衰記（何とて乞食すべき、東国の者どもは、家も、はひつくばうてぞありし）

はひとり ナ。蠅取。虫の名。はへむしりに同じ。

はひとりむし ナ。蝿取。虫の名。かまきりに同じ。

はひとる ワ。カナ。四。奪取。うばひとる。空穂藤原（さくら、京ならべ、数あまた集りて、一の車をはひとる）

はひならし ナ。灰平。ひをけのはひをならすもの。

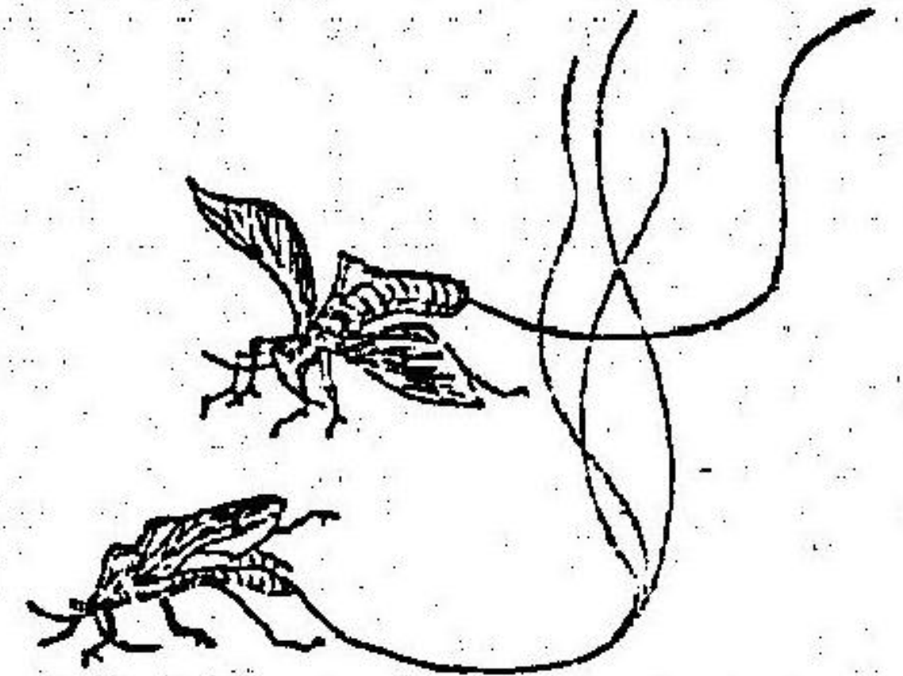
はひね ナ。這根。はひいでたるね。夫木廿（おほともの、松のはひねを、枕にて、高師の浜に、まろねしてけり）

はひのる ワ。ヒトリ。四。這乗。はらばひてのる。万五（赤駒に、しつくらうちおき、はひのりて、あそびあるきし）

はひふう ナ。馬脾風。病の名。のどの、いきのかよふところに、うすかはのごときものいできて、こゝかれ、はふきいでて、いきぐるしくなるもの。小兒におほし。

はひふき ナ。灰吹。たばこのはひをふきいだすもの。

はひふし ナ。這臥。はらばひふすをいふ。身を、こゝろのまゝにするところなり。枕草五（例のはひふしにならせたまへる御前たちなれば、とりおろしまうなひきとほどに）



はひほう ナ。蝿尾蜂。はちの一種なり。形、あぶちに似てちひさく、色は黄色にて、すこしあをみあり。この蜂、尻のところに、ながさ六七寸ばかりなる、一筋のくろき鬚のごときものありて、ふるるときは、その末わかれて、三筋になるをいふ。

はひまぎる ワ。ヒトリ。シニ。這紛。はひこむ。たちまじる。源椎本（かるがるしくはひまぎれたちより給はんも、人目しげならん所に、びんなきふるまひやあらされん）

はひまゆみ ナ。杜仲。木の名。葉は、はひつみて、わぐりは、刻ありてつやゝかなり。また、冬をへてあはまみす。春のころ、葉の間に、ちひさき花さきて、豆のごとき實をむすぶ。この實、秋にいれば、ひらきさきみてほころぶ。和名（杜仲、一名木緜、和名波比末由美、折之多白絲者也）

はひみづ ナ。灰水。灰に水をいれてあさめさるもの。

はひもとほる ワ。ヒトリ。四。這廻。はひまはる。万三（しゝこそは、いはひをがまめ、うづらこそ、伊波比回禮）

はひもとほろふ ワ。ヒトリ。四。這廻。はひもとほる。古事記（いながらに、波比母登富呂布、ところづら）

はひやう ナ。葉莧。草の名。ひゆをいふ。加賀にて、

はひり ナ。這入。かどのうち。いへのまへ。後撰（妹が家の、はひりにたてる、青柳に、今やなくらん、鶯の聲）

はひりぐち ナ。這入口。かどのくち。いへのいりぐち。

はひる ワ。ヒトリ。四。這入。いるといふに同じ。

はびろ ナ。葉廣。葉のひろきをいふ。夫木集（印南野は、村々みえし、柏木の、葉廣になれる、夏は來にけり）

はびろがしは ナ。葉廣柏。はびろのかしは。新古（園の上に、片枝さしおほひ、外面なる、葉廣柏に、霰ふるなり）

はびろぐさ ナ。葉廣草。ゆふがほのたぐひをいふ。

はふ ナ。搏風。むなぎのはしの、おもてのかさにさしいでたるところにて、かさちのやねのさがれるところ。

はふ ナ。法。のり。おきて。ほふ。

はふ ワ。ヒトリ。四。這。匍匐。てとあしとをつきてゆく。万五（赤駒に、しつくらうちおき、波比能利て、あそびあるきし、世の中の、常にありける）枕草八（みつばかりなる兒の、いそぎてはひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、めざとにみつけて、いとおかしげなるおよびにとらへて）和名（蛇行訓、波布、虫行也）

はふ ワ。ヒトリ。四。延。のびてゆく。万十四（谷せばみ、峰に波比たる、たまかづら、たえんの心、わがもはなくに）

はふ ワ。カナ。シニ。延。ひきのばす。万八（衣手に、みしぶつくまで、うゑし田を、ひきたわが波倍、守れるくるし）

はふ ナ。蝮。虫の名。はみのたぐひ。

はぶ ワ。カナ。四。葬。うずむに同じ。源夕霧（朝霧の晴間もまたず、例の文をぞいそぎかきたまふ。いとこころづきなしとおぼせど、ありしやうにもむひさまでず）

はふいん ナ。法印。僧位の名。法印大和尚位とよびて、いにしへは、三位の参議になずらへられしもの。また、山伏のたぐひ。著聞五十（静賢法印の許に、眉允とかや、ゆゝしくちからつよく、けなげある男ありけり）

はふがき ナ。方書。まろさをかきさるかきつけ。

はぶかる ワ。ヒトリ。四。省。はぶきてあり。のぞきてあり。

はぶき ナ。羽。むさくさとりの、つばさをうちふるをいふ。好忠集（をしどりの、はぶきやたゆき、さゆる夜の、いけのみぎはに、なくこゑのする）

はぶく ワ。ヒトリ。四。羽。はたく。とりの、つばさをうちふるをいふ。古今（五月まつ、やまほとゝぎす、うちはぶき、いまもなかなん、去年のふるこゑ）

はぶく ワ。カナ。四。省。へす。のぞきてすくなくなす。源桂樹（六條院には、この度は、ところせしとはぶきたまひ）

はふく ワ。カナ。四。放。はふらす。仲文集（深より、荒まされりと、いふなる風は、身をはぶくらん）

はふくずの マクラ。延葛之。くずのつらは、ながくのびつゞくものなれば、たえぬにかけていふ。万二十（波布久受能、多要受しぬはん、大君の、召し野邊には、標ゆふべしも）

はふぐわい ナ。法外。みちそづれ。みちにかなはぬをいふ。

はふげん ナ。法眼。僧位の名。法眼和尚位とよびて、いにしへは、四位の殿上人になずらへられしもの。

はふさ ナ。羽總。つばさ。後京極殿三百首（むしどりの、はふさも早く、いろづけや、秋の林を、くるると思へば）

はぶし ナ。羽節。はねのくき。はねのふし。武家調味故實（一の羽節より、次第について、くぼね、三に切べし）

はふしき ナ。法式。のり。ぎしき。おきて。

はふしんわう ナ。法親王。にふだうの皇子の、親王の宣下をかうぶりたまひさるをまうすとなへ。

はふしゆ ナ。法主。ほゆうもんのをさをよぶとなへ。

はふそく ナ。法則。きそく。おきて。さだめ。

はふだう ナ。法堂。そうの、せつぽふするだう。

はぶたへ ナ。羽二重。織物の名。こまやかなる絲をもておりたる絹にて、やはらかにつやゝかなるもの。

はふだん ナ。法談。せつぽふ。せつけう。

はふつたの マクラ。延蔦之。はひまとはる蔦は、こなたかなたに、わかれゆくゆゑに、わかるにかけていふ。万二（延都多乃、別之來者、きもむかふ、こゝろをいたみ）

はふてい ナ。法庭。ぎんみをするところ。

はふど ナ。法度。おきて。きそく。いましめ。

はふに ナ。白粉。おしろいのたぐひ。榮花御裳着（おやしきさましたる女ども、くろいねりきせて、はふにといふものぬりつけて、かづらせさせて、かざさゝせて、おしどもらせさり）和名（白粉、俗云波布邇）

はふはふ ソ。這々。からうじて。やうやくにて。蜻蛉集（霜さむみ、はふはふのぼる、位山、いかでなるらん）顕輔集（いさむる事ありてえまゐらぬを、殿よりせめて、仰せらるれば、はふはふまゐりて）

はふぶく ナ。法服。ほうしのきるころも。

はふみやう ナ。法名。かいみやう。ほうしのよびな。

はふむ ナ。法務。僧の役の名。法儀をつとむるおもき役にて、僧正、僧都、律師の、兼ねてつとむるもの。

はふもん ナ。法文。きやうもん。ほとけおみのぶん。狹衣三（一乘の法文すぐる事にや、願文のこゝろぞみなく、よみさまへるも、限なきひとなきに）

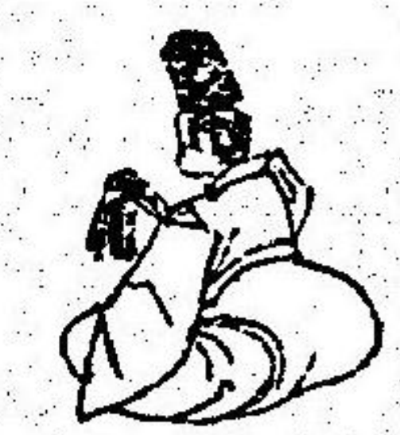
はふよう ナ。法用。ほふもんのよう。

はぶらかす ワ。カナ。四。放。はぶれしむ。うちすつ。うちちらす。すたれものとなす。落窪二（よる、いかにさむからんとのたまへば、北のかた、つねに着せたてまつれど、はぶらかしたまふにや、あくがれ、えきつきたまはぬと申したまへば）源明石（いとゞおぼつかなく、かくながら、身をはぶらかしつるにやと、こゝろぼそうおぼせど）

はぶらく ナ。法樂。ほとけのまつりにするおんがく。また、ほとけのたむけにするしわざ。義經記六（かさのごとくのかひなさしを、法樂にせられさぶらへば）

はぶらす ワ。カナ。四。放。はぶらかす。六帖（身はすてつ、心をだにも、はぶらさじ、終にはいかゞ、なるとしるべく）

はふり ナ。祝部。かみにつかふるひと。かんぬしのつぎにたつもの。万二十（祝部等が、いはふ三諸の、まそかゞみ、かけてぞしのぶ、あふひとごとに）千載（かささぎのもりにて、待りけるを、おなじやしろの禰宜になさらんと申しけるところ）



はふり ナ。翼。つばさ。とりの、つばさなうちふるをいふ。万十九（はさゝきには、なくほとゝぎす、たちくゝと、羽觸にちらす、ふぢなみの、はななつかしみ）

はぶり ナ。葬。さうぶり。なきがらのとりをさめ。万二（こきしへて、百濟の原ゆ、神葬、はぶりいまして、あさもよし、きのへの宮を、とこみやと、さだめまつりて）伊

抄（その御子うせたまひて、御はぶりの夜、その宮のとなりなりけるをとこ、御はぶりみんとて）

はふりこ ナ。祝子。はふりに同じ。夫木四（信濃路や、風の祝子、こころせよ、白木綿花の、にほふ神垣）

はふりつ ナ。法律。おほやけにてさだめたるおきて。

はふりつもの ナ。葬具。はうぶりにもちふるもの。

はふりもの ナ。葬具。はうぶりにもちふるもの。

はふる ワ。カケ。四。放。はなつ。すつ。ちらす。おちぶる。允恭紀（大君を、島に波夫利、ふなあまり、いかへりこんぞ）大和（おやなくなりてのち、とかくはふれて、ひとの國に、もりなきところにすみけるを）

はふる ワ。カケ。四。葬。はうぶる。なきからをとりをさむ。宇治四（あさましき香の、口よりいできたりけるにぞ、うとむ心いできて、なくなくはふりてける）

はぶる ワ。ヒトリ。四。翥。はさく。とりの、つばさをうちふるをいふ。万廿（打羽振、とりいなくとも、かくむつり、ふりしくゆきに、きみいまさめやも）和名（翥字亦作蕭、文選射雉賦云、軒翥 波布流、俗云波豆々、飛擧也）

はぶる ワ。ヒトリ。四。翥。うごく。ゆらめく。万二（朝羽振、かぜこそよらめ、夕羽振、なみこそ来よれ）

はふれい ナ。法令。おほやけにてさだめたるおきて。

はふれいてた ナ。法令條。はうれいてたに同じ。

はふろん ナ。法論。ぶつもんのうへのぎろん。

はふわう ナ。法皇。のりのすべらぎ。おりゐのみかどの、ほとけのみちにいらせさせたまへるをまうす。撰集抄一（保元のはじめのとし、秋七月のころほひ、鳥羽の法皇はかなくならせさせたまひしかば、一天むらくもまよひて、むなのみやこくれふさがり侍りて）

はふゑ ナ。法會。ほとけのまつり。千載（ひとの法會おこなひける導師に、越前國にまかりて）

はへ ナ。蠅。虫の名。夏の頃、食物などにつく、翅ある小虫。蛆といふ虫の羽化したるものなり。枕草三（蠅こそ、にくき物の中にいれつべけれ）和名（蠅 和名波閉）

はへ ナ。南風。みなみかぜをいふ。西國にて、

はへぎ ナ。椽。たるき。やのむねより、のきにかけてたれたるき。和名（椽 和名太流岐、楊氏漢語抄云波閉岐、在檐旁下垂也）

はへとり ナ。蠅捕。虫の名。おほきさ二三分ばかり、形、蛛のごとくにて、絲をひかず。また、網をつくらず。常に、壁のおもてなどに居て、蠅をみれば、とりてくらふ。和名（蠅虎 和名波倍度里、此虫似蜘蛛、恒捕蠅爲食者也）

はへとりぐさ ナ。蠅捕草。草の名。葉のさま、茗荷に似てすこしながきものとぞ。また、この葉などをとりて、飯などにまぜて、蠅に飼へば、たゞちに死ぬといふ。

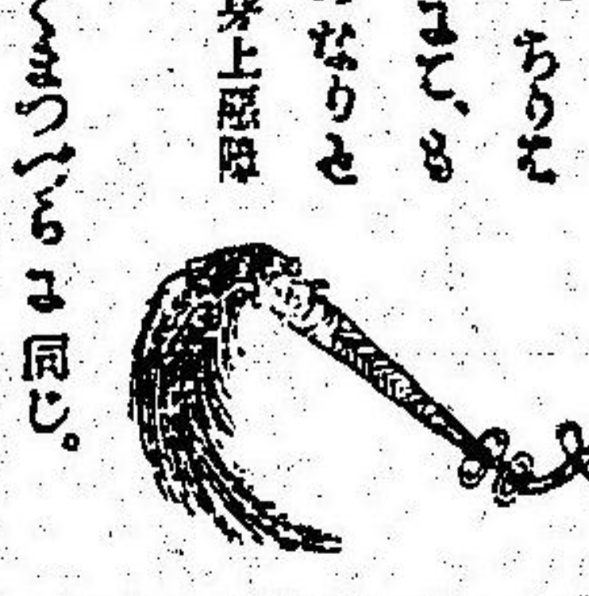
はへとりぐも ナ。蠅捕蜘蛛。虫の名。はへとりに同じ。

はへとりだな ナ。蠅捕花。はへとりぐさに同じ。

はへとりむし ナ。蠅捕虫。虫の名。かまきりに同じ。

はへのこ ナ。蛆。虫の名。うじに同じ。はへを見合すべし。和名（蛆 和名波閉乃古、蠅子也、説文云、蠅乳肉中也）

はへはらひ ナ。蠅拂。僧具の名。ほつすともいふ。白熊の毛をつかねて、ちりはらひのごとくこしらへたるものにて、もろくの障碍をうちはらふものなりとぞ。和名（白拂、千手經云、若爲除身上惱障難者、當手白拂 和名波閉波良飛）



はべんさう ナ。馬鞭草。草の名。くまつゞらに同じ。

はべり ワ。ヒトリ。カ。侍。さぶらふ。つゝしみてをり。源夕（この五六日、こゝにはべれど、ばうざの事を思ひたまへあつかひ侍るほどに、隣の事はえきゝ侍らず）

はべり ワ。ヒトリ。カ。侍。あり。をり。但し、人にむかひていふときの詞なり。竹取（汝がもちて侍るかぐやひめたてまつれ云々、かくたいだいしくやはならはすべき）

はべり ワ。ツグ。ワ。カ。の。侍。たてまつる。さぶらふ。菊花玉村（この大將を、やんごとなきあたりにめしいれられぬべくおぼしめすめるを、日頃、やすからぬ事と思ひ侍れど、たゞまのせきとえてみんとおもひ侍るに）

はぼう ナ。兄。あにをいふ。九州にて、

はぼうおよ ナ。姉。あねをいふ。九州にて、

はぼたん ナ。葉牡丹。野菜の名。高さ一二尺ばかり、葉の色むらさきばみて、あぶらなの葉よりも厚くおほきくして、葉の末に、幾重となくかさなりつく狀、すこし、牡丹の花に似たり。夏のはじめ、菜花のごとき花をひらきて、菜種のごとき實をむすぶ。

はほほづき ナ。蕃酸漿。草の名。いぬぐさに同じ。

はほん ナ。端本。そろひのかずのかけたるしよもつ。

はま ナ。濱。うみのほとり。うみべのすなそらの、ひろくとしたるところ。蜻蛉（あはつならなるこゝらしてゆきすぐれば、はるぐと、濱はいで來）和名（濱 和名波萬）

はま ナ。濱。かはぎしをいふ。大阪などにて、

はまおもと ナ。濱萬年青。草の名。はまゆふに同じ。

はまかぜ ナ。濱風。はまにふくかぜ。万一（いざこども、早見濱風、大和なる、我をまつ椿、ふかざるなゆめ）

はまぎく ナ。濱菊。草の名。葉の狀、たるまはぎうの如くにて、狹くながくして、めぐりに、鋸ありてつやゝかなり。秋冬の間、菊に似てあつらかなるしろき花さく。

はまぐり ナ。蛤。貝の名。かたち、栗の實の狀に似て、殼のおもてに、さまぐの紋あり。たぐひ、きはめておほし。山家集（今ぞしる、二見の浦の、はまぐりを、かひあはせとて、おほふなりけり）和名（蚌蛤 和名波萬久理）

はまぐりうり ナ。蛤賣。はまぐりをうりありくあきびと。七一番職人歌合（はまぐりうり、まつ人の、きそるきいそぐ、來ませかし、はまぐりうらう、雨はふるとも）

はまぐりば ナ。蛤刃。まるば。やいばの、いきざをぼりして、はまぐりのへりのごとくなれるもの。七一番職人歌合（とぎぞ、いつきぞか、はまぐりばなる、ここなの、あふぎことの、かなえざるらん）

はまごう ナ。蔓荊。木の名。はまばうに同じ。

はまささげ ナ。濱大角豆。草の名。葉は、そらまめに似て、豆は、さゝげよりみじかし。この草毒ありといふ。和名（營實一名、天豆 和名波末佐々介、實似豆、故以名之）

はまさんせう ナ。濱山椒。木の名。いぬざんせうに同じ。

はまし ツケ。ガウ。ク。の。はみて みえたり。源末摘花（いうけしきやましや。この頃の朧月夜に、しのびてものせん）

はますがな ナ。防風。草の名。はまにがなに同じ。

はますげ ナ。濱菅。草の名。葉の狀、すげに似たる草にて、海邊などにおほし。高さ六七寸ばかりにて、つやゝかなる光あり。夏のころ、莖をいだして、むらさきの黄ばみたるごとき花をひらく。この草、根は、麥門冬の根のごときものありて、常に、薬にもちふ。

はますゞめ ナ。濱雀。にはなぶりをいふ。伊勢、白子にて、

はますどり ナ。濱州鳥。はますどりは、ひろく、水鳥をさしていへるにて、たとへ、陸をゆくには、そのあしのあとのなやむごとくみゆるものなれば、あなゆむにかけていふとぞ。万廿四（ひとの子の、かなしけ眉ぞれ、はますどり、あなゆむ駒の、をしけくもなし）

はまぜり ナ。濱芹。草の名。はまにがなに同じ。

はまだ ナ。濱田。はまのた。濱邊を、田にひらきたるところ。新六一（うらりざるは、はまだのおしね、うちなびき、もやかりしほに、なりぞしにける）

はまだかな ナ。濱高菜。草の名。高さ二尺ばかり、葉の狀、あそに似ておほきくして、葉のおもてはあみさり。秋の初、黄ばみたるちひさき花の、野菊に似たるをひらく。和名（天名精、一名地菘 和名波末太加奈、一云波留不久良）

はまにがな ナ。濱苦菜。草の名。高さ六七寸ばかり、葉は薺に似て、莖なく、根あらし。春の末、花さきて、ちひさき實をむすぶ。和名（防風 和名波末須加奈、一云波末爾加奈、又云波末世利）

はまぢ ナ。濱路。はまべのみち。夫木廿（まくずはふ、狭野のはまぢの、夕風に、うらみてかへる、沖の白波）

はまち ナ。魬。魚の名。いなだをいふ。關西にて、

はまちどり ナ。濱千鳥。はまのちどり。また、たゞ、ちどりといふに同じ。夫木廿五（うきめのみ、みえとされバや、はまちどり、思ひわりその、浦になくらん）

はまちどり ナ。濱千鳥。もんじをいふ。とりのあとを見合すべし。古今（わすられん、ときしのべとぞ、はまちどり、ゆくへもしらぬ、あとをとゞむる）

はまぢりめん ナ。濱縮緬。ちりめんのよきもの。近江の坂田郡にておりて、長濱といふ地よりいだすもの。

はまつゝじ ナ。濱躑躅。はまべにおひたるつゝじ。

はまつゞら ナ。濱葛。草の名。かたつぶらなるべしといへれど、さだかならず。万四十（駿河の海、おしべにおふる、濱葛、いましをたのみ、母にたがひぬ）

はまづと ナ。濱苞。はまのみやげ。夫木廿（海人も、おものの濱の、濱苞を、月にあけぬと、今やいそぐん）

はまつばき ナ。濱椿。木の名。さだかならず。但し、大和本草に、濱山茶とて、海邊にてゆるちひさき木の、山茶

の葉に似たる木あり。花は黄色なりといへり。それきてもあるべきか。拾遺（君が代は、かぎりもあらじ、はまつばき、ふたゝびいろは、あらたまるとも）

はまつら　ナ。濱面。はまのつら。はまのうへ。拾遺（物へまかりける道に、はまづらに、貝の侍りけるを）

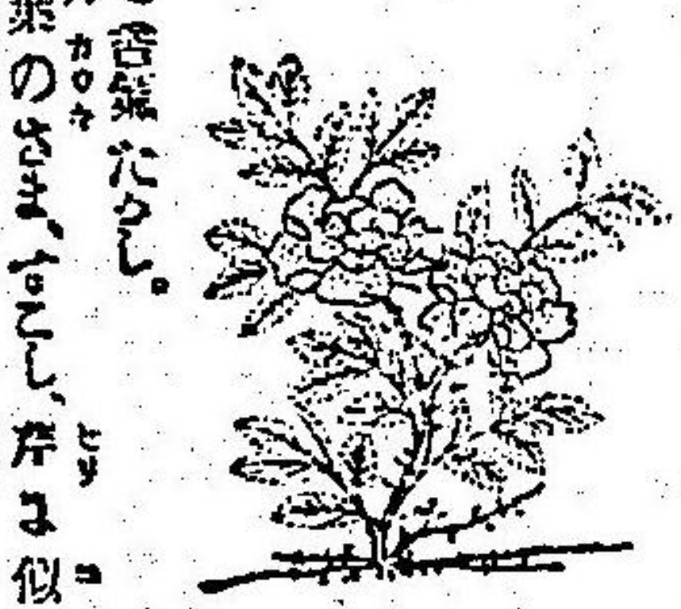
はまて　ナ。濱手。はまのかた。うみべにちかきかた。

はまな　ナ。濱名。地の名。遠江にあり。金葉（白波の、たちこゆるかと、みゆる哉、はまなの橋に、ふれる白雪）

はまな　ナ。濱菜。いそなのたぐひ。万廿（阿胡の海の、ありそのうへに、濱菜つむ、あまをとめらが）

はまなし　ナ。濱梨。木の名。はまなすに同じ。

はまなす　ナ。濱茄。玫瑰。草の名。灌木の薔薇のたぐひなり。枝に、刺おほくして、夏のはじめ、薔薇に似たる花をひらく。花は、あかきもの、しろきものありて、すべて香氣たかし。



はまにがな　ナ。防風。草の名。葉のさま、すこし、芹に似て、三年ばかりを經たるは、二三尺ばかりなる莖を抽きいでて、まるむみたるちひさき花をひらく。根は、牛蒡のごときものあり。常に、藥にもちふるものなり。和名（防風、一名屏風、和名波萬須加奈、一云波萬仁加奈）

はまにがな　ナ。防風。野菜の名。海邊にはゆるものにて、葉は、芹に似て、莖ごとに、みつの葉つけり。莖は、赤くむらさきみて、夏のはじめ、ちひさき花、莖のすゑにあつまりさきて、傘のごとし。めざちのさき、莖をとりて、膾などにそへて、くひものとす。香氣ありて、あぢはひにがく、また、すこしあまし。

はまにし　ナ。濱西。風の名。秋の末にふく西風をいふ。畿内、また、中國わたりの船人のいふことばなり。

はまにんじん　ナ。濱人參。草の名。ひろむしろに同じ。

はまにれ　ナ。濱楡。草の名。葉のさま、花のさま、藤に似てちひさくして、花黄ばみたり。和名（蔓荊和名波末仁礼）

はまねこ　ナ。濱猫。水鳥の名。ねこうさぎをいふ。下總にて。

はまばうふう　ナ。濱防風。野菜の名。はまにがなに同じ。

はまばせを　ナ。濱芭蕉。草の名。はまゆふに同じ。

はまばた　ナ。濱端。はまべ。はまのほとり。宇拾十（されば、さるべきやうもなし。はまばたに、うちたちて、この濱のまゝに、めぐるべきにこそあれと（いへども）

はまはひ　ナ。蔓荊。灌木の名。高さ四五尺ばかり、葉のさま、枝のさま、あふちのごとし。夏のころ、花さく。花は、むくげに似て黄ばめり。また、うすあをき花にて、穗をなすもありといふ。和名（蔓荊、一名小荊、和名波末波非）

はまび　ナ。濱邊。はまべ。はまのほとり。万五十（たまのうらに、船をとゞめて、波際より、うらいそをみつゝ）

はまびさき　ナ。濱楸。木の名。はまべにはえたるひさきにや。今さだかならず。万十一（波間より、みゆる小島の、濱久木、ひさしくなりぬ、君にあはずして）

はまびさし　ナ。濱廂。はまべのいへ。拾遺抄（四方の海も、風にぎはふ、濱廂、ひさしき千代に、君ぞさかえん）

はまびと　ナ。濱人。あま。はまべのひと。夫木抄（濱人の、苫屋の床は、あれぬらん、のせてかへりし、小車の跡）

はまびゐ　ナ。濱頭。あさ。はまべのたんな。夫木廿一（秋風の、吹出の濱の、濱頭は、夜寒になれや、衣かさぬる）

はまぶね　ナ。濱舟。はまべをかよふふね。夫木（もしほくむ、蜑の濱舟、苫くちて、波路たえせぬ、五月雨の空）

はまべ　ナ。濱邊。はまのほとり。貫之集（はまべにて、年ふる人は、白波の、ともにおろくぞ、みえてさりぬる）

はままつ　ナ。濱松。はまにはえたるまつ。万一（いざ子ども、早く大和へ、大伴の、みつの濱松、待戀ひぬらん）

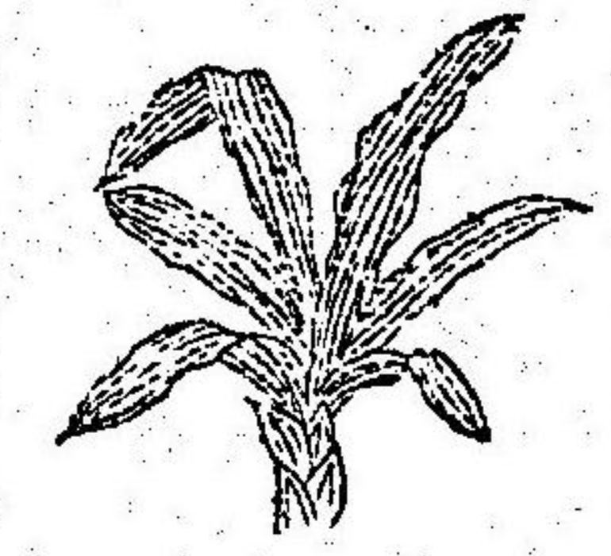
はまも　ナ。濱藻。なのりそに同じ。允恭紀（とこしへに、君にあへやも、いさなとり、海の濱藻の、よる時々を）

はまもくれん　ナ。濱木蓮。木の名。高さ一丈ばかり、葉は、ゆづりはに似て、莖は、ゆづりはのごとくあかゝらず。また、葉は、多羅葉に似て、冬のころ、あかくいろづく。

はまや　ナ。濱屋。はまべにあるいへ。夫木廿（千鳥なく、ゐなの濱屋の、明方は、苫もる月の、影ぞさびしき）

はまゆか　ナ。濱床。貴人のおましどころ。四方六尺ばかり、すこし高くかまへたるところにて、めぐりに、帳をひきめぐらせるところなりといへり。雅亮（后の宮などには、濱床あり。高さ二尺ばかり、よつにして、さしあはせておく。くろぬりかなものをうちたり。そのうへに、さしみて、さるうけん二帖を、北南にしき、南をまくらとするなり）空穂藤原（御はまゆかたてて、北の方すゑたてまつり、また、とものおとな居たり）

はまゆふ　ナ。濱木綿。草の名。高さ二尺ばかり、草のさま、芭蕉に似て、葉は、すこし、茗荷に似たり。また、莖は、うすぐろき皮をもて、卷きかさねて、つゝみたるがごとくにて、夏のはじめ、黄色なるちひさき花さく。万四（三熊野の、浦の濱木綿、百重なす、心は思へど、たゞにあはぬかも）



はまゆふ　ナ。濱木綿。蒲草の名。おきなぐさに同じ。

はまゆみ　ナ。破魔弓。としのはじめに、小兒の、もてあそびにうちて射る弓をいふ。また、破魔とて、その的をしてもちふる圓座のごときものをいふ。（四季草）

はまより　ナ。堺。なかに、ほどよくいさごをいふ。また、こゝろにまきるをいふ。また、熊野の海は、島のおちるところをいふ。両津懸図新記（島のおちるところをばはまよりといふ。むかしをば、ことといふ）

はまる　ワ。ヒトリ。塡。なかに、ほどよくいる。また、こゝろにまきる。また、ものにふけりておぼるゝをいふ。

はまれんげ　ナ。濱蓮華。草の名。いきどほしに同じ。

はまをぎ　ナ。濱荻。はまべにはえたるをぎ。また、蘆の一名にて、片葉なるもの。（大和本草）万四（神風の、伊勢の濱荻、をりふせて、旅寝やすらん、あらき濱邊に）

はみ　ナ。蝮。蛇の一種なり。まむしを見るべし。和名（蝮 云々、兼名苑云、一名反鼻蛇、和名波美、俗或呼反鼻、其音片尾）

はみ　ナ。草の名。おにのやがらに同じ。

はみがき　ナ。歯磨。はをみがくこ。砂を、こまやかにくだきたるものにて、楊枝にそへてもちふるもの。

はみだす　ワ。ヒトリ。食出。はみでる。はさまれたるもののあまりて、ほかにいづるをいふ。

はみでる　ワ。ヒトリ。シ一。食出。はみだすに同じ。

はむ　ナ。鱧。魚の名。形、うなぎに似て、おほきく、背に、鰭ありて、尾の方はつらなれり。また、肉に、ほそき骨あり。和名（鱧魚、本草云、鱧魚和名波無、味甘寒無毒者也）

はむ　ワ。カナ四。食。くふ。くらふ。万五（瓜はめば、子どもおもほゆ、栗はめば、まして忍はゆ）堀川百首（つのぐめる、あしの若葉を、はむこまの、あるゝはみるや、難波江のひと）字鏡（咬、噉食也、噬也）

はむ　ワ。カタ。シ二。嵌。はさむ。さしこむ。おとしいる。この語は、地方により、もめると、下一段にいふ。土佐（風ふきて、こげども／＼、しりへしぞきにしぞきて、ほとくしくうちはめつべし）落窪二（落窪の君をつけられて、中のものにて、うちはめられてありけるものを）

ばむ　ツケ。（四國の語）物の、そのごとくみゆるをいふことば。空穂阿闍（からしだみまへて、あをみさま、紗綾をかきていれたり）源氏（あじろの、すこしなれたる、さすだれのさまなどよしばめるに）

はむかふ　ワ。ヒトリ。四。反向。あひてにむかひて、あらそふ。

はむけ　ナ。羽向。葉向。はを、そのかたにむくるをいふ。新拾（秋風に、山とびこえて、くる雁の、はむけはきゆる、峰のしらくも）新古（いつしかと、荻の葉むけの、かたよりに、そゝや秋とぞ、風もきこゆる）

はむし　ナ。羽虫。葉虫。とりのつばさにいでくるむし。また、かひこのたぐひ。定家卿三百首（とやにゐる、八日藥師の、日なれぬや、塞に羽虫の、藥かふらん）

はむしや　ナ。端武者。はしたのむしや。かずにもあらぬむしや。平治（はむしやどもに、目なかけそ。大將軍とくんでうて云々、てどりにせよとげぢすれば）

はん　ナ。判。よしあしのさだめ。顯集（そのうたども、職事の朝臣の、さだめ申せる判かくなん）

はん　ナ。版。判。かたぎ。なりいた。かきはん。いんぎやう。

はん　ナ。藩。だいみやうのたもてるくにところ。

はん　ナ。飯。おはゆふくふおもの。

はん　ナ。半。なかば。はした。はんぶん。

はん　ナ。半。雙六の目の、ふたつにわられぬかず。

ぱん　ナ。麪包。こむぎの粉に、あまざけをまぜて、蒸焼にやきたるもの。西洋人の、食物にするものなり。

ばん　ナ。盤。ものをのするさらのだい。源氏須磨（沈、すぐろくのばん、てうど、だぎの具など）今昔一（ゆふべの食物まゐらせんと、盤をとゝのへて）

ばん サ。番。まもり。かむりぐはするまもり。竹取（おもやの内は、女ども、ばんにおりてまもらす）
ばん ナ。番。かむふぐ、やくめはあたるをいふ。[illegible]（瀧口、たちなき、番かずさぶらふ）
ばん サ。晩。ひぐれ。たそがれ。また、よるをいふ。
はんえい ナ。繁榮。はんえい、はんじやう。
はんえり ナ。半襟。襦袢などの、えりのかざりに縫ひつくるきれ。おほくは、女の衣につきていふ。
はんおう ナ。反應。こたへのあらはるるをいふ。
はんか ナ。反歌。かへしうたと同じ。
はんかう ナ。版行。はんぎにゑりて、よにすりいだすをいふ。また、その版木などをもいふ事あり。
ばんがう ナ。番號。ばんのな。つぎつぎのしるし。
ばんがく ナ。晩學。としたけてするがくもん。
ばんがさ ナ。番傘。からかさのそまつなるもの。
ばんがしら ナ。番頭。武家の役の名。詰番する侍の頭人。
ばんかた ナ。番方。武家の役の名。ごばんと同じ。
ばんがた ナ。晩方。たそがれ。ひのくれがた。
ばんがはり ナ。番代。ばんをかはりてかはるをいふ。
はんかん ナ。反間。ねなしごとなどをいひふらして、てきの、たがひにうたがひあやぶむやうにするをいふ。
はんき サ。半期。はんとし。はんねん。
はんぎ ナ。版木。かたぎ。ゑりいた。はんかう。
ばんき ナ。萬機。よろづのまつりごと。

はんぎ ナ。板木。ひやうしぎのたぐひ。
はんきう ナ。半弓。みじかきゆみ。やうきうのたぐひ。
はんぎし ナ。版木師。はんぎをほるを、業とするひと。
はんぎやう ナ。判形。はん。いんぎやう。源蜻蛉（それくとをいひければ、佐殿、なならそやぎて居られけれども、諸状をかき、判形なくそへて、文武はたきまる）
はんぎり ナ。半切。てがみをかくにもちふるかみ。杉原を、横にふたつにきりたる丈なり。昔々物語（昔れ、用事の手紙、仮名書にて書は、半切紙をいふもの、わつてなし。六十年以前より、半切紙を用ゐる事なり）
はんぎりがみ ナ。半切紙。はんぎりと同じ。
はんぐつ ナ。半沓。かむぐつのみじかきもの。
はんくわ ナ。繁華。みやこなどのにぎはひをいふ。
ばんくわい ナ。挽回。もとにひきかへすをいふ。
ばんぐわい ナ。番外。ばんのほか。なみのほか。
はんくわいさう ナ。[illegible]。草の名。葉は一二尺ばかり、葉の状、すこし、やぶれすげがさに似てちひさくして、茎のもとに、ちひさき花をひらく。
はんぐわんだい サ。判官代。院庁の判官をいふ。朝廷の判官をさうつためは、代の字をそへたるなり。宇治拾遺（土佐判官代通清といふ者ありけり。歌をよみ、源氏、狭衣などをうかべ、花下、月前をずきありきけり）
はんげ ナ。半夏。草の名。ほそぐみと同じ。

ばんけい ナ。晩景。ひぐれ。ゆふぐれ。たそがれ。
はんげき ナ。繁劇。いとまなくいそがしきをいふ。
はんげしやう ナ。半夏生。暦にいふことぞ。夏至ののち、十一日目にあたる日にて、陽暦の七月二日の頃なり。
はんけつ ナ。判決。よしあしを、それとさだむるをいふ。
はんけん ナ。版權。冊子などを、版木として、おのれのみにて、すりいだしうりいだす事を得る權をいふ。
はんご ナ。反語。ことばのこころの、うらうへになる事をいふ。もて、やれ、かれなどを、そへていふときもあり。
はんご ナ。[illegible]。ぬるごをいふ。肥前、唐津にて、
ばんて ナ。番子。ばんらうをいふ。大阪にて、俚語
はんと ナ。版圖。よろづのくに。おほくのくに。
ばんごふ ナ。萬劫。かぎりもなくながきひさしきあひだ。こふを見るべし。空穂俊蔭（あすろの、萬劫の罪のなかばすぐるまで、虎、おほかみ、ひしけらをいへども、人のけはひをあさりはよせず）
はんごんかう ナ。返魂香。名香の名。なきひとのたましひをよびかへす香にて、たくときは、なきひとのおもかげ、ほのかに、煙の中にあらはるるといふ。もろこし、漢の武帝といふみかど、李夫人といふ妃の魂を、この香をたきてよびかへせりといふ故事あり。
ばんこや ナ。番小屋。ばんにんのゐるちひさきいへ。
ばんこやき ナ。萬古燒。つちやきのうつはもの。伊勢國、桑名郡よりいだすものにて、萬古の文字をつけたり。

はんざ ナ。判者。ものあはせなどのはんざんをするひと。源梅枝（みや、いとくるしきはんざにあたりて侍るかな。いとけぶたしやとなやみきこゆ）
はんざい ナ。犯罪。おきてをおかしたるつみ。
ばんざい ナ。萬歳。よろづよ。ことほぎていふことば。
ばんざいのおび ナ。萬歳帶。束帶の時の袍の帶にて、四位、五位の人のもちふるもの。源蜻蛉（よきばんざいのおび、太刀のおかしきなど、ふくろにいれて）
ばんざう ナ。番匠。だいく。こだくみ。ばんじやう。七十一番職人歌合（ばんざう、飛驒も、けさへ、相國寺へ、まうめき侍ふ。暮れてぞかへり侍ふらん）
ばんざう ナ。[illegible]。ものならひをいふ。肥前、長崎にて、
はんざつ ナ。繁雜。いろいろのいりくみたるをいふ。
はんざふ ナ。半挿。たらひのつのだらひ。枕草子（はんざふは、手水などいれて、盥の手もなきなどあり）
はんざふだらひ ナ。半挿盥。つのだらひと同じ。
はんさん ナ。[illegible]。りうざんといふと同じ。
ばんさん ナ。晩餐。ゆふめし。ゆふさくたるもの。
はんし ナ。藩士。はんのさむらひ。だいみやうのけらい。
はんし ナ。半死。なかばしにたるをいふ。
はんし ナ。半紙。つねに、よろづのことにもちふるかみにて、すぎはらを、ふたつにきりたるなりのもの。
はんじ ナ。判事。官の名。さいばんをつかさどるもの。
ばんじ ナ。萬事。よろづのこと。あらゆること。

はんした ナ。版下。はんぎにはるれうのかきもの。
はんしはんしやう ナ。半死半生。なかばいきなり、なかばしなるをいふ。太平記（この鳥云々、くるひけるに、左右につきたる舎人、二八人ふまれて、半死半生になり）
はんしん ナ。半身。みのなかば。はんぶんのからだ。
はんじもの ナ。判物。なぞのたぐひ。あらたにあつめて、それとさとらしむるやうにしたるもの。
はんしや ナ。反射。ひかりのうつりかへるをいふ。
はんじや ナ。判者。はんざと同じ。
はんしやう ナ。半生。なかばいきたるをいふ。
はんじやう ナ。繁昌。さかえ。にぎはひ。
ばんじやう ナ。番上。かはりがはりに出勤するかうにて、諸部、下部などの類、すべて日勤ならぬ雑仕をいふ。
ばんじやう ナ。番匠。ばんざうと同じ。東北院職人歌合（ばんじやう、すみなはの、なほきをたゞす、身なれども、かたぶく月は、かぶりぞなき）
ばんじやうづち ナ。番匠槌。さいづちをいふ。畿内にて、
ばんじやうどり ナ。番匠鳥。てらつつきをいふ。下総にて、
ばんじやく ナ。盤石。いはほ。おほきなるいは。
はんしゆ ナ。藩主。はんのぬし。だいみやうをいふ。
はんじゆ ナ。判授。長官のえらびにてたまふくらゐにて、いにしへ、内位の初位と外位の八位とをいへり。
はんじゆく ナ。半熟。まだよくにえぬくせぬをいふ。
はんしゆご ナ。半守護。その國の半分を支配する守護。

ばんしよ ナ。番所。せきしよ。また、ばんをするところ。
はんしよう ナ。半鐘。つりがねのちひさきもの。
はんしようでん ナ。半昇殿。まよりでんをなすをゆるされざるをいふ。下文を見るべし。吾妻鏡（また、昇殿ならぬひと、殿上の間にあがる。小板敷まで のぼる事をゆるされざるを、半昇殿といふ）
はんしよく ナ。繁殖。ふえてさかんになるをいふ。
はんしり ナ。半尻。かりぎぬの、すそのみじかきもの。きんだちなどのきるものなりとぞ。続世継六（みぶらひいさして申しいれされば、使はとりつぎて、はんしりなるかりぎぬまでいでさぶらひて）
はんす サ。反。そむく。うらうへとなる。
はんずり ナ。版摺。はんぎをすりて、そのかたを、かみにうつしとりなどするを、なりはひとするひと。
はんせい ナ。[illegible]。くせんぜいと同じ。
はんせつ ナ。反切。かへしを見るべし。
はんせつ ナ。半切。たうしの、ふたつにきりたるもの。
ばんぜん ナ。萬全。きはめてあんぜんなるをいふ。
はんぜんと ソ。判然。さだかに。きはやかに。あきらかに。
ばんそう ナ。伴僧。ぎやうれつにともなひさるそう。紫式部日記（それもくとうちあげさる伴僧の聲々、とほくちかくきこゆるほど）
はんた ナ。繁多。なすことのおほきをいふ。
ばんた サ。番太。ものもらひをいふ。京都にて、

はんたい　ハ、反對。うらうへ。あべこべのさま。

はんだい　ハ、飯臺。おものをのするだい。

ばんだい　ハ、番臺。ばんにんのすわりてゐるところ。

はんだくおん　ハ、半濁音。ぱぴぷぺぽのこゑ。

はんだん　ハ、判斷。かんがへわけてとりきむるをいふ。

ばんたん　ハ、萬端。よろづのこと。あらゆること。

はんだんのしよく　ハ、判斷之職。武家の訟事をいふ稱。

ばんたらう　ハ、番太郎。ばんごやにゐるばんにん。

はんちく　ハ、斑竹。竹の一種。とらふだけに同じ。

ばんちや　ハ、番茶。わるくしきちや。茶の一番二番とつみさる後の、あらくしき葉にて製しさるもの。

ばんちやう　ハ、番長。隨身の長。近衛の中より、弓馬に達しさるものをとれり。貞丈雜記（平日ハ、近衛府に勤番し、晴のときハ、從者にて、大將の先驅をつとむといふ。）

ばんづけ　ハ、番附。すまふなどのばんばんのかきつけ。

ばんて　ハ、番手。武家の役。ぢやうばんに同じ。

はんてい　ハ、判定。はんじてさだむるをいふ。

はんてい　ハ、藩邸。はんのやしき。だいみやうのやしき。

ばんてしゆう　ハ、番手衆。武家の役。ぢやうばんに同じ。

はんてん　ハ、半纏。衣の名。羽織の類の、襠をいれざるものにて、羽織のごとく、襟ををり、紐をつけぬもの。

ばんておけ　ハ、番手桶。ざふきんをあらふをけ。

はんと　ハ、版圖。そのくにゝてたもてるところのちづ。

はんと　ハ、半途。なかぞら。ちうと。だうちゆう。

はんどう　ハ、反動。ゆりかへし。うごきのもどるをいふ。

ばんとう　ハ、番頭。近衛の中のかしらだちさるもの。また、武家にてハ、五箇番の中のかしらをいひ、商人の家にてハ、店をあづかりさるものをいふ。

ばんどう　ハ、坂東。くわんとうに同じ。

ばんとうしゆう　ハ、番頭衆。ごかばんに同じ。

ばんどうたらう　ハ、坂東太郎。夏の雲をいふ。東京にて、

はんとき　ハ、半時。ときなかに同じ。

はんにん　ハ、判任。長官のえらびにてたまふつかさ。官の品をわかちいふ語にて、書記、主典などをいへり。

ばんにん　ハ、番人。ばんをするひと。まもりのひと。

はんにや　ハ、般若。女の、鬼となりさるもの。般若ハ、本、智慧をいふ梵語なれど、今ハ、鬼女の事となれり。

はんにや　ハ、般若。名香の名。かうの一種なり。

はんにやたう　ハ、般若湯。さけをいふ。寺院の隱語なり。

はんにやづら　ハ、般若面。はんにやめんのごときかほ。また、ものねたみするをんなのかほけしきをいふ。

はんにやめん　ハ、般若面。はんにやのおもて。

はんねいざな　ハ、飯丸。いしなごをいふ。信濃などにて、

ばんねん　ハ、晩年。としのおいさるをいふ。

はんのき　ハ、榛。木の名。はりのきに同じ。

はんのひ　ハ、半日。ふたつにわられぬかずの日にて、一日、三日、五日、七日、九日などの日をいふ。

ばんのほし　ハ、番星。星の名。ほくしんをいふ。上總にて、

はんぱ　ハ、半端。はした。かけてそろはぬをいふ。

はんばい　ハ、販賣。あきなひものをうりさばくをいふ。

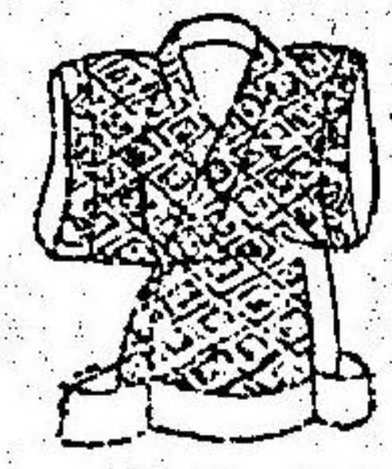
はんばう　ハ、繁忙。いとまなくいそがしきをいふ。

はんばかま　ハ、半袴。かたぎぬのもとにもちふるはかま。但し、長袴にむかへていふ語にて、常ハ、袴とのみいふ。

はんぱつ　ハ、半髮。やらうあたまに同じ。

ばんばん　ソ、萬々。じふぶんに。かくることなく。

はんぴ　ハ、半臂。衣の名。袍のゆきみじかき衣にて、舞人などの着るもの。襴などに、縫をつくる事ありといふ。枕草六（をかしなるもの、千日のさうじはじむる日、はんぴの緒ひねりはじむる日）和名（半臂此間名如字、但下音比、衣名也）



はんび　ハ、半日。はんのひに同じ。

はんぷ　ハ、頒布。あまねくくばりつくるをいふ。

はんぷく　ハ、反覆。うらがへるをいふ。ころびかへりするをいふ。また、おなじことをくりかへすをいふ。

ばんぶつ　ハ、萬物。よろづのもの。すべてのもの。

はんぶん　ハ、半分。ふたつにわかつべきほど。

ばんぺい　ハ、番兵。まもりのへいし。

はんぺん　ハ、半辨。かまぼこのやはらかなるもの。

はんべり　ツク、侍。はべりに同じ。榮花御裳着（是を興じてやませたまひけりとぞかたりはんべりし）

はんばう　ハ、飯櫃。いひびつをいふ。甲斐などにて、

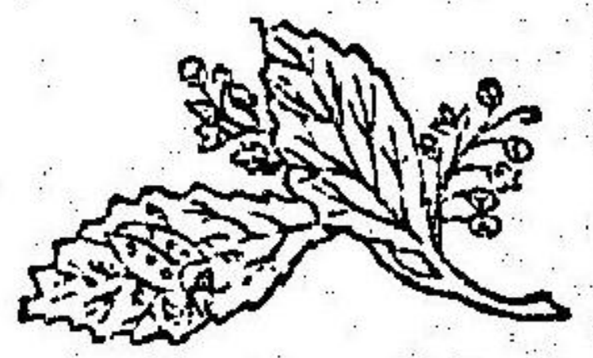
はんぽん　ハ、版本。はんぎにてすりさるほん。

はんぼり　ハ、版彫。はんをほるを、なりはひとするひと。

はんまい　ハ、飯米。おものにもちふるこめ。

はんみち　ハ、半道。一里のなかばにあたるみちのり。

ばんみん　ハ、萬民。あまたのたみ。あらゆるたみ。さらゆく北（征夷大將軍云々、ひさしく、四夷をちんぶし、とこしなへに、ばんみんのあんぜんをいたす）



はんめう　ハ、斑猫。虫の名。葛の葉、豆の葉などにつく虫なり。甲のうへに、黄と黑との、まだらなる點ありて、嘴のさきにも、ちひさきあかき點あり。また、黑は、惡臭ありて、きはめてくさし。この虫、大毒ありといふ、觸るべからず。

はんめん　ハ、半面。かほのなかば。

はんも　ハ、繁茂。しげくおひしげるをいふ。

ばんもつ　ハ、萬物。よろづのもの。すべてのもの。

はんもん　ハ、斑文。とらふ。まだらなるあや。

はんもん　ハ、煩悶。もだへくるしむをいふ。

はんや　ハ、斑枝花。木の名。葉ハ、くるみに似て、花ハ、つばきのごとしといふ。外國にいでくるものにて、その實はむすびさる綿をなす。綿ハ、絮のおほきさなる實の中にありて、物におされても、よくふくれあがるをもて、常ハ、褥などにいれてもちふ。

はんや　ハ、繁縷。藥草の名。はこべに同じ。

ばんや　ハ、番屋。ばんにんのゐるちひさきいへ。

はんよう　ハ、繁用。しごとのおほきをいふ。

はんれい　ハ、凡例。かきあらはしさる書のはじめにかゝげて、その書の、かきぶりの例をあらはしさるもの。

はんゐ　ハ、範圍。かこみ。くるわ。さかひ。

はめこむ　ワ、嵌込。はめていれこむ。

はめはづし　ソ、嵌脱。はむるとはづすと。

はめる　ワ、カゲ、シ一段。嵌。はさむ。はむを見るべし。

はも　ハ、鱧。魚の名。はむをいふ。東國などにて、

はも　チ、ナゲキ。感辭のものうへに、はのそひさるにて、もといふに同じ。古事記（さねさし、さがむの小野に、もゆる火の、ほなかにたちて、とひしきみはも）

はもち　ハ、葉餅。かしはもちのたぐひをいふ。

はもの　ハ、刃物。やいば。きれもの。かたなのたぐひ。

はもの　ハ、端物。はしたもの。そろひのかけさるもの。

はもん　ハ、破門。おしへごといふことをとゞむるをいふ。弟子の、罪をおかしさるときなどにする事なり。

はもやま　ハ、波母山。山名。近江にあり。風雅（波母山や、をひえの杉の、深山井れ、嵐も寒し、とふ人もなし）

はもりのかみ　ハ、葉守神。かしはにいますかみ。また、柏の葉を守りさまふ神なりとも、たゞ、木を守りさまふ神なりともいへり。後撰（柏の木の、葉守の神の、ましけるを、しらでぞをりし、祟なさるな）枕草三（柏木いとをかし。葉守神のますらんもいとかしこし）

はや　ハ、甲矢。さきのや。もじめのや。著聞九（ついさりて、はやを射るに、前の串にあたりぬ）

はや　ハ、鮠。魚の名。はえをいふ。東國などにて、

はや　ハ、早。ひきやく。いそぎのつかひ。

はや　ソ、早。とく。すでに。拾遺（きのふこそ、年ハくれしか、春霞、春日の山に、はやたちにけり）

はや　ソ、早。すみやかに。いそぎて。万十（吾が宿の、萩さきにけり、ちらぬ間に、早きてみませ、奈良の里人）

はや　チ、ナゲキ。感辭のやのうへに、はのそひさるにて、やといふに同じ。拾遺（君がすむ、やどのこずゑの、ゆくゆくと、かくるゝまでに、かへりみしはや）

はや　チ、スヱ。疑辭のやのうへに、はのそひさることばなり。万九（おくれ居て、われ戀ひんはや、はるがすみ、たなびく山を、きみがこえいなば）

はや　チ、スヱ。願をいふことばなり。但し、みづからのねがひをいふのみにて、ひとにはむかひてもとむるにあらず。後撰（あさらよの、月と花とを、おなじくハ、こゝろしれらん、ひとにみせばや）露殿（今、おもしいきてあらばやと思ふれ、我、をしぞろおづみて、きのふけふのはなうどどもにはおほくおくられて）

はや　タ、スヱ。疑辭のやのうへに、はのそひさることばなり。古今（こゝろあてに、をらばやをらん、初霜の、おきまどはせる、しらぎくの花）同（思ひつゝ、ぬればや人の、みえつらん、夢と知りせば、さめざらましを）

はやあきつひこ　ナ。速秋津彦。いざなぎの神の御子にて、水門などをつかさどりたまふ大神なり。

はやあきつひめ　ナ。速秋津姫。いざなぎの神の御子にて、水門などをつかさどりたまふ大神なり。

はやあし　ナ。早足。あしばや。いそぎあし。盛衰二十（高名のはやあしの力者をえらひさだめられけるが）

はやい　サ。早速。すみやかなり。はやしを見るべし。

はやう　リ。早。とく。すでに。蜻蛉（みいださせば、すのこに、ともしさりつる火は、はやうきえにけり）

はやう　ソ。早。すみやかに。いそぎて。空穂吹上（入るくさころにて云々、てよひつくりまうらぶらんは何のけん。それをやうつくりまうれとのたまはす）

はやうた　ナ。早歌。かぐらうたの曲の名。神楽歌（やらげれども、まどまり、やかのはきこえて）

はやうた　ナ。早歌。さうるのたぐひをいふなるべし。徒然草（法師の、むげに、能なきは、檀那すさまじく思ふべしとて、早歌といふ事をならひけり）

はやうたうたひ　ナ。早歌謡。はやうたをうたふひと。

はやうち　ナ。早打。うまをとくはせてゆくつかひ。

はやうま　ナ。早馬。はやうちののりたるうま。

はやおき　ナ。早起。あさ、はやくおきいづるをいふ。

はやおひ　ナ。早追。はやうまのつかひ。

はやがき　ナ。早書。ふでしりなきはやくかくをいふ。

はやがね　ナ。早鐘。ものの告らせにうちならすかね。

はやかは　ナ。早川。とくながるるかは。万四（うつくしと、せが思ふこころ、速河の、せきとせけども、猶や崩れん）

はやかはの　マクラ。早川之。はやかはは、水のながれゆくことのはやければ、ゆくにかけていふ。万十一（速川之、往文不知、ころもでの、かへるもしらに）

はやく　リ。早。さきに。むかし。すぎにしあとに。鳥部山物語（かくさむらはまねきて、はやくの事どもうちかたらひければ、そのこも、いとあはれとおもひて）

はやくち　ナ。早口。ものいひのはやきをいふ。

はやざき　ナ。早開。はなの、はやくさきいづるもの。

はやさすらひめ　ナ。速佐須良姫。いざなぎの神の御子にて、祓戸にいまして、罪穢をはらひたまふ大神なり。

はやさめ　ナ。早雨。にはかにふるあめ。出雲風土記（因時、波夜佐雨久多美山留給之、故云忽美）

はやさめ　マクラ。早雨。はやさめは、にはかにふるあめにて、その降りくるといふ、くさにかけていふ。出雲風土記（波夜佐雨久多美山留給之）

はやし　ナ。林。木の、しげくおひたるところ。伊勢（きのもとに、萩のたちまひ、かくろふは、花のはやしを、うしとなりけり）和名（林和名八夜之）

はやし　ナ。囃子。うたのひやうし。ねりものの、おんがく。

はやし　サ。ヒ。早。速。すみやかなり。すみやかし。この語は、今ははやいと、しをはいふ。万十五（浦閤より、こぎ來し船を、風波疾み、沖津御空に、宿するかも）竹取（はやき風ふきて、世界暗がりて、船をふきもてありく）

はやしもの　ナ。囃子物。はやしにもちふるだうぐ。

はやす　ワ。カク。四。囃。ひやうしをとる。平家一（忠盛のまひける時は、さへなくて、数のこと、拍子をかへて、伊勢平氏はすがめなりけりとはやしさりけり）

はやす　ワ。カク。四。囃。もえあらしむ。ほめさかふ。万十四（上野、佐野のくくたち、手里波伎志、おれはまさんゑ、今年こずとも）源帚木（今、一盛きにはやすべき人のあるときに、手なのこいさまひそなど、いさくあざれかられば、女にさうこゑつくふひて云々、なまめきつらずにて）

はやす　リ。カケ。四。生。はえしむ。永久百首（賤の男が、かりてもやせる、ききつじ、若枝に花の、さきにける哉）

はやす　ワ。カク。四。刻。こまやかにきる。ちひさくきざむ。

はやせ　ナ。早瀬。ながれのはやきせ。玉葉（瀧川の、岩根つづきや、こほるらん、早瀬の波の、音のよせれる）

はやたつ　ナ。早立。かもの異名。堀川百首（淵瀬をも、そことも知らぬ、早立の、渡りせさる、河の名なれば）

はやたまのを　ナ。速玉之男神。いざなぎの神の御子。

はやち　ナ。暴風。にはかにふくおほかぜ。相模集（はやち、ふく、あけみののらの、草なれや、おきていみざる、ふせばかさよる）和名（暴風和名八夜知、又乃和木乃加世）

はやつけぎ　ナ。早附木。すりつけぎに同じ。

はやて　ナ。疾風。はやちに同じ。夫木廿（波さらむ、沖のはやてや、つよからし、生田が磯に、よする友舟）

はやと　ナ。隼人。はやひとに同じ。

はやな　サ。ヱ。願をいふことばのばやに、感辞のなをそへたるもの。千載（みせばやな、をじまのあまの、袖だにも、ぬれにぞぬれし、いろはかはらず）

はやなは　ナ。早縄。とりなは。つみびとをいましむるなは。

はやはしり　ナ。早走。あしはやくはしるひと。平治二（八町次郎とて、大力の剛の者はやはしりのてだてあり）

はやはや　ソ。早々。とくとく。いそがしくていふことば。落窪四（四の君はやまゐらせたまへときこえたまへば、はやくといそがしたまへど、ほいなき事なれば、いとうたてものうくおぼえて、いまくといひて）

はやひと　ナ。隼人。隼人司に属せる者にて、行幸の時は、歩行にて、先駆を勤め、常には、禁中の外門を警固す。また、大嘗の時は、吠声の役をつとむる事あり。もと隼人は、猛きこと、隼のごとき人といふ意にて、大隅、薩摩の人をめされたり。一説に、大隅、薩摩の人は猛きゆゑに、その国を、隼人国といふともいへり。

はやひとぐさ　ナ。大戟。草の名。高さ一尺ばかり、茎の中空にて、折るときは、しろき汁いづ。葉は、せばくながくして、すこし柳の葉に似たり。春夏の間、黄ばみたる紫の花さく。根は、すこし、芍薬の根に似たり。毒ありといふ。用ゐるべからず。和名（大戟和名、波夜比止久佐）

はやひとぐさ　ナ。旋花。草の名。ひるがほに同じ。和名（本草云、旋花、一名、美草和名、波夜比止久佐）

はやひとの　マクラ。隼人之。はやひとは、薩摩の国の名なりともいへば、さつまにかけていふなるべし。万三（隼人乃、薩摩のせとを、雲居なす、とほくもわれは）

はやひとのつかさ　ナ。隼人司。兵部省の被管。正、佑、令史などいふ官人ありて、隼人のうへにあづかる事をすべつかさどるところ。和名（隼人司波夜比止乃豆加佐）

はやぶさ　ナ。隼。鳥の名。鷹のたぐひなり。但し、背の羽より、脚みじかくして、性いちはやしとぞ。仁徳紀（破夜歩佐は、あめにのぼり、とびかけり、いつきがうへの、さざきとらさね）和名（鶻和名、八夜布佐、隼鶻也）

はやぶね　ナ。早舟。ふなあしのはやきふね。また、いくさぶねをいふ。後撰（おほしまに、みづをはこびし、はやぶねの、はやくもひとに、あひみてしがな）和名（艕 一云波夜布禰 市高尾舟、一云艇十可乗之軽舟也）

はやま　ナ。端山。はしのやま。ふもとにあるやま。新古（つくばやま、はやましげやま、しげけれど、思ひいるには、さはらざりけり）

はやまつみ　ナ。羽山祇神。ほむすびの神の御子。神代紀（麓山祇、此云簸耶磨都微）

はやまど　ナ。羽山戸神。おほとしの神の御子。

はやまる　ナ。早丸。虫の名。きりぎりすの異名。草藻図

はやまる　サ。ヒトリ。四。早。はやる。はやりてあやまる。宇拾十（にそうは、かさむらざまにふとよりされば、おふものの、もしりはやまりて、えもとどまりあへず、先にいでされば、すもしたてて、太刀をぬきてうちければ）

はやみち　ナ。早道。ちかみち。はやあし。いそぎあし。

はやむ　ワ。カケ。シ二。早。はやからしむ。いそがす。この語は、地下よりては、はやめるを下一段にいふ。夫木九（まじをけ、はやむる駒に、おどろきて、こゑなくうつる、蝉のもろごゑ）浜松四（駒うちはやめておはしましぬ。ことなく、みなおはしつきたまひにけり）

はやめる　ワ。カケ。シ一。早。はやからしむ。はやむを見るべし。

はやも　ソ。早。はやくも。後撰（松といふ、若菜もつまず、なりぬるを、いつしかさくら、はやもさかなん）

はやらかなり　サ。早。はやし。すみやかなり。

はやらかに　ソ。早。はやく。すみやかに。宇拾三（大門へいでて、かへりさる車よびよせて、車のしりに、このつみさるもちをいれて、家へはやらかにやりて）

はやらす　ワ。流行。はやらしむ。ときめかしむ。

はやり　ナ。流行。ときをえてもてはやさるるをいふ。

はやりうた　ナ。流行唄。ときぐにはやるうた。

はやりかなり　サ。早。はやりかなり。こころのすすむことはやし。あとさきのわきまへもなし。源末摘花（女君の御めのとご侍従とて、いとはやりかなるわかうど、いとこころもとなくかさむらいさしとおもひて）

はやりかに　ソ。早。はやりて。こころのすすむことはやくて。あとさきのわきまへもなく。源帚木（琴もはやりかにて、いふやう、月頃、ふびやうおもきにたへかねて、ごくねつのさうやくをふくして、いとくさきによりて）

はやりごころ　ナ。早心。はやりかなるこゝろ。源末摘花（假にもおぼしかよはんを、とがめきこゆべき人なしなど、あざればみたるはやりごゝろはうちおもひて）

はやりごつ　ワ。ヒトリ。四。早。はやりかにあり。いらだちてあり。十訓上（はじめは、ゆゝしくはやりごちたりけれども、つひにはいましめられにけり）

はやりめ　ナ。流行眼。ひとにうつるめのやまひ。

はやりやまひ　ナ。流行病。ひとにうつるやまひ。

はやりを　ナ。早雄。はやりかなるをのこ。平家五（仰せくださるゝほどこそありけれ、院中のはやりをの者ども、我さきにとすゝみいでける中に）

はやる　ワ。ヒトリ。四。早。こゝろ、すゝみにすゝむ。こゝろすゝみて、おさへがたくあり。空穂藏開（おもしろき手どもをあそばしてはやりて、人の有無もきこしめさず）平家五（ひろみへいでて、軍をせんとはやられけれども）

はやる　ワ。ヒトリ。四。流行。ときめく。ときをえてもてはやさる。大鏡（堀川の攝政のはやりたまひし時に、この東三條殿は、御官などとゞめられさせたまひて）

はやわかり　ナ。早分。てみじかにさとらるゝをいふ。

はやわざ　ナ。早技。たくみにすばやくするてわざ。宇治拾遺六（はやわざをさへ、ならびなくしたまひければ）

はやわせ　ナ。早稻。わせといふに同じ。はやは、たゞ、そへていへるのみなり。拾遺雜草（稻まきし、むろのはやわせ、おひにけり、おりたつ田子の、雨もまみゝに）

はやを　ナ。早緒。ふねの、ろにつくるなは。夫木三十（さみだれに、はやをのつなは、くちはてゝ、波にひかるゝ、船ぞあやふき）山家集（たゆみつゝ、そりのはやをも、つけなくに、つもりにけりな、越のしらゆき）

はやをけ　ナ。早桶。ひつぎにもちふるをけ。

はゆ　ワ。カゲ。シ二。覆。こぼしすつるをいふ。豊後にて、

はゆ　ワ。ヒトリ。レ二。生。おひいづ。この語は、地方によりて、はえると下一段にいふ。万二（うちそしにおひをゝれる、河藻もぞ、かるればはゆる）

はゆ　ワ。ヒトリ。シ二。映。てりあふ。うつりあふ。夫木四（などこやま、かざしの花も、春なれば、をみのころもは、はゆるなりけり）拾遺（あやしくも、いとふにはゆる、こゝろかな、いかにしてかは、おもひたゆべき）

はゆ　ワ。ヒトリ。シ二。餲。につしよく、くさつしよくとなる。

はゆま　ナ。驛馬。むやうま。うまやぢをかよふうまの、すゞをかけたるもの。万十八（さぶるこが、いつきしとのに、鈴かけぬ、驛馬くだれり、里もとゞろに）

はゆまぢ　ナ。驛路。はゆまのかよふみち。万十（驛路に、引舟わたし、たゞのりに、妹が心に、のりにけるかも）

はゆまづかひ　ナ。驛使。はゆまのつかひ。古事記（驛使）

はら　ナ。腹。むねのしたのひろきところ。こゝろ。おもひ。たくみ。落窪二（そのころ、腹そこなひたるうへに、きぬいとうすし。板のひえのぼりて、腹ごほくとなれば）沙石集三（腹あしき上人にて、修行者ども、非時、さむくり、りやうするに、湯のあつきもぬるきもえらび）和名（腹 和名、波良。所以容與五藏之者也）

はら　ナ。腹。こをうみたるをんなをよぶとなへ。空穂藤原君（かくて、いやしき人のはらにうまれたまへるみかどの御子、三春といふさうをたまはりて）

はら　ナ。原。ひろくしてたひらかなるところ。源花宴（うき身世に、やがてきえなば、尋ねても、草のはらをば、とはじとやおもふ）著聞十（築地のはら、もしは、柿垣のはらなどをもしられけり）和名（原 和名、八良）

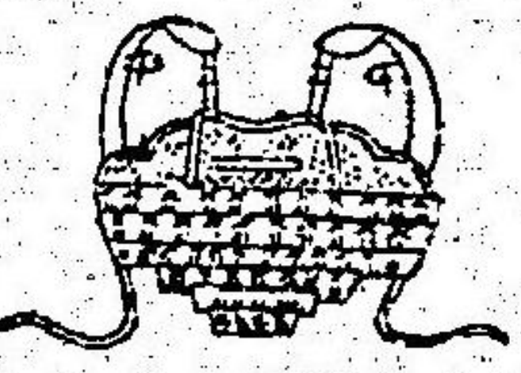
はら　ナ。薔薇。灌木の名。うばらに同じ。

はら　ナ。等。ども。など。そのひとりのみならぬをいふことば。蜻蛉（みせにやりたるひとかへり來て、たゞいまなん御車のまゐりぞくときて、御ずゐじんばらも、みなみざれ侍りぬといふ）

はらあて　ナ。腹當。はらをつゝむよろひ。雜兵のもちふるものにて、革にてつくれり。また、腹掛のたぐひの、はらをつゝむものをもいへり。

はらあはせ　ナ。腹合。はらあはせのおびに同じ。

はらあはせのおび　ナ。腹合帶。をんなのおびの、うらとおもてとことなるもの。まるおびを見合すべし。



はらおび　ナ。腹帶。はらまき。いはたおび。

はらか　ナ。腹赤。魚の名。ますの異名。年中行事歌合（初春の、千代のためしの、長濱に、つれるはらかも、とげ

君のため）公事根源（元日節會云々、腹赤の贄とて、魚を、筑紫よりたてまつるなり）

はらがけ　ナ。腹掛。はらをおほひつゝむもの。雜の帳紙四和衛治（むつな、はらがけひきちぎつて、わらひぐつをなはめさせ、ひきよせ、ゆらりとうちのり）

はらかた　ナ。魚の名。このしろをいふ。土佐などにて、

はらがたつ　ワ。ヒトリ。四。腹立。いきどほろしくあり。

はらかのにへ　ナ。腹赤贄。ますといふ魚を、腹赤ととなへて、年のはじめの贄に、筑紫よりたてまつるもの。新六（よつの海、波しづかなる、御代なれば、はらかのにへを、けふぞなふなり）公事根源（元日節會云々、赤腹の贄とて、魚を、筑紫よりたてまつるなり）

はらがはり　ナ。腹變。はゝおやのかはりたるをいふ。てゝおやはおなじくして、はゝおやのことなるもの。

はらかん　ナ。石火矢のたぐひにや。大坂物語（はらかんを、城の御殿にむかつてうちかけ）

はらから　ナ。兄弟姉妹。きやうだい。あにとおとうとと。あねといもうとと。伊勢（その里に、いとなまめいたる女、はらからすみけり。かの男かいまみてけり）

はらぎたなし　サ。ヒ。腹穢。こゝろねぢけたり。落窪一（げに、まろがありさる事をこそおもはざめ。はらぎたなく、人にうとませたてまつる事をえんずる、いとけなきものからなどしければ、帶刀うちわらひて）

はらきり　ナ。切腹。せつぷく。はらをきりてしぬるをいふ。

はらきりがたな　ナ。腹切刀。はらをきるみじかきかたな。

はらきる　ワ。ヒトリ。四。腹切。せつぷくす。はらをきりてしぬ。精進魚類物語（自然の事あらば、腹きらんと）

はらくだり　ナ。腹下。しばしば、かはやにゆくやまひ。

はらくだる　ワ。ヒトリ。四。腹下。しばしば、かはやにゆく。

はらぐろ　ナ。腹黑。はらぎたなし。金葉（はらぐろし、こやぬる人の、なかりける、あなはらぐろの、君が心や）

はらぐろし　サ。ヒ。腹黑。はらぎたなし。蜻蛉（すのこにともしたりつる火は、はやうきえにけり云々、影もやみえつらんと思ふに、あさましうて、はらぐろうきえぬともしものさまでといへば）著聞二十（十郎、おそれやすからぬもの哉、はらぐろきむしにくらされぬとぞいひける。すなはち、廉仲が家へ具して）

はらけし　サ。ヒ。散。はらゝきてあり。字鏡（霧羋毛也、波良介志）

はらこなし　ナ。消食。ものをくひてのちのうんどう。

はらごもり　ナ。腹籠。はらまれて、いまだうまれぬもの。

はらす　ワ。カゲ。四。晴。はるゝす。はれやかになす。

はらすぢ　ナ。腹筋。はらのなかのすぢ。

はらだかし　サ。ヒ。腹高。はらみたり。つはりたり。枕草三（にげなきもの云々、老いたる者の、腹たかくてあへぎありく。また、若き男もちたるいとみぐるしきに）

はらだたし　サ。フ。腹立。はらたつべくあり。榮花月宴（怪、ごさらふぞや。いとこそはらだゝしりつれ）

はらだつ　ワ。ヒトリ。四。腹立。いかる。いきどほる。後拾（風は、たゞ、おもはぬかたにふきしかど、和田のはらだつ、なみはなかりき）源梅枝（さぶらふひとさへ、かくもてなすがやすからぬとはらだち給ふ）

はらだてじやうご　ナ。腹立上戸。さけにゑふときは、いつも、くせとして、いかりはらだつものをいふ。

はらちがひ　ナ。腹違。はらがはりに同じ。

はらつづみ　ナ。腹鼓。はらをうちならすをいふ。よをさまりて、たみのよろこびたのしむことにいへり。土佐（舟子ども、はらつゞみをうちて、海をさへ驚かして）

はらとり　ナ。腹取。あんぷく。はらをなでさするくすし。埃花引（いさきところやある。はらとりの女にとらせよかし。我も、さこそいすれと仰せられければ）

はらぬち　ナ。腹中。はらのうち。神功紀（たまきえる、うちのあそが、波羅濃知は、いさごあれや）

はらの　ナ。原野。ひろきの。新六（あさぢふの、原野にまじる、ふしくぬぎ、世にかじけゆく、わが身なりけり）

はらのふえ　ナ。大角。たゝかひのときふきならすふえ。和名（楊氏漢語鈔云、大角、波良乃布江、小角、久太能布江）

はらのゐる　ワ。ヒトリ。カ一。腹居。いきどほりをはらす。平家九（梶原、このことにはらがゐて、ねつさい、さらば、かげすゑもぬすむべかりけるものをとて）

はらばふ　ワ。ヒトリ。四。匍匐。はらにてはふ。はらをまさましてはふ。万十九（おほきみは、神にしませば、赤駒の、腹葡布たゐを、みやことなしつ）字鏡（匍、波良波比由久）

はらはらと　ツ。木葉（コノハ）、木實（コノミ）などのおつるおとにいふことば。夫木廿九（山風（ヤマカゼ）に、みねのさゝぐり、はらはらと、庭（ニハ）におちる。おほはらのさと）狹衣三（はらはらと吹（フ）きはらふ、木（コ）の下風（シタカゼ）のおとなひなども）

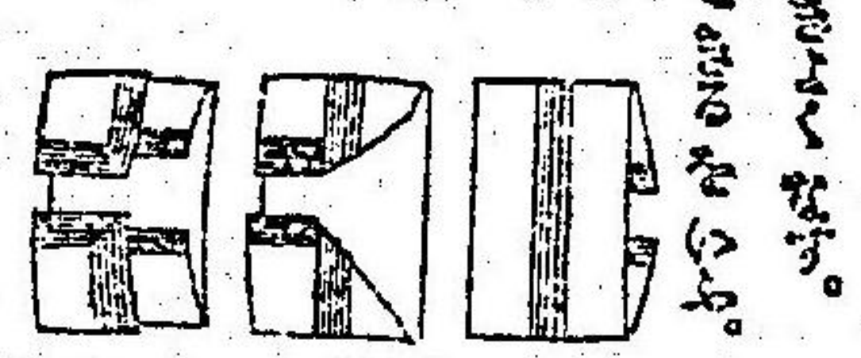
はらひ　ナ。祓。はらへといふに同じ。

はらひ　ナ。拂。かひものなどのあたひをあたふるをいふ。

はらひきよむ　ワ。カケ。シニ。祓淨。はらひてきよくなす。

はらひぎり　ナ。拂切。よこにうちはらひてきるをいふ。

はらひのかみ　ナ。拂紙。女の、髪（カミ）をくしけづるときもちふるたゝうがみにて、髪（カミ）の、斷（ダシ）につきてぬけおちたるを、はらひいるゝもの。下（シモ）の圖（ヅ）を見るべし。



はらひのく　ワ。カケ。シニ。拂除。うちはらふ。

はらひばこ　ナ。祓箱。おはらひばこに同じ。

はらふ　ワ。カケ。四。拂。とりすつ。とりのく。かひものなどのあたひをあたふ。千載（花（ハナ）のみな、ちりてのちぞ、やまざとの、はらはぬ庭（ニハ）、みるべかりける）落窪二（帶刀（タチハキ）、さきにたちて、道（ミチ）なる人々（ヒトヾ）はらふ）

はらふ　ワ。カケ。シニ。祓。かみにいのりて、つみけがれをのぞく。かみにいのりて、わざはひをのぞく。万七（中臣（ナカトミ）の、ふとのりごと、伊比波良倍（イヒハラヘ）、あがふいのちも、たがためになれ）拾遺（底（ソコ）きよみ、ながるゝ河（カハ）の、さやけくも、はらふることを、神（カミ）きくなん）

ばらふ　ナ。散樂。べつるの、くるきふあそぶもの。

はらへ　ナ。祓。かみにいのりて、つみけがれをのぞくをいふ。かみにいのりて、わざはひをのぞくをいふ。後拾（みなかみも、あらぶる心（コヽロ）、あらじかし、浪（ナミ）もなごしの、はらへしつれば）源須磨（陰陽師（オンヤウジ）めしてはらへせさせたまふ。舟（フネ）に、ことごとしきひとがたのせてながすを）

はらへぐさ　ナ。祓種。はらへつものに同じ。

はらへつもの　ナ。祓物。はらへのもの。つみのあがなひにいだすもの。神代紀（祓具、此云波羅閉都母能）

はらへどの　ナ。祓殿。はらへをするとの。

はらへる　ワ。ヒトリ。四。腹減。はらの、くひもののなくなる。

はらまき　ナ。腹巻。はらにまくおび。はらにつくるよろひ。落窪二十（上座（ジヤウザ）、そのとき、腹巻（ハラマキ）きて、ひきめ一（ヒトツ）、おんどう一（ヒトツ）、すゞみとりぐして、たてつかせて、船（フネ）のへにすゝみいでて）和名（勘杜市波良萬岐、一云腹帶）

はらまき　ナ。波羅蜜計。ひさそのこもりていふことぞ。著聞六十（ともなる力者法師（リキシヤホウシ）、きゝとがめて、おやまきの釋迦（シヤカ）や、はらまきの正覺（シヤウカク）やなどねめつゝ）

はらみご　ナ。孕兒。はらみゐるこ。はらごもりのこ。

はらみすずき　ナ。孕薄。きさほにいでぬすゝき。すゝきのほの、はらまれて、いまだほにいでぬもの。ことによせ

はらみをんな　ナ。孕婦。うぶめ。はらみゐるをんな。

はらむ　ワ。カケ。四。孕。姙。つそる。こ、はらにやどる。源竹川（ボフ）（おほかたは、かぎりなき御思（オンオモヒ）のみ、月日（ツキヒ）にそへてまさる。七月（ツキ）よりはらみさまひにけり）大鏡四（このはらまれさまへる御子（ミコ）、男（ヲトコ）とおぼすべくば、だうらくいでことうさせたまひけるに、たゞ一度（イチド）にいでくるものか）

はらむ　ワ。ヒトリ。四。孕。ふくる。ふくまる。夫木十一（秋風（アキカゼ）に、はらむ薄（スヽキ）の、ある野邊（ノベ）は、うつしの露（ツユ）や、色（イロ）にこぼるゝ）宇拾三（國司（コクシ）をとがめて、いかに、大宮司（ダイグウジ）ならんからに、國（クニ）にはらまれて、見參（ゲンザン）にもまゐらぬぞ）

はらん　ナ。波瀾。なみ。おほなみ。さゞなみ。みだれ。

ばらん　ナ。馬蘭。草（クサ）の名。葉（ハ）の長（ナガ）さ一二尺（イチニシヤク）ばかり、蘭（ラン）、水仙（スヰセン）などの葉（ハ）に似（ニ）て、きはめてかたし。春夏（ハルナツ）の間（アヒダ）、うすむらさきのむびらなる花（ハナ）さく。和名抄（ワミヤウセウ）に、馬藺（バリン）を、かきつばたとよめるはあやまりなりといふ。

はらめ　ナ。孕婦。はらみをんなをいふ。八丈島（ハチジヤウジマ）にて。

はらめく　ワ。ヒトリ。四。散りみだる。はらはらとなる。源澪標（雨（アメ）のあしあたるところ、とほりぬべくはらめきおつ）發心集一（聖（ヒジリ）ありけり云々、そのすがた、ぬののつゞり、かみぎぬなどの、いふばかりなくゆかしげにやれはらめきたるを、いさゝかもなく着（キ）ふくれて）

ばらもん　ナ。婆羅門。天竺（テンヂク）の貴族（キゾク）の名（ナ）。また、天竺（テンヂク）の宗門（シユウモン）の名にて、佛教（ブツケウ）よりもふるし。万十六（婆羅門（バラモン）の、作（ツク）れる小田（ヲダ）を、はむ烏（カラス）、まなぶたはれて、はたほこにをり）

はらや　ナ。汞粉。いせおしろい。みづかねのかす。

はらやま　ナ。原山。山名。攝津（ツノクニ）にあり。名寄（原山（ハラヤマ）の、すゞ屋（ヤ）の床（トコ）の、假臥（カリブシ）に、鳥（トリ）の音（ネ）きこえ、あけぬこの夜（ヨ）は）

はららかす　ワ。カケ。四。散。ちらす。はらくとさく。古事記（堅庭者、於向股踏那豆美、如沫雪蹶散而）（カタニハハ、ムカモヽニフミナヅミ、アワユキナスクエハラヽカシテ）

はららかに　ツ。散るごとく。はらはらと。胡琴教錄（むちをつよくとりて、やはらひけば、くもりなきにて云々、はららには、さゝめきてひくべし）

はららく　ワ。ヒトリ。四。散。くだけてちる。はらはらとなる。

はららご　ナ。散子。鮭（サケ）の卵（タマゴ）の、しほづけにしたるもの。豆（マメ）のおほきさにて、あかくしていちごのごとし。

はららに　ツ。散々。ちりぢりに。そこゝに。万二十（白波（シラナミ）の、やへをるがうへに、海小船（アマヲブネ）、波良々（ハラヽ）にうきて）

はらわた　ナ。腸。はらの内（ウチ）の下（シタ）より、肛門（コウモン）のところまでつゞきたる、管（クダ）のごときものにて、長（ナガ）さ二丈四五尺（ニヂヤウシゴシヤク）ばかりもあり。上（ウヘ）を、小腸（セウチヤウ）といひ、下（シタ）を、大腸（ダイチヤウ）といふ。されど、ふるくは、たゞうちまかせて、腹（ハラ）の事（コト）にいへり。和名（大腸和名波良和太、爲傳送之府）

はらわたをきりてわらふ　ワ。ヒトリ。四。斷腸而笑。いたくわらふ。竹取（上（ウヘ）は、はらわたをきりてわらひたまふ）

はらわたをたつ　ワ。ヒトリ。四。斷腸。こゝろはふかくなやむ。いたくかなしむ。盛衰卅四（左（ヒダリ）の手（テ）をもつて、前（マヘ）をかへ、右（ミギ）の手をもつて、髻をとらへ、もだえにて、野中（ノナカ）のそとものやりはてたちさまへり。さしもあさましき最中（サイチユウ）は、人々（ヒトヾ）、みなはらわたをたつ）

はらゐせ　ナ。腹居。いきどほりをはらすをいふ。

はらゐる　ワ。ヒトリ。カ一。腹居。はらのゐるに同じ。

はらをきりてわらふ　ワ。ヒトリ。四。斷腸而笑。いたくわらふ。續古事談（人々（ヒトヾ）、はらをきりてわらひあひたり）

はらをくだす　ワ。ヒトリ。四。腹下。はらくだるに同じ。

はらをすう　ワ。ヒトリ。シニ。腹居。いきどほりをはらす。著聞六十（ふてごともして、やすからずおぼえしかど、勘當（カンダウ）してけれ、如何（イカヾ）せんぞと思（オモ）ひねんじてすぎ侍（ハベ）りぬ。たゞいまこそ、日頃（ヒゴロ）のはらをすゑ侍（ハベ）らめとて）

はらをたつ　ワ。ヒトリ。シニ。立腹。いかる。いきどほる。

はり　ナ。針。ほそきくぎのごときものにて、いとをとほして、ものをぬふにもちふるもの。万二十（針（ハリ）はあれど、妹（イモ）しなければ、つけめやと、われをなやまし、たゆる紐（ヒモ）の緒（ヲ））空穗藏開後（つらひよきてつくりのはりの、耳（ミヽ）をおきらかなるは、信濃（シナノ）のはりな、いとよきほどにすげて）和名（鍼和名波利、縫衣具也、字亦作針）

はり　ナ。鍼。ほそくやはらかなる釘（クギ）のごときものにて、人身（ヒトノミ）の病（ヤマヒ）ある所（トコロ）にさすもの。金銀（キンギン）などにて作（ツク）れり。

はり　ナ。榛。木（キ）の名（ナ）。はりのきに同じ。

はり　ナ。刺。いが。いら。とげ。のぎ。

はり　ナ。梁。うつばりといふに同じ。東北院職人歌合（むじやう、すみがねの、なほきをたゞす、身（ミ）なれども、かるぶく月（ツキ）は、かふはりぞなき）

はりあひ　ナ。張合。たがひにまけじとするをいふ。

はりあふ　ワ。ヒトリ。四。張合。たがひにまけじとす。

はりい　ナ。鍼醫。はりをもちひてれうぢするくすし。

はりいた　ナ。張板。きれなどをはりつけてのばすいた。

はりうなぎ　ナ。針鰻。ちひさきうなぎをいふ。土佐（トサ）にて。

はりがね　ナ。針金。いとのごとくのばしたるかね。

はりがねむし　ナ。針金虫。あしまつひに同じ。

はりかへ　ナ。張替。あらためてはるをいふ。

はりがみ　ナ。張紙。はりたるかみ。また、らくがきのたぐひにて、ひとのうへなどをかきてはりたるもの。

はりぎり　ナ。刺桐。木（キ）の名（ナ）。山（ヤマ）にいでくる木（キ）にて、桐（キリ）のごとくにて、刺（ハリ）あり。葉（ハ）の状（サマ）、すこし、かへでに似（ニ）て、おほきやかなり。また、材（キ）かたくして、色（イロ）しろし。

はりきる　ワ。ヒトリ。四。張切。どこまでもおしとほす。

はりぐら　ナ。張鞍。なめしがはにてはりたるくら。

はりこ　ナ。張子。かみにて、はりぬきにしたるもの。

はりごし　ナ。張輿。いたごしのたぐひにて、こしの、たゝみのおもてをはりて、おしぶちをうちたるもの。

はりごゑ　ナ。張聲。たがひにまけじとしていひそそるをいふ。新六（いさかひに、まだ手（テ）もふれぬ、そりまゆみ、ひとれおしさる、はりごゑなせそ）

はりこむ　ワ。ヒトリ。四。張込。ちからをいる。ちからをこむ。

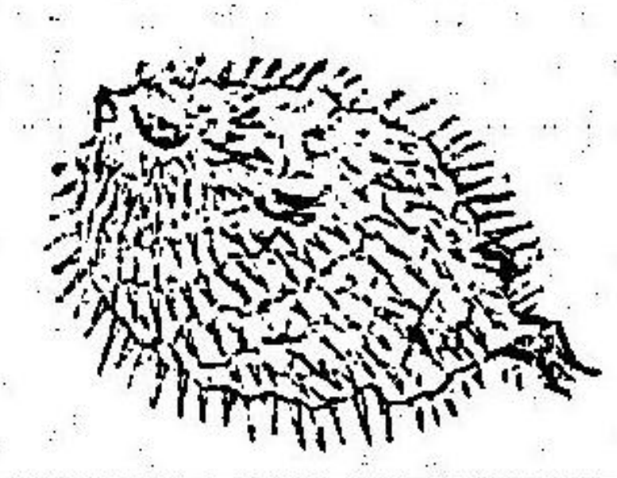
はりさし　ナ。針刺。はりをさして、をさめおくもの。

はりし　ナ。針師。はりすりに同じ。

はりしごと　ナ。針仕事。はりのしごと。ぬひものわざ。

はりすり　ナ。針磨。はりをこしらふるを、なりはひとするひと。七一職人歌合（はりすり、情（ナサケ）なき、人（ヒト）に心（コヽロ）をつくしぞり、みづからなどか、おもひそめけん）

はりせんぼん　ナ。針千本。魚の名。はりふく。佐渡の海にいでくる一種の魚にて、長さ四五寸ばかり、形、すこし、志ほさゐに似たり。この魚、頭より尾にいたるまで、全身、すべて、すきまもなく刺あり。（六雑乃記）



はりたけ　ナ。針茸。菌の名。長さ二寸ばかり、色は灰色にて、ひところに、いくすぢともなくむらがりおゆ。

はりだくみ　ナ。張工。きやうじやに同じ。

はりだし　ナ。張出。ものごとを、ひとに、知らするために、かみなどに、かきつけにしてはりおくをいふ。

はりだす　リ。ヒトリ。四。張出。おしはる。はりつけてしめす。

はりだましひ　ナ。張魂。まけじだましひ。いひがかりをいひはる心をいふ。謡曲木賊（木曾は、張魂なる男にて、いひさちぬ事をひるがへらぬものなり）

はりつく　リ。カナ。シニ。張付。貼付。はりつく。のりづけす。

はりつく　リ。カナ。シ二。磔。はりつけにす。木鐸（男女ふたりながらめしよせて、ようのえざな、木のうへにはりつけて、火をつけてやきころしたまひてき）

はりつけ　ナ。磔。刑の名。つみびとの手足を、木などに、十字のかたちにはりつけて、つきころすをいふとぞ。

はりつけばしら　ナ。磔柱。はりつけにもちふるはしら。

はりづつ　ナ。針筒。はりをいるるつつ。鍼醫の、鍼なつふときにもちふるもの。和名（針筒和名波利都々）

はりなす　リ。カナ。四。墾成。あらきに、つちをほりうがちて、田、畑、または、池などにつくりなすをいふ。

はりにし　ナ。針螺。貝の名。めくきがひに同じ。

はりぬき　ナ。張抜。かみを、もののうへにはりつけて、そのかたちになして、ひきぬきたるもの。

はりねずみ　ナ。針鼠。獣の名。くさぶに同じ。

はりのかがみ　ナ。浄玻璃鏡。おごくのかがみにて、つみびとの、つみをなしたるときのありさまの、うつりてあるものなりとぞ。夫木三二（てらすなる、はりの鏡に、罪ふかく、おのぶる難や、かくれなからん）

はりのき　ナ。榛木。木の名。高さ二三丈ばかり、葉は、栗に似てやそらかにて、花も、栗に似たり。實は、杉の實に似て、材は、薪にもちひ、皮は、染料に用ふ。

はりのみみ　ナ。針耳。はりの、いとをとほすあな。宗祇疎僕（いとつくひよきてづくりの針の、耳いとあきらかなるに、倩濃のとつりな、いとよきほどにすげて）

はりばかま　ナ。張袴。いろびきにしたるくれなゐのひきぬのはかま。今の緋袴をいふものなり。雅装（上雅仕は、いつつあこめに、うちぎぬ、ひとへ、はりのはかま、ひすまし、みつあこめに、うちぎぬ、ひとへ、変袴をきる）

はりばこ　ナ。針箱。はりのはこ。鐵木（針箱の、ふたつの袖に、さしつれど、ひとつもみえず、おちにける哉）

はりひさき　ナ。刺楸。木の名。はりぎりに同じ。

はりひぢ　ナ。張臂。いききて、ひぢをはるをいふ。

はりふぐ　ナ。針河豚。魚の名。はりせんぼんに同じ。

はりぶくろ　ナ。針嚢。はりのふくろ。いにしへ、おきななどのたづさへしものにや。万十八（波里夫久路、これはたばりぬ、すりぶくろ、今はえてしか、おきなさびせん）

はりふだ　ナ。張札。はりがみ。はりぶみ。はりざし。

はりぶんこ　ナ。張文庫。かみばりにしたるぶんこ。

はりぼう　ナ。張子。はりこをいふ。豊後などにて。

はりまあさぎ　ナ。播磨淺葱。はりまより染めいだす淺ぎなるべし。義經記一（しろき小袖ひとかさねに、からあやを、あさぎかさねて、はりまあさぎのかさびらを、上にめし、しろき大口に、からおりもののひたたれめし）

はりまち　ナ。紙。魚の名。ぶりなりとも、いなだならんともいふ。さだかならず。和名（紙 漢語抄云、波里萬知 魚名也）

はりみず　ナ。魚の名。めざうをいふ。隱岐などにて。

はりみち　ナ。墾道。にひはりみち。あらたにひらきたるみち。万十四（信濃路は、いまの墾道、かりばねに、あしふましむな、くつはけわがせ）

はりむしろ　ナ。張筵。もののおほひにはりたるむしろ。枕草六（さびしげにみゆるもの云々、雨ふらぬ日、はりむしろしたる車。ふる日、はりむしろせぬも）

ばりん　ナ。馬藺。草の名。ばらんに同じ。

はりめ　ナ。針目。はりのすぢ。はりの、ものをとほしてぬひたるところ。万四（わがせこが、きせるころもの、針目おちず、いりにけらしな、わがこころさへ）

はりめぎぬ　ナ。針目衣。つづりあはせたる衣。

はりもの　ナ。張物。はりつくるもの。いさびきのもの。また、あらひはりのもの。宇拾三（女のかぎりにて、はりものおほくとりちらしてあるに）

はりやる　ワ。カケ。四。張破。はりてやぶる。伊勢（こころざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、うへの衣の肩をはりやりてけり）

はりわた　ナ。張綿。さだかならず。或說には、とのゐものの、たぐひにて、よるもちふるものならんともいへり。落窪一（北の方、よしと思ひて、おのが着たるあやのはりわたの、なへたるをきせたまへば）同（几張たてまつるとて、紅にいろのはりわたまでおこせたり）

はりを　ナ。針魚。魚の名。形、かますに似て、頭ちひさく、目おほきく、腹まろくして、腰、きそめてこまやかなり。和名（針魚 和名波利乎、一云與呂豆、口長四寸如針故以名也）

はる　ナ。春。なはしろをおろすとき。もとのこよみの正月より三月までをいふ。万九（やましろの、久世の鷺坂、神代より、春ははりつつ、秋はちりけり）

はる　ナ。原。はらをいふ。九州などにて。

はる　ワ。カケ。四。張。おしひろぐ。ひきのばす。ひきさらす。金葉（あづさゆみ、さこそは反の、たからめ、はるほどもなく、かへるべしやは）夫木廿（世をともに、鳥の網をはる、宿なれば、身はかからんと、くる人もなし）

はる　ワ。カケ。四。貼。ねばりにてつらしむ。夫木三十（錦はる、秋の木末を、みせぬかな、へだつる霧の、圖をつくりて）伊勢（うへの衣をあらひて、てづからはりけり。こころざしはいたしけれど、さるいやしきわざもならはざりければ、うへの衣の肩をはりやりてけり）

はる　ワ。カケ。四。墾。ひらく。畑をほりうがちて、田、畑、道などにつくるをいふ。万七（住吉の、岸を田に墾、まきし稲の、かるまで、あはぬ君かも）

はる　ワ。カタ。四。射。たなぞこにてうつ。今物語（にくき法師のいひごとなとて、かまちをはりてけり）

はる　ワ。ヒトリ。四。發。はえいづ。万四十（うらもなく、わがゆく道に、青柳の、張りてたてれば、ものもひつつも）

はる　ワ。ヒトリ。四。張。まもる。うかがひてをり。源桂（いときなげににらみてはりゐされば、きづらもしくて、あうなき事やのたまひいでんとつきのすずは）

はる　ワ。ヒトリ。シニ。晴。くもりきえうす。くもりをささはる。そら、あきらかになる。この語は、地方によりては、はれるを下一段にいふ。古今（みやこびと、いかにととはば、山たかみ、はれぬくもゐに、わぶとこたへよ）狭衣四（例のごとつづけて、あるべかしき御いらへもなければ、せむ御こころのうちは、はるべきやうもなし）

はる　ワ。ヒトリ。シニ。腫。ふくれあがる。この語は、地方によりては、はれるを下一段にいふ。新聞六（やせてはれて、いくほどもなくおびただしき疵となりけり）和名（腫、野王案、瘇（字亦作腫）、波留、腫起疾病也）

はるあき　ナ。春秋。はるとあきと。拾遺（春秋に、思ひみだれて、わきかねつ、時につけつつ、うつるこころは）

はるかげなり　サ。遙。はるかなり。とほくはなれたり。榮花さま（この殿こそ、今ゆくすゑはるかげなる御ありさまは、たのもしうみえさせたまふめれ）

はるかげに　ツ。遙。はるかに。とほくはなれて。枕草九（事なりぬやなどいへば、まだなどいらへて云々、はるけにいふほどもなくかへらせたまふ）

はるかす　リ。カタ。四。晴。はれやかにす。伊勢（いかで、ものごしにたいめんして、おぼつかなくおもひつめたる事、すこしはるかさんといひければ）

はるがすみ　ナ。春霞。かすみといひて、春にかけていふ、霞などのたつを、居るともいへばなるべし。万七（春霞、井上ゆただに、道はあれど、君にあはんと）

はるかたまけて　ツ。春方儲而。はるにむかひて。はるになりて。はるにちかづきて。万五（梅の花、ちりまがひたる、ならびには、鶯なくも、波流加多麻氣豆）

はるかなり　サ。遙。とほくはなれてあり。とほくへだたりてあり。土佐（あまぐもの、はるかなりつる、かつら川、そでをひでても、わたりぬるかな）

はるかに　ツ。遙。とほくはなれて。とほくへだたりて。古今（おふことは、くもゐはるかに、なる神の、おとにききつつ、こひわたるかな）源明石（身のほどしられて、いとはるかにこそおもひきこえける）

はるかに　ソ。遥。うとく。まどほく。源氏（大斑子のおものなどは、いとはるかにおぼしめしされば）

はるぎ　ナ。春着。はるになりてきるきもの。

はるく　ワ。カナ。シ二。晴。はれしむ。はれやらにせす。源鈴虫（やうしきる御こゝろざしをはるかさむて、かの御けぶりをはるくべき事をせさせたまへ）

はるくさ　ナ。春草。はるくさ。はるになりてはえいでさるくさ。新六六（やまのはけや、つくりすてさる、荒小田の、去年のふるみちに、はけるはるくさ）

はるくさの　マクラ。春草乎。くさは、畑のくさのなれば、うまくひやまにかくるなるべし。万九（春草、馬咋山ゆ、こえ来なる、雁のつかひは、やどすぎぬなり）

はるけし　サ。ヒ。遥。はるかなり。拾遺（極楽は、はるけきほどと、きゝしかど、つとめていたる、ところなりけり）

はるこ　ナ。春蚕。はるのかひこ。蚕は、春かへるものなれども、夏蚕にむかへていふときにかくいふ。

はるこま　ナ。春駒。はるのころ、野に、はなちがひにかひおかるこま。堀川百首（さがものと、はめのにかひし、はるこまの、手にもかゝらず、あれまさるかな）

はるごり　ナ。春伐。はるこりさるもの。万代（はるごりの、柴積車、牛をよせみ、たが故郷の、垣根はらしぞ）

はるさき　ナ。春末。はるのすゑ。はるのをはり。

はるさめ　ナ。春雨。はるのあめ。拾玉（やきすさむ、あしさの焼れ、はたちて、春雨はれぬ、岡の辺のさと）

はるさらず　ソ。春去者。はるになれば。

はるさりて　ソ。春去而。はるになりて。万廿（春去而、野辺をめぐれば、おもしろみ、されをおもへ）

はるされば　ソ。春去者。はるになれば。万十（春去者、卯の花くたし、わが越えし、妹が垣間は、あれにけるかも）

はるす　ワ。カナ。シ四。晴。はるかすに同じ。祝詞式（跡疎比乃、大御饌乃国平、春志波留志気天見行賜能己賀久）

はるずゞき　ナ。春薄。木の名。やなぎの異名。藻塩草

はるせみ　ナ。春蟬。虫の名。せみの一種なり。かへちゝ、ひぐらしよりもちひさくして、春の末になくもの。

はるつかた　ナ。春方。はるのころ。はるのほど。

はるどり　ナ。春鳥。はるのころさへづるとり。万二（春鳥の、さまよひぬれば、なげきも、いまだすぎねる）

はるどりの　マクラ。春鳥之。はるどりは、こゝかしこにさへづるゆゑは、さまよふにかけていふ。喘吟とは、さへづりてゆききをいふ。万二（春鳥之、佐麻欲比ぬれば、嘆も、いまだすぎぬに、おもひも、いまだつきねば）

はるのいろ　ナ。春色。はるのけしき。新千（佐保姫の、初花かづら、かけそへて、春の色なる、青柳のいと）

はるのこゝろ　ナ。春心。はるのこゝろ。はるののどかなるこゝろ。拾遺愚外（うちにほふ、ふせごの香の、うづみびに、はるのこゝろや、まづかよふらん）

はるのしらべ　ナ。春調。琴の調子。ものゝねのしらべの、春の時にかなふもの。古今（波の音の、けさからことに、きこゆるは、春のしらべや、あらたまるらん）

はるのぢもく　ナ。春除目。あがためしに同じ。

はるのみや　ナ。春宮。とうぐう。ひつぎのみこ。また、ひつぎのみこのおはしますところ。新古葉（なく雁れ、空るゝ帰るらん、おぼつかな、春の宮まで、秋の夜なれど）

はるのみやびと　ナ。東宮人。はるのみやにつかへまつるみやびと。後撰（さみだれの、はるのみやびと、くるときは、ほとゝぎすをや、うぐひすにせん）

はるはな　ナ。春花。はるのはな。万廿（射水川、いゆきめぐれる、玉櫛笥、二上山は、波流波奈の、さける盛に）

はるばる　ナ。春々。はるごと。後撰（はる〴〵の、数は忘れず、ありながら、花さかぬ木を、何にうゑけん）

はるばる　ソ。遥々。とほくはなれて。はるかにとほく。伊勢（からころも、きつゝなれにし、妻しあれば、はる〴〵きぬる、旅をしぞおもふ）土佐（わづみのなきより、小津のとまりをおふ。松原、めもはる〴〵なり）

はるばると　ソ。遥々。とほくはなれて。はるかにはるかに。源夕顔（いといたくあれて、ひとめもなく、はる〴〵とみわたされて、木立いとうとましくものふりたり）

はるび　ナ。腹帯。うまのはらにつくるおび。平家七（馬に、鞍おき、はるびしめ、物ども、東西南北に[illegible]）

はるひ　ナ。春日。はるのひ。大和（大空を、てらす春日の、かげなれや、よそにのみして、のどけかるらん）

はるひの　マクラ。春日之。はるの日は、ともすればかすむ

ものなれば、かすむにかけていふ。武烈紀（播屡比能、箇須我をすぎ、つまごもる、をさほをすぎ）

はるべ　ナ。春辺。はるのころ。古今序（難波津に、さくやこの花、冬ごもり、今をはるべと、さくやこの花）

はるまけて　ソ。春儲而。はるになりて。はるにちかづきて。万廿（春儲而、ものがなしきに、さよふけて、はぶりなくしぎ、たが田にかすむ）

はるめく　ワ。ヒトリ。四。春のごとくあり。はるになりてのどかなり。拾玉（野辺にいでて、みなつむ沢の、あたなみどり、はるめきにけり、あはれげしきも）

はるやなぎ　マクラ。春柳。はるのやなぎは、かづらにかくる故、かづらにかけていふ。万十（春柳、葛城山に、たつ雲の、たちても居ても、妹しおもほゆ）

はるやま　ナ。春山。はるのやま。新拾（春山の、かすみのおくの、よぶこどり、世のかくれがは、誰かとふらん）

はるやまの　マクラ。春山之。はるのやまは、木々の若枝の、しなひさかゆる故に、しなふにかけていふ。万廿（春山之、しなひさかえて、秋山の、色なつかしき、ももしきの、大宮人は、天地と、日月とともに、よろづ代にもが）

はれ　ナ。晴。くもりのきえうするをいふ。くもりのをさまるをいふ。風雅（むらくもは、かくれあらはれ、ゆく月の、はれもくもりも、秋ぞかなしき）

はれ　ナ。晴。おもてだちてはれがましきをいふ。新六五（つじまつり、けふをはれとも、みせさやの、はぎきけて、ねるやたが子ぞ）落語七（草の字の額を、はれの門に、うたれざりけり。道風これをみて）

はれあがる　ワ。ヒトリ。四。晴上。はれてたかくなる。

はれがまし　サ。ブ。晴。おもてだちてはれぐし。中務内侍日記（はれがましくなる女房たち、いくらもくおしいりて、いかにくなどおほせらる）

はれぎ　ナ。晴着。はれのときにきるきもの。

はれくもり　ナ。陰晴。くもるとはるると。

はれつ　ナ。破裂。さけてやぶるゝをいふ。

はれて　ソ。晴。おほやけに。おもてだちて。

はればれし　サ。ブ。晴々。はれやかなり。おもてだちてあり。源藤（はれ〴〵しうなりて、女房なども、数あらずつどひまゐりて、いまめかしうはなやぎたまへど）

はれま　ナ。晴間。そらのはれたるとき。あめなどのやみさがりしとき。風雅（ひとすらは、いとひもせじ、むらくもの、はれまぞ月は、てりまさりける）

はれん　ナ。馬簾。草の名。ばれんに同じ。

ばれん　ナ。馬簾。てんぎにて、ものをするとき、てんぎのうへにのせるもの。

はれんち　ナ。破廉恥。はぢをもはぢともせぬをいふ。

はれもの　ナ。腫物。できもの。はゆもつ。かさのたぐひ。

はれやかなり　サ。晴。くもりなし。きよらかなり。

はれやかに　ソ。晴。くもりなく。きよらかに。

はれらかに　ソ。晴。くもりなく。きよらかに。長恨歌（顔姿、はれらかにかきやり、まゆひらかず、額うちさげてうちうちせらひ、盃もてる手にとりつき）

はれる　ワ。ヒトリ。シ一。晴。くもりきゆ。はるを見るべし。

はれる　ワ。ヒトリ。シ一。腫。ふくれあがる。はるを見るべし。

はろばろに　ソ。遥々。はるかに。とほくはなれて。万五（波呂度、かへりみしつゝ、波呂波呂爾、おもほゆるかも）

はさかれ　ナ。隙歯。はのあひだのすきたるをいふ。

はさけ　ナ。葉芽。もののあひだをさくるをいふ。新拾（くれさけの、よをへて秋や、ちるらん、ものゝけの風の、おとのすゞしき）壬生二品家（むつだりの、玉江のあしも、ほもむれて、ほぞけの秋は、もとぞなくなる）

はねる　ワ。ヒトリ。カ一。齲。こうく。歯の、酢にてさめらるゝことをいふ。和名（齟訓云、齒偏齲也）

はなくひつむ　ワ。ヒトリ。シ二。切歯。はなくひしばる。十訓五（いつとなく、歯をくひつめて、怒りておもしけるに似ざりける人なり）

ひ

くちびるにふれていづる
ひとつのこゑにて、フと
いとかよはるるこゑなり。

ひ　ナ。日。おまつひ。そらにみゆるおほきなるひかりものにて、ひかりとねつとをおくるもの。新古（大空に、てる日の色を、いさめても、天下には、誰かすむべき）

ひ　ナ。日。あまつひの、そらにあるあひだ。古今（あさず

して、こよひあけなば、春の日の、ながくや人を、つらしとおもはん）伊勢（ほころしもあり、むや、船はのれ、日もくれぬといふは、のりてせらんとするは）

ひ　ナ。日。よるの一時より、あくる日の十二時までのあひだ。拾遺（きみがうゑし、まつのみどりの、そうけれ、いづれの春の、子の日なるらん）

ひ　ナ。火。ものをやくちからあるものにて、ねつとひかりとをはなちいだすもの。空穂あて宮（火をつけて、かささきにやきほろぼして、山にこもりぬ）

ひ　ナ。燈火。ともしびに同じ。源末摘（まろね、ともしはねむべらん、あせくらしとて、火かゝげなどすべし）

ひ　ナ。氷。こほり。あられ。万廿（ぬばたまの、夜もふけにけり、小夜ふくと、あらしのふけば、たちまつに、わがころもでは、おくしもも、氷はさえわたり、ふるゆきも、こほりわたりぬ）和名（氷和名比、水凍成結也）

ひ　ナ。檜。木の名。ひのきに同じ。和名（檜和名非、）

ひ　ナ。梭。杼。機の具。その、ぬきいとをまきいるくだをいれて、たていとのあひだにとほしてゆくもの。和名（杼、通俗文云、受緯日杼和名比、亦謂之梭、今按、杼、杼字也、說文云、一者医之持緯者也）

ひ　ナ。樋。いひ。みづをひきてながしかよはすもの。

ひ　ナ。目瞖。眼病の名。めのうへに、うすもののごときもののできて、ものの、あきらかにみえぬもの。和名（目瞖和名比、目瞖眼之上有物如蠅翅是也）

ひ　ナ。脾。よこし。いきもののぞうふにあるもの。

ひ　ナ。碑。いしぶみ。もじをきざみつけたるいし。

ひ　ナ。秘。ひめること。ひとにかくしたること。

ひ　ナ。一。ひとつ。かずのはじまり。

ひ　ナ。緋。赤色とくれなゐとをまぜたるごとき いろ。

ひあがる　ワ。ヒトリ。四。乾上。なごりなくかわく。

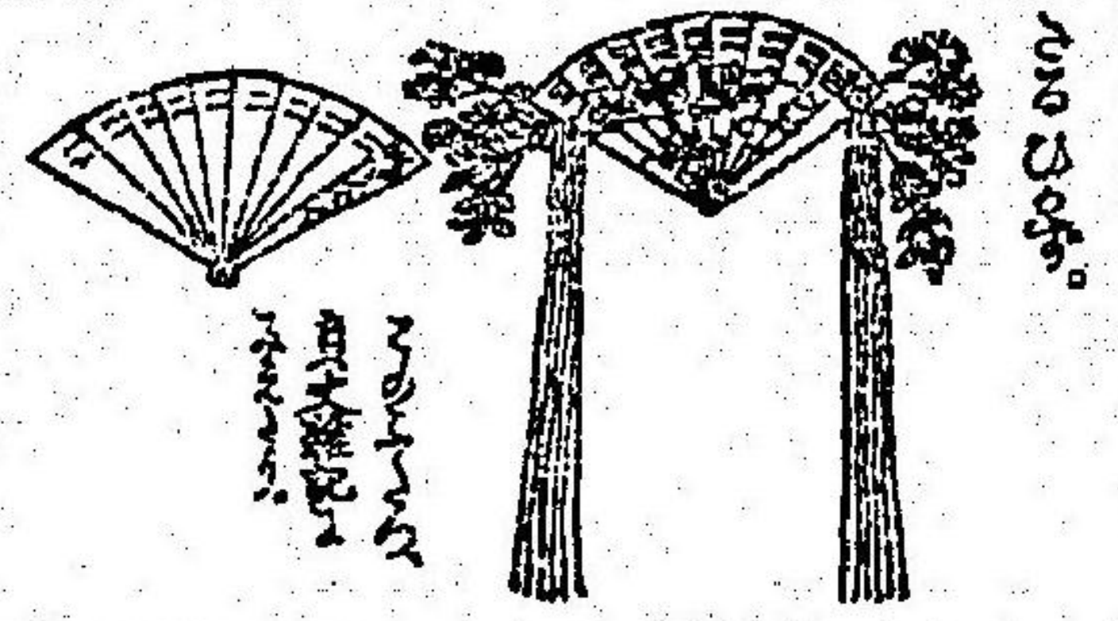
ひあし　ナ。日脚。ひのあし。ひかげ。源末摘花（日のあし、ほどなくさしいりて、雪すこしふりたるひかりに）

ひあぢ　ナ。火味。香の道具。下文を見るべし。貞丈雜記（ひあぢ、香盒の如くにして、つむをもむる物なり。香爐の火に、灰をかけて、ひかげんをみるものなり）

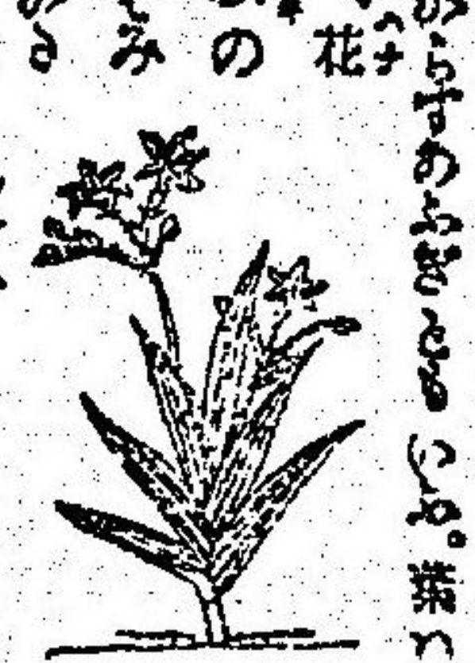
ひあそび　ナ。廂間。いへといへとのあひだのせまきところをいふ。日影のあそびといふ義なるべし。

ひあひ　ナ。日間。ひかず。へだゝりたるひかず。

ひあふぎ　ナ。檜扇。ひのきのうすいたをとぢつらねたるあふぎ。女のは三十九枚、男のは二十五枚にて、女めは、繪をもかき、綵絹のあまりを、あそびむすびなどにむすびて、花などをもつくる事なり。枕草十（扇の骨は、ほを。いろはあかき、むらさきはみどり、ひあふぎはむもんからゑ）



ひあふぎ　ナ。檜扇。草の名。からすあふぎともいふ。葉は、萱草の葉に似てかたく、花も、すこし、萱草に似て、秋のはじめ、むひらの赤く、黄ばみたる花さき、くろくして、かるくつぶらなる實をむすぶ。この草、葉の、ひらくならびたる状、すこし、檜扇に似たり。



ひあぶり　ナ。火炙。刑の名。ひをもてあぶりころすつみ。

ひい　ナ。梭。杼。機の具。ひに同じ。字鏡（杼比伊）

びい　ナ。女兒。をさなきむすめをいふ。豐後にて、

ひいき　ナ。贔屓。ひき。たすけ。

ひいけ　ナ。氷池。みづをこほらせて、こほりをつくるいけ。年中行事歌合（けふぞきる、もしれきのふは、栗栖野の、ひいけのみづの、ふかきめぐみを）

びいご　ナ。枝子。魚の名。とびうをに同じ。

ひいご　ナ。枝子。鳥の名。つぐみをいふ。但馬にて、

ひいご　ナ。枝子。ひしこのほしたるをいふ。陸奥にて、

ひいすゆる　ワ。ヒトリ。四。冷酢。ひえてすくなる。和名（金瘡經云、凡金瘡勿飲冷酢漿 師說、冷酢讀比伊須由流）

ひいづ　ワ。ヒトリ。シニ。秀。ひづるに同じ。[illegible]記（秀比伊豆流）

びいどろ　ナ。硝子。するしやうのごときやきもの。

ひいな　ナ。雛。ひな。ひゝな。

びいる　ナ。麥酒。むぎにてつくりたるさけ。

ひいれ　ナ。火入。はひをもりて、ひをうづむるうつは。

ひいろ　ナ。火色。緋色の名。緋染は、緋の紅なるもの。

ひいを　ナ。比目魚。魚の名。きひらをいふ。肥前、唐津にて、

ひう　ワ。カ。三。剥。うすく、むぐやうにきる。古事記（うはなりが、なこはさば、いちさかき、みのおほけくを、こきだひゑね、ええしやごしや、こはいのごふぞ）

ひうがあふひ　ナ。日向葵。草の名。からあふひに同じ。

ひうがし　ナ。東。ひがしに同じ。西宮記（東山道）

ひうがなだ　ナ。日向灘。海の名。あをなだに同じ。

ひうち　ナ。火打。ひをうちいだすもの。後撰（みちのくにへまかりける人に、ひうちをつかはすとて）和名（燧、古史考云、燧人氏造燧和名比宇知始出火）

ひうち　ナ。燧。ひうちをいふ。尾張などにて、

ひうちいし　ナ。火打石。ひをうちいだすいしにて、かるくして、かどおほみあるもの。字鏡（燧比宇知石）

ひうちがた　ナ。火打形。ひうちのかたち。中務内侍日記（御すそは、ひうちがたのからぬをつけられたれば、けんのごとくは、りやうめきならせさせたまふ）

ひうちがね　ナ。火打金。ひをうちいだすかね。

ひうちだうぐ　ナ。火打道具。ひをうちいだすだうぐ。

ひうちを　ナ。火打羽。つむぎのすゑ。ひうちのかたちしたるゆゑにいふ。徒然草（鞍のまへね、ひうちをの穴けはくらべて、牛の角のやうにたてむべし）

ひうちぶくろ　ナ。火打袋。ひうちをいるゝふくろ。

ひうつり　ナ。火移。ひの、つきよりてうつりゆくをいふ。

びうん　ナ。微運。むくあい。ふしあはせ。

ひえ　ナ。稗。たなつものの名。稲のごとく、また、黍にも似たり。穗の末は、ひらみたる穗をいだして、黍に似たる黒き實を結ぶ。和名（稗和名比衣、草之似穀者也）

ひえ　ナ。比叡山。山の名。近江國、志賀郡にあり。大和（何ならん、ふもともあらず、世の常の、ひえを外山と、みるばかりなり）伊勢（その山は、こゝにたとへば、ひえの山を、はたちばかり、かさねあげたらんほどして）

ひえ　ナ。冷。さむさ。さむくおぼゆるこゝち。

ひえあたり　ナ。冷中。ひえにあてられたるやまひ。

ひえいる　ワ。ヒトリ。四。冷入。ひえとほる。さむさしみとほる。源幻（雪ふりたりしあかつきは、たちやすらひて、我が身も、ひえいるやうにおぼえて）

ひえき　ナ。稗益。たすけ。おぎなひ。

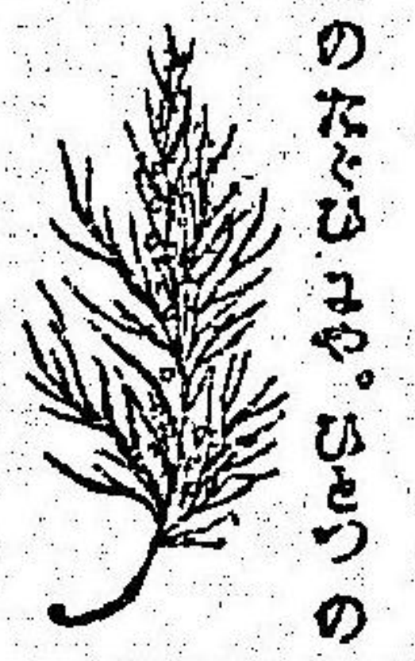
ひえこほる　ワ。ヒトリ。四。冷通。さむさしみとほる。水鏡（御うがひもこほりて、もちまゐる手もひえとほり）

ひえどり　ナ。鵯。鳥の名。おほきさ鳩ばかり、形からすに似て、尾ながく、翅は蒼黑くして背むらさきなり、また、眼の邊あかみて、腹は、くろき斑あり。また、嘴は黑くして利し。和名（鵯和名比衣土里、鵯似鳥蒼白色者也）

ひえまき　ナ。稗蒔。ちひさき鉢に、稗をまきて、青田のさまにこなしたるもの。小兒のもてあそびものなり。

ひえん　ナ。飛燕。[illegible]のさきの、鳥の翅のごとくなれるところ。和名（飛燕比衣无、覆頭似鳥翅將飛之狀也）

ひえも　ナ。海蘿。海草の名。藻のたぐひにや。ひとつの莖に、あまたの枝さしたるさま、絲のごとく、また、人の髮のみだれたるにも似たり。蒸して、飯のうへにおきてくふ事もあり。また、味噌にてあへものなどにもすとをいふ。



ひえり　ナ。日選。ひのえらび。源葵（げに愛敬のはじめは、ひえりしてきこしめすべきことにこそ）

ひえる　ワ。ヒトリ。シニ。冷。ひゆを見るべし。

ひおこし　ナ。火燃。ひふきだけをいふ。九州にて、

ひおこり　ナ。日瘧。ひをおこるところやみ。

ひおどし　ナ。緋威。あかいとおどしのよろひ。

ひおほひ　ナ。日覆。ひかげのさすをふせぐもの。

ひおもて　ナ。日面。ひはむかひたるところ。

ひか　ナ。非家。そのみちの家ならぬをいふ。猿樂の家ならで、猿樂をするを、非家のものといふたぐひ。貞丈雜記

ひがいしや　ナ。被害者。がいをうけたるひと。

ひかう　ナ。披講。詩歌の會のとき、詩歌をよみあぐるをいふ。十訓二（心あるべき、年はあらなむ、二十あまり、九日をいふ、春はくれぬる、大納言、うちきゝて、思ひもおへず、春は、三十日やはあると、いはれたりけるをきゝて、長秋、披講をもきこえずなりにけり）

びかう　ナ。鼻高。沓の名。沓のさきのたかきものなり。下文を見るべし。貞丈雜記（鼻高といふ沓は、皮にてつくり、鼻

をたくもうあげてつくり出せるさまなり）

ひがおぼえ ナ。僻覚。おぼえたることの、まことをたがふをいふ。狭衣一（かうなりと心得させ給ふもおそろしきものの、ひがおぼえもし、忘れたるなどもあらば、いみじかるべき事と、かぎりなくおぼしみだれぬべし）

ひかがみ ナ。引屈。よぼろ。ひざぶしらのうしろ。

ひかき ナ。火搔。おきのうをいふ。陸奥、南部にて、

ひがき ナ。檜垣。ひのきのうすいたにて、あじろがきのごとくしたるかき。拾遺母集（おれたる木の、ひがきとはいふものをそびてたてけるを）源夕顔（この家のかたはら、ひがきといふものあたらしうして）

ひかきめ ナ。引搔目。やすりなどにてすりたるめ。七一職人歌合（から、うらめしや、ひとのこころの、あらやすり、ひきめはさよ、のぞられぬらむ）

ひかく ナ。比較。よしあしなどをならべみるをいふ。

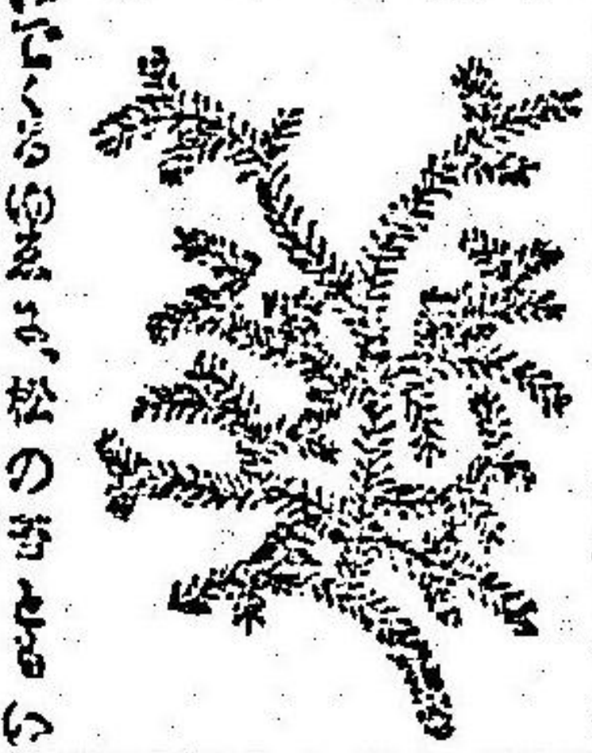
ひがく ナ。飛額。ひりめ。つひゆをきた。

ひかくし ナ。日隠。ひかげのさすをふせぐもの。仲正集（くれにけり、西のひかくし、とりのけよ、月をいとふと、ひともこそみれ）方丈記（みなみに、かりのひがくしをさしいでして、竹のすのこを志き）

ひかげ ナ。日影。ひあし。ひのひかり。玉葉（むらしぐれ、すぎゆく峰の、雲間より、ひかげうつろふ、をちの山本）

ひかげ ナ。日陰。ひのひかりのさゝぬところ。ものの、ひのひかりをさへて、くらくなりたるところ。

ひかげ ナ。日蔭蘿。苔の一種。苺草のごとくなれるもの。深山の松などにかかりてそゆる苔にて、蔓のすゑは、つぎ／＼に、枝をさして、絲のごとく、また、緒のごとくなれるもの。松につきていでくるゆゑに、松の苔ともいふ。万葉（あしびきの、山下日影、かづらける、うへにやさらに、梅をしのばむ）和名（蘿日本紀私記云蘿比加介乃加豆良也）



ひかげ ナ。日掛。いくほどかのかねを、日毎にまりつけて、すこしづゝいたすやうにするをいふ。

ひかげかづら ナ。日蔭蔓。ひかげにてつくりたるかづら。和名（蘿鬘日本紀私記云蘿鬘以蘿為鬘和語云比加介加都良）

ひかげぐさ ナ。日蔭草。あふひの異名。後拾（けふはあふ、現明の、日蔭草、いづれの代より、かけそめけん）

ひかげぐさ ナ。日陰草。苔の一種。ひかげに同じ。

ひかげん ナ。火加減。ひをもやふるほどらひ。

ひかげもの ナ。日陰者。よにあらされぬもの。

ひかげやま ナ。日影山。山の名。山城国、愛宕の郡にあり。堀川百首（ひかげやま、おふるあふひの、うらもろみ、いかなるかみの、まもるしなるらん）

ひかげるみや ナ。日陰宮。ひかげになりたるみや。古事記（まきむくの、ひしろの宮は、朝日の、ひでる宮、夕日の、比賀気流宮、竹の根の、ねたるみや）

ひがごころ ナ。僻心。ひがみたるこころ。源若菜（ならべて、ひがごころにて、わが身を、さるもあるまじき様にあこがらしきまうを、中垣おもひへだてられしあれ）

ひがごと ナ。僻事。ひがみたること。空蟬下（まめやかなる御心、すこし、ひがごとも出できつべけれど）

ひがさ ナ。日傘。ひのけをよくるにもちふるかさ。

ひがざまに ソ。僻様。ひがみたるさまに。網師（さらに、かくおぼさじ。世は、かくてやみぬまじきやうあらじなど、ひがざまに思ひなして、まやあらん（いふらし））

ひかさる ワ。ヒトラ。シ二。被引。ひかる。この語れ、地方にあり。ひかされると、下一段にいふ。後拾（さりともと、思ふ心に、ひかされて、今まで世にも、ふるわが身かな）

ひかされる ワ。ヒトリ。シ一。被引。ひかさるを見るべし。

ひがし ナ。東。ひむかし。あさひのいづるかた。

ひがし ナ。東風。ひがしのかたよりふくかぜ。

ひがしうけ ナ。東向。ひがしおもて。ひがしのむき。

ひがしおもて ナ。東面。ひがしにむかひたるかた。

ひがしかぜ ナ。東風。ひがしのかたよりふくかぜ。

ひがしきた ナ。東北。ひがしときたとのあひだ。

ひがしのみち ナ。東山道。東の山道にそひたる諸国。とうさんだうを見るべし。北山抄（東山道山乃道又東乃道）

ひがしのやまのみち ナ。東山道。ひがしのみちに同じ。

ひがしみなみ ナ。東南。ひがしとみなみとのあひだ。

ひがしむき ナ。東向。ひがしのかたのむき。

ひかず ナ。日数。ひのかず。続拾（東の方に罷りけるに、思の外に、日数つもりて、秋になりにければ）

ひかた ナ。干潟。うしほのひたるところ。玉葉（みつ潮に、浦の干潟も、波こえて、空にきこゆる、荒鶴の声）

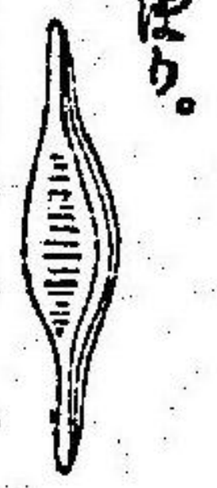
ひかた ナ。日方。風の名。にしとみなみとのあひだよりふくかぜ。万七（あまをらひ、日方ふくらし、みづくきの、をかのみなとに、なみたちわたる）

ひかたまる ワ。ヒトリ。四。乾固。かわきてかたまる。

ひがないちにち ソ。日一日。ひねもす。ひぐらしに。

ひがのこ テ。緋鹿子。あかきかのこしぼり。

ひがひ ナ。梭貝。貝の名。かたち、ほそながく、まさひらたくして、その両端のとがりて、中の脹れたる状、すこし、機の梭といふものに似たり。



ひがひがし サブ。僻々。ひがみたり。こころねぢけたり。源若菜（ひがひがしくきこえなす人ありとも、ゆめこころおきたまふな。いまみなほしたまひてんを）

ひかひかと ソ。閃々。ひかりきらめきて。

ひかふ ワ。カケ。レ二。扣。控。ひきさゝふ。ひきとゞむ。狭衣四（たづらしくて、おりなんとすれば、ひかへて）宇拾一（生死に流転するは、せんずるところ、煩悩にひかへられて、今にかくて、うき世をいでやらぬにこそ）

ひかふ ワ。カケ。シ二。扣。控。かきとゞむ。あるしとゞむ。

ひかへ ナ。扣。控。かきとゞめ。かきとめたるかきもの。

ひかへばしら ナ。支柱。さゝへてとむるはしら。

ひがへり ナ。日帰。ゆきたる日にまたかへるをいふ。

ひかへる ワ。カケ。シ一。扣。控。かきとゞむ。あるしとゞむ。

ひがみ ナ。僻。ゆがみ。ねぢけ。源桐（右の御ひがみさへぞ、ひにされば、何事にもかどほりさません）

ひがみみ ナ。僻耳。きゝたることの、まことをたがふをいふ。とりかへ一（このそらなき人は、なへなき侍りしに、たゞずひさとりたると覚え侍るは、山伏の吉野の峰の山寂に、耳ならして侍るひがみゝにや）

ひがむ ワ。ヒトリ。四。僻。ゆがむ。ねぢく。落窪四（とりもつて落窪といひさらん、何かひがみさらんといへば）源須磨（かの、鹿を馬といひけん人の、ひがめる様につるしようするなど、あしき事もきこえければ）

ひがむ ワ。カケ。シ二。僻。ひがましむ。ふとあやまる。源若菜（いとうれしうおもひたまへぬべき御事ながらも、きこしめしひがめたる事などや侍らんと）

ひかん ナ。脾疳。病の名。くひものをむさぼるやまひ。

ひがん ナ。彼岸。かのきし。仏のおそしますところ。また、春分、秋分の、あとさきの三日まで、すべて、七日の間をいふ。このとき、仏家にて、仏事あり。蜻蛉（二月も十餘日になりぬ云々、つれぐとあるほどに、ひがんにいりぬれば、なほあるよりは志ようじせんとて）

ひがんざくら ナ。彼岸櫻。さくらの一種。春の彼岸のころさく櫻にて、花の、一重にてちひさきもの。

ひがんばな ナ。彼岸花。まびさななをいふ。中国にて、

ひがんゑ ナ。彼岸會。ひがんのころのほとけのまつり。

ひがめ ナ。僻目。みたることの、まことをたがふをいふ。

ひがもの ナ。僻者。こころのひがみたるひと。源少女（世のひがものにて、そのほどよりは、もちひられず、すげなくて、身まづしくなんありけるを）

ひがよみ ナ。僻讀。よむことの、まことをたがふをいふ。奈良開談（ひがよみをおほくすべきを、點ひとつもよみあやまらぬを、あやしとおぼして）

ひがら ナ。日雀。鳥の名。四十雀に似てちひさく、頭と背とは、あをくろみたる灰色にて、腹はしろく、翅と尾とはくろし。秋の末、山里などにあまたむれてきたる。

ひがら ナ。日柄。ひかず。また、ときひ。めでたきひ。

ひからぶ ワ。ヒトリ。カ二。乾枯。かわきかる。いたくかわく。

ひがらめ ナ。日雀。鳥の名。ひがらに同じ。

ひがらめ ナ。斜眼。すがめ。やぶにらみ。

ひかり ナ。光。めに、もののかたちをつたふるものにて、かゞやくもの。つやゝかなるもの。佛足石歌（いかづちの、ひかりのごとき、これの身は、死の大王、つねにたぐへり、おづべからずや）新古（てる月も、雲のよそにぞ、ゆきめぐる、花ぞこの世の、ひかりなりける）

ひかり ナ。威光。いきほひ。源梅木（かの御心に、かゝるとがをまねられたてまつりて、世になぞらへん事も、いとまさゆゝ、覚ゆるには、げにことなる御ひかりなるべし）

ひかりあふ ワ。ヒトリ。四。光合。ひかりうつりあふ。

ひかりかがやく　ワ。ヒトリ。四。赫耀。ひかりてかゞやく。

ひかりきらめく　ワ。ヒトリ。四。燿く。ひかりてきらめく。

ひかりぐさ　ナ。光草。草の名。ひめゆりの異名。（薄雪草）

ひかりもの　ナ。光物。いはゆるよばひぼし。

ひかる　ワ。ヒトリ。四。光。ひかりある。ひかりあらはる。竹取（その竹の中に、もとひかる竹なん、ひとすぢありける。あやしがりて、よりてみるに）

ひかるかみ　ナ。光神。いかづちに同じ。

ひかるかみ　ナクラ。光神。ひかるかみは、いかづちにて、雷はなりさわぐものなれば、なりそこにかぶらせしなるべし。万葉（光神、鳴波多をとめ、手たづさはり、ともにあらんと、おもひしに、こころたがひぬ）

ひかわく　ワ。ヒトリ。四。乾燥。かわく。撰集抄六（天下、日てり、すべてたえせり溝水なども、なみひらきて）

ひがごと　ナ。僻事。ひがごと。源東屋（ゆめさかしくひがことすまじうをと、ほゝゑみてのたまへ）

ひき　ナ。蟾蜍。虫の名。がまのたぐひにて、すこし、青蛙に似たるもの。和名（蟾蜍和名比木、似蝦蟇而大陸居者也）

ひき　ナ。引。援。ひきかさにするをいふ。また、いざなふをいふ。たすくるをいふ。万葉（ますらをの、比佐のまにく、言なさずなる、越路をさしこ）落窪二（少納言、かく落窪の君ともまらで、辨君がひきにてまゐりたり）

ひき　ナ。疋。うを、むし、けだものなどを、かぞふるにいふことば。いちひきは、ひとつ。源若菜（御馬四十疋、左右のうまづかさ、六衛府の官人、かみより、つぎ／＼にひきとゝのふるほど、日くれはてぬ）

ひき　ナ。疋。きぬなどを、かぞふるにいふことば。一疋は、二反のながさ。字鏡（たげいと、たゞらにあみて、きぬ五十疋、たゞらにいれて、三ぐら）

ひぎ　ナ。氷木。ちぎに同じ。古事記（於高天原氷椽多迦斯理）

ひきあぐ　ワ。カゲ。シニ。引上。ひきて、うへにやる。

ひきあけ　ナ。引明。よの、ほの〴〵とあくるとき。

ひきあて　ナ。引当。おちのごとくにてあてておくもの。

ひきあはせ　ナ。引合。紙の名。だんしのたぐひ。貞丈雑記

ひきあはせ　ナ。引合。ひとをひきてあはするをいふ。

ひきあひ　ナ。引合。かゝりあひ。くわんけい。

ひきあふ　ワ。ヒトリ。四。引合。することにかひあるをいふ。

ひきあみ　ナ。引網。ちびきあみに同じ。

ひきいた　ナ。引板。ひきた。なるこを見るべし。

ひきいだす　ワ。カゲ。四。引出。ひきていだす。太平六（六條河原にひきいだし、一人ものこさず首をはねて）

ひきいでもの　ナ。引出物。ひきでものに同じ。空穂吹上（ひきいでものは、侍従に、さま〴〵のふちうま）

ひきいる　ワ。ヒトリ。四。引入。いきたえいる。十訓六（藤原はあひて、あきとゞろ、手おひて去なんとしけるを云々、度々うごひてひきいりにけり）

ひきいれ　ナ。引入。元服のとき、冠をかぶらするひと。栄花初花（枇杷殿にて、御冠めさせたまふ。ひきいれには、かんゐんの内大臣ぞおはしましける）

ひきいれ　ナ。挽入。ひきれに同じ。斎藤録（茶のさじたゞ云々、ひきいれの皿にとり候ふべき）

ひきいれがふし　ナ。挽入合子。ひきいれに同じ。

ひきいれごゑ　ナ。引入声。ひきいるゝがごときかすかなるこゑ。枕草三（にくきもの云々、ことなる事なきをとこの、ひきいれごゑして、えんだちたる）

ひきうく　ワ。カゲ。シニ。引受。ことをましてうけもつ。

ひきうけ　ナ。引受。ことをましてうけもつをいふ。

ひきうけて　ナ。引受人。ひきうけのひと。

ひきうす　ナ。挽臼。すりうすに同じ。

ひきうど　ナ。贔人。たけひくきひと。宇拾十（大井光遠は、ひきうどに、いかめしく、力つよく、あしはやく、みめことがらよりはじめて、いみじかりし相撲なり）

ひきうま　ナ。引馬。かざりにひきいだすうま。

ひきおこし　ナ。引起。草の名。高さ二三尺ばかり、葉は方にて、鋸歯に似たり。夏秋のあひだ、枝のさきに、穂をいだして、ちひさき花さく。この草の葉は、あぢはひにがくして、腹の痛などによしといふ。

ひきおこす　ワ。カナ。四。引起。ひきたつ。ひきておこす。すたれるをおこす。玉葉（世の中に、いづみの杣木、とる民の、ふるきをもらは、ひきおこすなん）

ひきおひ　ナ。引負。まかせられたるものを、さらくしにつかひなどして、おひめのごとくなりたるもの。

ひきおび　ナ。引帯。ちひさきおび。袍、直衣などできるをきにもちふるもの。和名（紟和名比岐於比小帯也）

ひきかがみ　ナ。引屈。よぼろ。ひざかしらのうしろ。

ひきかく　ワ。ヒトリ。シニ。引懸。かけて、つりさるごとくす。

ひきがはらけ　ナ。引土器。ぎやうきのかはらけに同じ。

ひきかふ　ワ。カゲ。シニ。引替。これを、かれにとりかふ。

ひきかふ　ワ。ヒトリ。シニ。引替。かはるをいふに同じ。源早蕨（山里のけむひひきかへて、御簾の内ころにくゝすみなして云々、御せうそこきこえさまへれど）

ひきかへ　ナ。引替。これを、かれにとりかふるをいふ。

ひきがへる　ナ。蟾蜍。虫の名。あをがへるに同じ。

ひききぬ　ナ。疋絹。きぬの、ひきにておるもの。栄花駒くらべ（きなぐにさるがひて、かづけものひきぎぬたまはす）

ひききりなり　サ。引切。こころみじかし。ものごとにいらだちやすし。源夕霧（あざしれ云々、女のかくひきゝりなるも、かへりてはかるくおぼゆるわざなり）

ひききりに　ツ。引切。こころみじかく。ものごとにいらだちやすく。源柱搭（ものくしきならひのやうに、やすべからほまてものしたまひける哉。かなしうじみれ、昔ひきゝりに、きそくしきこころもなきものを）

ひききる　ワ。カゲ。四。引切。ひきてきる。

ひきぐす　ワ。カゲ。カ。引具。ひきつるる。たづさふ。ともなふ。竹取（中将、ひとびと、ひきぐして、帰りまゐりて、かぐやひめを、えたらひとがめずなりぬるを、細々と奏す）大和（北の方うせたまひて後、ちひさき公達を引具して、三條の右大臣殿にすみたまひけり）

ひきくむ　ワ。ヒトリ。四。引組。とりくむ。くみあふ。

ひきくるめて　ツ。引括。ひとつにとりまとめて。

ひきご　ナ。蟾蜍。虫の名。あをがへるをいふ。伊賀にて、

ひきこし　ナ。引越。ところがへ。やうつり。いへうつり。

ひきごし　ナ。引腰。裳の後にひく、帯のごときもの。

ひきこす　ワ。カゲ。四。引越。つぎをこしてひきあぐ。栄花みはてぬゆめ（宰相中将にておはするを、摂政殿やすからずおぼして、ひきこして、大納言になしたてまつらせたまひつ。山の井、いと心うく思ひきこえたまへり）

ひきこす　ワ。ヒトリ。四。引越。やうつりす。ところがへす。

ひきごと　ナ。引事。あかしとしてひきいだすをいふ。

ひきこむ　ワ。カゲ。四。引込。ひきている。いへにこもる。

ひきさがる　ワ。ヒトリ。四。引下。さきのかたにさがる。

ひきさぐ　ワ。カゲ。シニ。提。ひつさぐ。手にさげてもつ。源若菜（とゞめきこえん方なければ、よろぼひし御衣どもひきさげて、ほらも、よろしき衣あらへてのりぬ）

ひきざくら　ナ。木の名。やまあららぎに同じ。

ひきさらへ　ナ。杷。くまでのごとくにて、なへをつけたるもの。麦などを刈りとる時かきよするものなり。

ひきし　サ。ヒ。低。短。卑。ひくし。たけみじかし。くらゐいやし。宇拾二（うるはしくむかひ居て、よきほどに、たゞらずひきゝらずもさげて、粥をすゝらすれど）

ひきしほ　ナ。引汐。うしほの、おきに去りゆくをいふ。

ひきしぼる　ワ。カゲ。四。引絞。ひかるゝかぎりひく。

ひきしろふ　ワ。カゲ。四。引合。挙。ひきあふ。ひきゆする。ひきゐてゆく。徒然草（ほれたる顔ながら、ほそきもとゞりさしいだし、物も着あへず、いだきもちひきしろひてにぐる、かいどりすがたのうしろで、毛おひたるほそずねのほど、をろむくつきぐし）長門平家四十（むねとの人々、みなさいしをひきぐしさまへど、さぶらひどもは、さのみひきしろふにおよばねど）

ひきすます　ワ。カゲ。四。強澄。みゝもすむばかりにひく。源明石（殿陵といふ手を、あるかぎりひきすまし）

ひきすみ　ナ。引墨。ふうじめにひくすみ。夫木二十（このたびは、みてかへしけり、てなれつゝ、ひきすみたがふ、文のうはがき）枕草二（ありつるふみの、むすびたるも、たてぶみも、いときたなげにもちなし、ふくだめて、うへにひきたりつるすみきえたるを）

ひきずる　ワ。カゲ。四。引摺。するごとくにしてひきてゆく。

ひきそへ　ナ。引副。ひきてそへたるうま。鞍をおきたる馬にそへて、ほうに、鞍箆をひきたるもの。

ひきた　ナ。引板。なるこに同じ。万十（衣手に、みしぶつくまで、うゑし田を、引板わがはへ、まもれるくるし）

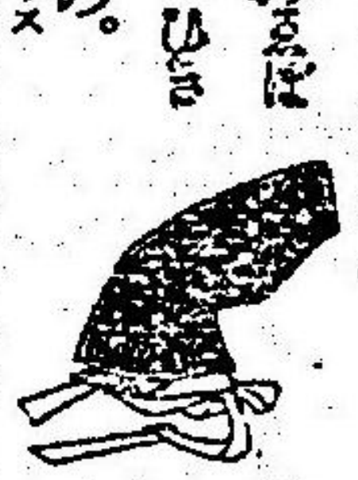
ひきだ　ナ。蟾蜍。虫の名。あをがへるをいふ。陸奥にて、

ひきだし　ナ。引出。ひきていだすをいふ。また、箪笥などにそゆる箱の、ひきださるゝやうにしたるもの

ひきだす　ワ。カクロ。引出。ひきていだす。

ひきたつ　ワ。カタ。シニ。引立。ひきおこす。また、ひきあげてもちふ。源明石（など、かくあやしきところまでものするぞとて、御手をとりてひきたてまつる）

ひきたて　ナ。引立。ひきあげてもちふるをいふ。



ひきたてゑぼし　ナ。引立烏帽子。もみゑぼしの、たてひきて、たためずして、ひきたててかぶるやうにしたるもの。

ひきちや　ナ。碾茶。まつちや。茶の、臼にてひきて、粉にしたるもの。薄茶、濃茶などにもちふるものなり。

ひきつく　ワ。ヒトリ。シニ。引付。たえいる。きぜつす。

ひきつくろふ　ワ。カタ。ロ。引繕。つくろふに同じ。源帚木（ひきつくろふべきところなく、心にかなふやうにもやと、えりそめつる人のさだまりがたきなるべし）

ひきつけ　ナ。引付。ひきつけしゆうに同じ。

ひきつけがしら　ナ。引付頭。ひきつけしゆうのかしら。

ひきつけしゆう　ナ。引付衆。武家の役の名。評定衆をたすけて、訴訟をはじめ、すべての政務をあつかふもの。

ひきつづく　ワ。ヒトリ。ロ。引続。つづくに同じ。源葵（ひまもなうたちわたりたるに、よそほしうひきつゞきてたちわづらふ、よき女房車おほくて）

ひきづな　ナ。引綱。ものにつけてひくつな。

ひきつり　ナ。引攣。すぢのひきつるやまひ。

ひきつる　ワ。ヒトリ。ロ。引攣。つるがごとくにしてひく。

ひきつる　ワ。カタ。シニ。引行。ともなふ。拾遺集（子日する、野邊に小松を、ひきつれて、かへる山路に、鶯ぞなく）

ひきつゑ　ナ。引杖。つゑを、うしろざまにもちてひきてゆくをいふ。宇拾二（侍どもひきづゑして、ついぢのくづれなどのある所にたちやすらひて）

ひきて　ナ。引手。戸、障子などにつけて、ひきあくるやうにしたるもの。和名（環、俗云手乃比岐 [illegible]）

ひきて　ナ。引手。ひくひと。みちびくひと。いざなふひと。

ひきで　ナ。引手。みぎのて。弓を射るときいふ語。おしでた見合すべし。夫木十二（あづさゆみ、ひきでの山の、ほとゝぎす、鶯を宿とや、おしてゐるらん）

ひきてのやま　ナ。引手山。山の名。大和國、山邊の郡にありとぞ。万二（ふすまぢを、引手乃山に、いもをおきて、山路をゆけば、いけりともなし）

ひきでもの　ナ。引出物。おくりものをいふ。いにしへは、親王など、馬を、庭にひきいでて、客人におくるならひなりしゆゑに、後には、馬ならぬおくりものをも、かくいふ事となれり。源幻（御子たち、大臣の御ひきでもの、品々の祿どもなど、になうしまうけて）

ひきと　ナ。引戸。との、ひきてをつけたるもの。

ひきとる　ワ。カタ。ロ。引取。とりのぞく。また、いきたえはつ。

ひきなは　ナ。引繩。ものにつけてひくなは。

ひきなほし　ナ。引直衣。主上などのめさせたまふ直衣にて、むそしれ、裾をつけてひかれたりといへり。右京大夫集（中宮の御方へ、内のうへわたらせたまへり。御ひきなほしの御すがた、宮の御ものゝぐめしたりし御さまなどの、いつと申しながら、目もあやに）

ひきぬの　ナ。疋布。疋の、ひきみてあるもの。

ひきの　ナ。引野。地の名。筑前にあり。古今（梓弓、引野のつゞら、末つひに、わが思ふ人に、ことのしげけん）

ひきのかさ　ナ。蟇笠。草の名。たびらしなをいふ。西國にて、

ひきのひたひぐさ　ナ。細辛。草の名。さいしんに同じ。和名（細辛、一名小辛、和名比木乃比太比久佐、一云比木太比久佐）

ひきはぎ　ナ。引剝。やまだちのたぐひにて、たびゞとなどのきものをはぎとるもの。著聞二十（京都にては強盗をし、邊土にてはひきはぎをして）

ひきはこゆ　ワ。カケ。シニ。衣などをかゝぐるをいふとぞ。枕草八（三十餘ばかりなる女の、つぼさうぞくなどにはあらで、たゞひきはこえたるが）

ひきはだ　ナ。蟇肌。もみがは。しぼをつけたるかは。刀の鞘のおほひとし、また、靴などにもちふ。

ひきばち　ナ。挽鉢。きぢをいふ。京都などにて、

ひきはる　ワ。カケ。四。引張。ひきつる。ひきのばす。ゆるじとするをあひてひく。宇拾二（中納言、その法師ひきはれとのたまへば）同九（ひきはりて、いで來るをみれば、頭は、黒髮もまじらず、いとしろく、年おいたり）

ひきひき　ナ。引々。このひきかのひき。落窪二（二條殿に、日々にあらまほしくなりまさる云々、此彼につき

つゝ、ひきぐしまゐれば、二十餘人ばかり候ふ）

ひきびと　ナ。矮人。たけひくきひと。靈異記（矮、比木比止）

ひきふだ　ナ。引札。もののしらせのかきものにて、いへごとにくばるもの。商人の發兌などにする事なり。

ひきふね　ナ。引舟。つなにてひくふね。また、ものにつけてひくふね。万十二（をゆまちは、引舟をさし、たゞのりに、いもがこゝろに、のりにけるかも）

ひきへぎ　ナ。引倍木。ひたびきに同じ。榮花（めでたき袖口、きぬのつまども云々、そがなかにも、くれなゐ、なでしこのひきへぎなど、かゞやきたるに）

ひきぼし　ナ。引干。みるのたぐひの、うみくさのほしたるもの。落窪一（かはらけすこしたまへ。さては、ひきぼしなどやのこりたる、すこしたまへといへば）蜻蛉（みるのひきぼしの、みじかくちぎりたるを）

ひきまぐさ　ナ。穢莫草。木の名。まつの異名。[illegible]

ひきまど　ナ。引窓。つなにてひきてあけたてするまど。

ひきまはし　ナ。引廻。つみびとを、馬にのせて、その罪をならしたる地などをひきまはすをいふ。また、合羽のたぐひの、身のまはりにめぐらしてきるもの。

ひきまゆ　ナ。獨繭。かひこの、ひとつにてつくりたるまゆ。拾遺（ひきまゆの、かくふたごもり、せまほしみ、くもでおられて、なくをみせむや）和名（獨繭、和名比木萬由）

ひきまゆ　ナ。引眉。まゆげのそりたるあとに、すみにて、まゆをゑがくをいふ。女の假粧にする事なり。

ひきめ　ナ。蟇目。鏑の名。あなをあけたるやじりにて、ひくときなりひゞくやうにしたるもの。著聞十（[illegible]きて、ひきめひとつ、ざんがうひとつ、すみをとりてもて云々、海獣を射るには、海獣くゞまりて、額なる上へとほしけり。ひきめ、耳をひゞらしてとほりぬれば）

ひきめぐり　ナ。蟇目刳。ひきめをつくるを、なりはひとするたくみ。七十一番職人歌合（ひきめぐり、一尺にあまる御ひきめは、くりにくゝて、道がゆかぬ）

ひきもきらず　ツ。引不切。たえまなくつゞきて。

ひきもの　ナ。彈物。ひきならすもの。びはのたぐひ。源松風（ひきもの、琵琶、和琴ばかり、笛ども、上手の限して）

ひきもの　ナ。挽物。ろくろざいくにしたるもの。

ひぎやう　ナ。飛行。そらをとびてゆくをいふ。

ひきやかに　ツ。低。短。ひきく。たけひきく。

ひきやく　ナ。飛脚。つかひ。とぶがごとくゆくつかひ。

ひきやくせん　ナ。飛脚船。ひきやくにもちふるふね。

ひきやま　ナ。短山。ひくきやま。祝詞式（高山之末、短山之末、高山之伊褒理、短山之伊褒理乎撥別氐）

ひきやる　ワ。カケ。四。引遣。引破。おしやる。ひきやぶる。源若菜（御几帳ども、しどけなくひきやりつゝ、ひとけぢかくよづきてぞみゆる）同浮舟（けはひにくゝもかきてけるかなと、むづかしくてひきやりつ）

ひきよう　ナ。非興。きようのなきをいふ。きようのさめたるをいふ。續古事談（その座の人々、ちらをきりてわらひあひたりけり。一座の比興なり）

ひきよく　ナ。秘曲。たいせつにするきよく。十訓（かの社にまゐりて、皇帝以下の秘曲をひくあひだ、白髮忽ちにもとのごとし。光、道の眉目とやいふべし）

ひきよもぎ　ナ。馬先蒿。草の名。陰地などにおふる草にて、馬蒿のごとき臭氣あり。秋のころ、胡麻の花に似て、赤く紫みある花さきて、小豆の莢のごときものをむすぶ。和名（馬先蒿、一名練石草、和名比木与毛木）

ひきよもぎ　ナ。茵陳蒿。草の名。よもぎのたぐひにて、冬を經てかれず。[illegible] 秋の末、黄ばみたる花さきて、芥子のごとき實をむすぶ。和名（茵陳蒿、和名比木与毛木）

ひきらかなり　サ。低。短。ひきし。たけひきし。宇拾二（たけひきらかなる僧の、[illegible]他人よりは、すこしよろしきが、中にすゝみて）

ひきらかに　ツ。低。短。ひきく。たけひきく。

ひきり　ナ。火鑽。ひをきりいだすもの。和名（火鑽、内典云、譬如因燧因鑽和名比岐利而得生火文也）

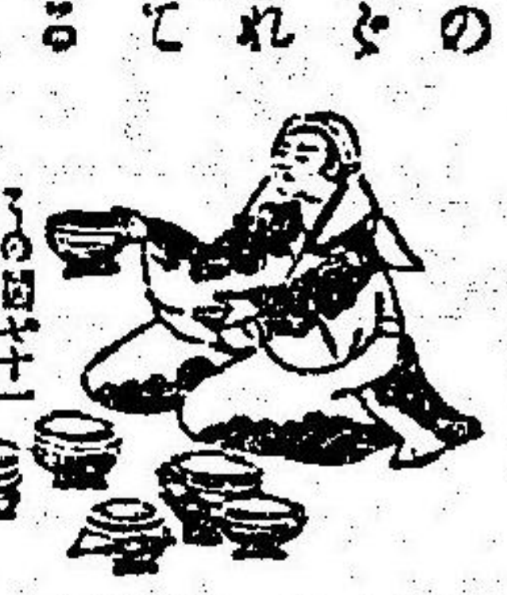
ひきり　ナ。火切。[illegible]近江國よりたてまつるもの。[illegible]（ひきりとて、近江より、貢御にまゐらする[illegible]）

ひぎり　ナ。日切。ひかずのかぎり。[illegible]

ひきりうす ナ。火鑽臼。ひをきりいだすうすを。古事記

ひきりぎね ナ。火鑽杵。ひをきりいだすきねを。古事記

ひきれ ナ。挽入。ろくろざいくのがふし。ひきもののこんのたぐひをいふ。七一職人歌合（ひきれうり、これ、いなぶなしまで候ふ、めせ。歌 あきうるし、ぬるの夜れいつに、これひきれ、こげかれふろき、むらくもの月）


この図七十一番職人歌合にみえたり。

ひきわけ ナ。引分。すまふの、ながくとりくみゐて、そてなきとき、ひきわけて、かちまけをさだめぬをいふ。

ひきわけづかひ ナ。引分使。こまひきのつかひ。下文を見るべし。公事根源（駒牽、けふは、信濃の牧の馬たてまつる云々、公卿以下、次第に、御馬をたまはる云々、とりのこしの御馬をば、引分の使にて、大将をもて、院、東宮などまゐるべき所々へまゐる）

ひきわた ナ。引綿。ここをひきたるをいふにや。続世継（ゆきふりの御幸に、ひきわたのかりぎぬを着させまへりとて、こゝろえぬ事におほせらるときゝて）

ひきわたす ワ。カク四。引渡。ひきわたす。ゆづりわたす。

ひきわり ナ。引割。おほむぎの、やうにひきわりたるもの。米の中にまじへて、飯にたくものなり。

ひきゐる ワ。カ。一。引率。ひきつる。ひきつれてゆく。伊勢（兄弟ともだちひきゐて、難波の方にいきけり）

ひく ワ。カク四。引。ものがみさまによらしむ。ものかさまきさらしむ。夫木七（みのれひく、ときは来にけり、けふもかも、かつらの山に、あふひとるらん）

ひく ワ。カク四。挽。ひきてきる。ひきてとる。

ひく ワ。カク四。弾。ゆづるをそる。万十二（みすずかる、信濃の真弓、もれ引ば、うまびとさびて、否といはんかも）

ひく ワ。カク四。弾。かきならす。源氏末摘花（御琴めして、内にも、この方にこゝろえあるひとぐにはひかせたまふ）

ひく ワ。カク四。抜。ぬきとる。詞花（君ひかず、なりなましかば、あやめぐさ、いかなる根をか、けふはかけまし）

ひく ワ。カク四。延。のりもどす。なびくのぞす。新後（神ざまも、そが道まもれ、みしめなは、世の人ごとに、ひくによるとも）更科（簾かけ、まくなどひきさり）

ひく ワ。カク四。褫。ひきうすをまねす。

ひく ワ。カク四。浴。あぶ。あむ。盛衰記（狩野介、湯殿よりつねまでしらへて、御湯ひきさまへと申す）

ひく ワ。ヒトリ四。退。さりぞく。続古（いささらず、なるみの浦に、ひくしほの、そやくも人に、とはざらまし）

ひくあみの マクラ。引網之。ひくあみは、水につく故に、なづさふにかけていふ。万三（つつじ花、にほへる君が、牽網為、名謹面こんと、たちて居て、まちけん人は）

ひくい サ。低。短。卑。ひくしを見るべし。

ひくし サ。ヒ。低。短。卑。ひきし。たけみじかし。くらゐいやし。この詞、今は、ひくいと、しをいふ。

ひぐち ナ。樋口。ひのくちに同じ。

ひぐち ナ。火口。ひのおこりいづるくち。

ひくつ ナ。卑屈。こゝろざしのけだかくなきをいふ。

ひくづ ナ。簸屑。箕にてふるひさるかす。

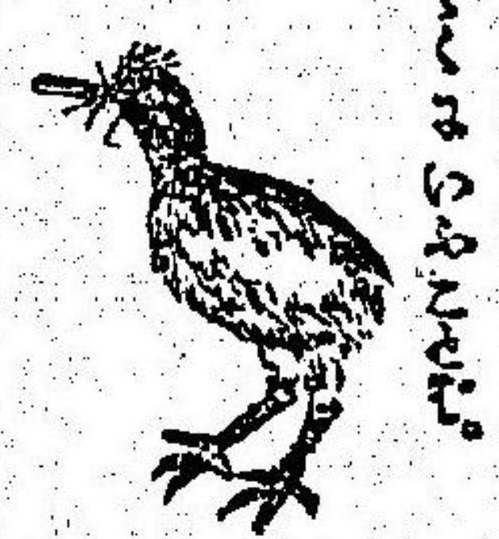
ひくて ナ。引手。ひくひと。ひくところ。古今（おほぬさの、ひくてあまたに、なりぬれば、おもへどえこそ、たのまざりけれ）源氏須磨（こゝろありて、ひくてのつなのたゆたはゞ、うちすぎましや、須磨の浦波）

びくに ナ。比丘尼。あま。をんなのそう。鹿仁記（青女房、侍、比丘尼どものそらひとぞ）

びくにぶね ナ。比丘尼舟。くさんじんぶね。勧進をする比丘尼、又は、山伏、祭文語などをのせたる舟をいふ。

びくびく ツ。慄して、おそれをのゝくにいふことぞ。

ひくひどり ナ。火食鳥。鳥の名。形、雁に似て、おほきくして、高さ三四尺ばかりもありといひ、また、駝鳥の一種なりともいふ。この鳥、まことに、火をくふにや、いぶかし。



ひくひな ナ。緋水鶏。鳥の名。あかくひなに同じ。

ひくまの ナ。引馬野。地の名。遠江にあり。万一（引馬野に、にほふ榛原、いりみだれ、衣にほはせ、旅の標に）

ひくらうど ナ。非蔵人。くらうどになるべき人の、いまだ蔵人にならずして、昇殿のみゆるされたるをいふ。されば、殿上にまじらひて、禁中の雑事につかふる。

ひぐらし ナ。茅蜩。虫の名。蝉の一種にて、常の蝉よりちひさく、色あをぐろくして、夏のすゑ、秋のはじめ、日のくれがたになく。月清集（ひぐらしの、なく音にかぜを、ふきそへて、夕ロすずしき、ならのべのさと）和名（茅蜩一名、蜩和名比久良之小青蝉也）

ひぐらし ナ。合歓木。ねぶりのきをいふ。周防などにて。

ひぐらし ツ。日暮。ひねもす。伊勢（くれがたき、夏のひぐらし、ながむれば、そのことゝなく、ものぞかなしき）

ひぐらしぐさ ナ。日暮草。草の名。なでしこの異名。藻塩草

ひぐらしに リ。日暮。ひねもすに。大和（ひぐらしに、君まつやまの、時鳥、ともねときにぞ、声もをしまぬ）

ひぐらしのやま ナ。日暮山。山の名。石見国にありといへど、さだかならず。後撰（ひぐらしの、山路をくらみ、さよふけて、木の末ごとに、紅葉てらせる）

ひぐるま ナ。火車。草の名。からあふひをいふ。大和にて。

ひぐれ ナ。日暮。ひのくれ。ゆふぐれ。伊勢（その木のもとにたちてかへるに、ひぐれになりぬ）

ひぐろみ ナ。日黒。なつの日などにてらされて、顔の色などのくろくなりたるをいふ。長門平家十九（若君、旅にいでてさまひさるきるしとおぼえて、ひぐろみして、すこしおもやせてみえさまふ）

ひぐわし ナ。乾菓子。かわきたるくわし。乾菓子のうるほひなくて、落雁などのかわきたるをいふ。

ひぐわん ナ。被管。そのつかさにつきたるもの。

ひぐわんしゆう ナ。被管衆。おさむらひをよぶとなへ。

ひけ ナ。引。まけ。やぶれ。たいさん。たいしゆつ。

ひげ ナ。髭。鬚。くちのめぐりにはえたるけ。和名（髭、和名加美豆比介、口上須也、鬚、和名之毛豆比介、頤下毛也）

ひげこ ナ。鬚籠。竹をあみたる竹の、あみあましたるすゑを、鬚のごとくにしてつけたるもの。赤染衛門（正月七日、ひげこに、若菜をいれてやるとて）

ひけし ナ。火消。くどのひをけすもの。

ひけしつぼ ナ。火消壺。おきびをいれてけすつぼ。

ひげす ワ。ヒトリ。カ。卑下。へりくだる。つゝしみてたかぶらず。源氏紅梅（内には、中宮おはします。いかばかりのひとかは、かの御けはひにならびきこえん。さりとて、おもひおとり、ひげせんもかひなかるべし）

ひけつ ナ。否決。ころしといふにさだまるをいふ。

ひげづら ナ。髭面。ひげのおほきにはえたるかほ。

ひけとりの マクラ。所引鳥之。ひけとりの、ひろごとりて、群れたる鳥の、ひきつたてば、それにひかれて、のこるもたつをいふ。さて、ひかれていぬといふにかけていふ。古事記（むらとりの、わがむれいなば、比気登理能、比気伊那婆、なかじとはいふとも）

ひげにんじん ナ。髭人参。薬草の名。にんじんのたぐひなり。高さ一二寸ばかり、葉は、人参に似てちひさく、茎は、葉よりわかれいでて、地につくところにて、根いでく。茎を根をとりて、薬にもちふ。

ひけふ ナ。卑怯。おくびやう。いさみなきをいふ。

ひけもの ナ。引物。あきひのへりたるもの。

ひけらかす ワ。カク四。衒。てらふに同じ。

ひげをとこ ナ。鬚男。ひげのもえひろごりたるをとこ。

ひこ ナ。孫。まご。うまご。常陸風土記（ところぐにはおして、ひこらがにくむもさびしきに、さくして、浮土へまゐらむや）和名（孫和名無古一云比古）

ひこ ナ。彦。をとこを、ほめとゝへてよぶことぞ。古事記

ひご ナ。籤。たけの、きぞわりてほそくさるもの。

ひご ナ。飛子。鳥の名。つぐめをいふ。播磨などにて。

ひこえ ナ。孫枝。えだのえだ。えだのえだより、またさしたるもの。字鏡（杪木末也、木細枝也、木高也、梢也、木乃枝、又比古江）

ひこく ナ。被告。うつたへられたるあひて。

ひこくにん ナ。被告人。うつたへられたるあひてのひと。

ひこさしり ナ。彦狭知命。たおきほおひの命の御子にて、工匠などのそざまに、功ありし大神なり。

ひこじろふ ワ。カク四。引。ひきのふ。ひきずる。ひきのばしてゆく。源若菜（猫、まだよく、ひともなつかぬにや、つないとながくつきたりけるを、ものにひきかけまつはれけるを、にげんとひこじろふほどに、御簾のそば、いとあらはにひきあげられたるを）

ひごたへ ナ。日招。草の名。高さ三四尺ばかり、葉は、牛蒡などの葉に似てちひさくして、夏秋のあひだ、むらさきぐみたる、ちひさき花をひらく。

ひこたらう ナ。彦太郎。夏の雲をいふ。九州にて、

ひこぢ ナ。彦父。などをたゝへてよぶことぞ。但し、妹背のうへ、まされ、妹背をならべていふときの詞なり。

ひこづらふ ワ。カナ。四。引合。率。ひこじろふに同じ。古事記（少女の、なすや板戸を、おそぶらひ、ひこがたゝせれば、比許豆良比、ひこがたゝせれば）万三十（朱のそほぶね、そほぶねに、綱とりかけ、引豆良比、ありなみすれど）

ひこと ナ。火事。くわじ。ひのことぞ。

ひこばえ ナ。孫生。蘖。木などの、きりかぶよりもえいでゝるもの。和名（蘖、蒋要云、斬而復生曰蘖和名比古波衣）

ひこばゆ ワ。ヒトリ。シニ。孫生。蘖。ひこばえいでく。新古（あらをだの、こぞのふるあとの、ふるよもぎ、いまははるべと、ひこばえにけり）字鏡（蘖死木更生、比古波由）

ひごひ ナ。緋鯉。魚の名。鯉の一種、あかきものにて、常は、人家に、金魚のごとくにしてやしなふもの。

ひごひ ナ。日乞。それをいのるいのり。

ひごふ ナ。非業。さだまりたるむくいならぬをいふ。

ひこぼし ナ。彦星。星の名。七月七日の夜まつる星なり。たなばたを見合すべし。源東屋（天の川をへだてても、かゝるひこぼしのひかりをこそまちつけさせめ）

ひこみこ ナ。皇子。せうじ。みこのみこ。和名（孫王、一名、河諺和名比古保之、又、以奴加比保之）

ひごんあを ナ。比金襖。衣の色目の名。表は青の黄むみたるにて、裏のふさあるなるをいふ。西三條装束抄、胖衣（?）抄、さ、織色は、経は青色にて、緯の黄なるをいふ。物具抄

ひごんき ナ。比金錦。織物の名。きんらんのたぐひ。源梅枝（あや、ひごんきなど、今の世のものに似ず）

ひごんなう ナ。比金襖。ひごんあをに同じ。

ひごろ ナ。日頃。いつもひゞのこなた。玉葉（夕立の、なごりむらりの、にごりみ、ひごろもきゝぬ、蛙なくなり）同（あけくれて、ひごろへにけり、卯の花の、うき世の中に、眺せし間に）源夕顔（日頃おこたりがたくものせらるゝを、やすからずなげきわたりつるに）

ひごゐ ナ。失瘖。こゑのいでぬやまひ。和名（失瘖、食療経云、食熱賦物、勿飲酢漿、失聲嘶咽、師説失瘖比古恵、嘶咽古賀良久）

ひざ ナ。膝。もゝとすねとのあひだ。新六三（さりとては、幾夜さもおらましのきこの、うちは、ひざをいだきて、あかしつ）和名（膝、野王按、膝比佐脛頭也）

ひざう ナ。秘藏。たいせつにをさめておくをいふ。著聞十二（家隆卿ひざうのひよどり、などのをといふを、子息の侍従、すみよしへもちてくだりけるを）

ひざう ナ。非常。ひじやうに同じ。空穂國讓（ひざうの時も、おひみでやみぬべきか。いかにおもひさるぞ）

ひざうせき ナ。砒霜石。あかがね、しろがねなどをふきとくるとき、とりあまりていでくるもの。このもの、きはめて毒ありといふ。服るべからず。

ひざうむすめ ナ。秘藏娘。いつきむすめに同じ。

ひさかき ナ。柃。木の名。高さ二三尺ばかり、葉のさま茶に似て狹くながくして、鋸歯のごとき刻あり。花は、白くちひさくしてくさし。この葉は、やきて、灰として、物をそむる時の灰汁にもちふ。夫木六（むらさきは、いくしほそめて、藤の花、夕ひさきの、灰をさすらん）和名（柃、漢語抄、比佐加木、似荊、可作染灰者也）

ひざがしら ナ。膝頭。ひざのさきのたかきところ。

ひさかたの マクラ。久方之。ひさかたは、瓢形をいふべきを、つゞめる詞にて、それを、あめにかけていふは、天は、まろくうつろなれば、瓢の内のまろくうつろなるに、思ひよせたるなりとぞ。さて、あめにかけたるより、後は、すべて、空のものをいふにかぶらする事となれり。また、みやこに冠らするは、都は、天皇のおましますところなれば、たふとみて、天になずらへしなり。古事記（比佐迦多能、阿米のかぐやま、利鎌に、さわたるくひ、ひはぼそ、たわやがひなを、まかんとは、われはすれど、さねんとは、われはおもへど）万五（比佐迦多能、阿麻遅は、とほし、なほなほに、家にかへりて、なりをしまさね）同八（久方乃、月夜をきよみ、うめのはな、こころひらけて、わがもへるきみ）同廿（久堅之、王都をおきて、くさまくら、たびゆくきみを、いつとかまたん）古今（ひさかたの、ひかりのどけき、はるの日に、しづごころなく、花のちるらん）

ひさかな ナ。乾魚。ほしうを。うをのほしたるもの。

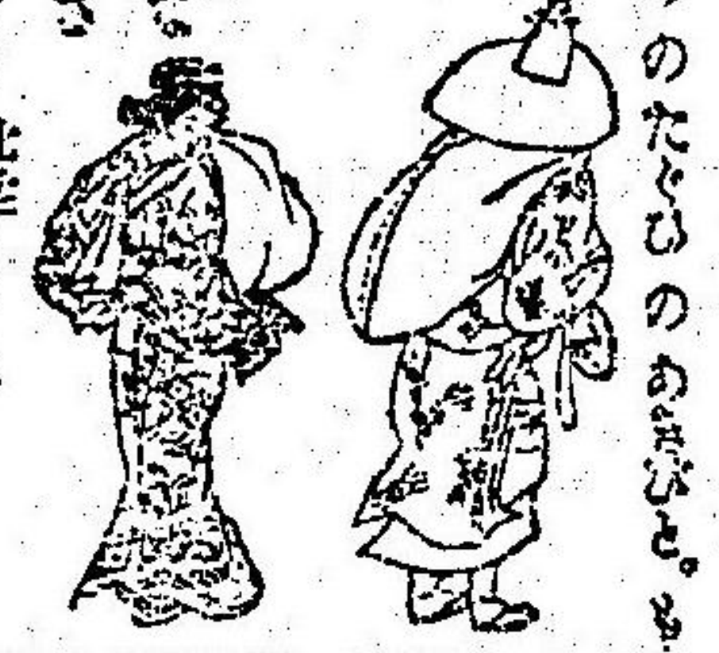
ひざかぶ ナ。膝株。ひざがしらをいふ。陸奥、南部にて、

ひざかり ナ。日盛。ひのてるさかり。散木（日盛は、あそびてゆかん、陰もなし、眞野の萩原、風たちにけり）

ひさぎ ナ。楸。木の名。あづさのたぐひ。幹すぐにのびて、梢の枝おほくさしあへり。葉は、すこし桐に似て、おほきなるは、わたり六七寸なるもあり。夏のころ、総をなして、ちひさき花さく。この木、かたくして、琴、碁盤などにつくるによし。和名（楸、漢語抄云、比佐木、本名苑）

ひさき ナ。火先。ほのほ。ひのもえあがりたるさき。

ひさぎびと ナ。販人。ふりうりのたぐひのあきびと。ものをになひてうりあるくひとをいふ。和名（販、文選賦云、販夫婦、和名比佐岐比止、俗云販婦比佐岐女、販婦也）



ひさぎめ ナ。販婦。ものをになひてうりあるくをんな。ひさぎびとを見合すべし。和名（販婦比佐岐女、販婦也）

ひさく ナ。杓。ひさご。みづをすくひてくみとるもの。

ひさく ワ。カナ。四。引裂。ひきさく。まなじりをひきあぐ。枕二六（にほやかなるとこなどちらせて、をゝと、ほうちひさきてよむだらにもいとたふとし）

ひさぐ ワ。カナ。四。鬻。販。うる。うりあるく。

ひさぐ ワ。カナ。四。拉。ひしぐに同じ。撰集抄七（この宗厨坊も、うちひさがれたる肉となん侍る）

ひさぐ ワ。ヒトリ。シニ。拉。おされてつぶる。撰集抄七（風は、釣鐵にとくにおちて云々、家のひさげたる時に）

ひさぐ ワ。カク。シニ。提。ひっさぐ。手にさげてもつ。

ひさごがた ナ。瓢形。九輪の上の珠の形せるところ。

ひざくむ ワ。ヒトリ。四。組膝。あぐらかく。ひざをくむ。

ひざくら ナ。緋櫻。さくらの一種。花びらちひさくして、つぼみのとき、ことにあかきもの。六帖（梓弓、春の山邊は、けぶりたち、もゆともみえず、ひざくらのはな）

ひさげ ナ。提子。さけをいれて、さかづきにつぐうつはもの。枕草子（こゝろにくきもの云々、ひさげの柄のたふれふすも、みゝこそとまれ）大鏡三（柄をして、小桶に、うちひさきひさげ具して、おかれたれど）

ひさご ナ。瓠。瓜の名。ゆふがほのたぐひをすべていふ。字拾三（ひさごふとりて、なべてのひさごにも似ず、おほきになりたり。隣よりきようじて、里隣の人にもくはせ、とれども、つきせずおほかり）

ひさご ナ。杓。みづをすくひてくみとるもの。字拾三（ひさごの種を、ひとつおとしておきたり云々、すぐれておほきなる七八は、ひさごにせんと思ひて、内につりつけておきたり）和名（杓、和名比佐古、斟水器也）

ひさご ナ。杓。神楽歌の曲の名。神楽歌（大原や、せがゐのしみづ、ひさごもて、鳥はなくとも、あそびてゆかん）

ひさご ナ。鶚。鳥の名。みさごをいふ。伊豆にて、

ひさごぞり ナ。瓢反。鶴首の名。からすぞりに同じ。

ひさごばな ナ。瓢花。ひさごのさまにゆひたるかみ。童部の髪の末を、額のうへにあげて、左右へわけて結びたるをいふとぞ。崇峻紀（東漢於額、古俗、年少兒、年十五六間、束髪於額、十七八間、分爲角子、今亦然之）

ひさごばな ナ。瓠花。ひさごのはなのすまひ。相撲に、左の方は、瓢をつけ、右の方は、夕顔をつくる事あるゆゑにいへり。空穂藏開（みなすまひのさうぞくし、ひさごばなかざしなど、いとめづらかなる事どもしつゝ）

ひささ ナ。久。ひさしさ。落窪（あひみでは、いくひさゝにもあらねども、年月のごと、おもほゆるかな）

ひさゝぎ ナ。楸。木の名。ひさかきに同じ。

ひさし ナ。廂。もやのめぐりにある、せばきところにて、いさゝきのならびのところ。源桐壺（おはしますとののひんがしのひさし、ひがしむきに、いしたてて）

ひさし ナ。庇。いへののきしるに、つくりそへたる、みじかきのき。金葉（あふことの、ひさしはふける、あやめぐさ、たゞかりそめの、つまとこそみれ）

ひさし サプ。久。ときながし。ときそらくなり。この語は、今は、ひさしいと、いひそへていふ。万十（難波の、さける春野は、もふるかの、きさよしとひは、久雲あらん）

ひさしい サ。久。ときながし。ひさしを見るべし。

ひさしぶりに ツ。久振。ひさしくあらずして。

ひざつき ナ。膝突。ひざのあとにしくうすべり。三尺四方ばかりなるもの。徒然草（近衛殿著陣しけるとき、ひざつきをわすれて、外記をめされけれど）

ひざつぶし　ナ。膝。ひざをいふ。薩摩などにて、

ひさなり　ナ。久。ひさし。万廿（ながくに、きなべやすけん君が日を、みず比佐奈良バ、すべなかるべし）

ひさに　ッ。久。ひさしく。六帖五（住吉の、まつほどひさに、なりぬれバ、あしたづの音に、なかぬ日ぞなき）

ひさのうを　ナ。魚の名。おかをだひに同じ。

ひざのかはら　ナ。膝骨。おもさこ。ひざがしらのほね。和名（膝骨比佐乃加波良、野王按、膝膝骨也）

ひざのとゐ　ナ。膝酔。ひざをうちて、ひやうしをとるをいふとぞ。神楽歌（さよへつひ、御あそびすらし、ひさの、あまのかはらに、比左乃古止須る）

ひざのさら　ナ。膝皿。ひざがしらをいふ。中國にて、

ひざびき　ッ。久々。ひさしぶりに。ひさしくおもずして。

ひざびやうし　ナ。膝拍子。ひざをうちて、ひやうしをとるをいふ。槇竹抄（頭をふり、膝拍子、足拍子、けしからず、目にはたつほどにするやうもあり）

ひざぼね　ナ。膝骨。ひざのかはらに同じ。

ひざまき　ナ。膝巻。羅陵王といふ舞の手の名。體源抄

ひざまく　ワ。ヒトリ。四。膝枕をなす。ひとのひざをまくらとしてふす。万十（うちひさす、みやのわがせハ、大和女の、比射麻久ごとに、我をわすらすな）

ひざまくら　ナ。膝枕。ひとのひざを枕とするをいふ。

ひざまづく　ワ。ヒトリ。四。跪。ひざをつきてかがみてをり。源氏東屋（さきまくちも、人のほども、こよなくみゆる五位四位ども、ひざまづきさぶらひて）

ひざまぞり　ナ。膝廻。つめびらきを見るべし。

ひさんぎ　ナ。非参議。さんにに同じ。下文を見るべし。貞丈雑記（非参議といふハ、位ばかりにて、官なきをいふ。前に参議たる散位の事なり。非参議とかきて、まじりなみるにあらずとよむなり）

ひさんぎのしゐ　ナ。非参議四位。参議に任ぜらるべき人の、まだ参議にならずして、四位にてあるをいふ。貞丈雑記

ひさめ　ナ。氷雨。霙。あられ。また、おほあめをいふ。和名（霈、大雨也、日本私記云、火雨、和名比左女、今按、俗云比布流）

ひさゐ　ナ。販縮。ひさぎめに同じ。[illegible]

ひさわく　ワ。ヒトリ。四。密語。ひそくとかたらふ。沙石集四（耕縁せんとて、こゝらおほづまり、ひさめきて）

ひさもと　ナ。膝下。ひざのもと。ちかき所なり。

ひさもん　ナ。毘沙門。びしやもんてんに同じ。宇拾八（すゞろに、ちはやかなるげしぼとけをおこなひいだしさり。毘沙門にてぞおはしましける）

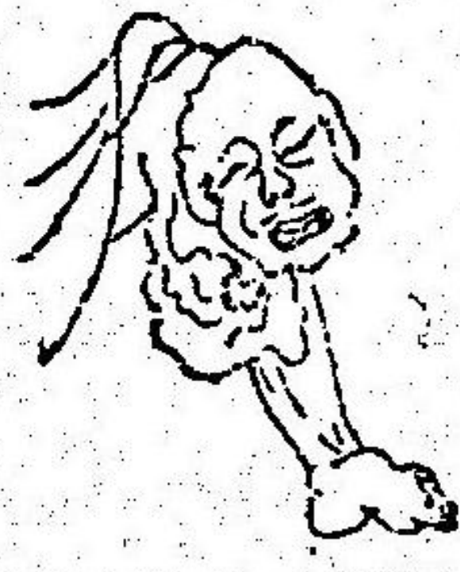
ひさよろひ　ナ。膝鎧。ひざのよろひ。はいだてのたぐひ。

ひざら　ナ。火皿。きせるのさきの、たばこをもるところ。

ひざら　ナ。薬の名。さぶろならずや。撰集抄四（廣野にいでて、人もみぬ所にて、死人の骨をとりあつめて、頭より、手足の骨をたがへずつゞけおきて、ひざらといふ薬を、骨にぬり、いちごとはこべとの葉をもみあはせて後、藤の若葉の糸などにて、骨をからげて）

ひざらし　ナ。日曝。ひにさらすをいふ。万廿（日晒の、あさてづくりを、きるにはとりしき）

ひざうろ　ナ。膝和郎。瘡の名。にんめんさう。膝にいでくる一種の瘡にて、そのさま、人の顔に似たりといふ。さ、その口のごときところに、食物をあたふれバ、くらふさまして、あるへ顔をきれバ、いたむことなきなりといふ。かゝるあやしき瘡も、まさ、世にあるものにや。下の圖ハ、むかしおありしなりとて、背柴山が作のすさびにいだせるものなり。



ひざそくむ　ワ。ヒトリ。四。組膝。あぐらをくむ。おしをくむ。大草相伝聞書（その時ハ、ひざをくみて、箸をなほし）

ひざまづく　ワ。ヒトリ。四。跪。ひざまづくに同じ。源藤末葉（御前にいでて、御階の左右に、ひざをつきて祭す）

ひし　ナ。菱。水草の名。ふるき池にいでくる草にて、春のすゑ、茎をひきて、水の面にうかぶ。葉のさま、ひらくとがりて、葉のもとの所、ふくれさるごとくにてまろし。夏のすゑ、きうくちひさき花さきて、三角、また、四角なる實をむすぶ。和名（菱和名比之）

ひし　ナ。鐵叉。ほこのたぐひ。竿のさきに、くろがねのとがりさるをつけたるものにて、魚をとるにもちひ、まさ、敵などにもちふ。太子相理（くろがねのひしハ、まづ、むねをさせとをます。これ、おほくハ、目にみ、心におもひてのみ、罪をつくりしゆゑなり）和名（鐵菱　弁色立成云比之、鐵施棘頭、因以爲名也）同（又、兩岐鐵柄長六尺、文選又云之、今按、鈹即鑽字也）

ひじ　ナ。非時。ほとけくやうなどのとき、ひるすぎに、そうにくはする物をいふ。榮花物語（御いみに候ふ僧たち、關白殿をはじめ、さてまつり、この殿原、上達部、受領、おずをつくしてひじせさせたまふ）

ひじ　ナ。秘事。ひめごと。かくして、ひとにしらせぬこと。十訓六（琵琶の秘事など、誰にもつたへおかれける。きこしめしおくべき事なりと仰せられければ）

びじ　ナ。美辞。よきこと。ほむべきことがら。

ひしがた　ナ。菱形。ひしのみのかたち。

ひじき　ナ。鹿尾菜。海草の名。ひずきもに同じ。

ひじきも　ナ。鹿尾菜。海草の名。ひずきもに同じ。伊勢（女のもとに、ひじきもといふものをやるとて）

ひじきもの　ナ。鹿尾菜。海草の名。ひずきもに同じ。山家集（あまびとの、いそしくかへる、ひじきものハ、こにしまとか、がうなまさぶみ）

ひしぐ　ワ。カナ。四。拉。おしつぶす。おしくだく。夫木十四（山賤の、垣はひしげ、竹垣の、されくだけても、世たやすきまし）四季物語（うでをひしがれ、身をあやぶむ）

ひしぐ　ワ。ヒトリ。シニ。拉。おされてつぶる。赤染集（胸ひしげ、なげく歎も、ありふれバ、あく心地する、物とこそなん）空穂祭使（かうぶりのやれひしげて、こじのかぎりある、まりきれの、まりのやれさるときて）

ひしくひ　ナ。鴻。鳥の名。雁に似て、雁よりもおほきく、背、頸、すべて灰色にて、翅くろく、腹しろし。

ひしこ　ナ。鯷。魚の名。ひしこいわしに同じ。

ひしこいわし　ナ。鯷。魚の名。いわしのたぐひ。鰯に似て、ちひさくして、一二寸ばかりなるもの。和名（鯷魚、今之鯷魚也云々、鯷、漢語抄云、比之古以和之、師古曰、鮨魚而少味也）

ひしでと　ナ。日仕事。ひるのあひだにするしごと。

ひしづめ　ナ。鎮火祭。ひのわざはひをしづむるまつり。陰暦、六月十五日におこなはれきり。下文を見るべし。公事根源（鎮火祭、卜部氏の人、火をうちて、宮城の四隅にて祭る事あり。火災をふせがんの爲とかや）

ひしづめのまつり　ナ。鎮火祭。ひしづめに同じ。

ひしと　ッ。緊しく。おされてひしくおとをいふことぞ。万廿（あかねさす、ひるハさみらに、ぬばたまの、よるハすがらに、この床の、比師跡なるまで）

ひしと　ッ。緊しく。すきまもなく。著聞六十（その後、おもひしずる事もなく、ひしと、こころにかかりて）

ひしなり　ナ。菱形。ひしのかたち。ひしのみのかたち。大草相伝聞書（むさみなの事、とりざかなとをいふ。ひしなりに切ることを子細あり）

ひしに　ナ。餓死。うゑじに。宇拾七（この世には、かくてあるべくハ、やがて、この御前にて、ひじにゝえなん）

ひしぬ　ワ。ヒトリ。カ。餓死。うゑて死ぬ。

ひしのもち　ナ。菱餅。ひしなりにきりたるもち。

ひしひしと　ッ。緊しく。おされてひしくおとをいふことぞ。源夕顔（ものゝあしおと、ひしくとふみならしつゝ、うしろよりよりくるこゝちす）

ひしびしと　ッ。緊しく。すきまもなく。宇拾二（我も、人も、袴をみんといふ云々、袴をぬぎて、ふところに、ひろげて、くもみさまへといひてひしくとす）

ひしほ　ナ。干汐。ひきしほに同じ。宇拾四（船ハ、ひしほにひかれて、もるゝは、湊へいでにけり）

ひしほ　ナ。醤。みそのたぐひ。かうおには、あほをまぜて、くりさるもの。和名（醤和名比之保）

ひしほいろ　ナ。醤色。織の色目の名。表も、裏も、ともに、蘇芳のくろばみさるものをいふ。雑事抄

ひしほす　ナ。醤。ひしほに同じ。万十六（醤酢に、ひるつきかてて、鯛ねがふ、我になみせそ、なぎのあつもの）

ひしむ　ワ。カナ。シニ。乾。ほす。かわかす。万三（居待月、あかしのとゆれ、ゆふされバ、しほをみるしめ、あけされバ、しほをかしこみ）

ひじん　ナ。美人。かほのうつくしきをんな。

びじんさう　ナ。美人草。草の名。高さ一尺ばかり、葉の形けしに似てちひさく、花も、また、罌粟に似たり。

びじんさう　ナ。美人草。さねかづらをいふ。大阪にて、

ひしめく　ワ。ヒトリ。四。鼾。ひしくとす。宇拾十（その日になりぬれバ、道もさりあへず、ひしめきあつまる）

ひしもち　ナ。菱餅。ひしなりにきりたるもち。

ひじやう　ナ。非常。ひごろ。つねにかはりたるをいふ。

ひじやう　ナ。非情。うじやうを見るべし。

ひしやく　ナ。柄杓。ひさご。みづをすくひてくみとるもの、まて、筒のごときものに、柄をつけたるもの。

びしやご　ナ。鶚。水鳥の名。みさごをいふ。薩摩にて、

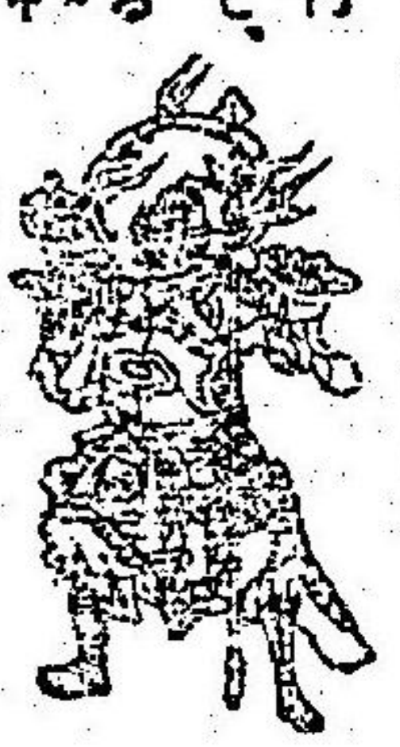
びしやしやこ　ナ。柃。木の名。ひさかきに同じ。

びしやびしや　ナ。菜の名。さやじんをいふ。山城にて、

ひしやゐ　ナ。敵将。ひさなめに同じ。類聚名抄

びしやもん　ナ。毘沙門。びしやもんてんに同じ。

びしやもんてん　ナ。毘沙門天。七福神のひとつにて、夜叉、羅刹をつかさどる神なりといふ。常に、甲冑を着て、矛をたづさへたる図をゑがけり。



びしゆかつま　ナ。毘首羯磨。ぶつざうをきざむたくみ。天竺の人にて、今は、仏としてまつれり。

ひじゆつ　ナ。秘術。ひめて、ひとにはしらせぬじゆつ。

びじゆつ　ナ。美術。おもひをこらしてつくりいづるものをいふ。詩歌、管絃などのたぐひ、みな美術なり。

ひじゆん　ナ。批准。よしあしをきめて、許可すをいふ。

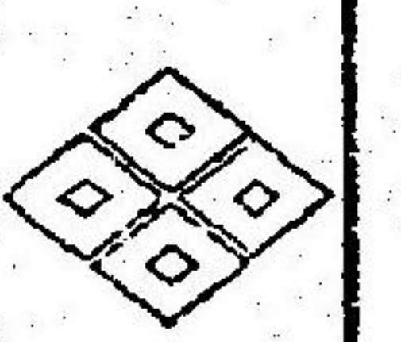
ひしよ　ナ。避暑。すずみ。なつのあつさをさくるをいふ。

びしよう　ナ。美称。ほめてよぶとなへ。

ひしよく　ナ。非職。つかさにゐて、そのつとめなきもの。

びしよく　ナ。美食。よきくひもの。

ひしよつめ　ナ。菱四目。紋所の名。よつめを、ひしのかたちにかきなしたるもの。



びしよびしよ　ソ。濡れそぼちて、ひたぬれにぬれて。

ひじり　ナ。聖。徳たかくして、神のごときひと。また、帝を、たたへまつりていふことば。万一（たまだすき、うねびの山の、かしはらの、日知の御世ゆ、あれましし、神のことごと）

ひじり　ナ。聖。すぐれたるほうし。また、そのみちにすぐれたるひと。源（釈迦の、仏さへ、ちかきひじりの身まで、たちまちにすくひけんためしある）古今（柿本の人丸なん、うたのひじりなりける）

ひじり　ナ。清酒。すみたるさけ。万三（酒の名を、聖と、おほせし、古の、おほきひじりの、ことのよろしさ）

ひじりごころ　ナ。聖心。そうのこころ。源（ひじりなる御ひじりごころの、ふかくなりゆくにつけても）

ひじりことば　ナ。聖語。そうのことば。狭衣二（いとあまりなる、ひじりことばなのたまはせそ）

ひじりづか　ナ。聖柄。刀の柄の名をいへり。鮫の皮をかけずして、黒木などにてつくりたるをいふ。貞丈雑記

ひじりめ　ナ。聖目。せいもく。碁盤の目のうへにある星の点にて、すべて、九つあり。技のおとれるものは、まづ、おきならびて、この点に、石をおく事あり。徒然草（碁盤のすみに、石をたてて、はじくに云々、ひじりめをなほくはじけば、たてる石かならずあたる）

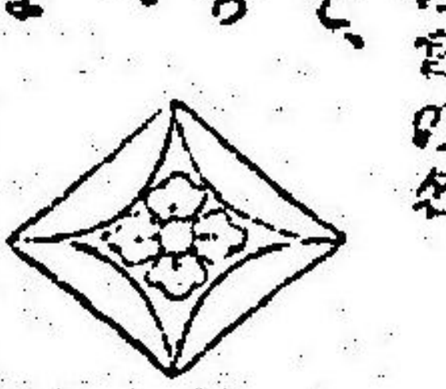
ひしる　ワ。ヒトリ。四。鹿のなくをいふなり。散木（山にあそびあるきけるに、鹿の、ひしる声のしければ）

ひじる　ワ。ヒトリ。四。聖。ひじりとなる。沙石集（上人の子は、いかにも、智者にてひじりなりと申せば、或人難じて、父に似てひじるべからずといふ。答へていはく、さらば、一生不犯の聖は、父に似てひじらんずらんと）

ひしろ　ナ。日代。景行のみかどの大和の宮の名。

ひじろ　ナ。火代。ゐろりをいふ。甲斐にて、

ひしとぢがひ　ナ。菱綴違。紋所の名。かぢかひを、ひしなりにかきなしたるもの。



ひす　ワ。カケ。カ。秘。ひむ。かくして、ひとにはしらせず。空穂（この御文ひせらるるよし、行政こそうけたまはりつけられ、ひとりなりけんかし）

ひすかし　サ。ツ。[illegible]。こころひずみたり。ひがひがし。

ひすかしき　ナ。[illegible]。ひずかしきこと。字鏡（奸比須加和佐）

ひずきも　ナ。鹿尾菜。海藻の名。ひじき。海中の石につきていでくるものにて、長さ二三寸ばかり。細くまろくして、鼠の尾のごとく、色は黒くて青みたり。和名（鹿尾菜、弁色立成云、六味菜比須岐毛、楊氏漢語抄云、鹿尾菜）

ひすどる　ナ。[illegible]。たねがしま。ふところでつぽう。

ひすまし　ナ。樋洗。かはやのきよめなどするをんな。源玉（つぼねうちさくして、ひすましめくもの、ふるきげすをんな、ふたりばかりとぞある）宇拾三（いかうじんをよびて、その人のひすましのかたで、もていぬ、むいと

りて、されはみせよとのいひければ）

ひすましわらは　ナ。樋洗童。ひすましのわざをとりあつかふわらは。和泉式部物語（ひすましわらはして、右近のそうにさしとらせて来ねとてやる）

ひずみ　ナ。歪。ゆがみ。まがり。ねぢけ。

ひずむ　ワ。ヒトリ。四。[illegible]。ひそまるに同じ。落窪一（ののしりていでたまひぬれば、かいひそみて、こころぼそげなれど、とらぎみとうつくしひ居たるほどは）

ひずむ　ワ。ヒトリ。四。歪。ゆがむ。まがる。ねぢく。

ひずらぐ　ワ。ヒトリ。四。[illegible]。すれてうすくなる。古語

ひずろぐ　ワ。ヒトリ。四。[illegible]。すれてうすくなる。

ひすゐ　ナ。翡翠。水鳥の名。そびに同じ。

ひすゐ　ナ。翡翠。そびのつばさのいろ。[illegible]（髪、すこしいろなるが、ひすゐなどいふらんやうは）源椎本（髪さはらかなるほどは云々、ひすゐだちて、いとをかしげに、いとをよりかけたるやうなり）

ひすゐいれ　ナ。火末入。香の焼殻をいるるもの。貞丈雑記

ひせ　ナ。[illegible]。かささぎ。かささぎ。

びせうねん　ナ。美少年。かほのうつくしきこども。

ひせき　ナ。砒石。石のたぐひにて、山中の岩間よりいづるもの。形、つららのごとくにて、色は、くろきもの、灰色なるものあり。猛毒にもちふるものなり。

ひせん　ナ。疥癬。病の名。かいせん。手足にいでくるちひさき瘡のごときものにて、たちまち伝染するもの。

ひぜんがらす　ナ。肥前鴉。からすの一種にて、形、常の鴉よりもちひさきなり。肥前国に、殊におほしといふ。

ひぜめ　ナ。火攻。ひをもてせむるをいふ。

ひそ　ナ。[illegible]。檜の、ちひさくして、丸ながらに用ふるものなりとぞ。和名（[illegible]、漢語抄云比曾、俗用檜曾二字、今案[illegible]字是也）

ひそかごと　ナ。密事。ひそかにすること。

ひそかなり　サ。密。ものびやかなり。ひとにはしらせず。

ひそかに　ソ。密。ものびやかに。ひとにはしらせず。土佐（うへぬし云々、たちぬ。或人の子のならむなる、ひそかにいふ、まろ、この歌のかへしせんといふ）

ひそかぬすみ　ナ。窃盗。ひそかにぬすむぬすびと。

ひそく　ナ。秘色。あをじのうつはもの。飯などもるものなり。源末摘花（御台、ひそくやうの、唐土の物なれど、ひとわろきは、何のくさはひもなく、あはれげなる）

ひそくあを　ナ。秘色襖。ひそくいろのあを。

ひそくいろ　ナ。秘色。襖の色目の名。表は、経の紫に、緯の青なる紫色にて、裏の薄色なるものをいふ。[illegible]抄　また、染色の名にて、瑠璃色なるをいふ。胡曹抄

ひそひそ　ソ。密々。ものびやかに。ひとにはしらせず。

ひそまる　ワ。ヒトリ。四。潜。かくれてゐる。ものしづかになる。土佐（たうめひとり、あるがなかに、こちあしくして、ものものしこまでひそまりぬ）

ひそむ　ワ。ヒトリ。四。潜。ひそまる。かくれてゐる。ものびてゐる。源帚木（みづから、ひさひごみをかきさぐりて、あへなく、こころぼそければ、うちひそみぬ）

ひそむ　ワ。カケ。シニ。潜。ひそまらしむ。ひそまらしむ。

ひそむ　リ。カケ。シニ。顰。うれへを、おもてにあらはす。源末摘花（かいひそめ、人うちとりもてなしたまへれ、さるべきよひなど、ものごしにぞかたらひはべる）

ひそめく　ワ。ヒトリ。四。密語。ひそくとかたらふ。

ひそめに　ソ。密。ひそかに。ものびやかに。

ひそやかなり　サ。密。ひそかなり。ものびやかなり。

ひそやかに　ソ。密。ひそかに。ものびやかに。

ひた　ナ。引板。ひきた。なるこを見るべし。伊勢集（ひさごへて、もるつなをのみ、ひくときは、稲葉につゆぞ、とまらざりける）更科（田といふものの、ひたひきならす音など、ゐなかのここちして）

ひだ　ナ。襞積。ひざめ。はかまなどのをりめ。

びた　ナ。鐚。なまがねにてつくりたるぜに。

ひだいく　ナ。檜大工。ひだたくみに同じ。貞丈雑記

ひだう　ナ。緋桃。桃の一種。花のこくあかきもの。

ひだう　ナ。非道。むり。みちにそむきたるをいふ。落窪二（中納言は、我より外に領すべき人なきを、かくする事は、いとひだうなる事とぞ、のたまふなりしか）

ひだうぐ　ナ。火道具。てつぽう。ひをいぢるだうぐ。

ひたおもてに　ソ。直面。ひたすらに。うちつけに。そぐりなく。源総角（ひたおもてにはあらねど、そひよりつつみさせまつりたまへれ）（あないみじ、ひたおも

てまへ、身をあらはし様にまじらひありくハ、うつゝの事ともおもはずおぼしとおもひつゞくるに）

ひたおもむきに　ソ。直趣。ひとむきに。ひたすらに。拾遺集（そほづをも、何ならしけん、秋の田の、ひたおもむきに、あらはものゆゑ）源帚木（さまあしき人なれど、ひたおもむきに、二心なきをみれバこゝろやすくて）

ひたか　ナ。日高。鷹の名。うなゐのたぐひ。おほどさ稲むろりて、長さ三四尺ばかり、背色まて白ぐみたり。

ひたかく　ソ。日高。ひのけたかく。発精集（白露の、山深てるるよ、閑ゆるを、ながきひさしく、いでたちをする）

ひたき　ナ。火焼。たきび。また、たきびをするところ。和名（火爐、類聚雑要抄云、火焼比多岐、火爐火所居也）

ひたき　ナ。鶲。鳥の名。おほききさとゝむろり、頭ハ灰色にて、喉のあたりくろく、背ハうすぐろくして、胸のあたりハ赤くきなみたり。夫木廿（思ひかね、柴とりくぶる、山里を、なほさびしきや、ひたきなくなり）

ひたきに　ソ。直黄。みなきいろに。夫木六（ゑじが居し、ひたきにみゆる、花なれバ、心の中に、いそぎ居るこ）

ひたきや　ナ。火焼屋。ゑじのゐるところ。衛士ハ、よもすがら、かゞりびなどをたきてまもりゐるゆゑにいふ。更科（ひたきやの、火たく衛士にさしてたてまつりけるに）和名（助鋪和名、比太岐夜、一云古夜、如衛士直也）

ひたく　ワ。ヒトリ。レ二。日闌。ひのけかさぶく。ひめし、にしのかたになる。玉鬘（しらつゆの、日たくるまゝに、きえゆけバ、くれまつをれも、いかゞとぞおもふ）

ひたくれなゐに　ソ。直紅。みなくれなゐに。おしなべてあかく。六帖五（たれきさし、くれなゐなれバ、みせやまを、ひたくれなゐに、にほはせるらん）

ひたくろに　ソ。直黒。みなくろに。おしなべてくろく。

ひたごころに　ソ。直心。ひたすらなるところに。蜻蛉（ひたごころに、なくもなりつべき身を、そこにさそりて、いまゝでめるをいかゞせんする）

ひたさうざきに　ソ。直騒。ひたすらなるさうざきに。十部二（左方の人、ことごとく笑ひけり云々、ものをきゝもらさず、ひたさうざきに笑ふ事、あるまじき事なり）

ひたしろに　ソ。直白。みなしろに。おしなべてしろく。空蝉（かほかたち先のごとくして、かしらハひたしろに、そしハふさへなるおうななれど）

ひたす　ワ。カチ。四。養。やしなふ。おほしたつ。続紀四（人親乃、意能賀弱児乎養治事乃如久治賜比）

ひたす　ワ。カサ。四。浸。ひたす。みづにつけてぬらす。源葵（御ふすまをひきやりさまへれバ、あせにおしひたして、ひたひがみもいたうぬれさまへり）

ひたずら　ソ。只管。ひとむきに。ひとすぢに。さきめもせず。和泉式部続集（ともすれバ、ひきおどろかす、小山田の、ひたすらになね、秋のよなく）

ひたすらに　ソ。只管。ひとむきに。ひとすぢに。さきめもせず。待賢門院堀川集（ひたすらに、おもひたえなまし、山川の、などみづらと、おどろかしけん）

ひただくみ　ナ。飛騨匠。ひだのたくみなどいふ。いにしへ、飛騨国より、毎年に、木工をみつぎにてまつりしより、木工をかくいふなるなり。新六五（ひとすぢに、こひやわたらん、ひだたくみ、うつすみなはの、跡にまかせて）

ひたたけたり　ワ。ヒトリ。テ。酒。きりしまりなし。とりみだしたるさまなり。源須磨（さされたれところすごくて、海人の家さはまれなるなどきこえさまへど、人しげくひたたけたらんすまひハ、いとほいなかるべし）

ひたたけて　ソ。酒。とりしまりなくて。とりひろげさるやうにて。あらそふになりて。紫式部日記（なにか、かならずしも、おもにくゝひきいれさらんがかしからん。また、などてひたたけてさまよひさしいづべきぞ）

ひたたれ　ナ。直垂。衣の名。上の衣ハ、えり、方にて、下の裾ハ、袴を、内方にいるゝやうにしたり。また、袖ハ、紐ありて、括るごとくし、胸のあたりハ、菊綴などの飾をつけたり。常に、紋、精好などにて作れり。

ひたたれ　ナ。直垂。夜具はもちふるもの。下文を見るべし。貞丈雑記（むかしの夜具に、直垂といふものあり。夜具のもとハ、衾とて、四方なるものなり。それを被りて寝ぬるなりと云々、其のちに、いつの頃よりか、衣のごとく、領袖をつけさるもの出来たり。そのかたち、直垂に似るものなるゆゑ、ひたたれぶすまとなづけさるを、略して、ひたたれとのみいひならそし

たる）宇拾一（ねどころをおぼしきところに、五位ゐりてねんとするに、緒四五寸ばかりあるひたゝれあり云々、ねりいろの衣みつかうへに、このひたゝれ引著てふしたるに、いきざならぬは、気もあげつべし）

ひだち　ナ。肥立。ひをふるまゝにおとなやかなるをいふ。

ひたちおび　ナ。常陸帯。ひたちのくにのおび。むかし、常陸国にて、男女のなからひをうらなふとて、鹿島御前に、その名をかきたる布の帯をかけてうらなふ事ありて、それをいふとぞ。新古（東路の、道のはてなる、常陸帯の、かごとばかりも、あはんとぞおもふ）

ひだつ　ワ。ヒトリ。四。肥立。ひをふるまゝにおとなやぐ。

ひたつかひ　ナ。直使。ひたむきなるつかひ。

ひたつち　ナ。直土。つちべた。つちのうへ。万五（ふせいほの、まげいほのうちに、直土に、わらときしきて、父母ハ、まくらのかたに、妻子どもハ、あとのかたに）

ひたてりに　ソ。直照。たゞてりにてりて。

ひたと　ソ。直。ちかに。うちつけに。ゆるしなく。

ひたぬれ　ナ。直濡。いたくぬれそぼつをいふ。

ひたはしりに　ソ。直走。たゞはしりにはしりて。

ひたはだか　ナ。直裸。まはだか。撰集抄四（きぬ小袖をぬぎて云々、わが身ハ、まはだかのさまにて、ひたはだかにて、乞食の手をとりてぞおそしける）

ひたひ　ナ。額。かほの、まゆのうへのところ。枕草三（あやふまれ、岸のひたひにおふらんも、げにたのもしげなくあはれなり）和名（額、和名比太比）

ひたひ　ナ。額髪。みだんなのひたひがみをおほふもの。かづらのごとくして、かざりにつくるもの。新古（后にたちさまひけるとき、冷泉院の后宮の御ひたひをたてまつりさまひけるを、出家のとき返したてまつりさまふとて）和名（額鋒、和名比太比、蔽髪前飾也）

ひたひがみ　ナ。額髪。まへがみの、ひたひによりくるをいふ。とりかへ二（御ひたひがみも、汗にまろがれて、とききをひねりかけさるやうにてぞれかゝりつゝ）

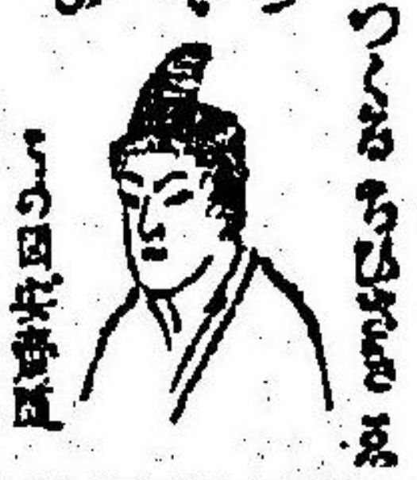
ひたひぎは　ナ。額際。ひたひの、かみのはえぎは。

ひたひじろ　ナ。額白。うぢひたひのむまに同じ。

ひたひつき　ナ。額付。ひたひのさま。源空蝉（かしらつき、ひたひつき、ものあざやかに、まみ、くちつき、いとあいぎやうづき、むなやかなるかたちなり）

ひたひのなみ　ナ。額波。としよりのひたひにいでくるあせ。堀川次郎（いやましに、ひたひのなみハ、かゝれども、きえずもきしの、ゆきつもるかな）

ひたひゑぼし　ナ。額烏帽子。ひたひにつくるちひさきゑぼし。いにしへ、わらわべの、つねにつけしものなり。夫木廿二（あのためて、すゞめゆみさる、男のわらハ、ひたひゑぼしの、ほしげなるかな）



その図安斎随筆にみえたり。

ひたぶるごころ　ナ。頑心。ひたぶるなるこゝろ。狭衣一（いまさらおなじ、なにとなると、ひたぶるごころもいできて、さるべきひまをみさまへと）

ひたぶるなり　ナ。頑。ひとむきなり。ひたすらなり。源夕霧（あが君ゐらくおしたちて、ひたぶるなる御こゝろなつかせさまひそと、手をする）

ひたぶるに　ソ。頑。ひとむきに。ひたすらに。伊勢（三吉野の、たのむのかりも、ひたぶるに、君がかたにぞ、よるとなくなる）後撰（うけれども、かなしきものを、ひたぶるに、われをやひとの、おもひすつらん）

ひだま　ナ。璣。たまとなるいし。字鏡（璣、石似玉、比太万）

ひだま　ナ。火玉。ひのたま。ひのまろくなりたるもの。

ひだまひのふだ　ナ。日給簡。てんじやうびとのところ見るべし。栄花初花（ひだまひのあざハ、内侍の尚侍ハなすよしかゝせさまひて、それがうへハかくせなん）

ひたみちに　ソ。直道。ひとみちに。ひとすぢに。ひたすらに。狭衣三（ゆきかへり、たゞひたみちに、まどひつゝ、身いなるぞらに、なりねとやさバ）

ひたん　ナ。悲歎。なげき。かなしみ。

ひため　ナ。襞。もろきなどのをりめ。和名（裙襞、別比多米）

ひたもの　ソ。一物。いつでも。枕草四（これは、おろかならんともる、ひたものわれてもてて。きたなげならんハ、かきすててなどいひくゝめてやりされバ）

ひたやごもり　ナ。直隠。ひとむきにこもりゐるをいふ。和泉式部集（うきにのみ、ひたやごもりと、おもへども、近江の海ハ、うち

いでてみよ）源氏帚木（けしきばめるせうそこもせで、ひたやごもりになさけなかりしかば）

ひだり　ナ。左。ひがしにむかひて、きたにあたるかた。

ひだりきき　ナ。左利。左の手の、右よりもきくをいふ。

ひだりさま　ナ。左様。かたよりてたゞしからぬをいふ。知顕抄（表裏不同にしてたゞしからず、ひだりざまなる事な、伊勢や日向のといひならはしたるなり）

ひだりなは　ナ。左縄。ひだりよりになひたるなは。祓にもちふるなはなり。夫木九（みそぎする、けふのおほぬさ、ひだりなは、あらぶる神も、こゝろさくらし）

ひだりのうまのつかさ　ナ。左馬寮。うまのつかさのところ見るべし。和名（左馬寮比多里乃牟萬乃豆加佐）

ひだりのみさとづかさ　ナ。左京職。みさとづかさのところ見るべし。和名（左京職比多利乃美佐止豆加佐）

ひだりまへ　ナ。左前。ころもをきるに、みぎのえりを、ひだりのえりのうへにしてきるをいふ。これは、衣のきざまの、常にたがへるもて、すべて、物のさかさまなることもよそへていふ事あり。

ひだりみぎに　ソ。左右。これかれに。源氏蜻蛉（ひだりみぎにくるしくおもへど、かの御てならひとりいでたり）

ひだりより　ナ。左縒。よりを、ひだりむきによるをいふ。

ひたる　ワ。ヒトリ。四。浸。漬。みづにつかる。詞花（住吉の、波にひたれる、松よりも、神のしるしぞ、現れにける）

ひだるし　サ。ヒ。饑。うゑたり。拾遺二十（盗人いふやう、これ、もとより、盗の心なし。この一両日食物たえて、術なくひだるく候ふまゝに、はじめて、かゝる心つきて）

ひだれ　ナ。膵。あぶらじりに同じ。和名（膵、楊胖師說、比殺文大醫云、膵今按云々、俗所謂、附布良之利是、爲尾肉也）

ひたを　ナ。直丘。ひとつゞきにつゞきたるみね。神代紀

ひぢ　ナ。臂。肘。ての、なかのほどの、をれかゞむところ。和名（釋名之肱、四聲字苑云、肘臂節也、和名比知）

ひぢ　ナ。泥。どろ。つちの、みづにとろけたるもの。

ひぢかけ　ナ。肘掛。ひぢをよせかくるもの。

ひぢかさあめ　ナ。肘笠雨。にはかあめ。これは、萬葉集に、妹が門、ゆきすぎかねつ、久方の、雨もふらぬか、そをよしにせんとある久方を、ひぢかさとよみあやまりてよりいできたる詞にて、後には、袖笠のこゝろにもいふ事あり。催馬楽（妹が門や、せなが門、ゆきすぎかねてや、わがゆかば、比知可左の、雨もやふらなん、しでたをさ、あまやどり、かさやどり、やどりてまからん、しでたをさ）源氏須磨（ひぢかさあめとかふりきて、いとあわたゞしければ、みなかへりたまはんとするに）

ひぢかね　ナ。肘金。くるゝにつくるかけがねにて、さきを、ひぢつぼにはめてとざすやうにしたるもの。

ひぢき　ナ。肘木。うでぎのたぐひ。むしろのごとくにて、よこづけにしたるいさなどを、さゝへもたするもの。和名（新撰字鏡云、比知岐、功程式云、肱木、欂木也）

ひぢぢ　ナ。曾祖父。おほおほぢに同じ。

ひぢぢかに　ソ。肘近。なれなれしく。げすげすしく。空穂閑窓（土器とりて、左のおとゞに参りたまふをみれば、いとちひさく、ひぢぢかに、ふくらかに、あいぎやうづきたまへり）源常夏（形は、ひぢぢかに、さすがにあいぎやうづきたる方にて、髮うるはしう、罪かろげなるを）

ひぢつき　ナ。肘突。ひぢぶとんに同じ。

ひぢつぼ　ナ。肘壺。ひぢがねをさしてとゞむるもの。

ひぢはる　ワ。ヒトリ。四。肘張。まげたとなす。榮花本雫（若宮たちの御後見をしおやまつべき事ぐれと、のたまはせ、ひぢはらせたまふ、おそれにみさてまつる）

ぴちぴちす　ワ。ヒトリ。カ。蹢々。いきてそこらく。

ひぢぶとん　ナ。肘蒲團。ひぢをもたするふとん。書をよむときなどに、机の上においてもたするものなり。

ひぢまき　ナ。釧。くしろに同じ。和名（釧比知萬岐）

ひぢもち　ナ。肘持。ひぢをとりてねりゆくさま。榮花根合（儀式官のねりいでたる、ひぢもち冷えて、さすがにうちゑみたまへるけしき、をしをなうすゞびたり）

ぴぢよ　ナ。美女。かほのうつくしきをんな。新猿楽（あふぎて、山の峰をみれば、美女ふたりありて）

ひちら　ナ。餅䭔。もちひのたぐひ。からくだもののところ見合すべし。和名（餅䭔字亦作餅、俗云比知良、餅名也）

ひちりき　ナ。篳篥。樂器の名。たてにふくちひさきふえ。枕草子九（篳篥は、いとかしがましう、秋の虫をいはば、くつわむしなどに似て）和名（篳篥、俗云比知利岐）

ひぢりこ　ナ。泥。どろに同じ。和名（泥、和名比知利古）

ひぢりめん　ナ。緋縮緬。ちりめんの、あかくそめたるもの。

ひぢをる　ワ。ヒトリ。四。肘折。ひぢまげる。保高女集（ひぢをりて、ゆかれんものか、春山の、ほきぢのまくら、いまさかりなり）枕草子九（人の家につきづきしきもの云々、てうし、中のばん、ひらふさ、ひぢをりさるらう）

ひつ　ナ。弼。彈正臺の次官にて、大弼、少弼といふ大少の二弼あり。すけのところを見合すべし。

ひつ　ナ。櫃。てうどなどをいるゝおほきなるはこ。更科（何をか奉らん云々、ゆゝしくしたまふなるものをたてまつらんとて、源氏の五十餘卷、ひつにいりながら）和名（櫃和名、比都、俗有長櫃、韓櫃、折櫃、小櫃等之名　似厨向上開闔器也）

ひづ　ナ。氷頭。さけのかしらにあるほねにて、やはらかにして、すきとほりて、こほりのごとくなるもの。和名（氷頭、本朝式云、年魚氷頭背腸、年魚者鮭魚也、氷頭者比豆也）

ひづ　ワ。ヒトリ。カニ。沾。ぬる。ひさる。みづにつかる。万十（さきもこが、これをおくると、まろくらの、袖漬までは、なきしおもほゆ）拾遺（小男鹿の、つめさへひぢぬ、山川の、あさましきまで、とむきみかな）

ひづ　ワ。カケ。シニ。漬。ぬらす。ひさす。みづにつく。土佐（天雲の、遥なりつる、桂川、袖をひでても、渡りぬる哉）

ひづ　ワ。ヒトリ。シニ。秀。ぬけいづ。すぐれてあり。

ひつい　ナ。筆意。ふでづかひのおもむき。

ひついで　ナ。日次。ひなみに同じ。狭衣四（とみまれ、ひついでもよろしからず侍りしかば）榮花御裳（三日はおはしますべけれども、ひついでのあしければ）

ひつえう　ナ。必要。もちひずてはならぬことをいふ。

ひつか　ナ。筆架。ふでをのせおくもの。

ひつかう　ナ。筆耕。あたひをとりてかくかきもの。

ひつかがみ　ナ。引屈。よぼろ。ひざかしらのうしろ。

ひつき　ナ。筆記。かきしるし。かきもの。かきつけ。

ひつぎ　ナ。日嗣。あまつひつぎに同じ。新千（天原、あけし岩戸の、神路山、ひつぎ絶えせぬ、世はこそありけれ）続紀二十（皇太子定賜比豆、天日嗣高御座乃坐爾昇賜）

ひつぎ　ナ。日次。みつぎ。ひごとにたてまつるもの。拾遺（とゞこほる、ときもあらじな、近江なる、おものの濱の、あまのひつぎは）新後撰（みちのべの、山田のみしめ、ひきかへて、ながきひつぎの、早苗とるなり）

ひつぎ　ナ。棺。ひとき。かばねをおさめてはうぶるをけ。榮花楚王（ひつぎにいれたてまつりて、ふさがさめなどしたてまつるほどに、おもひやるべし）

ひつき　ナ。蟾蜍。あをがへるをいふ。陸奥などにて、

ひつぎのみこ　ナ。日嗣御子。はるのみや。とうぐう。続紀詔（皇太子定賜比豆、天日嗣高御座乃坐爾昇賜）

ひつぎめ　ナ。玉門。つび。つびさり。催馬楽（くぼの名をば、なにとかいふ云々、ひのなの、ひつぎめ）

ひつきやう　ソ。畢竟。つひまれ。つまるところ。

ひつく　ワ。ヒトリ。四。粘付。ねばりつく。からびつく。

ぴつくりす　ワ。ヒトリ。カ。喫驚。おどろく。たまげる。

ひつくるめて　ソ。一括。ひとつにとりまとめて。

ひつけ　ナ。火付。やくたりに、ひをつくるをいふ。

ひつけ　ナ。日付。その事のありしひをしるすをいふ。

ぴつこ　ナ。跛者。あしなへをいふ。東國などにて。

ひつこし　ナ。引越。ところがへ。やうつり。いへうつり。

ひつさぐ　ワ。カケ。シニ。提。ひきさぐに同じ。

ひつさん　ナ。筆算。やうふさん。また、ふでとそろばんと。

ひつさらふ　ワ。カケ。四。引攫。つかみとる。うばひとる。

ひつじ　ナ。羊。獸の名。かたち、鹿のごとく、また、馬に似てちひさし。頭に、角あるもの、角なきものありて、そのたぐひおほし。和名（羊羝、一名羝、和名比豆之羊也）

ひつじ　ナ。未。ひよみの名。うまのつぎにあたるもの。また、ひるのやつどき。千載（けふもまた、うまの貝こそ、ふきつなれ、ひつじのあゆみ、ちかづきぬらん）

ひつじぐさ　ナ。羊草。草の名。葉は槐のごとく、また、すこし、山茶の葉にも似て、夏のそじめ、薄紫なる花をひらく。この根は、常に、藥にもちふるものなり。和名（白鮮、一名羊蘚、和名比豆之久佐、氣似羊膻、故以名之）

ひつじさる　ナ。未申。にしとみなみとのあひだ。宇輪八（ひつじさるのかたに、山あり。その山に、雲たなびきたる所をゆきてたづねよとおほせあるとみて）

ひつしき　ソ。必死。ちからのかぎり。まにものぐるひに。

ひつじのあゆみ　ナ。羊歩。ほふらるゝにちかづくをいふ。仏家にていふことばなり。新古（極楽へ、まだわがこゝろ、ゆきつかず、ひつじのあゆみ、しばしとゞまれ）狭衣二（常よりもいとなやましくくれゆくを、ひつじのあゆみのこゝちして、まづはものこゝろぼそく）摩耶経（偈云、譬如旃陀羅駆羊就屠所、歩々近死地、人命復過是）

ひつしぼく　ナ。筆紙墨。ふでとかみとすみと。

ひつしや　ナ。筆者。かきて。ふでをとりたるひと。

ひつせい　ナ。筆勢。ふでづかひ。ふでのいきほひ。

ひつせき　ナ。筆跡。ふでのあと。十訓五（五郎中将の、後もたのまんとよめる歌の詞もおかしく、周防内侍が、われさへのきのとかきつける筆跡もゆかし）

ひつせん　ナ。筆洗。ふであらひに同じ。

ひつそく　ナ。逼塞。おひこめ。おちぶれ。

ひつそりと　ソ。悄然。ものさびしく。

ひつたくる　ワ。カケ。四。引攫。うばひとる。奪ひてとる。

ひつだん　ナ。筆談。ふでにてのはなし。たがひに、さしむかひゐて、ものごとを、もじにかきてかたらふをいふ。

ひつたれ　ナ。[illegible]。ひざれ。あぶらじりを見るべし。

ひつぢ　ナ。穭。おろかおひに同じ。古今（かれる田に、おふるひつぢの、穂にいでぬは、世をいまさらに、あきてぬとか）和名（穭於路賀於比、俗云比豆知、自生稲也）

ひつぢいね　ナ。穭。おろかおひ。堀川百首（十代田の、早田かりての、穭稲の、いまさら〳〵に、秋とみゆらん）

ひつぢぼ　ナ。穭穂。ひつぢのほ。続拾（たうもて、おふるな山田の、ひつぢほは、君まもらねど、かる人もなし）

ひつぢやう　ソ。必定。かならず。さだめて。たしかに。

ひつつ　ナ。火筒。てつぱう。唐銅などにて、筒のごとくつくりたるものにて、丸をこめ、焔硝をいれてうちいだすもの。ちひさきもの、おほきなるもの、みじかきもの、ながきものなど、そのたぐひさま〴〵あり。

ひづつ　ワ。ヒトリ。カニ。漬。ひたる。みづにつかる。万二（朝露に、玉藻は漬打、夕霧に、ころもはぬれて）

ひつつく　ワ。ヒトリ。四。引着。つく。ねぢりてつく。

ひつつく　ワ。カケ。シニ。引着。つらしむ。ねぢりてつらしむ。

ひつてい　サ。用度のむさくろしきをいふ。[illegible]にて、

ひつてき　ナ。匹敵。あひてとなるをいふ。

ひつとう　ナ。筆頭。ふでさき。ふでがしら。

ひつぞく　ナ。逼迫。せまれるをいふ。[illegible]なれるをいふ。

ひつぽふ　ナ。筆法。ふでづかひ。もじなどのかきざま。

ひつぱる　ワ。カケ。四。引張。ひきはるに同じ。

ひづめ　ナ。蹄。うし、うまなどの、あしのつめの、まろくひらみたるをいふ。和名（蹄、玉篇云蹄、比豆米、牛馬蹄也）

ひつよう　ナ。必用。もちひずてはならぬことをいふ。

ひづら　ナ。[illegible]。ひちら。もちひのたぐひ。

びづら　ナ。鬟。みづら。びんづら。あげまき。童部の髪のさまなり。源[illegible]（御即位に、大将殿にてまゐらせ給へるほど、御びづらゆはせたまへるほど、いみじううつくしきものの、めでたくおぼします）

ひつりよく　ナ。筆力。ふでのちから。ふでの[illegible]。

ひてん　ナ。飛天。てんにん。てんによ。父子相迎（香風ふきて、楽をなせば、飛天、たもとをひるがへしてまふ）

ひでん　ナ。秘伝。つたへの、たいせつにひめさるもの。

ひでんじ　ナ。悲田寺。ものもらひをいふ。京都にて、

ひでんゐん　ナ。悲田院。せやくゐんを見るべし。

ひでり　ナ。旱。ひのてりつゞきて、あめのふらぬをいふ。

ひでりあめ　ナ。日照雨。あまぐももなくてふるこさめ。

ひでりぐさ　ナ。日照草。いちそうをいふ。伊豆、駿河にて、

ひでりぐも　ナ。旱雲。ひでりのしるしのくも。

ひでりのかみ　ナ。旱神。かんむつのかみ。ひのみてらして、あめをふらせぬかみ。和名（魃和名比天利乃加美旱神也）

ひと　ナ。人。にんげん。いきもののなかの、きはめてすぐれたるもの。ものをいひ、ものをおもひ、きみはつかへ、おやにはつかふるなどの、よろづのみちをまもるもの。後撰（ひとのおやの、こゝろはやみに、あらねども、子をおもふみちに、まどひぬるかな）

ひと　ナ。人。をうと。をつと。をとこ。義経記二（女申しけるは云々、うちさまひつれども、人のおもしまさぬあとにとめまゐらせては、御てとてのすゝるもまいぞく侍れば、かなはじと申しつれども）

ひと　ナ。人。されならぬをいふ。[illegible]ならぬをいふ。後撰（さがためにこそ、きにくかりし、もしぞるの、ひとの手にわりと、きゝいれまをりし）大和（かの男、ひとの国の守になりてくだりければ）

ひと　ナ。一。ひとつ。かずのはじまり。

ひとあし　ナ。人足。ひとのゆきゝ。ひとのゆきかひ。

ひとあれ　ナ。一荒。ひとさびのあれ。夫木八十（ひとあれの、風より後れ、あづまりて、竹の葉あらむ、夕暮の空）

ひとい　ナ。一睡。ひとねむり。貫之集（などさめて、ひといさまね、月影は、山時鳥、なきもゆらなん）

ひどい　サ。甚。ひどし。きびし。むごし。

ひといだき　ナ。一抱。ふたつのてをひろげていだくぐらゐのおほきさ。宇拾九（河上より、頭ひといだきばかりなる大蛇の、目は、かなまりをいれたる様にて）

ひといへ　ナ。一家。いへのうちのこらず。宇拾十（架せらるゝ使ぞとこゝろえて、ひといへなきのゝしる）

ひとうち　ナ。一撃。ひとたびうつをいふ。

ひとうとし　サ。ヒ。人疎。ひとはうとし。ひとはあらしますす。ひとげとほし。源蓬生（この姫君は、かくひとうとき御くせなれば、むつまじくもいひよひたまはず）

ひとえり　ナ。人選。ひとのえらび。源胡蝶（かやうはやむごとなき人なれば、ひとえりしていらへなどはせさせよ云々、そのとがはしもあらぬ事なり）

ひとおと　ナ。人音。ひとのおとなひ。源花宴（ひとすくななるけはひなり。奥のくるゝどもあきて、人音もせず）

ひとか　ナ。人香。ひとのかをり。源竹川（こうちぎかさなりたるほそながの、ひとがなつかしうしみたるを）

ひとかかへ　ナ。一抱。ひといだきに同じ。

ひとがき　ナ。人垣。ひとの、かきのごとくたちならべるをいふ。大神宮儀式帳（人垣立旦、衣垣与弖、蓋、刺羽等捧旦）

ひとかげ　テ。人影。ひとのかげ。堀川次郎（葎そひ、よもぎが杣と、あれはてて、ふりにし里に、人影もせず）

ひとかき　ソ。一搔。ひときは。ひとしほ。いまいちだん。

ひとがしら　ナ。髑髏。どくろ。されかうべのところ見るべし。和名（髑髏俗云比止加之良頭骨也）

ひとかず　ナ。人数。ひとのかず。源玉鬘（右近は、何のひとかずならねど、なほ、そのかたみとみたまひて）

ひとがた　ナ。人形。ひとのかたち。にんぎやう。また、形代とて、禊祓のとき、罪穢をおほせてながすものをいふ。夫木九（身にすてて、ひとがたとなす、思ふ事を、何はすがぬく、みそぎなるらん）和名（偶人云々、土偶人、木偶人俗云人形、野王按、凡物謂人俗、並曰偶人也）

ひとがたき　ナ。人敵。あだ。かたきとなるひと。源花宴（梅壺をおきて、この女御の居たまはんを、世人いかにといひおもふべからんを、ひとがたきはあらぬこそよけれなど、おぼしつゝすぐしたまへれ）

ひとかたな　ナ。一刀。ひとうちにてきるをいふ。

ひとかたならず　ソ。不一方。かず〳〵に。さま〳〵に。源夕顔（ひとかたならず心あわたゞしくて、今一度はえあるまじきことゝ、小君をかたらひたまへど）

ひとかたまり　ナ。一塊。ひとつのかたまり。

ひとかど　ナ。一廉。ひとつのかど。ひとつのふし。

ひとかどひ　ナ。人勾引。ひとをかどふもの。ひとをぬすみてつれいだすもの。尺素往来（山賊海賊勾引）

ひとがはり　ナ。人代。ひとのかはり。空穂[illegible]（宮、あやしのひとがはりや云々などきこえことのたまひぬ）

ひとかひ　ナ。人買。ひとをかどかしいだすぬすびと。

ひとがほ　ナ。人顔。ひとのかほ。ひとのすがた。

ひとがまし　サ。ブ。人のごとくあり。ひとはあらるゝやうりはあり。[illegible]（いさや、世の中は、すこし、ひとはあられ、ひとがましき名付などは）

ひとがら　ナ。人柄。ひとのさま。源空蝉（空蝉の、身をかへてける、木の本は、なほひとがらの、なつかしきかな）

ひとき　ナ。一寸。うまのたけをはかるにいふことば。きを見るべし。夫木卅（ゆきやらで、ゆきのをぐらき、みつるのは、ひときばかりの、駒はまかせて）

ひとぎ　ナ。粢。ひつぎ。和名（粢和名比止岐所以盛[illegible]也）

ひときき　ナ。人聞。ひとのきこえ。竹取（たゞはやみなるよりも、ひときゝはづかしくおぼえたまふなり）

ひときは　ソ。一際。ひときざ。ひとしほ。源宿木（こゝろにまかせて、ひときは、人目をおどろかして）

ひときだ　ナ。一段。たかがりにもちふるときの、いぬをかぞふることば。下文を見るべし。貞丈雑記（鷹は、一羽、二羽、一連、二連といふ。鷹の犬は、一疋、二疋

とへいはず。一秀、二秀といふ）

ひとをり　ナ。一段。ひとつのふし。ひとつのきざみ。

ひときりやう　ナ。一器量。ひとかどのきりやう。

ひとぎれ　ナ。人切。ひとあしのたゆるをいふ。

ひとくさ　ナ。一種。ひとつのたね。ひとつのいろ。空穂開巻（いなや、今ひとくさをとのさまへバ、まろきあそせのむま、ひとくさねをぬぎてたてまつりて）

ひとくさ　ナ。人草。おほくたから。おほみたから。あをひとぐさ。和名（人民、日本紀云和名比止久佐一云於保太加良）

ひとくさもの　ナ。一種物。いつすもの。ひとくさのもの。ひとくさのさかな。輔親卿集（おなじころ、蔵人所のひと〴〵、ひとくさものして発れといへるに）

ひとくせ　ナ。一癖。ひとつのくせ。ひとつのみるところ。

ひとくち　ナ。一口。ひとつのくち。まさ、物をくちにいれて、一度にくふをいふ。伊勢（夜もあけなんと思ひつゝ居たりけるに、鬼、はや、一口にくひてけり）

ひとぐち　ナ。人口。ひとのことば。ひとのうはさ。

ひとくき　リ。人来。うぐひすのなくこゑにいふことば。大和（よもぎおひて、あれたるやどを、うぐひすの、ひとくとなくや、たれとかまたん）

ひとぐに　ナ。他國。ほかのひとのくに。よそのひとのくに。万十（比等久爾に、すみあしとぞいふ、すむやけく、はやかへりませ、こひしなぬとに）

ひとくにやま　ナ。人國山。山の名。紀伊國の牟婁の郡にあり。万七（みれどあかぬ、人國山の、木の葉をぞ、おのがこころに、なつかしくおもふ）

ひとぐま　ナ。人隈。ひとのゐぬところ。紫式部日記（たれも、とりもつしてハかくれなけれど、ひとぐまをもよういするにかくれてぞ侍るかし）

ひとぐみ　ナ。一組。ひとつのくみ。ひとつのなかま。

ひとくるめに　ツ。一括。ひとつにくゝりて。ひとつにとりあつめて。後京極摂三百首（とやまの、ひとげをいさく、きらひなく、くらくかてへる、ならひとぞまれ）

ひとげ　ナ。人氣。ひとのけ。ひとのけはひ。ひとのいきざし。空穂楼上（ひさしに居さぶらふひと〴〵、せばくて、ひとげはあつかはしくおぼえたまへる）

ひとけい　ナ。日時計。ひのかげにて、ときをしるとけい。

ひとげなし　サ。ヒ。無人氣。ひと〴〵しくなし。ひとがましくなし。枕草三（人をも、ひとげなう、世のおぼえ、あなづらはしうなりそめはさるをバそしりやハする）

ひとごこち　ナ。人心地。ひとのこゝち。もとのこゝち。源松風（など、もろともはいでてハそしみたまはぬ。さらバこそ、ひとごゝちもせめとのたまへど）

ひとごころ　ナ。人心。ひとのこゝろ。夫木廿一（ひとごゝろ、車なくさく、道なれバ、誰かうき世を、やすくすぐべき）

ひとごと　ナ。人言。ひとのことば。万廿（人言を、しげみこちたみ、おのが世に、いまだわたらぬ、朝川わたる）

ひとごとぬし　ナ。一言主神。あぢすきたかひこねに同じ。猶宴歌（御かりする、きみかへるとて、久米川に、比度古止奴之ぞ、いでませりける）

ひとごのかみ　ナ。首長。むれのをさ。神武紀（魁帥）

ひとごみ　ナ。人込。ひとのたちこみたるところ。

ひとごろし　ナ。人殺。ひとを、ゆゑなくころすをいふ。

ひとごゑ　ナ。人聲。ひとのこゑ。濱松三（さゞやかなるまんでんざうものこそ、北の對にや、ひとつあれど、いみじうあれまどひて、ひとごゑもせず）

ひとさかり　ナ。一盛。ひとたびのさかり。古今（いざ櫻、われもちりなん、一盛、ありなバ人に、うきめみえなん）

ひとさし　ナ。一差。ひとたび。相撲などにいふことぞ。十訓二（手合ハさのみこそさぶれ、勝負ハ、これによるべからず。ひとさし、ふたさしつかうまつるべしといひて、かくれのかたへたちよりて）

ひとさしぐさ　ナ。人刺草。草の名。いらに同じ。

ひとさしのおよび　ナ。人差指。ての、おやゆびのとなりのゆび。和名（食指　幽氏論語抄云、頭指、比止佐之乃指（第二指也））

ひとさしゆび　ナ。人差指。ひとさしのおよびに同じ。

ひとざと　ナ。人里。ひとのすみてゐるさと。

ひとざま　ナ。人様。ひとのさま。竹取（いつでゝいなび申さん。人様も、よき人におはすなどいひ居たり）

ひとし　サ。ブ。均。等。おなじほどなり。これかれひとつなるごとし。伊勢（思ふこと、いはでぞたゞに、やみぬべき、われとひとしき、ひとしなければ）狹衣三（かきさま

へ、うらうへかみしもひとしうて）

ひどし　サ。ヒ。甚。酷。きびし。つよし。むなむごし。

ひとしきり　ソ。一頻。ひとさかり。ひとたびまさりて。まさらくときめきて。万代（ふかき夜に、まづひとしきり、聲たてて、木綿着鳥ハ、まさねしてけり）

ひとじち　ナ。人質。ひとを、まちのごとくにしてとりおくをいふ。信長記六（人質をさしいだし、赤手をすつて、降参せらるゝ間、さらバとてゆるしたまひけり）

ひとしづまる　ワ。ヒトリ。四。人靜。ひといねてしづかになる。源少女（寐たまひぬるやうなれど、こころもそらにて、人しづまるほどに、中障子をひけど）

ひとしなみに　ソ。等並。つねのもののなみに。よろづおろそかに。和泉式部物語（きみをこそ、すゑの松とれ、おもひつれ、ひとしなみには、誰かこゆべき）

ひとしに　ナ。人死。ひとのしに。非命につきていふ。

ひとしほ　ナ。一入。ひとそめ。しほとハ、染汁にいるゝかずをいふ。古今（ときはなる、松のみどりも、はるくれバ、いまひとしほの、いろまさりけり）

ひとしほ　ソ。一入。ひときは。ひとくさ。いきいちざん。

ひとしむ　ワ。カグ。シニ。等。ひとしくなす。撰集抄八（まのるうへハ、なにしても、後世の歌にハひとしむべき）

ひとずくな　ナ。人少。ひとかずのすくなきをいふ。大和一（いとおそれに、夜ふけて、ひとずくなにてものしたまふなどいひて、いとひさしうなりければ）

ひとすぢに　ソ。一筋。ひとむきに。玉葉（一筋に、風のつらさは、なさじとや、のどかなる日も、花の散らん）

ひとせせり　ナ。人を、いさゝかはせせりするなどをいふ。見聞州（ひとせゝりして、くちきゝて、おとなのごとく、茶ハのみて、人にはよりそひ、よりかゝり）

ひとせまち　ナ。一畝町。せまきところ。田畑にいふ詞にて、三十坪ばかりのひろさ。拾玉（山里の、外面の小田の、ひとせまち、あらしめそへて、たねまきにけり）

ひとぞう　ナ。一族。いちぞく。源榊（今ハ、いとゞ、いちぞうのみ、かへす〴〵さかえたまふ事かぎりなし）

ひとそぢ　チ。一千。をな。撰集抄九（ほのつたへうけたまはるは、この御誦経の旋主ハ、御とし ひとそぢあまりとかや、いつしく、内外の才智いまして）

ひとたがへ　ナ。人違。さすひとの、そのひとならぬをいふ。源蓬生（よくたづねよりてを、うちいでよ。ひとたがへしてハをこならんとのたまふ）

ひとだち　ナ。人立。ひとのたちこみたるをいふ。

ひとだつ　ラ。ヒトリ。四。人立。ひと〴〵しくなる。ひとゝなる。源玉鬘（さてひとだちたまひなバ、おとゞの君もたづねきこえたまひなん）

ひとだね　ナ。人種。ひとのたね。落窪一（只今いできなんものをとてひきよすれバ、おどろきうまのやうに、手なふれたまひそ、ひとだねのたえたるぞかし）

ひとだのみ　ナ。人頼。ひとのちからをかるをいふ。

ひとだのめ　ナ。人頼。ひとの、たのみにおもはしむるをいふ。古今（かつこえて、わかれもゆくか、あふさかハ、ひとだのめなる、名にこそありけれ）

ひとだま　ナ。人魂。おにび。ひとの、そらをとぶもの。万廿一（人魂の、さをなる君が、たゞひとり、あへりし雨夜ハ、久しとおもほゆ）更科（この暁に、いみじくおほきなるひとだまのたちて、京様へなん来ぬるとかたれど）

ひとだまひ　ナ。副車。そへぐるま。ともびとにのらするくるま。枕草九（所もなくたちかさなりたるに、よき所の御車、ひとだまひひきつゞきておほくくるを、いづくにたゝんとみる程に）和名（副車　曽閑久流萬、俗云比度大萬比（後乗也））

ひとたまりもせず　ソ。暫くもさゝへず。太平記十（高名のてねうま出來けり。葉緒久をめしてのせられたりけるに、ひとたまりもせずはねおとされけるを）

ひとちがへ　ナ。人違。ひとたがへに同じ。

ひとつ　ナ。一。かずのはじまり。まさ、それのみにて、そのものなきをいふ。後拾（君こふる、心ハちゞに、くだくれど、ひとつもうせぬ、ものにぞありける）

ひとつ　ナ。一。おなじ。かたりなし。與風集（うすくこく、色ハまがへど、花といへバ、ひとつかほにも、みえもせるかな）源榊（まさなく、かしづく、ひとつむすめを、このみの、坊にておもするにハたてまつらで）

ひとつあゆ　ナ。東風。あゆのかぜをいふ。北國にて

ひとつがき　ナ。一書。ひとつのかきもの。まさ、ひとつゞつ

〻をけてかくかきもの。狭衣四（かれはぞくしとうめきつるな、これは、あやめふきふべきにもあらず。嫗のひとつぎなれば、ちらさじとてとのたまふ）

ひとつかね　ナ。一束。ひとつにとりつかねるをいふ。

ひとつかひ　ナ。人使。ひとのつかひ。著聞十（囲碁をうつとき、うちまかせてはこゝろづきなるべきに、ところぐ、ひとづかひをもちらして判ぜさせけるこそ罪ゆるさるゝほどの数寄にて侍れ）

ひとつき　ナ。人付。ひとに、よくなるしむをいふ。

ひとつきあひ　ナ。交際。ひととひととのまじはり。

ひとつきおき　ナ。隔月。かくげつ。ひとつきまぜ。

ひとつきまぜ　ナ。隔月。ものごとをするに、つきごとにせずて、ひとつきづゝをへだててするをいふ。

ひとつくちに　ソ。一口。おなじことをに。落窪四（おもしろの駒を、ひとつくちにいふべきにあらず）

ひとつこ　ナ。一子。ひとりご。万九（秋萩を、妻とふ鹿こそ、一子ふたつこ、もたりといへ、かこじもの、わがひとりごの、草枕、旅にしゆけば、竹珠を、しゞにぬきたれ）

ひとつすまゐ　ナ。同居。あひずみに同じ。

ひとつて　ナ。人傳。ひとのつたへ。ひとのうはさ。

ひとつね　ナ。同寢。おなじふしどに、ともにふすをいふ。

ひとつのほし　ナ。一星。ほくしんをいふ。上總などにて、

ひとつば　ナ。石葦。草の名。いそのかみに同じ。

ひとつばし　ナ。一橋。まるきばし。一本の木をうちわたしてかけるはし。六帖（津の國の、なにその浦のひとつはし、きみをしみれば、あやふくもせず）和名（獨梁和名比度豆波之、今按、只、縦横一木之梁也）

ひとつびる　ナ。獨子蒜。野菜の名。ひるの一種。にんにくに同じ。和名（獨子蒜和名比止豆比流、一云獨子蒜）

ひとつま　ナ。人妻。ひとのつま。わがつまならぬつま。万九（をとめをとこの、ゆきつどひ、かゞふかゞひに、他妻に、我もまじらん、わが妻に、人もこととへ）

ひとつまつ　ナ。一松。ひとつおひなるまつ。古事記（尾張に、たゞにむかへる、尾津のさきなる、比登都麻都、あせを、比登都麻都、ひとにありせば、太刀はけましを、きぬきせましを、比登都麻都、あせを）

ひとつまみ　ナ。一撮。ひとつのてにてつまむなり。

ひとつむしろ　ナ。一席。おなじむしろ。おなじところ。

ひとつむすめ　ナ。一娘。ひとりむすめ。源、榊（致仕のおとゞも、またなくかしづくひとつむすめを、このかみの坊にておはするにたてまつらで）

ひとつもの　ナ。一物。ひとつのもの。かはらぬもの。源、末摘花（夢のこゝちしてみたてまつるにも、涙のみとゞまらねば、ひとつものとぞみえざりける）

ひとつや　ナ。一屋。さとをはなれてひとつあるいへ。

ひとつれ　ナ。一連。ひとつのつれ。夫木廿（ひとつれは、裾野にいでて、小倉山、峰にものこる、さをしかの聲）

ひとづゑ　ナ。人杖。ひとをさしあげて、つゑのごとくとりなすをいふなるべし。宇拾三（尻けつる相撲なども、ひとづゑにつかひてなげくだくめり）

ひとて　ナ。一手。ひとり。ひとりのて。

ひとで　ナ。人手。ひとのちから。ひとのたすけ。

ひとで　ナ。穭。ひつぢをいふ。越前などにて、

ひとで　ナ。人出。ひとのいでてつどふをいふ。

ひとてらふ　ワ。ヒトリ四。人衒。てらふといふに同じ。雄略紀（やまのめの、小島子ゆゑに、比登涅羅賦、うまのやつきは、をしけくもなし）

ひととき　ナ。一時。しばらく。古今（秋の野に、なまめきたてる、をみなへし、あなかしがまし、花もひとゝき）

ひととせ　ナ。一年。あるとし。また、としのかずひとつ。伊勢（百年に、一年たらぬ、つくもがみ、われをこふらし、おもかげにみゆ）源、桐壺（十二にて元服したまふ云々、ひとゝせの春宮の御元服、南殿にてありし儀式の、よそほしかりし御ひゞきにおとさせたまはず）

ひととせ　ソ。一年。あるとしに。すぎしとしに。

ひととせまぜ　ナ。隔年。ものごとをするに、としごとにせずして、ひとゝせづゝをへだててするをいふ。

ひととなり　ナ。爲人。ひとのうまれつき。神代紀（質性）

ひととなる　ワ。ヒトリ四。成人。おとなになる。万五（いつしかも、比等々奈理いでて、あしけくも、よけくもみんと、おほぶねの、おもひたのむに）源、夕顔（ひととなりて後は、かぎりあれば、あさゆふにしもえみたてまつらず）

ひととほり　ナ。一通。おほよそ。よのつねのなみ。

ひととほり　ソ。一通。おほよそに。あらまし。ひとゝをり。

ひとどほり　ナ。人通。ひとのゆきゝ。ひとのかよひ。

ひとどり　ナ。人取。うはばみのたぐひの、ひとをとりてくらふもの。著聞廿（水無瀬山の奥に、ふるき池あり。水鳥おほく居たり。くざんの鳥を、人とらんとしければ、この池に、ひとゝりありて、おほく、人とりにけり）

ひとなか　ナ。人中。あまたのひとのなか。新六（夢あけき、世の人中を、逃れても、春は霞に、たちまじりつゝ）

ひとながれ　ナ。一流。ひとつのながれ。また、いちもんなどのひとつのすぢ。続拾（谷川の、わがひとながれ、かきとめて、たえざりけりと、人にしらせん）

ひとなだれ　ナ。人頽。あつまりたるひとの、ひとゞまりになりてくづれちるをいふ。太平三（ひとなだれをつきて、人馬、いやがうへにおちかさなる）

ひとなぶり　ナ。人嬲。ひとを、もてあそびものにするをいふ。万廿（ますらをの、おほみやびとは、いまもかも、比等奈夫理のみ、このみたるらん）

ひとなみ　ナ。人並。ひとのなみ。万五（わくらばに、ひととはあるを、比等奈美に、あれもつくるを）

ひとなみなみに　ソ。人並々。ひとなみに。つねのひとのごとく。金葉（たなむらの、こけのころもを、いとはずば、ひとなみ〳〵に、かしもしてまし）

ひとならはし　ナ。人習。ひとのならはし。源、宿木（なべての世をば思ひめぐらし、ふるきなさけなきならひさまひにける。いとほしのひとならはしやとぞ）

ひとなる　ワ。ヒトリ。シニ。人馴。よなる。ひとにまじらふことになるゝをいふ。源、花宴（すこし、ひとなれたるこそやまじらんとおもふこそうしろめたけれ）

ひとにぎり　ナ。一握。ひとつのてにてにぎるなり。

ひとにくし　サ。ブ。人憎。こゝろにくしに同じ。今物語（この今きこゆる人、あひしためらひて、いとひとにくゝいうなるけしきにて、源氏のあさがほのまきのおくりれみじかるべきをとめり、あのびやかにこそふるを）

ひとにんげ　ナ。人和。ひとゝ、よくなるしまるゝをいふ。

ひとねむり　ナ。一睡。ひとい。ひとつゞきのねむり。

ひとの　ナ。厠。かはや。せつゐん。今物語（[illegible]ひどのへゆきたりけるに、屁をひりて、物もいはずなりけり）

ひとのひ　ナ。人日。むつきのなぬかのひをいふ。（ことよせ）

ひとのみかど　ナ。異朝。よそのくにのみかど。

ひとはいさ　ソ。人はいさ。後撰（人はいさ、我はなき名の、をしければ、むかしも今も、しらずとをいはん）

ひとばえ　ナ。人映。ちごなどの、ひとをみて、ほこりかにふるまふをいふなり。枕草九（ひとばえするもの、ことなる事なき人の子の、かなしくしならはされたる）

ひとはぐさ　ナ。一葉草。木の名。きりの異名。（草藺）

ひとはた　ソ。一杯。いつぱい。うつはにみつるなり。宇拾十五（ゆぶねに、湯をこまぐときりて、ひとはたいれて、それが上に、むしろをまきてありきまはりて）

ひとはだ　ナ。人膚。ひとのはだ。ひとのみのあたゝかさ。狭衣三（この猫は、あたゝめつけさせたまへらし。ひとはだにつくるよりいとのくさまるを）

ひとばなれ　ナ。人離。ひとのゐぬところ。ひとざとをはなれたるところ。夫木卅三（あさくるる、淺澤小野の、ひとばなれ、さびしくとほき、水のおとかな）

ひとばらひ　ナ。人拂。ひとをとほざくるをいふ。

ひとひ　ナ。一日。あるひ。また、ひのかずひとつ。貫之集（きみはあさて、ひとひふつかは、なりぬれば、けさはひこぼしの、こゝちこそすれ）源、紅葉賀（一日の源氏の御ゆふかげ、ゆゝしうおぼされて）

ひとひ　ソ。一日。あるひに。すぎしひに。源、若紫（あなかしこや、一日めし侍りしに云々、いとおそろしましつらんと、おどろきさわぎうちゑみつゝ）

ひとひおき　ナ。隔日。かくじつ。ひとひまぜ。

ひとびとし　サ。ブ。人々。ひとらし。ひとはあるらるゝむねのさあり。蜻蛉（たゞいまは、この大夫を、ひとゞしくてあらせさまへなどむかりを申しさまへ）

ひとひまぜ　ナ。隔日。かくじつ。ものごとをするに、ひごとにせずて、ひとひづゝをへだててするをいふ。方丈記（地震、二三十度ふらぬ日はなし云々、やうやうまどほになりて、ひとひまぜ、二三日に一度など、おほかた、そのなごり、三月ばかりや侍りけん）

ひとひめぐり　ナ。太白神。陰陽家にてまつる神なり。日毎に、方角をかへてめぐる神にて、その方角は、よろづの事に避くといふ。和名（太白神和名比止比米久利）

ひとふし　ナ。一節。ひとつのふし。ひとつのかど。源夕顔（むなきひとふしに、御心とまりて、いかなる人のすみかならんとは、御目とまりたまひけり）

ひとふで　ナ。一筆。おなじふで。また、すこしのかきもの。

ひとへ　ナ。一重。ひとつにてかさなりなきをいふ。

ひとへ　ナ。単衣。ひとへぎぬ。うらをつけぬきぬ。源若紫（御ぞつきも、そゞろさむげにおぼしたるを、らうたくおぼえて、ひとへばかりをおしくゝみて）

ひとへうめ　ナ。一重梅。襲の色目。ゆきのしたに同じ。

ひとへぎぬ　ナ。単衣。ひとへ。うらをつけぬきぬ。かざびらのたぐひをいふ。和名（単衣比止閉岐沼）

ひとへぐさ　ナ。一重草。ありのひふきの異名。（藻鹽草）

ひとへに　ツ。偏。ひたすら。古今（蝉の羽の、ひとへにうすき、夏衣、なればよりなん、ものにやはあらぬ）

ひとへばかま　ナ。単袴。うらをつけぬはかま。源夕顔（遣戸口に、黄なるすゞしのひとへばかまながく着なしたるわらはの、をかしげなるいで来てうちまねく）

ひとへもの　ナ。単物。ひとへぎぬに同じ。おきく物語（たけさむのかげより、ひとへものひとつ着たるもの、ほひぐさをぬきもちて来たり）

ひとぼしごろ　ナ。點燈頃。ひとぼしどきに同じ。

ひとぼしどき　ナ。點燈時。ともしびをともすころ。たそがれ。ゆふまぐれ。榮花夢王（ほどもほどならねど、さてひともしどきになりぬと申せど）

ひとま　ナ。人間。ひとのみぬあひだ。古今（くるとあくと、めかれぬものを、梅花、いつの人間に、移ひぬらん）

ひとまうけ　ナ。人設。ふねにのるひとなどをまうくるをいふ。宇拾十（かへりくだりけるに、淀にて、船にのりけるほどに、ひとまうけしたりければ）

ひとまかせに　ツ。任人。ひとにのみまかせて。

ひとまち　ナ。人待。ひとまうけ。ひとのまちあはせ。

ひとまづ　ツ。一先。ひとたびいまづ。このたびいまづ。

ひとまとめ　ナ。一纏。ひとつにつかねまとむるをいふ。

ひとまね　ナ。人真似。ひとのまね。古今（さむしろは、夏はひとまね、笹の葉の、さやぐ霜夜に、わが一人ぬる）

ひとまはり　ナ。一廻。ひゝすのなぬかのあひだ。

ひとまへ　ナ。人前。ひとのみきゝするところ。

ひとみ　ナ。眸。めのうちのくろきところ。めの、ものをみるところ。和名（眸和名比止美、一云瞳與眼同 目珠子也）

ひとみ　ナ。一身。みのうちのこらず。宇拾三（頭、鼻、むつで、とかげ、くちなはなどいでて、目、鼻ともいはず、一身にとりつきてさせども、嫗、いさゝかもおぼえず）

ひとみえ　ナ。人見。ひとめ。ひとのみるところ。源總角（ひとみえ、きさのこゝろむへをしらず。くせありて、にくきところ、つきさまへるひとなり）

ひとみごくう　ナ。人身御供。ひとを、いけにへにするをいふ。古、かゝる事もありしなり。いけにへを見るべし。

ひとみせ　ナ。人見。かざり。おもてむきのみのみえ。

ひとみち　ナ。一道。ひとすぢのみち。また、よみぢをいふ。

ひとみな　ナ。人皆。すべてのひと。拾玉（いつく我くるしき海に、あづみゆき、人みなすくふ、網をおろさん）

ひとむかし　ナ。一昔。ひとつのむかし。また、常に、十年、十七年などを、一昔といふ。山家集（吉野山、ほきぢづたひに、たづねいりて、花みし春は、ひとむかしかも）

ひとむきに　ツ。一向。ひたすらに。ひとすぢに。

ひとむれ　ナ。一群。ひとつのむれ。ひとつのくみ。

ひとめ　ナ。人目。ひとのみるところ。源花散里（ひとめなく、志づかにておはするありさまをみたまふも）

ひとめ　ナ。一目。めのうちのこらず。源須磨（女君、なみだな、一目うけてみおこせたまへるいと志のびがたし）

ひとめ　ツ。一目。ひとつらに。古今（ひとめみし、君もやくると、さくらばな、けふはまちみて、ちらばちらなん）

ひとめかし　サフ。人のごとし。ひとは志らるゝむかりにあり。源槇柱（この世のひとめかしき方はかけもなれさまひぬれば、さまぐ＼に、あらずおぼさるれど）

ひとめかす　ワ。人のごとくあらしむ。ひとは志らるゝむくりのさまなす。枕草三（うざとりさせて、ひとめかすべきにもあらぬさまなれど、かまづの花ちうるげなり。名ぞうるてげなる）

ひとめく　ワ。人のごとくあり。ひとは志らるゝむくりにあり。源夕顔（はなの名は、ひとめきて、かうあやしきかきねにさき侍りけりと申す）

ひとめぐり　ナ。一周。ひとたびのめぐり。また、ひとのうせてのち、ひとせをへて、またそのときになるをいふ。續千（前大納言公氏みまかりて、卯月のころ、ひとめぐりにあたり侍りけるに、津守國助おとづれて）

ひともじ　ナ。葱。野菜の名。葉は、荷のごとく、内うつろにて、ほはちなき所まろし。夏の初、まろくあをぞみる花の、苞はいりゐるもの、葉の末につく。常に、根のまろき所を、食物とする故に、ねぎともいふ。かをりくさし。七一職人歌合（ひともじうり、紅葉せで、秋もちえぎの、うつぼとき、露なき玉と、みゆる月影）

ひともしごろ　ナ。點燈頃。ひとぼしどきに同じ。

ひともしどき　ナ。點燈時。ひとぼしどきに同じ。

ひとや　ナ。獄。つみびとをとらへていれおくところ。宇拾二（いみじき悪人にて、ひとやに、七度ぞいりたりける）和名（獄和名比止夜 罪人所居也）

ひとやのつかさ　ナ。囚獄司。刑部省の被官にて、正、佑、令史などの官人あり。すべての罪人の事をとりあつかふところなり。和名（囚獄司比止夜乃官）

ひとやり　ナ。人遣。ひとおくり。ひとをつかひ。ひとづかひ。また、ひとの、これは、ものせさするをいふ。新六五（月影は、まさよふりしと、やすらへば、早ひとやりの、あれなくたり）古今（ひとやりの、道ならなくに、おほかたは、いきうしといひて、いざかへりなん）

ひとやりならず　ツ。人遣にあらず。ひとのせさするにあらず。わがこゝろより。千載（世は志らぬ、秋のわかれに、うちそへて、ひとやりならず、ものぞかなしき）

ひとよ　ナ。一夜。ある夜。また、よのかずのひとつ。

ひとよぎり　ナ。一節切。笛の名。尺八のごとくにてみじかきもの。竹の節を、ひとつこめたる故にかくいふ。

ひとよぐさ　ナ。一夜草。すみれの異名。（藻鹽草）

ひとよざけ　ナ。一夜酒。あまざけに同じ。

ひとよせ　ナ。人寄。ひとを、ひとところによするをいふ。

ひとよづま　ナ。一夜妻。ひとよのみのつま。うかれめのたぐひ。神樂歌（にはとりは、かけろとなきぬなり、おきよく、わがひとよづま、ひともこそみれ）

ひとよませ　ナ。隔夜。ものごとをするに、よごとにせずて、ひとよづゝをへだててするをいふ。

ひとより　ナ。一回。ひとたび。夫木卅（くれぬとて、初鳥屋田の、ましどろを、ひとよりいかゞ、あそせざるべき）

ひとらし　サフ。人のごとし。ひとめかし。

ひとり　ナ。薪爐。かうろ。たきものをたくひいれ。新六五（おもふこと、ふところふかき、たきものの、ひとりのけぶり、ゆくかたやなき）和名（薪爐和名比度利）

ひとり　ナ。一人。ひとつのひと。ともなくてあるひと。宇拾（父もなく、母もなく、妻もなく、子もなくたゞひとりあるあなぶらひあり）

ひとり　ツ。獨。それのみにて。ともなくて。さるはなれて。後拾（みんといひし、ひとはかなく、きえにしを、ひとりつゆけき、あきの花かな）

ひとり　ナ。日取。ひえり。そのひをさだむるをいふ。

ひとりあんま　ナ。獨按摩。みづからするあんま。あるひはまろび、あるひはおくるなど、さまぐ＼の志さあり。

ひとりあるき　ナ。獨行。ともなくしてあるくをいふ。

ひとりうど　ナ。孤獨。ひとりのひと。ひとりもの。

ひとりぎめ　ナ。獨斷。それひとりにてさだむるをいふ。

ひとりぐさ　ナ。日取草。灌木の名。つゝじの異名。（藻鹽草）

ひとりご　ナ。一子。ひとりのみのこ。万六（ことゝはぬ、木すら妹と背、有とふを、たゞ獨子に、あるが苦しさ）

ひとりごつ　ワ。獨語。きくひともなきに、ひとりかたるをいふ。落窪一（おとしの御手やとひとりごち居たれど、かひなげなる御けしきなれば、おしまきて、御くしのそこにいれてたちぬ）

ひとりごと　ナ。獨語。きくひともなきに、ひとりかたるをいふ。夫木廿（かたらへど、みゝなしやまの、ほとゝぎす、ひとりごとする、こゝちこそすれ）土佐（かゝれど、この歌を、ひとりごとにしてやみぬ）

ひとりずまう　ナ。獨相撲。ひとりのすまう。ひとりにて、あひてをもかねて、すまうのまねをするたはぶれ。

ひとりずまひ　ナ。獨住。ひとりにてすむをいふ。[illegible]

人數合（拾遺、日ハいりて、月こそ空に、ねりいづれ　ひとりやすまひの、こゝちのみして）

ひとりずみ　ナ。獨住。ひとりにてすむをいふ。源蜻蛉（兵部卿の宮、まだ、絶えおもしける北の方もうせたまひて、この三条でなり、ひとりずみにてせびさまへど）

ひとりだち　ナ。獨立。ひとりにてたつをいふ。ひとのたすけなくてたつをいふ。空穂藏開（宮おもしげにて、ひとりだちしおはゆみもじめさまなほどなり）

ひとりでに　ソ。一人。ひとりにて。おのづから。

ひとりね　ナ。獨寝。ひとりぶし。そひぶしのつまもなくてひとりふすをいふ。源明石（こゝろぼそきひとりねの、なぐさめにもなどのへきこゆ）

ひとりのこらむ　ナ。獨殘。五節の舞姫のまゐるとき、燈臺をもちて、さきにたつめのこらむ。枕草五（ひとりのこらむ、小忌のきんだちもいときよらなりし）

ひとりびとり　ナ。一人一人。いづれのひとりひとり。古今（おもふどち、ひとりひとりく、こひしなば、誰によそへて、ふぢごろもきん）竹取（思ひさだめて、ひとりひとりにあひさてまつりたまひねといへど）

ひとりびとり　ソ。一人一人。ひとりごとに。ひとりづゝ。

ひとりぶし　ナ。獨臥。ひとりねに同じ。空穂藤原上（との〻人ども、子を思ひて、うちそへひとりぶしをせらるゝは、いとみとるしからんとて、更にいでゐません）

ひとりまなび　ナ。獨學。どくがく。ひとのをしへをうけずして、ひとり、みづからつとめてまなぶをいふ。

ひとりまへ　ナ。一人前。ひとりのまへにすうるおろり。

ひとりみ　ナ。一身。ひとりのみ。ひとりのからだ。

ひとりむし　ナ。火取虫。ひむしに同じ。拾玉（身をすつる、火取虫こそ、哀なれ、など徒世を、かくハ思はぬ）

ひとりむすこ　ナ。一人息。ひとりのみのむすこ。

ひとりむすめ　ナ。一人娘。ひとりのみのむすめ。源松風（君は、さもなからん、ひとりむすめなどのやうなるみ、さもしも、目をなちきこえさまなん事ハ、うしろめたうおぼつかなくおぼえつゝ、よろづはいでと）

ひとりもの　ナ。獨者。ひとりのみあるひと。

ひとりれんが　ナ。獨連歌。ひとりにてするれんが。筑波問答（中古などハ、一二句をつらね、あるひハ、獨連歌、有心無心の句などにておりしほどに）

ひとりわらひ　ナ。獨笑。ひとりもなきにてわらふをいふ。

ひとりゐ　ナ。獨居。ひとりにてゐるをいふ。狭衣四（かきくらされさまふほどハ、かゝるひとりゐをしこさびつゝ、事をこがしうきまふ事たえざりけり）

ひとりゑみ　ナ。獨咲。ひとりたきまは、ひとりゑましげにするをいふ。源末摘（こゝろもとなひとぐれ、なぞ、御ひとりゑみハをりめへり）

ひとりをとこ　ナ。一人男。ひとりのみあるをとこ。綱敏（かくハあれど、たゞいきの事をまてハ、行末さへこゝろぼそきに、たゞひとりをとこにてあれバ）

ひとりをんな　ナ。一人女。ひとりのみあるをんな。

ひとる　ワ。カケ。四。火取。あぶる。あぶりてかわかす。

ひとる　ワ。ヒトリ。四。日取。ひをえらびさだむ。源玉鬘（四月二十日のほどは、ひどりて来んとするほどに）

ひとるたま　ナ。火取玉。すゐしやうのたぐひのうるはしきたま。日のひかりをひきて、火をとるにもちふる玉なり。和名（火珠、一名、瑪瑙珠和名比止流大萬、火精也）

ひとるね　ナ。一艘。いちそく。源澪標（いみじきぶざうのものどもまで、ひとるゐ、この巫まみちて侍るなり）

ひとわき　ナ。人別。ひとのせうち。夫木廿（ふる溝の、ひとせきもせば、ものならバ、水と涙の、流れざらまし）

ひとわたす　ワ。ヒトワタ。四。渡人。ひとをすくふ。ひとをさいどす。佛家にていふ語なり。後撰（人さはす、ことさまなきを、何しかも、ながらの橋と、身のなりぬらん）

ひとわたり　ソ。一遍。ひとゝほり。枕草四（ひとわたりあそびて、琵琶ひきやみさるほどに）

ひとわらはれ　ナ。人笑。ひとよりわらはるゝをいふ。源宿木（二の宮も、かくひとわらはれなるやうにてなめさまふなり。入道の宮も、この世のひとわらしきかさまかけそなれさまひぬれど）

ひとわらひ　ナ。人笑。ひとのわらひ。ひとわらはれ。

ひとわらへ　ナ。人笑。ひとわらはれ。後撰（萬代と、契りし事の、いつはりは、ひとわらへにも、なりぬべき哉）

ひとわろし　サ。ヒ。人惡。ひとぎゝわろし。ひとみえわろし。

狭衣一（たひらかにはまうでつきゐるこそいとめでたけれ。みばうしの状などぞ、すこしひとさとき）

ひとをしづめて　ソ。靜人。ひとのさわぎをしづめて。ひとをねしづまらしめて。伊勢（女、ひとをしづめて、子ひとつばかりに、男のもとに来りけり）

ひとをれ　ナ。一折。ひとをりし。源花宴（のどかに、袖かへすところぞ、ひとをれ、けしきばかりまひさまへるに）

ひな　ナ。雛。とりのこ。まださちひさきもの。拾遺（鳥のこは、まだひななから、たちていね、かひのみゆるハ、すもりなりけり）和名（雛子、生能嗜食、謂之雛和名比奈）

ひな　ナ。雛。ちひさきもの。ちひさきにんぎやう。

ひな　ナ。鄙。みやこをはなれたるところ。古事記（つ枝は、ほつえは、天をおへり、なかつえは、東をおへり、しづえは、比那をおへり）古今（思ひきや、ひなの別に、おとろへて、蜑の繩たぎ、いさりせんとは）

ひなあそび　ナ。雛遊。ひひなあそびに同じ。

ひなか　ナ。日中。ひる。まひる。ひるのもなか。

ひながし　サ。ヒ。日永。ひのくるゝことおそし。

ひながた　ナ。雛形。てほん。ものをつくるときなど、まづこゝろみに、そのかたちをちひさくつくるをいふ。

ひなぐもり　マクラ。日曇。ひなぐもりハ、日影のうすきの意にて、日のくもりをいふ。さて、曇りたる日影ハうすきものなれバ、うすひにかけていふ。万仁（比奈久母理、宇須比の坂を、こえしだに、妹がこひしく、わすらえぬかも）

ひなげし　ナ。雛芥子。草の名。びじんさうに同じ。

ひなさき　ナ。吉舌。をんなのかくしどころのほとりにあるつぶらなるもの。和名（吉舌和名比奈佐岐）

ひなし　ナ。日無。ひごとに、すこしづゝかへすをいふ。

ひなし　サ。ヒ。無頼。びんなし。狭衣一（あさましきハ、心ならぬことなれバ、びなしとおぼさゞらん）

ひなしがね　ナ。日済金。からすがねに同じ。

ひなた　ナ。日向。ひのさすかた。ひのてるところ。散木（田上にハ侍りしころ、からひなさにハ居て）

ひなたぼかう　ナ。日向。ひにいでて、せなどをほしてあたゝまるをいふ。拾歌合（はるてらす、ひなたぼこうは、貧乏の、百代のおかや、たちもやるらん）

ひなたぼこり　ナ。日向にいでて、せなどをほしてあたゝまるをいふ。著聞十二（或田舎人、京上してまかりけるに、宿にて、ひなたぼこりして居たりけるに）

ひなたやま　ナ。日向山。山の名。相模國の大住の郡にあり。相模集（さして来し、ひなたのやまを、たのむにハ、目もあきらかに、みえざらめやハ）

ひなつぼし　ナ。歌枕星。星の名。あかくかゞやくちひさきほし。夫木十八（あまのそら、みなみにめぐる、ひなつぼし、などの雲とも、ともにまとて）

ひなづる　ナ。雛鶴。つるのひな。つるのこの、まだちひさきもの。栄花かゝやく藤壺（ひなづるを、やしなひたてて、松が枝の、かげにすません、ことをしぞおもふ）

ひなどり　ナ。雛。ひな。とりのこ。元輔集（くもゐにも、今はまづらん、雉産なる、聲ふりさつる、窗のひなどり）

ひなのみやこ　ナ。鄙都。こくふをいふとぞ。但し、國府を、都といふべきにあらねバ、やうことよむべきな。文字のさまにはなりさぞより、ふとよみへあるならんとおもいへり。万十八（あまざかる、比奈能都故に、あめびとの、かくこひすらバ、いけるしるしあり）

ひなは　ナ。火繩。火をつけてたづさふるなはにて、竹をやそらなどにてうちくだきてなひたるもの。

ひなはづつ　ナ。火繩銃。たねがしまをいふ。種子島ハ、火繩にて、火をうつすやうにしたるものなり。

ひなぶ　ワ。ヒナブ。カニ。鄙めく。ゐなかめく。源蓬生（ひなびたる、のめでするひとにて、おどろきおくして）

ひなぶり　ナ。夷振。いにしへの歌のふりの名。古事記（阿米那流夜、淤登多那婆多能、云々、此歌者夷振也）

ひなべ　ナ。鄙邊。ゐなかのかた。万六（大君の、命かしこみ、あまざかる、夷部にまかり、古衣、まつちの山ゆ）

ひなほる　ワ。ヒナホ。四。日成。そらなる。あめやむ。

ひなまつり　ナ。雛祭。ひひなまつりに同じ。

ひなみ　ナ。日次。ひのならび。ひのつぎ。ひの、きのふけふと、つぎくにならぶをいふ。

ひなん　ナ。非難。そろしとしてなじるをいふ。

ひなん　ナ。美男。かほのうつくしきをとこ。徒然草（堀川の相國ハ、美男のたのしき人にて、その事となく、過

謠をこのみたまひけり)

ひなんかづら　ナ。菟絲。菟草の名。さねかづらに同じ。

ひなや　ナ。鄙屋。ひひなやに同じ。初學訓白集(たちまつの森の部下より、ひなやまゐらせたまふとて)

ひなやしろ　ナ。雛社。ひなやしろ。さゝやかなるほこら。

ひならず　ツ。不日。ちかきほどに。ふつかみかのうちに。

ひにく　ナ。皮肉。かはとにくと。常盤物語(白骨となりて、野にさやれぬ。皮肉の間に亂散して、刹那のほどに離散する、服藥むなしくふらむして)

ひにけに　ツ。毎日。ひごとに。万十(きどやどの、くすむ日殘、いろづきぬ、來まさぬ君は、なにごころそも)

ひにそひて　ツ。日添。ひをおひて。拾遺貫外(陰まさき、楢の葉柏、日にそひて、窓より西の、空ぞすくなき)

ひにそへて　ツ。日添。ひをおひて。新拾(日にそへて、位のたかく、なりゆけば、山のかひある、君とこそみれ)

ひにひに　ツ。日々。ひゞに。ひごとに。ひをおひて。濱松一(日にく、物をひきのぶるやうにて)

ひにまし　ツ。日増。ひゞにまして。ひごとにくもりて。

ひにん　ナ。非人。つみびと。今昔一(この獄にいましめられたるおほくの非人、かくのごとき獄のやぶれぬる時に、みな、ところにまかせて、方々ににげさりぬ)

ひにん　ナ。非人。かたゐ。十訓六(壬生忠岑は、舎人なれども、古今の撰者につらなり、山田法師は、非人にして、同衆をけがす。賤どもは、事なければ、去るゝず)

ひね　ナ。陳。こぞ、ひさなどのふるくなりたるもの。

ひねくる　ワ。カケ。四。玩。弄。もてあそぶ。すねて、こゝろよからず。寛政訓(時分うつして、たびくに、使ぞえても、ひねくりて、たまくたゝへ、來てども)

ひねごめ　ナ。陳米。としをへて、ふるくなりたるこめ。

ひねずみ　ナ。火鼠。鼠の一種にて、南方の勝中にある國の、野火の中にいでくるものなりとぞ。また、この鼠の毛をもて織りたるものは、火中にいれてもやくる事なければ、垢のつくごとに、火中にいれて、垢のみなやきすつるをいふ。但し、まことにかゝるものありや、なしや。竹取(ひねずみの皮といふなるもの、かひておこせよとて、つかうまつる人の中に、こゝろたしかなるをえらびて)和名(火鼠和名比禰須三 取其毛、織爲布、若汚以火焼之、更令清潔矣)

ひねもす　ツ。終日。あしたよりゆふべまで。

ひねもすに　ツ。終日。あしたよりゆふべまで。和泉式部集(ひねもすに、なげくじとぞに、あるものを、夜はまどろむ、夢もみてしが)土佐(ひねもすに、波風たゝず。この緡取は、日もえはからぬかたゐなりけり)

ひねりいだす　ワ。カケ。四。拈出。とざまかうざまにかんがへて、からうじてかんがへいだす。土佐(船君の、からくしてひねりいだして、よしとおもへることを)

ひねりがさね　ナ。捻重。衣の名。かさりのきぬをいふにや。新六五(夏衣、世をやすみ、民のとづらひ、かへりみて、ひねりがさねは、きるひともなし)

ひねりごめ　ナ。捻米。ひねりに同じ。

ひねりぶみ　ナ。捻文。せうそこぶみにいふことぞ。下文を見るべし。貞丈雜記(式の立文をいふは、ひねりぶみともいふなり。先づ、書状をかきて、その上を、別の白紙にてまく。これを礼紙といふ。さて、礼紙の上を、又、白紙にて包みて、包紙の上下を、その状より餘る分を、すぢりひねり、左へをり、又、右へをりて、さて、墨の方へをるなり。礼紙は、謹上書の時は、状と別の紙をもちふ)

ひねる　ワ。カケ。四。拈。撚。よぢてねぢ、なゝめにやる。おしまぐ。おしゆがむ。ことやうなるこゝろむへにもてあつかふ。源總角(ことさりは、かへすぐきこえさせても、あまりあらばつみもひねらせたまへ)字拾(むやう、まめやかなるものを、下のふくろへひねりいれて)

ひのあし　ナ。日脚。ひのかげ。ひのうつりてゆくをいふ。源末摘花(むつびたるもの、うへもなくうづもれされば、日のあしほどなくさしいりて、雪すこしふりたるひかりに、いとけざやかにみいれらる)

ひのいへ　ナ。火宅。くゎたく。佛家にて、人の世をたとへていふことなり。拾遺(世の中は、牛のくるまの、なかりせば、おもひの家を、いかでいでまし)

ひのいり　ナ。日沒。ゆふひのおつるころ。

ひのうち　ナ。日中。あまつひの、そらにあるあひだ。あしたよりゆふべまで。拾遺(日のうちに、ものをふさび、おもふなる、とくあけぬると、おそくくるゝと)

ひのえ　ナ。丙。えとの名。きのとのつぎ。

ひのおまし　ナ。晝御座。ひるのおまし。主上の、晝のほどおましますところにて、清涼殿にあり。榮花月宴(南面のひのおましの方に、かしづきすゑてまつらせたまひて、御供の人々にかづけものたまひ)

ひのかがびこ　ナ。火之炫彦。ほむすびに同じ。

ひのかみ　ナ。日神。あまてらすおほみかみに同じ。

ひのき　ナ。檜。木の名。葉は、かへの葉に似て、あつくひらさくして、面に、網目のごとき筋あり。實は、すぎの實に似て、刺なし。この材、もくめこまやかに、色しろくして、ことに、柱などにつくるによし。

ひのきたけ　ナ。檜茸。菌の名。檜木にいでくるたけ。

ひのきづな　ナ。檜綱。ひのきにてなひたるなは。

ひのくち　ナ。樋口。みづをひきてながしおとすくち。

ひのくちまもり　ナ。樋口守。水鳥の名。みぞごゐに同じ。

ひのくま　ナ。檜隈。宣化のみかどの大和の宮の名。

ひのくまがは　ナ。檜隈川。河の名。大和國の高市の郡にあり。古今(さゝのくま、ひのくまがはに、こまとめて、しばしみづかへ、かげをだにみん)

ひのくるま　ナ。火車。ほのほのもゆるくるま。地獄の車にて、罪人をのせて、地獄におくるものなりとぞ。

ひのくれ　ナ。日暮。ゆふぐれ。たそがれ。万十(比能具禮に、碓氷山を、越る日は、せなのが袖も、さやにふらしつ)

ひのこ　ナ。火粉。ひの、このごとくなりてとびちるもの。

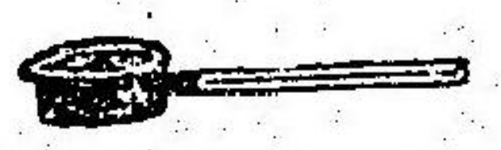
ひのこし　ナ。火輿。ひをともしたるこし。雜禮のときの輿なり。榮花月宴(香のこし、火のこしなど、みなめるさぞなりけり)和名(儀制令按、俗云火輿是)

ひのこと　ナ。火事。くゎじ。みづながし。右京大夫集(いづれの年やらん、五節のほど、内裏に、ちかき火の事ありて、既にあぶなかりしかば、南殿に、腰輿まうけて)

ひのさうぞく　ナ。晝裝束。ひるのさうぞく。束帶にて、宿直裝束ならぬをいふ。宇拾十(晝の裝束うるはしくしたるひとの、太刀をき、笏とりて)

ひのさはぎ　ナ。火騒。くゎじ。みづながし。蜻蛉(ちかう、火のさはぎす。おどろおどろしきさはぎするほどに)

ひのし　ナ。熨斗。のし。火のあたゝまりにて、絹の皺などをのするもの。唐銅などにてつくりたる、柄杓のごときものにて、火をいりて、底のなめらかなるところにて、おしすりつゝのすもの。



ひのした　ナ。日下。あめのしたに同じ。

ひのたて　ナ。日經。ひがしよりにしにとほりたるすぢ。万一(大和の、あをかぐやまは、日經の、大御門に、春山と、しみさびたてり、畝火の、このみづやまは、日緯の、大御門に、みづやまと、山さびいます)

ひのためし　ナ。氷様。こほりのためし。下文を見るべし。公事根源(元日節會云々、氷樣は、宮内省よりたてまつる。去年、氷をおさめたる所々の様を、今日、節會のついでに奏聞するなり。あつさうすさいかほどの寸法に侍るなど、こまかに奏して、そのためしとて、近頃は、石かそらのこれをたてまつるなり云々、氷のおほくなるは、聖代の験、氷のうすいは、凶年にて侍れば、氷の御祈とて、大法秘法をおこなはれしにや、今日も、よくこほりてめでたきよしのためしをたてまつるなり)年中行事歌合(けふぞまる、年はきのふに、栗栖野の、ひいけの水の、ふかきめぐみを)

ひのつじ　ナ。日辻。まひる。ひるのもなか。

ひのつまで　ナ。檜杣手。ひのきのつまで。万一(まきさく、檜乃嬬手を、ものゝふの、八十氏河に)

ひのて　ナ。火手。ほのほ。ひのもえあがるところ。

ひので　ナ。日出。あさひのいづるころ。

ひのと　ナ。丁。えとの名。ひのえのつぎ。

ひのとの　ナ。晝殿。ひるのほどおはしますところ。榮花一(つとめて、おとゞ、ひのとのにおはしけるまゝに、おちくぼにをさしのぞいてみたまへば)

ひのねずみ　ナ。日鼠。としつきのすぐるをいふ。つきのねずみを見るべし。土御門院御集(霜枯の、草葉にまさる、ひのねずみ、昨日はけふに、なるぞほどなき)

ひのはかま　ナ。緋袴。あかきはかま。女官のきるものなり。おほくは、紅の精好にて、裾をひくごとくつくれり。

ひのはじめ　ナ。日初。はじめのひ。新六三(我ながら、かくれもつべき、戀すとは、日の初より、おもはざりしを)

ひのべ　ナ。日延。さだめたるひをのばすをいふ。

ひのまる　ナ。日丸。あかくしてまろきかたち。日輪をかたどりたるものにて、大御國のしるしにもちふ。

ひのみ　ナ。望火樓。ひのみやぐらに同じ。

ひのみかげ　ナ。日御蔭。みかどのおはしますおほみやをいふ。あめのみかげを見合すべし。万一（たかしるや、あめのみかげ、あめしるや、日御影の）

ひのみかど　ナ。檜門。日門。ひのきにてつくりたるみかど。また、ひのみこのおはしますみや。古事記（まきさく、比能美加度、新嘗屋に、おひだてる、もゝだる、槻が枝は、ほつえは、天をおへり、なかつえは、吾妻をおへり）

ひのみこ　ナ。日御子。ひつぎのみこ。古事記（たかひかる、比能美古、やすみしし、わがおほきみ、あらたまの、年がきふれば、あらたまの、月はきへゆく）

ひのみつぎ　ナ。日貢。ひごとにたてまつるみつぎ。万六（みけつくに、日之御調と、淡路の、野島のあまの、わたのそこ、おきついくりに、鰒玉、さはにかづきで）

ひのみや　ナ。日宮。ひのみこのおはしますみや。

ひのみやぐら　ナ。望火櫓。ひのみ。火事のときのぼるやぐらにて、火の手のとほきちかきなどをみるもの。

ひのみやびと　ナ。日宮人。ひのみやのひと。おほみやびと。古事記（けふもかも、さかみづくらし、たかひかる、比能美夜比登、ことのかたりごとも、こをば）

ひのめ　ナ。日目。ひのひかり。万三（神風に、いぶきまどはし、天雲を、日之目もみせず、常闇に、覆ひたまひて）

ひのもと　ナ。日本。おほやまと。あまつひのさしいづるくに。ひつぎのみこを、あめつちとともに、いはひまつるくに。竟宴歌（波をこせ、わが比能毛度を、たづね来し、ひじりの御代の、親にざりける）

ひのもと　ナ。火元。ひごとをなるべきところ。

ひのものだち　ナ。火物斷。ひをもちひてとゝのへたるものをくはぬをいふ。物忌の時などにする事なり。

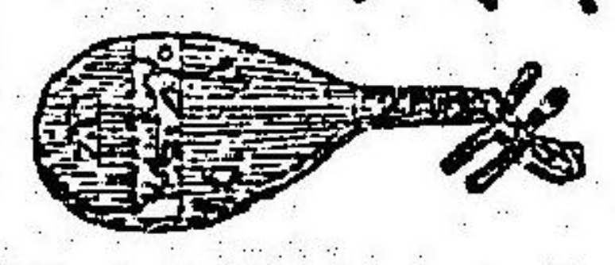
ひのよこ　ナ。日緯。みなみよりきたにとほりたるすぢ。万一（うねびの、このみづやまは、日緯の、大御門に、みづやまと、山さびいます、みゝなしの、青菅山は、そともの大御門に、よろしなべ、神さびたてり）

ひのよそひ　ナ。日裝。ひのさうぞくに同じ。源語胡蝶（やがてまうでさせて、やすみどころとりつゝ、君の御よそひにかへさせ給ふひともおほかり）

ひのりとめ　ナ。比乃理刀咩。ふとだまの神の御后神。

ひば　ナ。檜葉。ひのきのは。神樂歌（御鉏子が、ねやなる、さめゆふ比波を、誰かたなりし、たらてきひばや）

びは　ナ。琵琶。樂器の名。よつのを。木をもて、楕圓形につくりて、よすぢのいとをかけて、膝のうへにいだきて、撥をもてかきならすやうにしたるもの。和名（琵琶俗云微波本出於胡也、馬上鼓之、一云、魏武造也、今之所用是也）



びは　ナ。枇杷。木の名。果の名。葉のさまは、ごとくながくして、すこし、兎の耳に似たり。また、葉の面は、緑ふかく、背はしらむみたるに、黄ばみたる毛あり。冬の頃、しろき花さきて、夏の初、黄色なる玉のごとき實をむすぶ。味ことによけれども、核おほきくして、肉すくなし。和名（枇杷此間云、葉木冬花而夏實也）

ひばう　ナ。誹謗。そしりあざけるをいふ。枕草三（このごろ、そのをりさしいでたるひとの、命ながくてみましかば、いかばかりそしりひばうせまし）

ひはう　ナ。秘方。たいせつにして、たやすくひとにをしへぬをいふ。藥をあはするみちなどにいへり。

びばうじん　ナ。未亡人。やもめに同じ。

びはえふたう　ナ。枇杷葉湯。びはの葉の、煎じたる汁。暑氣をはらふ藥なりとてのむものなり。

ひはかり　ナ。蛇の一種。まむしのたぐひにて、色あかきもの、しろきものなどあり。この蛇にかまるゝときは、全身に、毒をうけて、その日の中に死ぬといふ。

ひはぎ　ナ。引剝。ひきはぎに同じ。宇拾十（小法師はしりかへりて、御房、ひはぎにあはせたまひたり。御房たちまゐりたまへとよばはりければ）

びはごと　ナ。琵琶。びはといふに同じ。

ひばし　ナ。火箸。ひをけなどのひをはさむもの。枕草一（冬は、火桶にも、やをらたつる火箸の音も忍びたれど聞ゆるを、いとゞ叩きまさり、聲までもいふを）

ひばしら　ナ。火柱。おほぞらに、あかきさしの、ほのほのはしらなどたてるごとくなりてみゆるもの。

ひはだ　ナ。檜皮。ひのきのはだにつきたるうすかは。七一職人歌合（ひはだぶき、月のもる、軒端の、ちりの、うすひとぞ、ふきもとほさぬ、秋の風かな）

ひはだ　ナ。檜皮。染色の名。赤色のうすれたるをいふ。雜事抄 また、襲の色目にて、表は、蘇芳のくろずみたる色にて、裏のはなだなるをいふ。西三條裝束抄、胡曹抄

ひはだいろ　ナ。檜皮色。染色の名。ひはだに同じ。源語手習（そのまも、ひはだいろにならひたるにや）

ひはだし　ナ。檜皮師。ひはだいし。ひはだぶき。

ひはだぶき　ナ。檜皮葺。ひはだにてふきたるやね。また、ひはだにて、やねをふくを、なりはひとするひと。枕草十（雪は、ひはだぶきいとめでたし）七一職人歌合（ひはだぶき、このむなかどがおそき）

ひはだや　ナ。檜皮屋。ひはだぶきのいへ。枕草五（なまめかしきもの云々、新しくもなくて、いたくふりてもなきひはだやに、菖蒲うるはしくふきわたしたる）

ひばち　ナ。火鉢。ひをけ。ひをうづめて、てなどをあぶるもの。三二職人歌合（ひばちうり、風呂火鉢、瓦燈口なければ、みづこぼし、よきあきなひと、奈良の土かな）

ひはづなり　サ。孱弱。かよわし。よわよわし。この語は、ひせづなりともいへり。いまはさだめがたし。宇拾十（居形のうつは、二十ばかりにて、ひはづなる俗の、經袋くびにかけて、よるひる、經よみつるを）

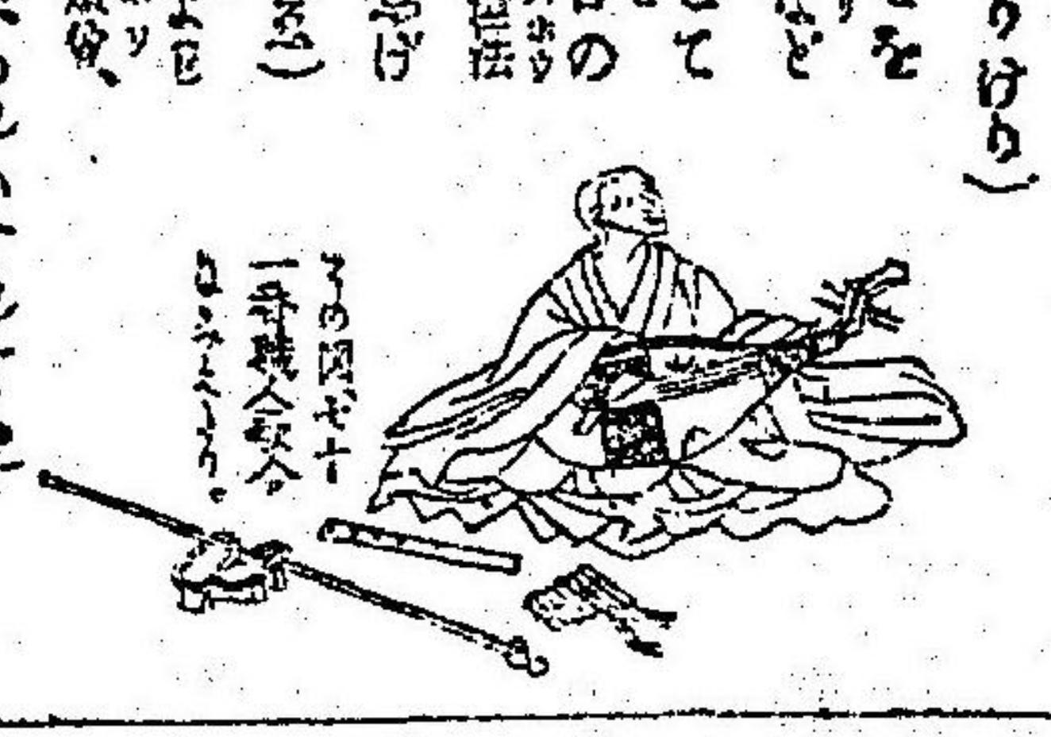
ひはつに　ソ。孱弱。かよわく。よわよわしく。源語眞木柱（いとさやかなる人の、常の御惱にやせおとろへ、ひはつにて、髪いとけうらにてながかりけるが、分けとりたるやうにおちほそりて、けづる事もをさをさしたまはず）

ひばな　ナ。火花。ひの、はなのごとくとびちるもの。

ひばば　ナ。曾祖母。おほおばに同じ。

びはひき　ナ。琵琶彈。びはをひくひと。十訓六（としは、十三にていとちひさかりければ、琵琶引のむしろぐちおもひやられてあはれなりけり）

びはほうし　ナ。琵琶法師。びはをひくほうし。平家の物語などをかたりて、琵琶にあはせて、ひくもの。おほかたは、盲目の僧なり。七一職人歌合（琵琶法師、あまのたく藻のゆふけぶり、尾上の鹿の暁のこゑ）



その圖七十一番職人歌合にみえたり。

ひはぼそ　ナ。纖弱。ほそくかよわきをいふ。古事記（比波煩曾、たわやがひなを、まかんとは、あれはすれども）

ひはん　ナ。批判。よろしきをあげてあげつらふをいふ。

ひばん　ナ。非番。ばんのやすみ。ばんにいでぬとき。

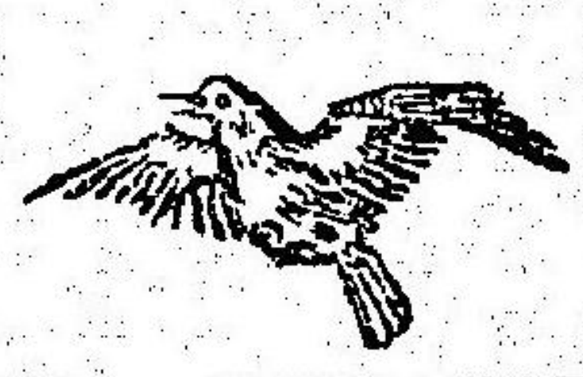
ひはやかに　ソ。孱弱。かよわく。よわよわしく。榮花音樂（宮、いみじうひはやかにめでたうていらせたまふ）

ひはやび　ナ。媛瑯日神。みをやびの神の御子。

ひばら　ナ。脾腹。よこばら。みぞひだりのあたり。

ひばら　ナ。檜原。ひのきのはやし。新勅（宮木ひく、杣山人は、おともなし、檜原杉原、雪ふかくして）

ひばり　ナ。雲雀。鳥の名。かたち、雀に似て、雀よりもおほきく、頭と背とは、くろき斑ありて、眼のほとりしろく、胸と腹とは、うすぐろし。また、足はほそくながくして、爪もながし。春のすゑ、野面ののどかなるとき、晴れたる空に、たかくのぼりてなきさへづるものなり。古事記（比婆理は、あめにかける、たかゆくや、はやぶさわけ、さざきとらさね）和名（雲雀似雀而大和名比波里）



ひばりげ　ナ。雲雀毛。馬の毛色にいふことぞ。毛色の、黄と白とまじりて、まだらになれるもの。

ひばりど　ナ。比波利戸。うすきいたのとなるべし。神樂歌（おふりどや、比波利止、比波利止や、おふとど）

ひばりのとこ　ナ。雲雀床。ひばりのふしど。詞花（獣おそる、沢邊の茅原、冬くれば、雲雀の床ぞ、現れにける）

ひばりぶえ　ナ。雲雀笛。あしぶえのたぐひにて、ひばりのこゑににせたるもの。小兒のもてあそぶ笛なり。

ひひ　ナ。狒々。獸の名。猿の、年を經たるものにて、深山にすみて、ともすれば、人をもくらふといふ。

ひび　ナ。皸。あかゞりのたぐひ。ひみのところ見るべし。

ひび　ナ。罅。たまなどのきずの、われんとするところ。

ひひ　ナ。魚の名。近江の湖水にいでくるもの。長さ六七寸ばかり。形も、色も、なよしに似て、頭ほそし。

ひび　リ。日々。ひごとに。きのふもけふもあすも。

ひびかす　ワ。カゲ。四。響。ひゞかしむ。源少女（かく、この世にあまるまで、ひゞかしいとなみ、さまふに）

ひびき　ナ。響。おとのなごり。おとのつゞもり。また、たゞおとをもいふ。佛足石歌（御跡つくる、石の比鼻伎は、天にいたり、地さへゆすれ、ちゝはゝがために、もろびとのために）源御法（薪こるさんざんの聲も、そこらつどひさるひゞきおどろ〳〵しきを）

ひびき　ナ。璺。たまの、疵つきて、されんとするをいふ。

ひびきいし　ナ。響石。あうむせきに同じ。

ひびきのなだ　ナ。響灘。灘の名。播磨にあり。源玉鬘（うきことに、むねのみさわぎ、響きは、ひゞきのなださも、さはらざりけり。河尻といふ地ちかづきぬといふに）

ひびきめ　ナ。璺目。ひゞきのくち。されんとするところ。

ひびく　ワ。ヒトリ。四。響。おとのこる。おとつたへる。おととどろく。また、きこゆをいふ。源若菜（よろしめ、世のさわぎは、かるぐ〳〵しき御名さへひゞきて）榮花玉村菊（大饗會とて、また、ひゞくひゞきのゝしる）

ひびく　ワ。ヒトリ。四。疼。つくごとくいたむ。おちむひ、つきさすがごとくあり。古事記（垣本に、うゑしはじかみ、くち比々久、われはわすれじ、うちてしやまん）

ひびく　ワ。ヒトリ。四。璺。たま、きずつきてされんとす。

ひびくま　ナ。[illegible]。みさゝぎをいふ。豐後などにて、

ひひこ　ナ。曾孫。まごのこ。和名（曾孫和名比々古）

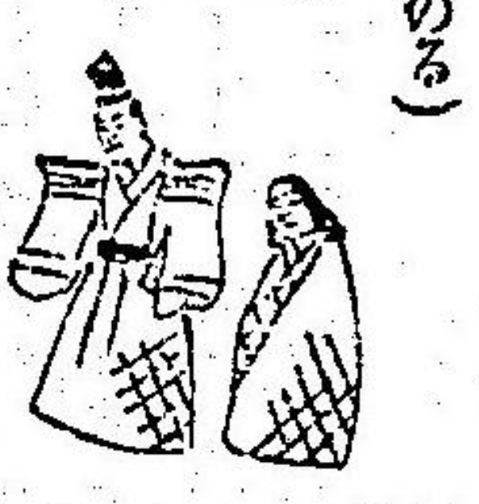
びびし　サ。フ。美々。うつくし。うるはし。さなやかなり。枕草三（いみじくびゞしくおかしき君達も、隨身なきはいとさうらしくし）宇拾三（藤大納言忠家をいひけるひと、いまだ殿上人にておはしけるとき、びゞしきいろごのみなりける女房とものいひて、夜ふくるほどに）

ひびつ　ナ。火櫃。ひをけ。こたつ。今物語（ともしびを、人のけちたりければ、御ふところより、くしを、いくらもとりいでて、ひゞつの火にうちいれたりければ、奥までみえて、よく〳〵ごらんじけり）

ひひと　ソ。馬のいなゝくこゑ。蜻蛉三（かほつき、たゞ駒のやうに、鼻のいらゝぎたる事かぎりなし。ひゝといなゝきて、ひきはなれていぬべき顏したり）

ひひとひ　ソ。日一日。ひねもす。土佐（二日、雨風やまず。ひとひ、よすがら、かみほとけをいのる）

ひひな　ナ。雛。ひな。ちひさきにんぎやう。但し、今、雛といふは、三月三日に、めのわらはのまつる人形をすべていふ。下にいだせるは、その人形のふるき繪なり。狹衣四（ひゝなおしすゑたるやうに、うつくしげにて）



この圖は骨董集にみえたり。

ひひなあそび　ナ。雛遊。ひゝなのもてあそび。にんぎやうをもてあそぶあそび。空蟬上（あけぬれば、くるゝまで、いぬみや、ひゝなあそびしたまふ）

ひひなぎぬ　ナ。雛衣。ひゝなにきするちひさききぬ。蜻蛉（女神には、衣ぬひてたてまつるこそよかなれ。さしさへと、よりきてさゝめけば、いでこゝろみんとて、かとりのひゝなぎぬみつぬひたり）

ひひなぐさ　ナ。雛草。草の名。ひなに似たるちひさき草にて、小兒の、雛などにつくりてもてあそぶもの。

ひひなまつり　ナ。雛祭。ひなまつり。三月三日に、めのわらはのする祭にて、雛をならべすゑて、桃花をたてまつり、菓子のたぐひのさま〴〵のものをそなふ。

ひひなや　ナ。雛屋。ひゝなをすゑてもてあそぶちひさきいへ。御堂關白集（こうみやの御ひゝなやに）

ひびに　ソ。日々。ひごとに。きのふもけふもあすも。[illegible]（ひゞにまさりたまひて、いましも、やんごとなく、かぎりなきさまにもてなしきこえさまふ）

ひひめく　ワ。ヒトリ。四。沖。ひゝる。そらたかくのぼる。

ひひやう　ナ。批評。よろきをあげてあげつらふをいふ。

ひびやうゐん　ナ。避病院。はやりやまひのときの、そのやまひにかゝりたるものをいれおくびやうゐん。

ひびやき　ナ。璺燒。ひゞれめをつけたるやきもの。

ひびらかす　ワ。カゲ。四。顫。ふるはす。うごかす。紫式部日記（おこなひびとは、くちひゞらかし、すゞの音たえずなど、いとこゝろづきなくみゆるわざなりと）

ひひらぎ　ナ。柊。木の名。葉のさき、すこし、棘に似て、ちひさく、いつゝの稜ありて、とがれること、刺のごとし。夏の頃、しろきちひさき花さきて、後に、實をむすぶ。この材、きめこまやかにて、色きはめてしろし。和名（黄芩和名比比良木　楊氏漢語抄云、杜谷樹和名上同　一云、比比良天）

ひひらぐ　ワ。ヒトリ。四。囀。さへづるに同じ。

ひびらく　ワ。ヒトリ。四。顫。疼。ふるふ。ふるふごとくにてうごく。さすがごとくにていたむ。源帚木（馬の頭、ものさだめの博士になりて、ひゞらきゐたり）發心集四（このやまひの苦痛に責められてねられ侍らず。切り燒くがごとくうづきひゞらき、身もほとほりて、堪へしのぶべくもあらねば）字鏡（疼　痛也、痒也、比々良久、又加由志）

ひひる　ナ。蛾。虫の名。てふのたぐひ。和名（蛾和名比々流　蠶作飛虫也）同（蠶和名比々流　蠶內者蛾也）

ひひる　ワ。ヒトリ。四。沖。たかくのぼる。そらにとびあがる。

ひびろく　ワ。ヒトリ。四。顫。疼。ひびらくに同じ。

ひふ　ナ。皮膚。はだ。はだへ。からだのうはべ。

ひふ　ナ。被風。衣の名。羽織に似て、たけながきもの。すこし、十德のさまにも似たり。尼などのきるものなり。

ひぶ　ナ。日歩。りそくの、ひごとにいだすもの。

ひふき　ナ。火吹。ひふきだけに同じ。

ひふきだけ　ナ。火吹竹。ひをふきおこすたけのつゝ。

ひふきだるま　ナ。火吹達磨。ひをふきおこすだうぐ。達磨のかたちにつくりたる人形にて、內に、水をいれて、火のかたへにおくときは、達磨の口より、湯氣をふきて、火をふくやうにしたるものなり。

ひぶくれ　ナ。火脹。やけどにてふくれたるもの。

ひぶくろ　ナ。火袋。ちやうちんなどをいふ。常陸などにて、

ひぶせ　ナ。火防。ひのわざはひをよくるきたう。

ひぶた　ナ。火蓋。てつぱうの、ひぐちをおほふふた。

ひぶん　ナ。碑文。いしぶみにえりつくるぶんしやう。

ひぶん　ナ。非分。みのほどにかなはぬをいふ。また、そのことの、ことわりにかなはぬをいふ。

ひへい　ナ。疲弊。つかれおとろふるをいふ。

ひへぎ　ナ。引倍木。ひきへぎともいふ。ひたびきに同じ。榮花駒くらべ（御裝束めでたき中に、關白殿の御あるさまねのきくのひへぎ、かいやりて、目とゞまりたり）

ひへん　ナ。日偏。からもじの偏の名にて、日の字を偏にしたるもの。暄、晴、曙、曉、暇、暖のたぐひ。

びほう　ナ。彌縫。とりなし。とりつくろひ。

ひぼし　ナ。日乾。火乾。ひにてほしたるもの。拾遺物名（野まよひ、ほしのあゆぐと、みえつるは、沼の空は、とおほぞありける）和名（炒和名比保之乃火乾也　以孚俗云火昇）

ひぼし　ナ。干乾。くひものなくて、やせおとろへたるをいふ。常磐嫗物語（鯨の木にうつりたる姿をみれば、はもきおそろしや、鬼のひぼしにことならず）

ひぼん　ナ。非凡。よのつねならぬをいふ。

ひぼろぎ　ナ。神籬。ひもろぎに同じ。和名（神籬俗云比保路岐）

ひま　ナ。隙。すきま。すきあな。あひだ。いとま。また、なからひのむつましからぬをいふ。御堂關白集（ひまもなき霞の間より、梅の花、かをりにても、いでぞとりけん）蜻蛉（かくて、その日をひまにて、またものいみになりぬときゝて）源帚木（うへべいとよき御中の、むかしより、さすがにひまありけるに）

ひまいる　ワ。ヒトリ。四。隙入。ひまどる。おそくなる。

ひまご　ナ。曾孫。ひこ。まごのこ。盛衰卅（母の八十有餘になりけるにぐしゆきて、この子あづけさてまつる、御ためにはひまごなり云々、御形見とも御覽候へとて、うちあづけつゝおちゆきけり）

ひましあぶら　ナ。蓖麻子油。たうごまを見るべし。

ひましに　ソ。日增。ひをおひて。ひごとにまして。

ひましのあぶら　ナ。蓖麻子油。ひましあぶらに同じ。

ひますぐるこま　ナ。隙駒。としつきのすみやかにすぐるをいふ。堀川百首（ひますぐる、駒よりもとき、かげろふの、たまきはる、いそぢの春は、あひにけり哉）

ひまぜに　ソ。隔日。かくじつに。ひとひまぜに。ひとひおき。十六夜日記（三月のすゑつかた、わらはやみにや、ひまぜにおこる事ふつかびになりぬ）

ひまち　ナ。日待。ひのまつり。陰曆の十月十五日の夜、よもすがらおきゐて、日出をまつるをいふ。

ひまどる　ワ。ヒトリ。四。隙取。ひまいる。おそくなる。

ひまなご　ナ。日眞名子。まなごといふに同じ。祝詞式（伊射奈伎乃日眞名子、加夫呂伎熊野大神）

ひまに ッ。隙。いとまに。すきまに。つれぐに。

ひまはし ナ。火廻。小兒のするあそび。火をつけたる線香をもちて、火といふ文字のつく詞をいひくして、その線香を、次の人に、次第にまはしやるたはぶれなり。堀川百首（みどりごの、あそぶすさびに、まはす火の、むなしき世をぞ、ありとたのまじ）

ひまはり ナ。日廻。草の名。からあふひに同じ。

ひまはりさう ナ。日廻草。草の名。からあふひに同じ。

ひまん ナ。肥滿。こえふとりたるをいふ。

ひまゆくこま ナ。隙駒。としつきのはやくすぐるをいふ。新古（あさらしき、年やわが身を、とめくらん、ひまゆく駒に、道をまかせて）千載（いかでわれ、ひまゆく駒を、ひきとめて、むかしにかへる、道をたづねん）

ひみ ナ。瘃。しもぐちのたぐひ。冬のころ、さむさにあてられて、手足などのあらくしくなるをいふ。和名（瘃和名比美、辨色立成云之毛久知）

びみ ナ。美味。よきくひもの。うまきおもの。

ひみじかし サ。日短。ひのくるゝことはやし。

ひみつ ナ。秘密。かくして、ひとにしらせぬをいふ。

ひみづ ナ。氷水。こほりをいれたるみづ。源常夏（ひみづめして、すゐそんなど、とりぐにさうどきつゝくふ）

ひむ ワ。カ。シニ。秘。ひす。かくして、ひとにしらせず。源繪合（こゝろやすくもとりいでさせず、いといろくひめて、この御方にもてまゐらせたまふを）

ひむかし ナ。東。ひがし。あさひのいづるかた。

ひむし ナ。火虫。なつのよ、ともしびにすだくむし。但し、仁德紀の蛾なるを、蛾なりといへれど、歌の意、それまでもきこえず。仁德紀（なつむしの、ひむしの衣、ふたへ着て、かくみやどりは、あによくもあらず）

ひむろ ナ。氷室。こほりをたくはふるところ。いにしへ、冬のころ、山の常陰をほりくぼめて、氷をかこひて、夏にいたりていだしたり。千載（春秋も、後のかたみは、なきものを、ひむろぞ冬の、なごりなりける）

ひむろぐさ ナ。氷室草。草の名。あしの異名。誠齋草

ひむろどの ナ。氷室殿。ひむろのいへ。夫木九（ひむろどの、稲ちる末の、夕風は、夏と秋とを、ふきみだりぬる）

ひむろもり ナ。氷室守。ひむろのまもりをするひと。

ひむろやま ナ。氷室山。山の名。大和にあり。また、山城にもあり。家隆卿集（やまと路や、みやこもとほき、ひむろやま、さぞよひながら、岩戸あくなり）

ひん ナ。貧。びんぼふ。曾我物語五（ひんは、しよだうのさまたげとは、おもしろかりけることかな）

びん ナ。鬢。かみのよこ。かみの、みぎひだりのところ。落窪一（御びんかゝせたまへるほどに、からうじてとられさせまつりぬ。いといみじうこそと）

びん ナ。便。たより。ついで。おとづれ。

びん ナ。瓶。かめ。また、がらすのとくり。

ひんかう ナ。品行。みもち。おこなひ。ぎやうせき。

びんかき ナ。鬢搔。かみかき。びんのけをつくろふもの。

ひんかく ナ。賓客。きやく。まらうど。

ひんかく ナ。品格。みえ。しな。しながら。

ひんがし ナ。東。ひがし。あさひのいづるかた。拾遺（本院の、ひんがしのたいのきみにまゐりたまひて）

ひんがしおもて ナ。東面。ひがしにむかひたるかた。蜻蛉（ひんがしおもての朝日のけいとくるしければ、みなみのひさしにいでたるに、つゝましき人のけぢかくおはすれば、やをらかくれふしてきけば）

びんぎ ナ。便宜。たよりのよきこと。たよりのよろしきとき。落窪一（なほびんぎあらばつげられよ。さりぬべくば、かならずたてまつりたまひて）

ひんきう ナ。貧窮。びんぼふ。公事根源（六月の施米は、みな、貧窮孤獨のものに、米をたまふなり）

ひんく ナ。貧苦。まづしさにくるしむをいふ。

びんぐき ナ。鬢莖。びんのけすぢ。源末摘花（御ものごりにわげもてまゐで、けふそくをおしよせて、うちかけて、御びんぐきのしどけなきをつくろひたまふ）

びんぐし ナ。鬢櫛。びんのけをかゝるくし。

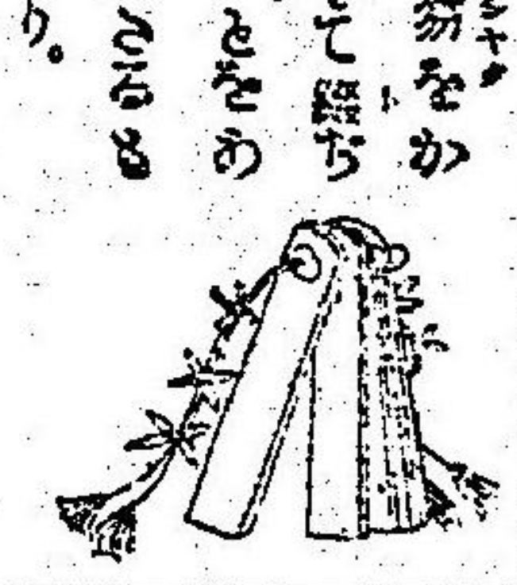
ひんけつ ナ。貧血。やまひにて、ちのへりたるをいふ。

びんご ナ。備後。びんごおもてに同じ。

びんごおもて ナ。備後表。たゝみおもてにもちふるむしろにて、備後國よりおりいだすもの。

ひんさう ナ。貧相。まづしくみゆるにんさう。

びんざさら ナ。拍板。樂器の名。笏をかさねて、本のところを、革をもて綴ぢたるごときものにて、板と板とをあはせてうちならすやうにしたるもの。ふるき舞などにもちひたり。



びんしよ ナ。便所。きものなどをきかふるへや。

びんずり ナ。鬢摺。むこべらをいふ。丹波などにて、

ひんせい ナ。貧生。まづしきしよせい。

ひんせき ナ。擯斥。ほうしとしてしりぞくるをいふ。

びんせふ ナ。敏捷。さとさのするどきをいふ。

ひんせん ナ。貧賤。まづしくしていやしきひと。

びんせん ナ。便船。ふなだより。ふねのついで。

びんぜん ナ。憫然。いとほしくあはれなるをいふ。

びんそぎ ナ。鬢削。かみそぎのたぐひ。下文を見るべし。おさく物語（天樹院樣御びんそぎをもみけるが、碁盤の上に御たちなされ候ふを、秀賴公、脇刀にて、御髮を、すこし御きりそめなされけるとなり）

びんだたら ナ。鬢多々良。郢曲の名。髮のおちさるをいふとぞ。綾小路俊量卿記（びんだたらをあゆがせてこそ、あきやうつらされ、やれことうくく）建武年中行事（殿内におましますのほど、亂舞あり。びんざさらなどうたふ。大歌、小歌などいふ事あり）

びんつけ ナ。鬢附。びんぐきをかざむるあぶら。

びんづら ナ。鬟。ひづらに同じ。狹衣二（ひらはきの髮たなびきたるとみゆるに、びんづらゆひて、いひしらずおかしげなるわらはの、さうぞくうるはしくしたる、かうばしきもの、ふとおりくるまゝに）

びんづる ナ。賓頭盧。羅漢の名。佛の、結跏趺坐したる像をつくりて、寺の本堂のかたはらなどにすゑたり。參詣の人、手をもてなでさすりなどする事あり。

びんなが ナ。鬢長。魚の名。ひれながに同じ。

びんなし ナ。無便。たよりわろし。ついでわろし。こゝろのまゝならず。後撰（びんなきところなれば、こゝろざしはありながらなんえたちよらぬといへりければ）宇拾十（經論をやぶりつるは、いとびんなき事なりとて、いひさだめたるやうは、すみやかに、酒、くだものとりにやりて、この事あがへと集りてせめのゝしりければ）

びんぼふ ナ。貧乏。まづしくして、ものごとにとぼしきをいふ。狂歌合（けさてらす、ひなたぼうこは、びんぼふの、神代のもるや、たちろぐらん）

びんぼふがみ ナ。貧乏神。ひとにつきて、そのひとをまづしくするかみ。福神にむかへていふ詞なり。

びんぼふくじ ナ。貧乏鬮。わろきくじをひきあるごとくにて、たのしみすくなきことにあたるをいふ。

びんぼふゆすり ナ。貧乏搖。あしなどを、ゆるごとくにしてたえずうごかすをいふ。人の癖にある事なり。

びんびくま ナ。肩車。かたぐるまをいふ。西國にて、

ひんひん ナゲキ。馬のいなゝくこゑ。

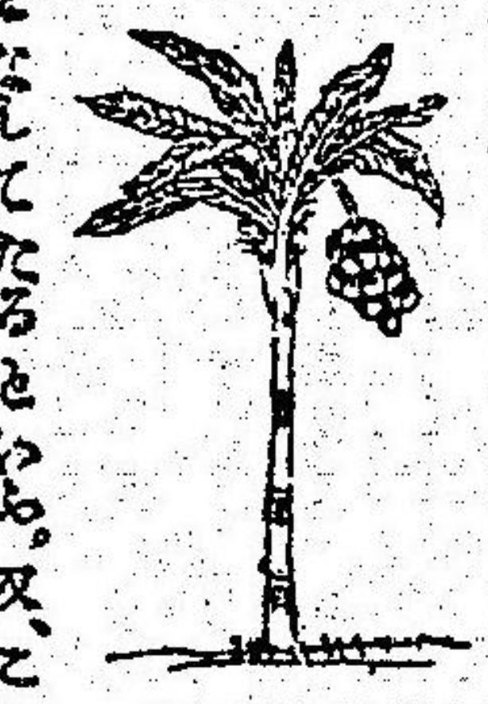
ぴんぴんかづら ナ。蔓草の名。あをかづらに同じ。

ひんぴやう ナ。品評。しなのよしあしのひやう。

ひんぷ ナ。貧富。まづしきととみたると。

ひんみん ナ。貧民。まづしきたみ。たよりすくなきたみ。

びんらう ナ。檳榔。木の名。熱帶地方の木にて、高さは六七丈ばかりなるもありといふ。幹すぐにのびて、枝なく、葉は、梢のみにつきて、すこし、芭蕉に似たり。實は、葉間に結びて、房をなしてたるといふ。又、その實は、常に、食用とし、また、藥にも用ふといふ。



ひんるゐ ナ。品類。しな。たぐひ。しゆるゐ。

ひんゐ ナ。品位。しな。くらゐ。しながら。

ひめ ナ。姫。をんなを、ほめたゝへてよぶことぞ。古事記

ひめ ナ。鵐。鳥の名。形、いかるがに似てちひさく、頭は、うすくきばみて、まるすこし赤ばみたり。また、背は灰色にて、翅は、黑きに、しろき毛をまじへたり。そのなくこゑ、やまがらに似たり。但し、今、鷽をいふは、いにしへの鵐なりともいへり。和名（鵐漢語抄云、比米白喙鳥也）

ひめ ナ。粿糠。こめの煮たるもの。今の粥は、これなるべしといへり。常盤嫗物語（白米かな、ひめにして、湯をものまでや）和名（粿糠和名比女、或說云、非米非粥之義也）

ひめい ナ。非命。しぬべきみちならでしぬるをいふ。

びめい ナ。美名。よきな。ほまれとなるべきなまへ。

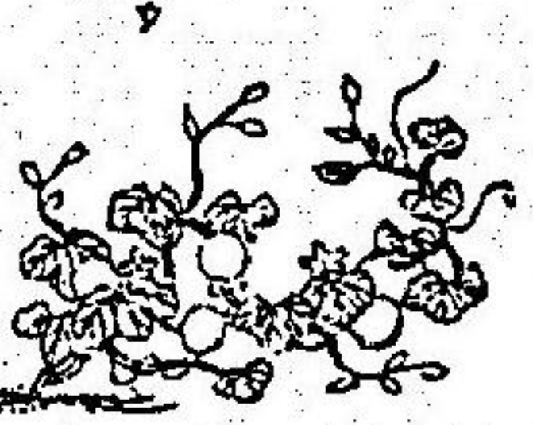
ひめいひ ナ。姫飯。ひめといふに同じ。

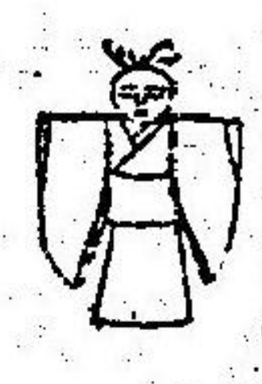
びめう ナ。微妙。たへにしておくふかきをいふ。

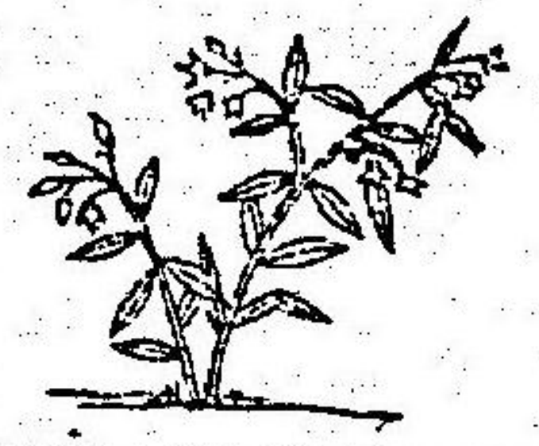
ひめうり ナ。姫瓜。蔓草の名。瓜のたぐひなり。葉も、花も、きうりに似て、ちひさく、瓜は、おほきさ二寸ばかり、色あをじろく、味にがくして、食ふべきにあらず。たゞ、小兒の、人形に作りて、もてあそぶのみなり。

ひめうゐきやう ナ。姫茴香。草の名。いのんどをいふ。東國、西國などにて、

ひめかがみ ナ。姫蘿藦。草の名。葉のさま、柳に似てほそく、秋のころ、ちひさき花さきて、蘿藦の實のごとき實をむすぶ。根は、常に、藥にもちふ。和名（徐長卿和名比女加々美）







ひめがき ナ。姫垣。ちひさきかき。方丈記（庵の北に、すこし地をしめ、あばらなる姫垣をかこひて園とす）

ひめがひ ナ。姫貝。貝の名。いがひに同じ。

ひめぐも ナ。姫蜘蛛。くものちひさきもの。四季物語（ひめぐもとて、さゝやかなるくもの）

ひめごぜ ナ。姫御前。ひめといふに同じ。

ひめごと ナ。秘事。ひめて、ひとにしらせぬこと。

ひめこまつ ナ。姫小松。ちひさきめまつ。夫木一（おなじくは、千本をひかん、姫小松、君が齡の、數にまかせて）

ひめすぎ ナ。姫杉。木の名。すぎの一種なり。葉の狀、きはめてほそくして、枝の、しげくさしいづるもの。

ひめたちばな ナ。姫橘。果の名。きんかんに同じ。

ひめつつじ ナ。姫躑躅。ちひさきつゝじ。夫木六（谷ふかみ、岩片陰の、姫躑躅、人もすさめぬ、色にさきつゝ）

ひめつばき ナ。姫椿。灌木の名。葉は、つばきに似て、めぐりの刻なし。夏の頃、しろくあをみたるちひさき花さきて、秋の末、くろき實をむすぶ。和名（衣良一名、冬青和名太豆乃木、楊氏漢語抄云比女豆波木　冬月材翠、故以名之）

ひめとね ナ。姫刀禰。みやづかへしたるにようばう。

ひめどり ナ。鳥の名。ひめに同じ。辨内侍日記（すがさへ、ひめどりのやうにて、今すこしおほきなり）

ひめのり ナ。姫糊。ひめを、さらにやはらかに煮て、すりて、糊としてもちふるもの。

ひめはぎ ナ。姫萩。草の名。をんじをいふ。京都にて、

ひめはじめ ナ。比目始。としのはじめに、姫飯を食ひそむるをいふにや、いにしへは、今のごとく、姫飯を、常にもちひずして、儀式などにもちひし故なり。

ひめばな ナ。姫花。草の名。おきなぐさをいふ。大阪にて、

ひめふぢ ナ。姫藤。灌木やうの草。いぬふぢに同じ。

ひめまうちぎみ ナ。東豎子。あづまわらはを見るべし。枕草八（えせもののところうるをりの事、正月のおほね、行幸のをりのひめまうちぎみ）

ひめまうちぎみ ナ。内命婦。ないみやうぶに同じ。天武紀

ひめまつ ナ。姫松。めまつ。また、めまつのちひさきもの。

ひめまつ ナ。姫松。あづまこまつを見るべし。

ひめみこ ナ。姫御子。皇女。くわうぢよ。みかどのみむすめ。

ひめみや ナ。姫宮。皇女。くわうぢよ。みかどのみむすめ。源若菜一（もてかしづきものせさせ給ふ姫宮の御うしろみに、これをやなど、ひとしれずおぼしよりけり）

ひめもす ソ。終日。あしたよりゆふべまで。諸聞六十（ひめもすあそびありきて、夕に歸り落じさりければ）

ひめもすに ソ。終日。あしたよりゆふべまで。宇拾五十（中門の側に、ひめもすにかゞみ居たりつる。おぼえなりしに、事の外ひさしくてぞまゐりいでにける）

ひめもも ナ。姫桃。もゝのちひさきものをいふなるべし。堀川次郎（もゝぞすみ、穴ちうくまなん、みちのべの、かきねにさける、ひめもゝの花）

ひめや ナ。氷目矢。われめにさしむや。木をわるときなどにする事なり。古事記（打離其氷目矢而拷殺）

ひめゆり ナ。姫百合。草の名。葉の狀、せばくながくして、柳の葉に似たり。夏の初、ひとひらのあかき花さきて、實をむすぶ。この草、花の狀、すこし、百合に似たれども、百合の類にあらずといふ。夫木（庭の面の、土さへさくる、夏日に、獨つゆけき、ひめゆりの花）

ひも ナ。紐。ものをつかね、ものをむすぶにもちふるものをすべていふ。允恭紀（さゝらがた、にしきの紐を、ときさけて、あまたはねずに、たゞ一夜のみ）和名（

紐楊氏漢語抄云、紐子比毛（結而可解者也）

ひもかがみ ナ。紐鏡。ひものつきたるかゞみ。また、氷の面の、鏡のごとくひかりてみゆるをいふとぞ。

ひもかがみ 枕。紐鏡。ひもかゞみにつけたる紐は、解くべきものならねば、なときそのこゝろにて、のとにかくるなりとぞ。万十一（紐鏡、能登香山は、たがゆゑぞ、きみ來ませるに、ひもとかずねん）

ひもがたな ナ。紐刀。ひものつきたるちひさきかたな。

びもく ナ。眉目。めんぼく。ほまれ。十訓六（かの社にまゐりて、皇帝以下の秘曲をふく間、白髪たちまちにもとのごとし。尤も、道の眉目といふべし）

ひもさす ワ。ヒトリ。四。紐差。ひもをむすぶ。つぼみいまだひらけず。夫木四（春なほさむみ、とけぬこほりに、ことよせて、まだひもさせる、やまざくらかな）

ひもじ サブ。餓。うゑたり。ひだるし。

ひもじぐさ ナ。火文字草。ひまそしに同じ。鹽語

ひもち ナ。火保。ひのひさしくたもつをいふ。

ひもと ナ。火元。ひのもと。また、くわじのおこれるもと。

ひもとく ワ。ヒトリ。四。紐解。ひもをほどく。つぼみをひらく。万一（筑紫なる、にほふ子ゆゑに、陸奥の、かとりをとめの、ゆひし比毛とく）古今（百草の、花のひもとく、秋の野に、おもひたはれん、人なとがめそ）

ひもの ナ。檜物。ひのきのへぎにてつくりたるまげもの。七一職人歌合（ひものし、くみためる、みげなる水は、懸みれば、月をさへこそ、まげいれてけれ）

ひもの ナ。干魚。うをの、ひにほしたるもの。

ひものし ナ。檜物師。ひものを、なりはひとするひと。七一職人歌合（ひものし、ゆをけにも、これはことにおほきなる、何のためにあつらへたまふやらん）

ひものだくみ ナ。檜物工。ひものし。夫木五雜（まさきとる、ひものだくみや、いでぬらん、村雨すぎぬ、笠取の山）

ひもろぎ ナ。神籬。さかきなどをたてて、かみをいはひまつるところ。万十一（かみなびに、紐呂木たてて、いはへども、ひとのこゝろは、まもりあへぬかも）

ひや ナ。火屋。だびのけぶりをたつるところ。和泉式部集（物へまうでて歸るに、ひやといふものをつくるを、憐と思ひて、かへりての夜、月をみる、憐この、月こそくもれ、晝みつる、ひやの煙や、今やたつらん）

ひや ナ。火箭。ひづゝのたぐひの、ひをとばすもの。

ひや ナ。冷水。ひやみづ。ひやゝかなるみづ。

ひやあせ ナ。冷汗。ひやゝかなるあせ。物をいたくあやぶむときなどに、おぼえずいづるものなり。

ひやう ナ。評。よしあしをさだむるをいふ。

ひやう ナ。莧。草の名。ひゆをいふ。東國などにて、

ひやう ナ。平。ひやうじ。ひやうゐんのもんじ。

びやう ナ。鋲。びやうくぎ。のしがたのくぎ。

ひやうあかざ ナ。莧藜。草の名。ひゆをいふ。陸奥にて、

びやうか ナ。病家。びやうにんのいへ。

ひやうぎ ナ。評議。さうだん。もろともにはかるをいふ。

びやうき ナ。病氣。やまひ。わづらひ。

びやうくぎ ナ。鋲釘。のしがたのくぎを見るべし。

ひやうけつ ナ。評決。ひやうぎしてきむるをいふ。

びやうご ナ。病後。やまひののち。わづらひさるあと。

びやうこん ナ。病根。やまひのおこりたるもと。

ひやうごれう ナ。兵庫寮。頭、助、允、屬などの官人ありて、天子の兵器を納め、御儀をつかさどるところ。

びやうざ ナ。病者。やみたるひと。びやうにん。源若菜（おもきびやうざの、にはかにとぢめつるさまなりつるを、女房などは、心もえをさめず、みだりがはしく）

ひやうし ナ。拍子。てうし。うたのふし。源明石（されも、をきゝ、ひやうしとりて、聲うちそへさまふを）

ひやうじ ナ。平字。ひやうゐんのもんじ。

ひやうしあはせ ナ。拍子合。もののねを、これかれあはするをいふ。源若菜（けふの拍子合には、わらはべをめさんとて、右のおほいどのの三郎、かんのきみの御腹の兄君、さうの笛、左大將の御太郎、横笛とふかせて）

ひやうしぎ ナ。拍子木。ひやうしぎ。田樂豆腐のかたちにきりたる木にて、ふたつをあはせてうちならすもの。

ひやうしごと ナ。拍子事。かこつけごとをするをいふ。

ひやうしぬけ ナ。拍子拔。はずみをうしなふをいふ。

びやうしん ナ。病身。みに、やまひのおほきをいふ。

びやうしや　ナ。病者。やうざ。びやうにん。

びやうしやう　ナ。病症。やまひのたち。

びやうしやう　ナ。病床。やまひのとこ。著聞七（今日、病床へ入り申して、琵琶見參する事に）

びやうじやう　ナ。病狀。やまひのありさま。

ひやうせん　ナ。兵船。いくさぶね。北條五代記（されども、兵船おほく、江戸川につなぎおきさぶらふ）

ひやうそく　ナ。平仄。ひやうじとそくじと。

ひやうそく　ナ。秉燭。あぶらざらのたぐひ。つぼやうなるさらのなかに、ほぞのごときものありて、そこに、みそうしみをさして、ひをともすやうにしたるもの。

びやうたい　ナ。病體。やまひのすがた。

ひやうぢやう　ナ。兵仗。たち、ゆみやのたぐひ。ずゐじんなどのたづさふるもの。平家一（寺僧ども云々、きうせん、ひやうぢやうをたいして射あひきりあひ）

ひやうぢやう　ナ。評定。ひやうぎしてさだむるをいふ。

ひやうぢやうしゆう　ナ。評定衆。武家の役の名。執權と與に、政所に列りて、天下の政務を沙汰するもの。

ひやうぢやうしよ　ナ。評定所。ひやうぢやうしゆうの、あつまりて、よろづをひやうぢやうするところ。

ひやうぢやうせんげ　ナ。兵仗宣下。隨身をゆるさるゝ宣下。但し、これは、文官の上にいふ事にて、武官は、その地位にはなれば、宣下をまたずしてめしつるゝ事なり。

びやうちゆう　ナ。病中。やまひのとき。

ひやうでう　ナ。平調。あきのしらべに同じ。源賀紅葉（御琴とりよせてひかせたてまつりたまふ。きうの琴は、中のほそのたへがたきこそところせけれとて、ひやうでうにおしくだして、あらせたまふ）

ひやうと　ソ。ふと。蜻蛉（ひやうとよりきていふ、撫子の種をとらんとし侍りしかどねもなくなりにけり）

びやうどうに　ソ。平等。ひとしく。たひらかに。

びやうなん　ナ。病難。びやうきのさいなん。

びやうにん　ナ。病人。やみたるひと。わづらひたるひと。

ひやうえふ　ナ。兵法。いくさのみち。たゝかひのあうさ。

ひやうだん　ナ。評判。うはさ。とりざた。

びやうぶ　ナ。屏風。ついたてのたぐひにて、をりてたゝむやうにしたるもの。著聞三（人は、屏風のやうなるべきなり。屏風は、うるはしうひきのべつれば、たふるゝなり。ひだをとりてたつれば、たふるゝ事なし。人のあまりにうるはしくなりぬれば、えたもたず）

ひやうぶしやう　ナ。兵部省。つはものゝつかさに同じ。

ひやうもん　ナ。評文。素襖などの紋にいふ語にて、紋の内を、いろ〳〵の色にていろどりたるをいふ。貞丈雜記

ひやうらう　ナ。兵粮。かて。いくさびとのくひもの。

ひやうらうぜめ　ナ。兵粮攻。たゝかひのとき、てきのひやうらうのみちをふさぎてくるしむるをいふ。

ひやうらん　ナ。兵亂。いくさのおこりたるみだれ。

ひやうろん　ナ。評論。ひやうをしてあげつらふをいふ。

ひやうゐん　ナ。平韵。ゐんを見るべし。

びやうゐん　ナ。病院。びやうにんをいるゝいへ。

ひやうゑ　ナ。兵衞。兵衞府に屬せるものにて、宮門の守衞などをつかさどる。近衞よりはよきものなりとぞ。

ひやうゑふ　ナ。兵衞府。左兵衞、右兵衞の二府あり。二府に、督、佐、尉、志、府生などの官人ありて、兵衞を指揮して、宮門の守衞、行幸の行列などの事を掌る。

ひやかす　ワ。カケ四。冷。ひやす。また、なぶりものにす。

ひやかす　ワ。カケ四。淺漬。ひたすをいふ。東國にて、

ひやかなり　サ。冷。ひやゝかなり。永久百首（あき來て、風ひやゝなる、くれもあるを、あつれまめらひ、むつらしの世や）水鏡（柴のひやゝかなるによりて、夏になりぬれば、もろ〳〵の蛇まとひつけり）

ひやかに　ソ。冷。ひやゝかに。拾遺員外（うちそよぎ、秋の村雨、ひやゝかにて、風はさきだつ、まさのうきくも）

ひやく　ナ。百。もゝ。とをゝとをあはせたるかず。

ひやく　ナ。非役。やくめなくしてあるをいふ。

びやくえ　ナ。白衣。しろきころも。下文を見るべし。貞丈雜記（白衣といふ時は云々、ゑぼしをかぶり、さしぬきを着て、直衣をば着さるまじきなり。直衣を着しさまさず、白小袖をあらはすゆゑ、白衣といふなり）著聞卅（もとゝりをはなちて、小袖びやくえにて）

ひやくかにち　ナ。百箇日。ひとのうせてのち、もゝかにあたるひのとなへ。玉葉（前大納言爲氏、母の百箇日に、

一品經すゝめ侍りけるさゝげものに）

ひやくくわかう　ナ。百和香。ひやくゑかうに同じ。

ひやくくわん　ナ。百官。もゝのつかさに同じ。

びやくこ　ナ。白狐。けのしろくなりたるきつね。

ひやくこく　ナ。百穀。たなつものをすべていふとなへ。

ひやくさう　ナ。百草。くさをすべていふとなへ。

ひやくせう　ナ。百姓。ひやくしやう。空穗吹上（つかさ、ひやくせうは、興ある節をなんおもひよらず侍らん）

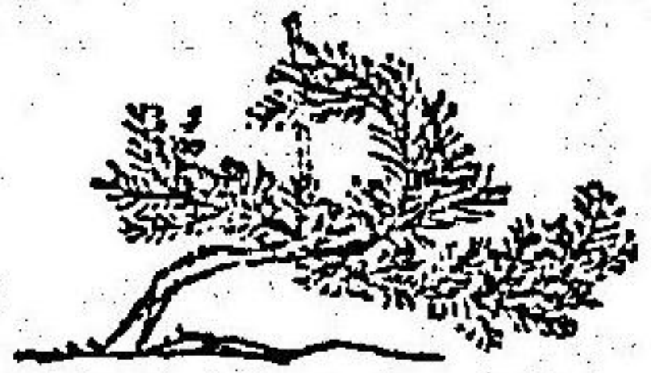
びやくさん　ナ。白散。とその、ふくろにつゝみて、そのまゝは、さけにひたすものなりとぞ。土佐（くすし、ふりはへて、とうそ、白散、酒くはへてもてきたり）

ひやくじ　ナ。百事。すべてのこと。よろづのこと。

びやくし　ナ。白芷。草の名。よろひぐさに同じ。

ひやくじつこう　ナ。百日紅。木の名。さるなめりに同じ。

びやくしん　ナ。柏槇。木の名。ひのきのたぐひ。幹は、松のごとく、葉は、檜のごときもの、杉のごときもの、また、松のごときもありて、一様ならず。



ひやくしやう　ナ。百姓。たみ。おほみたから。十訓二（肥後守盛重は、周防の國の百姓の子なり云々、大臣の御許に參りたりけるを）

ひやくしやうよみ　ナ。百姓讀。からもじをよむに、その文字の偏と旁との字によりてよむをいふ。俚諺

ひやくしやうをとこ　ナ。百姓男。ゐなかのをとこ。

ひやくしやうをんな　ナ。百姓女。ゐなかのをんな。

びやくぜん　ナ。白前。草の名。のかがみに同じ。

びやくだん　ナ。白檀。木の名。せんだんのたぐひにて、その材、きいろくして、すこし黃ばみたり。外國よりわたすものにて、常に、薫物にもちひ、また、藥にももちふ。源鈴虫（阿彌陀佛、脇士の菩薩、おの〳〵、びやくだんしてつくりたてまつりたる）和名（栴檀白者謂之白檀）

びやくぢゆつ　ナ。白朮。さうぢゆつのしろきもの。

ひやくどまゐり　ナ。百度參。神社の拜殿と鳥居との間などを往返して、一日に、百度まゐるをいふ。

ひやくぶ　ナ。百部。蔓草の名。ほどづらに同じ。

ひやくぶのかう　ナ。百歩香。ひやくゑかうのたぐひなるべし。源鈴虫（法花のまんだらかけたてまつりて云々、名香には、からのひやくぶのかうをたきたまへり）

ひやくまんべん　ナ。百萬遍。山城國、知恩寺といふ寺にてする佛事にて、あまたの僧の、おほきなる數珠をくりて、百萬度の念佛をするをいふ。また、寺院ならでも、男女つどひあつまりて、車座にすわりておほきなる數珠をくりて、念佛を唱ふるをもいふ事あり。狹衣三（宮、このほどは、佛の御前にのみさぶらひたまひて、百萬遍みてさせたまふなりけり）

ひやくみ　ナ。百味。さま〴〵のよきくひもの。空穗俊蔭（百味をそなへたる飮食はなりぬ。おやしうたへたる事おほかり。かゝるほどに、年かへりぬ）

ひやくものがたり　ナ。百物語。あまたのひとの、うちつどひて、さま〴〵なるばけものばなしをするをいふ。

びやくらい　ナ。白癩。しらはだ。なまづはだ。

びやくらいにん　ナ。白癩人。しらはだのひと。宇拾四（たふとき事かな、いかなるひとの誦するならんとおもひて、ちかうよりてみれば、白癩人なり）

びやくらふ　ナ。白蠟。しろめに同じ。

びやくり　ナ。白痢。病の名。なめに同じ。

ひやくりやうきん　ナ。百兩金。からたちばなに同じ。

びやくれん　ナ。白蘞。草の名。やまかがみに同じ。

ひやくゑかう　ナ。百和香。あはせたきものに同じ。經信母集（百和香あつめて、歌よまするに）

ひやくゐ　ナ。百會。かしらのつむじのところ。

ひやゝし　サ。ヒ。冷。ひやゝかなり。

ひやざけ　ナ。冷酒。ひやゝかなるさけ。

ひやす　ワ。カケ四。冷。ひやゝかになす。また、うまなどをあらふをいふ。夫木六廿（望月の、駒ひきたてて、ひやしけるこゝやかつらの、せきりなるらん）

びやの　ナ。洋琴。樂器の名。西洋の樂器にて、おほきなる匣の中に、絃線をまうけたるものにて、指にて押して、さま〴〵の音をいださするやうにしたるもの。

ひやひやと　リ。冷々。ひやゝかに。著聞十二（この[illegible]の、ひや〳〵としてあたるをかいさぐるに、何となくぬれ〳〵とありけるを、むや射られにけりと思ひて）

ひやみづ ナ。冷水。ひやゝなるみづ。

ひやむぎ ナ。冷麪。きりむぎの、みづにてひやしたるもの。常盤嫗物語（うどん、まんぢう、ひやむぎ、うんさう、やうかん、あぶらもの、ひきぼし、いりつけ）

ひやめし ナ。冷飯。ひやゝなるめし。

ひやゝかなり サ。冷。ひえたり。あさゝさうすらさぎたり。源夕顔（空のうちくもりて、風ひやゝなるに）

ひやゝかに リ。冷。ひえて。あさゝさうすらさぎて。源總角（雨ハひやゝにうちそゝぎて、秋はつる景色の）

ひゆ ナ。莧。草の名。葉のさま、すこし、藍に似てまろくして斑あり。夏のころ、莖をいだして、ちひさき花さきて、實をむすぶ。實の狀、くろくひらたくして、雞頭の實に似たり。和名（莧和名、比由 味甘寒無毒者也）

ひゆ ワ。ヒトリ。シニ。冷。あさゝさうすらさぐ。あさゝさなくなる。この詞れ、地方によりて、ひえるを下一段にいふ。仲文集（ことゝりや、さされはこそれ、ひえつらめ、君にまくべき、思ひなければ）枕草一（きぬもいきつめたう、居もさる手のひゆるもおぼえず）

ひよう ナ。日傭。ひやとひ、ひとにやとはるゝをいふ。

ひよう ナ。費用。つひえ。いりめ。ものいり。にふよう。

ひようとり ナ。日傭人。ひようを、なりはひとするひと。

ひよくつか ナ。比翼塚。めをとづか。をとこをんなの、よをかこつあまり、のちのよをちぎりて、ともにしぬるなどを、ひとつにあはせてはうぶりたるところ。

ひよくのとり ナ。比翼鳥。はねをかはせるとり。一身にして、雌雄のかたちをそなへたる鳥といふとぞ。但し、まことには、かゝる鳥ありや、なしや。常に、男女のなからひのむつまじきなどをたとへていふ。

ひよくれんり ナ。比翼連理。ひよくのとりとれんりのえだと。男女のちぎりのかたきをいふ。常盤嫗物語（長生殿の夜半にいでし、比翼連理のちぎりまで、後の世かけてかたらひし、そのいにしへもわすられず）

ひよけ ナ。日除。ひおほひに同じ。

ひよこ ナ。雛。ひな。きさ、にはとりのひな。

ひよつと リ。或不圖。あるひは。はからず。ゆくりなく。

ひよと リ。或不圖。あるひは。はからず。ゆくりなく。

ひよどり ナ。鵯。鳥の名。ひえどりに同じ。著聞十（家隆卿、ひさうのひよどりをきのふをいふを、子息の侍從、住吉へもちてくだりけるを、とりにやるとて）

ひよどりじやうご ナ。鵯上戸。草の名。うるしけしに同じ。

ひよひよ リ。鷄のひなのなくこゑ。枕草六（鷄のひなの、あしだかに、しろうをかしげに、きぬみじかなるさまして、ひよ〳〵とかしがましくなきて云々、おやのもとにつれだちありく、みるもうつくし）

ひよみ ナ。日讀。えとをあはせて、年、月、日、時の名をいふにもちふるものにて、子、丑、寅、卯などの十二をいふ。十訓四（ひよみの午の、頭をはさせバ午なり）

ひよみのとり ナ。日讀酉。からもじの偏の名にて、日讀の酉の字を、偏にしたるもの。酎、酡、醐、醍の類。

ひよん ナ。木の名。さるぶえに同じ。

ひよんのき ナ。木の名。さるぶえに同じ。

ひより ナ。日和。そらのはれたるをいふ。また、たゞ、そらのけしきをもいふ。夫木廿（播磨路や、空はひよりに、なりぬとも、あらしはいでじ、むろのとまりに）

ひよりかぜ ナ。日和風。ひよりとなるべきかぜ。

ひよりみ ナ。日和見。ひよりをうかゞふをいふ。また、これかれのけしきをみて、ためらひてゐるをいふ。

ひよろつく ワ。ヒトリ。ロ。蹣跚。あしうごきたゞよふ。

ひよろひよろ リ。蹣跚。あしうごきたゞよひて。

ひよわし サ。ヒ。尪弱。かよわし。よわ〳〵し。

ひら ナ。平。ひらたきをいふ。たひらかなるをいふ。

ひら ナ。平。器の名。ひらわんの、あさくしてひらたきもの。

ひら ナ。比良。山の名。近江にあり。万九（さゞなみの、比良山風の、海ふけば、釣するあまの、袖かへるみゆ）

ひら ナ。枚。片。かみのおもてなどのうすくしてたひらなるもの。源藤裏葉（たよりする、こよみのころ、むつましく、のこりのひらに、老みえにけり）源梅枝（筆のまりくそへて云々、あるきあるなど、けちえんなるひられ、筆をとりなほしようゐしたまへるさまさへ、みしらん人れ、げにめでぬべき御ありさまなり）

ひら ナ。鮃。魚の名。えそに同じ。

ひらあしだ ナ。平足駄。おもてのひらみたるあしだ。宇治拾五十（僧の鬼のごとくなるが、信濃布を、衣にき、椙の平足駄をはきて、大木槵子の念珠をもてり）

ひらいたじき ナ。平板敷。ひろきいたじきにや。中務内侍日記（御前の西は、ひらいたじきは、紫緣しきて）

ひらいと ナ。平絲。いとの、よりのすくなきもの。

ひらう ナ。疲勞。つかれ。くたびれ。

びらう ナ。蒲葵。木の名。あぢまさに同じ。

びらうげ ナ。檳榔毛。びらうげのくるまに同じ。枕草二（こゝろゆくもの云々、びらうげは、のどやかにやりたる。いそぎたるは、わろくしくみゆ）

びらうげのくるま ナ。檳榔毛車。あぢまさにてふきたるくるま。貞丈雜記（檳榔毛車とハ、車の屋根の上を、檳榔といふ木の葉にて葺ひ飾りたる車なり。檳榔の葉ハおほきくして、棕櫚の如し。檳榔の葉なき時ハ、菅の葉を、代にもちふるなり）空穗國讓（よしあるびらうげの車の、すだれを、いとたくあげて）

ひらか ナ。平瓮。さらのたぐひ。かはらけのひらたきもの。和名（瓮字亦作瓫、辨色立成云、比良加、俗云保止岐 瓦器也）

ひらがな ナ。平假字。からもじの草の手をくづして、作りたる文字にて、その姿ぐさくなれども、今、おしなべてもちふるハ、下にいだせるがごとし。あいうえお、かきくけこ、さしすせそ、たちつてと、なにぬねの、はひふへほ、まみむめも、やいゆえよ、らりるれろ、わゐうゑを。空穗藏開（例の女の手、ふさ〳〵ぎりにひらかな）

ひらがなへ ナ。平鍋。なべのたぐひ。ひらたきかなへ。和名（辨色立成云、比良賀奈倍、今案、無脚肉器也、和名俗稱銚子、以為煖酒之器也）

ひらがね ナ。金鼓。樂器の名。ごんく。たゝきがね。わにぐちなどのたぐひなるべしといへどさだかならず。

ひらがき ナ。平垣。かきの、あさくしてひらたきもの。

ひらがる ワ。ヒトリ。ロ。平伏。ひれふす。ひらくなる。宇拾二十（虎ふしさり云々、虎、ひとの香をかぎて、ついひらがりて、猫の、ねずみうかゞふやうにてゐるを）

ひらき ナ。平。器の名。ひらをいふ。下總、陸奥にて、

ひらきど ナ。開戸。まひど。くるゝなどにてひらくど。

ひらぎぬ ナ。平絹。ひらいとにておりたるきぬなるべし。裝束要領抄後附（おなじいろなるいつゝかさねて、うらハ、ひとつ〳〵、くれなゐの平絹をつけたり）

ひらきだしら ナ。葱臺。はしばしらの、かしらに、ねぎぼうしをつけたるもの。和名（橋云々、楊氏漢語抄云、葱臺比良岐讀之、橋兩端所竪之柱、其頭似葱花故云）

ひらく ワ。カナ。四。開。發。ふさをとなつ。おほひをとる。繼體紀（まきさく、檜の板戸を、飫斯毗羅枳）

ひらく ワ。ヒトリ。四。開。發。ふさえなる。ひろがる。ほころぶ。

ひらく ワ。ヒトリ。シニ。開。發。ふさえなる。ひろがる。ほころぶ。はじまる。この語れ、地方によりて、ひらけるを下一段にいふ。山家集（初花の、ひらけはじむる、梢より、そむへて風の、わたるなる哉）古今序（この歌、天地のひらけはじまりけるときよりいできにけり）

ひらくび ナ。平頸。ひさひ。うまのひさひ。著聞十（馬の手綱おもがいをおしたづして、ひらくびをうちてけり。高遠、轡をもちながら、尻居にまろびぬ）

ひらぐも ナ。平蜘蛛。虫の名。蜘蛛の一種。おほきさ五六分ぐらゐ。身ひらみて、色うすぐろし。常に、壁などに居て、錢のおほきさなる、繭のごときものをつくる。

ひらげた ナ。平桁。けたの、ひらたくなりたるもの。

ひらける ワ。ヒトリ。シ一。開。發。ひらくを見るべし。

ひらごめ ナ。糯米。やきごめをいふ。豐前、豐後にて、

ひらざや ナ。平鞘。のだちに同じ。宗五大草紙（さて、御ひらざやと申して、御裝束のときもさゝせられ）

ひらし ナ。扁。ひらたしに同じ。

ひらじき ナ。平敷。ひのおましに同じ。中務内侍日記（ひらじきの御座に、うげん二帖の上に、御裀よそひて）

ひらしま ナ。平島。ひらさくたひらなるしま。

ひらしらげのよね ナ。糲米。くろごめ。和名（糲米、一名。粡米。和名、比良之良介乃與禰、舂一斛之糲取八斗之米也）

ひらすき ナ。比良須伎。ぼん。さらのごときうつわもの。大嘗祭式（比良須伎八十枚、高坏口徑架助）

ひらすげ ナ。平菅。水草の名。あんぺらに同じ。

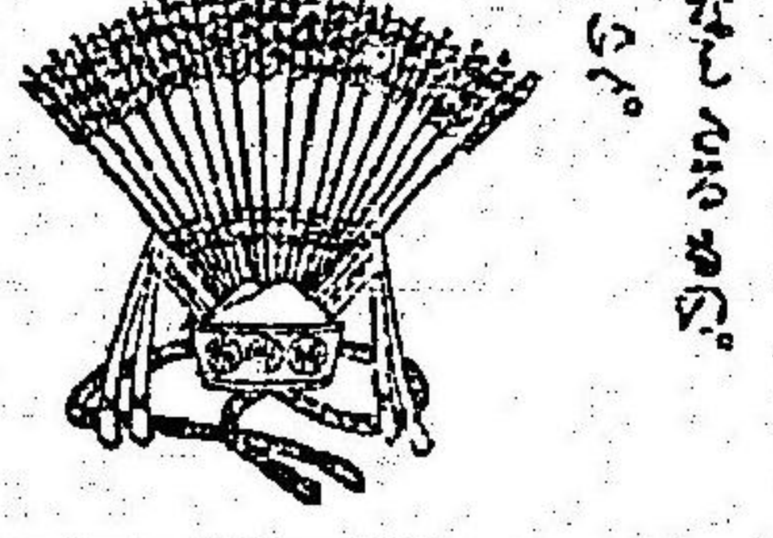
ひらせ ナ。平瀨。せのたひらかなるところ。万廿（あくら川、せゞさひのぼり、平瀨には、さでさしわたし）

ひらた ナ。平田。船の名。ひらたぶねに同じ。

ひらたい　サ。鯛。ひらみたり。ひらたしを見るべし。
ひらたぐも　ナ。平蜘蛛。虫の名。ひらぐもに同じ。
ひらたけ　ナ。平茸。菌の名。松茸に似てちひさく、傘うすく、ひらさくして、色うすぐろし。著聞八十（九條の太政大臣のもとへ、ひらたけをおくるとて）
ひらたし　サ。ヒ。扁。ひらみてあり。よこのかたにひろくあり。この語れ、今れ、ひらたいと、しをいにいふ。
ひらたぶね　ナ。平田舟。そこのあさくしてひらさきふね。和名（艜、釋名云、艇薄而長者曰艜、今按、和名比良太、俗用平田舟）
ひらち　ナ。平地。とちのたひらかなるところ。
ひらづつみ　ナ。平包。ふくさ。ふろしき。雅装（いれくさびらの碇れ、ひらづつみのうさぎしなきなり）
ひらづら　ナ。平面。そとひろきかほ。宇拾九（ひらづらなる法師のふとりさるが、六十ばかりなるにて）
ひらで　ナ。葉盤。かしはの葉をさして、皿のごとくつくりさるもの。かしはのくぼてを見合すべし。
ひらで　ナ。平手。たなそこ。相模集（ふさらさに、もが氏師をいのる哉、このてがしその、ひらでたゝきて）
ひらなべ　ナ。平鍋。なべの、あさくしてひらさきもの。
ひらに　ソ。平。たひらかに。おしなべて。ひたすらに。方丈記（家ども、おほきなるもちひさきも、ひとつとしてやぶれざるはなし。さながら、ひらにたふれさるもあり）十訓六（堅蕃が、さりげなく不便なるやうを、詞をつくして、ひらに、彼が命を乞ひうけけり）

ひらばり　ナ。平張。ひおほひ。てんまくのたぐひ。榮花御賀（とのざら、殿上人、さんでんの御前の庭のひらばりに、みなつきさぶらへり）和名（帟和名比良波利）
ひらびたひ　ナ。平額。ひらさきひさひ。女官の装束のときにもちふるもの。中務内侍日記（常の衣の上に、かいぶのからぎぬ、からけつの衣、ひらびさひなり）
ひらひら　ソ。閃々。そでなどのひるがへるさまをいふ。
ひらぶ　ワ。ヒトリ。四。扁。平伏。ひらさくなる。ひれふす。發心集三（掌をあはせて、敬ひをがみてひらびさぶらひぬ）
ひらぶがひ　ナ。比其夫貝。貝の名。いまさだかならず。
ひらぼね　ナ。平骨。むねのほね。ひらみさるほね。
ひらむ　ワ。ヒトリ。四。扁。ひらさくなる。竹取（燕、尾をささげていたくめぐるにあはせて、手をささげてさぐりさまふに、手に、ひらめるものさはるときに）
ひらむ　ワ。カケ。シニ。扁。ひらさく、なす。徒然草（鼻をおしひらめて、顔をさしいれて舞ひいでさるに）
ぴらん　ナ。靡爛。やぶれたゞるゝをいふ。
ひらめ　ナ。平目。魚の名。かれひのたぐひをすべていふ。
ひらめかす　ワ。カケ。四。閃。ひらくときらめかしむ。
ひらめかす　ワ。カケ。四。平。ひらさくす。枕草九（硯、きたなげにちりばみ、墨の、かさつかるはさきなくすりひらめし、らうおほきにならさるが）
ひらめく　ワ。ヒトリ。四。閃。ひらくときらめく。源明石（雷の鳴りひらめくさま、さらにいはんかさなくて）

ひらもとゆひ　ナ。平元結。かみをそりこみて、もとゆひにもちふるもの。女の髪にもちふるものなり。
ひらもり　ナ。平盛。たひらかにもりなしたるもの。
ひらや　ナ。平屋。にかいなきひくきいへ。
ひらやなぐひ　ナ。平胡簶。すゑひろのかたちになりさるやなぐひ。まとには、二十一筋をならべたるものにて、行幸の供奉などにもちふ。太平三十（あまの両の羽つきたる、平胡簶の服をおひ）



ひららかなり　サ。平。扁。ひらさし。たひらかなり。
ひららかに　ソ。平。扁。ひらさくたひらかに。落窪一（あるきあやかいねりなど、よきねどかさね着て、おもてひらゝにて、北の方とみえたり）
ひらりと　ソ。瞬然。かろくひるがへるさまにいふことば。
ひらを　ナ。平緒。ひらさくうちさるくみ。中務内侍日記（御殺とて、ひらをのふろきをひかせたまひたり）
ひりうづ　ナ。飛龍頭。がんもどきに同じ。
ひりこ　ナ。蛇床子。ひるむしろをいふ。俳諧にて、
ひりつく　ワ。ヒトリ。四。辣痛。ひりくといさむ。
ひりひりす　ワ。ヒトリ。サ。辣痛。つきさすごとくいさむ。
ひりひりと　ソ。辣痛。いたみつきさすごとく。
ひりひりと　ソ。閃々。ひらくと。著聞廿（案にたがはず蛇いでて、ひりくとひろめきてやがてきぬ）

ひりふ　ワ。カチ。四。拾。ひろふに同じ。万廿（いへづとに、貝をひりふと、沖邊より、よせくる波に、衣手ぬれぬ）
ひりん　ナ。鄙吝。いやしくやぶさかなるをいふ。
ぴりあの　ナ。蛇床子。ひるむしろをいふ。陸奥、津軽にて、
びりやうげ　ナ。檳榔毛。びらうげに同じ。
びりやうげのくるま　ナ。檳榔毛車。びらうげに同じ。
びりよく　ナ。微力。ちからのともしきをいふ。
ひる　ナ。蛭。虫の名。形すこし、蚯蚓に似てひらさくして、よく人の血をすふもの。澤、沼、または、田の中などにいでくるものなり。和名（水蛭、和名比流）
ひる　ナ。蒜。野菜の名。葉れ、水仙に似てせまく、根れ、水仙に似てちひさくして、葉も、根も、臭くして、鼻をつくがごとし。後拾（ひるくひて侍りける人の、今は香もうせぬらんと思ひて、人の許にまゐりさりけるに云々、君がかす、よるの衣を、たなばたれ、かへしやしつる、ひるくさしとて）和名（葫和名、比流、葷菜也）
ひる　ナ。晝。ひの、そらにあるあひだ。古今（おとにのみ、菊の白露、夜れおきて、晝れ思ひに、あへずけぬべし）
ひる　サ。乾飯。ひるげ。ひるいひ。ひるさりご。
ひる　ワ。カチ。四。放。まる。かそやにゆく。宇拾廿（尻をかゝげて、もんざふの口より、水をいざすやうにひりちらす）今物語（いそぎ、ひどのへゆきさりけるに、屁をひりひりて、きさ、ものもなりけり）
ひる　ワ。カチ。カ一。簸。あふぐごとくにしてふるふ。箕をつかひて、もののからをもはひのぞくにいふ。

ひる　ワ。カケ。カ一。嚏。くさめす。万十一（うちなげき、むなをぞ嚏つる、劔太刀、身にそふ妹が、おもひけらしも）
ひる　ワ。ヒトリ。カ一。干。かわく。万五（妹がみし、あふちの花れ、ちりぬべし、わがなく涙、いまだ干なくに）古今（みつしほの、ながれひる間を、あひがさみ、みるめの浦に、よるをこそまて）
ひるいひ　ナ。晝飯。ひるげ。ひるめし。ひるさりご。
ひるかひ　ナ。蛭飼。ひるに、血をすはするをいふ。
ひるがへす　ワ。カケ。四。翻。ひるがへらしむ。ひらくとうらがへらしむ。散木（なにさがさ、あまのはぎりは、たつちどり、いくらびいそを、ひるがへすらん）
ひるがへる　ワ。ヒトリ。四。翻。ひらくとうらがへる。
ひるがほ　ナ。旋花。蔓草の名。そやひとぐさ。朝顔のたぐひにて、花の、形状はさくもの。花のさま、葉のさま、朝顔に似たり。但し、花れ、朝顔よりもちひさくして、うすあかく、葉れ、朝顔よりも細ながくして、末とがれり。
ひるぎつね　ナ。晝狐。ひるのきつね。狐れ、夜のものなれば、常に、異なるものをたとへてかくいふ。曾我物語（あいきやうの三郎が歌、夜ならば、こうくをこそなくべきに、あきさまにもしる、ひるぎつねかな）
ひるげ　ナ。晝食。ひるいひ。ひるめし。ひるさりご。
ひるご　ナ。蛭子。神の名。いざなぎ、いざなみ、二柱の神の御子。[illegible]（かぞいろは、あはれとみずや、蛭留能古れ、三年になりぬ、あしたゝずして）

ひるさがり　ナ。晝下。まひるのすこしのち。
ひるさき　ナ。蒜顆。ひるのね。和名（蒜顆比流佐木、今案蒜顆小蒜也）
びるしやな　ナ。毘盧遮那。佛の名。だいにちに同じ。
ひるすぎ　ナ。晝過。まひるを、すこしすぎさるほど。
ひるつかた　ナ。晝方。まひるのころ。源葵（ひるつかたまかりたまひて云々、いかなる御心地ぞ、けふれ、琴もうくでさうぐしやとてのぞきたまへば）
ひるつき　ナ。搗蒜齏。食物の名。ひるをつきて、あへものとしさるもの。和名（搗蒜齏比流豆木）
ひるてん　ナ。鳥網。かすみをいふ。東国にて、
ひるとんび　ナ。晝蔵。ひるぬすびとをいふ。鎮西にて、
ひるなか　ナ。晝中。ひる。まひる。あらひる。
ひるぬすびと　ナ。晝盗。おしいり。がうたう。
ひるね　ナ。晝寝。ひるねむるをいふ。六百番歌合（春の日の、ながさめさき、徒然は、幾度けふも、晝寝しつらん）源蓬生（晝寝のゆめに、故宮のみえたまひければ）
ひるのおまし　ナ。晝御座。ひるのおましどころ。源椎（ひるのおましに、ゐざりいでておはします）
ひるのこ　ナ。蛭子。神の名。ひるごを見るべし。
ひるのこがよはひ　ナ。蛭子齡。みつのよはひをいふ。蛭子は、三年まで、足たゝずといへる故事あるをもていへり。源松風（ひるの子がよはひにもなりにけるを、罪なきさまなるも思ひすてがたくこそ）

ひるべんだう ナ。晝辨當。ひるわりご。ひるやしなひ。

ひるま ナ。晝間。ひるのあひだ。源賢木（さかきの、ふるまひぶるき、ゆゆしくれは、ひるまはすぐせど、やうやうあやせさ）栄花月宴（上、晝間の徒然におぼされけるにさうらせまひて、いつち、宮わたらせきこえさまへて）

ひるまゝ ナ。晝間。ひるめしをいふ。土佐にて。

ひるまき ナ。蛭巻。薙刀の柄などの、藤にてまきたるもの。その状、蛭のまきつきたるに似たれどいふ。

ひるます ワ。カ゚。四。晝増。ひるましむ。蘭學教録（おなじつらにひるまさふ、まくくねつべし）

ひるますぼ ナ。腓。こむらをいふ。中國にて。

ひるまへ ナ。晝前。まひるのすこしまへ。

ひるむ ワ。ピャ。四。怯。ちぢらくちぢく。そそらぎをうしなふ。平家十（文覚が、刀もちさる右のかひなを、きさうようつ。うされて、ちつとひるむところに、えさりやおうと、太刀をすててぞくんさりける）

ひるむしろ ナ。蛇床子。草の名。川苔に似て、葉ちひさく、夏のころ、きろくちひさき花さきて、珠の状をなす。その小さな、すこし、藁本に似たり。實は、赤く黄ばみて、蛇のおほきさなるをもて、やぶじらみともいふ。きさ、この草のほとりに、常に、蛇のたぐひすめりといふ。枕草三（草は云々、みくり、ひるむしろ、こけ、こそて、雪間のわかくさ）和名（蛇床子和名比流牟之呂）

ひるむやまひ ナ。痿痺。おびれて、そろらきをうしなふをいふ。和名（痿痺俗云比留無夜末比不能行也）

ひるめ ナ。晝目。神樂歌の曲の名。神樂歌（晝目歌、いろむさり、よきもざしてか、あそでるや、比留女の神を、あむしきかん、あむしきかん）

ひるめし ナ。晝飯。ひるげ。ひるいひ。ひるくふおもの。おめん物語（晝飯をかしきて、晝飯にも持されたり。そのとぎに、我等も、晝飯をもちうてたべておじやつさ）

ひるも ナ。蛇床子。草の名。ひるむしろに同じ。

ひるもの ナ。晝物。ひるげ。ひるいひ。ひるくふおもの。

ひるやしなひ ナ。晝飯。ひるげ。ひるくふおもの。今昔廿六（晝のやしなひせんとて、鍛の中にいるを、ひとちうにみぐるし、今すこしいりてこそといひければ）

ひるやすみ ナ。晝休。ひるげののちのやすみ。

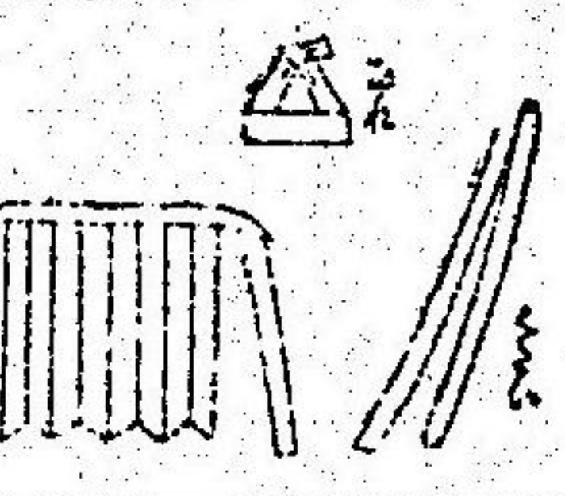
ひるよる ナ。晝夜。ひるとよると。古今（おほみやまの、ひさかたの、ひるよるわかず、さぶらひて）

ひるわりご ナ。晝破子。ひるべんたう。ひるやしなひ。宇拾（魚などくいてくづほれてくずるわひぎ、なにしかの丈六堂の邊にて、ひるわりごくふに、弟子、一人、近邊の在家にて、魚をこひてすゝめたりけり）

ひるゐ ナ。比類。たぐひ。くらぶべきもの。

ひれ ナ。鰭。むさ、魚の左右の脇につきたるもの。魚の、およぐときにうちふりてゆくものなり。公朝集（小舟の、とどちの水の、かれぐれに、ひれふる魚に、せれをよそふり）和名（鰭和名波太、俗云比礼、魚背上鬣也）

ひれ ナ。領巾。むかし、女のかざりに、項より、肩のかさにかけたるもの。後には、裳にとりつけて、もちぬるやうになれりといふ。裳のところの圖を見合すべし。万三十（領布つむ、あまをとめども、うなかせる、領巾もてるがに、手にまけれ、玉もゆらに）和名（領布日本紀私記云比禮婦人項上飾也）



ひれい ナ。比例。れいをいだしてくらぶるをいふ。

びれい ナ。美麗。うつくしくうるはしきをいふ。

ひれう ナ。肥料。こやしにもちふるもの。

びれう ナ。檳榔。木の名。あぢまさに同じ。

びれうのくるま ナ。檳榔車。びらうげのくるま。宇拾二（我ゆきてこころみんとおぼして、晝の裝束うるはしくして、びれうの車にのりて、御前おほく具して）

ひれつ ナ。卑劣。おとなひなどのいやしきをいふ。

ひれなが ナ。鰭長。魚の名。まびの一種にて、左右の鰭くろくながくして、まさすこしあかみあり。

ひれふす ワ。ヒトリ。四。平伏。ひらさくなりてふす。うつぶけになりてふす。枕草一（これ、翁丸をいふに、ひれふしていみじくなく）宇拾卄一（猫の、ねずみをうかがふやうに、ひれふして、きむしむちありて）

ひれふる ワ。ヒトリ。四。振領巾。ひれをうちふる。女のいにしへ、人をまねくにせし事なり。万五（とほつひと、松浦佐用姫、つまごひに、ひれふりしより、おへる山の名）

ひれふるやま ナ。領巾振山。山の名。肥前國の松浦の郡にあり。万九（やまの名と、いひつげとかも、さよひめが、このやまの邊に、ひれをふりけん）

ひれん ナ。飛廉。草の名。そそきに同じ。

ひれゑぼし ナ。平禮烏帽子。ゑぼしのなりさるもの。下文を見るべし。貞丈雑記（ひれゑぼし云々、ゑぼしのいささなりて、かぶる事を、平禮といふなり。何のゑぼしにてもあれ、なりさるれ平禮なり）

ひろ ナ。尋。左右の手をひろげて、さきのべたるながさ。雑筍（ひろむなりのへさてまても、割雁しつるとや、この君もおほすらんさ、いみじうそつらしければ）

ひろ ナ。日。ひとひふに同じ。万二十（六十國に、経渡りつ、ぎひ、ふせぎり、あかぜん比露を、みる人もがな）

ひろい サ。廣。うちひらけてあり。ひろしを見るべし。

ひろう ナ。披露。ものごとを、おほやけにあらはするをいふ。

ひろう ガ。披講。ものごとを、おほやけにしらするをいふ。千載集（序、この事をきゝて、ひきはなりて、紀諸をかきて、三塔に披露せらるそのことこと）

びろう ナ。尾籠。かた。ぶれい。まつれい。平家一（尾籠そんもしてこそふるまふべきに、おやうの尾籠をげんじて、入道の服名をたて、やせうのいかり）貞丈雑記（尾籠とは、字を、音にて、ぜつうとよむゆゑ、意きこえざるし。字の訓にて、ヲコとよむこと本なり）

ひろうじやう ナ。披露状。つけじやうに同じ。

びろうど ナ。天鵞絨。織物の名。鳥の羽のごとく、毛をうゑならべたるやうにうるはしくおりなしたるもの。

びろうどうを ナ。天鵞絨魚。魚の名。あをだに同じ。

ひろがす ワ。カ゚ケ゚シニ。廣。ひろがらしむ。平治（左右の手をきりて、卒をひろげさせ、土に、股をまいて）

ひろがる ワ。ヒトリ。四。擴。ひろくなる。ひろくつらなる。

ひろぐ ワ。カ。シニ。廣。ひろくなす。ひろからしむ。この語は、地方によりては、ひろげるを下一段にいふ。万六十（大野路は、しげぢ、しげぢゆくとも、君しかよはれは、道は廣計武）玖式（みどころある絵どもは、ゆるしければ、かきさしつゝひろぐるほどに）

ひろげる ワ。カ。シニ。廣。ひろぐを見るべし。

ひろこうぢ ナ。廣小路。おほぢ。ひろきみち。

ひろごる ワ。ヒトリ。四。擴。ひろがるに同じ。枕草一（柳などのをかしきこそ、ひろごりたるはにくし）源篝火（遣水のほとりに、けしきことに、ひろごりふしたる檀の木の下に）

ひろし ケ。ピ。廣。弘。うちひらけてあり。たてよこにも、ながし。その語は、今は、ひろいと、しをいにいふ。伊勢（その瀧、ものより高くなり。長さ二十丈、ひろさ五丈ばかりなる石の面に、白絹に、岩をつゝめらんやうになんありける）源少女（何事も、ひろき心をあらぬ程は、文才をまねぶも、琴、笛の調べにも）

ひろそで ナ。廣袖。そでの、ふくろのごとくならぬもの。

ひろたか ナ。廣高。仁賢のみかどの大和の宮の名。

ひろには ナ。廣庭。げんくわんのまへのひろきには。

ひろの ナ。廣野。ひろきの。

ひろど ナ。廣場。ひろきところ。うちひらけたるところ。

ひろばかり ワ。尋許。ひとひろほど。催馬樂（あげまきや、ひろばかりや、さうく、さかりてねたれども、まろびあひにけり、かよりあひにけり）

ひろひよみ ナ。拾讀。ものをよむに、おのれが知れる文字のみをひろひつゝ、たどるやうにしてよむをいふ。

ひろびろと サ。廣々。ひろく。ゆるやかに。源玉鬘（御門ひろきよりけそひことにひろくとして）

ひろふ ワ。カ。四。拾。おちたるものをとる。万六（わすれがひ、ひろひたると、こふれば、くるし、暇あらば、拾ひてゆかん、戀忘貝）

ひろぶた ナ。廣蓋。からびつのふた。衣服など、たまはるときに、そのものをのする事なり。長門平家五（御剣七腰、御衣十二領、ひろぶたに入れてまゐらせたり）

ひろま ナ。廣間。ざしきなどの、ことにひろきところ。

ひろまへ ナ。廣前。神の御前をたゝへていふことば。文徳實録（天御柱國御柱乃廣前爾申賜倍止申久）

ひろまる ワ。ヒトリ。四。弘。ひろくなる。ひろくおこなはる。御堂關白集（わなたふと、のりのひろまる、きみがよに、かぎりなきまで、おもほゆるかな）

ひろみ　ナ。廣場。ひろきところ。平家五（山うちこえ、ひろみへいでて、軍をせんとせやられけれども）

ひろむ　ワ。カナ。レニ。弘。ひろくなす。ひろくおこなはしむ。この詞へ、地方によりて、ひろむるを下一段にいふ。源風松（をそぞろしき名をひろめて、おやの御なきかげをそうそしめん事のいみじきになん）

ひろめ　ナ。昆布。海草の名。こんぶ。海の底の岩などにつきていでくるものにて、ひろくながくして、波にゆらめくさま、布なぞをそへてあるがごとくにて、その長さ、二三丈ばかりなるもありといふ。和名（昆布、本草云、昆布、味醎寒無毒、生東海和名比呂米、一名衣比須女）

ひろめく　ナ。弘。あまねく、ひとにおほするをいふ。

ひろめかす　ワ。カナ。四。閃。翻々。ひらめかす。ひらくとす。榮花初花（網草の志りに、殿上人ひきつれて、いろくなるさまぐにて、あふぎ扇をひろめかしつかひて）

ひろめく　ワ。ヒワリ。四。閃。翻々。ひらめく。ひらくとす。枕草二（にきなどやかにおきて、ひろめきたちて、なにぬきのこし、うちとくひきゆひなほし）

ひろめる　サ。ワケ。シタ。弘。ひろくなす。ひろむを見るべし。

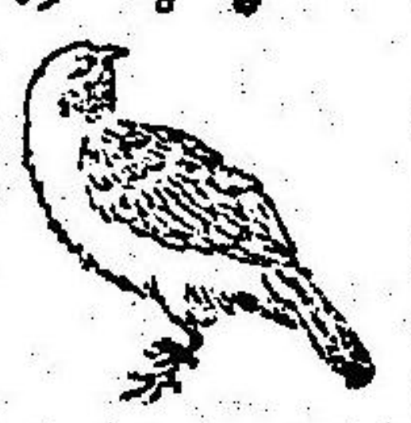
ひろやかなり　ナ。廣。ひろし。うちひらけたり。

ひろやかに　ナ。廣。ひろく。うちひらけて。

ひろらかなり　ナ。廣。ひろし。うちひらけたり。宇拾七（さえ、すしあゆのおぜくさはひろらかなるが、志りかしらばかり、おして、三十ばかりもりたり）

ひろらかに　ツ。廣。ひろく。うちひらけて。

ひろろぐ　ヲ。ヒトリ。四。起居おとまらぬさまあり。たちゐするにもこえしくあり。狹衣二（遣戸あくるに、いとおとなひなかれたちゐひろろぐほどに、おと聞えて）



ひわ　ナ。鶸。鳥の名。かたち、雀よりもちひさくして、全身あをく、黄ばめり。但し、頭、翅のあたり黒きところありて、腹は灰色なり。山家集（こゑせずと、色こくなると、おもはまし、やなぎの芽をむ、ひわのむらどり）枕草三（鳥は、他所の物なれど、あうむいと憐なり云々、ほととぎす。くひな。しぎ。みやこどり。ひわ。ひたき）

ひわし　ナ。火口袋命。あまのひわしに同じ。

ひわたり　ナ。火渡。ひのうへを、ふみてわたるをいふ。修驗者などの、祈禱の時などにする事なり。

ひわちや　ナ。鶸茶。染色。ひわのはねのきなみあるもの。

ひわづなり　サ。脆弱。ひはづなりを見るべし。

ひわづに　ツ。脆弱。ひはづにを見るべし。

ひわり　ナ。干割。ひでりにわれさけたるをいふ。

ひわりご　ナ。檜破子。ひのきにてつくりたるわりご。空穂國譲（かかるほどに、大殿の御方より、ひわりご、みき、つむいものなどたてまつりたまへり）

ひわる　ワ。ヒトリ。シニ。干割。かわきて、さけさるごとくなる。この語へ、地方によりて、ひわれるを下一段にいふ。源氏（ただ、いまはかきて、柱のひわれたるそぎまに、かうがいのさきしておしいれたまふ）

ひをる　ワ。ヒトリ。シニ。氷いでく。ひをいできて、おけるごとくなる。この語へ、地方によりて、ひをれるを下一段にいふ。夫木抄（みなといづる、からのとまふね、ゆすれども、ひをれもやらぬ、あつごほりかな）

ひをれ　ナ。干割。さけめ。さけんをするところ。

ひをれる　ワ。ヒトリ。シニ。干割。ひをるを見るべし。

ひをれる　ワ。ヒトリ。シ一。氷いでく。ひをるを見るべし。

ひを　ナ。氷魚。魚の名。かたち、すべて、しらうをに似て、ちひさし。冬のころ、河に、網代をかけてとるものなり。源氏総角（あじろは、人さわがしげなり。されど、氷魚もよらぬにやあらん。すさまじげなるけしきなりと）和名（鮎今按、俗云、氷魚是也、白小魚名也、似鮎魚長一二寸者也）

ひをけ　ナ。火桶。ひばち。ひなうづめてなどなあるもの。枕草十（くらきほどに、文を得て、火ともすほどもこふもとなきにや、ひをけの火をはさみあげて、たどたどしげによみゐるこそをかしけれ）

ひをとる　ワ。ヒトリ。四。日取。ひをえらぶ。宇拾九（長者よろこびて、婿にとらんとて、日をとりてちぎりてけり）

ひをむし　ナ。蜉蝣。虫の名。朝にうまれて、夕に志ぬるちひさきむし。源総角（何か、そのひをむしにあらそふ心まで）和名（蜉蝣、辨色立成云、比乎無之、朝生暮死虫也）

ひをり　ナ。引折。ひなをりのひに同じ。散木（なかき根の、花の袂に、薫る也、けふや真弓の、ひをりなるらん）

ひをりのひ　ナ。引折日。まてつがひのひをいふ。てつがひのところ見合すべし。伊勢（むかし、右近の馬場のひをりの日、むかひにたてたりける車に）

ふ

くちびるにふれていづる
ひとつのこゑにて、フとウとかよはれるこゑなり。

ふ　ナ。節。ふし。あみさるすぢ。万十（まそごの、布のみぢかくて、おもなへて、沖津棹網の、なげきぞあがする）

ふ　ナ。副。官の名。すけを見るべし。

ふ　ナ。麩。からこのかす。小麦の皮を、水にひさして、絨度ともなく、おしもむときは、汁ねばりて、餅のごときものいでくるを、さらに、また、水にひさしておしもみくしてさらしたるもの。そのなまなるものは、生麩といひ、やきたるものは、焼麩といふ。

ふ　ナ。譜。けいづ。また、ものごとのしなじな、たぐひなど、ついでをたててかきたるもの。源若菜（こよなうつたへたる譜といふものの限を、あまねくみあはせて）

ふ　ナ。府。つかさ。やくしよ。また、縣のたぐひにて、都、または、都ぢかき地方の事をふさね、をさむるところ。

ふ　ナ。斑。おやのまだらなるもの。経古（もしどうぞ、末野の原の、はくらかり、あらふは旅の、色をまがへて）

ふ　ナ。生。草木の、あまたおへたるところ。あそふ、すきふなど。古事記（かしの布に、よくすをつくり、よくすに、かみし大御酒、うまらに、きこしもちをせ）

ふ　ナ。二。ふたつ。ひとつに、ひとつをあはせたるかず。

ふ　ワ。ヒトリ。シニ。經。歷。さつひをこえてゆく。この語へ、地方によりて、へるを下一段にいふ。万十九（そこともおなじところぞ、家ざかり、年の經ぬれば）源若菜（國の司などもおきける事なれば、のぼりの節、ゆへるにもへきころかまへるにもなくしたりける）

ぶ　ツ。不。名詞の頭につけて、あらずをうちけす語。

ぶ　ナ。夫。よぼろ。にんそく。榮花うたがひ（御封、御莊どもより、一日に、六五百人、千人の夫どもを恋のみも、人のかずおほかるをば、かしこきことにおぼしたり）

ぶ　ナ。武。たけきいきほひをもちふるをいふ。

ぶ　ナ。歩。田のひろさをはかるにいふことばにて、一歩は、曲尺にて、四方、六尺のひろさなり。

ぶ　ナ。分。ながさをはかるにいふことばにて、一分は、一釐を、十あはせたるながさなり。

ぶあひ　ナ。歩合。いくつにわけてみるをりあひ。

ふあんしん　ナ。不安心。あんしんのいできぬをいふ。

ふあんない　ナ。不案內。あんないをしらぬをいふ。

ふい　ナ。不意。おもひかけず。ゆくりなし。

ふい　ナ。布衣。つかさくらゐなきたびびと。

ふいう　ナ。富有。ふげん。かねもち。とみたるひと。

ふいがう　ナ。鞴。ふきがは。喫隱狀沙（まがねは鐵なり。鍛冶の、ふいがうにて、くろがねをふきおこすなり）

ぶいき　ナ。不意氣。みやびやかならぬをいふ。

ぶいく　ナ。撫育。めぐみそだてゆくをいふ。

ふいご　ナ。鞴。ふいがう。ふきがはを見るべし。

ふいごまつり　ナ。鞴祭。かぢのまつるまつり。陰暦の霜月八日にありといふ。天目一箇命をまつるなるべし。

ふいちやう　ナ。吹聽。ひろうといふに同じ。

ふいと　ツ。ふと。やがて。そのままに。かりそめに。

ふいに　ツ。不意。おもひかけず。ゆくりなく。空穂國譲（その日、ふいに、人にさそはれてまつり）源行幸（思ひかけぬ御事侍りて、ふいにたづねとりて侍るを）

ぶいん　ナ。無音。ひとに、おとづれをせぬをいふ。

ふいり　ナ。斑入。いろがへりのところありて、まだらになるをいふ。草木の花、また、葉などにいふ語なり。

ふう　ナ。風。ふり。かたち。すがた。ならはし。

ふう　ナ。封。たやすくひらかせぬためには、とぢたるところに、かみなどにて、そのしるしをつくるをいふ。源姫綴（口の方をゆひたるに、かの御名の封つきたり）

ふういん　ナ。封印。ふうのしるしにつくるおしで。

ふうう　ナ。風雨。あめかぜ。ふきぶり。

ふうか　ナ。富家。とみたるいへ。かねもちのいへ。

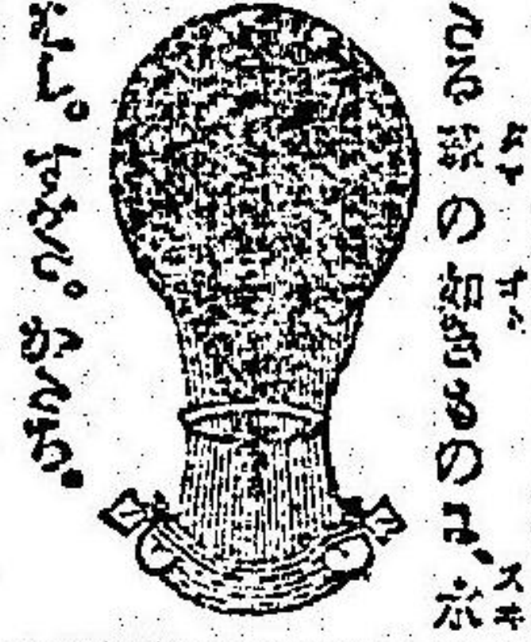
ふうが　ナ。風雅。みやび。ふうりう。

ふうがえり　ナ。風變。ふりの、つねとかはれるをいふ。

ふうかん　ナ。諷諫。とほまはしにいさむるをいふ。

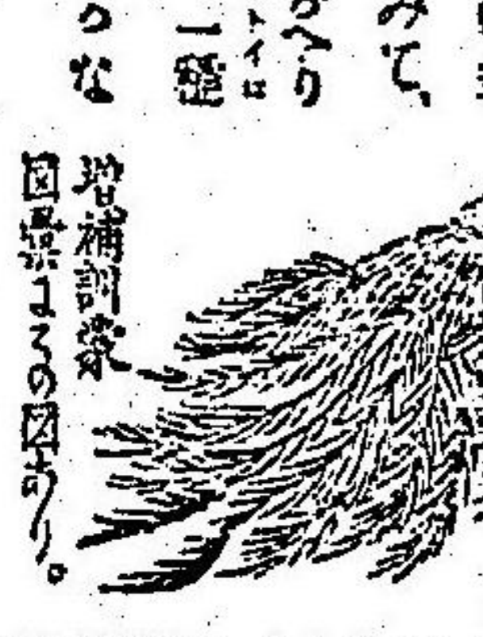
ふうがん　ナ。風眼。眼病の名。めに、ねつをおこすもの。

ふうき　ナ。富貴。とみさかえたふときこと。
ふうき　ナ。風気。かぜけ。かぜのやまひ。
ふうぎ　ナ。風儀。しつけ。ならはし。たちゐのふるまひ。
ふうきん　ナ。風琴。楽器の名。西洋の楽器にて、おほくの管に、風をいれて、指にてならす様にしたるもの。
ふうけい　ナ。風景。けしき。みはらし。てうばう。
ふうさい　ナ。風采。ひとがら。ひとゝなりのすがた。
ふうしつ　ナ。風疾。病の名。りうまちすに同じ。
ふうしふ　ナ。風習。ならひ。ならはし。しきたり。
ふうじぶくろ　ナ。封袋。てがみをつゝむふくろ。
ふうじめ　ナ。封目。ふうをつけたるくちのところ。
ふうじや　ナ。風邪。かざけ。かぜのやまひ。
ふうしよく　ナ。風色。けしき。ふうけい。みはらし。
ふうず　リ。カナ。カ。封。ふうをなす。とぢていでられぬやうになす。源若菜（もののはゞかりて、物語しきまも、おもむらいさけれど、ふうじこめて、うへなし、まさをとらさはものびてものしてまつりたまふ）
ふうせつ　ナ。風説。うはさ。とりさた。
ふうせん　ナ。風船。けいききう。そらをのりありくふねのごときもの。布帛にてつくりたる袋の如きものに、水素瓦斯などいふものをいれて、空気よりも軽くならしめて、大空にのぼるなり。



ふうぞく　ナ。風俗。ならひ。ならはし。すがた。かたち。

ふうぞくうた　ナ。風俗歌。かぐらうたのたぐひ。
ふうたい　ナ。風帯。几帳のうへにたるゝ帯のごときもの。
ふうたい　ナ。風袋。はかりにてかくるものを、つゝみなどしたるもの。物の正味なるをもて、その物をとりのけねば、まことの目方はあらはれぬものなり。
ふうたいだふし　ナ。風袋倒。おもげにはみえてかろきもの。とろきものの、うへのみえのみよきもの。
ふうち　ナ。風致。あぢはひ。おもむき。
ふうちん　ナ。風鎮。かけものの軸にかくるおもし。
ふうてい　ナ。風体。すがた。かたち。ありさま。
ふうてう　ナ。風鳥。鳥の名。かたち、三光鳥に似て、脚は鼠の足のごとく、尾は、雉の尾のごとし。常に洞の中にすみて、風ふけば、風にのりてひるがへりとぶといふ。但し、尾長鳥の一種なりといふ説もあり。さだかならず。なほなほとり見合すべし。



増補訓蒙図彙よりの図なり。

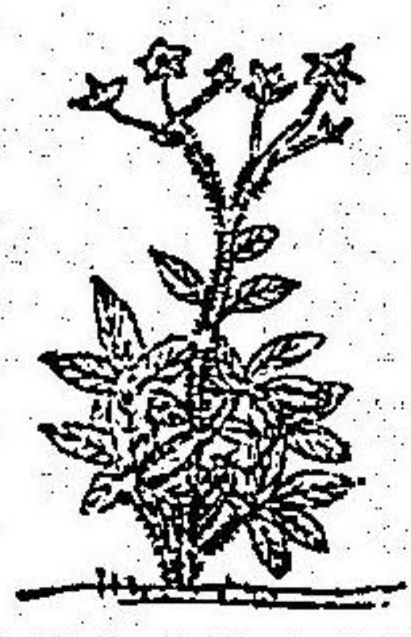
ふうてう　ナ。風潮。風にゆらるゝうしほ。よのいきほひ。
ふうてん　ナ。風顚。きちがひ。ものぐるひ。
ふうど　ナ。風土。そのところのきこうなど。
ふうどく　ナ。風毒。病の名。りうまちすに同じ。
ふうは　ナ。風波。なみかぜ。いさかひ。あらそひ。
ふうひやう　ナ。風評。うはさ。よのとりざた。
ふうふ　ナ。夫婦。いもせ。めをと。宇拾十（下人どもにはいもとなまはず。夫婦、てづからみづからしてめさせけり）

ふうぶん　ナ。風聞。うはさ。よのとりざた。月詣集（女にしのびてかよひ侍りけるが、風聞し侍りければつかはしける、いづくより、ふきくる風の、ちらしけん、たれもしのぶの、もりのことのは）
ふうみ　ナ。風味。あぢ。あぢはひ。
ふうん　ナ。不運。ふしあはせ。さいはひなきをいふ。
ふうん　ナ。浮雲。うきたるくも。たゞよひたるくも。
ぶうん　ナ。武運。たゝかひなどのうんめい。
ふうらいもの　ナ。風来者。らうにんのたぐひのもの。
ふうらん　ナ。風蘭。草の名。深山の樹の岐などにいでくる草にて、葉のさま、すこし、萬年青に似て、細くしてちひさし。夏の末、茎をいだして、蘭に似たる白き花を開く。また、一種、花のきばめるもあり。
ふうりう　ナ。風流。すき。みやび。袖中抄廿（風流は、萩拾山の月をながむる、旅人のかさつくりさるな）
ふうりう　ナ。風流。いろのぼりをいふ。西国にて。
ふうりん　ナ。風鈴。つりがねのかたちしたるちひさきものにて、軒などにつりて、風にゆらしめて、音をきくもの。但し、昔は、風を占る為のものなりとぞ。
ふうゐん　ナ。風韻。みやびなるあそび。
ふえ　ナ。笛。楽器の名。竹に、孔をあけてふきてならすやうにしたるもの。竪にふくもの、横にふくものなど、そのたぐひさまぐあり。和名（横笛、和名、古布江）

ふえ　ナ。吭。のどぶえに同じ。和名（吭云々俗云乃無止布江）
ふえ　ナ。鰾。いをのふえに同じ。
ふえたけ　ナ。笛竹。ふえといふに同じ。千載（笛竹の、おなあさましの、世の中や、有しや節の、限なるらん）
ふえふき　ナ。笛吹。ふえをふくひと。万六（うぐひすを、我をめすらめや、笛吹と、我をめすらめや）
ふえふき　ナ。笛吹。魚の名。やがらに同じ。
ふえふきむし　ナ。笛吹虫。虫の名。いなごまろに同じ。
ふえふきやま　ナ。笛吹山。山の名。丹波国の多紀の郡にあり。夫木（あしびきの、ふえふきやまの、まつかぜに、よろづ代のあき、しらべこそすれ）
ふえん　ナ。不縁。えんとみのやぶるゝをいふ。
ふえん　ナ。布衍。ひろぐるをいふ。のぶるをいふ。
ぶえん　ナ。無塩。しほなどにつけぬなまのうを。
ふえる　ワ。ヒトリ。シ。殖。ふゆを見るべし。
ふか　ナ。鱶魚。魚の名。形、すこし、井守に似て、頭はまろくひらく、口はひろくしてとがれり。また、背は、みつの骨の甲ありて、尾は岐あり。また、全身は、鱗なく、たゞ、灰色のあつき皮のみありて、その状、すこし、鮫にも似たり。和名（鱶魚、布可）
ふか　ナ。鱶魚。魚の名。さめをいふ。大和にて。
ふか　ナ。深。ふかきもの。ふかし。
ふか　ナ。富家。ぶげん。とみたるいへ。
ふかい　ケ。深。そこのかさとほし。ふかしを見るべし。

ふかいり　ナ。深入。ほどをすぎているをいふ。
ふかう　ナ。不孝。ふけう。おやに、よくつかへぬをいふ。
ふかう　ナ。不幸。ふしあはせ。さいはひのなきをいふ。宇拾十（いみじく、不幸なりける侍の、夜昼まめなるが、冬なれど、かたびらをなん着たりける）
ふがう　ナ。富豪。かねもち。ものもち。とみたるひと。
ふがう　ナ。符号。しるし。あひじるし。
ふかく　ナ。不覚。こゝろのすゞろはしくて、あとさきなどのたしかならぬをいふ。宇拾三（吾殿色は不覚のやつかな、御車を、かくめしのさぶらはれを、我にいひてこそ貸し申さめ、ふかくなりといへば）
ふかく　ナ。不学。がくもんのちからなきをいふ。
ぶがく　ナ。舞楽。まひのつきてあるおんがく。徒然草（天王寺の舞楽のみ、都にはぢずといへば）
ふかくさ　ナ。深草。地の名。山城国、紀伊の郡にあり。古今（としをへて、すみこしさとを、いでていなば、いとゞふかくさ、野とやなりなん）
ふかくさのみかど　ナ。深草帝。仁明のみかどを申す。大和（ふかくさのみかどと申しける御とき、良少将といふひと、いみじき時にてありけり）
ふかぐつ　ナ。深沓。そこのふかきくつ。枕草六（沓どももてきて云々、ふかぐつ、そうくせなどもきて、廊のほどなどくつすりいるは、うちさとりめきてきおろし）
ふかくにん　ナ。不覚人。ふかくのひと。十訓一（主上の御子日あらば、いかなる歌をよむべきぞや、さぞむひの不覚人かな、さる事、さる宮の子日にかゝる歌よむやうやあるとぞいひける）

ふかし　ク。ヒ。深。そこのかさとほし。おくぶかきなり。この語は、今は、ふかいといふ。古今（かれてのちをば、夏草の、ふかくもひとの、おもほゆるかな）源若紫（北山に云々、まだあかつきにおはす、やゝふかういるところなりけり）
ふかしぎ　ナ。不可思議。ふしぎ。おもひはかられぬこと。
ふかす　ワ。カナ。シニ。蒸。むす。ゆげをとほしてにる。
ふかす　ワ。カク。四。深。ふけしむ。たけしむ。源葵（のさまびしもらひ、忍びて、いたう夜ふかして、もてまゐれり）
ふかぜり　ナ。深芹。ねぶかきせり。拾遺（茎も葉も、みな緑なる、ふかぜりは、洗ふ根のみや、しろくみゆらん）
ふかそぎ　ナ。深削。かみおきのたぐひ。小児のいつゝの年する祝にて、髪の先をすこしそぐをいふ。貞丈雑記
ふかだ　ナ。深田。ぬまた。どろのふかきた。
ふかつみ　ナ。石龍芮。草の名。葉の状、すこし、人参の葉に似て、おほきくして、つやゝかなるひかりあり。夏の頃、ちひさき黄色なる花さきて、実をむすぶ。毒草なりといふ。喰ふべからず。和名（石龍芮、和名、布加豆三）



ふかづめ　ナ。深爪。つめを、ふかくきるをいふ。

ふかで　ナ。探手。いたで。おもで。ふかききず。

ふかの　ナ。深野。くさの、ふかくしげりたるの。

ふがひなし　サヒ。無性なし。つきなし。おろかなり。嬉遊笑覧

ふかふ　ナ。符合。わりふのあひたるをいふ。

ふかぶち　ナ。深淵。ふち。みづのふかきところ。

ふかみぐさ　ナ。深見草。灌木の名。ぼたんの異名。千載（いひしれず、おもふむかし、ふかみぐさ、花さきてこそ、色にいでけれ）和名（牡丹、一名鹿韭和名布加美久佐）

ふかみどり　ナ。深緑。こきみどり。頼業（ふかみどり、松はもあらね、わさあけの、衣さへはぞ、志づみそめけん）

ふかみる　ナ。深海松。みるの、うみのそこにあるものはや。万二（深海松の、ふかめて思へど、さぬる夜は、いくらもあらず、はふつたの、わかれしくれど）

ふかむ　サカ。シニ。深。ふかくなす。古今（あひみねば、爰こそまされ、水無瀬川、なにはふかめて、思ひそめけん）

ふかん　ナ。不堪。げいはかんのうならぬをいふ。徒然草（無智にして、大才はまじはり、不堪の藝をもちて、堪能の座につらなり云々、身をむつしむるなり）

ふかんでんのそう　ナ。不堪田奏。九月の公事にて、諸國の田の損じたるを奏聞する公事をいふ。公事根源

ふがよし　サヒ。禍を、からうじてまぬかれたるをいふ。

ふき　ナ。蕗。野菜の名。ふふきに同じ。

ふき　ナ。袘。ころもの裾をあましいだして、裾のかさね、縁のごとくにて、縫ひいだしたるところをいふ。

ふき　ナ。不軌。むほんをくはだつるをいふ。

ふぎ　ナ。不義。おこなひの、みちにそむけるをいふ。みそかのたぐひの、あるまじきわざをするをいふ。

ぶぎ　ナ。武器。つはもの。たゝかひにもちふるだうぐ。

ふきあがる　ワ。ヒトリ。四。吹上。ふきてあがる。

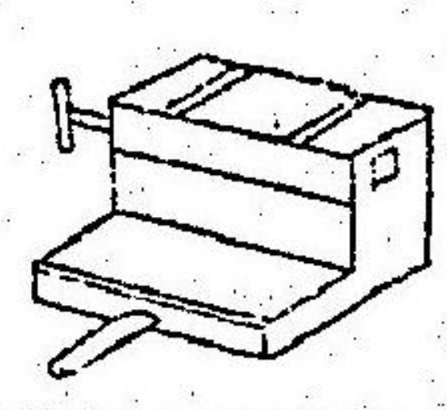
ふきあげ　ナ。吹上。地の名。紀伊國の海部の郡にあり。新続古（紀のくにや、あきさへ浪を、おきつかぜ、ふきあげの月の、ありあけのそら）

ふきあるる　ワ。ヒトリ。シニ。吹荒。かぜいたくふく。かぜふきにふく。源若菜（夜一夜、嵐ふきあるゝに、げに、かうおもせざらましかば、いかにこゝろぼそからまし）

ふきいた　ナ。葺板。やねにふくうすきいた。宇拾十（せうなる家のふきいたを取りて、ともして射けり）

ふきう　ナ。不朽。いつまでもほろびぬをいふ。

ふきがたり　ナ。吹語。されにめしてかたるをいふ。徒然草七十（そこに入り居てみるれいとおもさし。かゝる事などをみづからいふに、ふきがたりにもあり）



ふきがは　ナ。鞴。ふいご。鍛冶の、くろがねなどやくときの火をふきおこすだうぐ。和名（鞴、蒋魴切韻云、鞴、布岐加波、韋嚢吹火也、野王案、鞴所以吹治火令熾之嚢也）

ふきかふ　ワ。ヒトリ。四。吹交。かぜ、かなたにふき、こなたにふく。玉葉（あなこひし、ふきかふかぜも、ことづてよ、おもひわびぬる、くれのながめを）

ふきがや　ナ。葺萱。やねをふくにもちふるかや。

ふきぐさ　ナ。葺草。やねをふくにもちふるくさ。

ふきこす　ワ。カケ。四。吹越。ふきてこす。玉葉（三吉野の、山のあなたに、ちる花を、ふきこす風の、便にぞみる）

ふきさうぢ　ナ。拭掃除。ぬぐひはきなどのさうぢ。

ふきしく　ワ。ヒトリ。四。吹頻。しきりにふく。後撰（白露に、風のふきしく、秋の野は、貫きとめぬ、玉ぞちりける）

ふきだけ　ナ。吹竹。ひふきだけに同じ。

ふきたつ　ワ。カケ。シニ。吹立。たかくふきなす。源紅葉賀（四十人のかいしろ、いひしらず、ふきたてたるものゝねども、あひたる松風、まことに、みやまおろしときこえて）

ふきたま　ナ。吹玉。びいどろにてつくりたるたま。

ふきつ　ナ。不吉。うらかたのあしきをいふ。

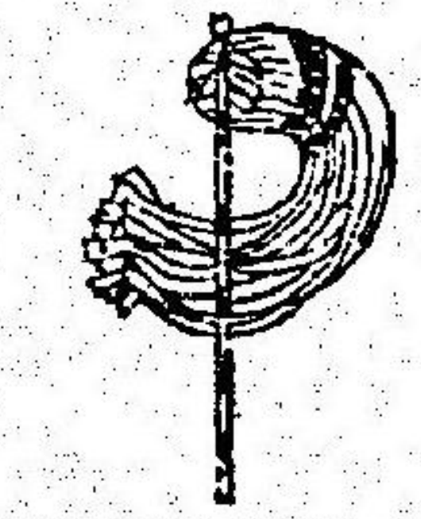
ふきつく　ワ。カナ。シニ。吹付。ふきてつく。ふきよせてきたらしむ。宇拾七（風のふきつくるやうにて、徳つきて、いみじきとくにんにてぞありける）

ふきでもの　ナ。吹出物。できもの。ちひさきかさ。

ふきとほし　ナ。吹通。かぜのふきとほすところ。

ふきとる　ワ。カナ。四。拭取。ぬぐひてとる。

ふきながし　ナ。吹流。さし、のぼりなどのたぐひ。袋のごときものに、ほそながき布を、あまためぐらしたれて、竿のさきにつけたるもの。なんやのところ見るべし。



ふきぬき　ナ。吹貫。かぜのふきとほすところ。

ふきね　ナ。葺根命。神の名。ふゆきねに同じ。

ふきのたう　ナ。蕗薹。ふきのえな。ふふきを見るべし。

ふきぞ　ナ。葺穴。草の名。いきくさに同じ。

ふきはる　ワ。ヒトリ。シニ。吹晴。ふきてはるる。かぜふきて、そらきれやかになる。玉葉（あけしらむ、波路の霧は、ふきはれて、とほじまみゆる、秋の浦風）

ふきぶり　ナ。吹降。あめふり、かぜふくをいふ。

ふきほす　ワ。カナ。四。吹乾。かぜにてかわく。続古（白妙の、衣ふきほす、木枯の、やがて志ぐるゝ、天のかぐやま）

ふきまく　ワ。カナ。四。吹捲。ふきめぐらす。古今（山風に、櫻ふきまき、みだれなん、花のまぎれに、たちとまるべく）

ふきまよふ　ワ。ヒトリ。四。吹迷。かぜ、かなたにふき、こなたにふく。古今（ふきまよふ、野風をさむみ、秋萩の、うつりもゆくか、ひとのこゝろの）

ふきん　ナ。拭巾。うつはものなどをぬぐふぬの。

ふきもの　ナ。吹物。ふえのたぐひ。源胡蝶（御階のもとのきの上に、楽人めして、上達部、王子たちも、みなおのく、ひきもの、ふきものとりぐにしたまふ）

ふきや　ナ。吹矢。竹のごとくけづりなしたる矢を、筒にいれて、ふきいだすもの。小鳥などを射るものなり。

ぶぎやう　ナ。奉行。役の名。おほせをうけもちて、そのことをあづかりつとむるもの。されば、その一事をすべつかさどるものをもいへり。辨内侍日記（奉行方には、今宵の雨も、あめやはふるなど、人々仰らるれば、少将の内侍、あめぐと、今宵の雨の、ふるまひは、奉行の人の、けしきぞある）

ふぎやうぎ　ナ。不行儀。ぎやうぎのわろきをいふ。

ふぎやうじやう　ナ。不行状。ふるまひのわろきをいふ。

ぶぎやうす　ワ。カナ。カ。奉行。ぶぎやうをなす。とりまかなひをなす。玉葉（後白川院かくれさせたまひける後の御事を、經房卿に奉行すべきよしおほせおかれたりけるをきゝて申しつかはしける）

ふぎやうせき　ナ。不行跡。ふるまひのわろきをいふ。

ふきよう　ナ。不興。きようのさめたるをいふ。おもしろきことのなきをいふ。きげんをそこなひたるをいふ。

ぶきよう　ナ。不器用。ものごとのつたなきをいふ。

ふきよす　ワ。カナ。シニ。吹寄。かぜふきてよびよす。

ふきよせどう　ナ。吹寄籐。ゆみの、籐を、ひところづゝ、おしよせこきまぜたるの。貞丈雑記弓装物部九（おほまだらの行縢は、切文のたおひ、吹寄籐の萬本とり）

ふぎり　ナ。不義理。おこなひのぎりをかくをいふ。

ぶきりやう　ナ。不器量。きりやうのわろきをいふ。

ふきでけ　ナ。吹芽。ふきて、これかれはせりかすをいふ。万代（おほしほや、あちのせとの、ふきでけは、のぼりくさりの、かさほかくらん）

ふきは　ナ。吹男鰭。おほはなはびに同じ。

ふく　ナ。河豚。魚の名。かたち、蛙の子に似て、おほきなるは、一尺にあまるもあり。背はあをぐろくして、とゞろくに、黄ばみたる筋あり。腹は、志ろくして、つやゝかならず。全身、すべて、うろこなくして、腹のふくれたること、鞠のごとし。この魚、毒あり。食ふべからず。和名（鯸鮐和名布久、云布久閇、一名之則怒、怒則腹脹浮出水上者也）

ふく　ナ。服。ころも。きもの。こそで。

ふく　ナ。福。さいはひ。よきことにあふをいふ。

ふく　ワ。カケ。四。吹。かぜをいだす。かぜをもてならふ。いきをつきいだす。いきのかぜをもてならす。源帚木（ふところなりける笛を、とりいでてふきならし、影もよしなどつゞしりうたふほどに）

ふく　ワ。ヒトリ。四。吹。かぜうごく。みづきあがる。古今（秋風の、ふきとふきぬる、武蔵野は、なべて草木の、色かはりけり）源玉鬘（秋風、谷より、たかくはふきのぼりて、いとさむきに、ものいと哀なる心どもは）

ふく　ワ。カケ。四。振。ふる。むらふ。うちふるふ。古事記（御佩所御佩之十拳劔而於後手布伎都々逃來）

ふく　ワ。カナ。四。葺。かやなどをもて、やねをおほふ。万十一（そぎいたもて、ふける板目の、あはざらば、いかにせんとか、わが寝そめけん）千載（ちりかひて、のきさへ風を、いとふかな、紅葉をふける、深山辺のさと）

ふく　ワ。カケ。四。拭。のごふ。ぬぐふ。

ふく　ワ。ヒトリ。シニ。深。ふかくなる。たけなはになる。この語は、絶方によりて、ふけるとも下一段にいふ。古今

（小夜中と、夜ふけぬらし、かりがねの、きこゆる空に、月わたるみゆ）拾玉（もろこしに、千鳥なくなり、須磨のあまの、ふくるさ世を、おもひしれとや）

ふく　ナ。不具。かたはもの。めしひ、みゝしひのたぐひ。

ふぐ　ナ。河豚。魚の名。ふくをいふ。東国にて、

ふく　ナ。服。もふく。また、もふくをきてゐるあひだ。また、喪中で、忌を服とさけていふ事あり。きぶくのところを見るべし。栄花月宴（太政大臣殿、月頃なやましく覚しさりつるに云々、うせさせ給ひぬ云々、母方の女御も、御服にていでさせ給ひぬ）源紅葉賀（御ぶく、母方は、三月こそはとて、つごもりにはぬがせ奉り給ふ）

ぶぐ　ナ。武具。たゝかひにもちふるだうぐ。宇拾四（さるべき武具を、御枕の上におくべきさだめありて、誰家朝臣にめされければ、まゆみのくろぬりなるを、一張まゐらせたりけるを、御枕にたてられて）

ふくあんびう　ナ。蝦蟆。ひきがへるをいふ。安房にて、

ふくいくと　ツ。馥郁。かうばしくかをりて。

ふくおん　ナ。複音。かさなりたるこゑ。五十音の中にていへば、かきくけこ、さしすせそのたぐひ。

ふくがへる　ナ。蝦蟆。ひきがへるをいふ。西国にて、

ふくき　ナ。服忌。きぶくをいふに同じ。

ふくげ　ナ。[illegible]。ふくざみたるやはらかなるけ。

ふくこ　ナ。復古。いにしへのてぶりにかへすをいふ。

ふくさ　ナ。袱紗。ちひさきふろしきの、きぬなどにてつくれるもの。また、たゞきぬなどをいふにや。枕草十（かりぎぬは、かうぞめのうすき、白きふくさのあかいろ）

ふくざい　ナ。服罪。つみにおつるをいふ。

ふくさう　ナ。福相。さいはひのよげにみゆるにんさう。

ふくざうなく　ナ。無腹蔵。つゝみかくすことなく。

ふくさみそ　ナ。袱紗味噌。みその名にや。大草料理書（たゞし、ふくさみそのときは、いろからもよし）

ふくし　ナ。副詞。そへことばに同じ。

ふくし　ナ。副使。そへづかひに同じ。

ふぐし　ナ。鐖。つちをほるだうぐ。へらのたぐひなるべし。万一（かごもよ、みかごもち、布久思もよ、美夫君志もち、このをかに、菜つます子）

ふくしう　ナ。復讐。あだうち。かたきうち。

ふくしん　ナ。腹心。こゝろのそこまであかすをいふ。

ふくしもの　ナ。肴。さかなに同じ。和名（肴、野王案凡非穀而食謂之肴和名佐加奈一云布久之毛乃見本朝令）

ふくしや　ナ。福者。とみたるひと。しあはせよきひと。

ふくじゆう　ナ。服従。おほせのまゝにしたがふをいふ。

ふくじゆさう　ナ。福寿草。草の名。高さ二三寸ばかり。茎は、ふとく、葉は、人参の葉に似てちひさし。冬のすゑより、春のはじめにかけて、黄色にて、すこし、菊に似たる花さく。常には、元日の床飾などにもちふ。

ふくしよく　ナ。復飾。そうの、たゞびとにかへるをいふ。

ふくす　ワ。カケ。カ。復。きらふ。かへしてよむ。千訓二（日のいきざたなりければ、恐、一人、止観をとりいでて諷しけり。あるじの僧、よりて、何文ぞとひければ）

ふくず　ワ。ヒトリ。カ。伏。まつろふ。まけてしたがふ。

ふくす　ワ。カケ。カ。服。のむ。くすりなどのむ。源帚木（ふびやう、おもきにたへかねて、ごくねちのさうやくをふくして、いとくさきによりなんえたいめんたまはらぬ）

ふくすけ　ナ。福助。かしらふとく、ひたひひろくして、せきみじかくひくきひと。常には、人形などにつくるもの。

ふくそう　ナ。輻湊。ひとところによりあつまるをいふ。

ふくだ　ナ。餅のやはらかなるものをいふとぞ。行宗家集（もちひこそ、いさきやつなれ、みなひきの、ふくだとのみも、なづくとおもへば）

ふくだい　ナ。衣の名。そのさまなど、いまださだかならず。宇拾八（ひきいでたるをみれば、ふくだいといふものを、なべてにも似ず、ふとき絲して、あつくこまかにつよげにしたるをもてきたり。よろこびて、とりて着たり。もとは、かみぎぬ一重をぞ着たりける）

ふくだむ　サ。ヒトリ。四。髭鬆。そゝけみざる。そゝけみだる。源幻（つらつきもなやかに云々、すこしふくだみたる髪のかゝりなどいとをかしげなり）枕草九（髪は、風にふきまよはされて、すこしふくだみたるが、肩にかゝりたるほど、まことにめでたし）宇鏡（髪鬆不久太女利）

ふくだむ　ワ。カケ。シニ。髭鬆。ふくざましむ。空穂蔵開（御ぐしなども、おほとのごもりふくだめられど、いときよらにてうつくしげなり）枕草二（ありつる文の結びさるも、たてぶみも、いときたなげにもちなしふくだめて、上にひきたりつる墨さへきえたるをおこせたり）

ふくちのその　ナ。福地園。さいはひおるところ。源葵若（尼君も、たゞ、ふくちのそのに、たねまきてとやうなりしひとことをうちたのみて、後の世をおもひやりつゝながめ居たまへり）

ふくちゆう　ナ。腹中。はらのうち。こゝろのうち。

ふくつう　ナ。腹痛。やまひにて、はらのいたむをいふ。

ふくつけし　サ。ヒ。貪。むさぼりがまし。枕草九（碁をうつに、さむのりと知らで、ふくつけきは、また、ことところにかゝぐりありくに）源朝顔（ゆききまろむしせさせ給ふ云々、いとおほうまろばさんとふくつけがれど、えもおしうごかさでわぶめり）宇拾八（例の鉢来にけり。ゆゝしくふくつけき鉢よとて、とりて、倉のすみになげおきて、とみに、物もいれざりければ）

ふくで　ナ。餲餅。かぶみもちをいふ。越後、信濃にて、

ふくてつ　ナ。覆轍。くるまのくつがへりたるあと。

ふくでん　ナ。餲餅。かぶみもちをいふ。東国にて、

ふくとう　ナ。河豚。魚の名。ふくをいふ。四国などにて、

ふくとく　ナ。福徳。さいはひ。よきしあはせ。

ふくどく　ナ。復読。くりかへしてよむをいふ。

ふくとり　ナ。[illegible]。鳥の名。ふふどりに同じ。

ふくのかみ　ナ。福神。ひとに、ふくをさづくるかみ。

ふくだち　ナ。[illegible]。くきだちなをいふ。越後などにて、

ふくびき　ナ。福引。くじをひきて、ものをわかちとるならひ。酒宴のむしろなどにて、興にする事なり。

ふくふくし　ナ。肺。はい。いきもののむねにありて、いきをおこすもととなるもの。和名（肺、和名布久不久之）

ふくぶん　ナ。福分。しあはせのよきをいふ。

ふくべ　ナ。河豚。魚の名。ふくに同じ。

ふくべ　ナ。瓢。ひさご。また、へうたん。

ふくへい　ナ。伏兵。かまり。ふせぜい。かくしたるぐんぜい。

ふくぼつ　ナ。覆没。ふねのくつがへるをいふ。

ふくまる　ワ。ヒトリ。四。含。ふゝまる。ふくみてあり。

ふくみぐつさ　ナ。含沓。沓の名。いまはさだかならず。曾我物語（ふくみぐつさに、こんのたびなをいれて）

ふくむ　ワ。カケ。四。含。ふゝむ。うちにもつ。くちにいれてもつ。六帖二（とするやと、野にいでてみれば、なでしこは、ふくめるものは、あそれなりけり）

ふくむ　ワ。ヒトリ。四。含。つぼむ。ふゝむ。花ひらけずてあり。堀川次郎（ながづきの、こゝのまでには、ふくみたる、となりのきくの、花ひらけなん）

ふくむ　ワ。カケ。シニ。含。ふくましむ。うちにもたしむ。この語は、地方によりては、ふくめるを下一段にいふ。

ふくめい　ナ。復命。かへりごとをまうすをいふ。

ふくめん　ナ。覆面。かほのおほひ。かほをつゝむもの。

ふくめる　ワ。カケ。シ一。含。ふくむを見るべし。

ふくやく　ナ。服薬。くすりをのむをいふ。

ふくよかなり　ナ。脹。ふくらなり。こえふとりてあり。宇拾五（まづ、當時さむげなり。このきぬ着よとて、給ふ。ふくよかなるきぬ、ひとつぬぎてたびて）

ふくよかに　ツ。脹。ふくらかに。こえふとりて。源若紫（きびてみえさへば云々、いとかしけれど、おひさきみえて、ふくよかにかいさまへり。故尼君にぞ似たりける）

ふくよし　ナ。福吉。病の名。ものよしに同じ。

ふくら　ナ。祠。ほこらをいふに同じ。

ふくら　ナ。脛。こむらをいふ。伊豫などにて、

ふくら　ナ。文庫。ぶんこ。ふみをおさめおくくら。

ふくらいびやう　ナ。福来病。病の名。くびのはるゝやまひ。のどけのたぐひなるべし。日本紀略（天慶三年云々、廿五日乙未荷前使、今年人民頸腫、世號福来病）

ふくらかす　ワ。カケ。四。脹。ふくれしむ。ふくるゝやうにす。

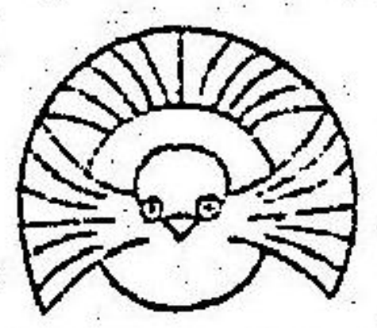
ふくらかなり　サ。脹。ふくれてあり。こえふとりたり。枕草三（つらいとあをう、ふくらかなる、おやしき弓、あまもとざちさる物などさゝげさる、いとうつくし）

ふくらかに　ツ。脹。ふくれて。こえふとりて。源若菜（すこしふくらかなりさまひて、うちなやみ、おもやせたまへる、さま、げにはにるものなくめでたし）

ふくらぎ　ナ。魚の名。いなだをいふ。北陸道にて、

ふくらすずめ　ナ。福良雀。すゞめの子は、親よりもこえふとりて、ふくれたるゆゑにいふとぞ。嬉遊笑覧

ふくらすずめ　ナ。福良雀。紋所の名。すゞめの子の、つばさをひろげたるさまを、まろく、ふくらかにゑがきなしたるもの。



ふくらんぎ　ナ。腓。こむらをいふ。東国にて、

ふくらみ　ナ。脹。ふくれ。ふくれたるところ。

ふくらむ　ワ。ヒトリ。四。脹。ふくる。ふくれあがる。

ふくらむ　ワ。カナ。シニ。脹。ふくらす。ふくれしむ。ふくれあがらしむ。菜花初（ほゝづきなどをふきふくらめてすゞらんやうにまそみえさせたるを）

ふくり　ナ。陰嚢。きんたま。宇拾五（ほそぬきかきいだして、ふくりおぶらんなどきぶらさんは、ひんなくや候やへぐらんといひけれど）和名（陰嚢俗云布久利）

ぶくり　ナ。木履。あしだをいふ。關西にて、

ふくりん　ナ。覆輪。もののかざりに、もののへりを、こがねなどにて、ほそくつゝみたるもの。

ぶくりやう　ナ。茯苓。まつほどを見るべし。

ぶくりやうさう　ナ。茯苓草。おそらきいとに同じ。

ふくる　ワ。ヒトリ。シニ。脹。うちよりそりいだす。うちよりもちくるやうにあり。この語は、地方によりては、ふくれるを下一段にいふ。落窪一（うちふくれていとをこがましと、少将、つくゞとかいまみやしたり）宇拾二（鉢たかゝりけり云々、色はあをむらさきにて、大柑子のなどのやうに、つぶだちてふくれたり）

ふぐるま　ナ。文車。ふみをのせてひくくるま。徒然草（多くてみぐるしからぬは、文車のふみ、塵塚のちり）

ふぐるま　ナ。文車。草の名。そとめまに同じ。

ふくれ　ナ。脹。ふくらみ。ふくれたるところ。

ふくれぐさ　ナ。腫草。草の名。いきくさに同じ。

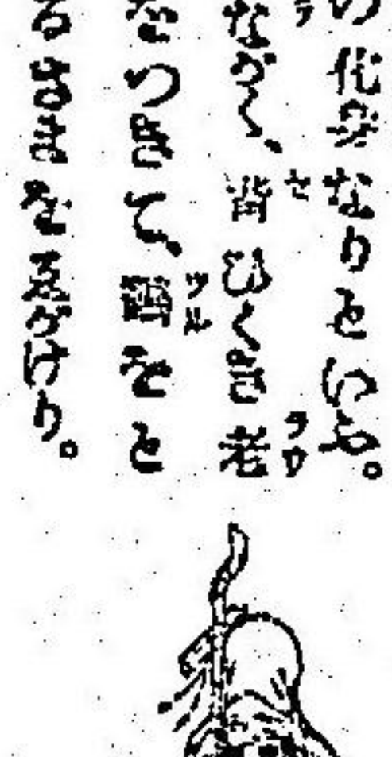
ふくれる　ワ。ヒトリ。シ一。腫。ふくるを見るべし。

ふくろ　ナ。袋。ものをふくむるやうにしているゝもの。口の一方にあるものにて、ものをいるれば、おしよりてふくらゝやうになるもの。新拾（おしよりて、ゆみのふくろと、まるくや、おもえぬやまの、ものをいるらん）和名（袋 字亦作帒、和名布久路）

ふくろいし　ナ。袋石。石の名。いたつぼに同じ。

ふくろぐさ　ナ。袋草。草の名。いきくさに同じ。

ふくろくじゆ　ナ。福禄壽。七福神のひとつにて、天南星といふ星の化身なりといふ。常に、頭ながく、背ひくき老人の、杖をつきて、鶴をともなひたるさまをゑがけり。



ふくろだな　ナ。袋棚。そとにそりいだしたるたなの、いれくちのひところにて、ふくろのごとくなれるもの。

ふくろづの　ナ。袋角。かのこおつのに同じ。

ふくろど　ナ。袋戸。ふくろだななどにたつると。

ふくろどだな　ナ。袋戸棚。ふくろだなに同じ。

ふくろのゑぼし　ナ。袋烏帽子。ふくろのごときゑぼし。なしうちゑぼしのたぐひなるべし。宇拾十（七十あまりなる翁の、髪もなげて、しろきにて、おろくある頭に、ふくろのゑぼしをひきいれて）

ふくろふ　ナ。梟。鳥の名。すべて、木兎に似たり。但し、かしら、木兎よりもおほきく、また、額に、木兎のごとき角めきたる毛なし。この鳥、晝はかくれ、夜はいでゝ、そのなく聲、くもりてきこゆ。山家集（山ふかみ、けぢかき鳥の、音はせで、ものおそろしき、ふくろふの聲）和名（梟 和名布久呂不、兼名苑云佐介 食父母不孝鳥也）

ふくろまち　ナ。袋町。いりくちのひとところなるまち。

ふくろもち　ナ。袋持。ともびと。ありにつきてゆくひと。

ふくろもの　ナ。袋物。ふくろのたぐひをすべていふ。

ふくわい　ナ。府會。その府の人のえらびたる議員の會議にて、その府の地方税の事などを議するもの。

ふくわい　ナ。附會。こじつけ。ひきつけ。

ふくわい　ナ。不快。こゝろもちのよろしきをいふ。

ふくわけ　ナ。福分。ひとのえさせたる、いはひのものなどのあまりを、また、ひとにもちわかつるをいふ。

ふくわん　ナ。府官。太宰府の官人。新勅（太宰府に侍りける時、府官等ひきゐて、香椎浦にあそびけるに）

ぶくわん　ナ。武官。禁中を守衛する官人。また、六衛府などはじめて、すべて、武事にたづさはる官人をいふ。

ぶくゑ　ナ。服穢。きぶくにあたれるけがれ。

ふけ　ナ。頭垢。いろこ。かみにつくこまかきあか。

ふけ　ナ。深。ものごとのふかくなるをいふ。たけなそにはなるなをいふ。千載（おもなくも、なほ世のふけを、ならずして、いざよふ月を、まちもせる哉）

ぶけ　ナ。武家。ぶやくにんけ。もののふのいへ。

ふけい　ナ。不敬。ぶれい。しつれい。

ぶげい　ナ。武藝。たけきてわざ。たちゆきのたぐひ。平治（うしろわれ云々、ひるは、ひめもす、がくもんを事とし、よるは、よもすがら、ぶげいをけいこせられたり）

ふけいき　ナ。不景氣。けいきのわるきをいふ。

ふけう　ナ。不孝。ふかう。おやによくつかへぬをいふ。空穂藤原（汝、ふけうの子ならば、親は、なげき歎あらせよ）

ふけしゆう　ナ。普化宗。宗門の名。禪宗の一派にて、後土御門天皇の文明の頃、朗庵といふ僧の弘めたるなりといふ。朗庵、常に、尺八をふきて遊行せり。

ふけつ　ナ。不潔。きよきなくしてけがらはしきをいふ。

ふけぬ　ナ。深野。くさふかきの。万一（たまきはる、うちの大野に、馬なめて、朝ふますらん、その草深野）

ふけひ　ナ。吹飯。地の名。和泉にあり。また、紀伊にもありといふ。千載（待ちかねて、さよもふけひの、うらかぜは、たのめぬなみの、音のみぞする）

ふけまち　ナ。深待。ねまちのつぎのよをいふ。嬉遊笑覧

ぶげん　ナ。分限。ぶんげん。かねもち。とみたるいへ。

ぶげんしや　ナ。分限。とみたるひと。かねもちのひと。

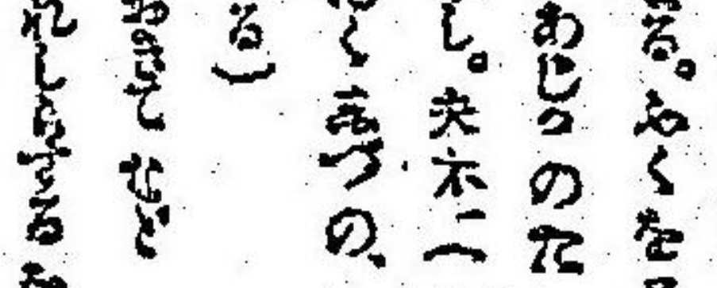
ふげんぼさち　ナ。普賢菩薩。菩薩の名。常に、象にのりたる像をゑがけり。源氏末摘花（あな、かたはと見ゆるものは、御鼻なり云々、普賢菩薩ののりものとおぼゆ）

ふけらかす　ワ。カタ。ロ。衒。てらふ。ほこりかにしめす。保憲女集（あやしくも、草木にたぐふ、たましひの、こゝろを風や、ふけらかしつる）續世繼（きようぜらるゝあまりに、ふけらかしまつらせられけるにこそ）

ふける　ワ。ヒトリ。ロ。耽。ふかくなる。たのしみにおぼる。おぼれて、ほどをうしなふ。新古今（やまとうたは云々、色にふけり、心をのぶるなかだちとし）

ふける　ワ。ヒトリ。シ一。深。ふかくなる。ふくを見るべし。

ふご　ナ。畚。おひさきかご。また、あじろのたぐひをいふ。下の圖を見るべし。夫木二一（春の野に、わか手にかけて、ゆくあづの、たゞなどやらん、ものあはれなる）



ふこく　ナ。布告。おほやけより、おきてなどを、あまねく、くにのうちへふれしらするをいふ。

ぶこつ　ナ。無骨。てんとちなきをいふ。盛衰記（宿所は、大將のむつびなれば、告げては、中々ぶこつなり）

ぶこつもの　ナ。無骨者。てんとちなきひとをいふ。

ふさ　ナ。総。いとをつかねてうちたれたるもの。かざりなどにするものなり。和名（總 和名布佐、聚絲成束也）

ふさ　ナ。房。はなぶさに同じ。源氏末摘花（花の色こそ、ふさながきを折りて、まらうどの御器にくだる）

ふさ　ソ。多。さはに。おほく。万廿（秋の田の、ほむきみがてり、わがせこが、ふさたをりける、をみなへしかも）

ふさい　ナ。負債。かり。おひめ。あやくざい。

ふざい　ナ。不在。いへにゐぬをいふ。

ぶさいく　ナ。不細工。さいくのつたなきをいふ。

ふさう　ナ。不淨。ふじやう。けがれ。よごれ。つきのさはり。

ぶさう　ナ。無雙。たぐひなきをいふ。平家二（いつおやくしゆぜんの彌陀の三尊、三國ぶさうの靈像なり）

ふさうおうなり　サ。不相應。ふさはず。さうおうせず。

ふさうおうに　ソ。不相應。ふさはず。さうおうせずに。

ぶさうなり　サ。無雙。ならびなし。たぐひなし。

ぶさうに　ソ。無雙。ならびなく。たぐひなく。

ふさがり　ナ。塞。陰陽家の方術にいふ語にて、その年によりて、大將軍といふ星の方角あり、吉方に反對の方角なれ、その星の方に向へば、三年の内にあやまちありといふ。されば、その方角をさして、ふさがりといふ。

ふさがる　ワ。ヒトリ。四。塞。ふたがるに同じ。太平記（隅戸の口もふさがりて、いるべきかたもなし）

ふさく　ナ。不作。たなつもののよくいできぬをいふ。

ふさぐ　ワ。カナ。四。塞。ふたぐに同じ。宇拾十四（目をふさぎて、念じいり給ふ程に、金の棚、足下にいできぬ）

ふざける　ワ。ヒトリ。シ一。戯。たはぶる。たはごとをなす。

ぶさた　ナ。無沙汰。おとづれをせぬをいふ。

ぶさつ　ナ。蕪雜。あどけなくいりみだれたるをいふ。

ふさなり　ナ。房生。すずなりに同じ。

ふさなり　サ。多。さはなり。あまたなり。空穂秋初（御逢二十

人ぎらり、薄色の裳きてあり。うなゐどもふさなり）

ふさに ソ。多。さはに。おほくに。宇津保國譲（御車まゐ、四位、五位ありとあるひと、ふさにつきてひきはひく）

ふさぬ ワ。カナ。シニ。總。すぶ。つかぬ。とりつかぬ。山家集（さまぐは、たなごころなる、髻をれ、なものこそは、ふさねさるな）懲賃抄（それを、まさおもしふさねてその心の趣を申しあらそはんとおもふまゝ）

ふさはし サプ。相應。ふさひてあり。につかはし。この詞は、今は、ふさはしいと、いをそへていふ。落窪一（いとこゝろふかき御心は、きこしめしけれど、さるこゝろむやふさはしかりけん。帶刀おそしくきせめてまへど）狹衣二（なまきんだちの、いとうかくろへて、よる〱ときぐ〱おもするを、いとふさはしからねば、東男はつきてやいなましとおどすなりけり）

ふさはしい サ。相應。ふさはしを見るべし。

ふさはじかみ ナ。蜀椒。木の名。おほさくらさんせうは同じ。和名（蜀椒和名奈部波之加美、一云不佐波之加美）

ぶさはふ ナ。不作法。たちゐのさまのわろきをいふ。

ふさふ ワ。ヒトリ。四。相應。これかれよくかなふ。古事記（むらきも、是れ布佐波受（うなみ、そこにぬぎうて））

ふさふさと ソ。總々。ふさやかに。とりかへばや三（かみしらあらそせ、かみもかきされなどしてみれば、尼のほどは、ふさくとかゝりけり）

ふさん ナ。不參。まゐらぬをいふ。まうでぬをいふ。

ふさやうじ ナ。總楊枝。やうじのさきの、うちひしぎて、ふさのごとくしたるもの。歯をみがくれうなり。

ふさやかなり サ。總。ふさのごとし。ゆたかにあり。

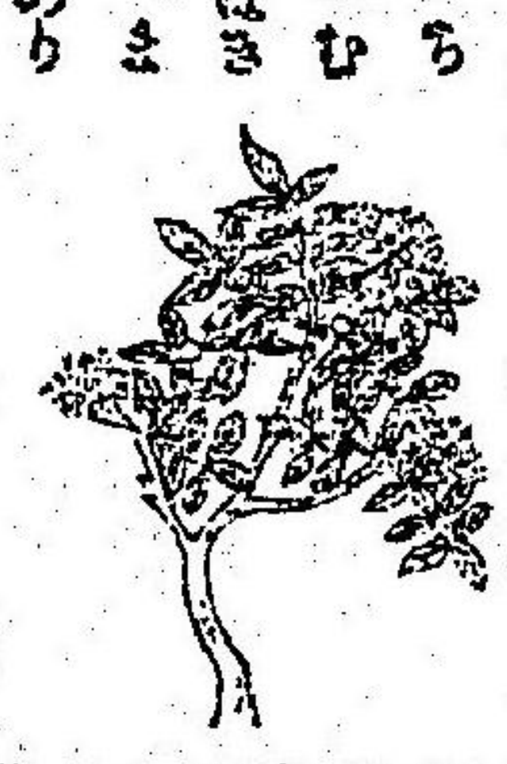
ふさやかに ソ。總。ふさのごとく。ゆたかに。狹衣三（ゆゝりその、いみじうふさやかにつやめきたれ）

ふし ナ。節。草木の、枝のさすところ。みきの、へだてのところ。また、ひとつ〱としてみるべきもの、みるべきところ。竹取（くれたけの、よゝのたけとる、野山にも、さやはわびしき、ふしをのみみし）後撰（いかなりし、ふしにかいとの、みだれけん、しひてくれども、とけずみゆるは）

ふし ナ。節。ぶんしやうのひとつのきり。

ふし ナ。柴。しばに同じ。ふしつけを見合すべし。

ふし ナ。五倍子。ぬるでの木に、いでくる虫の巣なり。夏の末、ぬるでの木に、蟻のごとくなる虫つきて、木の汁をすひて、青くちひさき珠を、葉の間にむすぶが、のち、やうやくおほきくなりて、菱のごとく、また、繭のごとくなるもありて、うちくだけば、内はうつろにて、こまやかなる虫いづ。このものの、殻して、粉としたるは、常に、鐵漿にあはせて、歯をそむるにもちふ。



ふし ナ。父子。ちゝとこ。

ふじ ナ。不二。山の名。駿河にあり。万三（不盡嶺に、降置る雪は、水無月の、望に消ぬれば、その夜降りけり）

ふじ ナ。不時。さだまりたるときにあらぬをいふ。

ぶし ナ。武士。ものゝふ。さぶらひ。いくさびと。盛衰記（片山里の荒武士の、みゝおどろきしるやうに）

ぶし ナ。附子。藥の名。とりかぶとの根にいでくる、いもがしらのごときものにて、毒藥にもちふるものなり。袖中抄十二（奥のえびすは、鳥の羽の莖に、附子といふ毒をぬりて、まつひのあきまをゑりて射ると）

ぶじ ナ。無事。ことなきをいふ。つゝがなきをいふ。

ぶじ ナ。武事。たけきわざ。たゝかひのたぐひ。

ふしあな ナ。節孔。いさなどのふしめのあな。

ふしあはせ ナ。不仕合。しあはせのわろきをいふ。

ふじいう ナ。不自由。べんりのわろきをいふ。こゝろのまゝならぬをいふ。おあん物語（その時分は、軍がおほくて、何事も、不自由な事でおじやつた）

ふしいと ナ。節絲。ふしの、あげくあるいと。

ふしおき ナ。臥起。ねおき。おきふし。蜻蛉（冬はなりぬ。ふしおきは、たゞをさなき人をもてあそびて）

ふしがき ナ。柴垣。しばをもてゆひたるかき。

ふしかへる ワ。ヒトリ。四。臥返。ふしまろぶ。ねがへりをなす。後撰（いのみても、めなれにけりと、きくからに、ふしかへりこそ、ねなまほしけれ）

ふしぎ ナ。臥木。たふれたるき。万代（心して、駒はやめよ、日をへつゝ、野原の臥木、くちぐれゆく）

ふしぎ ナ。節木。ふしのあげくあるざいもく。七一職人歌合（むんざう、くれどもは、ひとりふしぎの、あらづくり、いつてそのめの、あてんとすらん）

ふしぎ ナ。不思議。あやしくくすしきをいふ。たゞはおもひはかられぬをいふ。拾芥（これいかに、かへす〲も、ふしぎなり、まだしもふべき、この世とやみる）著聞五（其後、あさましくふしぎにおぼえて、この心ちは、たゞものにはあらずとぞいひける）

ふしくぬぎ ナ。節櫟。ふしのあげきくぬぎ。新六（霜枯の、野原は雑な、節櫟、よはかじけゆく、世が身なりけり）

ふしくる ワ。ヒトリ。四。燻。いぶる。ふすぼる。古語（燻）

ふしくれ ナ。節榑。ふしのあげくあるざいもくをいふ。

ふしくれだつ ワ。ヒトリ。四。節榑立。ふしくれのごとくあり。了俊歌學抄（句を詠じくらべて、ことがらのそゞろなる、ふしくれざゝらん歌をもちふべきなり）

ふしぐろ ナ。節黑。草の名。あふさかさうに同じ。

ふしころぶ ワ。ヒトリ。四。臥轉。ふしまろぶ。ふしころぶ。

ふしづむ ワ。ヒトリ。四。伏沈。おもひにしづむ。源桐壺（やみにくれて、ふしづみ給へるほどは、草もたかくなり、野分は、いとゞあれたる心ちして）

ふししば ナ。柴。しばをいふに同じ。千載（兼てより、思ひしことぞ、ふししばの、こるばかりなる、歎せんとは）

ふしぞめ ナ。柴染。染色の名。くろもじの木などにて染料をつくりて、染めなせる色をいふ。（賦色實見抄錄）

ふしだつ ワ。ヒトリ。四。節立。ふしあり。くきたつ。たくのぶ。白川殿七百首（けふのみぞ、いそぐや田子の、手もたゆく、千町のなへの、ふしだゝぬ間に）

ふしだら ナ。不撿束。まとまりなくみだりなるをいふ。

ふじつ ナ。不實。ふるまひのまことなきをいふ。

ふじつ ソ。不日。ちかきほどには。ふつかみかのうちに。

ふしづく ワ。ヒトリ。シニ。漬。ふしづけをなす。拾遺（ふしづけし、淀のわたりを、けさみれば、とけんともせず、こほりしにけり）夫木廿（冬ふかみ、むつきの淀に、ふしづけし、おきまの水は、をしぞなくなる）

ふしづけ ナ。柴漬。柴を、つかねて、河などに入れおきて、あまたの魚のくぶりけるをうかゞひてとるもの。千載（泉川、みづのみさをの、ふしづけは、岩間のこほる、冬は來にけり）和名（罧、爾雅云、罧謂之涔（和名布之都介）、積柴於水中、魚得寒入其裏、因以簿圍、捕取之）

ふしつけ ナ。節付。うたに、ふしをつくるをいふ。

ぶしつけ ナ。不躾。ぎやうぎのわろきをいふ。

ふじつに ソ。不日。ちかきほどには。ふつかみかのうちに。宇拾（郡司一家ひろきものなれば、人數をおこして、不日に、寢殿をつくりてけりとぞ）

ふしど ナ。臥所。よるふすところ。同拾（柏川の、いくぞの床の、狹莚、なつはすゞしき、ふしどなりけり）

ふしどころ ナ。臥所。ふしのところ。また、よるふすところ。元輔集（津の國の、なにはのあしの、うきねは、ふしどころこそ、なほ定りなけれ）

ふしなはめ ナ。節縄目。鎧にいふ詞。縄のごとき形ある革にて、おどしたるをいふとぞ。盛衰（大夫坊覺明は、首丁頭巾、ふしなはめのよろひをきる）

ふじに ソ。不時。ときならず。ときもさだめずに。

ふじのけぶり ナ。富士煙。名香の名。ちんの一種なり。

ふしのこ ナ。五倍子粉。ふしのところ見るべし。

ふしを ナ。伏柴。ふしたるも。新千（磯はいでじ、をしのふしをの、さゞみされ、入江の浪に、くちれそうとも）

ふしそぶ ナ。節管。たけのふしにてつくりたる管。

ふしぶし ナ。節々。これかれのふし。源桐壺（何事にも、ゆゑある事のふし〲には、まづのぼらせ給ふ）

ふしぼね ナ。節骨。ほねのふしのところ。

ふしまちのつき ナ。臥待月。ねまちのつきは同じ。但し、二十日よりのちの月なるいふ事あり。源若菜（ふしまちの月、わづかにさしいでたるころもをかしや）平治（二十六日、夜ふけて云々、御幸なる、いまだ夜中の事なれば、ふしまちの月もさしいでず）

ふしまつ ナ。不始末。とりあつかひのわろきをいふ。

ふしまろぶ ワ。ヒトリ。カニ。臥轉。こなたにふし、かなたにふしてまろぶごとくなす。空穗國譲（こゝらの年月こそあれ、かゝる年月をみる事を、ふしまろびなきたまふ）

ふしみ ナ。伏見。地の名。大和國の添下郡にあり。また、

山城國、紀伊郡にもあり、古今（いざこゝに、わが世はへなん、すがはらや、ふしみのさとの、あれまくもをし）

ふしみなみ ナ。不二南。西南の風をいふ。東京などにて。

ふしん ナ。普請。やづくりなどのわざをいふ。太閤記三（惟任は云々、普請のなかどりなどし侍りけり）

ふしん ナ。不審。おぼろげにていぶかしきをいふ。竹齋五（卽詩詞（御ふしんあひのこり候へば、かげすゑ、御教書をもて、御たづねをかうぶり候はんに）

ふじん ナ。不仁。いつくしみのこゝろなきをいふ。

ふじん ナ。婦人。をみな。をんな。たをやめ。

ぶじん ナ。武人。ものゝふ。さぶらひ。いくさびと。

ふしんせつ ナ。不親切。ねんごろにあらぬをいふ。

ふしんば ナ。普請場。ふしんをするところ。

ふしめ ナ。節目。ふしのところ。散木（岸の上に、さよなどみれば、あぢきなく、竹のふしめに、ながれぬる哉）

ふしめ ナ。伏目。うつぶきてみるをいふ。また、うつぶきてみるさまをいふ。字鏡（低視　伏見也、太加比目、又不志目）

ふしめなり サ。伏目。まめだちたり。まじめなり。源浮舟（石山もとまりて、まひにとしといふも、かこちやらるれば、ふしめなり。くれて、月いとあかし）

ふしめに ツ。伏目。まめだちて。まじめに。保孝女集（もえいでし、垣のにてき、露なおもみ、ふしめになれど、雨のをれせね）挾衣一（宮の、こよなくふしめになりさまへるも、いとつらうこゝろうきに）

ふしや ナ。府社。てくへいしやにつぐやしろ。

ぶしや ナ。附子矢。どくきのやに同じ。

ふしやう ナ。府生。六衛府に屬せる官人なり。供奉の官にて、隨身などをもつとめ、また、衛府の記錄などの事をもつとむ。今物語（くちをしき事のさぶらひけるかな。府生、殿をおもひかけていひけるにこそ）

ふしやう ナ。不祥。さがなきをいふ。うらうきのよろきをいふ。續古事談（さし殿きれ、馬のあしをさに、穴あきてぞありし。日の不祥とて、かやうの事にこそ）

ふしやウ ナ。負傷。けが。ておひ。きずをうくるをいふ。

ふじやう ナ。不淨。けがれ。よごれ。つきのさはり。

ぶしやう ナ。武將。たいしやう。また、いくさびとのをさ。

ぶしやう ナ。無性。なまけ。をこたりがちなるをいふ。

ふじやうば ナ。不淨場。かはや。こうか。べんじよ。

ぶしやうぶしやうに ツ。不性無性。きぶりながら。

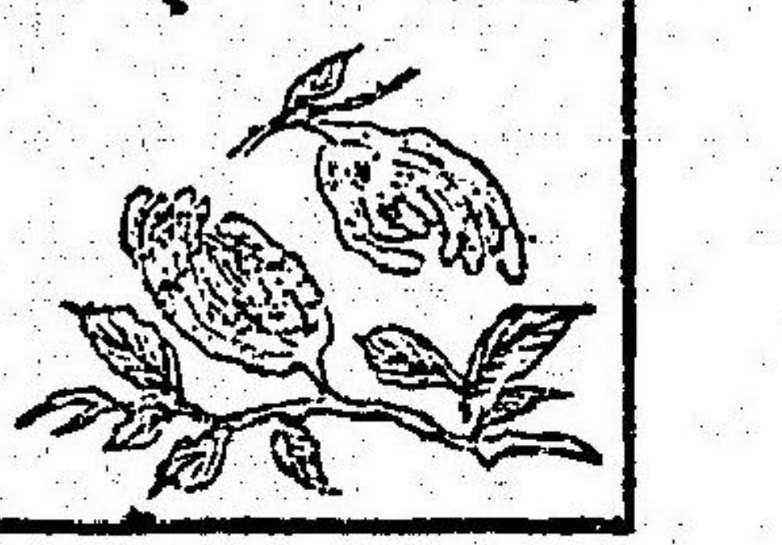
ぶしやうもの ナ。無性者。をこたりがちなるもの。

ぶしやかぶ ナ。膝。ひざをいふ。越後などにて。

ふしやく ナ。不死藥。おいぬくすり。至徳初秋（さりともと、蓬萊の山へ不死藥とりにとおもふらん事は）

ふしやなぎ ナ。伏柳。ふしたるやなぎ。玉葉（汝かくろ、立田河原の、ふしやなぎ、根はそこの、玉藻なりけり）

ぶしゆかん ナ。佛手柑。果の名。木の名。木は、橘に似て、枝葉の間に、刺あり。葉は、すてし、多羅葉の葉に似てとがりなし。實の狀、人の手のごとくにて、長さは、一尺四五寸なるもあり。實の皮、橙に似て、皺あつく、肉あらくして、大根のごとし。また、香氣ありて、橘よりもかうばし。



ふしゆく ナ。不熟。このみなど、すべて、ものごとのなりとゝのはぬをいふ。

ぶじゆつ ナ。武術。ぶげい。けんじゆつのたぐひ。

ふしゆび ナ。不首尾。しゆびのよろしきなをいふ。

ふじゆふせ ナ。不受不施。宗門の名。日蓮宗の一派にて、後陽成天皇の文祿のころ、備前の日奥といふ僧の弘めたるものにて、徳川氏の頃は禁制せられたり。

ふじゆん ナ。不順。きこうなどのとゝのはぬをいふ。

ふじよ ツ。扶助。たすけ。みつぎ。めぐみ。

ふしよう ナ。不勝。こゝろのすこやかならぬをいふ。

ふしようち ナ。不承知。きゝいれぬをいふ。

ふしよく ナ。不食。くひものをくはぬをいふ。

ぶじよく ナ。侮辱。あなどりはづかしむるをいふ。

ふしをがみ ナ。伏拜。ひれふしてをがむところ。夫木（道の邊の、賀茂の河原の、ふしをがみ、ふるきのあふち、かげもなれにき）吳竹集（むかしは、神社を拜すべき所をきうけるを、ふしをがみといふ）

ふしをがむ ワ。カナ。四。伏拜。ひれふしてをがむ。枕草四（きぬひとつをとらせて云々、きぬすゝけたり、まろくて若よとてなげとらせされば、ふしをがみて）

ふす ワ。ヒトリ。四。伏。臥。ねるにむく。よこたふる。またはなりていぬ。古今（夏の夜の、ふすかとすれば、ほとゝぎす、なく一聲に、あくるしのゝめ）伊勢（月のかたぶくまでふせりて、去年を思ひいでて）源夕顏（女君はさながらふして、右近は、かたはらにうつぶしふしたり）

ふす ワ。カナ。シ二。伏。臥。ふすやうにさす。かくしておく。この語は、地方によりて、ふせると下一段にいふ。

ふずく ナ。粉熟。うどんのたぐひ。米の粉などを、蜜煎にてねりて、竹の筒にいれて、おしいだしきるもの。點心にもちふるものなり。源宿木（せんくうのをしきたうきどもまで、ふずくまゐらせたまへり）

ふすさに ツ。多。おほく。さはに。万葉（珠なる橘にぬき、須左飯うまずとも、あすきせざめや、いざせ小床に）

ぶすぢ ナ。不筋。ことわりにたがへるをいふ。

ふすぶ ワ。カナ。シ二。燻。けぶらしむ。この語は、地方によりて、ふすぶるとも下一段にいふ。古今（夏なれば、宿にふすぶる、蚊遣火の、いつまでわが身、下燃にせん）

ふすぶ ワ。カナ。シ二。嫉妬。ねたむ。そねむ。枕草六（くるしげなるもの云々、おもふひとふたりもちて、こなたかなたにうらみふすべられたるをとこ）

ふすべ ナ。疣。こぶ。いひぼ。和名（附贅俗云布須倍）

ふすべいろ ナ。燻色。すゝのごときいろ。

ふすべがは ナ。燻革。つくりかはを、松葉のけぶりにてくろくふすべたるもの。鞍裩などの、まろくあらそるゝやうにふすべなしたるなどもあり。

ふすべがほに ツ。妬顏。ねたみがほに。ねたみをいふべきさまに。源槿（北の方云々、めづらしきならひのやうに、ふすべがほにてものしたまひける哉）

ふすべる ワ。カナ。シ一。燻。けぶらしむ。ふすぶを見るべし。

ふすぼる ワ。ヒトリ。四。燻。けぶる。けぶりたつ。古來風體抄（かやりび云々、ふすぼらせて、煙をたやさねば）

ふすま ナ。衾。被。よるふすとき、うへよりおほふやうにしてきるもの。夫木四（木のもとに、たびねをすれば、吉野山、花のふすまを、きする春風）源宿木（まろきぬどもの、なつかしうなよゝかなるを、おほきかさねて、ふすまひきかけてふしたまへり）

ふすま ナ。襖。からかみ。いへのへだてにたつるもの。

ふすまぢを サクチ。衾道乎。ひきてにかけていふところさだかならず。万二（衾道乎、引手乃山に、いもをおきて、やまぢをゆけば、いけりともなし）

ふすまのせんじ ナ。衾宣旨。つみびとを追捕すべきみことのりをいふ。盛衰十三（白井法橋幸明といふ僧あり、三塔第一の惡者、衾の宣旨を蒙りて、山門には安堵しがたくて、當山千僧供の料所、愛知郡胡桃庄に忍びゐたりけるが云々、木曾の陣にゆきむかひて）

ふすもる ワ。ヒトリ。四。燻。ふすぼるに同じ。字鏡（稍布須毛留）

ふすゐ ナ。臥猪。かるもにふするゐをいふ。かるも見合すべし。土御門院御集（谷ふかみ、ふすゐのかるも、かきたえて、なれしみやこぞ、うとくなりゆく）

ふせ ナ。布施。そうに、ものをほどこすをいふ。源若紫（讀經しづる法師の布施、まうけのものども、さまぐにとりにつかはしければ）著聞二十（布施、さしなく多くとりてのぼるとて、口たけていでたりけるに）

ふぜい ナ。風情。けしき。おもむき。あぢはひ。

ぶぜい ナ。無勢。ひとかずのすくなきをいふ。

ふせいほ ナ。伏庵。ちひさくきたなきいほ。万五（布勢伊保の、まげいほの内に、ひたつちに、わらときしきて、父母は、まくらの方に、妻子どもは、あとの方に）

ふせう ナ。不肖。つたなくして、おやのごとくならぬをいふ。また、みづからつたなしとへりくだりていふことば。太平六（正成、不肖の身として、この一大事を思ひたち候ふ事、かいぶんを測らざるに似たり）

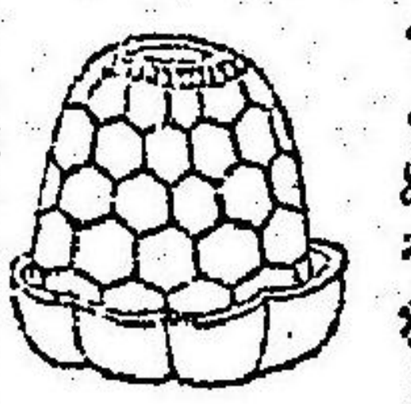
ふせがし サ。フ。防。ふせぎたり。こばみたり。枕草八（大路門はさしつやなどとぞすれば、まだ人のおはすれば、など、なまふせがしげに思ひていらふるに）

ふせぎ ナ。防。こばむをいふ。ささせじとまもるをいふ。好忠集（きげつりし、よもぎのかきの、ふせぎにも、さそもぬものは、ふゆにぞありける）

ふせぐ ワ。カナ。四。防。禦。こばむ。そくさせじとまもる。拾遺愚草（ゆく雁の、空が秋風と、られふらん、彼もふせがぬ、いその峯さ）狹衣二（やまがつしもいとあらけなげなめるを、ふせぎさまへとてたまはすれば）

ふせぐみ　ナ。伏組。ぬひもんなどのへりの、ひぶりとまり。みきよりのいとを、ならべふせてとぢたるもの。縫花枘（ぬひもの、らでんなど、そでぐちに、おきぐちなし、志ろかねの左右のいとしてふせぐみ（し）

ふせご　ナ。伏籠。ひとりのうへにふせて、きぬをかくるもの。衣は、たきものの香をこうすにもちふるものなり。拾衣三（きまぐのかうどもとりいでて、これいかれいき、ふせごあまて（して））字拾ヨ（とのゐものをおほしき衣ふせごにかけて、たきもののまめたるにほひなべてならず）


貞丈雑記ニ見えしふせごの図

ふせぜい　ナ。伏勢。かまり。ふくへい。かくしたるぐんぜい。

ふせだけ　ナ。伏竹。弓の名。まきゆみに、竹をふせたるものなりとぞ。夫木（あづさゆみ、すゑまでをはす、ふせだけの、そなれがさくも、ちぎるむ哉）

ふせう　ナ。浮説。ねなしごとに同じ。

ふせつ　ナ。符節。わりふに同じ。

ふせづる　ナ。布施弦。弦の名。越中國の布施といふ地よりいだす弦をいふ。貞丈雑記　七一職人歌合（つるうり、めし候へ、ふせづるも候ふ、せきづるも候ふ）

ふせどり　ナ。伏鳥。伏術といふ詞なり。馬を乗りまはして、雉子などをおひふせて付るなどいふ。貞丈雑記

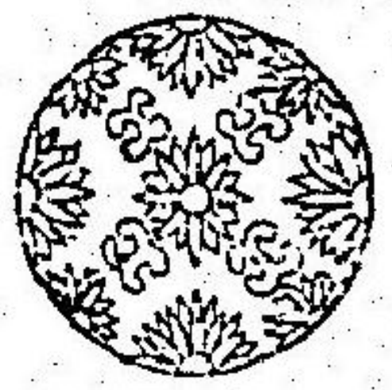
ふせぬひ　ナ。伏縫。ぬひめのみえぬやうにぬふをいふ。

ふせん　ナ。附箋。つけがみ。つけふだ。さげふだ。

ぶせん　ナ。奉膳。内膳司の長官をいふ。かみと見るべし。

ふせんりよう　ナ。浮線綾。織物の名。あやの、うきおりにおりたるもの。源姫松（よろこびきこえたまふ。かへりさまひて、まづ、このふくろをみたまへば、唐のふせんりようをぬひて、上といふ文字を、うへにかきたり）

ふせんりよう　ナ。浮線綾。紋所の名。輪の中に、織物におりいだす浮線綾の文をかきあらはしたるもの。



ふせや　ナ。伏屋。ひくきいへ。ちひさきいへ。万三（まづさの、おびときかへて、臥屋たつ、つまどひしけん、葛飾の、眞間の手兒名が、おくつきを、ここときけど、槙の葉や、しげくあるらん）

ふせやたき　ナ。伏屋焼。ふせやたきとは、伏屋にたく火をいふ。詞にて、たく火まれ、烟のいでくるものむれびすゝにかけていふ。万九（蘆八燎、須酒師競て、あひよぞひ、まけるときに、焼太刀の、たかみおしねり）

ふせやたつ　ナ。伏屋立。ふせやたつ、ふせやをたつるにて、つまはかけていふ。伏屋など、すべて、家のむしを、つまともいへばなり。万三（倭文機の、帯をときかへて、臥屋立、妻どひしけん、葛飾の、眞間の手兒名が）

ふせる　ワ。ヒトリ。四。伏。臥。ふすといふに同じ。

ふせる　ワ。カケ。シニ。伏。臥。ふさしむ。ふすを見るべし。

ふそく　ナ。不足。たらぬをいふ。かけたるをいふ。

ふぞく　ナ。風俗。ふうぞくのうた。さいばらのたぐひ。枕草十（歌は、杉たてる門、神樂歌もをかし。いまやうは、ながくてくせづきたる、ふぞくよくうたひたる）

ふぞく　ナ。附屬。つきそひ。また、つきそひたるもの。

ふた　ナ。蓋。もののくちのところをおほふもの。源蜻蛉（ひ氷を、物のふたにおきて、わるとてさわぐ。ひとぐ、おとな三人ばかり、わらはと居たり）

ふた　ナ。二。ふたつ。ひとつは、ひとつをあはせたるかず。

ふだ　ナ。札。簡。ふみた。ものをかきつくるちひさきいた。また、ものごとをかきつけて、しるしにもちふるもの。夫木卅（うしのくひ、さすがに月の、かげいでて、ころすむ夜の、ときのふだかな）

ぶた　ナ。豚。獣の名。ゐのこに同じ。

ふたあゐ　ナ。二藍。染色の名。赤花と青花とにて染めたる色をいふ。胡曹抄。また、襲の色目にて、表は濃き縹のあかみたるにて、裏の縹なるものをいふ。雁衣抄

ふだい　ナ。譜代。よゝをへてつかへきたるもの。

ぶたい　ナ。舞臺。まひをまふところ。あそびをするところ。空穗吹上（御前は、ぶたいゆひ、あげぬりうちたり）十訓六（舞臺の上に、十二人の妓女まふ。皆ゝ白衣を着たり。樂の聲、舞のすがたのどかにすめり）

ふたいとこ　ナ。再從兄弟。いやいとこ。いとこどちのこ。

ふたう　ナ。不當。ことわりにかなはぬをいふ。沙石集六（禪門、かへすぐす奇怪なり。不當なりとて、所領をめし、流罪にさだめけり）

ぶたう　ナ。舞蹈。まひをどり。また、君より、賜物などありたるとき、御前にて、袖をかざして、たちまふごとくして、畏りを申すをいふ。枕草一（よろこびそうするこそ、をかしけれ。うしろをまかせて、笏とりて、御前の方にむかひてたてるを、はいし、ぶたうしさわぐよ）

ぶだう　ナ。葡萄。えびかづらを見るべし。

ぶだう　ナ。武道。ぶのみち。たゝかひなどのみち。

ぶだう　ナ。無道。ひとのみちにかなはぬをいふ。

ぶだうがき　ナ。葡萄柿。信濃柿の一種。さるがきに同じ。

ぶだうしゆ　ナ。葡萄酒。ぶだうのみをもてつくりたるさけ。太閤記一（上戸には、ちんた、ぶだうしゆ、ろうけ云や、下戸には、かすていら、ぼうる、かるめいる）

ぶだうねずみ　ナ。葡萄鼠。あらぞみたるねずみいろ。

ふたおき　ナ。蓋置。ふたをのせおくもの。茶の湯のときなどにもちふるものなり。かくれが見合すべし。

ふたおや　ナ。兩親。かぞいろは。ちゝとはゝと。

ふたかたやま　ナ。二方山。山の名。陸奧國の桃生の郡にあり。名寄（みちのくの、ふたかたやまの、さらくもれ、てなさかなさに、たちぞせづらふ）

ふたかみやま　ナ。二上山。山の名。大和にあり。また、越中にもありといふ。万七（紀路にこそ、妹山ありといへ、かづらきの、二上山も、妹こそありけれ）

ふたがる　ワ。ヒトリ。四。塞。ふたとなる。ふさぐやうになる。空穗國譲（兵衛の君をいふひと、道はふたがりたまひて）源帚木（なかがみ、内よりはふたがりて侍り）

ふたぐ　ワ。カケ。四。塞。ふたをなす。あかぬやうになす。榮花ゆふしで（おまへよりこちらせさせたまはん事を、御顔ふたがせたまふべき事など申させたまひて）

ふたぐ　ワ。カケ。シニ。塞。ふたをなす。あかぬやうになす。源蜻蛉（誰ならんとみたまふ。今まうのぼりける道にふたげられて、とどこほり居るなるべしとみゆ）

ふだくばり　ナ。札配。[illegible]。神社などにて、守札のたぐひを、氏子の家々にくばりあるくをいふ。

ふたこ　ナ。二子。織物の名。ふたこおりに同じ。

ふたご　ナ。二子。ひとたびの産に、ふたりの子をうむをいふ。神代紀（雙生隠岐洲與佐渡洲）

ふたこいと　ナ。二子絲。ふたすぢあはせたるいと。

ふたこおり　ナ。二子織。ふたこいとにておりたるもの。

ふたごころ　ナ。貳心。かなごころをもちたるをいふ。鎌倉右大臣集（やまはさけ、うみはあせなん、世なりとも、君にふたごころ、わがあらめやも）

ふたごもり　ナ。二籠。ふたつのかひこにて、ひとつのまゆをつくりたるもの。後撰（ひきまゆの、かくふたごもり、せまほしみ、くはこきたれて、なくをみせむや）

ふたごやま　ナ。二子山。山の名。下野にあり。六帖（下野や、二子の山の、二心、ありける人を、たのみけるかな）

ふださし　ナ。札差。おほやけの米倉につきたる役人のごとくにて、その米の拂下をうくるもの。また、驛路の繼場にて、荷物をあらたむるものをもいふ。

ふたしへに　ソ。二重。ふたへに。後撰（いかでかく、心ひとつを、ふたしへに、うくもつらくも、なしてみすらん）

ふだしよ　ナ。札所。ふだをいだすところ。常に、巡禮などのまうづる、三十三所の觀音堂の事をいへり。

ふたたび　ソ。再。かさねて。つぎのたび。

ふたつ　ナ。布達。ふれ。ふこく。おほやけよりのしらせ。

ふたつ　ナ。二。ひとつに、ひとつをあはせたるかず。佛足石歌（みそぢあまり、布多都のかたち、やそくさと、そたれるひとの、ふみしあとどころ、稀にもあるかも）

ふたついろ　ナ。二色。かさねの色目の名。表はうすいろにて、裏の黄色なるものをいふ。織文圖會

ふたつえり　ナ。二襟。ふたつの小袖を、ひとつにかさねて着るをいふ。女の小袖を着るにいふ詞なり。貞丈雑記

ふたつなし　サ。ヒ。無二。たぐひなきをいふ。空穗俊蔭（憐は、うしろめたく思ゆる事のふたつなければ）

ふたづま　ナ。二妻。ふたりのつま。神樂歌（それをきて、不多川万とるや、とるやこふ）

ふたつまゆ　ナ。二繭。ふたごもりに同じ。

ふたと　ソ。碓。ふと。こまと。今昔（たちめぐりて、なととのさりな、ふたとけとかりけれど）

ふだな　ナ。文棚。さうしなどをのせおくたな。

ふたななえだのまつ　ナ。二七枝松。としのはじめのいはひになるまつ。男は、松の枝なゝつをそり、女は、ふた

つゞなりていふ詞あり。夫木八十（こよひ来て、おくる朝や、せがせこが、ふさなへその、松もなるべき）

ふたなり ナ。二形。ふたつのかたちをそなへたるもの。

ふたの ナ。二幅。をんなのきをはをいふ。

ふたのつじ ナ。札辻。たふざをかゝげたるちまた。

ふたのもの ナ。蓋物。ひろぶたと同じ。

ふたば ナ。二葉。草木の、おひいでて、葉のふたつむかひなるところ。拾遺（深山木の、ふたばみつばにもゆるまで、きえせぬゆきと、みえもするかな）

ふたば ナ。二葉。名香の名。ちんの一種なり。

ふたばあふひ ナ。二葉葵。もろはぐさと同じ。

ふたばぐさ ナ。二葉草。もろはぐさと同じ。

ふたばもみぢ ナ。二葉紅葉。草の名。いたどりと同じ。

ふたばやま ナ。二葉山。山の名。山城にあり。夫木（神垣に、かくる葵の、二葉山、幾年そでの、露むすぶらん）

ふたふたと ツ。翅などをうちふるさま。夫木（あけぼのさる、みむろのやまの、ふとどりは、ふたふたとこそ、とびあがるなれ）枕草二（あふぎにかへるひとの云々、扇ひきひろげて、ふたふたとうちつかひて、まかりまうししさる、にくしといふのつね、いとおかしきやうなし）

ふたへ ナ。二重。もののふたつかさなりたるをいふ。仁徳紀（ころもこそ、二重もよき、さゆどこを、ならべんきみは、かしこきろかも）大和（このをとこ、いといたうおいて、ふたへにて居たり）

ふたへ ナ。二重。襲の色目の名。表裏、ともに、同色なるもの。但し、おほくは、紫、萌葱などにいへり。布衣記

ふたへおり ナ。二重織。あやの、ぬひものしたるもの。

ふたへごし ナ。二重腰。ものゝかゞみたるをいふ。

ふたへじ ナ。二重字。ふたへのもじ。かごじを見るべし。

ふたまがみ ナ。杜蘅。草の名。高さ二三寸ばかり、茎はえだなく、葉は、馬の蹄に似て、茎の末につき、紫のちひさき花さきて、豆のごとき実をむすぶ。和名（杜衡一名馬蹄香和名、布太末加美、一云豆不嘛久佐　形似馬蹄、故以名之）

ふたまた ナ。二俣。きの、ふたつあるもの。

ふたまたに ツ。二俣。これかれに。二心なるさま。

ふたまたぶね ナ。二俣船。めをとぶね。ちひさきふねの、ふたつならびたるごとくつくりなしたるもの。古事記（在於尾張之相津二俣榲作二俣小舟而）

ふたみ テ。二見。地の名。伊勢にあり。金葉（玉くしげ、二見山の、木の間より、いづればあくる、夏の夜の月）

ふたみち ナ。二道。ふたつのみち。狭衣四（一方は、ふりなればさても、やむべきを、など二道は、思ひなやますらむ）

ふたむらやま ナ。二村山。山の名。参河にあり。また、丹波にもありといへり。夫木（参河なる、ふたむらやまを、とられて、この世もこれも、あらじとぞおもふ）

ふたん ナ。負担。うけもち。ひきうけ。

ふだん ナ。不断。つねにたゆまなきをいふ。狭衣四（いかめしき寺たてゝ、まねびて、いますればこもりつゝ、ふだんの念仏などをおこなひたまふを）

ふだんぎ ナ。不断着。けぎ。つねにきてゐるきもの。

ふため ナ。二目。ふたゝびみるをいふ。

ふため ナ。不為。もちひて、よからぬすぢとなるをいふ。

ふためかす ワ。カケ。四。翅などをうちふる。ふさくとさせさらす。宇拾三（雀は、谷の声ありきけるを、童部、石をとりてうちたれば、あたりて、こしをうちをられにけり。羽をふためかしてまどふほどに）

ふためく ワ。ヒトリ。四。翅などをうちふる。ふさくとそさらく。あさてさはぐ。宇拾二（くそとびの羽をれたる、土におちてまどひふためくを）

ふたもじ ナ。二文字。野菜の名。にらをいふ。上﨟にて、

ふたもの ナ。蓋物。がふし。ふたあるうつはもの。

ふたゆく ワ。ヒトリ。四。二行。ふたすぢにゆく。ふたすぢのみちをゆく。万四（とがきみは、せけれども若ねど、おもへるも、あふ夜あはぬ夜、二走ぬらん）

ふたより ツ。二回。ふたゝび。千載（ともしして、箱根の山は、あけにけり、二より三より、あふとせし間に）

ふだらく ナ。補陀落。天竺の、観世音菩薩といふ仏のあられし地なりとぞ。拾玉四（ふだらくの、南の岸は、いつくして、今ぞさうえん、きさのふたなみ）

ふたりしづか ナ。二人静。草の名。つきねぐさと同じ。

ふたりと ツ。孺。むつまじ。宇拾二（をなもとげの木ゆるぎて、花ちりて、頭の中へやきりとうちいれつ）

ふたをけづる ワ。ヒトリ。四。削。ひざまゐのふたをのぞく。つきをめしをなつ。空穂蔵開（蔵八、御返もてまゐらず、ふたけづらんとおほせられつるものを）

ふち ナ。淵。かはなどの、みづのよどみて、ふかくなりたるところ。和名（潭、唐韻云、深水也和名、布知）

ふち ナ。縁。へり。もし。めぐり。山家集（ときみおく、あかの折敷は、ふちなくば、何は緑の、玉とまらまし）

ぶち ナ。駁。ぶち。ことなるいろの、ところどころにまじりさるをいふ。和名（駁馬俗云布知無毛駁馬不純色馬也）

ふち ナ。扶持。たすけ。みつぎ。新千（山里に、たゞかりそめの、籬垣、ふちする人も、なき世かな）

ふぢ ナ。藤。蔓草の名。葉は、萩に似て、おほきくしてやはらかなり。春のすゑ、夏のはじめ、花房ながくたりて、むらさきの花さく。また、一種の、花のしろきもあり。花の後は、なたまめのごとき莢をむすぶ。和名（藤字亦作藤、和名、布知藤也、似葛而大）

ふぢ ナ。藤。襲の色目の名。表は、うすむらさきにて、裏は青なるものをいふ。胡曹抄、また、表は、むらさきにて、裏のうすむらさきなるをもいへり。雁衣抄、満佐須計装束抄、布衣記

ふぢ ナ。籐。とう。ふぢかづらのところ見るべし。

ぶち ナ。鞭。むちと同じ。拾遺（太子の乗りたまへる馬止りてゆかず。ぶちをあげてうちたまへに、尻へさりのきてとゞまる。太子、すなはち、馬よりおりて）

ぶち ナ。斑。ぶちと同じ。神楽歌（あしぶちのや、もりのさるなる、とが駒草てて、あしぶちの、とらけのこま）

ぶちあんない ナ。不知案内。あんないをしらぬをいふ。

ふぢいろ ナ。藤色。むらさきのうすきいろ。

ぶちうま ナ。斑馬。ぶちのうま。空穂吹上（さまざまのぶちうまの、たけやきばかり、年むつばかりなる）

ぶちかけ ナ。魚の名。ひれをいふ。常陸、水戸にて、

ふちかた ナ。扶持方。ふちまいをあつかふやくにん。

ふぢかづら ナ。蔌。籐。ふぢのつる。但し、籐は、もと、熱国にいでくる、一種の蔓草にて、茎は、葦のごとく、葉は、竹のごとくにて、枝なきものなりといふ。籐細工にもちふるは、このものなり。されど、ふるく、籐を、藤とならひて、古辞どもにも、籐をあるより、いつしか、藤はまぎれて、ふぢをのみよみならひたるをも、今も、その定にしてあらさめず。

ぶちごま ナ。斑駒。ぶちのこま。古事記（天斑馬剥而）

ふぢごり ナ。藤行李。ふぢかづらにておりたる行李。

ふぢごろも ナ。藤衣。くずかづらなどにておりたる衣のころも。また、喪服をいふ。喪服は、かゝるものなるきれなり。古今（穂にはいでぬ、山田をもると、藤衣、稲葉の露に、ぬれぬ日ぞなき）和名（燧和名、不知古路毛喪服也）

ふぢごろも マクラ。藤衣。ふぢごろもは、おりめあらくしければ、まどほにかけていふ。万三（須磨の蜑の、志ほやきぬの、藤衣、間遠にしあれば、いまだきなれず）

ふぢざいく ナ。籐細工。ふぢかづらにてつくれるさいく。

ふぢしろやま ナ。藤白山。山の名。紀伊国の名草の郡にあり。夫木（ふぢしろの、やまのみさかを、こえもあへず、まづ目にかゝる、ふきあげのはま）

ふちす ワ。カケ。カ。扶持。たすく。そだつ。平家一（忠仁公、幼主をふちしたまへり。是ぞ、摂政のはじめなる）

ふちせ ナ。淵瀬。ふちとせと。ふかきところとあさきところと。後撰（飛鳥川、せきてとゞむる、ものならば、ふちせになると、なにかいはせん）

ふぢだな ナ。藤棚。ふぢをはひまとはしむるたな。庭などにかまへて、花をみる料とするものなり。

ふぢつら ナ。藤蔓。ふぢのつる。古事記（取布遅葛而）

ふぢな ナ。藤菜。たんぽゝ。和名（蒲公草和名、不知奈、一云太奈）

ふぢなみ ナ。藤波。ふぢのはなのうちなびくをいふ。されど、常には、たゞ、藤の花をいふ。拾玉（松はきし、庭は水をも、みゆるかな、藤波かゝる、宿のみぎりは）

ふぢなみの マクラ。藤波之。ふぢなみは、たゞ、ふぢをいふ。さて、藤は、ものにまつはるゆゑに、まつはすにかけていふ。万三十（藤浪乃、思纏、若草の、思ひつきにし）

ふぢのたもと ナ。藤袂。ふぢごろもと同じ。源氏（くろき御車の中にて、藤のたもとにやつれたまへれど）

ふぢのとりゐ ナ。藤鳥居。春日の神社にある鳥居の名。

ふぢのもり ナ。藤森。地の名。山城国の紀伊の郡にあり。夫木（むらさきの、くもとこそみれ、ふぢつなぐ、とゞろきふぢの、もりはまぞありける）

ふぢのやつれ ナ。藤窶。ふぢごろもをきてやつれたるをいふ。源少女（けふは、かけきやは、河瀬のなみも、たちかへり、きみがみそぎの、ふぢのやつれを）

ふぢばかま ナ。藤袴。草の名。らん。葉は、にらに似て、あつくなめらかにして、かをし。花は青くきざみて、むなびらは、紫のほしあり。この草、その類きそめておほくして、花のさまも、さまざまなり。古今（何人か、來てぬぎかけし、ふぢばかま、くる秋ごとに、野邊をにほはす）和名（蘭、一名蕙、和名本草云、布知波賀萬、新撰萬葉集、別用藤袴二字）

ふぢばかま ナ。藤袴。かさねの色目の名。表も裏も、ともにむらさきなるものをいふ。（胡曹抄・藤袴草）

ふぢはし ナ。藤橋。ふぢかづらをかけわたしたるはし。

ふぢはら ナ。藤原。氏の名。なかとみを見るべし。

ふぢふ ナ。藤生。たかのそねのふといふことぞ。下文を見るべし。兩岸松鷗軒記（藤のふは、ふちふといふは、むねのふ、藤の花のさきたるに似たり）

ふぢふの ナ。藤生野。催馬樂の呂の曲の名。催馬樂（不知不乃の、かさち、かさちがたらを、ためやし）

ふちまい ナ。扶持米。ふちにあたふるこめ。

ふぢまめ ナ。藤豆。鵲豆。豆の名。葉は開くして、末の方とがり、花は、藤の花に似て、さらにおほきなり。秋の頃、鵲豆に似たる莢をむすぶ。莢の中の豆は、さゝげに似て、さゝげよりおほきなり。

ふちん ナ。浮沈。うきしづみ。さかゆるとおとろふると。

ふちやう ナ。符帳。もののあたひを、かくしとぞめてつけたるもの。商人の家にてもちふるものなり。

ふぢやう ナ。不定。さだまらぬをいふ。たしかならぬをいふ。宇拾一（何ならあらんとみるに、そのことども、まうできたりといへば、不定の事なとといふほどに、たゞちゝはちらくなりて、ちらくとおるゝほどに）

ふちゆう ナ。不忠。きみに、よくつかへぬをいふ。

ふつ ワ。カケ。ヒニ。棄。すつに同じ。四季物語（齋部の、御簾にありしを、かなぐりふてさりし葵の枯葉に）

ぶつ ナ。佛。ほとけに同じ。

ぶつ ワ。カケ。四段。ちやうちやくす。雜兵物語（冑甲をぶてば、なまくらものは、なべづるのやうになる）

ふつう ナ。普通。よのつね。つねのなみ。保元（爲朝ほどのものが、普通の凡夫にはいけどらるゝことよ）

ふつう ナ。不通。かよはぬをいふ。とほらぬをいふ。

ふつうよう ナ。不通用。ひろくつうようせぬをいふ。

ふつか ナ。二日。ついたちのつぎのひ。ふたつのひかず。

ぶつか ナ。佛家。てら。ほとけのみちをとなふるいへ。

ぶつか ナ。物價。もののあたひ。もののねだん。

ぶつかく ナ。佛閣。てら。てらのたてもの。

ふつがふ ナ。不都合。つがふのわるきをいふ。

ふつかよひ ナ。二日醉。ふつかゑひに同じ。

ふつかゑひ ナ。二日醉。ふつかよひ。酒にいたくゑひて、次の日までも、なほさめずしてあるをいふ。

ふづき ナ。文月。みなづきのつぎのつき。胡曹抄（棚機の、心もいかに、騒ぐらん、稀にあふべき、ふづきたつ也）

ぶつき ナ。佛器。ほとけのまつりにもちふるだうぐ。

ぶつぎ ナ。物議。よのとりさた。よのひとのぎろん。

ぶつきやう ナ。佛經。ほとけぶみ。きやうもん。

ぶつく ナ。佛供。ほとけにさゝぐるおもの。枕草四（あやしきものの聲にて、なほ、その佛供のおろし侍りなんといへば、いかでまださきみれといらふるを）

ぶつぐ ナ。佛具。ほとけのまつりにもちふるだうぐ。

ふつくむ ワ。ヒトリ。四段。憤。いきどほる。神代紀（啼泣恚恨）

ふつくりと ソ。脹らかにこえたるさまをいふことぞ。

ぶつくわ ナ。佛果。ごくらくのほとけとなるをいふ。

ふづくゑ ナ。文机。ふみづくゑ。ふみをのするつくゑ。玉葉（紀伊國たましまと申す所の石をとりて、ふづくゑのあたりにおきて侍りけるにかきつける）

ぶつけう ナ。佛教。ほとけのをしへ。ほとけのみち。

ふつけうに ソ。拂曉。あかつきに。あさまだき。竹崎五郎繪詞（左衞門三郎赤げつな、拂曉にむせきありしに）

ぶつこ ナ。物故。なきひとのかずにいるをいふ。

ぶつど ナ。佛土。ほとけのみちにていふことぞ。

ぶつこす ワ。ヒトリ。カ。物故。なきひとのかずにいる。

ぶつさ ナ。佛作。ぶつさうをすうるところ。

ぶつさう ナ。物騒。もののさわがしきをいふ。保元（このほど、京中ぶつさうのよしうけたまはり）

ぶつさう ナ。佛葬。ぶつざうにてはうぶるをいふ。

ぶつざう ナ。佛像。ほとけのざう。拾古談一（藏の中に、佛像ありけり。五箇日をへて、風ふきたふしてけり）

ぶつさきばおり ナ。打裂羽織。はおりの、うしろのかたをさきたるもの。武人の、刀をさす時きしものなり。

ぶつさん ナ。佛參。ほとけにまうづるをいふ。

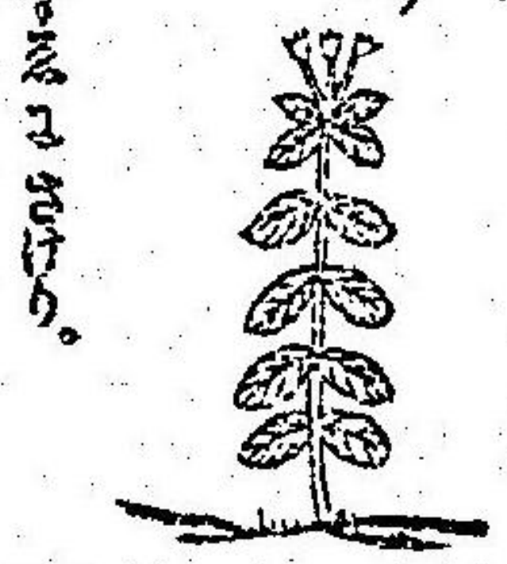
ぶつさん ナ。物產。くにつもの。そこにいでくるもの。

ふつさりと ソ。總のごとく。また、ふさやかに。

ぶつし ナ。佛師。ぶつざうをつくるたくみ。宇拾三（家に、佛師をよびて、地藏をつくらするほどに）

ぶつじ ナ。佛事。ほとけのまつり。玉葉（殷富門院大輔、人の墓たづねて、佛事おこなふとて）

ぶつしかふ ナ。佛指甲。草の名。高さ一二尺ばかり、葉は、莖の頭のごとくにて、ふたつの葉、ひとつの莖に、むかひあひてつきたり。また、花は、黄色にて、莖のすゑにさけり。



ぶつしん ナ。佛神。かみとほとけと。

ぶつしよ ナ。佛書。ほとけぶみ。きやうもん。

ぶつぜん ナ。佛前。ほとけのまへ。てらのまへ。

ぶつだ ナ。佛陀。ほとけをいふに同じ。

ぶつたい ナ。物體。もの。かたちあるもの。

ふつたう ナ。沸湯。にえゆ。わきあがりたるゆ。

ぶつだう ナ。佛道。ほとけのみち。ほとけのをしへ。狹衣三（經、佛の御かざりなくてならず。まことは、口の中に、佛道なりぬべきさまにおぼしおきてたり）

ぶつだん ナ。佛壇。ほとけをまつりおくだん。

ふつつかなり サ。肥えふとりたり。いやしげにてみぐるし。また、ぶてうなり。また、つたなし。源浮舟（ふつゝかなるさましたるおきなの、聲かれ、さすがにけしきある、女房にものとりきこえんといはせたれど）

ふつつかに ソ。肥えふとりて。いやしげにてみぐるしく。また、ぶてうに。また、つたなく。空穗國讓（兵部卿宮にまゐりさまつ。みれば、いとおほきやかに、ふつゝかにこえまさるが、色ぐろく、ものくるしくおはす）

ふつつかもの ナ。不束者。ぶてうにてつたなきもの。

ふつてい ナ。拂底。そらひいざしてなくなれるをいふ。

ぶつてん ナ。佛天。ほとけ。ぼさつ。源薄雲（かゝる老法師の身は、たとひうれへ侍りとも、何のくいか侍らん。佛天のつげあるによりて奏し侍るなり）

ふつと ソ。斷えて。ふつに。大和（その家におきたるものに、物などもくれてとひければ、ふつといはで）長明無名抄（後撰の歌といふ事、ふつとおもひよらず、思ふさまに、やうく難ぜられけるな）

ぶつと ソ。斷ゆるおと。なぞなどのきるゝおと。

ふつとう ナ。沸騰。ゆなどのわきあがるをいふ。

ふつとうさん ナ。沸騰散。炭酸曹達と酒石酸とを、水にいれてまぜたるもの。泡たちてわきあがるものなり。

ふつとうす ワ。ヒトリ。カ。沸騰。わきあがる。にえあがる。

ふつとめ ナ。不勤。つとめを、よくつとめぬをいふ。

ふつに ソ。斷えて。さらに。父子相迎（ふつにおもひすてはけるは、うらやましきこゝろもちなり）

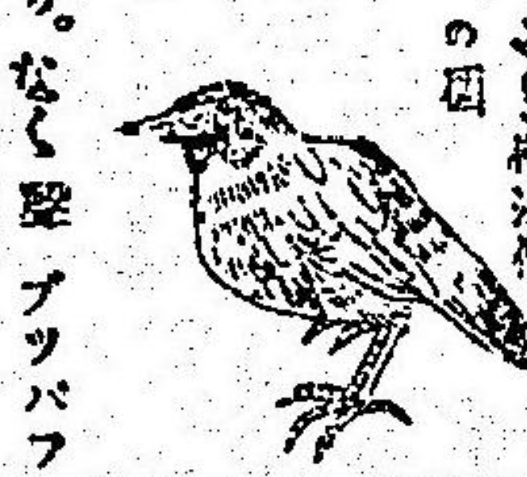
ふつぬし ナ。經津主神。いはつゝのをの神の御子。建御雷の神と、葦原の中國を和ひきよめ給ひし大神なり。

ふつのおほかみ ナ。普都大神。ふつぬしに同じ。

ふつのみたま ナ。韴靈。神劍の名。今、大和國、山邊郡、石上神社にまつれり。神武紀（韴靈、此云赴屠能瀰哆磨）

ぶつぽふ ナ。佛法。ほとけのみち。ほとけのをしへ。

ぶつぽふそう ナ。佛法僧。鳥の名。下文を見るべし。桃洞（この鳥、雄なるものは、形、鳩のごとく、やせてちひさく、頭、淡黒、羽毛、綠色にして、胸、背、碧條まじり、翅の末は碧いろ、翼および尾の末は、黑色、喙ほそく、鳩の尾のごとし、脚とともに赤色なり。なく聲ブツパフソウといふ）新六（松の尾の、峰しづかなる、あけぼのに、あふぎてきけば、ぶつぽふそうなく）



茶窓漫録にみえたる佛法僧の図

ぶつぴん ナ。物品。もの。しなもの。

ぶつぶつ ソ。湧々。わきあがるさま。にえあがるさま。

ふつま ナ。太馬。ふときうま。万廿（かゝるおもひを、馬に布都麻に、負せもて、越方にやらば、人かぞへんかも）

ぶつま ナ。佛間。ほとけをまつりたるへや。

ぶつみやう　ナ。佛名。公事の名。陰曆、十二月十九日より二十一日まで、三日の間おこなはる。下文をみるべし。公事根源（御佛名云々　仁壽殿の御本尊をうつして、御帳の中にかけて、南の廂の間に、又、南北に胡床をたてて、佛像、塔形をおく。佛前に、香花なども供ふ）

ぶつもん　ナ。佛門。ほとけのみち。ほとけのをしへ。

ふつりあひ　ナ。不釣合。つりあひのそろはぬをいふ。

ぶつろん　ナ。物論。よのとりざた。よのひとのぎろん。

ふづゑ　ナ。文杖。ふばさみに同じ。建武年中行事（辨官、藏人など、吉書そうもんすれば、ひのおましにて御らんず。辨官もしは、藏人、文杖にはさみて奏す）

ふで　ナ。筆。ふみて。もじをかくにもちゐるもの。羊、狸などの毛を、管にすげたる物なり。源　梅枝（筆の尻くはへて、思ひめぐらし給へる姿、あく世なくめでたし）

ふで　ナ。筆。もんじ。もんじのかきざま。續拾（三代の筆の跡をみて、さらにかきそへ侍りし）

ふであらひ　ナ。筆洗。ふでのすみをあらふうつはもの。

ふていさい　ナ。不體裁。ていさいのそろはぬをいふ。

ふでう　ナ。不調。ととのはぬをいふ。おもしろからぬをいふ。玉葉（同寺の別當なりける僧、不調なりける事ありて、かの寺にもすまずなりて）源　野分（いとふでうなる娘まうけ侍りて、もてさすらひ侍りぬと）

ぶてうほふ　ナ。不調法。あやまり。また、つたなきをいふ。

ふでかけ　ナ。筆架。ふでをもたせかけておくもの。

ふでがしら　ナ。筆頭。もののかきはじめ。

ふてき　ナ。不敵。おほきも。こころたましひふとくて、おそるべきことをもおそれぬなどをいふ。盛衰記（文覺、ひねもすおひまはりけれども、いかにといふ事もなかりければ、云々、きこしめしいれざるにぞ、こゑをそろへて、天性ふてきのものなるひなりければ）

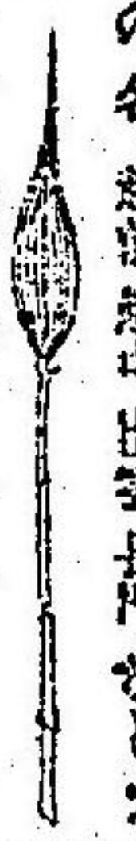
ふでき　ナ。不出來。つくりたるもののできざまをいふ。

ふてきたう　ナ。不適當。ものによくかなはぬをいふ。

ふてぎは　ナ。不手際。てぎはのわろきをいふ。

ふてきもの　ナ。不敵者。ふてきなるおこなひをするもの。

ふでくさ　ナ。筆草。草の名。越前、越中、出雲、長門などにいでくといふ。葉はほそながくして、穂のさま、筆に似たり。また、その穂[illegible]、まことに文字をもかくべしといふ。



ふてごと　ナ。不敵事。ふてきなること。著聞六十（從者をふみふせて云々、としごろ、ただひとりめしつかひつるに、ふてごとをもしてやすからずおぼえしかども、勘當しては、いかにせんぞとおもひねんじてすぎ侍りぬ）

ふでさき　ナ。筆端。ふでのさき。ふでのさばき。

ふでし　ナ。筆師。ふでをつくるを、なりはひとするひと。

ふでたて　ナ。筆立。ふでをたてておさめおくうつは。

ふでつか　ナ。筆柄。ふでのえ。ふでのぢく。

ふでづか　ナ。筆塚。ふるふでをうづめてきづきたるつか。筆のいさをしをおもひてする事なり。

ふでづかひ　ナ。筆遣。ふでのつかひざま。源　若菜（すみつきなどいとおかしく云々、例の筆なれど、[illegible]ふでづかひ、なほ、よりそこくおかしげなり）

ふでつばな　ナ。筆芥花。つくしの異名。藻鹽草

ふでとり　ナ。筆執。ものかき。かきやく。

ふでのうみ　ナ。筆海。もじの、あまたつもりてあるをいふ。和訓栞（ふでのうみ云々、新六帖には、和歌浦は、おほくの人の、筆の海、沖にも邊にも、藻鹽かくらし）

ふでのせ　ナ。筆架。ふでをもたせかけておくもの。

ふでのやま　ナ。筆山。山の名。讃岐にあり。西行集（筆山にかきのぼりても、みつる哉、苔の下なる、峰の景色を）

ふでばな　ナ。筆花。草の名。かきつばたをいふ。關東にて、

ふてふ　ナ。符牒。ふちやうに同じ。

ふてまはり　ナ。不手廻。てまはりのわろきをいふ。

ふでや　ナ。筆屋。ふでをあきなふいへ。

ふでゆひ　ナ。筆結。ふでし。ふでをつくるをなりはひとするひと。七十一番職人歌合（ふでゆひ、うのけ、毛のうらおもてみえぬが大事にて候ふ）

ふと　ナ。浮圖。ほとけ。また、そうをもいふ。

ふと　ナ。餢飳。食物の名。あぶらげのもちのたぐひ。和名（餢飳字亦作䬽飳、和名、布止、俗云伏兎、油煎餅名也）

ふと　ナ。サ。太。ふときもの。ふとき。ふとし。

ふと　リ。不圖。やがて。そのままに。かりそめに。たちまちに。竹取（ひが弓のちから、龍あらば、ふと射ころし

て、頸の玉はとりてん）空穗　上（おふぎしてまねきたまへば、うちゑみてふとおとしつり）

ぶと　ナ。蚋子。虫の名。谷川などにおほき虫にて、かたち、蚊に似て、蚊よりもちひさく、足みじかく、色くろし。この虫に螫さるる時は、ちぢみてはるる事あり。

ふとい　サ。太。ふとしを見るべし。

ふどう　ナ。不動。ふどうそんに同じ。宇拾一（不動の咒をとなへて居るに、よなかばかりに）

ふどう　ナ。不同。おなじくなきをいふ。

ふどうさん　ナ。不動產。うごかされぬざいさん。土地、家屋のたぐひ。そのうごかさるるものは動產といふ。

ふどうそん　ナ。不動尊。佛法をまもる神なりといふ。常に、頭おそろしげにて、右には、降魔の劍をもち、左には、縛の繩をもち、背には、火焰をおひたる狀をゑがけり。狹衣三（何のゆゑしきぞとよ、不動尊の御しげなるは、くされんとやとおどしたまふ）

ふどうみやうわう　ナ。不動明王。ふどうそんに同じ。

ふとおり　ナ。太織。織物の名。いとのふときをおれり。

ふとおりつむぎ　ナ。太織紬。いとのふときつむぎ。

ふとぎぬ　ナ。太絹。織物の名。ふとおりに同じ。

ふとくしん　ナ。不得心。とくしんをせぬをいふ。

ふところ　ナ。懷。むねときもののあひだのふくれたるところ。また、もののくぼまりたるところ。源　若菜（ふところなりける笛とりいでてふきすましたり）

ふところがたな　ナ。懷刀。かたなのちひさきもの。ふところにいれてたづさふるばかりのものなり。

ふところがみ　ナ。懷紙。ふところにをさめおくかみ。空穗　藏開（硯をひきよせて、ふところがみに、かくかきて）

ふところご　ナ。懷兒。ふところにいだくばかりのこ。

ふところで　ナ。懷手。てを、ふところにさしいれてゐるをいふ。なにごともせずてゐるをいふ。源　初音（さしのぞきたまへれば、ふところでひきなほしつつ、いともしる[illegible]）

ふところでつぽう　ナ。懷鐵砲。たねがしまのちひさきもの。ふところにいれてうつばかりのものなり。

ふところどけい　ナ。懷時計。とけいのちひさきもの。ふところにいれてたづさふるばかりのものなり。

ふところふで　ナ。懷筆。ふでの、つかみじかきもの。やたてさして、ふところなどにたづさふるものなり。

ふとし　サ。ビ。太。めぐりのかこみおほきなり。この詞は、今は、ふといといふ。万二（まきばしら、太き心は、ありしかど、このわが心、しづめかねつも）源　行幸（たけだちそぞろはものしたまへど、ふときもあひて、いとさうざうしく、おもちちあゆまひなど）

ふどし　ナ。犢鼻褌。ふんどし。たふさぎを見るべし。

ふとしく　ツ。カ。ガ。四。太敷。はしらなどを、いかめしくたつ。あめのしたを、ゆるらにしろしめす。万二（さだめてし、水穗の國を、かんながら、太敷きして、やすみしし、わが

おほきみの、天の下、まをしたまへば）

ふとしる　ワ。カ。ガ。四。太知。ふとしくに同じ。万十（かしこきろの、うねびの宮に、みやばしら、布刀之利たてて）

ふとだすき　ナ。太襷。ふときたすき。たすきをたたへていふことば。祝詞式（忌部能弱肩爾、太多須支取挂氏）

ふとだま　ナ。太玉命。むすびの神の御子にて、神代のとき、天石窟の前にて、幣帛をささげ、奉り、また、皇孫の天降りたまひし時にも、從ひ奉りし大神なり。

ふとだまぐし　ナ。太玉串。ふときたまぐし。また、たまぐしをたたへていふことば。祝詞式（大中臣、太玉串爾隱侍天、今年六月十七日乃朝日乃豐榮登爾稱辭申事乎）

ふとどき　ナ。不屆。ふてごとに同じ。

ふどの　ナ。文殿。ふみどの。ふみををさめおくところ。源　梅枝（徒然なるころ云々、殿にも、ふどのあけさせたまひて、まだひらかぬみづしどもの、めづらしき古集のゆゑなからぬ、すこしえりいでさせたまひて）

ふどの　ナ。文殿。院廳の役所にて、雜訴決斷、寄人などの官人あり。諸國の訴訟を決斷するところなり。

ふとのりとごと　ナ。太祝詞。のりとごとをたたへていふことば。万十七（なかとみの、敷刀能里等其等、いひはらへ、あがふいのちも、たがためになれ）

ふとばら　ナ。太腹。はらのふくれたるところ。宇拾十（この海の中には云々、すぐにとほりたる道あるなり。ふとばらは、馬のふとばらにたつときく）

ふとまに　ナ。太占。しかうらのたぐひ。神代の占なり。古事記（爾、天神之命以布斗麻邇爾卜相而詔之）

ふとむぎ　ナ。大麥。むぎの一種にて、常は、米のごとくにしてもちふるもの。今は、うちまろせて、むぎとのみいふ。但し、大麥といふ語は、小麥にむかつていふ名なり。和名（大麥、一名、青稞麥和名、布土無岐、一云加知加太）

ふとん　ナ。蒲團。わたを、あつくひろくかさねて、きぬなどにてつゝみたるもの。すわるにはしくもの、ふすにはきるものなどあり。また、ふるくは、圓座をいふ。下文を見るべし。貞丈雜記（蒲團といふは、圓座の事なり。蒲といふ草の葉にて、圓くくみたる物ゆゑ、蒲團といふ也。今の世、褥の事を、蒲團といふはあやまり也）

ふともの　ナ。大物。ふときもの。おほきなるもの。

ふともも　ナ。大股。もゝのふくれたるところ。

ふとやかなり　サ。太。ふとし。こえたり。おほきなり。

ふとやかに　ツ。太。ふとく。こえて。おほきく。

ふとり　ナ。太織。綜物の名。ふとおりに同じ。

ふとる　ワ。ヒトリ。肥。太。ふとくなる。枕草八（いやしげなるもの云々、ほうしごのふとりたる）誹開八十（おびたゞしくこえふとりて、夏などはなりぬればくるしくせられけり）字鏡（腴、波留、又布登留、又久太留、又保保呂）

ふな　ナ。鮒。河魚の名。たけみじかく、そびろき魚にて、背の色はあをく、身の色はくろし。この魚、よく、泡をふきて、その泡粒の中をゆく。和名（鮒魚和名、布奈）

ふな　ナ。船。ふねに同じ。万三（かんづまり、うしときいますゞ、諸の、大御神たち、布奈のへに、みちびきまをし）

ふな　ナ。椈。木の名。深山の木なり。葉は、かしの葉に似て、圓くちひさくして、冬はなれおつ。花は、うつぎに似てちひさく、實は、蕎麥に似て稜ぞみたり。

ふなあし　ナ。船脚。ふねのすゝみゆくあしどり。

ふなあそび　ナ。船遊。ふねにのりてあそぶあそび。空穂上吹（金の船どもこぎつらねて、ふなあそびして）

ふなあまり　リ。船餘。ふねの、岸につかんとするとき、勢あまりて、すこししりぞくをいふとぞ。允恭紀（おほきみを、島にはぶり、布儺阿摩利、いがへりこんぞ）

ふなあらため　ナ。船改。ふねのあらため。ふねのしらべ。

ふないうれい　ナ。船幽靈。うみのうへにあらはるゝ、いうれい。難船したるものの魂のあらはるゝなりとぞ。

ふないくさ　サ。船軍。ふねにてするいくさ。

ふなうた　ナ。船歌。ふなびとのうたふうた。土佐（船子、かぢとりは、ふなうたうたひて、何ともおもへらず）

ふなおくり　ナ。船送。ふねにのせておくるをいふ。

ふなおろし　サ。船卸。ふねの、あたらしくつくりたるを、はじめて、みづのうへにうかべそむるをいふ。

ふながかり　ナ。船繋。ふねの、みなとにとまるをいふ。

ふながく　ナ。船樂。ふねにてするがく。十訓六（船樂の時、笛を、河の淵におとしいれてえとらざりければ）

ふなかざり　ナ。船飾。ふねのかざり。また、ふねをこぎいださすよそひ。万二十（八十國は、なにはにつどひ、布奈可射里、あがせんひろを、みもひともがも）

ふながしら　ナ。船頭。役の名。ふなぶぎやうに同じ。

ふなかた　ナ。船方。ふなこ。かこ。かぢとり。せんどう。

ふなき　ナ。船材。ふねにつくるき。夫木二十（波間より、けさこそみつれ、島總たて、船木きるてふ、能登の島山）

ふなぎほひ　ナ。船競。ふなくらべに同じ。

ふなぎみ　ナ。船君。ふねのなかのきみ。土佐（ふなぎみの、からくひねりいだして、よしとおもへる事を）

ふなきやま　ナ。船木山。山の名。美濃國、席田の郡にあり。續拾（いかなれば、ふなきのやまの、もみぢばの、あきはすぐれど、こがれざるらん）

ふなぐ　ナ。船具。ふねにもちふるだうぐ。

ふなぐら　ナ。船庫。ふねをいれおくいへ。

ふなくらべ　ナ。船競。ふねをこぎきそひて、たがひにおくれじとあらそふたはぶれ。和名（競渡、布奈久良倍）

ふなこ　ナ。船子。ふなをさをたすけて、ふねをあやつるもの。土佐（船子どもは、腹鼓をうちて、海をさへおどろかして、波たてつべし）和名（舟子和名、布奈古）

ふなごや　ナ。船小屋。ふなぐををさむる、こや。

ふなさかやま　ナ。船坂山。山の名。播磨にあり。忠見集（風おたぬ、船坂山は、年月も、同じ所ぞ、泊なりける）

ふなしとぎ　ナ。魚の名。ふなのたぐひなり。形、こひに似て、灰色にて、鱗なく、目はちひさく、頭はひらたく

して、頭は、横のきざみあり。この魚、そのおほきなるは、二三尺ばかりなるもありて、頭のきざみをすりつけて、よく、船の底などをもつくといふ。

ふなじるし　ナ。船標。ふねにもちふるしるし。

ふなすゑ　ナ。船居。ふねをおろしすうるところ。延喜式（依船居無氏、播磨國與利、船乘止爲氏）

ふなせうえう　ナ。船逍遙。ふねにのりてあそびめぐるをいふ。貫之集（難波にて、ふなせうえうして、岸の藤花をなりて、やゝさまさして、暮にかへるとて）

ふなぞこ　ナ。船底。ふねのそこ。土佐（まして、女は、ふなぞこに、かしらをつきあてて、音をのみぞなく）

ふなだちす　ワ。ヒトリ。カ。船發。ふなです。雄略紀（發船）

ふなだな　ナ。船棚。ふねの、みぎひだりのそしは、板を、棚のごとくにしてつけたるところ。万二十（などのあまの、つりする船は、今こそは、布奈太那うちて、あへてこぎでめ）和名（枻（字亦作槐、和名、不奈太那、大船旁板也））

ふなだま　ナ。船靈。神の名。ふねをまもりたまふかみ。

ふなだより　ナ。船便。ふねのたより。ふねのついで。

ふなぢ　ナ。船路。ふねのみち。月清集（つなでひく、竹の下路、をりとめて、ふなぢはまよふ、花のかけはし）

ふなちん　ナ。船賃。ふねにて、ものをはこぶちん。

ふなつき　ナ。船着。ふなば。ふねの、つきてとまるところ。夫木卅（きりふかき、こがのわたりの、わたしもり、きしのふなつき、おもひさだめよ）

ふなづみ　ナ。船積。ふねに、ものをつみいるゝをいふ。

ふなて　ナ。船手。ふねのあるかた。ふねのとほるみち。また、ふないくさをもいふ。隆信集（野も山も、雪ふりぬれば、跡たえて、ふなてはのこる、冬のかよひぢ）

ふなて　ナ。船手。ふねをさはいするやくにん。

ふなで　ナ。船出。ふねを、みなとよりいだすをいふ。万二十（いまかへる、にひさきもりが、布奈氐する、うなばらのうへは、浪なさきそね）源明石（いつの間に、ふなでしつらんと、こゝろえがたくおもへり）

ふなど　ナ。岐神。神の名。くなどに同じ。

ふなどこ　ナ。船床。ふねにまうけたるとこ。三十二職人歌合（渡守、さくら川、花にはゆるさぬ、ふなどこを、おしていらぶ、せをる春風）和名（疾寄、釋名云、舟中床所以薦物曰答布奈度古、但有鑑知答床也）

ふなどとめ　ナ。船止。ふながゝり。新千（沖津波、たちもろるとも、音はきく、なかるの浦は、ふなどとめすな）

ふなどひや　ナ。船問屋。ふなびとのあつまるとひや。

ふなどまり　ナ。船泊。ふながゝり。ふなやどり。

ふなとめ　ナ。魚の名。ふなしときに同じ。

ふななわ　ナ。船繩。ふねをつなぐなは。

ふなに　ナ。船荷。ふねにつみておくるにもつ。

ふなには　ナ。船庭。ふねをいだすべき、のどかなるよきときをいふとぞ。万三（むこのうみ、舶爾波ならし、いざりする、あまのつりぶね、波の上ゆみゆ）

ふなぬし　ナ。船主。ふねのぬし。ふねをもちたるひと。

ふなぬすびと　ナ。船盜。かいぞく。船にて、こゝかしこをのりめぐりて、ものをぬすみありくぬすびと。

ふなのり　ナ。船乘。ふねにのるをいふ。また、かぢとりなどの、ふねにのるものをいふ。万一（にきたづに、船乘せんと、月まてば、潮もかなひぬ、今はこぎでな）

ふなば　ナ。船場。ふねの、いでいりするところ。

ふなはし　ナ。船橋。ふねを、いくつもうけならべて、わたるやうにしたるところ。万十四（かみつけの、佐野の布奈波之、とりはなし、おやはさくれど、我はさかるがへ）

ふなばしご　ナ。船梯子。ふねにのりうつるはしご。

ふなばた　ナ。舷。ふねのへり。夫木二十四（浮寢して、枕とたのむ、ふなばたは、おきならべたる、楫もありけり）

ふなはら　ナ。船腹。ふねのはら。古事記（不乾船腹）

ふなばり　ナ。船梁。ふねのうつばり。

ふなびと　ナ。船人。ふねにのりたるひと。また、かぢとりなどをいふ。万三（すみのえの、えなつにたちて、みわたせば、むこのとまりゆ、いづる船人）

ふなまど　ナ。船窓。ふねの、あかりをひくところ。

ふなまどひ　ナ。船惑。ふなぢのまよひ。是則集（いづこか、泊ならん、山風の、さそふ山路は、船惑して）

ふなまはし　ナ。船廻。ふねをこぎておくりやるをいふ。

ふなまんぢう　ナ。船饅頭。ふねにかよひくるうかれめ。

ふなみち　ナ。船路。ふねのかよふみち。後拾（ゆく春と、

共にたち居る、船路を、いのりかけさる、餘波の花）

ふなむし　ナ。船虫。虫の名。ふなぞこなどにつくむしなり。長さ一すむり、色くろずみて、なかき髭のごときものあり。この虫、そしろ浄きそめてきし。

ぶなん　ナ。無難。なにごとのさはりもなきをいふ。

ふなもち　ナ。船持。ふねをもちさるひと。

ふなもよひ　ナ。船催。ふなよそひに同じ。

ふなもり　ナ。船守。ふねのまもりをするひと。

ふなやかた　ナ。船屋形。ふねにまうけさるやかた。土佐（かくうたふに、ふなやかたの塵もちり、空ゆく雲も、たゞよひぬ）和名（楼庫和名布奈夜加太舟上屋也）

ふなやど　ナ。船宿。ふなびとなどをあつむるいへ。

ふなやまひ　ナ。船病。ふなやもひに同じ。

ふなやもひ　ナ。船病。ふなゑひ。ふねにゆられて、ゑへるがごとくなるをいふ。和名（暈船布奈夜毛非）

ふなゆ　ナ。淦。あか。ふねのそこよりいづるみづ。和名（淦漢語抄云、布奈由、一云淦水和物也）

ふなゆさん　ナ。船遊山。ふねにのりてあそぶあそび。

ふなよす　ワ。ヒトリ。三。寄船。ふねをよす。壬生三品集（秋来ぬ、紅葉の御舟、ふなよせよ、棚機女の、天の河長）

ふなよそひ　ナ。艤。ふねを、みなとよりいださうよそひ。新政集（くれてゆく、そなさの秋や、いぬらん、この港に、ふなよそひして）和名（艤訓不奈與曾比整舟向岸也）

ふなよどめ　ナ。船淀。ふねのとゞこほり。夫木十（渡守、船淀すな、棚機の、年にあふ夜は、たゞこよひのみ）

ふなわたし　ナ。船渡。ふねにてわたすところ。

ふなわたり　ナ。船渡。ふねにてわたるところ。

ふなゑひ　ナ。船酔。ふなやもひに同じ。土佐（かのふなゑひの淡路の島の老いご、都ちかくなりぬといふをよろこびて、ふなぞこより、かしらをもたげて）

ふなをか　ナ。船岡。地名。山城にあり。六帖（船岡は、花つむ人の、宿にて、さして行くらん、方やいづくぞ）

ふなをさ　ナ。船長。ふねをおやとるをさ。

ふにあひ　ナ。不似合。につかはしくなきをいふ。

ふにん　ナ。補任。つかさはにんじさまふをいふ。

ふにん　ナ。赴任。つとめあるところにおもむくをいふ。

ぶにん　ナ。無人。ひとでのすくなきをいふ。

ふにんじやう　ナ。不人情。にんじやうにかなはぬをいふ。

ふによい　ナ。不如意。なりはひのまづしきをいふ。

ふぬけ　ナ。腑脱。なう。ひとをのゝしりてよぶことぞ。

ふね　ナ。船。ものをのせて、みづのうへをとほるもの。王葉（とほつあさは、あまさうろべる、ふねの帆の、みえずぞなれる、風かはるらし）和名（船和名布禰）

ふね　ナ。槽。そのごとくにて、おほきくしておほきなるもの。酒などをたくはふるもあり。また、馬などをのせてやしなふもあり。和名（酒槽佐賀布禰）

ふねうなり　サ。盟既。ゆるなり。とみてにぎそうし。

ふねうた　ツ。盟饒。ゆるのは。とみてにぎそうし。

ふねがひ　ナ。船貝。貝の名。ふねのかたちしさるかひ。あまをぶねを見るべし。夫木（こぐ人も、渚によする、船貝は、ふきくる風や、つなでなるらん）

ふねぎらひ　ナ。船嫌。ふなゑひのくせあるひと。

ふねなめて　ツ。船並。ふねをならべて。万二（百敷の、大宮人は、船並て、朝川わたり、ふなきほひ、夕川わたり）

ふねののめ　ナ。綱。まさえだを見るべし。和名（綱、周易注云、衣綱字亦作枻和名、布禰乃能米、所以察舟溺也）

ぶねん　ナ。無念。おこたりをこぶることぞ。

ふねよそひ　ナ。艤。ふなよそひに同じ。

ふのう　ナ。不能。のうのなきをいふ。こゝろのまさらきのなきをいふ。源花山（との東三條の大将のふのうを、奏しさまひて、かゝる人は、世にありて、おほやけの為は、大事出来侍りなん云々、大将をとりさてまつりさまひて、治部卿になしさてまつりさまひ）

ふのかみ　ナ。府頭。近衛府の大将をいふ。

ふのり　サ。布苔。海草の名。海中の石につきておゆ。長さ二三寸ばかり、ほそき針金のごとくにて、岐あり。常には、水にてさらしてほしかためしさるを、漉て、糊のごとくにしてもちふ。和名（海蘿云々和名不乃利、俗用布苔）

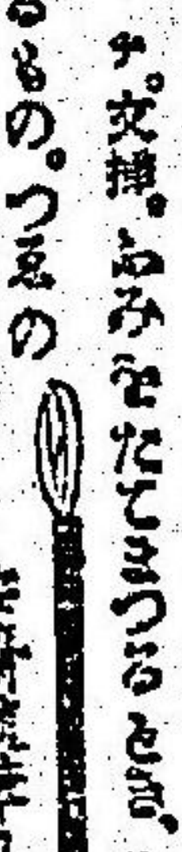
ふのりかづら　ナ。布苔蔓。さねかづらをいふ。

ふはい　ナ。腐敗。くさるをいふ。たゞるゝをいふ。

ふはく　ナ。浮薄。こゝろは、おきてのなきをいふ。こゝろの、かろ〴〵しくて、うきさるごとくあるをいふ。

ふばこ　ナ。文箱。ふみむろ。せうそこぶみをいれて、ひとにおくるもの。伊勢（現にいとあはれとめでて、今まで、まきて、ふばこにいれてありとなんいふなる）

ふばさみ　ナ。文挿。ふみをたてまつるとき、そさみてたてまつるもの。つゑのごとくにて、さきに、きぬところをつけさるものなり。竹取（ひとりの頭、ふばさみに、ふみをさしはさみて申す、つくもどころのつかさのたくみ、あやべのうちまろ申さく）



安斎随筆にみえたるふみばさみの図

ふはのせき　ナ。不破関。関の名。美濃國の不破郡にあり。いにしへ、関のありしところなり。後撰（今はとて、たちかへりゆく、故里の、ふはの関路に、都をするな）

ふはふ　ナ。不法。おきての、みちにもとれさるをいふ。

ふはふは　ナ。軽く。やもらかにうかびさるものをいふ。

ふはふはと　ナ。軽く。やもらかにうかびさるやうに。

ふはんじやう　ナ。不繁昌。はんじやうにならぬをいふ。

ふはやかした　ナ。帷帳などの、やもらかにて、ふもりとしさるさま。古事記（あやがきの、布波夜賀斯多に、むしぶすま、にこやぐしたに、栲被、さやぐしたに）

ふはりと　ツ。軽く。やもらかにうかびさるやうに。

ぶはる　ワ。ヒトリ。四。武張。たけきいきほひをあらはす。

ぶび　ナ。武備。いくさのそなへ。たゝかひのようい。

ふひと　ナ。史。姓の名。また、ものごとをしるすつかさ。

ふびん　ナ。不便。たよりよろしきをいふ。また、あそれなるをいふ。宇拾（さても、いと不便の事なり。この度のいとまをゆるしたびて、その願をとげさせて）

ふひんかう　ナ。不品行。ひんかうのわろきをいふ。

ふびんなり　サ。不便。たよりよろし。あそれなり。榮花ひかげのかづら（いとふびんなる事をつかうまつりて、かしこまり侍るよし申させ）宇拾二（もしひとさがなくしさらんは、いとほしく、ふびんなるべき事とおもひて）

ふびんに　ツ。不便。たよりよろしく。あそれに。空穂上候（いと、いみじくゑそしさまふ、いで、かゝる御従をあとめて、かうてうぜさせさまふ。いとふびんにさ申せば）枕草五（かゝる雨にのぼり侍らば、あしさつきて、いとふびんにきたなげになり侍りなん）

ふびやう　ナ。風病。かぜのやまひ。源宿木（ふびやう、おもきにたへかねて、ごくねちのさうやくをぶくして）

ぶふうりう　ナ。無風流。みやびかならぬをいふ。

ふふき　ナ。蕗。野菜の名。ふき。葉のさま、葵に似てまろく、ひろく、また、すこし、牛蒡の葉にも似さり。茎の長さ一二尺ばかり、茎に、溝ありて、根はちひさきところむらさきだみさり。冬のすゑ、根に、苞のごときものいできて、春になりて、花さく。これを、ふきのたうといふ。和名（蕗和名布々木、蕗似款冬而茎、其茎煮可噉之）

ふぶき　ナ。雪吹。ゆきの、かぜにふかれてちりみだるゝをいふ。月清集（たびびとの、みのしろごろも、うちはらひ、ふぶきをさるゝ、くものかけはし）

ふぶき　ナ。雪吹。あらかのまじりさるかみ。頭集（あさみきかば、むばほさす、くろかみの、ふゞきになれば、それもおとろへ）

ぶぶぎやう　ナ。武奉行。武家の役の名。公事の訴状をうけとりて、引付衆にくだる事をつかさどるもの。

ふふく　ナ。不服。あさがえぬをいふ。きゝいれぬをいふ。

ふぶく　リ。ヒトリ。四。雪吹。ふゞきす。夫木廾（木の間より、なびくふゞきの、程もなし、嵐にふゞく、さやの中山）

ふぶく　ワ。ヒトリ。四。雨吹。かぜ、あめをふく。蜻蛉（あれよりたつほどに、雨風いみじうふりふゞく）

ふぶせ　ナ。雪吹。ふゞきに同じ。皇極紀（頭髪、毿髿）

ふふどり　ナ。鵂鶹。鳥の名。かたち、鳩に似て、鳩よりも黄ばみさり。この鳥、巣をつくらずして、木の穴にすみ、また、鵲のすみすてさる巣などにもやどるといふ。また、一説には、この鳥は、いにしへの呼子鳥なるべしともいへり。和名（鵂鶹、一名鵂鶹、和名布々土利）

ふふまる　ワ。ヒトリ。四。含。ふくみてあり。つぼみてあり。ひらけずてあり。万四十（あともへか、あしくまやまの、ゆづるはの、布敷麻留ときに、かぜふかずもも）

ふふむ　ワ。ガ。四。含。うちにもつ。くちにいれてもつ。

ふふむ　ワ。ヒトリ。四。苞。つぼむ。ふくむ。まだひらけずてあり。万八十（ことならば、ふゞき久のさくらむな、いまさ敷布賽利、ひとめみにこね）

ぶぶん　ナ。部分。くみあひさるもののひとつのところ。

ふへい　ナ。不平。こゝろに、あかぬところあるをいふ。

ふべつぶぎやう　ナ。風別奉行。ふぶぎやうに同じ。

ふべん　ナ。不便。たよりのわろきをいふ。

ふべんり　ナ。不便利。べんりのわろきをいふ。

ふぼ　ナ。父母。ちゝはゝ。ふたおや。かぞいろは。

ふほどもる　ワ。ヒトリ。四。含籠。ふゝまりてこもる。

ふほてぐさ　ナ。秘穂草。草の名。そそきに同じ。

ふぼん　ナ。不犯。をんなにちかづかぬをいふ。僧にいふ詞なり。平家二（一生不犯の座主、かのそこをあけて）

ふまき　ナ。文卷。ちつ。ふみのうへをおほふもの。

ふまふ　ワ。カシ。シニ。踏。ふむに同じ。弁内侍日記（最后宮、冷泉大納言殿のかさをふまへて、めしうつるべきよし侍りけれども云々、やすくぞめしうつりける）

ふまへどころ　ナ。踏所。ふむところ。たつところ。とらふるところ。蜻六二（くづれそこ、やぶれついぢの、いぬむしり、ふまへどころも、なきまで身をな）

ふまん　ナ。不満。こゝろにあかぬところあるをいふ。

ふまんぞく　ナ。不滿足。ふまんといふに同じ。

ぶまる　ナ。夫丸。にんぷ。よぼろ。鎌倉年中行事（夫丸に、鍬をもたせて、山に登り、松を、七尺にほり）

ふみ　ナ。文。書。こゝろにおもふことを、もんじにかきあらはしたるもの。また、そのかきあらはしたるものを、とぢまきなどにしたるもの。空穂鈔（ふみどもは云々、くすしぶみ、おんやうしぶみ、人相するふみ、ともらみさらん人の事いひたる、いとかしこくておぼゆり）

ふみ　ナ。文。てがみ。ひとにせうそこをするために、かきてやるもの。信明集（こりずまに、たゆる間もなく、みづぐきの、なくなくかける、ふみにぞありける）

ふみ　ナ。詩。からうた。源桐（ふみの道の、おぼつかなくおぼしめさるゝ事どもなどとはせたまひて）

ふみあきびと　ナ。書商人。ふみをあきなふあきびと。

ふみあたす　ワ。カタ。四。踏散。ふみちらす。いきほひつよくふみなす。万九十一（天雲を、ほろに布美安多之、なる雷も、けふにまさりて、かしとけめやも）

ふみあはせ　ナ。踏合。ふみあひに同じ。

ふみあひ　ナ。踏合。いきぶれ。ゆきあひのけがれ。ひとのうせたるいへに、ふとゆきたるたびのけがれをいふ。

ふみいし　ナ。踏石。くつぬぎのところにするいし。

ふみうす　ナ。踏臼。からうすをいふ。畿内にて。

ふみがき　ナ。文書。ふみのかきざま。源浮舟（さいみんよ、女のふみがきはいかゞあるとておけるぞ）

ふみがね　ナ。踏金。せつたにつけてふみならすかね。

ふみき　ナ。踏木。機の具。まねきなるべしといへれど、いまさだかならず。万十（はたものの、蹈木もてゆきて、天の川、うちはしわたす、君がこんため）

ふみくら　ナ。文庫。ぶんこ。ふみををさめおくくら。

ふみこむ　ワ。ヒトリ。四。踏込。ふみいる。ちからをもちふ。

ふみさし　ナ。文挿。ふむはさみに同じ。今昔五廿（たちまちに、名符をかきて、ふみさしにさして、怠状を具して）

ふみしだく　ワ。カナ。四。踏折。ふみひしぐ。貫之集（森の、花ふみしだく、木の下は、いたく雪ふる、春辺なりけり）

ふみしむ　ワ。カナ。シニ。踏締。つよくふむ。たしかにふむ。

ふみた　ナ。札簡。ものをかきつくるちひさきいた。和名（簡札、野王案、簡（和名不美太）所以寫書記事者也）

ふみだい　ナ。踏臺。あしつぎに同じ。

ふみたけぶ　ワ。ヒトリ。カニ。蹈猛。あしぶみしてたけぶ。古事記（伊都之男建蹈建而待問）

ふみだん　ナ。踏壇。ふみてのぼるだん。

ふみたつ　ワ。ヒトリ。四。踏立。ふみてたつ。

ふみつぎ　ナ。踏繼。あしつぎに同じ。

ふみづき　ナ。文月。ふづきに同じ。

ふみづくゑ　ナ。文机。ふづくゑ。和名（書案、俗云不美都久恵）

ふみて　ナ。筆。ふでに同じ。和名（筆、古文作笔、云布美天）

ふみどの　ナ。文殿。ふどのに同じ。和名（校書殿、俗云布美止乃）

ふみどほし　ナ。犢鼻褌。たふさぎに同じ。

ふみにじる　ワ。カナ。四。踏躙。ふみつぶす。ふみひしぐ。ふみつけてにじる。字鏡（踏、不彌介志留、又古由）

ふみぬき　ナ。踏貫。そりなどをふみとみるきず。

ふみぬく　ワ。ヒトリ。四。踏貫。ふみとほす。万三十（ひさつらに、足踏貫、なつくさを、こしみなづみ）

ふみのかみ　ナ。尚書。文官の名。ふみのつかさ見るべし。

ふみのすけ　ナ。典書。文官の名。ふみのつかさ見るべし。

ふみのつかさ　ナ。圖書寮。中務省の被管。頭、助、允、屬などの官人ありて、内外の圖書、古今の記録をあつめ、また、宮中にておこなはせらるゝ佛事などをもつかさどるをいふ。和名（圖書寮、不美乃豆加佐）

ふみのつかさ　ナ。書司。後宮の、經籍、紙、筆、墨、琴のたぐひをつかさどるところにて、長官は尚書といひ、次官は典書といふ。女官をもて任ぜらる。

ふみばこ　ナ。文箱。ふばこを見るべし。

ふみばこ　ナ。笈。おひ。ふみなどをいれて、おひてありくもの。和名（笈、和名不美波古、又、函字、負書箱也）

ふみはさみ　ナ。文挿。ふむはさみに同じ。大鏡二（ふみはさみに、ふみをはさみて、いらなくふるまひて）

ふみはじめ　ナ。文始。ころもへの、はじめて、ふみをまなびそむるをいふ。源桐壺（今は云々、なゝつになりたまへば、ふみはじめなどせさせたまひて）

ふみはだかる　ワ。ヒトリ。四。踏開。あしをひらきて、つよくふむ。今昔廿七（牛の、ふみはだかりて、うごかずてたてりければ、鞅のきれて、車はおちて損じけり）

ふみはづし　ナ。踏外。ねずみおとしのたぐひにて、とりをとるためにかまへたるもの。散木（式部大輔の云々、垣根に、ふみはづしといふ事をして、鳥をとり侍りけるを、人もみぬほどにかゝりけるを）

ふみはる　ワ。ヒトリ。四。踏張。ふみそらす。あしをひらきてつよくふむ。著聞十（池へひきいれんとしけれど、松の根をつよくふみはりてひきいれられず）

ふみびつ　ナ。書櫃。ほんなどのたぐひ。よろづのふみををさめおくひつ。和名（書櫃、和名布美比豆）

ふみびと　ナ。文人。ぶんじん。ふみなどをつくるひと。

ふみみぐさ　ナ。文見草。草の名。なぎの異名。（萬葉草）

ふみもだし　ナ。犢鼻褌。たふさぎに同じ。

ふみもち　ナ。不身持。みもちのわろきをいふ。

ふみよせ　ナ。踏寄。ふみていできたるかさね。

ふみよみ　ナ。書讀。ふみをよむひと。がくしやのたぐひ。

ふみよみびと　ナ。書讀人。よかせに同じ。應神紀（博士）

ふみわく　ワ。カケ。シニ。踏分。ふみひらく。古今（わが宿は、雪降りしきて、道もなし、踏分けてとふ、人しなければ）

ふみゑ　ナ。踏繪。ゑふみを見るべし。

ふむ　ワ。カナ。四。踏。あしのうらにておす。万二十（たちゐする、たどきもしらず、わがこゝろ、あまつそらなり、つちは踏めども）夫木（牛の子に、ふまるな庭の、かさつぶり、角あればとて、身をなたのみそ）

ふむき　ナ。不向。むきのにつかはしくなきをいふ。

ふむやのつかさ　ナ。大學寮。式部省の被管。頭、助、允、屬などいふ官人をはじめて、文章博士、明法博士、音博士、書博士、算博士、助教などの官人ありて、學生に、記傳、明經、明法、算道などの事ををしふるところ。

ふん　ナ。糞。くそ。しりよりいづるかすのごときもの。

ぶん　ナ。分。ほど。ほどらひ。まさにうけてあるべきもの。徒然草（おのが分をしりて、およばざる時は、すみやかにやむを智とすべし）宇拾二（おのれがぶんとておくりたるは、事の外おほく出來たりければ）

ぶん　ナ。文。ふみ。ぶんしやう。

ぶんい　ナ。文意。ぶんのこゝろ。ぶんにのべたるこゝろ。

ぶんうん　ナ。紛紜。ごたく。さしもつれ。

ぶんうん　ナ。文運。がくもんなどのうんめい。

ぶんがく　ナ。文學。ぶんしやうなどのがくもん。

ぶんぎ　ナ。紛議。ごたく。さしもつれ。

ぶんぎ　ナ。文義。ぶんのこゝろ。ぶんにのべたるこゝろ。

ぶんくわ　ナ。分課。うけもちをわくるをいふ。

ぶんぐわい　ナ。分外。ぶんのほか。ぶんげんのほか。

ぶんくわざん　ナ。噴火山。ひをふきいだすやま。

ぶんくわん　ナ。文官。もんくわんを見るべし。

ぶんけ　ナ。分家。ほんけよりわかれたるいへ。

ぶんげふ　ナ。分業。わざをわけてするをいふ。

ぶんげん　ナ。分限。ぶん。かぎり。みのほど。また、とみさかゆるひとをいふ。嫁入記（ながびつ、ながもちなどのかずさだまらず。ぶんげんによることなり）

ぶんこ　ナ。文庫。ふみくら。ふみををさめおくくら。

ぶんこ　ナ。文庫。てならひの、かみ、ふでなどをいるゝもの。

ぶんこく　ナ。分國。りやうぶんのくにをいふ。

ぶんこつす　ワ。ヒトリ。カ。粉骨。ほねををりてはたらく。

ぶんさい　ナ。文才。ぶんがくのうへのさい。

ぶんざい　ナ。分際。ほど。かぎり。ぶんげん。

ぶんさん　ナ。分散。ちりぢりにちる、をいふ。また、おちぶれて、ぶんざいかぎりとなるをいふ。

ぶんし　ナ。分子。物理學にいふ語にて、よろづの物のかたちをなすもの。例へば、石には、石の分子ありて、あつまりて、石となり、水には、水の分子ありて、あつまりて、水となるをいふたぐひのごとし。

ぶんじ　ナ。文治。をさをいふ。戰後などにて、

ぶんじ　ナ。文事。ぶんがくのうへのこと。

ぶんじつ　ナ。紛失。うしなひてなくなるをいふ。

ぶんじつかいがふ　ナ。紛失開闔。問註所の執事をいふ。

ぶんじん　ナ。文人。うたをよみ、ぶんしやうなどかくなどのわざをするひと。公事根源（文人ども、題をたまはり、詩をつくりて、やがて、御前にて講ぜらる）

ぶんしやう　ナ。文章。おもふことを、もじにつづりてかきいだすもの。また、詩歌にむかへて、句に、韵を用ひず、文字の數をさだめずしてかきつづるものをいふ。

ぶんじゆく　ナ。粉熟。食物の名。ふずくに同じ。

ぶんしよ　ナ。文書。もんじよ。ふみ。かきもの。

ぶんしろ　ナ。魚の名。こひをいふ。武藏にて。

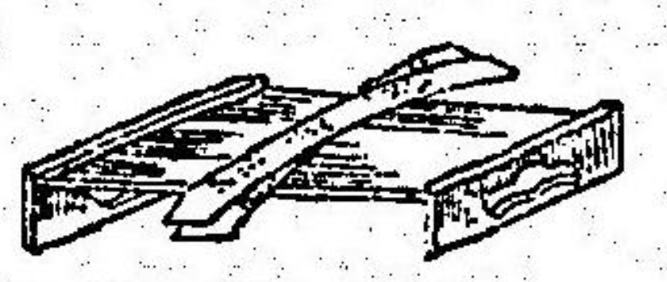
ぶんず　ワ。ヒトリ。カ。封。ふうず。ふうをなす。濱松二（ほそやかにまきたるをあけされば云々、懐にかなしとれこのつねなり。もとのやうにふんじかさめて）

ぶんすう　ナ。分數。算術の語。ひとつにみたぬかず。

ぶんせき　ナ。分析。化學にいふ語。よろづのもののくみあひたるをときて、それぐれにするをいふ。

ぶんたい　ナ。文體。ぶんしやうのすがた。

ぶんだい　ナ。文臺。たけのひくきつくゑにて、うたあはせのとき、たんざくなどをのするもの。續後拾（九月十三夜、十首うたあはせは、むかしの長柄の橋のくひにて、つくりたる文臺にて講ぜられ侍りしとき）



ぶんだう　ナ。文道。ぶんがくのみち。

ぶんちん　ナ。文鎭。ふみのおさへ。かみのおさへ。

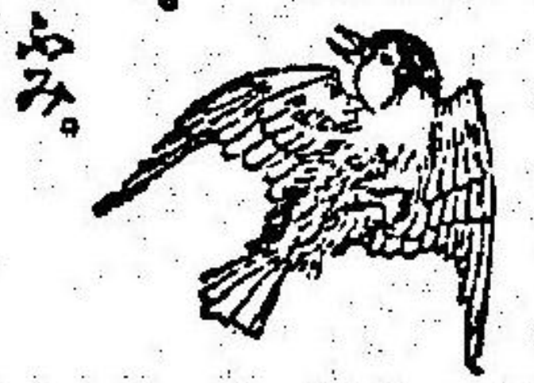
ぶんぢやう　ナ。文杖。ふばさみに同じ。

ぶんつう　ナ。文通。てがみのとりやり。

ぶんで　ナ。筆。ふみて。ふでを見るべし。

ぶんてい　ナ。文體。ぶんしやうのすがた。

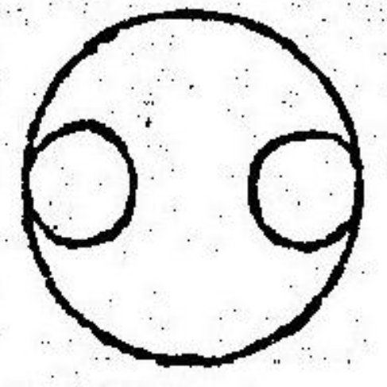
ぶんてう　ナ。文鳥。鳥の名。形、うそどりに似て灰色なり。但し、喉と頂とはくろく、頬はしろく、觜と脚とはあかし。又、背、腹も、すこしあかみあり。



ぶんてん　ナ。文典。ぶんぽふをかきたるふみ。

ぶんど　ナ。忿怒。いかり。はらだち。いきどほり。

ぶんどう　ナ。分銅。はかりの一方の皿にのするおもりにて、一方の皿にのせたる物の輕重をくらべみるもの。また、いはひたる紋所の繪にて、



その分銅なる、まろくゑがきなしたるものなり。

ぶんどう　ナ。文豆。豆の名。やへなりに同じ。

ぶんどうあづき　ナ。文豆小豆。やへなりをいふ。尾張にて、

ぶんどし　ナ。犢鼻褌。たふさぎを見るべし。

ぶんどり　ナ。分捕。いくさのにはにて、てきのものをとるをいふ。竹崎五郎繪詞（かきくどしなどとりて云々、うちじに、ぶんどりは候はず候と申すに）

ぶんぬ　ナ。忿怒。いかり。はらだち。いきどほり。

ぶんのつかさ　ナ。書司。ふみのつかさに同じ。源氏繪合（おほかたの空をかしき程なるに、ぶんのつかさの御琴めしいでて、權中納言、わごんたまはりたまふ）

ぶんぱ　ナ。分派。えだのごとくわかれいでたるをいふ。

ぶんぱい　ナ。分配。くばりわくるをいふ。

ぶんばさみ　ナ。文挾。ふばさみに同じ。

ぶんぱつ　ナ。奮發。こころをふりおこすをいふ。

ぶんぱふ　ナ。文法。ぶんしやうをつくるみち。また、文章の音韵、文字、言語などの諸道をすべていふ。

ぶんばる　ワ。ヒトリ。カ。踏張。ふみばるに同じ。

ぶんぴつ　ナ。文筆。ぶんしやうをかきなどするをいふ。

ぶんぶ　ナ。文武。ぶんとぶと。ぶんがくとぶげいと。

ぶんぷん　ナ。紛々。もののいりみだれるをいふことば。

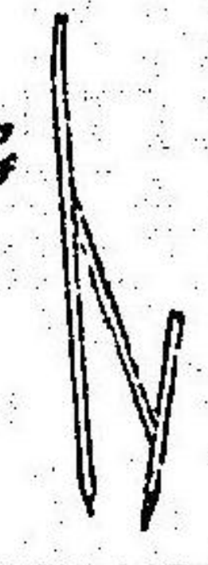
ぶんぶんと　ソ。芬々。かをりのいたるをいふことば。

ぶんべつ　ナ。分別。さとり。わきまへ。かんがへ。

ぶんべん　ナ。分娩。こをうみおとすをいふ。

ぶんぼ　ナ。墳墓。はか。ひとをはうぶりたるところ。

ぶんまはし　ナ。規。まろきかたちをつくるだうぐ。管のさきに、針をつけ、筆をそへたるものにて、その管をすぐにたてて、まはすときは、管にそへたる筆、まろくめぐりて、まろきかたちをゑがくやうにしたるものなり。



ぶんまん　ナ。忿懣。いかり。はらだち。いきどほり。

ぶんみやうなり　ナ。分明。さだかなり。あきらかなり。著聞七（はらふくれていきどほしきとて、ものいはるゝも分明ならざりけるが、かくしていそれけるに）

ぶんみやうに　ソ。分明。さだかに。あきらかに。

ぶんめい　ナ。文明。ぶんがくなどのひらけたるをいふ。

ぶんめん　ナ。文面。ぶんしやうのおもむき。

ぶんやうらえ　ナ。學生。がくしやうに同じ。

ぶんらん　ナ。紛亂。みだれもつれたるをいふ。

ぶんり　ナ。分離。わかれ。はなれ。

ぶんりやう　ナ。分量。ほど。ほどらひ。

ぶんゐ　ナ。文位。數位にむかへて、常の位をいふとなへ。

ぶめく　ワ。ヒトリ。四。虻なく。あぶなどさゝきてなく。宇拾七（あぶ、ひとつふめきて、顔のめぐりにあるは、うるさければ、木の枝ををりて、おひすつれども、なほ、たゞおなじやうにうるさくふめきければ）

ぶめんぼく　ナ。不面目。めんぼくをうしなふをいふ。

ぶもだし　ナ。絆。ほだし。うまをつなぐなは。万廾（馬に

こそ、布毛太志かくもの、牛にこそ、はななはくれ）

ぶもと　ナ。麓。やまのすそ。類字（雲かゝる、峯はきくれて、嵐ふく、麓は降れ、木葉なりけり）字鏡（麓　不毛止）

ぶもん　ナ。武門。ぶしのいへ。さむらひのいへ。

ぶやうじやう　ナ。不養生。やうじやうのわろきをいふ。

ぶやく　ワ。ヒトリ。シ二。殖。みづにうるほひてふくる。

ぶやく　ナ。夫役。えだち。にんぶ。にんそく。榮花かひ（たゞいまは、この御堂のぶやく、材木、ひはだ、かはらと、おほくまゐらする事を、われもわれもときほひ）

ぶやける　ワ。ヒトリ。シ一。潤。みづにうるほひてふくる。

ぶやす　ワ。カナ。四。殖。ふえしむ。つぎつぎにおほくならしむ。

ぶやのはかせ　ナ。文屋博士。ふむやのつかさのはかせ。紫式部日記（ふやのはかせ、さかしだちさいらぎ居たり）

ぶやまぶし　ナ。夫山伏。ぶやくにいでたるやまぶし。太平二（我等は、夫山伏にて候ふ間、かなひ候ふまじ）

ぶゆ　ナ。冬。いねをかりをさむるとき。陰暦の十月より十二月までをいふ。拾玉（すみよしの岸もこずゑも、ふゆがれて、ふゆこそ松の、いろはありけれ）

ぶゆ　ワ。ヒトリ。シ二。殖。つぎつぎにおほくなる。かずかずそふる。この語は、地方にては、ふえるとを下一段にいふ。

ぶゆう　ナ。武勇。ぶよう。たけくしてつよきをいふ。

ぶゆがまへ　ナ。冬構。ふゆのようい。夫木廿（神無月、まだ冬構、せぬものを、とりあへぬまで、あるゝ空かな）

ぶゆがれ　ナ。冬枯。ふゆになりて、草木の葉のおつる

などをいふ。また、冬のさびしきけしきなるをいふ。

ぶゆき　ナ。冬木。ふゆのこだち。また、ふゆのころこるたきぎをいふ。夫木廿（ゆふにせん、冬木もいまだ、こらなくに、ふゆくもゆきの、なりまさるかな）古事記（布由紀のす、からがしたきの、さやさや）

ぶゆき　ナ。冬葱。野菜の名。ひともじの一種にて、冬のころになりて、よくしげるもの。和名（冬葱　和名、布由木）

ぶゆぎ　ナ。冬着。ふゆぎぬ。ふゆのころきるきもの。

ぶゆきとどき　ナ。不行届。こころのゆきとゞかぬをいふ。

ふゆぎぬ　ナ。冬衣。ふゆのころきるころものこと。

ふゆぎぬ　ナ。冬衣祇。やしまじぬみの神の御子

ふゆくさの　マクラ。冬草之。ふゆの草はかるるものなれば、かるるにかけていふ。古今（もがきさめ、人はくれども、冬草の、かれにしひとは、おとづれもせぬ）

ふゆげ　ナ。冬毛。とり、けだものの、ふゆになりて、そゆるやはらかなるもの。和名（毳　和名、不由毛）

ふゆこだち　ナ。冬木立。ふゆのこだち。ふゆがれのこだち。

ふゆごもり　ナ。冬籠。ふゆのあひだ、いへにこもりゐるをいふ。古今（ゆきふれば、ふゆごもりせる、草も木も、はるにしられぬ、はなぞさきける）

ふゆごもる　ワ。ヒトリ。四。冬籠。ふゆのさむきあひだ、いへにこもりゐる。土御門院御集（ふゆごもる、里のあるじは、こととへねど、竹の編戸を、たゝくこがらし）

ふゆざれ　ナ。冬。ふゆつかた。回國雜記（柴の戸は、そやい

やゞての、ふゆされは、筧の水も、こほりとぢけり）

ふゆつかた　ナ。冬方。ふゆのころ。ふゆのほど。源朝顔（ふゆつかた、神事などもとまりて、さうぐ゛しきは、徒然とおぼしあまりて、五宮に、例のちかづき参りたまふ）

ふゆの　ナ。冬野。ふゆののべ。後拾（あさされの、冬野にたてる、むらすゝき、ほのめかさむや、おもふこゝろを）

ふゆばおり　ナ。冬羽織。ふゆきるあはせのはおり。

ふゆまめ　ナ。冬豆。豆の名。そらまめをいふ。相模にて、

ふゆやま　ナ。冬山。ふゆのやま。ふゆがれのさびしきやま。和泉式部集（ちりはてて、一葉だになき、ふゆやまに、なく風の、おとのきこえぬ）

ぶよ　ナ。蚋子。虫の名。ぶとに同じ。

ふよう　ナ。芙蓉。灌木の名。もくふよう。木のさま、葉のさま、花のさまなど、すべて、木槿に似て、花は、木槿よりもおほきくしてうるはし。さて、花は、秋のなかばにさきて、一重なるもの、八重なるもの、まろきもの、うすあかきものなど、そのたぐひおほくあり。

ぶよう　ナ。不用。ようなきをいふ。もちひられずなるをいふ。たよりなきをいふ。空穂国譲（公達、みな、おほやけにつかうまつり、ふようなるもなし）落窪一（やをら、ふといでなんとのたまふほどに、石山の人、のゝしりてかへりおはしぬ、ふようなめりとていでたまはずなりぬ）一落窪記（不若、學問のせいよく候ふとも、里には、猶はめりなんとし候ふへ心もふようはなり、學問なども、なさりなんず）

ぶよう　ナ。武勇。ぶゆうに同じ。平家一（されば、右筆の身にあらず。ぶようの家にうまれて、今、ふりよのそしりをかうぶらんこと、家の為、身の為、こゝろうかるべし）

ぶようじん　ナ。不用心。ようじんのゆるきをいふ。

ぶらいもの　ナ。無頼者。あぶれものに同じ。

ぶらう　ナ。豆の名。おほやなぎささげをいふ。九州にて、

ぶらく　ナ。部落。いへむら。ひとざと。むらざと。

ぶらさがる　ワ。ヒトリ。四。懸垂。つりさるごとくさがる。

ふらす　ワ。カケ。四。降。ふらしむ。宇拾十（さまぐ゛の花をふらし、白毫のひかり、聖の身をてらす）

ふらすこ　ナ。硝子壜。がらすのほそながきとくり。

ふらち　ナ。不埒。おきてにたがふをとがむることば。

ぶらつく　ワ。ヒトリ。四。動く。たゞよふ。おちつかず。

ふらねる　ナ。細絨。織物の名。ふらんねるに同じ。

ふらだふ　ザ。ヒトリ。シ二。顫。ふる。あるゝ。さわぐ。古事記（もゝぶる、つきが枝は云々、なりつえれ、淤知布那陛閇）

ふらふら　ツ。動きて。たゞよひて。こゝろともなく。宇拾一（毛の中より、松茸のおほきやかなるものの、ふらくといできて）著聞十（きそめさるねぶりびとにて、餅をもちながら、ふらくとねぶりけるに）

ぶらぶら　ツ。動きて。たゞよひて。おちつかずに。

ぶらぶらやまひ　ナ。慢性病。ひさしくなほらぬやまひ。

ぶらんけつと　ナ。毛布。まうせんのたぐひのおりもの。

ぶらんこ　ナ。鞦韆。ゆさぶりに同じ。

ふらんねる　ナ。細絨。織物の名。らしやのたぐひのおりものにて、らしやよりもうすくやはらかなるもの。

ぶらめく　ワ。ヒトリ。四。動く。たゞよふ。おちつかず。

ぶらりと　ツ。不図。ゆくりなく。なにといふことなく。

ふり　ナ。降。あめなどのふるをいふ。

ふり　ナ。瓜。うりに同じ。枕草八（うつくしきもの、ふりにかきたるちごのかほ、雀の子のねずなきするに云々、雀の、虫などもて来てくふむるも）

ふり　ナ。風。ふう。さま。かたち。すがた。

ぶり　ナ。鰤。魚の名。身まろくおほきくして、鱗ほそし。又、頭おほきく、口とがりて、背は青く、腹は白し。

ふりあぐ　ワ。カケ。シ二。振上。うちふりて、たかくあぐ。

ふりあひ　ナ。振合。れい。みなひとのするさま。

ふりいづ　ワ。ヒトリ。シ二。振出。こゑたかくなく。蜻蛉（声たれねば、身をうぐひすの、ふりいでつゝ、なきてこそゆけ、野にも山にも）源鈴虫（げにこゑぐ゛きこえさる中に、鈴虫のふりいでたる程、はなやかにおかし）

ふりう　ナ。風流。ふうりう。榮世繪（みな、狩衣にふりうなどして、女房の車、ばろくに、紅葉のにほひいださして、粉花なども、みな、車にのりて）

ふりうり　ナ。振賣。うりものをになひありきて、うりこゑたてゝうりありくをいふ。和訓栞（ふりうり云々、新六帖に、もしきやくらのつるの、ふりうりに、まれお

とちじと、つとふうなるご）

ふりおこす　ワ。カケ。四。振起。いきほひをおこす。万廿（ますらをの、心布里於許之、とりよそひ、門出をすれば）

ふりおつ　ワ。ヒトリ。カニ。降下。ふりておつ。

ふりかく　ワ。カケ。シ二。振懸。ふりてそゝぎかく。

ふりがたし　サ。ヒ。旧し。やみがたし。蜻蛉（ふりがたく、哀とみつゝ、ゆきすぎて）源朝顔（いでや、御すきごゝろのふりがたきぞ、あたら御きずなめる）

ふりがな　ナ。振假字。からもじにつけたるかな。

ふりかへる　ワ。ヒトリ。四。振返。うしろのかたにむく。

ぶりき　ナ。錫葉。くろがねの、うすく、いたのごとくのべして、すゞをぬりて、しろがねいろにしたるもの。

ぶりきづめ　ナ。錫葉詰。ぶりきのかめにつめたるもの。

ふりきらす　ワ。ヒトリ。四。降曇。ふりてくもる。二條太皇太后宮大貳集（ふりきらす、ゆきげのそらの、雲間より、かきされいづる、月をこそみれ）

ふりきる　ワ。カケ。四。振切。ふりはなつ。ふりそらす。

ふりくつ　ナ。不理屈。ことわりにかなはぬをいふ。

ふりくらす　ワ。ヒトリ。四。降暮。くるゝまでふる。源帚木（つれぐ゛とふりくらして、しめやかなる宵の雨に）

ぶりこ　ナ。振子。からさををいふ。肥後などにて、

ふりこす　ワ。カケ。四。振越。かきこすに同じ。金葉（女の、髪をかきこしてみけるを云々、朝寐髪、たが手枕に、たわつけて、けさはかたみに、ふりこしてみる）

ふりさく　ワ。カケ。シ二。振放。あふぐ。新別（ちはやぶる、かみなびやまの、楢葉を、雪ふりさけて、たをる山人）

ふりさけあふぐ　ワ。カケ。四。振放仰。そらをあふぐ。そらをたかくみる。新続古一（かすがやま、ふりさけあふぐ、ことのこの、むかしのあとを、なほたのみつゝ）

ふりさけみる　ワ。カケ。カ一。振放見。そらをあふぎてみる。そらをたかくみる。万十（あまのそら、振放見れ、天の川、きりたちわたる、君は来ぬらし）

ふりしきる　ワ。ヒトリ。四。降頻。しきりにふる。

ふりしく　ワ。ヒトリ。四。降敷。ふりしきる。また、しきしきるごとくふる。古今（わがやどは、ゆきふりしきて、みちもなし、ふみわけてとふ、ひとしなければ）

ふりしむ　ワ。ヒトリ。シ二。降締。ひまなくふる。金葉（春雨は、降しむれども、鶯の、声はしめらぬ、物ぞ有ける）

ふりず　ワ。ヒトリ。カ。旧。ふるくなる。源鈴虫（心もて、草のやどりを、いとへども、なほすゞむしの、聲ぞふりせぬ）

ふりすつ　ワ。カケ。シ二。振捨。ふりすてはなちていぬ。源榊（ふりすてて、けふはゆくとも、すゞか川、八十瀬の波に、そではぬれじや）

ふりそで　ナ。振袖。そでの、そでながくして、わきをぬひふさがぬもの。女童、若衆などのきるものなり。

ふりそほつ　ワ。ヒトリ。四。降濡。いたくふりてぬれそぼつ。古今（あけぬとて、かへるみちには、こきたれて、あめもなみだも、ふりそほちつゝ）

ふりだし　ナ。振出。うちふりていだすもの。また、かぜぐすりなどの、ゆにひたして、ふりていだすもの。

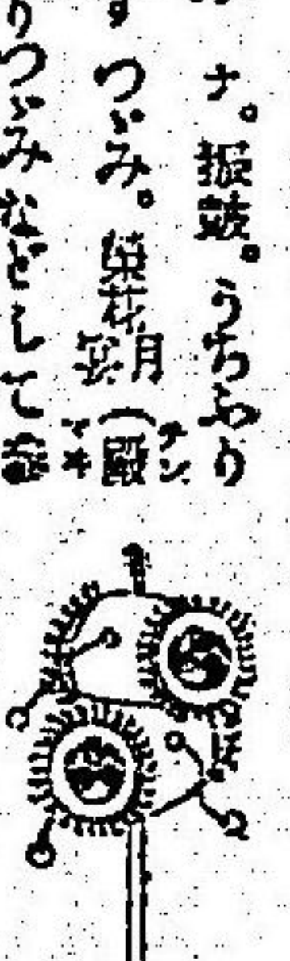
ふりだす　ワ。カケ。四。降出。ふりそむ。ふりそむむ。

ふりたつ　ワ。カケ。シ二。振起。ふりおこす。古今（夏山に、こひしき人や、いりぬらん、こゑふりたてて、なく時鳥）

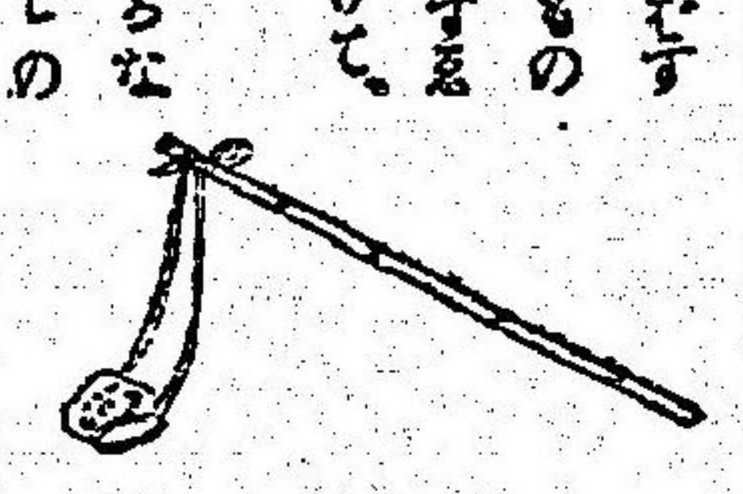
ぶりつき　ナ。錫袋。ぶりきに同じ。

ふりつけ　ナ。振付。まひのてぶりをつくるをいふ。

ふりつゞみ　ナ。振鼓。うちふりてならすつゞみ。榮花月宴（殿上人、ふりつゞみなどして参らせされば、上、ふりきようぜさせ給ふも、おかし）和名（鞀鼓和名、不利豆々美、如鼓而小、持其柄搖之則旁耳還自擊之）



ふりづんだい　ナ。飄石。いしをなげとばすもの。杖のさきに、索をつけたるものにて、石をなぐるに、その索のすゑに、石のほどくるやうにむすびつけて、さてなげとばすものなり。



ふりでのいろ　ナ。振出色。あかくあざやかなるいろ。夫木（くれなゐの、ふりでの色の、そでつゆし、妹が領巾に、あやまされつゝ）

ふりぬく　ワ。カケ。四。振抜。ふりはなつ。宇拾二（その手にさげたる相撲なれば、なげければ、ふりぬきて、二三段ばかりなげられて、たふれふしにけり）

ふりはた　ナ。振幡。そでをうちふるをいふなるべし。續

園會にありし事なり。枕草四（こちたげなるもの云々、御靈會の馬長まさ、御靈會のふりはた）

ふりはなつ　ワ。カケ。四。振放。うちふりてはなれしむ。

ふりはひ　ナ。振舞。からだをいふ。艶後などさて、

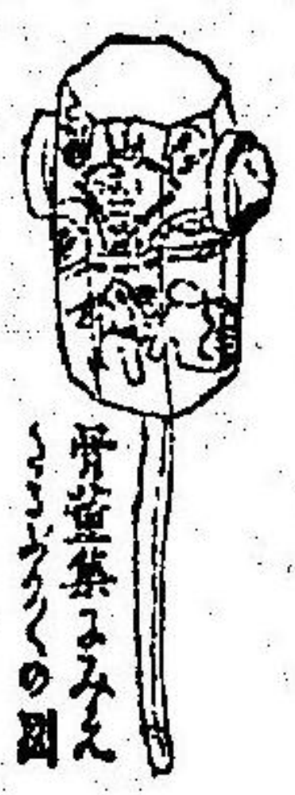
ふりはへ　ソ。故さらに。ことさらに。忠見集（やまぶきの、そなき宿に、すまばこそ、ふりはへとはめ、いでつき思ひつゝ）空穗俊蔭（おぼしつきて出ぶきたまへば、かくふりはへたまへるに、いかでかくれんとていでたり）

ふりはへつつ　ソ。故さらに。ことさらめきて。ことさらめかして。更科（なみださへ、ふりはへつゝぞ、おもひやる、あらしふくらん、ふゆのやまざと）

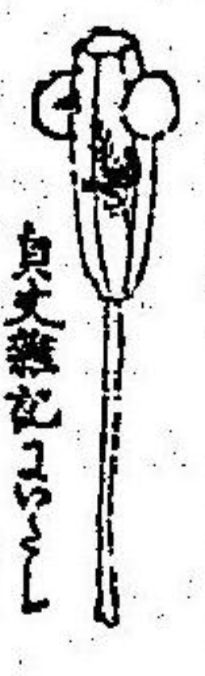
ふりはへて　ソ。故さらに。ことさらに。古今一（ふりはへて、いざ故里の、花みんと、こしを匂ぞ、うつろひにける）

ふりふぶく　ワ。ヒトリ。四。降吹。あめふり、かぜふく。蜻蛉（あれよりたつほどに、雨風いみじうふりふぶく）

ぶりぶり　ナ。振々。ぶり〱ぎつちやう、小兒の、年のはじめのもてあそびにもつもの。木にて、槌のごとき形をつくりたるものにて、種々の繪をいろどりかきたるものなり。



骨董集にみえたるぶりぶりの圖



貞丈雜記にのせしぶりぶりの圖

ぶりぶりぎつちやう　ナ。振々毬杖。ぶりぶりに同じ。

ふりふりと　ソ。舞ひておつるさまをいふことば。今昔廿六

（觀音を念じたてまつりて、足をはなれて、網のうへに踊りければ、ふり〱とおつるほどに）

ふりほどく　ワ。カケ。四。振解。ふりはなつ。撰集抄二（袖をひきとゞめて、誰人にておはすらん、この日頃の情には、怪しのさまをせよと侍りければ、初瀬山の迎西となん、ふりほどきいでたまひにける）

ふりむく　ワ。ヒトリ。四。振向。うしろのかたにむく。

ぶりやく　ナ。武略。いくさのはかりごと。太平三（楠が武略、あなどりにくしとやおもひけん）

ふりよ　ナ。不慮。おもひかけぬをいふ。宇拾十（かくなるべしといふ人のならで、ふりよに、他人なりたるをば、おしくなされたりとなん、世にはそしりける）

ふりわく　ワ。カケ。シニ。振分。わけてくぎりつく。

ふりわけ　ナ。振分。ふりわけがみに同じ。空穗藏開（ようぞりにて、御髮ふりわけにて、白くうつくしげに）

ふりわけがみ　ナ。振分髮。みぎひだりにふりわけてうちたれたるかみ。童部の髮にいふことばなり。伊勢（くらべ來し、ふりわけがみも、肩すぎぬ、君ならずして、たれかあぐべき）源若菜（ふりわけがみの、なにごゝろなきなほしすがたどもにておはす）

ふる　ナ。古。舊。いできてのち、としをへたるをいふ。

ふる　ナ。布留。地の名。大和にあり。後撰（いそのかみ、ふるの山邊の、櫻花、うゑけん時を、しる人ぞなき）

ふる　ワ。ヒトリ。四。降。そらよりおつ。そらよりくだる。万一（さがさきに、おほぬき落有、おほむらの、ふりにしさとは、落葉れのち）伊勢（ふじの山をみれば、五月のつごもりに、雪いと白うふれり）

ふる　ワ。カケ。四。振。かなたへやりてそこらす。そらひて、よせつけじとす。万一（あかねさす、紫野ゆき、しめのゆき、野守はみずや、君がそで布流）

ふる　ワ。カケ。四。振。いはひさしまつる。うつしさしまつる。大鏡七（大和國三笠山にふりさしまつりて、春日明神となづけさしまつり）平家一（日吉の神輿を、根本中堂へふりあげさしまつり、その御前にて）

ふる　ワ。ヒトリ。四。震。ゆらめきうごく。定頼集（十月ばかり、夜、なゐのいたくふりければ、木末には、のこりもあらじ、神無月、なべてふりつる、よものくれなゐ）

ふる　ワ。ヒトリ。カニ。舊。ふるくなる。万十（ものみなは、あらたしきよし、たゞひとは、舊ぬるのみし、よろしかるべし）古今（たのめこし、ことのはいまは、かへしてん、わが身ふるれば、おきところなし）

ふる　ワ。ヒトリ。四。觸。あたる。さはる。万九（おちたぎち、ながるゝ水の、岩に觸、よどめるよどに、月の影みゆ）

ふる　ワ。ヒトリ。シニ。觸。あたる。さはる。この語は、地方によりては、ふれるを下一段にいふ。万四（夢のあひは、くるしかりけり、おどろきて、かきさぐれども、手にも不所觸ば）源宿木（かゝるついでには、ものいひふれんとおぼすによりて、日をくらしたまふにやとおもひて）

ふる　ワ。ヒトリ。シニ。觸。あまねくつげしらす。この語は、地方によりては、ふれるを下一段にいふ。平家二（いそぎ、一門のひと〲にもふれ申せ、侍どももよほせとのたまへば、はせまはつてひろうす）

ふる　ワ。ヒトリ。シニ。狂。そる。くるふ。こゝろみだる。

ぶる　ワ。カナ。四。風をなす。さまをなす。

ふるあと　ナ。古跡。ふるきあと。万代（荒小田の、こぞのふるあと、ふみわけて、雪消の若菜、今やつむらん）

ふるい　ナ。古。ふるしを見るべし。

ふるうた　ナ。古歌。ふるきうた。土佐（ふるきうたに、數はたらでぞ、歸るべらなるといふことを思ひいでて）

ふるえ　ナ。古枝。ふるきえだ。古今（秋萩の、ふるえにさける、花みれば、もとのこゝろは、わすれざりけり）

ふるおきな　ナ。古翁。ふるきおきな。ものごとになれたるおきな。和名（耆宿、日本私記云布流於木奈）

ふるからをの　ナ。古柄小野。地の名。大和にあり。古今（石の上、古柄小野の、本柏、本の心は、忘られなくに）

ふるき　ナ。黒貂。獸の名。てんの一種。空穗藏開（六尺ばかりのふるきのかはぎぬ、おやのうらつけてきられたる、御つゝみにつゝませたまふ）和名（黒貂、唐韻云、貂、（有黄黒貂、出東北夷、和名布流木））

ふるぎ　ナ。古着。ふるききもの。きふるしたるきもの。

ふるきかぜ　ナ。古風。こふう。いにしへぶり。むかしのてぶり。拾玉（ふるきかぜを、いかで御山に、ふかせまし、くすのうらむの、かへす〲も）

ふるぎつね　ナ。古狐。おいたるきつね。

ふるぎや　ナ。古着屋。ふるぎをあきなふいへ。

ふるく　ソ。昔。むかしより。ひさしきさきより。拾遺一（筑紫へまかりけるときに、かまどやまのもとにやどりて侍りけるに、みちづらに侍りける木に、ふるくかきつけて侍りける、春はもえ、秋はこがるゝ、かまどやま、かすみもきりも、けぶりとぞみる）

ふるくさ　ナ。古草。ふるきくさ。こぞおひたるくさ。また、かれくさをいふ。万代（かみやまの、うへのふるくさ、やくならし、おほゐのかさは、けぶりたつみゆ）

ふるくさし　サ。ヒ。古臭。いとふるし。ことふりたり。

ふるごたち　ナ。古御達。ふるきごたち。としおいたるごたち。源宿木（つるふ人、ふるごたちなど、君の御心はあはれなりけるものを、あたら御身をなどいふに）

ふるごと　ナ。故事。むかしばなし。源明石（さしもきゝおきたまへぬ世のふることども、くづしいでてきこゆ）

ふるごもち　ナ。古子持。おいたるをんなのこもち。紫花若（ふるごもちなどは、髮のすそほそう、色あをびれなどしされればこそ、こゝろぐるしけれ）

ふるごろも　ナ。古衣。きふるしたるころも。万十（古衣、うつしく入は、秋風の、たちくる時に、物思ふものぞ）

ふるごろも　マクラ。古衣。ふるごろもは、あらひそりてい、砧して、うつものなれば、うつにかけていふ。また、まつちに冠らするは、まつちは、まうちの約りたる語なればなり。まうちに冠らするは、古衣は、衣削したるものなればなり。万十（古衣、打棄人は、秋風の、たちくる時に、ものもふものぞ）同六（あまざかる、鄙邊にまかり、古衣、又打山ゆ、かへりこぬかも）同十二（舊衣、着楢乃山に、なく鳥の、間なく時なし、わが戀らくは）

ふるごゑ　ナ。古聲。むかしのこゑ。古今（五月まつ、山郭公、うちはぶき、いまもなかなん、去年のふるごゑ）

ふるざけ　ナ。古酒。ふるきさけ。こぞつくりたるさけ。

ふるさと　ナ。古里。ふるきさと。もとすみしゆかりのあるところ。古今（三吉野の、やまのしらゆき、つもるらし、ふるさとさむく、なりまさるなり）

ふるさとびと　ナ。古里人。ふるさとのひと。むかしすみしさとのひと。古今（さくらばな、ちらばちらなん、ちらずとて、ふるさとびとの、來てもみなくに）

ふるし　サ。ヒ。古。いできてのち、としつきをへたり。いまは、むかしのこととなりたり。この語は、今は、ふるいと、しをいにいふ。風雅（三吉野の、おほみやどころ、たづねみん、ふるきかざしの、花やのこると）

ふるす　ナ。古巢。ふるきすみか。千載（花は根に、鳥はふるすに、かへるなり、春のとまりを、知る人ぞなき）

ふるす　ワ。カケ。四。褪。ふるくなす。めづらしからずなす。古今（去年の夏、なきふるしてし、ほとゝぎす、それかあらぬか、聲のかはらぬ）後撰（ひさぶるに、思ひなさび

そ、ふるさるゝ人の心れ、それぞ世の常）

ふるずらう ナ。古受領。ふるきずりやう。としおいさるずりやう。源松風（さらに、都にかへりて、ふるずらうのむづめるたぐひにて、まづしき家の、よろぼひ、ひくゐ、もとのありさまおらさむる事もなきものゝ）

ふるだうぐ ナ。古道具。ふるきだうぐ。さびさるだうぐ。

ふるたま ナ。賑魂命。お怪さうみの神の御子。

ふるち ナ。古血。ふるきち。ゐろきち。

ふるつか ナ。古塚。ふるきつか。むかしのひとのあと。

ふるつはもの ナ。古兵。ふるきつはもの。おいさるつはもの。盛衰記（熊谷れふるつはものなりけれど）

ふるでら ナ。古寺。ふるきてら。としをへておれさるてら。志野日記（かゞらまれ、松さへおひて、ふるでらの、さけのむしろも、のりは苦くちん）

ふるて ナ。古手。きふるしさるきもの。

ふるとし ナ。旧年。こぞ。きよねん。拾遺（春たちて、朝の原の、雪みれば、まだふるとしの、こゝちこそすれ）

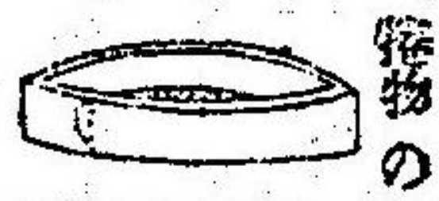
ふるとり ナ。隹。かんむりの旁の名にて、隹をいふ字な、旁はしるるもの。雖、雄、雉、雛、雑、雅のたとひ。

ふるね ナ。舊根。ふるきね。拾遺（君をぞで、幾代経ならん、いろかへぬ、竹のふるねの、おひかはるまで）

ふるはた ナ。古畑。あれさるはた。新古（ふるはたの、岨の、たつきさ、ふる鳩の、友よぶ聲の、すごきゆふぐれ）

ふるひ ナ。震。ふるへをもてゆりうごくをいふ。

ふるひ ナ。篩。こめのぬかなどをのぞくだうぐ。綰物の底に、金網などをはりさるものにて、物をいれてふるふときは、くずけなどしてこまかになりさるは、そこよりもれおつるやうにしさるもの。和名（篩和名、布流比、除粗去細之竹器也）



ふるび ナ。古色。ふるびさるいろ。としをへさるいろ。

ふるひごゑ ナ。顫聲。ふるへごゑに同じ。

ふるひつく ワ。ヒトリ。四。震付。をりつく。いさくふるふ。

ふるびと ナ。舊人。ふるきひと。古今（色も香も、おなじ昔に、さくらめど、年ふる人ぞ、あらたまりける）

ふるふ ワ。カケ。四。振。揺。ふる。ゆらふ。うごかす。栄花珠衣（大納言殿のとしごろの御物、たゞこの度ふるひさまふ）

ふるふ ワ。カケ。四。篩。ふるひをつかふ。

ふるふ ワ。カケ。四。發。いきほひをそふ。太閤記廿（天平寺にもかぎらず、延暦寺、高野なども、法威をふるひ）

ふるふ ワ。ヒトリ。四。震。慄。ゆらくとうごく。おそれてをのゝく。夫木廿（ひとりねれ、毛衣さゆる、夜の鶴、身ふるふそらり、さむけきものを）源若紫（若君れ、いとむつけう、いかにする事ならんとふるわれさまへど）

ふるぶ ワ。ヒトリ。カ二。古。ふるくなる。としをへさり。

ふるふで ナ。古筆。つかひて、ふるくなりさるふで。

ふるふるふ リ。飛々。ふるひつゝ。せなきながら。源紅葉賀（この君な、いかにまなしきこえ聞るほど、さびしきは、ふるふくつきひたさり）

ふるぶる リ。震々。ふるひつゝ。せなきながら。

ふるぶるし サ。フ。旧々。いとゞふるし。きはめてふるし。枕草四（ふるぐしき人の、髪なども、これはわがねにや、ところどころせなきちりぼひて）

ふるほぐ ナ。古反故。ふるきほぐ。十六夜日記（なのこどもも、もちの歌のふるほぐども、いかなるえにかありけん、あづかりもさる事あれど）

ふるほん ナ。古本。ふるきほん。ふるきさうし。

ふるまひ ナ。振舞。しわざ。しわざま。おこなひ。拾玉（たかずよ、うき世のひとの、ふるまひは、しぐるゝ秋の、山の端のくも）源花散（おもくしき御ふるまひなどは、よるなど、いとよくいひなして）

ふるまひ ナ。振舞。もてなし。きやうおう。昔々物語（町人までも、正月は椀飯振廻とて、親類、縁者、子供までもまねきよびあつめ、夫々、分限相應に結構して）

ふるまふ ワ。ヒトリ。四。振舞。をこなふ。おこなふ。蜻蛉（六位なるもの太刀をきさる、ふるまひいできて、前の方にひざまづきて）源宿木（やすらかに、身をもてなしふるまひさるいとかわらくなりや）

ふるまふ ワ。カケ。四。振舞。もてなす。きやうおうす。おきく物語（ちやづけなど、たびくふるまひける）

ふるまふ ワ。カケ。四。振。ふるといふに同じ。大鏡二（ふみをよみに、ふみをさみて、いらたくふるまひて）

ふるみち ナ。古道。ふるきみち。拾遺（三吉野の、雪にこ

もれる、山人も、ふるみちとめて、音もやなくらん）

ふるめかし サ。フ。古くみえさり。めづらしげなし。源末摘花（いにしへおれさりてさびしき所に、さばかりの人の、ふるめかしう、ところせくかしづきすゑさりけん、なごりなく、いかにおもほしのこす事ならん）

ふるめく ワ。ヒトリ。四。古くみゆ。枕草十（こぞの物語れ、何ばかりおかしき事もなく、詞ふるめき、みどころおほからねど、月は、むかしをおもひいでて）

ふるもの ナ。古物。ふるきもの。源姫橋（かゝるふるもの、世には侍りけりとむかりまろしめされ侍らなん）

ふるものがたり ナ。舊物語。ふるきものがたり。むかしのものがたり。源姫橋（さしぐみは、ふるものがたりにかゝづらひて、夜をあかしさてんもこちぐしかるべければ）

ふるや ナ。古屋。ふるきいへ。古今（ひとりのみ、ながめふるやの、つまなれば、人をしのぶの、草ぞおひける）

ぶるゐ ザ。部類。ぶのるゐ。ぶわけのたぐひ。

ふれ ナ。觸。おほやけより、ひろくつげしらするをいふ。

ふれあそび ナ。戯遊。たはぶれあそび。枕草五（殿上人にあつまり居て、さうぐしければ、ふれあそびをし）

ふれあたる ワ。ヒトリ。四。觸當。ふれてあさる。

ふれい ナ。不例。つねならぬをいふ。やまひをいふ。

ぶれい ナ。無禮。ぶつれい。ぶつけい。庭訓二（田舎人まで子細をしらず、定めて、無禮をあらそし候ひつらん）

ぶれうけん ナ。不料簡。れうけんのなきをいふ。

ふれがき ナ。觸書。おほやけのふれをかきさるもの。

ふれがしら ナ。觸頭。ふれをつさふるやくにん。

ふれじた ナ。觸下。ふれがしらのふれをうくるもの。

ふれさす ワ。カケ。シ二。觸。ふれしむ。源若紫（すこしもよづきてあらせんと思さん女子もさらば、おなじくば、かの人のあさりにこそれふれなさまほしけれ）

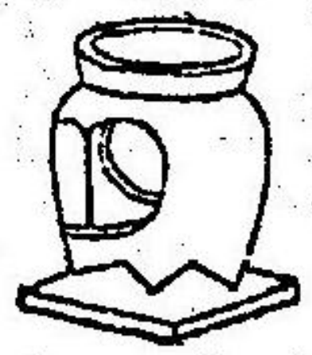
ふればふ ワ。ヒトリ。四。觸。ふる。あさる。源野分（かうのかぎりも、ふればひさまへる御けそひなるやと）

ふれん ナ。不憐。あさひのやすからぬをいふ。

ふれる ワ。ヒトリ。シ一。觸。あさる。ふるを見るべし。

ふれる ワ。ヒトリ。シ一。觸。つげしらす。ふるを見るべし。

ぶろ ナ。風炉。こんろのたぐひ。お湯などをわかす爐の、もちありくやうにしさるもの。鐵にてつくれるもの、土にてつくれるものなど、そのたぐひくさぐさあり。



ふろ ナ。風呂。ゆぶね。ゆあみのゆをたくへさるをけ。また、ゆあみのをけにたくへさるゆ。今物語（或所に、いぶろといふものをして、人々いりけるに）

ふろ ワ。降。ふるをいふ。東國のいにしへの方言なり。万廿（かみつけぬ、いかほのねろに、布路よきの、ゆきすぎかてぬ、いもがいへのあさり）

ふろく ナ。附録。ほんもんのほかにそへさるかきもの。

ふろしき ナ。風呂敷。ものをつゝむにもちふるきぬひろきぬの。もと、風呂場にしきて、足などをぬぐひさりし布にならひてつくりしものなりとぞ。

ふろば ナ。風呂場。ふろをまうけさるところ。

ふろふき ナ。風呂吹。食物の名。大根を、輪切にきりて、湯にて、やはらかに煮して、味噌をつけてくふもの。

ふろや ナ。風呂屋。ゆや。ふろをまうけてよせさりするいへ。昔々物語（むかしれ、松平丹後守上屋敷前に、町風呂屋おびさゞしく出來て、結構美麗をつくし）

ふろをんな ナ。風呂女。ゆな。ふろやにゐるうかれめ。昔々物語（風呂女とて、遊女おほくありしが）

ぶわ ナ。不和。なからひのむつましからぬをいふ。

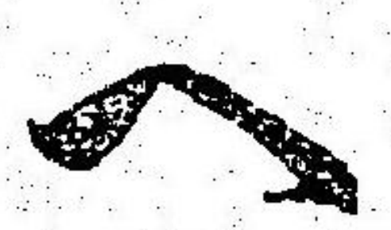
ぶわけ ナ。腑分。かいばう。あらずねをときさけて、はねぐみなどのありさまを、こまやかにみるをいふ。

ぶわけ ナ。部分。くみを、それぐにわくるをいふ。

ぶゐ ナ。無爲。やすらかにて、なすこともなきをいふ。

ぶゑい ナ。武衛。兵衛府をいふ唐名なり。

ぶゑんりよ ナ。無遠慮。ゑんりよなきをいふ。



くちびるにふれていづるひとつのこゑにて、フとヘとをかさなれるこゑなり。

へ ナ。舳。ふねのかしらのかさ。万十（おほぶねの、舳にも艫にも、よる波の、よるともされは、君がまにくく）和名（舳、船前頭謂之舳、漢語抄云、舟頭制 六度反、和語云閉）

へ ナ。瓮。かめ。すゑうつそもの。万三（まちがづく、ゆふと

りつけて、窟戸を、いはひほりすゑ）

へ　サ。竈。かまどをいふ。へつひ、へびとのたぐひ。

へ　ナ。屁。いきものの尻よりいづるかぜのごときもの。著聞廾（へのいさくひられ候ふなり。たちたるまくまさらひて、すゞろにひられ候へど）

へ　ナ。邊。ほとり。あたり。蜻蛉（日あしければ、門田のほとり、法正寺の邊にして、あうつきよりいでたちて、午の時ばかりに、宇治の院にいたりつく）

へ　ナ。邊。そし。はまのかた。神代紀（沖津藻は、邊にはよれども、さねどこも、あたへぬかもよ、濱津千鳥よ）

へ　ナ。上。うへ。万五（いかにあらん、日のときにかも、こゑしらん、ひとのひざの上、わがまくらかん）

へ　ツケ。重。かさね。かさなり。仁徳紀（衣こそ、ふたへもよき、さよとこを、ならべん君は、かしこきろかも）枕草五（なまめかしきもの云々、みへがさねの扇、いつへはあまりあつくなりて、もとなどにくげなり）

へ　ナ。エ方。むきをさすことば。この辭は、常に、にのごとくきこゆれども、には、その場所をさし、へはその方角をさすなれば、ふるくは、ことに、ことはもちひたり。古今（京へまうでくとて、そこなりける人によみておくりける）拾遺（初瀬へ詣で侍りける道に、佐保山のもとにまかりやどりて侍りけるに）

へあがる　ワ。ヒトリ。經上。いさをかさねて、あざいはたふとくなる。徒然草（猫の、へあがりて、ねこまたになりて、人とる事はあなるものをといふ者あり）

へい　ナ。屏。かき。いへのめぐりなどにきづきたるついがき。枕草七（建春門のへいのもとより、登花殿の前まであなみたるに）和名（屏音餅小墻當門戸也）

へい　ナ。幣。ぬさ。みてぐら。まさ、まひなひ。詞花（春日の冬のまつりに、へいたて侍りけるに、おもひける事をみてぐらにかきつけ侍りける）

へい　ナ。弊。つひえ。ところきなし。

へい　ナ。平生。つね。へいぜい。よのつね。

へい　ナ。兵。つはもの。いくさびと。

へい　ナゲキ。唉。ゑい。いらへのこゑ。うべなふこゑ。

へいあん　ナ。平安。たひらかにてことなきをいふ。

へいあんじやう　ナ。平安城。たひらのみやこに同じ。

へいえき　ナ。兵役。へいさいにくはゝるべきつとめ。

へいか　ナ。陛下。みかどをよびまつることば。

へいがい　ナ。弊害。つひえ。がいとなるならはし。

へいかう　ナ。平盃。ちひさくして、そこふかきかはらけ。

へいがく　ナ。兵學。いくさのみちのがくもん。

へいき　ナ。兵器。つはもの。たゝかひにもちふるだうぐ。

へいき　ナ。平氣。つねのきまゝにておどろかぬをいふ。

へいきん　ナ。平均。ならし。おしならし。

へいぐわ　ナ。平臥。やまひのとこにふすをいふ。

へいけ　ナ。平家。たひらうぢ。たひらをなのるうぢ。盛衰三廾（西の岸には、平家、あかはたをさゝげて）

へいけ　ナ。平家。魚の名。たひをいふ。豐前にて、

へいけがに　ナ。平家蟹。たけぶんがにと同じ。

へいご　ナ。海にすむいきもの。おめふらしと同じ。

へいこう　ナ。閉口。いひまけて、くちをふさぐをいふ。十訓二（公行卿は、これは如何とおほせければ、閉口せられけり。公行卿は、公資卿のうまごなり）

べいこく　ナ。米穀。こめ。たなつもの。

へいざ　ナ。平坐。あぐらをかくをいふ。

へいざぶらう　ナ。平三郎。きびすをいふ。安房にて。

へいさん　ナ。平産。こを、やすらかにうむをいふ。

へいさらばさら　ナ。鮓荅。藥の名。牛、馬などの腹よりいづる石のごときもの。赤黒くして光ありといふ。

へいし　ナ。兵士。つはもの。いくさびと。

へいし　ナ。平氏。たひらうぢ。たひらをなのるうぢ。

へいじ　ナ。瓶子。かめ。さけをもりたるうつはもの。源椎本（へいじとる人も、さなげならず、さる方にふるめきて、よし〳〵しうもてなしたまへり）

へいじつ　ナ。平日。つねのひ。へいぜいのひ。

へいじやう　ナ。平常。つね。へいぜい。よのつね。

へいじゆう　ナ。陪從。地下の樂人をいふとぞ。[illegible]（まひびと、へいじゆうなどは、中將、かはらけとりて、ものかづく）枕草七（臨時のまつりの云々、へいじゆうも、その日は、御前にいでゐるぞかし）

へいしよ　ナ。兵書。いくさのみちをかきたるふみ。

へいせい　ナ。平生。つね。へいぜい。よのつね。

へいそ　ナ。平素。つね。へいぜい。

へいそつ　ナ。兵卒。あしがる。かろきいくさびと。

へいたい　ナ。兵隊。つはものの、ひとむれにくめるもの。

へいたう　ナ。乞食。ものもらひをいふ。肥前、長崎にて。

へいたん　ナ。兵端。いくさのはし。たゝかひのいとぐち。

へいたん　ナ。平坦。ところのたひらかなるをいふ。

べいだん　ナ。餅餤。食物の名。餅の中に、鵝の卵、鴨の卵などをつゝみいれたるものなりとぞ。枕草七（釋奠もいかならん云々、べいだんといふものを、ふさつならべてつゝみたるなりけり）和名（餅餤、楊氏漢語抄云、裹餅中、納煮合鵝鴨等子并雜菜而方截、一名、餅䭔）

へいち　ナ。平地。つちのうへのたひらかなるところ。

へいぢやう　ナ。兵仗。ひやうぢやうに同じ。

へいてん　ナ。閉店。あきびとの、みせをとぢたるをいふ。

へいにん　ナ。平人。たゞびと。なほびと。よのつねのひと。

へいはく　ナ。幣帛。みてぐらに同じ。

へいはふ　ナ。兵法。いくさのみち。たゝかひのまなび。平治（牛若は云々、天狗と、よな〳〵、兵法をならふと）

へいふく　ナ。平服。つねのきもの。へいぜいのいふく。

へいふく　ナ。平伏。かしこまりてひれふすをいふ。

へいぼんなり　サ。平凡。よのつねなり。すぐれてあらず。

へいまん　ナ。屏幔。まくのたぐひ。枕草十（錦のあげばりには、御簾いとあをくてかけわたし、へいまんなどひきさるほど、なべて、たゞに、この世とおぼえず）和名（帳云々、小帳曰斗（俗云斗帳、一云屏幔）形如覆斗也）

へいみん　ナ。平民。たみ。たゞびと。ひやくしやう。

へいもつ　ナ。聘物。ゐやじろ。おくりもの。

へいもん　ナ。閉門。刑の名。とぢめ。おしこめ。

へいゆ　ナ。平愈。やまひのいゆるをいふ。

へいりよく　ナ。兵力。いくさのちから。

へいれつ　ナ。並列。ならびつらなるをいふ。

へいわ　ナ。平和。おだやかにてかはりなきをいふ。

へいゐ　ナ。兵威。いくさのいきほひ。

へいをん　ナ。平穏。たひらかにておだやかなるをいふ。

へう　ナ。豹。獸の名。なかつかみに同じ。

へう　ナ。雹。あられ。あめつぶのこほりたるもの。

へう　ナ。表。つぎにたてまつるふみ。まさ、めやすなどをかきつらねたるもの。源榊（左のおとゞも、おほやけわたくし、ひきかへたる世のありさまに、ものうくおぼして、致仕のへうたてまつりたまふを）

へう　ナ。俵。たはら。こめをいれたるたはらづと。

べう　ナ。廟。みたまや。なきたまをまつりたるところ。

べうえい　ナ。苗裔。あそん。あなすゑ。むつそん。

へうかん　ナ。剽悍。きてやかにさがしきをいふ。

へうきん　ナ。剽軽。へうらんなるをいふ。東國にて。

へうぐ　ナ。褾具。かみなどを、のりをもてはりつくるをいふ。掛字、掛軸、巻物、屏風のたぐひをなするをいふ。

へうぐし　ナ。表具師。へうぐを、なりはひとするひと。

へうさう　ナ。表装。へうぐに同じ。

へうさつ　ナ。標札。かどふだ。いへのしるしのふだ。

へうし　ナ。表紙。うはがみ。さうしなどのおもてにつけたるかみ。源鈴虫（いそぎかゝせたまへるかひありて、軸、へうし、箱のさまなど、いへばさらなりかし）

へうじゆん　ナ。標準。めど。めあて。めじるし。

へうぜんと　リ。飄然。ひら〳〵と。たゞよひて。

へうそ　ナ。瘭疽。かさのたぐひ。指のかしらにいでくるものにて、次の指をも、つぎ〳〵くさらすをいふ。和名（瘭疽俗云倍宇曾血氣不通而所生也）

へうだい　ナ。表題。書の名の、表紙にかきたるもの。

べうだう　ナ。廟堂。てうていといふに同じ。

へうたん　ナ。瓢箪。瓜の名。ひさご。夕顔の一種にて、瓜の形、まろくながくして、中のところくびれたるがごとし。味にがくして、食ふべきにあらねば、核をのぞき、内を空にして、酒などをいるゝうつはものにもちふ。七十一職人歌合（むちうさき、無常聲、ひときけとてぞ、へうたんの、あむくめぐる、月のよねぶつ）

へうたんご　ナ。瓢箪子。鳥名。にはどりをいふ。駿河にて。

へうちやくす　ワ。ヒトリ。カ。漂着。たゞよひてながれつく。

へうちゆう　ナ。標注。ふみのうへのかしらがき。

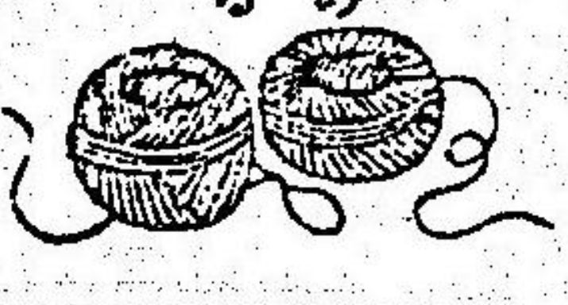
へうはくす　ワ。ヒトリ。カ。漂泊。ながれたゞよふをいふ。

へうめん　ナ。表面。おもて。うはべ。うはつら。

へうり　ナ。表裏。うらおもて。うちとそと。
へうりうす　リ。ヒトリ。カ。漂流。ながれたゞよふ。
へうりもの　ナ。表裏者。うらぎりなどするもの。
へかる　ワ。ヒトリ。シ二。剝。へぎとるごとくなる。
へき　ナ。僻。くせ。こゝろの、ものにかたよるをいふ。
へぎ　ナ。析。へぎいた。また、へぎいたをしき。太閤記三（仁義の死をとげし者の首なり。四人の首を、三方にすゑ、與十郎が首を、へぎにすゑよと仰せけり）
へぎいた　ナ。析板。うすくへぎたるいた。
へきえきす　ワ。ヒトリ。カ。辟易。いきほひにけおさるゝ。
へきしよ　ナ。壁書。かべがき。何事によらず、すべて、思ふところをかきつけて、奉行所の壁にもりおくをいふ。
へきせつ　ナ。僻說。ひがみたるせつ。たゞしからぬせつ。
へきち　ナ。僻地。かたゐなか。みやこにとほきところ。
へきれき　ナ。霹靂。かみなり。いかづち。
へきろん　ナ。僻論。ひがみたるろん。たゞしからぬろん。
へぐ　ワ。カナ。四。折。さぐ。うすくそぎとる。空穗藏開（おりもののほそながをひきへぎて、兵衛の君にあたせ、中將の君はひとつとらせて）源明石（ねびとゝのほりて、御もののおもひのほどに、ところせかりし御くしの、すこしへがれたるしもいみじうめでたきを）
へくそかづら　ナ。女青。蔓草の名。くそかづらに同じ。
へぐひ　ナ。竈食。かまどにてにるものをくふをいふ。神代紀（湌泉之竈此云舉母都俳濡比）

へぐり　ナ。平群。地の名。大和にあり。万十六（その皮を、たゝみにさして、やへだゝみ、平群のやまに）
へげ　ナ。變化。へんげ。ばけもの。空穗樓上（御かたちも、へげのもののやうになりまさりたまふ。たゞむこまつり、かなさこなさきせさせたまへり）
べけ　ナゲキ。不可。よろしからずといふところのことば。
へけべけ　ナ。燈心押。とうしみおさへをいふ。備後にて、
へこ　ナ。提灯。ちやうちんをいふ。日向にて、
へこ　ナ。犢鼻褌。たふさぎをいふ。中國、西國にて。
べこ　ナ。牛。うしをいふ。中國、東國などにて。
へこおび　ナ。三尺帶。みじかきおび。兵兒のたぐひ。
へこし　ナ。犢鼻褌。たふさぎをいふ。陸奥などにて、
へこたる　ワ。ヒトリ。シ二。疲茶。へきえきす。
へこたれ　ナ。疲茶。へこたるゝをよぶことば。
へこたれる　ワ。ヒトリ。シ一。疲茶。すたるをいふ。但馬にて、
へこみ　ナ。陷。めり。へり。くぼみ。
へこむ　ワ。ヒトリ。四。陷。くぼくなる。おされてへる。
へさかる　ナ。逆疎神。いざなぎの神の御子。
へさき　ナ。舳先。へ。ふねのかしらのかた。
べし　テ。タスケ。ザロヒ。可。よし。ふさはし。また、成敗をいひ、許容をいひ、推量をいふ。古今（こりずまに、またもうき名は、たちぬべし、人にくからぬ、世にしすまへば）新古（おぼろには、てる日のいろを、ひさめては、天の下にはたれかすむべき）拾遺七（からきぬは、みじかき衣とこそいへ、されど、それは、もろこしの人のきるものなれば、うへのきぬのもまはいふべし）

源宿木（あなくらしとて、火かゝげなどすべし）宇拾九（感じてゆるしけり。人は、いかにも情あるべし）
へしあふ　ワ。ヒトリ。四。相壓。たがひにへす。
へしぐち　ナ。壓口。くちをつぐみて、にがみてゐるをいふ。盛衰記三（小松の內大臣、その時は、新大納言にて、密座に候はれけり、初より、へしぐちしてえも宣はず）
べしけに　ツ。宜。うべくしく。長明無名抄（かの歌ならねど、かくもとりなしてんと、べしけによめるとこそみえされ。似りとて、難とすべき樣はあらずと）
へす　ワ。カナ。ロ。壓。おさへつく。へこましむ。散木（ちる花を、みなへしもちて、ゆく秋の、こひしき時の、かたみとやせん）著聞廿（いとゞ、かつにのりてへしふせてなるに、ほそごゑなるいどしてきゝとなきけり）
へす　ワ。カナ。ロ。減。へらす。すくなくす。
へそ　ナ。巻子。なかくつぶけてうみなしたるあさの、まろく、てまりのごとくまきなしたるもの。和名（巻子辨色云々、俗謂閉巻名也）
へそ　ナ。臍。ほぞといふに同じ。
へそくりがね　ナ。臍繰錢。みそかにたくはへたるかね。
へそのを　ナ。臍緒。ほぞのをに同じ。
へそをつくる　ワ。ヒトリ。四。壓口になる。かひをつくる。
へた　ナ。蔕。ほぞ。このみなどのうてな。



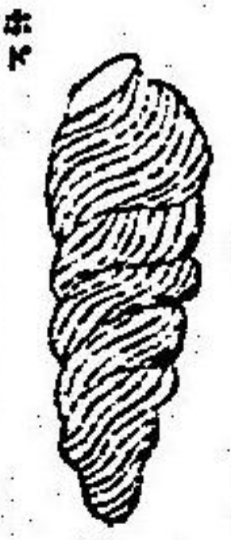
へた　ナ。邊。ほとり。きしのかた。万二十（あふみのうみ、邊は人しる、沖津波、君をおきては、しる人もなし）
へた　ナ。下手。わざのつたなきをいふ。また、つたなきひと。稻中抄二（日本紀には、俳諧を書きて、へたとよめり云々、また、ころ身を、へたともいふなり）
べたう　ナ。別當。職の名。本官ありて、別につかさどるところある稱にて、藏人所、內豎所などにある重職なり。また、攝家の家事をつかさどる者をもいひ、また、東大寺、仁和寺、興福寺などにては、法務をすぶる者をいひ、武家にては、公文所の長人をいふ。蜻蛉（この寺のべたうとおぼしき法師、てうしに、水をいれて）
へたくそ　ナ。下手糞。へたをよぶことば。
へだたり　ナ。隔。距離。あひだのあるをいふ。また、こゝとかしことのはなれ。源螢（菩提と煩惱とのへだゝりなん、この人のよきあしきばかりの事はかはりける）
へだたる　ワ。ヒトリ。四。隔。へだてあり。はなれてあり。拾遺分（ながめする、ゆふべのそらも、きりたちぬ、へだゝりゆくは、むかしのみかは）
へだつ　ワ。ヒトリ。四。隔。あひだとなる。万八（飛鳥にも、なげこしつべき、天河、へだてればかも、あまたすべなき）
へだつ　ワ。カナ。シ二。隔。あひだをおく。あひだをとほくなす。うとくしくもてなす。この語は、地方によりては、へだてるを下一段にいふ。拾後（しるがすみ、へだつる山の、ふもとまで、思ひもならず、ゆく心かな）濱松三（くれさけをへだててぞ、人の家はみゆる）

へだて　ナ。隔。へだつること。へだつるもの。狹衣四（煙も、ところぐは、たえ、ふもとをこめたる霧の、へだてもたど〳〵しきに）宇拾六（こゝはひとつのへだてあり。築地を、たかくつきめぐらしたり）
へだてがほ　ナ。隔顏。へだてあるさま。うちとけぬけしき。狹衣四（かなしうなるならひにさへ、なほもなき事につけても、へだてがほなる御こゝろはあきれなるを）
へだてごころ　ナ。隔心。へだてあるこゝろ。うちとけぬこゝろ。源鈴虫（人きかぬ奥山、はるけき野の松原に、聲をしまぬも、へだてごゝろある虫はなんありける）
へだてる　ワ。カナ。レ一。隔。あひだをおく。へだつを見るべし。
へたばる　ワ。ヒトリ。四。平伏。ふす。ひれふす。
へたる　ワ。ヒトリ。四。居坐。すわるをいふ。關東にて、
べたべたす　ワ。ヒトリ。カ。粘。ねばる。ねばりつかんとす。
へだれゆき　ナ。斑雪。まだらゆき。はだれゆき。
べち　ナ。別。べつ。空穗藏開（かみしも、べちのろくなどたまひさして、あくるまであそびて）源横笛（こがね百兩をなん、べちにはせさせたまひける）
べちなふ　ナ。別納。べつのいへ。もやよりはなれたるいへ。空花陰石（一の宮は、べちなふにおはします。小宮より、宮々は、おほつかなからず、おとづれきこえさせ給ふ）
べちなふしよ　ナ。別納所。院にたてまつりたる物ををさめおくところ。禁中の內藏寮のたぐひなり。

へちま　ナ。絲瓜。瓜のたぐひ。葉は、からおふひに似て、尖おほくして、ほそき毛あり。夏のすゑ、いつひらの黄ばみたる花さきて瓜をむすぶ。その狀、胡瓜よりもながく大きくして、瓜の內の筋の、たてよこにおりなして、麻布などを、厚くかさねたるがごとし。
へちま　ナ。[illegible]。めめをいふ。土佐などにて、
べつ　ナ。別。べち。ことなるをいふ。それならぬをいふ。
へつかがみ　ナ。邊津鏡。神代の鏡の名。天之日矛といふ神の、新羅よりもちきたりしかゞみなり。古事記
べつかく　ナ。別格。つねのさだめのほかなるをいふ。
へつかひべら　ナ。邊津甲斐辨羅神。いざなぎの神の御子。
べつかふ　ナ。鼈甲。うみがめのかふ。たいまいのかふ。
べつかふさう　ナ。鼈甲草。草の名。いちやくさうに同じ。
べつかん　ナ。鼈羹。菓子の名。やうかんのたぐひ。
べつきよ　ナ。別居。はなれて、べつにゐるをいふ。
へつくり　ナ。贄造。にへのれうをとるひと。にへのとりをとるひと。好忠集（へつくりは、あらせずもがな、難波江の、蘆間をわけて、あそぶ鴨の子）
べつくわ　ナ。別火。ものいみのとき、あひびをさけて、べつのひをもちふるをいふ。あひびを見合すべし。
べつけ　ナ。別家。べつのいへ。また、ぶんけをいふ。
べつげふ　ナ。別業。なりどころ。しもやしき。
べつこん　ナ。別懇。ねんごろなるまじはりをいふ。
べつさう　ナ。別莊。なりどころ。しもやしき。

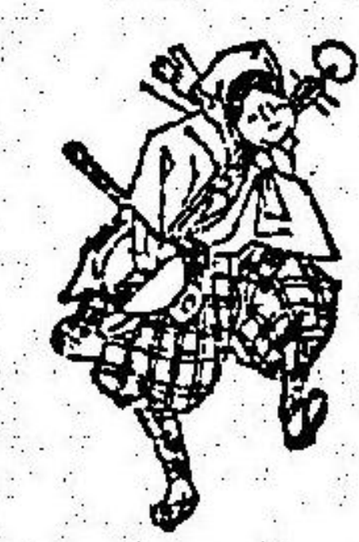
べつじ　ナ。別事。べつのこと。ほかのこと。
べつしす　ワ。カケ。カ。蔑視。ないがしろにす。
べつして　ツ。別。ことに。とりわけて。
へつしまひめ　ナ。邊津島姫。たぎつひめに同じ。
べつじん　ナ。別人。べつのひと。ほかのひと。
べつそく　ナ。別足。雉子の股をいふ。厨野にいふ詞なり。今川大双紙（鳥の焼物は、別足のみを、前盛にし）
べつたう　ナ。別當。職の名。べたうを見るべし。
べつたう　ナ。別當。父。ちゝをいふ。肥前、佐賀にて、
べつたう　ナ。別當。虫の名。ひきがへるをいふ。上野にて、
べつたく　ナ。別宅。べつにかまへたるいへ。
べつだん　ナ。別段。ことに。とりわけて。
へつつひ　ナ。竈。かまどに同じ。
べつてい　ナ。別邸。べつのやしき。しもやしきのたぐひ。
べつでう　ナ。別條。つねにかはりたること。
へつなぎさびこ　ナ。邊津那藝佐毘古。いざなぎの神の御子。
べつなふしよ　ナ。別納所。べちなふしよに同じ。
べつぱい　ナ。別盃。わかれにするさかもり。
へつひ　ナ。竈。かまどに同じ。枕草五（めでたきもの云々、内膳御へつひわたしてまつりなどしたる）
へつひどの　ナ。竈殿。神樂歌の曲の名。かまどのに同じ。
べつぴん　ナ。別品。ことによきもの。すぐれてよきもの。
へつべ　ナ。邊方。はしのかた。きはのかた。万三（沖方には、かもめよばひ、邊津方には、あぢむらさわぎ）

へつも　ナ。邊津藻。へつもゑに同じ。
へつもゑ　ナ。邊津藻菜。いそべによるも。おきのりのたぐひ。祝詞式（與津藻菜、邊津藻菜至万民留）
へつらふ　ワ。ヒトリ。四。諂。こぶ。よくおもねれんたらは、ことさらに、ひとのこゝろにかなふやうにもてなすをいふ。源氏（きんだちのおもしろよてんに、世のきこえなん、へつらひたるやうならん）
へつる　ワ。カケ。四。折。へぎてとる。うすくとる。欽明紀（抜取新羅所折之國、南加羅䘏己呑等、邊屬本貫）
へづる　ワ。カケ。四。折。へつるをいふ。豐後などにて、
へど　ナ。反吐。むねわるくて、くひたるものなどをはきいだすをいふ。竹取（船をふきもてありく云々、船にのりては、かぢとりの申す事をこそ、たかき山ともたのめ、などかくたのもしげなき事を申すぞと、あをへどをつきてのたまふ）和名（歐吐 俗止那久、又太萬比）
へな　ナ。埴。どろの、くろくしてねばりあるもの。
へなたり　ナ。閉奈多利。貝の名。にしのたぐひにて、ほそくちひさくして、ねぢれたるがごとし。徒然草（甲香は、ほらがひの様なるが、ちひさくて、口の程の、ほそながにしていでたる貝のふたなり。武藏國金澤といふ浦にありしを、地の者は、へなたりと申し侍るとぞいひし）



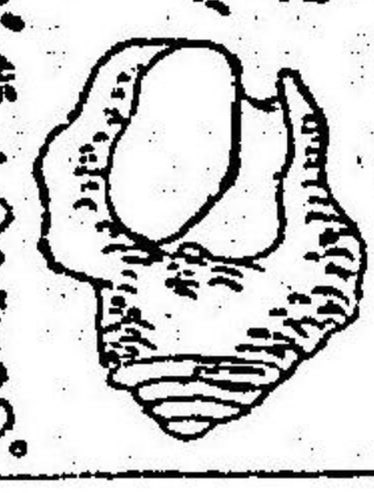
へなみ　ナ。邊波。きしべのなみなり。拾古（熊野川、せぎりにさす、杉舟の、へなみに袖の、ぬれにける哉）

へなる　ワ。ヒトリ。四。隔。へだたるに同じ。万廿（たまぼこの、道をたどほみ、山川の、隔奈里てあれば、こひしけく、けながきものを、みまくほり、思ふあひだに）
へなる　ワ。ヒトリ。シニ。衰。そぐ。うすくなる。啓心方
べに　ナ。紅。くれなゐのはなをつみて、しるをしぼりとりてつくりたるもの。あかきいろをそむるにもちふ。
べに　ナ。燕脂。紅に、白粉をまぜたるものにて、女の頬につけてけしやうするもの。榮花御裳（そゞろめくろらにつけて、べにのけさうせさせて）和名（燕脂 閼遜 燕赤也、染使赤所以著頬也、今按、燕即赭字也）
べにおしろい　ナ。紅粉。べにとおしろいと。
べにかづら　ナ。紅葛。蔓草の名。あかねに同じ。
べにがに　ナ。紅蟹。蟹の一種、あさひがにに同じ。
べにがひ　ナ。紅貝。貝の名。いろがひに同じ。
べにかん　ナ。紅勘。ごみさいふのたぐひ。をかしきいでたちして、三味線をひき、歌をうたひて、八人藝などしてありくもの。



べにがら　ナ。紅殼。べんがらに同じ。
べにくちば　ナ。紅朽葉。染色の名。あかきみあるくちば。
べにざこ　ナ。紅雑魚。魚の名。いとよりだひに同じ。
べにさしゆび　ナ。紅差指。ななしのおよびに同じ。
べにざら　ナ。紅皿。ちひさきさらの、べにをぬりてたくはへるもの。隨信集物名（たびくは、あふわうれしき、け

ふさへる、さりもまよふ。（やみこゝろのな）
べにしぼり　ナ。紅絞。あかいろのしぼり。
べにすげ　ナ。紅菅。草の名。ますげに同じ。
べにすずめ　ナ。紅雀。鳥の名。形、すゞめよりもちひさく、くろくして、全身すべてあかし。但し、頭と腹とは、すこしくろく、翅は、くろきに、しろきほしあり。
べにそめ　ナ。紅染。あかいろにそめたるもの。
べにたけ　ナ。紅茸。菌の名。秋の頃むゆる菌にて、表は、紅のごとく、裏は、雪のごとし。毒あり。食ふべからず。
べにつけゆび　ナ。紅付指。ななしのおよびに同じ。
べにだし　ナ。紅螺。貝の名。にしのたぐひ。かさは、常の螺よりもまろく、色あかくして、すこし黄ばみたり。



べにます　ナ。紅鱒。ますの一種、肉の、殊にあかきもの。
へのこ　ナ。陰核。きんたま。和名（陰核 俗云 布乃古）
へれんさう　ナ。草の名。かつべらさうに同じ。
べりごう　ナ。春末の風をいふ。中國の船人のことば。
へりつく　ワ。ヒトリ。四。粘着。ねばりつく。
へび　ナ。蛇。虫の名。へみ。くちなは。身ほそくながくして、そのさま、縄をのべたるがごとく、やさつの舌ありて、手足なく、全身に、こまやかなる鱗つきて、よくくねりゆく。この虫、そのたぐひきはめておほし。
へびあさがほ　ナ。蛇朝顔。ひるがほをいふ。相模にて、
へびいちご　ナ。蛇苺。草の名。くちなはいちごに同じ。

へびがみ　ナ。蛇神。いぬがみのごとくしてつかふへび。
へびたけ　ナ。蛇茸。菌の名。形、すこし、初茸に似て、皿のきざみなし。この菌、毒あり。食ふべからず。
へびちやせん　ナ。蛇茶筅。やぶじんをいふ。上總にて、
へびつかひ　ナ。蛇遣。あまたのへびを、さまぐにもてあそびて、ひとにみせて、ぜにをこふもの。
へひと　ナ。戸人。食封。三位より上の人にたまふ民戸。民戸とは、その民の家より、いださすべきみつぎものをいふ。されば、三千戸、五千戸などとかぞふる事なり。
へひる　ワ。ヒトリ。四。放屁。へをひる。禁聞抄（へひりの判官代といふものあり云々、屁をひるより外の事なかりけり）和名（放屁 和名、倍比流 下部出氣也）
へぶみ　ナ。戸籍。てせき。にんべつをかきたるふみ。
べべ　ナ。衣服。きものをいふ。小児の語なり。
べべ　ナ。女陰。つびをいふ。陸奥、出羽、越後などにて、
へべろ　ナ。虫の名。あきびらりに同じ。
べべのと　ナ。犢。こうしをいふ。四國、九州にて、
へやかに　ツ。荏苒。としつきのすぐるにいふ。下學集
へぼくさ　ナ。草の名。おにのやがらをいふ。信濃にて、
へまき　ナ。綜。たてをつくるあしをまきをさむるもの。和名（綜 閉蘇 鈔云、七射取機具也）
へまさる　ワ。ヒトリ。四。經勝。としつきをへて、まさりざまになる。源氏（ものふかくおぼしゝり云々、なべしよりも、あまさりておぼさるれど）

へみ　ナ。蛇。虫の名。へびのところを見るべし。和名（蛇 和名、倍美、一云久知奈波、蒋虫也 日本紀私記云、乎呂知）
へみ　ナ。椙。木の名。やぶでまりに同じ。
べみ　テ。可。べきによりて。允恭紀（あまだむ、かるをとめ、いたなかば、人知りぬ可、はさの山の、鳩の、したなきになく）古今（佐保山の、ははそのもみぢ、ちりぬべみ、よるさへみよと、てらす月影）
へん　ナ。變。かはり。ふしん。ひじやう。おほごと。
へん　ナ。邊。ほとり。あたり。竹取（舍人二人めしつぎとして、やつれたまひて、難波のへんにおはしまして）
へん　ナ。偏。かなもじの、つくりにむかひたるかた。
へん　ナ。遍。たびのかずをかぞふるにいふことば。
ぺん　ナ。洋筆。よこもじをかくにもちふるふで。
べん　ナ。辨。べんくわん。また、院廳の官人にて、年預につぎて、事を執るもの。また、記錄所の次官をもいふ。
べん　ナ。辯。ものいひ。ことばづかひ。
へんか　ナ。返歌。かへしのうた。こたへのうた。
へんがい　ナ。變改。やくそくしたることをまもらぬをいふ。十訓五（約束の旨の變改あるにても、さるやうこそあるらめと、心ながく忍びすぐしたらんに）
べんかい　ナ。辨解。いひとけ。いひひらき。
へんかう　ナ。變更。かはりあらたまるをいふ。
へんかく　ナ。變革。かはりあらたまるをいふ。
べんがら　ナ。辨柄。あかぐろきいろをそむるもの、熱國

はいでくる、木の皮にて製したるものなり。

べんぎ ナ便宜。びんぎ。べんり。たよりのよきこと。

べんきやう ナ勉強。つとめ。ほねをり。いそしき。

へんきやく ナ返却。かへすをいふ。もどすをいふ。

へんくつ ナ偏屈。かたくなにかたよりたるをいふ。

へんくゑ ナ変化。かたちのかはるをいふ。

へんくわん ナ返還。へんきやくに同じ。

べんくわん ナ弁官。べんとのみもいふ。太政官の判官にて、大弁、中弁、少弁などの七弁を、すべていふ称。

へんぐゑ ナ変化。へんげ。ばけもの。源氏夕顔(昔ありけんもののへんげめきて、うたて思ひなげかるれど、人の御けはひ、はた、てさぐりにもしるきわざなりければ)

へんげ ナ変化。ばけもの。かたちをかへたるもの。源氏蓬生(もし狐などのへんげにやとおぼゆれど、ちかうよりて、たしかになんうけたまはらまほしき)

べんけいいも ナ弁慶芋。けいもをいふ。陸奥、仙台にて。

べんけいさう ナ弁慶草。いきくさをいふ。京都にて。

べんけいじま ナ弁慶縞。いちまつのおりじま。

へんこ ナ偏固。かたくなにかたよりたるをいふ。

べんご ナ弁護。いひわきをしてかばふをいふ。

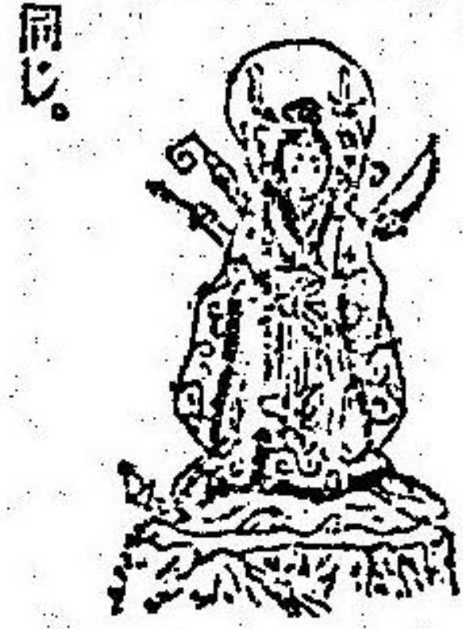
べんこう ナ弁口。べん。べんぜつ。ものいひ。

へんこなり サ偏固。かたくななり。かたよりたり。

へんこに ツ偏固。かたくなに。かたよりて。

へんさい ナ返済。かりたるものをかへすをいふ。

べんざいてん ナ弁才天。七福神のひとつ。天竺の女神にて、弁舌の才をたすけ、智慧をも与ふる神なりとぞ。



へんさん ナ編纂。へんしふに同じ。

へんし ナ変死。つねならぬしにざまをいふ。

へんじ ナ片時。かたとき。しばしのほど。

へんじ ナ返事。こたへ。こたへのふみ。落窪十六(あさましき大仮字にて、御返事をぞ申しける)

へんしふ ナ編輯。もろもろの書より、何呉と、さまざまの事をひきいでて、一部の書にあみなすをいふ。

へんしん ナ変心。こゝろがはり。

へんじん ナ変人。ひとなみにかはりたるひと。

へんしや ナ編者。へんしふしたるひと。

べんしや ナ弁者。べんぜつよきひと。

へんじやう ナ返上。かへしたてまつるをいふ。

べんしやう ナ弁償。わきまへ。つぐのひ。

べんじよ ナ便所。かはや。こうか。せつちん。

へんず ワヒトリカ変。かはる。あらたまる。濱松二(仏などの変じ給へるとなんおぼゆるなどのたまふ)

べんず ワカチカ弁。わきまふ。べんぜつす。

べんぜつ ナ弁舌。ものいひ。ことばづかひ。

へんせん ナ変遷。うつりかはるをいふ。

へんそく ナ変則。せいそくにかはりたるきそく。

べんたう ナ弁当。ひるげなどにたづさふるをもの。

へんたふ ナ返答。いらへ。こたへ。かへりごと。

へんつき ナ偏旁。からもじを、偏と旁とにわけおき、旁のみをしめして、その偏をこたへしむるたはぶれ。

へんつく ワヒトリ四偏突。へんつきをなす。源椎本(碁うち、へんつきなど、ものはかなきあそびわざにつけても)

へんつくり ナ偏旁。からもじのへんとつくりと。

べんてん ナ弁天。神の名。べんざいてんに同じ。

へんど ナ辺土。へんどう。かたゐなか。

へんどう ナ辺土。かたゐなか。宗五大双紙(へんどうな盃はひき候ふ事は、京辺にてみおよび候はず云々。さんをひかれ候ふ事、へんどうにてよく候ふ)

へんどう ナ変動。かはり。うごき。

へんに ツ変。あやしく。ふしぎに。つねにかはりて。

へんぱ ナ偏頗。かたおち。えこひいき。かたよりそひ。

へんぱう ナ返報。かへし。こたへ。むくい。

べんばく ナ弁駁。おしかへしていひやぶるをいふ。

へんぴ チ辺鄙。かたゐなか。かたほとり。

へんび ナ扁鼻。魚の名。あなごをいふ。摂津、西宮にて。

へんぷつ ナ変物。ひとなみにかはりたるひと。

べんべつ ナ弁別。けぢめ。わかち。わきまへ。

へんぺん ナ返弁。かりたるものをかへすをいふ。

ぺんぺんぐさ ナ薺のそだちたるをいふ。東京にて。

べんべんと ツ便々。ときのながくなるをいふことば。

べんめい ナ弁明。いひあかし。いひほどき。

べんり ナ便利。なすことに、たよりよきをいふ。

へんれい ナ返礼。ひとのれいにこたふるをいふ。

べんれい ナ勉励。つとめ。ほねをり。いそしき。

へんれき ナ遍歴。くにぐにをへめぐるをいふ。

べんろ ナ便路。べんりなるみち。たよりよきみち。

べんろん ナ弁論。おしかへしてろんずるをいふ。

へめぐる ワカチ四歴廻。くにぐにをめぐりありく。

へや ナ部屋。つぼね。ざうし。いへのうちの、ひとしきりにしきりたるところ。落窪一(へやのやりどをあけていりおもして、これぬひたまはずば、さもべやにやりてこめたてまつらん)宇拾二(賤部なる男がいふやう、おのれが、部屋にいり居てきゝつれば)

へやずみ ナ部屋住。へやにすむをいふ。また、嫡子などの、まだいへあるじにならぬほどの称にいふ。

へら ナ鏵。からすきのみゝ。和名(鏵和名、閉良、犁耳也)

へら ナ木の名。へらのきに同じ。

へら ナ箆。たけの、こがたなのやうにけづりなしたるもの。続飯をおすなどにもちふるものなり。

へらす ワカチ四減。へす。へらしむ。すくなくす。

へらずぐち ナ不減口。たてことをいひつづくるをいふ。

べらなり ナダスク可。べきやうなり。古今(なきとむる花しなければ、うぐひすも、はてはものうく、なりぬべらなり)拾遺(花もみな、ちりぬるやどは、ゆく春の、ふるさとこそ、なりぬべらなれ)

へらのき ナ木の名。葉は、椋、桑のたぐひに似て、葉のあひだに、菩提子のごとき実をむすぶ。この木の皮は、常にむきて、縄にもなひ、蓑などにもつくる。

べらばう ナ篦坊。ひとをのゝしることばにいふ。

へり ナ縁。ふち。めぐり。拾遺集外(へりもいとも、たえたる御簾の、ひきもみな、花にうづめる、古里の春)

へりくだる ワヒトリ四謙。つゝしみてたかぶらず。

へる ワヒトリ四減。すくなくなる。とぼしくなる。ひるむ。おくす。盛衰記(比良の高根の雪きえて、水のかさまされども、水のへる事あるべからず)同五(実といふ衆徒もおほかりけり。されども、前陣は、すこしもへらず、鎧の胸板きらめかし、扇つかひて申しけるは)

へる ワカチシ経。いとをかけてゆく。機に、たていとをかくるときする事なり。後撰(あづまぢに、へつるほどなり。さらいとの、たえぬる身とは、おもはざらなん)和名(綜和名、閉、機縷持絲交者也)

へる ワカチ四放屁。ならす。へをひる。

へる ワヒトリシ経歴。みちをこゆ。ふを見るべし。

べれんず ナ洋青。絵具の名。こんじやうのたぐひ。

べろ ナ魚の名。あゆなめをいふ。駿河などにて。

べろ ナ垢。むざのあかをいふ。豊後などにて。

へろへろや ナ弱矢。なよなよとしたるや。保元(まして、清盛などがへろへろや、何程の事か候ふべき。よろひの袖にてはらひ、けちらしてすてなん)

へを ナ綜緒。あしをに同じ。六帖(へをつけて、山にいりにし、荒蕪の、いとなきにくき、そらごとなせそ)

へそつ ナ綜麻。綛。へをまきつくるもの。定家卿三百首(くれぬとて、さしてく鷹の、へそづゝも、あふくのよりや、とりいだすらん)

ほ

くちびるにふれていづるひとつのこゑにて、フとハとかよへるこゑなり。

ほ ナ穂。くきのさきの、花のあつまりつくところ。古今(今よりは、うゑてだにみじ、花すゝき、ほにいづる秋は、わびしかりけり)枕草十(穂にいでたる田を、人おほくてさわぐ)和名(穂和名、保、禾穀末也)

ほ ナ穂。さき。すゑ。もののさきのとがりたるところ。もののすゑのあらはれてみゆるところ。古事記(ちばの、かづぬをみれば、もゝちたる、やにはもみゆ、久爾能富もみゆ)万葉十(おしていなと、いねはつかねど、浪乃保の、いたぶらしもよ、きぞひとりねて)

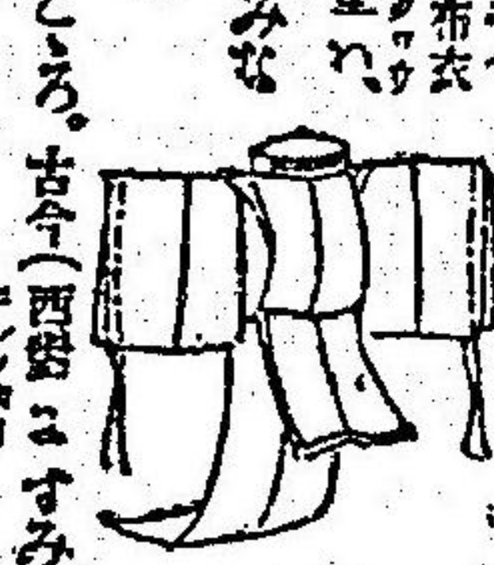
ほ ナ帆。ふねをやるために、ふねのうへに、たかくかけて、かぜをふくましむるもの。枕草十(たゞすぎにすぐるもの、帆あげたるふね、人のよはひ)和名(帆和名、保、風衣也、一云船上掛檣上取風進船也)

ほ ナ火。ひに同じ。但し、他語のうへにおきていふと

きのことぞなり。ほのほ、ほうげなどのたぐひ。

ほあかり　ナ。火明命。おしほみゝの君の御子。

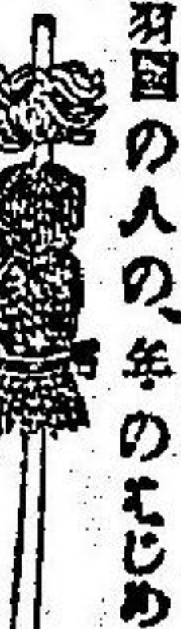
ほい　ナ。布衣。かんぎぬに同じ。但し、後には、地文あるを、狩衣といひ、地文なきを、布衣といひならへり。公事根源（上皇は、御馬にめされ、左右大臣以下、みな直衣にて、殿上人は布衣なり）



ほい　ナ。本意。ほんい。まことのこころ。古今（西國にすみける人に、ほいにはあらで、ものいひさゝりけるを）

ほいたう　ナ。乞食。ものもらひをいふ。中國、四國にて、

ほいたけぼう　ナ。祝竹棒。出羽國の人の、年のはじめの祝にもちふるものにて、むかしは、女の腰をうちていはひけりとぞ。かゆづゑ、いさひきなどのなごりなるべし。



骨董集よりとりたるほいたけぼうの図

ほいと　ナ。乞食。ものもらひをいふ。九州などにて、

ほいなし　サ、ト。無本意。こゝろざしをとげずてのこりおほし。竹取（なげかせたてまつらぬほどまで侍らで、すぎさり侍る事、かへす〴〵ほいなくこそ侍れ）

ぼいん　ナ。母音。あいうえおのいつゝのこゑ。

ほいろ　ナ。焙爐。さげものなどのそこに、かみをはりたるもの。火のうへにて、茶などをかわかすなどにもちふ。

ほいろう　ナ。焙爐。ほいろに同じ。

ほう　ナ。頰。ほほに同じ。枕草二十六（えせぐさきは、つやめきねむれて、ようせずば、ほうけがみもしつべし）

ほう　ナ。鳳。鳥の名。ほうわうに同じ。

ほう　ナ。蛆。虫の名。酸漿の葉につく虫なり。頭は方にて、角あり。色は、あをぐろきもの、赤く黄ばみたるものあり。その虫はふるれば、あをくさき臭氣あり。

ぼう　ナ。棒。つゑのごとくにておほきなるもの。

ほうあて　ナ。頰當。ほほあてに同じ。

ほうい　ナ。布衣。ほいに同じ。平家一（ほういの者の候ふは、何者ぞ。らうぜきなり。とう〳〵まかりいでよと、六位をもつていはせられければ）

ほうい　ナ。布衣。武家の役の名。かりぎぬを着て、太刀をもちて、將軍家のかたはらにさぶらふもの。貞丈雜記

ほういう　ナ。朋友。とも。ともだち。ともがき。

ぼうえき　ナ。貿易。かうえきに同じ。

ぼうがしら　ナ。棒頭。かごかきのかしら。

ぼうがね　ナ。棒金。たるひをいふ。下野にて。

ほうかぶり　ナ。頰被。ほほかぶりに同じ。

ほうかん　ナ。幇間。たいこもち。をとこげいしや。

ほうきす　ワ。ヒトリ。カ。蜂起。はちのごとくおこりたつ。

ほうきふ　ナ。俸給。きふれう。てあてにたまふかね。

ほうぎよ　ナ。崩御。みかどのかくれさせたまふをいふ。

ほうきよう　ナ。豐凶。ほうねんときようねんと。

ほうく　ワ。ヒトリ。シニ。惚恍。ほくに同じ。宇拾十一（唐人は、のろそれて後には、いみじくほうけて、物もおぼえぬやうにてありければ、さびて、法師になりて）

ほうぐ　ナ。反故。かみくづ。文字などかきたる紙の、物の用にたゝずなりたるもの。狹衣三（そのまゝしとみゆるほうぐのもじどもおちちらぬを）

ぼうぐひ　ナ。棒杭。ぼうのさきのとがりたるもの。

ほうくわ　ナ。烽火。とぶひ。また、のろし。

ぼうけい　ナ。謀計。はかりごと。こしらへごと。

ほうけづく　サ。ヒトリ。四。法氣付。ほとけをねがふこゝろになる。ほとけくさくなる。ほうしめく。源氏帚木（吉祥天女をおもひかけんとすれば、ほうけづきくすしからんこそまたわびしかりぬべけれとて、みなわらひぬ）

ほうけほうけとして　ツ。惚々。ほうけたるごとくなりて。おろかになりて。宇拾十四（入道の君とて、ほうけくさしてさせる事なきものにて、としひら入道がもとと、山寺などにかよひてぞありける）

ほうけん　ナ。封建。天子の御領地の外を、幾個にわかちて、その地に、大名のたぐひの君をたつるをいふ。

ほうこ　ナ。封戸。へひとのところ見るべし。

ほうご　ナ。反故。ほうぐに同じ。徒然草（ふみのそぞなどぞ、むかしのほうごどもはいみじき）

ほうこう　ナ。奉公。おほやけにつかふるをいふ。また、從者、人にやとはれてつかふるをもいふ。落窪二十（ひたすら御とのゐして、奉公をいたしければ）

ほうこうしゆう　ナ。奉公衆。ごけにんに同じ。

ほうこうにん　ナ。奉公人。ほうこうするひと。

ぼうさき　ナ。棒先。わんせんなどをへつりとるをいふ。

ほうさく　ナ。豐作。いねなどのよくみのりたるをいふ。

ぼうさつ　ナ。謀殺。たくみまうけてころすをいふ。

ほうし　ナ。法師。ほとけのみちをときて、ひとをみちびくひと。拾遺（成房朝臣、法師にならんとて、いひむろにまかりて、京の家に、枕箱をとりにつかはしたり）

ほうし　ナ。奉仕。つかへたてまつるをいふ。

ほうし　ナ。土筆。つくしをいふ。美作などにて、

ほうじ　ナ。法事。ほとけのまつり。たままつり。落窪四（いとまうに、きら〳〵しき法事になんある）

ぼうし　ナ。眸子。ひとみ。めの、ものをみるところ。

ほうじう　ナ。梯子。はしごをいふ。伊勢、長島にて、

ほうしおんやうし　ナ。法師陰陽師。法師にて、陰陽師のわざをするもの。枕草二十（みぐるしきもの云々、法師陰陽師の紙冠してはらへしたる）宇拾十（こゝに、法師陰陽師、紙冠をきて、祓するをみつけて）

ほうしご　ナ。法師子。ほうしはしるさらず。また、法師のうませたる子をいふともいへり。枕草八（いやしげなるもの云々、撿非違使のはかま、伊豫簾のすぢふとき、人の子に、ほうしごのふとりたる）

ほうしごのいね　ナ。法師子稻。いねの異名にて、そでのこのたぐひなるべし。散木（田上に侍りけるころ、こもりがいねといふものを、もちひにしてとりいでて侍りけるな、まさの日、みそうづにして侍るをみてよめる、ほうしごの、いねとみし間は、もちぬれば、みそうづまでも、なりにけるかな）

ほうじにし　ナ。螺の一種。いたにしに同じ。

ほうしだら　ナ。法師原。ほうしども。ほうしのともがら。源氏夕顔（法師むらの、二三人ものがたりしつゝ）

ほうしまらびとのつかさ　ナ。玄蕃寮。治部省の被管。頭、助、允、屬などの官人ありて、佛寺の事、僧尼の事、また、外國人の事などを掌る。和名（玄蕃寮保宇之萬良比止乃豆加佐）

ほうしや　ナ。硼砂。石のたぐひ。あをみたるもの、すきとほれるものあり。常は、藥に用ひ、また、金をとかすにも用ふ。南蠻より來りしをもて、南蠻砂ともよぶ。

ほうしよ　ナ。奉書。紙の名。だんしのたぐひにて、しわなくして、うつくしくやはらかなるもの。

ぼうしよ　ナ。謀書。ひとをあざむくために、ひとのかけるかきもののごとくにせてこしらへたるをいふ。

ほうしよく　ナ。奉職。つかさにゐてつとむるをいふ。

ほうしよつむぎ　ナ。奉書紬。奉書のごときつむぎ。

ほうじろ　ナ。頰白。鳥の名。形、うぐひすよりもおほきく、全身、きびいろのあをみたる色にて、頭は、まろく、背はくろくして、斑なるところあり。また、尾は、すこしくろくして、端は、まろき毛あり。また、腹は赤くきばみて、胸のまさに、あかく斑なるところあり。

ほうず　ワ。カゲ。カ。焙。ほいろにてあぶる。

ほうず　ワ。ヒトリ。カ。崩。みかどかくれさせたまふ。

ほうせんくわ　ナ。鳳仙花。草の名。高さ二尺ばかり。葉は、柳の葉に似て、めぐりは、鋸齒のごとき刻あり。夏のころ、莖と枝との間ごとに、花をひらく。色は、あかきも、しろきもあり。また、黄ばみたるなどもあり。

ほうたい　ナ。繃帶。きずぐちなどをまきつゝむもめん。

ほうたいす　ワ。カゲ。カ。奉戴。いたゞく。かしこまる。

ほうたう　ナ。餺飩。食物の名。うどんのたぐひ。下文を見るべし。料理類記（ほうたうは、よき薯蕷をおろして、米の粉にあはせて、よくくれんぎにておしひらめて、粉をすこしかけて、刀にて、長さ二寸あまりにきりて、索餅のやうにほそくきりて、湯をわかし、ゆでてとりわけて、小豆のすりしるにてまゐらす）この假字、たゞしくは、はうたうなるべし。枕草二十（ほうち、ほうさうまゐらせんなどとゞむるを、いみじういそげば云々と、ことぞずくなにていづるは、いとたふときに）

ほうたう　ナ。朋黨。なかま。ともがらのくみあひ。

ぼうたん　ナ。牡丹。灌木の名。ぼたんに同じ。榮花玉（池のかたは、かうらんたかうして、そのもとに、さうび、ぼうたん、からなでしこ、らん、れんげなどの花どもうつさせたまへり）枕草七（露臺の前にうゑられたりけるぼうたんの、からめきをかしき事などのたまふ）

ぼうたん　ナ。牡丹。かさねの色目の名。表は白にて、裏の紅梅なるものをいふ。藻鹽草、胡粉抄　また、表は、うすずはう

にて、盛れ赤色なりともいふ段あり。（源注抄）

ほうたん　ナ。牡丹。女の一種の舞衣の名にいふもの。純白に、金銀の箔をもて、模様をおき、また、鏡をなして、あきらうらをつけたるもの。（貞丈雑記）

ほうだら　ナ。棒鱈。ほしだらをいふ。九州などにて。

ほうち　ナ。食物の名。ほうくうのたぐひなるべし。枕草二十（ほうち、ほうくうまらせんなどとかむるを）

ほうちぎり　ナ。棒断。ちぎりきに同じ。

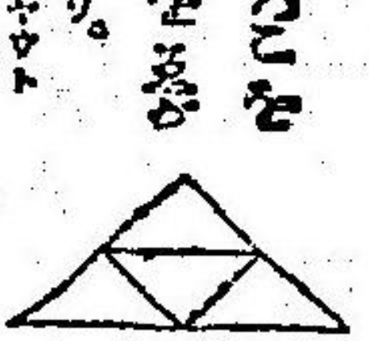
ほうちゆう　ナ。鳳味。硯。すずりの異名。（[illegible]）

ほうづき　ナ。酸漿。草の名。ほほづきに同じ。

ほうづきぢやうちん　ナ。酸漿提灯。あかくそめたるちひさきちやうちんにて、おきうらねてともすもの。

ほうづゑ　ナ。頰杖。つらづゑに同じ。

ほうでううろこ　ナ。北條鱗。紋所の名。うろこをみつかさねして、みつならべたるさまをなせるものにて、北條氏の家の紋なり。



ほうでうむし　ナ。北條虫。けむしをいふ。京都にて。

ほうてふり　ナ。棒手振。ふりうりにありくあきびと。

ほうと　ツ。物をおとすおとにいふ。枕草三（くるまやどりにいれて、ながえ、ほうとうちおろすを）

ほうど　ナ。封土。だいみやうなどのおさむるくに。

ほうどく　ナ。棒讀。ぼうよみに同じ。

ほうとる　ナ。酢。食物の名。むたに同じ。

ほうなふ　ナ。奉納。たてまつるをいふ。神佛にいふ詞。

ほうにふる　リ。カナロ。棒振。いたづらごとにてうしなふ。

ほうねん　ナ。豐年。いねなどのよくみのりたるとし。

ほうばい　ナ。朋輩。そうぞい。ともだち。あそびともがき。

ほうばな　ナ。棒鼻。みちさきづれ。さきゆくともづれ。

ほうはん　ナ。謀叛。むほんといふに同じ。

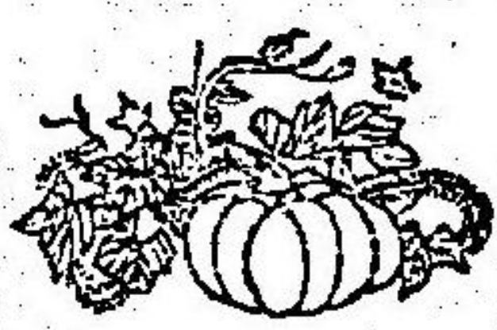
ほうはん　ナ。謀判。ひとをあざむくために、ひとのおしたるはんのごとくにせてこしらへたるをいふ。

ほうばる　ワ。カケ。四。頰張。ほほばるに同じ。

ほうぶく　ナ。捧腹。をかしさに、はらをかかふるをいふ。

ほうぶく　ナ。法服。ほうしのころも。源若菜（御念誦のおざり、三人さぶらひて、法服などたてまつるほど）

ほうぶら　ナ。南瓜。瓜の名。葉は、からあふひに似ておほきく、茎は、内うつろにて、節あり。また、葉にも、茎にも、ほそやかなる毛ありて、刺のごとし。夏のすゑ、黄色のおほきなる花さきて、瓜をむすぶ。瓜のおほきさ、西瓜のごとくにて、ひらたくして、皮に、ちひさき皺と、縦の筋とあり。この瓜は、正親町天皇の頃、南蠻よりきたりしといふ。



ほうふり　ナ。棒振。孑孑。虫の名。夏のころ、溜水にいでくる虫にて、長さ二三分ばかり、色うすぐろし。この虫、水中にあるときは、或は浮び、或はしづみて、縦横に躍りありきて、後には、羽化して、蚊となりてとぶ。

ほうふりむし　ナ。棒振蟲。虫の名。ぼうふりに同じ。

ほうへいし　ナ。奉幣使。みてぐらをさゝぐるちよくし。

ほうぺた　ナ。頰邊。ほほぺたに同じ。

ほうべに　ナ。頰紅。ほほべにに同じ。

ほうぼう　ナ。魚の名。形、かながしらに似て、おほきくして、口のほとりに、かたき鬚あり。また、尾にも、鰭にも、五色のひかりありて、頗きそめてこまやかなり。

ほうぼうと　ツ。物をおとすおと。枕草二十（おほきなる松の木などの、二三尺むりまでまろなるを、五六ばうくとなげいれなどするこそいみじけれ）

ほうぼうと　ツ。茫々。くさのおひしげれるさまをいふ。

ほうみやう　ナ。法名。かいみやう。にふだうしたるとなへ。

ほうもち　ナ。捧物。さゝげもの。佛などにたてまつるものにて、金銀などにて、さまぐにつくりなしたるもの。源椎本（御子たちも、さまぐのほうもちさゝげてめぐりたまふに、大将殿の御やうになど）

ほうもん　ナ。法文。ほとけのみちをときたるふみ。狭衣二（師にあるぞといふ法文な、僧のかぎりに、とし経をへぐりぬるあるしはきならひて）

ほうゆがむ　ワ。ヒトリ。四。頰囁。ほほゆがむに同じ。枕草二十（みぐるしきもの云々、えせざうちの、つやめきねそれて、ようせずはほうゆがみもしつべし）

ほうよみ　ナ。棒讀。からぶみをよむに、かへりてんなどにまかせず、もじそのままによみくだすをいふ。

ほうらい　ナ。蓬萊。よもぎがしま。せんにんのすむところ。

竹取（この山の名は、なにとか申すととふ、女こたへていはく、これ、蓬萊の山なりとこたふ）

ほうらい　ナ。蓬萊。ほうらいに同じ。

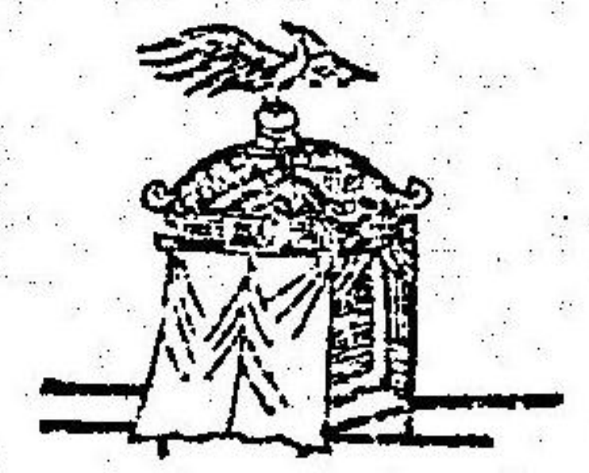
ほうらいかざり　ナ。蓬萊飾。としのはじめのいはひに、もちひるものにて、三方の臺に、米をのせ、そのうへに、のしあはび、かちぐり、ひろめなどをつみたるもの。

ほうらいさん　ナ。蓬萊山。ほうらいに同じ。

ほうらん　ナ。蜂蘭。草の名。葉まつくして、蕾なく、夏のころ、莖のあひだに、蘭に似たるちひさき花さく。

ほうる　ナ。菓子の名。かすていらのたぐひ。太閤記二（下戸には、かすていら、ぼうる、かるめいら、あるへいたう、こんぺいたうなどをもてなし）

ほうれん　ナ。鳳輦。みかどののりたまふてぐるまにて、屋形のうへに、黄金の鳳凰をつけたるもの。太平記二（この御代にいたりて、たえたるをつぎ、すたれたるをおこして、鳳輦をめぐらしたまひしかば、紫禁、くせんぎのたなごころをわたせ）

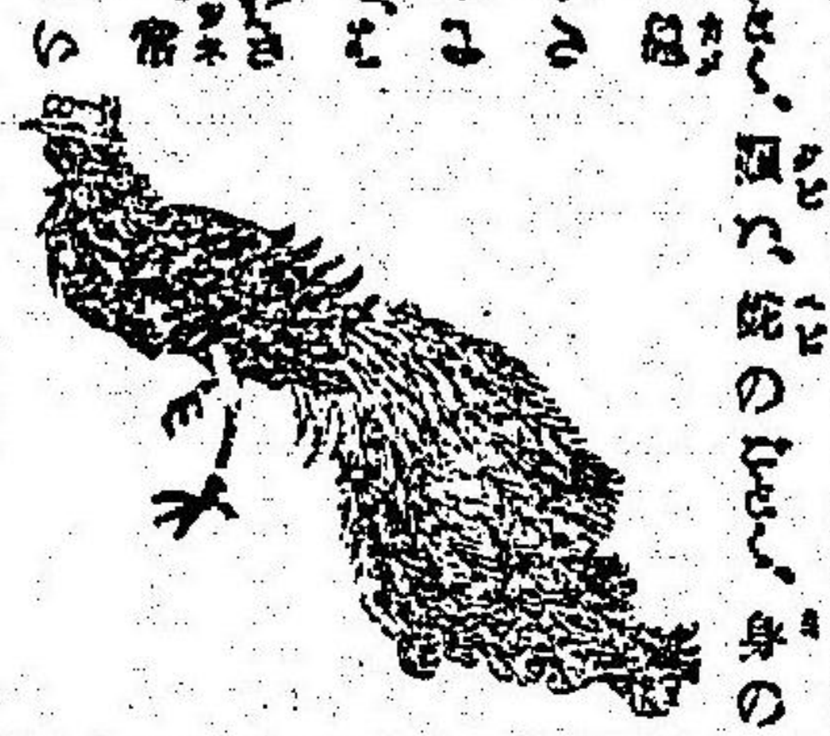


ほうろ　ナ。焙爐。ほいろに同じ。

ほうろぎ　ナ。餝。みるひをいふ。常陸などにて。

ほうろみそ　ナ。法論味噌。ほろみそに同じ。七一職人歌合（ほうろみそうり。うとくのみならのみやこの、ほうろみそ、ほろくとこそ、ねいなられけれ）

ほうわう　ナ。鳳凰。鳥の名。前は鴻のごとく、後は麒麟のごとく、喙は雞のごとく、頸は蛇のごとく、身の文は龍のごとく、背は龜のごとく、翅は扇をのべたるごとくにて、桐の木にすみ、竹の實をくひて、生えざる草をふまず、生ける物をそこなはず、また、常にたやすくいでずといふ。されど、かゝるあやしきとりは、まことはありやなしや。和名（鳳凰、爾雅云、雄曰鳳音奉、雌曰凰音皇、羽蟲之長也）



ほえ　ナ。贄。ほぞをいふ。加賀などにて。

ほえづら　ナ。吠面。なきがほ。また、なかんとするけしき。

ほえる　ワ。ガ。ヒトリ。シ。吠。吼。ほゆを見るべし。

ほか　ナ。外。き。よそ。ことなること。万十一（荒磯こえ、外ゆく波の、ほかごころ、われはおもはじ、こひてしぬとも）古今（ひとをしの、なくやまざとの、ゆふされは、風よりほかに、とふひともなし）

ほかありき　ナ。外行。ほかへいでてありくをいふ。源須磨（ほどくるにつけつゝ、なさけなみえさまふに、御やうさまなくて、ほかありきもしたまはず）

ほかう　ナ。歩行。あゆみ。ありき。あしどり。

ほかげ　ナ。火影。ひのかげ。また、ともしびにてみゆるもののかげ。夫木（夜のほどは、かりもこそすれ、あくるまで、ほかげは花を、みるよしもがな）源帚木（ひもなどもうちすてて、そひふしたまへる御ほかげ、いとめでたく、女にてみたてまつらまほし）

ほかげすがた　ナ。火影姿。ほかげにみゆるすがた。空穂嵯峨院（右大辨云々、ほかげすがた、おもひいでに）

ほかけぶね　ナ。帆掛船。ほをかけてはしるふね。

ほかごころ　ナ。外心。ほかのこころ。万十一（荒磯こえ、ほかゆく波の、外心、われはおもはじ、こひてしぬとも）

ほかざま　ナ。外様。ほかのかた。竹取（心さかしきものの、ねんじて射んとすれども、ほかざまへいきければ）

ほかし　ナ。暈。染色の名。にほひ。本のかたは、こくそめて、末のかたへと、あはいにうすくそめたるもの。

ほかす　ワ。カケ。カ。放。すつるをいふ。關西にて。

ほかす　ワ。カケ。四。暈。ぼかしにしてそめるをいふ。

ほかせ　ナ。帆風。おひかぜ。いきほひ。著聞六（戸部氏こそ、本体にて侍りしに、近代、大神氏に、ほかぜをとられて、かやうに、正資にもこそつたへられけるにこそ）

ほかそう　ナ。放下僧。ほうかそうに同じ。

ほかばら　ナ。外腹。ほかのはら。むかひめならぬひとのはら。栄花さまざま（ほかばらの男君たち、なかなく、いとさまぐるしくなりたてておもしけり）

ほかひ　ナ。祝。いはひ。よろこび。ことほぎ。ことぶき。宮内省式（大殿祭、此云於保登能保加比）

ほかひびと　ナ。乞兒。かたゐ。ものもらひ。和名（乞兒 楊氏漢語

紗云、乞求兒、保加比比止、乞救、乞索兒（即乞兒是也）和名、加多井）

ほかふ　ワ、カ、ケ、四。祝。ほぐ。いはふ。字鏡（嗣祢宜也、繼也、保加不）

ほかほか　ナ。外々。ほか。ところどころ。こゝかしこ。枕草十（さるべきもの云々、くらうなりて、まだ、火もともさねほどに、ほか〳〵より、人の來あつまりたる）

ほかほかと　ツ。暖かなるさまをいふことば。

ほがみ　ナ。小腹。をたをちに同じ。

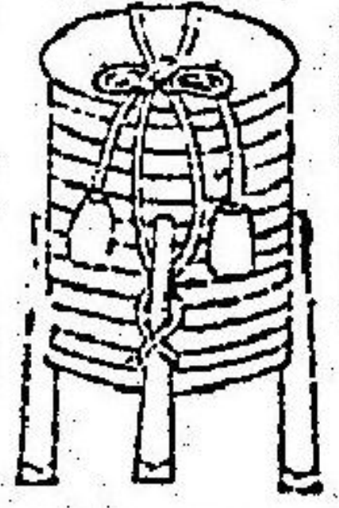
ほがらかす　ワ、カ、ケ、四。朗。豁。ほがらかになす。晴心

ほがらかなり　サ。朗。豁。ほがらなり。それやかなり。うちひらけたり。ゆらかなり。遊仙窟（備開之門庭）

ほがらかに　ツ。朗。豁。あきらかに。それやかに。うちひらけて。ゆらゝに。紫式部集（うちしのび、なげきあかせば、しのゝめの、ほがらかにだに、夢をみぬ哉）蜻蛉（雁なならせてなどこそされば、いとほがらかにうちそらら）

ほがらほがらと　ツ。朗々。ほがらかに。古今（篠目の、ほがらほがらと、あけゆけば、おのが衣々、なるぞ悲しき）

ほかる　ワ、カ、ケ、四。投。なげるをいふ。美濃などにて。



ほかゐ　ナ。行器。もちひ、せきはんなどの、くひものをいれて、ひとのにおくり、または、ほかはもちありきなどするもの。栄花上吹（そのこは、ゆさんおほびさるたいはするほかゐもさせて、おものう〳〵）

ほき　ナ。崖。嶮。やまぎしの、たにはさしかゝりたるけはしきところ。夫木廿一（あやふきは、ひとめそつねは、よかれける、岩の陰ふむ、ほきのかけみち）

ほき　ナ。簿記。ちやうめんにしるすをいふ。また、西洋にてする勘定のきまりにならひ、しるものをいふ。

ほきうた　ナ。祝歌。いはひのこころをよみたるうた。

ほきくるほす　ワ、カ、ケ、四。祝廻。ほぎもとほすに同じ。

ほきごと　ナ。祝詞。いはひのこころをのぶることば。

ほきたり　ワ、ビ、ト、リ、カ。惚けてあり。源氏（この今の御むすめの事を、殿の人もゆるさずかるめいひ、世にもほきたる事とそしりいふをきゝたまふに）

ほきぢ　ナ。崖陰路。ほきのみち。山家集（吉野山、ほきぢづたひに、尋ねいりて、花みし春は、ひとむかしかも）

ほきなげる　ワ、カ、ケ、シ、一。投。なげすつるをいふ。越前にて。

ほきほふ　ナ。簿記法。ほきをするはふ。

ほきび　ナ。蜀黍。たうきびをいふ。加賀にて。

ほきほきと　ツ。脆く。もろくなるさまにいふことば。

ほきみち　ナ。崖陰路。ほきぢに同じ。

ほきもとほす　ワ、カ、サ、四。祝廻。さまぐにいはふをいふ。古事記（この御酒は、わが御酒ならず、酒の神、とこよにいます、いはたゝす、すくな御神の、かんほぎ、本岐玖流本斯、とよほぎ、本岐母登本斯、まつりこし御酒ぞ、あさずをせさゝ）

ほく　ワ、ヒ、ト、リ、シ、二。惚。恍。おろかになる。ほれぐしくなる。河海（かれよりも、年のかずつもり、ほけさりける人のひがごとにや）榮花玉飾（内侍のすけは、ひがにほけこ、ひるさへねぶりがちにさぶらひたまふ）

ほぐ　ナ。反故。ほうぐに同じ。更科（物につきてとゞまりたるをみれば、ほぐなり。とりあげてみれば、黄なる紙にして、こくうるはしくかゝれたり）

ほぐ　ワ、カ、ケ、四。祝。賀。いはふ。ことほぐ。万十九（青柳の、ほつえよぢとり、かづらくは、君が宿にし、千年保久とぞ）

ほぐ　サ、カ、ケ、四。穿。ほる。うがつ。あなをあく。

ほく　ナ。木。き。また、木のまがりくねりたるもの。

ほく　ナ。僕。しもべ。しもをとこ。

ほく　代。僕。われ。おのれ。[illegible]

ほく　ワ、ヒ、ト、リ、シ、二。惚。恍。ほく。ほれぐしくなる。

ほくかいだう　ナ。北海道。きたの海邊にそひたる諸國にて、渡島、後志、膽振、石狩、天鹽、日高、十勝、釧路、根室、北見、千島の十一箇國をいふ。

ほくきよく　ナ。北極。せかいの、きたのはてをいふ。

ほくきよくせい　ナ。北極星。星の名。そらのきたのはてにあるほしにて、つねに、そのところをかへぬもの。

ほくこく　ナ。北國。きたのくに。きたのかたのくに。

ほくし　ナ。火串。たいまつをはさみたるくし。照射などにもちふるものなり。月清集（ともしする、そやまがすそやま、里とほみ、ほぐしもつきぬ、あけぬこの夜は）

ほくしん　ナ。北辰。星の名。ほくきよくせいに同じ。

ほぐす　ワ、カ、サ、四。解。とく。ほどく。太閤記四（末森の城の云々、城を巻きほぐし、頓おつとりくみえし所に）

ほくそ　ナ。燼。らふそくのもえがら。また、ひうちにてうちいだすひをうつしつくるもの。新六（うちいだす、ひうちのいしの、ほくそなみ、なにもつかぬ、きが身なりけり）字鏡（燭餘、保久曾、又保須比）

ほくそゑらふ　ワ、ヒ、ト、リ、四。怪笑。うれしくてゑらふ。盛衰廿二（とあるくも、御むほんにくみしたてまつるべしとて、ほくそゑらひていでられけり）

ほくたう　ナ。木刀。きだち。木にてつくりたるかたな。

ほくち　ナ。火口。ほくそ。ひうちのひをつくるもの。

ほくちく　ナ。牧畜。まきにて、牛馬などをかふをいふ。

ほくてう　ナ。北朝。なんてうを見るべし。

ほくと　ナ。北斗。星の名。天の北極のほとりにある七星にて、陰陽事などには、そのむきを忌む事あり。

ほくどう　ナ。牧童。まきのうしかひに同じ。

ほぐみ　ナ。穂組。かりたるいねの、うちゝがへつみたるをいふとぞ。新六（秋の田の、かりほのほぐみ、いくつらは、つみおきるまで、にぎはひにけり）方丈記（つばなぬき、いはなしをとる云々、或は、すそわの田ゐにいりて、落穂をひろひて、ほぐみをつくる）

ほくめん　ナ。北面。ほくめんのぶしに同じ。

ほくめんのさむらひ　ナ。北面侍。ほくめんのぶしに同じ。

ほくめんのぶし　ナ。北面武士。ほくめんのさむらひ。院の御所をまもる武士にて、上北面、外北面などあり。

ほくら　ナ。寶倉。神殿。かんだからをおさむるくら。また、かみのおましますところ。拾遺（稲荷のほくらに、女の手にてかきつけてはべりける）和名（寶倉、保久良、一云、神殿）垂仁紀（神庫、此云保玖羅）

ほくり　ナ。草の名。あかがりぐさに同じ。

ほくり　ナ。草の名。もくりをいふ。畿内にて。

ほくり　ナ。木履。あしだをいふ。西國にて。

ほぐれる　ワ、ヒ、ト、リ、シ、一。解。とけほどく。とけみだる。

ほくろ　ナ。草の名。もくりをいふ。播磨などにて。

ほくろ　ナ。黒子。ははくそに同じ。

ほくろくだう　ナ。北陸道。北の方にある諸國にて、若狹、越前、加賀、能登、越中、越後、佐渡の七箇國をいふ。

ほくゑつ　ナ。北越。こしのくに。越前、越中、越後をいふ。

ほけ　ナ。本家。ほんけ。もとのいへ。うまれたるいへ。空穂藤原（いとおほくたてたるよつが中は、あるじ、おもしろきを、ほけの御料につくらせたまふ）

ほけ　ナ。火氣。ひのけ。あつきいきほひ。

ほけ　ナ。法華。ほけきやう。また、ほつけしゆう。

ほけ　ナ。木瓜。木の名。もけに同じ。

ほけきやう　ナ。法華經。佛經の名。のりのそな。天台宗また法華宗にて、殊にもてはやすものなり。

ほけきやうざんまい　ナ。法華三昧。よろづの思をやめて、法華經をよむをいふ。源氏（暁方になりにければ、法華三昧おこなふ堂の懺法の聲、やまおろしにつきてきこえくるいとたふとく、瀧の音にひゞきあひたり）

ほけしる　ワ、ヒ、ト、リ、シ、二。惚痴。ほけぐしくなる。源氏柱（もとの北の方は、月日へだゝるまゝに、あさましと、ものを思ひしづみ、いよ〳〵ほけしれてものしたまふ）

ほけた　ナ。帆桁。ほばしらのうへにさしわたして、ほをかけてはるもの。和名（帆竿、保偈多）

ほけづく　ワ、ヒ、ト、リ、四。法氣付。ほうけづくに同じ。須松二（かくながらも、あさからぬ御けしきにてさるあらばとおぼして、ほけづきもてなして、髪髭うちちらけ）

ほけびと　ナ。惚人。ほけたるひと。源氏若菜（かの大尼君も、今は、こよなきほけびとにてぞありけんかし）

ほけほけし　サ、フ。惚々。いたくほけたり。いたくおろかになりたり。空穂上欄（院うち笑ませたまひて云々、さまぐは、いにしへのおそれなる事も、いさゝかほけ〳〵しからずおほせらる）狭衣三（いさや、今は、いとほけ〳〵しうなりたまひにける人なり、たのみては、いかゞなど、心ひとつならぬやうに侍るを、きこえさせんとてなん）

ほけん　ナ。保險。損をつぐのふことをうけおふをいふ。

ほけんだぎやう　ナ。保檢斷奉行。武家の役の名。市中を巡察して、非違を檢し、是非を判斷するもの。

ほけやかに　ツ。朗かに。ほのかに。秋夜長物語（寢亂髪のむらくとかゝりたるをつれより、眉のにほひほけやかに、ほのかなる顔のおもかげ、色ふかくみえけるさま）

ほける　ワ、ヒ、ト、リ、四。吠。ふけるをいふ。飛驒にて。志州

ほげる　ワ、ヒ、ト、リ、シ、一。開。あなのあくをいふ。九州にて。

ほげる　ワ。ヒトリ。ジ二。惚。恍。ほく。ほれぐしくなる。

ほこ　ナ。矛。戟。兵器の名。つくるもちふるもの。鉾のごとくまてふときながきものゝ、刀のごとき刃をすげたるもの。神楽歌（よもやまの、人のまもりに、する保古を、神の御まへに、いはひたてつる）和名（鉾保古）

ほこ　ナ。鉾。神楽歌の曲の名。神楽歌（この保古は、いづこのほこぞ、天にます、とよをか姫の、宮の御ほこぞ）

ほこ　ナ。架。たなほこ。たなやのたなをときならするほこぎ。続拾極選三百首（ちぎりても、こゝろゆるさじ、むしごろの、ほこのきづなの、たえんきやもとて）

ほご　ナ。反故。ほうぐに同じ。拾玉（あるゝなききか、あなむろやの、ためし哉、ほごやく灰の、風にふられて）

ほこぎ　ナ。矛木。ほこのごとくたてるき。かうらんの、つきいでたるもしら。たなやの、たなをときならするき。狭衣世継六（たぐひなき人はおそしき云々、おぼろさ、やさをきさへならびなくしたまひければ、そりそりる香まきて、勾欄のほこぎの上あゆみたまふ）

ほこぎぬ　ナ。架衣。ほこたれに同じ。ことぞよせ

ほこさき　ナ。鋒。ほこのさきのとがりたるところ。

ほごす　リ。カケ。四。解。ほぐす。ときほとく。

ほこすぎ　ナ。矛杉。すぎの、すぐにたちたるもの。

ほこだち　ナ。保。円の左右の木の、矛のごとくたちたるもの。和名（根和名保古多知、辨色立成云戸頬　門両旁木也）

ほこだて　ナ。拔。ほこだちに同じ。

ほこだれ　ナ。架垂。ほこぎぬ。たなほこにたれて、たなはきするきぬ。鷹飼松鶴新記（ほこだれのなきをつなぐは、足緒なくみて、おとしてつなぐなり）

ほこどり　ナ。弄槍。ほこを、さまぐにとりなしてもてあそぶたはぶれ。和名（弄槍和名保古斗利）

ほこのうを　ナ。魚の名。ほうぐをいふ。靡靡にて、

ほこで　ナ。矛羽。たかの、とりをおひゆくときのつきをいふとぞ。定家卿藤三百首（をのへこす、鳥はおくるゝ、むしごろや、ほこでつらひて、おちはゆくらん）

ほこゆけ　ナ。弄鎗。ほこをつかふをいふなるべし。古事記（矛由氣矢刺而）崇神紀（八廻弄槍八廻撃刀）

ほこら　ナ。祠。ほくら。やしろ。かみをまつりたるや。

ほこらかす　ワ。カケ。四。誇。ほこらしむ。おもひのまゝにふるまはしむ。辨内侍日記（御鳥合は云々、あのとりのいしきおほあるが、毛色うつくしきをたまはりて、あきつばねはほこらかしておきたるを）

ほこらし　サ。プ。可誇。ほこるべし。ほこるべくあり。古今（らふのなきけも、おもほえず、ひとつこゝろぞ、ほこらしき）源明石（空のけしき、なごりなくすみわたりて、あさりする海士ほこらしげなり）

ほこり　ナ。埃。ちりの、けぶりのごとくまでたつもの。

ほこりかなり　サ。詫。ほこらかなり。枕草ナ（ほこりかに、うちほこらひ、たゞのかちよりはほこりかなり）

ほこりかに　ツ。誇。ほこりかほに。源蜻蛉（いとゞほこりかにうちとけて、さらひなどうちそほるれど）

ほこりかほ　ナ。誇顔。ほこりたるおもゝちなるをいふ。

ほこる　ワ。ヒトリ。四。誇。矜。こゝろざしをえたるさまをあらはして、おもひのまゝにふるまふ。また、いきほひてさかりなるをいふ。万廿（こゝろには、おもひ保許里て、ゑまひつゝ、わたるあひだに）土佐（風よければ、かぢとりいたくほこりて、船に、帆かけなどよろこぶ）宇拾廿（炭中しける夜云々、夜ふけけるまゝはねぶたがりて、中は、さゝくほこりたる女房のいひけるやう）

ほころばかす　ワ。カケ。四。綻。ほころばしむ。盛衰六（志きりは、衣の領をひきちがへしたまひければ、ひきほころばして、いとゞきらめきてみえけり）

ほころばす　ワ。カケ。四。綻。ほころばしむ。源若菜（えびぞめの紬を、にむるにひきほころばしたるに）

ほころび　ナ。綻。ほころびたるところ。源澪標（御几帳のほころびよりみたまへば、こゝろもとなき程のほのげに、御くし、いとおかしげにそぎて）

ほころびる　ワ。ヒトリ。カニ。綻。ほころぶを見るべし。

ほころふ　ワ。ヒトリ。四。誇。矜。ほこるに同じ。万五（あれをおきて、人はあらじと、誇呂倍ど、さむくしあれば）

ほころぶ　ワ。ヒトリ。カニ。綻。ぬひめとけて、くちひらく。とぢたるところあらはになる。この語は、地方によりては、ほころびると上一段にいふ。金葉（さゝがにの、絲の

をちめや、わざならん、ほころびさゐる、藤袴かな）拾遺（ふく風は、あらそひかねて、あしびきの、山のさくらは、ほころびにけり）源紅葉賀（つゝむめる、名やもりいでん、ひきかはし、かくほころぶる、中の衣に）

ほさ　ナ。輔佐。うしろみをしてたすくるをいふ。

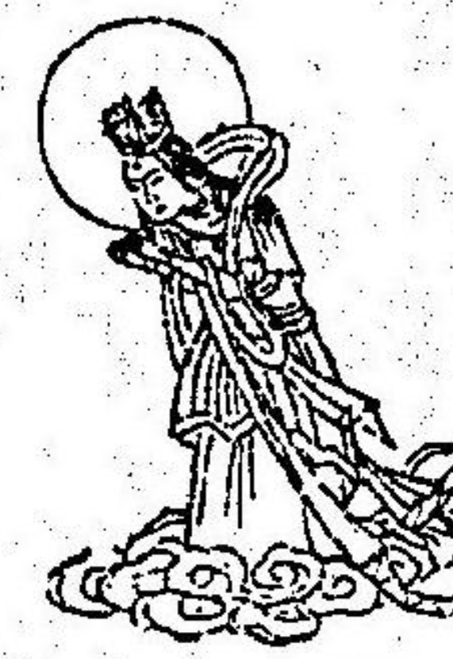
ほざい　ナ。補劑。おぎなひにもちふるくすり。

ほさか　ナ。穂坂。地の名。甲斐にあり。堀川百首（逢坂の、関路にけふや、秋田の、穂坂の駒を、つぐくさひく）

ほさき　ナ。穂先。ほのさき。夫木廿（露おつる、草田のほさき、うちなびき、朝ふく風は、そでぞさむけき）

ほさく　ワ。ヒトリ。四。祝。ほぐ。いはふ。ほぎごとす。

ぼさち　ナ。菩薩。ほとけにつぐほとけのごときもの。枕草十（僧都の君、あかいろのうすものの御衣、むらさきの袈裟、いとうすきいろの御ぞども、さしぬき着たまひて、ぼさちの御様にて、女房にまじりありきたまふも、いとおかし）



ぼさちかう　ナ。菩薩講。ほとけをがみ。宇拾四（雲林院の菩提講に、大宮をのぼりにまゐりける程に）

ぼさつ　ナ。菩薩。ぼさちを見るべし。

ぼさつ　ナ。菩薩。穀の名。こめをいふ。遠江などにて、

ぼさつかう　ナ。菩薩講。ぼさちかうに同じ。

ぼさん　ナ。墓参。墓をおがみにゆくをいふ。

ほざを　ナ。帆竿。ほばしらに同じ。

ほし　ナ。星。それさるよ、おほぞらにかゞやく、まろくちひさきひかりものの、あまたみゆるもの。伊勢（漁火を、ほくみゆるは云々、はるゝ夜の、ほしか河邊の、螢かも、わがすむかたの、あまのたく火か）和名（星和名保之）

ほし　ナ。星明。神楽歌の曲の名。あかぼしに同じ。拾玉（くものうへの、をみのころもは、志もさえて、ほしうたふなり、あけがたのそら）

ほし　ナ。點。てん。まろくちひさきかたちの志るし。

ほし　サ。プ。欲。のぞまし。ねがはし。この語は、今は、ほしいと、いをそへていふ。催馬楽（うりつくり、これな保之といふ、いかにせん、なよや）蔣溪二（いまめかしく、このもしき事もほしからず、世のおぼえもほしからず）

ほしあかり　ナ。星明。ほしのあかり。ほしのひかり。

ほしあひ　ナ。星合。ひこぼしとたなばたといであふをいふ。蜻蛉（天の川、なぬかをちぎる、こゝろあらば、ほしあひばかりの、かげをみよとや）

ほしい　サ。欲。のぞまし。ほしを見るべし。

ほしいひ　ナ。糒。かれいひ。いひのほしたるもの。空穂藤原（粉など、袋にはいれてもさせて、いづくとも、ひとはわのくまでて、ほしいひ、たゞすこし、あぶくろにいれて、いとほのびておそします）和名（糒和名保之以比　乾飯也）

ほしいまゝなり　サ。擅。恣。ほしとおもふまゝなり。

ほしいまゝに　ツ。擅。恣。ほしとおもふまゝに。盛衰十（是非は迷ふが故に、猶、いまだ、志をほしいまゝにせず）

ほしいさし　ナ。糒。いひのほしくさしたるもの。

ほしいを　ナ。干魚。うをのほしたるもの。おほくは、志らぼしにしたるをいふ。和名（脯保之以乎、見本朝式　乾魚也）

ほしう　ナ。暮秋。あきのくれ。あきのをはり。

ほしうたふ　ワ。ヒトリ。四。歌星。神楽歌の明星といふ曲をうたふ。拾玉（くものうへの、なみのころもは、志もさえて、ほしうたふなり、あけがたのそら）

ほしうり　ナ。干瓜。うりのほしたるもの。宇拾七（まろきほしうり、三寸許にきりて、十ばかりもりたり）

ほしか　ナ。干鰯。いわしのほしたるもの。

ほしがき　ナ。干柿。あまぼしに同じ。

ほしかたむ　ワ。カケ。シ二。佐固。ほしてかたくす。

ほしがる　ワ。カケ。四。欲。ほしくおもふ。ものをせんとねがふ。宇拾七（よろづのひとの、ほしがりて、あたひもかぎらずかはんと申しつるを）

ほしかてかす　ワ。カケ。四。乾。ほすといふに同じ。

ほしきまゝなり　サ。擅。ほしとおもふまゝなり。

ほしきまゝに　ツ。擅。ほしとおもふまゝに。徒然草（たくみにしてほしきまゝなるは、失のもとなり）

ほしくさ　ナ。穀精草。草の名。そせぐさに同じ。

ほじくる　サ。カケ。四。穿。うがつ。くじる。ほじる。

ほしこ　ナ。干海鼠。いりこに同じ。

ほじし　ナ。乾肉。ほしたるにく。和名（脯和名保之之　乾肉也）

ほしだいこん　ナ。干大根。だいこんのほしたるもの。

ほしだら　ナ。干鱈。たらのほしたるもの。

ほしづきのうま　ナ。落星馬。さしげの、ほしのごとくまだらつきたるうま。和名（落星馬保之豆岐乃宇萬）

ほしづきよ　ナ。星月夜。ほしの、かゞやきて、つきよのごとくみゆるをいふ。永久百首（われひとり、かまくらやまを、こえくれて、星月夜こそ、うれしかりけれ）

ほしづきよ　ナ。星月夜。かまくらにかけていふ。これ、ほしづきよのかげといふ、かのくらにかくるなるべし。

ほしどり　ナ。干鳥。とりのほしたるもの。空穂國譲（ひとりのほしどり、これらをいけて、をどりにてとらで、おほくのとりのできぬべし）和名（鵻鵮保之止利、俗用干鳥二字）

ほしなつめ　ナ。干棗。なつめのほしたるもの。空穂藏開（むすび袋に、しなのなし、ほしなつめなどいれて）

ほしなまこ　ナ。干海鼠。いりこに同じ。

ほしのくらゐ　ナ。星位。さんさいのくらゐ。頼政集（ことりや、くもゐにのぼる、君なれで、ほしのくらゐも、まさるなりけり）新古今（ほしのくらゐ、まつりごとをたすけしちぎりをわすれずして）

ほしのたま　ナ。星玉。おきそうし。まさ、おきそうしをそなたて、ほしのごとくあがきなしたるもの。

ほしのでいり　ナ。星出入。冬の初にふく、北東の風をいふ。伊豆の船人、志摩の鳥羽の船人の詞なり。

ほしのはやし　ナ。星林。ほしの、あまたむらがりてみゆるところ。万七（そらのうみに、くものなみたち、つきのふね、ほしのはやしに、こぎかくるみゆ）

ほしのまぎれ　ナ。星紛。ほしあかりのおぼつかなきまぎれ。拾遺員外（あけぬとて、とまりこぎいづる、ともぶねの、ほしのまぎれに、霧ぞかゝる）

ほしのやどり　ナ。星宿。ほしの、くらゐをさだめて、そらにあるをいふ。また、くものうへびとのゐつどへるをいふ。新千（天の原、ふりさけみれば、たなばたの、星のやどりに、霧たちわたる）拾遺員外（春くれば、いとゞ光を、そふるかな、雲居の庭も、星のやどりも）

ほしのり　ナ。乾海苔。あまのりのほしたるもの。

ほしはじかみ　ナ。乾薑。かんきやう。はじかみのほしたるもの。和名（乾薑、一名定薑、和名、保之波之加美）

ほしひ　ナ。糒。ほしいひ。字鏡（餱、糇也、食也、加禮伊比、又保志比）

ぼしふ　ナ。募集。つのりてあつむるをいふ。

ほしまだら　ナ。星斑。さしげの、ほしのごとくまだらにつきたるうし。和名（牸今按、此間云、保之萬太良 牛色駁如星也）

ほしまつり　ナ。星祭。ねぞうを見るべし。

ほしまよふ　ワ。ヒトリ。四。星迷。さまざくのほし、たゞよひかくしてはいづるをいふとぞ。中務集（星まよふ、秋をあやとて、棚機の、やすき空なき、雲居なりけり）

ほしみぐさ　ナ。星見草。草の名。きくの異名。藻鹽草

ほしみせ　ナ。露店。みちべさにいだしたるみせ。

ほしむ　ワ。カナ。四。欲。ほしがる。ほしくおもふ。

ほしめがね　ナ。星眼鏡。てんもんをみるとほめがね。

ほしもの　ナ。干物。ひにほしたるもの。

ほしやく　ナ。保釋。裁判所にて、罪人などの、罪のいまださだまらぬほど、保證金をあづけて、しばらく、その家にかへりゐる事をゆるすをいふ。

ぼしゆん　ナ。暮春。はるのくれ。はるのをはり。

ほじよ　ナ。補助。たすけおぎなふをいふ。

ほしよう　ナ。保證。うけあひ。ひきうけ。

ほしようきん　ナ。保證金。ほしようにいだすかね。

ほしようにん　ナ。保證人。うけにん。うけあひのひと。

ほじる　ワ。カケ。四。穿。うがつ。くじる。ほじくる。

ほしわらび　ナ。干蕨。わらびのほしたるもの。

ほしをいただく　ワ。ヒトリ。四。戴星。ひねもすつとめて、よるにいたる。詞花（年をへて、ほしをいたゞく、くろかみの、ひとよりさきに、なりにけるかな）

ほしをつらぬ　ワ。ヒトリ。シニ。列星。くもゐのにはにつらなる。きんちゆうに、そでをつらぬ。風雅（たちそむる、春の光と、みゆるかな、星をつらぬる、雲のうへびと）

ほしをとなふ　ワ。ヒトリ。シニ。唱星。元日、四方拜といふ事ありて、そのとき、天子、よろづの星の名を唱へさせたまふ事あるをいふとぞ。年中行事歌合（すべらぎの、星をとなふる、雲の上は、光のどけき、春は來にけり）

ほす　ワ。カケ。四。干。ひにあてゝかわかす。あぶるやうにしてかわかす。万九（朝霧に、ぬれにしころも、不干して、ひとりや君が、山路こゆらん）空穂初秋（その日、御くし、すこしほしぬてほし居たまへるなり）

ほす　ワ。カケ。四。干。みづのひるやうになす。

ほすせり　ナ。火須勢理命。にゝぎの尊の御子。

ほすひ　ナ。觽。ほくそに同じ。字鏡（觽、鉤餘、保久曽、又保須比）

ほすほる　ナ。燐。おにび。きつねび。

ほずゑ　ナ。穗末。ほのすゑ。玉葉（秋山の、ふもとのてらの、むらすゝき、ほずゑかさなり、秋風ぞふく）

ほせ　ナ。柴。あせをいふ。疏析などにて、

ほせぐ　ワ。カケ。ロ。防。禦。ふせぐに同じ。

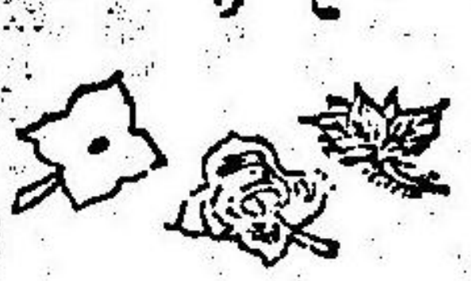
ほせくる　ワ。カケ。四。穿。ほじくるに同じ。

ほせる　ワ。カケ。四。臨。むるにみる。神代紀（臨睨之）

ほそ　ナ。サ。細。ほそきもの。ほそき。ほそし。

ほぞ　ナ。臍。ほぞのをのあとの、あなのごとくなりたるところ。和名（臍、和名、保曽、俗云倍曽 臍孔也）

ほぞ　ナ。蔕。へた。このみなどのつきたるうてな。また、このみなどの、うてなのつきたりしところをもいふ。和名（蔕和名保曽、今按、宛蔕相連）



ほそい　ナ。サ。細。ほそしを見るべし。

ほそえ　ナ。細江。江の名。播磨にあり。詞花（住吉の、細江にさせる、澪標、ふかきにまけぬ、人はあらじな）

ほぞおち　ナ。蔕落。ほぞち。うりの、よくじゆくしたるもの。また、ものごとの、ころは、よくきたるをいふ。

ほそおび　ナ。細帶。ほそきおび。せまくちひさきおび。

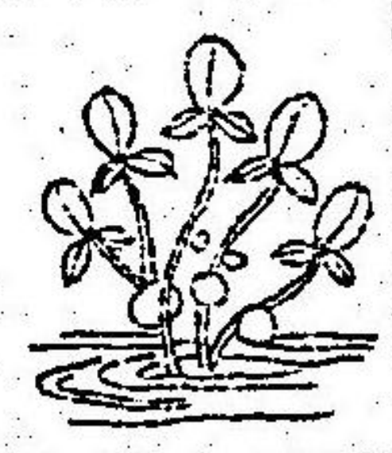
ほそかはやま　ナ。細川山。山の名。大和國、高市の郡にあり。名寄（みなぶちの、ほそかはやまぞ、きそれける、まゆみのもみぢ、（ちりさかりけり））

ほそき　ナ。蔓椒。木の名。いたちはじかみ。枝やとげあるはして、葉のごとく、葉のさま、實のさま、すべて、山椒に似たり。和名（蔓椒和名、以多知波之加美、一云保曽木）

ほそきんだち　ナ。細公達。やさしききんだち。すがたのかじけたるきんだち。狹衣一（さやうのほそきんだちは、かけめにておはせんよりは、たゞころみさまへ、やさしの御さいはひにてこそおはせめ）

ほそくつ　ナ。襪。ほくそ。和名（襪、和名、保曽久豆、襪䙡也）

ほそくみ　ナ。半夏。草の名。はんげ。みつの葉、莖のすゑにつきて、そのさま、笹に似たり。根は、まろくして、まろらかなる、玉のごときものあり。常に藥にもちふるものなり。和名（半夏、和名、保曽久美）



ほそくわじや　ナ。細冠者。やさしきくわじや。すがたのかじけたるくわじや。枕草十（ほそくわじやどもなどの、うしろに居てうちもするもあり）

ほそけ　ナ。向火。むかひびをつけてやくをいふ。野火などをふせぐためにすることなり。和名（野火、字統云、爝、又作焚、野人防野火也、孫愐切韻云、焚迎焼也、俗云保曽介）

ほそごし　ナ。細腰。ほそきこし。をんなのこし。

ほそごゑ　ナ。細聲。ほそきこゑ。ちひさきこゑ。枕草二（にくきもの云々、ねぶたしと思ひてふしたるに、蚊の、ほそごゑになのりて、顔のもとにとびありく）

ほそし　ナ。白英。蔓草の名。つくみのいひね。葉は、蘿に似て、やはらかにて、裂目ふかし。秋のはじめ、いつゝひらの、まろきちひさき花さきて、まろき實をむすぶ。和名（白英、一名鬼目草、和名、保曽之、一云豆久美乃伊比禰）

ほそし　サ。ヒ。細。めぐりのかこみすくなし。ちひさし。せばし。やさし。すくなし。この語、今は、ほそいといふ。夫木三（ほそくふる、やよひの雨や、絲ならん、木にあやおる、ひろさはの池）蜻蛉（月は、いとほそくて、かげは、海のおもてにうつりて）

ほそしき　ナ。細轂。くつの、そこのほそくなりたるもの。催馬樂（くつかれば、せんがいの、保曽之支をかへ、さしむきて、うそらとりきて、みやぢかよはん）

ほそだかに　ワ。細高。ほそくしてたかく。宇拾十（左京大夫なる人、ありけり、たけ、すこしほそだかにて、いみじうあてやかなるすがたしたれども）

ほそだち　ナ。細太刀。ほそきたち。枕草五（なまめかしきもの云々、細太刀の、平緒つけて、きよげなるをのこのもてとるも、いとなまめかし）

ほそたにがは　ナ。細谷川。ほそきたにがは。金葉（かくてしも、えぞすむまじき、山里の、細谷川の、心ぼそさよ）

ほそたにがは　ナ。細谷川。河名。備中にあり。古今（眞金ふく、吉備の中山、帶にせる、細谷川の、音のさやけさ）

ほそぢ　ナ。腰乳。ちゝのいづることのすくなきをいふ。後拾（めのとせんとてまできたりける女の、乳のほそく侍りければ云々、さもあらばあれ、やまとごゝろし、かしこくば、ほそぢにつけて、あらすばかりぞ）

ほぞち　ナ。蒂落。うりの、よく熟ゆくして、ほぞのはなるゝばかりになりたるもの。和名（熟瓜、廣雅云、瓜犖、半骸、小青、大斑和名、保曾知、俗用熟瓜二字、或説、極熟而落之義也、皆熟瓜名也）

ほそどの　ナ。廊。らうか。家のめぐりにまうけて、人のゆきかよふところとしたる、ほそながきところ。源花宴（弘徽殿のほそどのにたちより給へれば、三の口あきたり）和名（廊和名保曾土乃、保殿下外屋也）

ほそなが　ナ。細長。衣の名。うちぎ、まさ、にようくわんなどのきるもの。源末摘花（無紋のさくらのほそなが、なよゝかにきなして、何心もなくて）雅裝（ほそながといふは、れいのきぬのおほくびなきなり）

ほそながし　サ。ヒ。細長。ほそくしてながし。

ほそぬの　ナ。細布。せばのせまきぬの。袖中抄八（陸奥の、けふの細布、程せばみ、むねあひがたき、戀もする哉）

ほそねだいこん　ナ。細根大根。野菜の名。大根の一種、おほきさ、指ばかりにて、長さ五六寸もやあるべからん。

ほぞのを　ナ。臍緒。ちごの、ほぞにつきたるほそながきものにて、えなにつゞきたるもの。小兒の、母胎にあるのほど、息をかよはすなどのはたらきをなすものなり。紫式部日記（御ほぞのをは、殿のうへ、御ちつけは、橘の三位）神代紀（以竹刀、截其兒臍）

ほそそぎ　ナ。細脛。ほそきそぎ。ちひさきあし。宇拾五（おほやけの御前にて、ほそそぎいだして、ふぐりあぶらんなど侯はんは、びんなくや侯ふべからん）

ほそびき　ナ。細引。あさにてなひたるなは。

ほそびつ　ナ。細櫃。さをかけて、ひとりなどするもの。今の塗桶のたぐひなるべし。源野分（ほそびつめくものに、さるひきうけてまうづるさうどどももあり）

ほそみち　ナ。細道。ほそきみち。千載（異葉かる、小野のほそみち、跡たえて、ふかくも雪の、なりにける哉）

ほそみづ　ナ。細水。ほそくながるゝみづ。拾玉（山里の、竹の筧の、ほそみづに、ころしてちれ、峰の紅葉）

ほぞん　ナ。本尊。ほんぞんに同じ。盛衰記二（ふるき寺あり云々、金仙寺といふ伽藍なり、ほぞんは觀音）

ほぞん　ナ。保存。ながくうしなはぬやうにするをいふ。

ほぞんかけたか　ナケキ。時鳥のなくこゑ。

ほそめ　ナ。細目。めをほそくしてみるをいふ。狹衣三（世代、いとおもしろう思ふるたぐ、心もすみまさりて云々、扇うちならして、わたきまろれ、拍子うつ、きりぎりすいなど、ほそめあけて、くびすぢひきたてて）

ほそめに　ツ。細目。ほそやかに。資安歌（天照大御神、ほそめに、岩戸をあけてみそなはす）狹衣二（妻戸、ほそめにあきて、火のひかりほのかにみゆ）

ほそもの　ナ。細物。さうめんをいふ。女の語なり。藻海人芥

ほそやかなり　サ。細。ほそし。ちひさし。すくなし。枕草九（きよげなるをのこの、たてぶみのほそやかなるもちて、いそぎゆくこそいづちならんとおぼゆれ）

ほそやかに　ツ。細。ほそく。ちひさく。すくなく。源総角（御てつきの、ほそやかに、かよわくあはれなるをさしいでても、世の中をおもひつけたまふ）

ほそやぐ　ワ。ヒトリ。ロ。細。ほそやかになる。源宿木（ひとよりは、すこしほそやぎて、あてにらうたかりつるけはひなどは、たちはなれたりともおぼえず）

ほそらかなり　サ。細。ほそし。ちひさし。すくなし。枕草三（ほそらかなるをのこ、隨身などみえぬべきが、くろきすまのすそごなる、かりぎぬは、何もうちなれたみたる、そしるくるまのかさなどに、のどやかにてうちそひたるこそ、ひがものとはみえね）

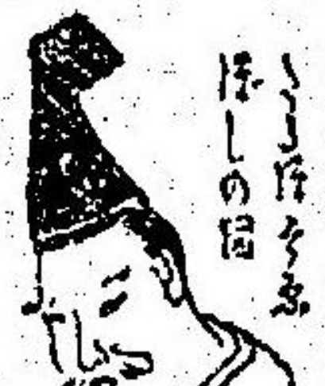
ほそらかに　ツ。細。ほそく。ちひさく。すくなく。

ほそる　ワ。ヒトリ。四。細。ほそくなる。ちひさくなる。すくなくなる。やせたり。源初音（髮のすそすこしほそりて、さはらかにかゝれるしも、いともきよげにて、こゝかしこ、いとけざやかなる樣したまへるを）榮花初花（怪しう、ありし人にもあらずほそりたまひにけり）

ほそわた　ナ。小腸。それほどのところを見るべし。和名（小腸和名保曾和太、爲受盛之府）

ほぞゐ　ナ。細藺。藺の一種なり。今、燈心をとり、席におられ、この藺にて、莚にはあらずともいふ。

ほそゑぼし　ナ。細烏帽子。やせらかなるゑぼしにて、いたゞきのほそやかなるもの。武官のきるものなり。太平三十（つぎは、白張に、かうの衣かさねたるせらむ一人、つぎは、ほそゑぼしに、そでひとへまろくして、みるいろの水干きたるてうどがけ六人云々、供奉せられたり）



後三年合戦の畫にみえしほそゑぼしの圖

ほそを　ナ。細緒。とゐきんに同じ。源紅葉賀（さうの琴は、中のほそをのたえがたきこそところせけれとて、ひやうでうにおしくだしてしらべたまふ）

ほぞをかむ　ワ。ヒトリ。四。噬臍。ほぞをくふ。こうくわいす。

ほぞをくふ　ワ。ヒトリ。四。噬臍。のちになりてくいなげく。塵添壒嚢鈔（ほぞをくふと云ふ事、その義如何）

ほそをとこ　ナ。細男。まつりの時の供奉にあるものにて、烏帽子、素袍のいでたちにて、雜踏すといふ。榮花若枝（誰ともしられたてまつらねば、御靈會のほそをとこの、たのごひして、顏かくしたるこゝちするに）

ほそをり　ナ。閨。ねやをいふ。遠江などにて。

ほた　ナ。榾柮。きのきりくひ。山里などにて、薪などにするものなり。永久百首（こりつみし、ほたなりせば、冬ふかき、かたやまざとは、いかですまさまし）

ほだ　ナ。穂田。いなぼのいでたるた。万八（秋田の、穂田を雁金、くらやみに、夜のほどろにも、なきわたる哉）

ぼだい　ナ。菩提。ほとけのみち。また、ねんぶつ。蜻蛉（たゞことあり。この世をそむきて、家をいで、菩提をもとむる人に）盛衰十（後世、菩提の御つとめよりほか、他事なかりけるほどに）

ぼだいかう　ナ。菩提講。ねんぶつをするまどゐ。盛衰五（雲林院の菩提講おこなふ所に、忍びておはしけり）

ぼだいごゑ　ナ。菩提聲。ねんぶつをとなふるこゑ。榮花さまぐ（御佛名とて、地獄繪の御屏風などとうでて云々、殿上人の菩提聲もあやにくなるまできこえたり）

ぼだいし　ナ。菩提子。ぼだいじゆのみ。後撰（故式部卿の御子ののちのわざせんとて、ぼだいしの數珠をなん、右大臣もとめ侍るときゝて、この數珠をおくるとて）

ぼだいしん　ナ。菩提心。ぼだいのこゝろ。

ぼだいしよ　ナ。菩提所。ゑかうをたのむところ。

ぼだいじゆ　ナ。菩提樹。木の名。むくろじのたぐひ。葉は、むくの葉に似て、厚くして、色こし、春夏のあひだ、枝のかたはらより、莖をいだし、莖のもとより、ほそながき若葉をいだして、その莖をおほふ。後に、莖、その若葉をつらぬきていづるとき、莖の末に、黄ばみたるちひさきかうばしき花さきて、豌豆に似て、色うすぐろき實をむすぶをいふ。落窪三（黄金のずゞをこそは、ぼだいずの實をなんいれさせたまひたりける）

ほだかみ　ナ。穂高見命。おほわたつみの神の御子。

ほだく　サ。ヒトリ。四。祝。ほさくに同じ。孝徳紀（祝哭）

ほたぐひ　ナ。榾杙。ほたといふに同じ。いほぬし（蓑を腰は、ふすまのやうにひきかけて、ほたくひといふものを、まくらにしてまろねに寐たり）

ほださる　ワ。ヒトリ。レ二。絆。絆をかけらる。こゝろ、ものごとにつながる。夫木雜（子をおもふ、こゝろばかりに、ほだされて、うき世をはほそ、いでぞはする）伊勢（かゝる君につかうまつらで、すくせつたなくかなしき事、この男はほだされてとてなんなきける）

ほだし　ナ。絆。うまをつなぐなは。また、こゝろの、ものごとにつながれて、おもふやうにならぬをいふ。古今（世のうきめ、みえぬ山路に、いらんには、おもふ人こそ、ほだしなりけれ）源葵（かゝるほだしだに、そはざらましかば、ねがはしきさまにもなりなまし）和名（絆和名保太之、牛也、牧使牛行不得自縱也）

ほだち　ナ。穂立。ほのたつをいふ。いねなどの、ほのいづるをいふ。万八（くもがくり、なくなるかりの、ゆきてゐん、秋田の穂立、しげくしおもほゆ）

ほたてがひ　ナ。帆立貝。貝の名。いたやがひに同じ。

ほたへる　ワ。ヒトリ。シ一。戲れさわぐをいふ。大阪にて、

ぼたん　ナ。牡丹。灌木の名。ふかみぐさ。高さ二三尺ばかり、葉のさま、花のさま、芍藥に似ておほきくして、花きそめてうるはし。されば、花の王などをもよびならはせり。また、花は、一重なるもの、八重なるものあり。花の色は、あかきもの、しろきもの、むらさきみたるものなどもありて、そのたぐひきはめておほし。

ぼたん　ナ。紐釦。ごいしのごときかたちのものにて、ころもなどのこなたのもしにつけさるを、かなさのもしのあなにはめて、あはせとめなどするもの。

ぼたんいだら　ナ。牡丹薔薇。らうさいだらに同じ。

ぼたんな　ナ。牡丹菜。野菜の名。はぼたんに同じ。

ぼたんだな　ナ。牡丹花。ごやぞぎなをいふ。東京にて、

ぼたんゆき　ナ。牡丹雪。ぼたゆきをいふ。上總にて、

ぼたもち　ナ。牡丹餅。そばのもち。餅の、まざやわらかなるとき、餡、黄粉などをぬりつけさるもの。

ぼたんゆき　ナ。牡丹雪。ぼたゆきをいふ。北國にて、

ほだり　ナ。秀樽。たりの、たけのたきもの。古事記（みなそゝぐ、おみのをとめ、本陀理とらすも）

ほたる　ナ。螢。虫の名。長さ三四分ばかり、色くろくして、頭のうへは、赤きほしあり。夏の夜、よく、水のほとりをとぶ。尻のまはり、あなくひかりて、硫黄の火のごとし。後拾（ものおもへば、澤の螢も、わが身よりあくがれいづる、たまかとぞみる）和名（螢和名保太流）

ほたるかご　ナ。螢籠。ほたるをいるゝかご。紗などにてつくれる籠にて、螢をいれて、軒などにつるもの。

ほたるがり　ナ。螢狩。ほたるをとりにゆくあそび。

ほたるぐさ　ナ。螢草。草の名。あをばなに同じ。

ほたるさう　ナ。螢草。草の名。あけぼのさうに同じ。

ほたるなす　コトバ。如螢。ほたるなすは、ほたるのごとくといふ意なり。さて、螢の光れ、幽かなるものなれば、ほのかにかけていふ。万十三（螢成、髣髴きゝて、ますらをを、たさとのふと、起ち居て、ゆくへもしらに）

ほたるび　ナ。螢火。ほたるのひ。和泉式部集（螢火は、木の下草も、くらからず、五月の闇は、名のみなりけり）

ほだれ　ナ。垂氷。たるひをいふ。西國などにて、

ほだはら　ナ。穂俵。海草の名。なのりそに同じ。

ぼち　ナ。墓地。はかどころをなすべきところ。

ぼち　ナ。徳利。とくりをいふ。下總などにて、

ほつい　ナ。發意。おもひをおこすをいふ。

ほつえ　ナ。上枝。うへのえだ。古事記（かぐはし、花橘は、本都延は、鳥ゐからし、志豆延は、人とりからし）

ぼつか　ナ。帽欄。ほさをいふ。上總、下總にて、

ほつき　ナ。發起。ものごとをおもひたつをいふ。

ぼつきす　ワ。ヒトリ。カ。勃起。おこりさつ。ふるひおこる。

ほつきにん　ナ。發起人。ものごとをおもひたちさるひと。

ほつく　ナ。發句。そいゝ。五七五の三句、十七の文字なもて、ひとつの意をとゝのへてよみいだすもの。もと、連歌の初句なるゆゑに、かくいふなるべし。

ぼつくり　ナ。木履。ぼくりに同じ。

ほつぐわん　ナ。發願。ぐわんさて。

ほつけ　ナ。法華。ほつけしゆう。にちれんしゆう。

ほつけう　ナ。法橋。僧位の名。法橋上人位とよびて、いにしへ、五位になずらへられさりしもの。

ほつけしゆう　ナ。法華宗。にちれんしゆうに同じ。

ほつけん　ナ。北絹。織物の名。ほつけんつむぎに同じ。

ほつけんつむぎ　ナ。北絹紬。織物の名。つむぎの一種にいへり。もろこしより來さるものならんといへり。貞丈雜記

ほつご　ナ。發語。ことのいひだしにもちふることば。

ぼつご　ナ。没後。死にさるのち。みまかりさるあと。

ぼつこうす　ワ。ヒトリ。カ。勃興。おこりさつ。ふるひおこる。

ほつごん　ナ。發言。ことばをいだすをいふ。

ほつし　ナ。法師。ほうしに同じ。榮開十（そのなりしも、堅覺ほつし、與にかゝれて、その前を通りけるに）

ほつしんす　サ。ヒトリ。カ。發。ぼだいしんをおこす。

ほつす　ナ。拂子。僧具の名。えへむらひに同じ。

ほつす　ワ。カケ。カ。欲。ほりす。わがものとせんとおもふ。

ぼつす　ワ。ヒトリ。カ。没。いる。しづむ。かくる。みまかる。

ほつすがひ　ナ。拂子貝。貝の名。形、しろくすきとほりさる絲をつかねさるがごとくにて、そのすこしくねりさるさま、拂子の、しろき毛をつかねさるがごとし。

ほつそく　ナ。發足。かどで。たびだち。かしまだち。

ぽつたあす　ナ。剝篤亞斯。はひのあくよりとりさるもの。藥をもじめて、さまぐゝの事にもちふるものなり。

ほつたい　ナ。法體。そうのかさち。ほうしのすがさ。

ほつたと　ナ。蟋蟀。虫の名。をさくないふ。信濃にて、

ほつたん　ナ。發端。おこり。もじまり。いとぐち。

ぽつちりと　ソ。些少。いさゝか。すこしばかり。

ほづつ　ナ。帆筒。ほばしらのうへのつゝにて、ほづなをひきとほすもの。爲忠後百首（そるゝなる、船路なすぎそ、ほとゝぎす、とまる船の、ほづゝやれなき）

ほづつしめなは　ナ。帆筒綱。ほづゝをまむるなは。みなとを見合すべし。堀川百首（藻刈船、ほづゝしめなは、こゝろせよ、おきそひやなぎ、風になみよる）

ほつておく　ワ。カナ。ロ。抛棄。うちすてておく。

ほつと　リ。溜息などをつくにいふことば。

ほつと　リ。憫然。あきれさるなどにいふことば。

ほつとう　ナ。發頭。ことをくわだてさるをいふ。

ほつとうにん　ナ。發頭人。ことをくわだてさるひと。

ぽつとこ　ナ。馬斑男。むかのをとこ。おろかなるをとこ。

ほづな　ナ。帆綱。ほばしらにつけさるつなにて、ほをあげさげするもの。和名（長柄師說、保都奈、今之帆綱也）

ほつねつす　サ。ヒトリ。カ。發熱。ねつおこる。みあつくなる。

ほつのやま　ナ。保豆山。山の名。丹波國、桑田の郡にあり。山家集（こほりさる、いさぎの、たゆければ、もちやこさまし、ほつのやまごえ）

ぽつぽつ　ソ。黢々。いさゝかづゝ。すこしよりすこしづゝ。

ぽつぽつと　ソ。黢々。いきほひおこりさつて。

ほつまくに　ナ。秀眞國。おほやまとに同じ。神武紀（日本者、浦安國、細戈千足國、磯輪上秀眞國、秀眞國此云褒莽句儞）

ほつもる　ワ。ヒトリ。四。含。ふほごもるに同じ。古事記（かぐもし、むなさちむなれ云々、中津枝の、本都毛理、あからをとめを、いざさゝば、よらしな）

ぽつらくす　ワ。ヒトリ。カ。没落。おつ。やぶる。くづる。たふる。

ほつる　ワ。ヒトリ。シニ。紕。そつるゝをいふ。九州にて、

ほつれる　ワ。ヒトリ。シ一。紕。そつるゝをいふ。東國にて、

ほて　ナ。最手。せきとり。すまうとりのかしら。空穗秋初（伊豫のほて、行常がまうでこぬに）

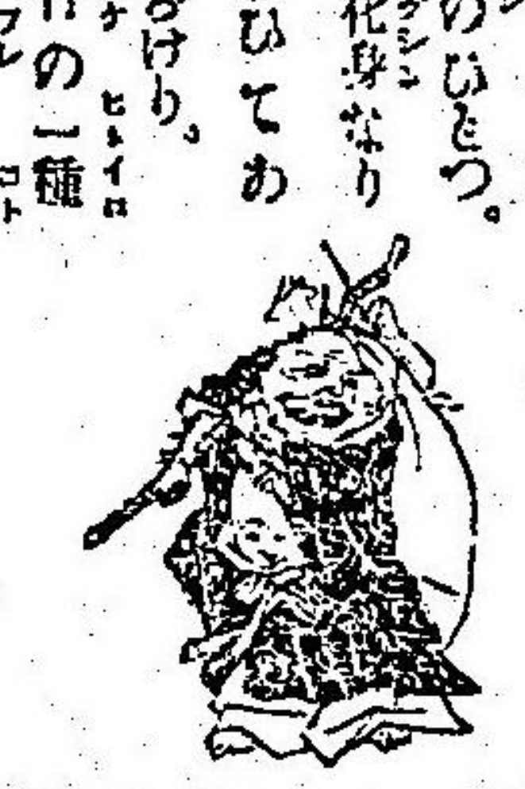
ほて　ナ。帆手。帆の横につけさる綱にて、帆を、左に右にひかふるものなりとぞ。土佐（追風の、ふきぬるときは、ゆく船の、ほてうちてぞ、うれしかりける）

ほて　ナ。腹。はらをいふ。畿內、中國、四國などにて、

ぼて　ナ。荷籠。いかきをいふ。越後、信濃、上野などにて、

ほてい　ナ。掏底。ふつてい。空穗院嵯峨（まかりうらびさるよろこびをすれば、かそうせんと思ひ侍りつれど、かくのごと、ほていし侍りつるほどに）

ほてい　ナ。布袋。七福神のひとつ。彌勒菩薩といふ佛の化身なりといふ。常に、袋をおひてあそびありくさまをゑがけり。



ほていちく　ナ。布袋竹。竹の一種なり。幹みじかくして、節の、殊にあげきもの。

ほてだら　ナ。布袋腹。そらのふくれさるをいふ。

ほてふり　ナ。捧手振。ぼうてふりに同じ。

ぼてんくさ　ナ。木の名。きそだすをいふ。九州にて、

ほでり　ナ。火照命。ほすせりに同じ。

ほでり　ナ。熱霞。ゆふやけ。ゆふぐれ、そらのあかくなるをいふ。新六三（山の端に、ほでりせる夜は、むろの浦に、あすはひよりと、いづるふなびと）

ほでる　ワ。ヒトリ。ロ。面熱。かほあつくなる。かほあかくなる。怒るなどにいふ語なり。神代紀（忽然作色曰）

ほてせき　ナ。拔手脚。せきとき。おほぜきにつぐすまうとり。謡曲十（不肖の身、今度すでに、ほてのせきなゆるされぬ。まことに申さるゝところのがれどもし）

ほと　ナ。女陰。つびに同じ。古事記（因生此子、美蕃登見炙而病臥在）同（訓陰上云富登）

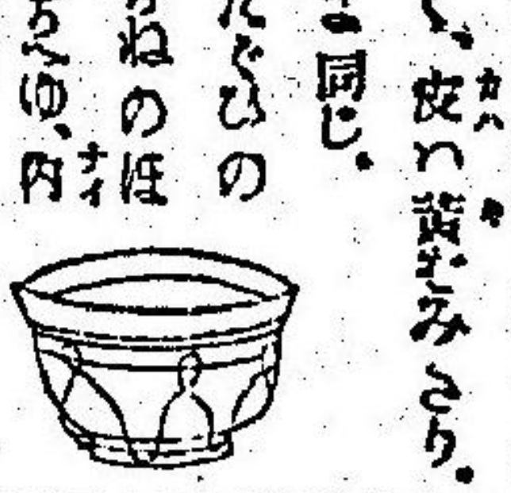
ほど　ナ。程。分。きな。くらゐ。かぎり。ころ。とき。なり。あひだ。あさり。むらり。ありさま。みつもり。おしはかり。六帖五（田子の浦の、波間にあそぶ、濱千鳥、いつをほどとて、戀しかるらん）後拾（たれよりも、われぞかなしき、めぐりみん、ほどをまつべき、いのちならねば）万代（つらからぬ、心ぞつらき、よそにても、いとこれほどの、なげきやれせし）枕草十（世に、ことひといでてみつけじ、宰相とそこと、ほどならんとおもひつゝとて）宇拾五（門の閑木をもつして、扉かさつるを、人ひとりいるほどあけさり）同八（ひやうと射さりければ、御むねのほどにあさるやうにて、火なうちけつごとくにて、光もうせぬ）源桐壺（おなじほど、それより下臈の更衣たちは、ましてやすからず）榮花月宴（みかど、きさきの、御よめあつかひのほど、いとおかしくなんみえさせさまひける）同山花（かゝるほどに、年號

かもりて、天延元年といふ）

ほど　ナ。土芋。いものたぐひ。葉は、豆に似て、根に、芋あり。芋は、まろくして、肉は、まろく、皮は黄ばみたり。

ほどあひ　ナ。程間。ほどらひといふに同じ。

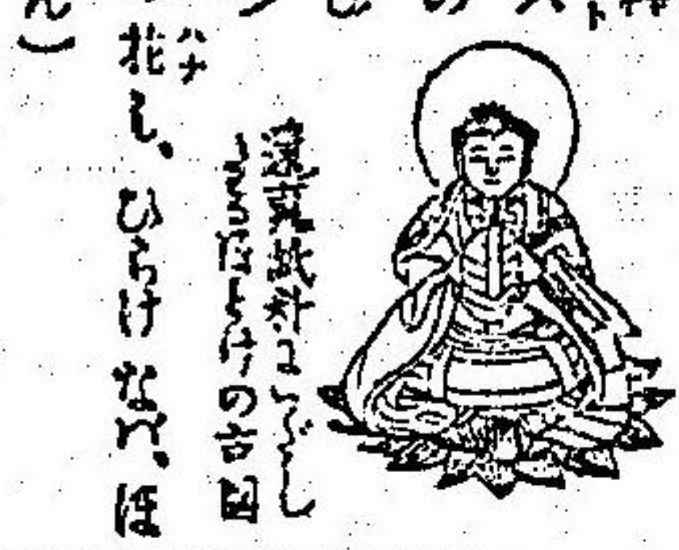
ほとぎ　ナ。瓮。ひらか。また、むちのたぐひの、つぼやかなるもの。容附笠梅花（まろがねのほとぎすゑて、御ゆどのまゐる。御むらへゆ、内侍のすけのおとど）和名（瓮比良加俗云保止岐瓦器也）



ほどく　ワ。カ。四。解。とく。ときそなつ。

ほどく　ワ。ヒトリ。ヒ二。解。とく。とけそなる。この語は、地方により、ほどけると下一段にいふ。綾吉（うしとても、思ひほどけば、南夜な、眠られ人の、さめぬなりけり）

ほとけ　ナ。佛。天竺の神の名。また、その神を祝きいでさる釋迦といふ人をもいひ、釋迦の教にて、悟のひらけさる人をもいふ。佛足石歌（まらの御あと、いしにうつしおき、うやまひて、のちの保止氣に、ゆづりまつらん）拾玉（世がねがふ、こゝろの花し、ひらけなば、ほとけの身にや、ならんとすらん）



藻冥紙符にうつしし
ほとけの古図

ほとけ　ナ。佛。なきがら。死にたるひと。

ほとけがみ　ナ。佛神。ほとけとかみと。

ほとけくさし　サ。ヒ。佛臭。ほとけめきてあり。

ほとけくやう　ナ。佛供養。ほとけのまつり。

ほとけのうま　ナ。佛馬。虫の名。むさくをいふ。出雲にて、

ほとけのざ　ナ。佛座。草の名。たびらこに同じ。公事根源（若菜は、なゝきのものなり。なづな、はこべら、せり、あをな、ごぎやう、すゞしろ、佛の座などなり）

ほとけのつづり　ナ。佛綴。草の名。ほとけのざに同じ。讃信綱母集（ほとけのつゞりといふ花よめといふ。百和香あつむる人、むなのさく、野辺をぞ、けふもたづねつる、これやほとけの、つゞりなるらん）

ほとけのひき　ナ。佛蟾蜍。あまびこるをいふ。九州にて、

ほとけぶみ　ナ。佛經。ほとけのをしへをかきたるふみ。

ほとけまつり　ナ。佛祭。たまつり。ほとけのくやう。

ほとけまゐり　ナ。佛參。ほとけをおがみにまゐるをいふ。

ほとける　ワ。ヒトリ。シ一。解。ほどくを見るべし。

ほとけせき　ナ。佛事。たまつり。ほとけまつり。

ほとけをがみ　ナ。佛拜。ほとけのまへにぬかづくをいふ。

ほどこし　ナ。施。ものをめぐみあたふるをいふ。

ほどこしぐすり　ナ。施藥。ほどこしあたふるくすり。

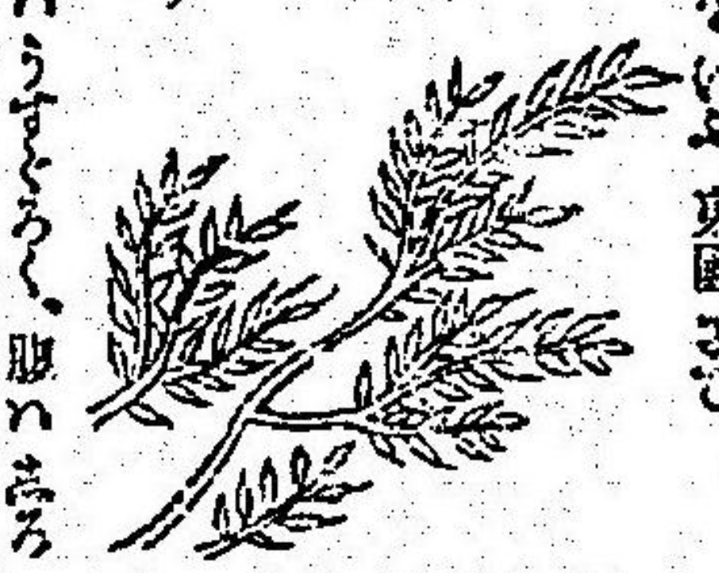
ほどこしもの　ナ。施物。ほどこしあたふるもの。

ほどこす　ワ。カ。四。施。ひろむ。あまねくちらす。あはれみをかけて、ものをあたふ。夫木五（すべらぎの、むかしあまねき、めぐみなや、このみなづきの、民にほどこす）空穗あて宮（世界に、名をほどこして、たからをたくはへし事）著聞十九（遂長姫は、丹青をほどこして、造花をもてかざりたりけり。殿上人、方人以下、みな布衣なり）

ほどこる　ワ。ヒトリ。ロ。播。さひゝろがる。ゆるせさる。

ほどしぎ　ナ。鳥の名。かやくきをいふ。東國にて、

ほどつら　ナ。百部。莓草の名。てんもんどうのたぐひ。葉おほきく、尖なぐくして、すこし、竹の葉に似たり。和名（百部和名、保止其豆一種以有百部故以名之）



ほととぎす　ナ。時鳥。郭公。杜鵑。鳥の名。形、すゝみどりに似て、背はうすぐろく、腹はしろし。また、腹にも、翅にも、まろき斑ありて、口の中あかく、頸は、堅の毛おひたり。また、足はあをみて、前の指のまへは、うすき皮あり。この鳥、みづから巣をつくらずして、鶯の巣をかりてすむといふ。万九（うぐひすの、かひこの中に、霍公鳥、ひとりうまれて、なが父に、似てはなかず、なが母に、似てはなかず）和名（鶗鴂和名保度々木須今之郭公也）

ほととぎす　ナ。時鳥。草の名。高さ一二尺ばかり、葉は、百合のごとく、また、笹の葉にも似たり。夏秋のあそび、葉の間より、莖をいだして、黄色なる花をひらく。

ほととぎす　ヤタ。時鳥。とむにかゝらするは、鳥は、とぶものなればなり。万二十（霍公鳥、飛幡のうらに、しくなみの、しくしくきみを、みんよしもがも）

ほとどころ　ナ。女陰。ほとに同じ。武烈紀（不淨）

ほどほし　サ。ヒ。程遠。あそびとほし。へだたりとほし。

ほどなし　サ。ヒ。程無。おひどすくなし。拾遺（ひきてみる、子日の松は、ほどなきを、いかでこもれる、千代にかあるらん）源氏澪標（年のおほみよりも、ほどなきここちす。宮は、いみじき事どもをのたまへり）

ほとばかす　ワ。カ。四。潤。ひさすをいふ。關西にて。

ほどばかり　ソ。程。ほど。くらゐ。六帖五（世の中を、おもひさだむる、ほどばかり、とがてゝみても、まかせざらなん）蜻蛉（あすあさてのほどばかりにてまゐりなんとて、いとさうぐしげなるけしきなり）

ほとばしる　ワ。ヒトリ。四。迸。とびちる。とびそしる。おどりはしる。平治（所々に、火をあげたり。みやうくわ、空にみちて云々、つくりかさねたる殿舍の、そげしき風にふきたてられて、灰燼、地にほとばしりければ）

ほとばす　ワ。カケ。四。潤。ひさす。ほとびらす。

ほとばす　ワ。カケ。四。迸。ほとばしる。遊仙窟（踊躍）

ほとびる　ワ。ヒトリ。カ一。潤。ほとぶを見るべし。

ほとぶ　ワ。ヒトリ。カ二。潤。うるほひてふくる。この語は、地方より、ほとびるを上一段にいふ。伊勢（みなひと、かれいひのうへに、なみだおとしてほとびにけり）

ほとほす　ワ。カケ。四。潤。ひらす。うるほす。啓心方

ほとほと　ソ。殆。ほとんど。いますこしにて。万十五（かへりける、人きたれりと、いひしかば、保等保登しにき、君かと思ひて）枕草六（殿の御ありさまどもは、いみじく笑ひて、ほとほとしう、うちもしよりもおちぬべし）

ほとほとし　サ。プ。殆。あやふし。いますこしにてやゝらんとせり。土佐（ゆくりなく風ふきて、こげども〳〵、しりへしぞきにしぞきて、ほとほとしくうちはめつべし）後撰（人の許より、久しうこそわづらひて、ほとほとしくなんありつるといひて侍りければ）

ほどほどし　サ。プ。程々。ほどひさし。拾遺（なげきこる、人いる山の、斧柄の、ほとほとしくも、なりにける哉）

ほとほとと　ソ。門などをたゝくおと。平家一（竹の編戸を、ほとほとうちたゝく者いできたり）

ほとほとに　ソ。殆。あやふく。いますこしにて。万三（吾が盛、またをちめやも、殆、奈良京を、みずかなりなん）

ほどほどにつけて　ソ。随分。ほどはまさおびて。源明（ほど〳〵につけて、あまさの人のそねみをおひ）

ほとほり　ナ。熱。あつきいきほり。神代紀（[illegible]）

ほとほる　ワ。ヒトリ。四。熱。あつくなる。いかる。いきどほる。枕草八（いみじうまめだちてうらみいふ云々、さるべき事もなきを、ほとほりいでて[illegible]）

ほとんど　ソ。殆。あやふく。いますこしにて。

ほとめく　ワ。ヒトリ。四。響。ほとほととひびく。枕草三（[illegible]）

ほとめく　ワ。ヒトリ。四。[illegible]。上總にて。

ほとらひ　ナ。程合。ほど。みつもり。みはからひ。

ほとり　ナ。邊。あたり。めぐり。ほどちかきところ。万代一（紅葉ゆゑ、深山ほとりに、やどりして、よるのあらしに、ものをこそおもへ）土佐（池めいてくぼまり、みづつける所あり。ほとりに、松もありき）

ほとりさむ　ワ。ヒトリ。四。[illegible]

ほどる　ワ。ヒトリ。四。熱。ほとほるに同じ。

ほどろ　ナ。[illegible]

ほどろ　ナ。程。[illegible]。万四（[illegible]）

ほどろほどろに　ソ。[illegible]。万十（[illegible]）

ほなか　ナ。火中。ひのなか。古事記（さねさし、さがむの小[illegible]）

野に、もゆる火の、本那迦にたちて、とひし君はも）

ほなは　ナ。帆綱。ほにつけたるなは。夫木三（年ふるも、たらじな心、蜑小舟、かぢの帆綱の、たえずてふるも）

ほなみ　ナ。穂波。いなほの、かぜにそよぐさまの、なみのやうにみゆるをいふ。新古（風わたる、山田のいほを、もる月や、ほなみにむすぶ、こほりなるらん）

ぼに　ナ。盆。ぼん。うらぼん。蜻蛉（ぼになどするほどになりにけり。みれば、あやしきさまににないそぎ、さまざまにいそぎつゝ、あつまるを）

ほにあぐ　サ。カケ。シニ。高くあぐ。古今（秋風に、こゑをほにあげて、くるふねは、天の戸わたる、かりにぞありける）大和（にまろは、とふひとあらば、そらのそら、なげきほにあげて、いぬとこたへよ）

ほにあらはる　ワ。ヒトリ。シニ。高くあらはる。かくれなくなる。新千（そらのそら、雁間はとほく、ゆく翁の、ほにあらはれて、こひやわたらん）

ほにいだす　ワ。カケ。四。高くあらはす。古今序（えなすゝき、ほにいだすべき事にもあらずなりにけり）

ほにいづ　ワ。ヒトリ。シニ。高くあらはる。かくれなくなる。古今（むなすゝき、それこそあさは、おもひしか、ほにいでてひとに、むすぼれにけり）同（いまもこそ、逢坂山の、まのすゝき、ほにはいですも、こひわたるかな）

ほにん　ナ。補任。ふにんに同じ。

ほぬいかづち　ナ。火雷神。ほむすびに同じ。

ほね　ナ。骨。すべてのものゝなかにあるかたきもの。また、すべて、もののもとゝなるものをいふ。宇拾十三（おほきなる骨、喉にたてて、ようくもいひける程に、とみにいでざりければ）散木十（扇の骨は、あをいろにあきて、むらさきはみどり）和名（骨和名保禰肉之核也）

ほねあがる　ワ。ヒトリ。四。骨上。やせて、ほねたかくあらはる。散木（ほねあかり、すぢさへたかき、こまなれや、ひまゆくことは、まるべしぞきみ）

ほねがらみ　ナ。黴毒のいえがたくなりたるもの。

ほねぐみ　ナ。骨格。ほねのくみあひ。ほねのこしらへ。

ほねつぎ　ナ。骨継。くすしの、ほねのくじけたるなどをなほすをいふ。また、そのわざのくすしをもいふ。

ほねとかは　ソ。骨皮。やせさらぼひたるさまをいふことぞ。新六（身をすてて、のちさへ人を、こひなれば、さこそはほねと、かはとなるらめ）

ほねなし　ナ。骨無。不具の名。せぼねは、ちからなきもの。

ほねにしむ　ワ。ヒトリ。四。徹骨。みにしむ。ほねにとほる。

ほねにてつす　ワ。ヒトリ。カ。徹骨。ほねにしみとほる。

ほねにとほる　ワ。ヒトリ。カ。徹骨。ほねにしみとほる。十訓（涙淵のおもひ、ほねにとほるおもひ）

ほねをる　ワ。ヒトリ。四。骨強。いきほひつよくあり。

ほねぶし　ナ。骨節。ほねのむすぶところ。

ほねみ　ナ。骨身。ほねとみと。また、こつずゐ。

ほねをしみ　ナ。骨惜。ものごとをつとめぬひと。

ほねをり　ナ。骨折。いさくつとむるをいふ。

ほねをる　サ。ヒトリ。四。骨折。いさくつとむ。新六五（さりとても、させることなき、つぶれがさ、ほねをなりてぞ、君はつかへし）新六（山ふかく、まことの道に、いるときは、ひが身まもりと、ほねををるな）

ほの　ソ。仄。ほのかに。かすかに。すこしばかり。後撰（ほのみても、めなれにけりと、きくからに、ふしかへりこそ、しなまほしけれ）源手習（宮のとのゐさまひしも、かゝる事を、ほのおぼしよりてなりけり）

ほのかなり　サ。仄。かすかなり。うすらかなり。千載（もくづの、磯間をわくる、漁舟、ほのかなりしに、思ひそめてき）空穂俊蔭（かざりもなく、やつれほのかなるさまなれど、いふよしなくもてやされて）

ほのかに　ソ。仄。かすかに。うすらかに。拾遺（夢よりも、はかなきものは、かげろふの、ほのかにみえし、かげにぞありける）源夕顔（あまのすまゐいとあはれなり。御あかしのかげ、ほのかにすきてみゆ）

ほのきく　ワ。カケ。四。仄聞。ほのかにきく。落窪二（まして、ほのきくさきひとは、きにかへりたらふ）

ほのくぼ　ナ。盆窪。ぼんのくぼに同じ。

ほのぐらし　サ。ヒ。仄暗。うすぐらし。源帚木（火はほのぐらきにみさまへば、からびつざつものどもをおきされば、みさりがてしき中を）孝徳紀（昧旦）

ほのに　ソ。仄。ほのかに。かすかに。好忠集（時鳥、ほのに初音ぞ、きゝしより、夜をしなれば、目をさましつゝ）

ほのほ　ナ。炎。ひさき。ひのもえあがりたるところ。玉葉（ふりしめる、雨夜の閨に、きえやらで、ほのほみじかき、燈火のすゑ）源明石（ほのほもえあがりて、らうはやけぬ。こゝろだましひなくて、あるかぎりまどふ）

ほのぼの　ソ。仄々。ほのかに。かすかに。源夕顔（よりてこそ、それかともみめ、たそがれに、ほのぼのみつる、はなのゆふがほ）空穂吹上（浜おとこ人なし。みなど、このおとなひどを、ほのぼの御らんぜしやうにおぼさる）

ほのぼのあけ　ナ。仄々明。よの、ほのかにあけたるころ。

ほのぼのし　サ。フ。仄々。ほのかなり。あきらかならず。源手習（耳ほのぼのしく、かたそらなるひとにとひきゝて云々、さればこそうちあざさらひてかたるを、尼君などは、かたはらいたしとおぼす）

ほのぼのと　ソ。仄々。ほのかに。かすかに。新古（ほのぼのと、有明の月の、月影に、もみぢふきおろす、山おろしの風）狭衣（月のかたぶくまで、ふせりて云々、夜のほのぼのとあくるに、なくなくかへりにけり）

ほのみる　ワ。カケ。カ一。仄見。ほのかにみる。後撰（ほのみても、めなれにけりと、きくからに、ふしかへりこそ、しなまほしけれ）源藤裏（いはけなくおはしまししときより、みたてまつり、いまもほのみたてまつりて）

ほのめかす　ワ。カケ。四。仄。ほのかにあらはす。すこしあらはす。後拾（あきがれの、冬野にたてる、むらすゝき、ほのめかさむや、思ふこゝろを）源東屋（式部卿の宮などの、いとねんごろにほのめかしたまひけれど）

ほのめく　ワ。ヒトリ。四。仄めく。すこしあらはる。金葉（風ふけば、枝やすからぬ、木の間より、ほのめく秋の、夕月夜かな）源幻（かやうに、たゞ、おほかたはうちほのめきたまふをりもあり）

ほのめく　ワ。ヒトリ。四。仄かにほとめく。ほとりにあり。十佐（守の館のひとぐの中に、この来るひとぐぞ、こゝろあるやうにはいはれほのめく）

ほのも　ソ。仄。ほのかにも。堀川百首（ほしざきや、あつさの方の、いさりびの、ほのもありぬや、おもふ心を）

ほだく　ナ。捕持。とらへてあむるをいふ。

ほばしら　ナ。帆柱。ふねのなかにたてて、ほをかくるもの。散木（けふもまた、世をうみわたる、ほばしらの、なれぬる船の、身をいかにせん）和名（檣保波之良帆柱也、又云、帆檣以長木爲之、所以掛帆也）

ほばら　ナ。臁。うをのはらのところ。和名（臁、文字集略云、臁、保波良、腹前也）

ほひ　ナ。最勝。そうじるしにたてたるはし。

ほびこる　ワ。ヒトリ。四。蔓延。はびこる。万十八（このみゆる、雲保妣許里て、とのぐもり、雨もふらぬか、心たらひに）

ほひのみこと　ナ。穂日命。あまてらすおほみかみの御子。記完歌（阿麻能褒譽、かみの御おやに、やたけの、いほつすまるの、たまをこそまけ）

ほびろかに　ソ。蔓延。はびこりて。水鏡（この程は、道鏡も、いまだほびろかには参り仕うまつらざりしかど）

ほふ　ナ。法。のり。おきて。さま。

ほふくす　ワ。ヒトリ。カ。匍匐。はふ。はらばふ。

ほふね　ナ。帆船。ほかけぶね。壬生二品集（浦風の、はやくもわたらず、難波江の、葦の帆船は、月をみる哉）

ほふる　ワ。カケ。四。放。はふる。はなつ。なげすつ。

ほふる　ワ。カケ。四。屠。はふる。ころす。選集十（血脳をほふり、身體をなげうつても、のぞむべきは、安養浄土のさかひなり）

ほべ　ナ。火瓮。かまどにてたくほのほ。祝詞式（豊葦原乃水穂國波、昼波如五月蝿水沸、夜波如火瓮光神在）

ほへい　ナ。歩兵。かちだちのへい。あしがるのたぐひ。

ほほ　ナ。頬。つら。くちのわきの、ひろくしてふくらかなるところ。和名（頬和名保保、一云豆良、面旁目下也）

ほほ　ナ。厚朴。木の名。ほほがしはに同じ。狭衣（凝華殿、御てうちなほおしうおぼさるれば、御風などおぼして、ほゝなどまゐらすれど、さらにおこたらせさせまず、起臥やすからずおぼされたり）

ほほ　ソ。粗。あらく。いさゝか。字鏡（粗略也、疏也、麤也、又阿良々々）

ほほあて　ナ。頬当。かなめんの、目の下にあつるもの。

ほほがしは　ナ。厚朴。木の名。葉は、かしはの葉に似ておほきくして、めぐりのきざみなし。夏のころ、牡丹、または、木蓮に似たるうすむらさきなる花さきて、後は、

實をむすぶ。この木の皮は、鱗のごとき皺ありて、常は、藥にもちふるものなり。万廿（わがせこがさゝげてもてる、保寳我之婆、あたかも似るか、あをききぬがさ）和名（厚朴、一名厚皮、楊氏漢語抄云厚木、保々加之波乃木）

ほほかす　ワ。カナ。四。放。投。なぐ。なげすつ。

ほほかぶり　ナ。頰被。てぬぐひなどにて、ほゝをつゝみかくすをいふ。隆房卿（三位、これを、空に着て、頰冠し給ひたりければ、衣みじかうして、腰またりをすぎず。黑衣の中より、頰なりはしいでて、脛あらはなり）

ほほすけ　ナ。綾。おいかけに同じ。和名（綾、一名老懸。和名、冠乃乎、一云保々須介、又云於以加計、武觀云、老人所飾、以此繫冠使不欹、名老懸也、今不論老少武官皆用之）

ほほだて　ナ。頰立。ほこだちをいふにや。ほこだちを見るべし。今昔六十（船戸の此方にたちてつきゐるに、脇戸の保々立をとらへてつきいられず）

ほほづき　ナ。顏。かほせ。かほのさま。和名（顏訓、與面同、眉目間也、遊仙窟云、面子 師說、加保波世、一云保々豆岐）

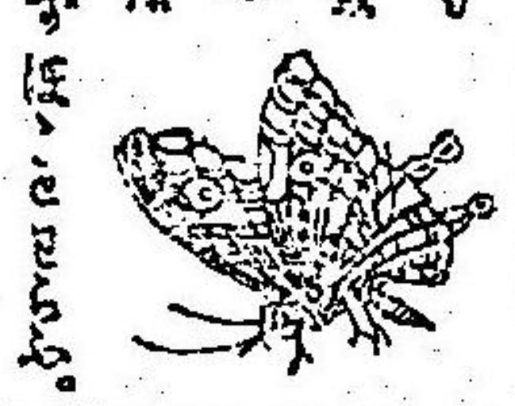
ほほづき　ナ。酸漿。草の名。さしごとに、宿根よりおえて、葉のさま、楕圓にて、めぐりに、刻あり。夏の頃、志ろくちひさき花さきて、實をむすぶ。實は、玉のごとくにて、袋の内にあり。袋は、蜻蛉の羽のごとくにて、いつゝの稜あり。實も、袋も、秋のはじめ、あかくいろづく。この實は、めのわらはの、常に、内をうつろにして、舌にのせてならすものなり。榮花初花（御色はしろうそしう、ほゝづきなどをふくらめてすゑたらんやうにぞみえさせたまふ）和名（酸漿和名保々豆木）

ほほづきぢやうちん　ナ。酸漿提灯。あかくそめたるちひさきちやうちんにて、あまたつらねてともすもの。

ほほづきだ　ナ。酸漿葉。おほなごをいふ。安房、上總にて、

ほほづゑ　ナ。頰杖。つらづゑに同じ。

ほほてふ　ナ。鳳蝶。あげはのてふ。蝶の一種、形おほきくして、翅のあや、ことにうつくしきもの。和名（鳳蝶、其大如蝙蝠者、或黑色、或青斑、名曰鳳子云々今案、和名、保々天布、是鳳蝶二音之轉乎）



ほほと　ツ。笑ふ聲にいふことば。落窪三（この兵部少輔はみなしては、ねんぜずほゝとわらふ。中にも、藏人少將は、えなくともものわらひするこゑまで、わらひたまふ事かぎりなし）

ほほのき　ナ。厚朴。木の名。ほほがしはに同じ。

ほほばる　ワ。カナ。四。頰張。嗛。ほゝのうちにふくみもつ。

ほほぶぎやう　ナ。保々奉行。武家の役の名にて、保檢斷奉行と地奉行とをあはせていふときのとなへ。

ほほべた　ナ。頰邊。ほゝのはし。ほゝのほとり。

ほほべに　ナ。頰紅。ほゝに、べにをつくるをいふ。女の假粧する事なり。べにのところ見合すべし。

ほほぼね　ナ。頰骨。つらぼねに同じ。

ほほまる　ワ。ヒトリ。四。含。ふゝまる。万廿（千葉の野の、兒手柏の、保々麻例ど、あやに愍み、おきてたか來ぬ）

ほほむ　ワ。ヒトリ。四。含。ふふまるに同じ。字鏡（莉保々牟）

ほほむ　ワ。カケ。シニ。含。ふくむ。つゝむ。散木（時鳥、なかぬなげきの、森に來て、いとゞも聲を、ほゝめつるかな）

ほほゆがむ　ワ。ヒトリ。四。頰歪。ことをたがふ。たゞしきかたをうしなふ。源胡（つきゞゝしうまねびなすまいは、ほゝゆがむ事もあめればこそ、さなしちらかきまぎらはしつゝ、おぼつかなき事もおほかりけり）

ほほゆがむ　ワ。カケ。シニ。頰歪。ほゝゆがましむ。源帚木（式部卿の姫君に、あさがほたてまつりたまひし歌など、すこしづゝ、ほゝゆがめてかたるもきこゆ）

ほほゑむ　ワ。ヒトリ。四。微咲。ゑがほになる。すこしゑむ。梅謡（九の君、おもてあかみて、うちほゝゑみて、のたまふ事もなき空）源夕顏（げにとほゝゑまれたまひて、げにいづれかきつねならん、たゞはかられたまへかし、となつかしげにのたまへば）

ほほゑむ　ワ。ヒトリ。四。微咲。つぼみほころびんとす。はなすこしさく。源末摘花（梅は、けしきばみほゝゑみわたれる、とりわきてみゆ。はしかくしのもとの紅梅、いととくさく花にて、いろづきにけり）

ほまち　ナ。私得。わたくしのまうけ。

ほまへせん　ナ。帆前船。からふねの、ほをかけてやるもの。蒸汽船などの、帆を用ひぬものにむかへていふ。

ほまれ　ナ。譽。いさをなどありて、ひとにほめたゝへらるゝをいふ。徒然草（智慧と心とこそ、世にすぐれたるほまれものこさまほしきを）宗能紀（致譽）

ほむ　ワ。カケ。シニ。譽。よしといひはやす。この語は、地方にて、ほめるを下一段にいふ。万廿（まけばしら、ほめてつくれる、殿のごと、いませ母刀自、おめがはりせず）伊勢（夜一夜さけのみしあそびて、夜あけもてゆくほどに、この殿のおもしろきをほむる歌よむ）

ほむぎ　ナ。穗向。いな穗などの、かぜになびきたるむきをいふ。万廿（秋の田の、穗向みがてり、わがせこが、ふさたをりける、をみなへしかも）

ほむけ　ナ。穗向。ほむきに同じ。玉葉（花薄、ほむけのいとを、ふく風に、玉の緒とけて、つゆぞみだるゝ）

ほむしろ　ナ。帆席。ふねの、ほにもちふるむしろ。

ほむすび　ナ。火産靈神。いざなぎの神の御子にて、よろづの火をつかさどりたまふ大神なり。

ほむら　ナ。焰。ほのほに同じ。宇拾八（眼をみれば、いなびかりのやうにひらめき、口は、ほむらなどのやうに、おそろしきけしきしたる鬼の、鎧冑きて、えもいはぬ馬にのりつゞきて、二百人ばかりありけり）

ほん　ナ。本。てほん。枕草四（ありがたきもの云々、物語、集などかきうつすに、本に墨つけぬ事、よき草子などは、いみじく、心してかけども、かならずこそきたなげになる也）狹衣（女の御こゝろそへには、この君をなん、ほんにすべきと、おとゞたち定めきこえたまひけり）

ほん　ナ。本。ふみ。さうし。しよもつ。しよじやく。

ほん　ナ。本。ね。もと。まこと。ありのまゝ。

ほん　ナ。品。くらゐ。親王は、たまふ位にて、一品より四品まであり。一品は、臣下の位にていへば、一位の如し。

ぼん　ナ。盆。をしきのごとくにて、まろきもの。

ぼん　ナ。盆。うらぼんに同じ。枕草廿（七月十五日、ぼんをたてまつるとて、いそぐをみたまひて、道命あじやり、わたつうみは、おやをおしいれて、このぬしの、ぼんするみるぞ、あはれなりける）

ほんあん　ナ。翻案。もとの志くみをかへてこしらふるをいふ。太平卅三（この松をおしけづりて、一首の古歌を翻案してぞかきたりける。君が代の、みじかゝるべき、ためしにや、かねてぞなれし、住吉の松）

ほんい　ナ。本意。ほい。まことのこゝろ。宝鏡撰上（ほんいのごと、まづかなるべき事のかなふべきをなん）

ほんえい　ナ。本營。たいしやうのゐるぢんえい。

ほんき　ナ。本氣。まことのこゝろ。うきたらぬこゝろ。

ほんぎやく　ナ。叛逆。むほんといふに同じ。

ほんぐう　ナ。本宮。もとみや。玉葉（賀茂祭の近衛使つとめて云々、次の年、本宮の使つとめ侍りけるに）

ほんぐわん　ナ。本貫。ほんけ。もとのところ。

ぼんくやう　ナ。盆供養。ぼんにするくやう。

ほんけ　ナ。本家。もとのいへ。まことのいへすぢ。

ぼんげ　ナ。凡下。たゞびとの、みぶんなきをいふことば。

ほんけがへり　ナ。本卦還。本卦は、うまれたる人の、六十一年になりて、また、干支の年にあふをいふ。されば、六十一年の稱となりて、齡をいはふ事あり。

ほんげつ　ナ。本月。このつき。ほかならぬつき。

ほんげん　ナ。本源。もと。おこり。みなもと。

ほんご　ナ。反故。ほうごに同じ。紫式部日記（まぎるゝ事なきまゝに、ふるきほんごひきさがし）

ぼんご　ナ。梵語。ぼんてんのことば。てんぢくのことば。

ほんこく　ナ。翻刻。ふるまきを、ふたゝびゑるをいふ。

ほんごく　ナ。本國。もとのくに。うまれたるくに。

ぼんごち　ナ。盆東風。なつのすゑにふくこちなり。伊豆國の船人、また、志摩國の船人の語なり。

ほんさい　ナ。本妻。むかひめ。まことのつま。妾はむかへていふ語なり。源夕霧（ほんさいつよくものしたまふ、さる時はあへるぞうるさてはいとやんごとなし）

ほんざい　ナ。本才。まことのげい。くにをおさむるみちなどの、まことしきまなびをいふ。源繪合（あながちに、この道なふかくならひそといさめさせたまひて、ほんざいの方々のものをしへさせたまひしに）

ほんざう　ナ。本草。くすしぶみ。支那にて、むかし、神農氏といふ人のかきたる書なりといふ。草木などの、藥とすべきものなどの事をかきたるものなり。

ほんざん　ナ。本山。もとのてら。そのてらのほんけのてら。經信（本山の事を思ひいでて云々、すますまん、山里ありと、思ひきや、わがたつ杣の、秋の月影）

ほんじ　ナ本寺。ほんざんに同じ。寶物集（閑院院の六輔れ、宇治の軍をのがれていでて、本寺にかへりて）

ほんじ　ナ梵字。ぼんじ、ぼんごんのもじ。てんぢくのもんじ。源氏若紫（あやしき、ぼんじとかいふ樣なる跡はさだめれど、御覽じとくべき節もやまじり付るとて）

ほんしき　ナ本式。まことのしき。たゞしきしき。

ほんじつ　ナ本日。けふ。そのひ。ほかならぬひ。

ほんしん　ナ本心。もとのこゝろ。まことのこゝろ。

ほんしや　ナ本社。もとみや。ほんけのやしろ。續拾（本社にまゐりておもひつゞけける）

ほんしやう　ナ本性。うまれつき。もとのこゝろ。宗盛卿（左大將、かゝるおもはしきはじまつるも、心ありや、辨ひてあたらもさまはねば、本性あらはしきこえさと）

ほんじよ　ナ本所。わやうけを見るべし。

ほんじよ　ナ本所。そのところ。そのやくしよ。平家十（小松殿の侍ぞりしが、十三の年、本所へまゐりたる）

ぼんしよう　ナ梵鐘。てらにつりさがりかね。

ほんしよく　ナ本職。まことのわざ。もちまへのしごと。

ほんしよく　ナ本色。もちまへ。まことのいろ。

ほんせき　ナ本籍。にんべつのあるところ。

ぼんせき　ナ盆石。おほきなる盆に、水をもりて、石をたてならべて、山水のけしきをつくるもの。

ほんぜん　ナ本膳。ぜんのほんしきのこしらへ膳、汁なその餘は、正面にすゑ、さまざまの膳の膳を、二膳、三膳として、左右にすゑさうらもの。

ほんざ　ナ本座。そのところ。そのやくしよ。源氏澪標（むかへのにはしいり、ほんざの人々めせてなんありける）

ほんそう　ナ奔走。さはがしくはしりまはるをいふ。

ぼんそう　ナ凡僧。僧官の名。大寺にては、別當より講師かゝる官にて、その位は、僧綱大法師位にはあらざりとぞ。でんとうのみところ見合すべし。競馬駒くらべ（さされ、十八な、かさうれ僧綱、かさうれ凡僧なり）

ぼんぞく　ナ凡俗。ぼんぞに同じ。夫木抄（律僧を凡俗と、いづれまて、念佛唱すべきを思ひきづらひけるは）

ほんぞん　ナ本尊。むねとたてゝまつるほとけ。深窓一（その本尊、ねんじみてまつるべくてこそなふとめ）

ほんたい　ナ本體。もとのすがた。まことのかたち。とりかへ一（かきならしたまふ琴の音も、樂器のほんさいおぼえて、人にすぐれたまへるを）同三（この人の御ほんさい、醜といふ琴、ある人なりけれど）

ほんだう　ナ本堂。ほんぞんをまつりたるだう。

ほんだう　ナ本道。おほぢ。まことのみち。たゞしきみち。

ほんたく　ナ本宅。まことのいへ。つねにすむいへ。

ほんだな　ナ本棚。ほんをのするたな。

ほんだな　ナ本店。ほんけのたな。あるじのゐるたな。

ぼんだら　ナ垂氷。たるひをいふ。羽前、羽後にて、

ほんち　ナ本地。ほんごく。もとうまれたるくに。

ほんぢ　ナ本地。もと。眞言宗などにていふ事にて、天照大御神の本地は、阿彌陀佛なりといふたぐひにて、阿彌陀佛の、かく天照大御神とせられたを、垂跡といふ。又、かゝ、神と佛とをまじへ說くを、兩部習合といふ。

ほんぢん　ナ本陣。たいしやうのゐるぢんや。また、驛路にある旅籠屋の、貴人のやどるべきところをいふ。

ほんて　ナ本手。まことのわざ。もちまへの芸ごと。

ほんてう　ナ本朝。わがくに。わがみかど。竹取五節詞（本朝のかせんまても候はねば、ひなけうけまゐらで申しおくべく候ふ。飛騨かせんはつき候ひて）

ほんでうし　ナ本調子。三味線の調子にいふことば。

ほんてん　ナ本店。ほんけのたな。あるじのゐるたな。

ぼんてん　ナ梵天。神の名。天竺の神にて、萬物をうみいだしつくりいだしたる神なりといふ。宇拾十（梵天、帝釋さとりてまもりさきひければ、をらちをるは、たちいできて、家の内ゆるくなりぬ）

ぼんてんたいしやく　ナ梵天帝釋。神の名。天竺の神に、ぼんてんとたいしやくとをいふ。

ぼんてんわう　ナ梵天王。神の名。ぼんてんに同じ。

ぼんとうろ　ナ盆燈籠。うらぼんにともすとうろう。

ぼんなう　ナ煩惱。にんげんのよく。ほとけをなりがたきまよひ。源盛（菩提と煩惱とのへだゝりなん、この人のよきあしきやりの都いかそりける）宇拾一（煩惱をきかすつきに、いたさとひさまつと）

ほんに　ソ本に。まことに。たがふことなく。

ほんにん　ナ本人。そのひと。まことのひと。

ぼんにん　ナ凡人。たゞびと。よのつねのひと。平治（太刀をぬき、うしろへまはれば、よくきれどてにらまれるはるまでさし、まことに凡人とはみえざりけり）

ぼんにん　ナ犯人。つみをおかしたるひと。十訓六（炎上ありて、火すでに、獄舎にうつりなんとしけるを、撿非違使の、犯人をいだすべき由申しければ）

ほんねん　ナ本年。ことし。そのとし。ほかならぬとし。

ぼんのくぼ　ナ盆窪。うなじのくぼみなるところ。著聞十六（閑院殿燒失の六の日、宮の左衛門などゝいふものゝ、ぼんのくぼは、太刀をき、倒くして）

ぼんのこ　ナ魚の名。ほしぶしをいふ。北越にて、

ほんのりと　ソ仄。ほのかに。かすかに。うすらかに。

ほんば　ナ本場。まことのもの。まことのところ。

ぼんばい　ナ梵唄。てらにてうたふうた。

ほんぱう　ナ本邦。ほんてう。わがくに。わがみかど。

ほんばこ　ナ本箱。ほんをおさむるはこ。

ほんぷ　ナ本府。ほんぞ。そのやくしよ。續千（南殿の櫻を、本府よりうゑ侍りける時、大内の花の盛には侍りければ、いにしへの、くもゐの櫻、たねしあれば、春はあひ、御代ぞまちける）

ぼんぷ　ナ[illegible]。みづもしき。みづぞうぞうのたぐひ。

ぼんぷ　ナ凡夫。たゞびと。ぼんにん。保元（八郎御曹司の矢、御覽候へ。凡夫の所爲ともおぼえ候はず）

ほんぶく　ナ本復。やまひのなほるをいふ。

ほんぶね　ナ本船。もとぶね。竹取五節詞（かぶとれ云ゝを、もろぶねにもとせて、ほんぶねはおきしほどは）

ぼんぼり　ナ雪洞。てしよくをいふ。京畿にて、

ほんま　ナ本眞。まこと。ほんじつ。

ほんまう　ナ本望。まことのねがひ。もとのこゝろざし。

ほんまつ　ナ本末。もとすゑ。はじめをはり。

ぼんまへ　ナ盆前。うらぼんにちかづきたるころ。諸國獨吟集（ぼんまへは、たどりてきぶらし、こしらへて）

ほんまる　ナ本丸。ねじろ。たいしやうのすみたるところ。信長記（本丸、石垣の石をひっぱらる）

ほんみやう　ナ本名。もとのな。まことのな。

ほんもの　ナ本物。まことのもの。ほんとのもの。

ほんもん　ナ本文。ほんのなかのぶん。また、ひじりのてほんとなどの、ふみにかきさるものにて、ひとのてほんとすべきもの。徒然五（罪のおもきざまにかろんじ、功のおもきをばおもんぜよといふ本文あり）

ぼんもん　ナ梵文。ぼんじ。てんぢくのもんじ。

ほんや　ナ本屋。しよりん。ふみあきびと。

ほんやく　ナ翻譯。外國の語を、この國の語にうつし、この國の語を、外國の語にうつすをいふ。

ぼんやりと　ソ朦朧。曖昧。ひかりなどのほのかなるさま。また、おろかなるさまなどにいふことぞ。

ほんらい　ソ本來。もとより。はじめより。

ほんりやう　ナ本領。りやうぶん。もとのちぎやう。

ぼんりよ　ナ凡慮。ぼんぶのかんがへ。

ほんゐ　ナ本位。ぶんゐといふに同じ。

ほんゐん　ナ本院。おりゐのみかど。但し、太上天皇の二所おはしますとき、前の太上天皇を申す稱なり。

ぼんをどり　ナ盆踊。うらぼんにをどるをどり。諸國獨吟集（ぼんまへは、たどりてきぶらし、こしらへて）

ほめあぐさ　ナ[illegible]。草の名。おほみるくさに同じ。

ほめく　ワヒヽリ。熱。ほとぼる。さて、なまぬるく。字鏡（吸、鴟、彼稀動貝、保女久、又奈留、又止々呂久）

ほめことば　ナ褒辭。ほめさゝへていふことぞ。

ほめそしり　ナ毀譽。ほむるとそしると。

ほめそやす　ワカケ。ヨ。讚揚。ほめもやす。あまりにほむ。

ほめたたふ　ワカケ。シ二。讚稱。ほめもやす。あまりにほむ。

ほめもやす　ワカケ。ヨ。讚揚。ほめさゝふ。あまりにほむ。

ほめる　ワカケ。シ一。褒。ほむを見るべし。

ほもめん　ナ帆木綿。ふねの、ほにもちゐるもめん。

ほや　ナ老海鼠。くらげのたぐひ。形なまこに似て、皿くして、色あかくくろぎみたり。土佐（ほやのつまのいずし、すしあはびをぞ、心にもあらぬはぎにあげてみせける）和名（老海鼠保夜、俗用此二字）

ほや　ナ寄生。やどりぎに同じ。散木（ふしぞは、やどれるほやの、おのれのみ、ときに、かちぞは、ものをこそ）

おもへ）和名（寄生一名、寄生和名、夜止里木一云保夜）

ほや ナ。穂屋。すゝきの、ほのつきたるまゝにてふきたるちひさきいへ。夫木卅三（すゝきふく、ほやののきぞの、ひとむらは、なびくや神の、あるしともみん）

ほや ナ。火屋。らんぷなどのひのめぐりをおほふもの。

ほや ナ。柴。しばをいふ。上野などにて。

ほや ナ。火事。いさゝかなるくわじをいふ。東国にて。

ほやう ナ。保養。みのすこやかなるやうにするをいふ。

ほやけ ナ。火焼。ひにやかれたるをさす。太神宮儀式帳（白人、古久美、川入、火焼罪乎、国罪止定給豆）

ほゆ ワ。ヒトリ。シニ。吠。吼。こゑたかくなく。虎、狼、犬などにいふ。万二（ときのふる、つゞみの音は、いかづちの、こゑときくまで、ふきなせる、小角の音も、あたみたる、虎か吼ると、もろびとの、おびゆるまでに）和名（玉篇云、嘷、虎狼聲也、唐韻云、吼、牛鳴也、吠、犬聲也、已上三字、訓皆保由）

ほよ ナ。寄生。やどりぎに同じ。万十八（足引の、山の木ずゑの、保與とりて、かざしつらくは、千年ほぐとぞ）

ほよおり ナ。穴夜織。ほほでみに同じ。

ほよく ナ。補翼。おぎなひたすくるをいふ。

ほら ナ。洞。いはなどの、あなの、うげて、おくふかくなりたるところ。菜葉（昔ふかき、洞の秋風、ふきすぎて、ふる色檜原の、音ぞかなしき）枕草八（名おそろしきもの、青淵、谷のほら）和名（洞、深遂之貌也、和名、保良）

ほら ナ。法螺。野螺。ほらがひに同じ。夫木廿九（山伏の、ほらふく峰の、夕霧に、そこともみえず、峰の上風）和名（千手経云、若爲召呼一切諸天善神者當于寶螺）

ほら ナ。法螺。寶螺。うそ。そらごと。いつはり。

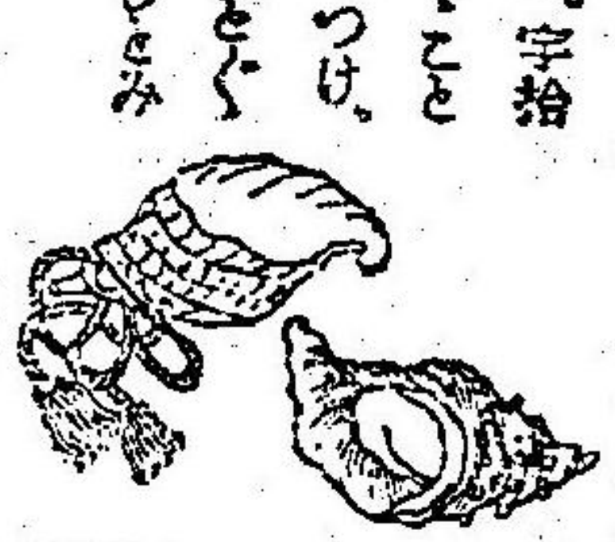
ほら ナ。鯔。魚の名。身まろく、頭ひらたく、背くろく、腹あをし。この魚の、ちひさくして、まだ、海にいでずて、河にあるを、いなともいひ、なよしともいふ。

ほらあな ナ。洞穴。ほらといふに同じ。

ほらかなり サ。豁。ほがらかなり。うちひらけたり。夜鶴庭訓抄（笛は、ところにしたがひて鳴り候ふぞ、内ほらかなるところの云々、くち一二などあるやうなるところは、このほかに鳴りさぶらふ）

ほらかに リ。豁。ほがらかに。うちひらけて。

ほらがひ ナ。法螺。寶螺。ほらのかひにてつくりたるふえにて、やまぶしなどのふくもの。宇拾二（むかし、人のもとに、ゆゝしくことごとしく、斧おひ、ほらがひ、腰につけ、錫杖つきなどしたる山伏の、ことゞしげなるいり来て、侍のたてじとみの内の小庭にたちけるを）



ほらくひ ナ。菝葜。草の名。さるとりをいふ。

ほらのかひ ナ。海螺。貝の名。形、さゞいに似て、おほきなるは、一二尺ばかりなるもあり。色はあかく、きばみて、薄紫なる斑あり。この貝の殻は、その尻をうがちて、笛につくる。ほらがひの絵を見るべし。

ほらのかひ ナ。法螺。寶螺。ほらがひに同じ。

ほらふき ナ。法螺吹。つねに、いつはりをいふひと。

ほらほら サ。豁。ほがらなり。うちひらけたり。古事記（内者富良富良、外者須夫須夫）

ほらふく ワ。ヒトリ。四。法螺吹。いつはりをいふ。

ほり ナ。堀。城のそとなどの、つちをほりめぐらして、みづをたゝへたるところ。落窪二（片岸を、堀におしつめられて、いとふかき堀に、えひきあげで、とかくもてさわぐほどに、時すこしうつりぬ）

ほりうがつ ワ。ナナ。四。堀穿。ほりて、あなをあく。

ほりえ ナ。堀江。かたをほりぬきて、うみへとほしたるところ。万七（さよふけて、堀江こぐなる、まつらぶね、かぢおとたかし、みをはやみかも）

ほりえ ナ。堀江。江の名。摂津にあり。古今（堀江こぐ、棚無小舟、ゆきかへり、おなじ人にや、こひわたりなん）

ほりかは ナ。堀川。地の名。山城にあり。詞花（水上へ、定めてければ、君が代に、ふたゝびかへる、堀川の水）

ほりき ナ。塹。城のめぐりのほり。和名（塹、和名、保利木）

ほりす ワ。カ。カ。欲。ほる。えんとねがふ。万六（みる人の、かたりにすれば、きく人の、みまく欲して）

ほりたてばしら ナ。堀立柱。ひたつちにたてたるはしら。

ほりぬき ナ。堀拔。ほりうがちてぬきたるをいふ。

ほりぬきゐど ナ。堀拔井戸。ゐどの、つちをほりうがちて、みづのきいづるをくみとるやうにしたるもの。

ほりもの ナ。彫刻。いたのうへなどに、もののもやう、もののかたちなどをきざみつくりなすをいふ。

ほりもの ナ。刺繍。いれずみのあやをしるしたるもの、

ほりものし ナ。彫刻師。ほりものを業とするひと。

ほりわり ナ。堀割。みぞの、かはのごときところ。

ほりゐど ナ。堀井戸。ほりぬきゐどに同じ。

ほる ワ。カケ。四。堀。あなをあく。くぼくなす。ねながらぬきとる。万十六（佛つくる、まそほたらずは、水たまる、池田の朝臣が、鼻の上を掘れ）古今（花の木も、今は堀うゑじ、春たてば、うつろふ色に、人ならひけり）

ほる ワ。カケ。四。彫刻。ゑる。きざむ。ほりものをなす。

ほる ワ。カケ。四。欲。えんとねがふ。そのものをえんとおもふ。万十八（わが保里し、あめはふり来ぬ、かくしあらば、ことあげせずとも、としはさかえん）

ほる ワ。ヒトリ。シニ。恍惚。ほろめきてみゆ。六帖六（鳥ならば、あたりの木々に、かくれゐて、ほれたる聲に、我なかましを）落窪一（いかなる事いでこんと思ひなげきて、つらづゑをつきてほれて居たるを）

ほる ワ。ヒトリ。シニ。戀慕。れんぼす。こひしたふ。

ほるもかに ソ。仄。ほのかに。まれらに。雄略紀（減没）

ほれい ナ。牡蠣。かき。また、かきがらの、やきて、こにしたるもの。常に、くすりにもちふるものなり。

ほれぐすり ナ。惚藥。いもりのくろやきに同じ。

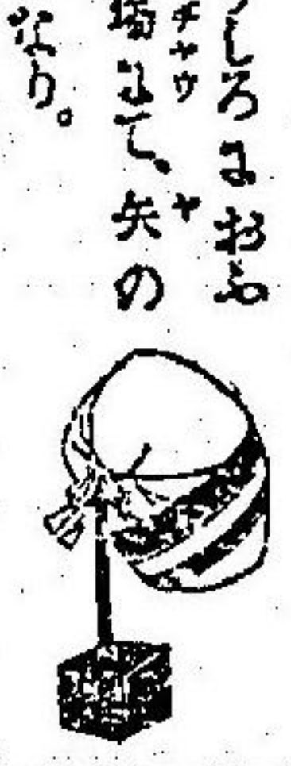
ほれぼれし サ。フ。恍惚。ほろめきたり。空穂上（今はほれぐしうなりて侍れども、その内にも参りて、いとよくきこしめさせ侍りなん）頭書（あらぬさまに、ほれぐしうなりて、ながめすぐしさぶらふめれど）

ほれぼれす ワ。ヒトリ。カ。惚々。ほれにほる。いたくほる。

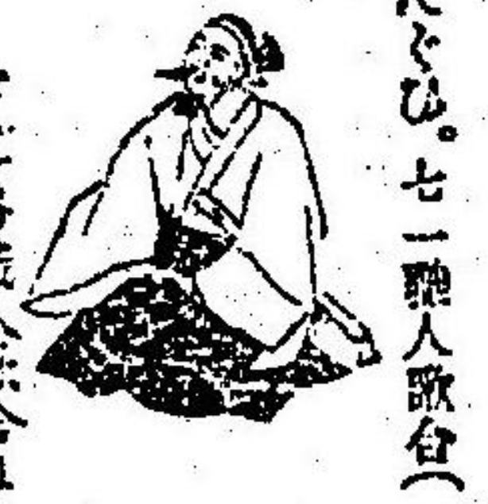
ほれもの ナ。惚者。ぼけもの。おろかなるもの。

ほれる ワ。ヒトリ。シ一。戀慕。れんぼす。こひしたふ。

ほろ ナ。母衣。よろひのうしろにおふふくろのごときもの。戦場にて、矢のふせぎにもちふるものなり。



ぼろ ナ。暮露。ぼろぼろ。こもそうのたぐひ。七十一番職人歌合（暮露、法の月、ひろくすまして、武蔵野に、おきゐるぼろの、草の伏かな）徒然草（ぼろぼろの、この御中に、いろをし房と申すぼろやおはしますとたづねければ）



七十一番職人歌合にみえたるぼろの図

ほろがや ナ。母衣蚊帳。かやの、ほろのごとくしたるものにて、うへよりおほひかくるやうにしたるもの。

ほろぎり ナ。散切。ほろほろにきりくだきたるもの。庖丁聞書（あぶびしほといふは、鮑をほろぎりにして、えりなつをそねつをもるなり）

ほろきれ ナ。襤褸。つゞれの、ぼろぼろになりたるもの。

ほろけ ナ。散毛。なのはきのさきにそえたるけ。

ほろし ナ。瘾疹。むさに、つぶだちていでくるちひさきもの。蚊などにさゝれたるあとなどにいでくるものなり。和名（風瘙疹、和名、加佐保路之）

ほろせ ナ。瘙疹。ほろしをいふ。九州などにて。

ほろに ソ。散々に。ちらゝに。万十九（天雲を、ほろにふみあだし、なる雷も、けふにまさりて、畏けめやも）

ほろで サ。散羽。ほろげに同じ。

ほろびる ワ。ヒトリ。カ一。亡。滅。ほろぶを見るべし。

ほろぶ ワ。ヒトリ。カ二。亡。滅。なくなる。きえうせつ。うせさる。この語は、地方によりては、ほろびるを上一段にいふ。佛足石歌（大御跡を、みにくる人の、いにしかた、千代の罪さへ、保呂夫とぞいふ）伊勢（身もいたづらになりぬべければ、つひにほろびぬべしとて）

ほろぼす サ。カゲ。四。亡。滅。なくならしむ。きえうせしむ。うせさせしむ。万十五（君が行く、道のながてを、くりたゝね、也伎保呂煩散牟、天火もがも）空穂俊蔭（己が身は、この山にほろぼしつとおもふものから、おもしろきところをなして、阿修羅の中にまじりぬ）

ぼろぼろ ナ。暮露。ぼろ。こもそうのたぐひ。徒然草（宿河原といふ所にて、ぼろぼろおほくあつまりて、九品の念仏を申しけるに、外より入り来るぼろぼろの）

ほろほろと ソ。散々に。ちらちらと。夫木卅六（たびづとに、もたるかれいひの、ほろほろと、涙ぞおつる、都おもへば）枕草九（風のいたうふくに、黄なる木の葉どもの、ほろほろとこぼれおつる、いとあはれなり）

ぼろぼろと ソ。散々に。ちらちらと。

ほろほろに ソ。散々に。ばら〱に。

ほろぼろに ソ。散々に。ばら〱と。

ほろみそ ナ。法論味噌。ほうろんみそ。焼味噌をほしかためして、こまやかにきざみて、胡麻、麻の実、胡桃、山椒などを、さま〲にきりまぜたるもの。貞丈雑記

ほろよひ ナ。微酔。ほろゑひに同じ。

ほろりと ナ。涙の、ひとしづくおつるさまをいふ。

ほろろうつ ワ。ヒトリ。四。拍子なく。きゞす、むらくさしてなく。夫木集（きゞすなく、あしたのはらを、すぎゆけば、さきだちてめきり、ほろゝうつなり）

ほろろぐ ワ。カケ。シ二。散。ちらかす。ほろくはなす。源氏鈴虫（荷葉の方をあはせたる名香、みちをかくし、ほろゝげてたきにほはしたる、ひとつ香にほひあひて）

ほろろと リ。拍子のなきこゑ。古今（春の野の、しげき草葉の、つまごひに、とびたつきじの、ほろゝとぞなく）

ほろゑひ ナ。微酔。さけに、すこしゑひたるをいふ。

ほゐ ナ。補遺。のこりたるをひろひて、おぎなふをいふ。

ほほでみ ナ。火出見尊。ほほでみに同じ。

ま

くちびるはなれていづるひとつのこゑにて、むと、めとかよひなれるこゑなり。されば、むの、おやごゑとかよひなれるなり。

ま ナ。馬。獣の名。うまに同じ。万廿（鵜坂川、わたる瀬おほみ、このわが馬の、あがきの水に、衣ぬれにけり）

ま ナ。魔。ひとをまどはすおに。ひとを、あしきみちにいざなふおに。悪魔。秋（慈悲心は、うどんげをりはいらんみ、すこし身のうれへやあらん）

ま ナ。間。いへのうちの、屋ぎりたるところ。枕草九（宮の御前の、御ひつのまは）

ま ナ。間。ひま。あひだ。貫之集（きみがむの、木の下に、秋の風こそ、のどかなりけれ、間なくちり）

ま ナ。目。めに同じ。但し、他の語のうへにおきていふときのことばなり。まぶた、まじりのたぐひ。

ま ツケ。接。まこと。まことの。万廿（旅とへど、真旅になりぬ、いへの妹が、きせし衣に、あかつきにけり）

ま タ。ダスケ。真。駄言、きまへ、駄語のせべといふ語に同じ。但し、むな、形き、まといふ。

ま ツケ。今。いま。まひとつ、ますこしのたぐひ。

まあ ナ。馬。うまをいふ。下総などにて、

まあ ナゲキ。嗟乎。あゝ。あゝはれ。

まあ リ。先。まづ。しばらく。

まあ ナ。今。いまといふに同じ。

まあかに ソ。真赤。まつかに。まことにあかく。

まあそぞ ナ。間合。あいだのへだて、そのように〱をいふ。

まあひ ナ。間合。あひだ。ほどのあひだ。

まおまお リ。徐々。まづなかるといふことなり。

まおめ ナ。馬。うまなり。下総、常陸などにて、

まおり ナ。風の名。東北よりの北風をいふ。北国にて、

まい ナ。鳥牛。くろうし。和名（鳥牛伊爲牛也）

まい ナ。枚。ひら。ひらみなるものをかぞふるときのことば。源氏（みちのくにがみ五六枚は、つぶくと、あやしき鳥のあとのやうにかきて）

まいあさ ナ。毎朝。あさごと。あさなく。

まいか ナ。真烏賊。するめになるいか。

まいぎよ ナ。枚挙。ひとつぐかぞへあぐるをいふ。

まいげつ ナ。毎月。つきごと。つきぐ。

まいこ ナ。毎戸。いへごと。いへぐ。

まいさう ナ。埋葬。うづめてはうぶるをいふ。

まいす ナ。売僧。そうをのゝしりてよぶことば。

まいせき ナ。毎夕。よごと。よなく。

まいちど ソ。今一度。いまひとたび。いまひとたび。

まいちもんじに ソ。真一文字。まつすぐに。ときめもふらずは。上形標庶進状（飯宮、穴山が跡へ、はりあひ、中務一次郎は切りて退り候ぞ）

まいて ソ。況。まして。源玉蔓（ふしたはいちつきてれ、きいて、とあらなる稲を、おもひやりてとひなきて）

まいてう ナ。毎朝。あさごと。あさなく。

まいど ソ。毎度。たびごとに。たびく。

まいにち ナ。毎日。ひごと。きのふもけふも。

まいねん ナ。毎年。としごと。とし〲。

まいだけ ナ。眉掛。まゆむきをみるべし。

まいはだ ナ。槇皮。まきなど、ふねのぬ。

まいばん ナ。毎晩。よごと。よる〲。

まいふく ナ。埋伏。うづもれさるがごとくにてかくれてゐるをいふ。戦場にて、兵士をかくしおくをいふ。

まいぼつ ナ。埋没。うづもれてみえずなるをいふ。

まいまい ソ。毎々。たび〲。あまたゝび。

まいみ ナ。物忌。まつりにおづるひとの、三日の間は、するものいみ。神事にちかづきてする物忌まて、なねてする荒忌にむかへていふ語なり。和泉式部集（ちぎりしを、たがやべしやれ、いつくしき、あらいみまいみ、きよまはるとも）国六暦（散齋荒忌、致齋眞忌）

まいや ナ。鮭役。よごと。よるべもこよひも。

まうあく ナ。猛悪。たけくしてあらきをいふ。宗玉大双紙（一は、胡乱、猛悪にして、欲心はふかける人）

まうかのしゆん ナ。孟夏旬。公事の名。四月一日におこなはれ、まつりごとをみせしむ。公事根源（孟夏旬、是れ、天子、夏冬の季のあらたまるをしめす。臣下は、御酒をたまふ。まつりごとなり）

まうく サ。カケ。シ二。設。まく。こしらふ。そなへをなす。ようゐをなす。この語れ、端ぞよりこれ、まうけるとて下一段にいふ。万廿（まくらもり、猶も設くる時は）

も、まちしてあらば）伊勢（御子よろこびさまひて、よるのおとゞのまうけさせさまへ）宇拾廿（淀まで、船はのりける程は、ひとまうけしたりければ）

まうく サ。ヒトリ。シ二。収益。りえきをう。とくをなす。

まうく ワ。ヒトリ。カ。参来。まゐりく。まゐりきたる。

まうけ ナ。設。そなへ。ようい。こしらへ。源明石（この世のまうけは、秋のたのみをかりをさめ、のこりのよはひつむべき、稲のくらまちども云々おつめさり）

まうけ ナ。収益。くぼさ。りえき。りとく。

まうけのきみ ナ。儲君。ひつぎのみこ。源桐壺（うたがひなき、まうけの君と、世にもてかしづききこゆれど）

まうけのみや ナ。儲宮。ひつぎのみこ。舒明紀（東宮）

まうける サ。カケ。シ一。設。まうくを見るべし。

まうける サ。ヒトリ。シ一。収益。りえきをう。とくをなす。

まうご ナ。妄語。うそ。いつはり。そらごと。

まうさう ナ。妄想。みだりなるおもひ。

まうす ソ。申。まうす。まうすこれ、この語れ、まうすなりのべたる語ながら、作用言はかならず。竹取（御のおほせ事をかなへて申さく、御の事れいふもたふとし）

まうし ナ。猛志。たけきこゝろざし。ますらをのこゝろ。

まうしあぐ サ。カケ。シ二。申上。わひあぐ。みことあぐ。この語れ、端方より、まうしあげると下一段にいふ。十訓六（謀帯を取きて、謹司に申しあげさせたりければ）

まうしあげ ナ。上申。たかきひとにまうすなるをいふ。

まうしあげる サ。カケ。シ一。申上。まうしあぐを見るべし。

まうしじう ナ。猛獣。たけきけだもの。十訓三（戦きく、猛獣れ、人を得てすゝまず、故に、君はちかづき、まつるをおそれて、彼はあるとぞ申しける）

まうしそぐ サ。カケ。シ二。申交。まうしてのぶ。

まうしで ナ。申出。神にいのりてまうけさるて。

まうしでやう ナ。申状。申やす。そじやう。うれへぶみ。

まうしたて ナ。申立。つぶさにまうしあぐるをいふ。

まうしつぎ ナ。申次。いひつぎ。とりつぎ。

まうしどの ナ。申殿。やしろの、のりとをまうすところ。

まうしとほす サ。カケ。四。申通。まうしおくる。おくまでまうす。空穂上巻（むかし、この殿はさぶらひし下部なれまゐりさると、これ申しとほせさまへ）

まうしとる サ。カケ。四。申取。まうしてとる。かなふやうこまうす。狹衣一（まさ、この御願もあまりつるな、あさらしきこうれとて申しとりさる）

まうしひらく サ。カケ。四。申開。いひとけなす。

まうしふ ナ。妄執。まよひやく。みだりなるおもねん。

まうしぶみ ナ。申文。うれへぶみ。まさ、官位をのぞみまうすふみ。枕草一（除目の程など、内わたりいとおかし。雪ふり、氷などしたるに、申文もてありく）徒古（下れへなみの官といふものをおそれさりければ、道の民百姓まで、まうしぶみもてきたりて）

まうしぶん ナ。申分。いひなん。いひぶん。けんくわ。

まうじん　ナ。盲人。めしひ。めくら。めのみえぬひと。

まうじや　ナ。亡者。なきひと。なきたま。ゆうれい。

まうしやう　ナ。猛將。たけきたいしやう。

まうしわけ　ナ。申分。いひわけ。いひひらき。[illegible]

まうしわたし　ナ。申渡。いひきかし。いひきかせ。

まうす　ワ。カナ。四。申。つげたてまつる。きこえたてまつる。万廿（堀江より、みをびきしつゝ、御船さす、しづをのともは、河の瀬まうす）竹取（男六人つらねていできさり、一人の男、ふみはさみに、文をはさみてまうす）

まうす　リ。ヒトリ。四。稱。いふ。なづく。なづけまをす。伊勢（むかし、田村の帝とまうす帝おはしましけり）

まうせいに　リ。猛勢。さかんに。いきほひたけく。

まうせん　ナ。毛氈。かも。毛を、綿にまじへて、おしひらめてこしらへたるものにて、敷物にもちふるもの。緋にそめたる、また、花鳥をそめいだしたるなどあり。

まうそう　ナ。孟宗。竹の名。まうそうちくに同じ。

まうそうちく　ナ。孟宗竹。竹の一種。支那の種をうつしたるなりといふ。幹ふとくして、おほきなるは、さしわたし一尺ばかりなるもあり。葉はほそくほそやかにて、竹子のいでくる事はやし。

まうちきみ　ナ。公卿。まへつぎみに同じ。源竹河（むつまじく、さるべきまうちぎみたちたてまつられたまふ）

まうづ　ダ。ヒトリ。シ二。詣。まゐる。この語は、地方によりては、まうでると下一段にいふ。伊勢（むかし男ありけり云々、子は、京にみやづかへしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず）枕草十一（こゝろづきなきもの、ものへゆき、寺へもまうづる日の雨）

まうできたる　ワ。ヒトリ。四。詣來。きたるといふに同じ。宇拾一（男どもまうできたりといへば、不定の事なりといふ程に、たちわろくなりて）

まうでく　ワ。ヒトリ。カ。詣來。きたるといふに同じ。古今十（ふかくさの里にすみて、京へまうでくとて、そこなりける人に、よみておくりける）宇拾二（男ども、むかへには、馬に、鞍おきて、二疋ひきてまうでこといへ）

まうでる　ワ。ヒトリ。シ一。詣。まうづを見るべし。

まうと　ナ。客。まらうど。まさ。まらうどをよぶことぞ。又花初（まうとどちは、かくては、天の咎をかうぶりなん）宇拾十一（おなじくしうて、まうとは、いかで、なさけなく、なさけなきものをかくれするぞといへど）

まうとう　リ。毛頭。いさゝか。すこしも。

まうとうのじゆん　ナ。孟冬旬。公事の名。十月一日におこなはれたり。下文を見るべし。公事根源（孟冬旬、十月一日は、まづ御衣更あり。掃部寮、夏の御裝束を撤して、冬のにあらためかふ。天皇、南殿に出御ありて、節會あり。是を、孟冬の旬とは申すなり）

まうなり　ナ。猛。たけし。さかんなり。落窪四（騰たまふ事も同じやうまで、まうなる事どもなれやかふす）

まうに　リ。猛。たけく。さかんに。落窪四（いとまうにきらくしき法師になんありける）徒然草（勢まうにのゝしりたるにつけて、いみじとはみえず）

まうねん　ナ。妄念。まよひ。まよふねん。まうざう。

まうのぼる　ワ。ヒトリ。四。參上。まゐるといふに同じ。源桐壺（まうのぼりたまふにも、あまりうちしきるをりをりは、うちはし、わたどの、こゝかしこのみちに）

まうはつ　ナ。毛髮。かみ。かみのけ。

まうふ　ナ。毛布。けおりもの。ふらんけつと。

まうぼる　ワ。カケ。四。貪欲。むさぼる。また、たゞ、くふをいふに同じ。空穂藤原君（かくてやしなひまゐるほどに、まうぼるもの、日に、橘ひとつ、柚みつ、まうぼらず云々、今はくだものゝさまも、いさゝか、物まうぼらで、日頃へぬ）

まうまうに　ソ。云々。おいぼれて。源若菜（まうまうに、耳もおぼ〳〵しかりければ、あゝとかたぶきて）

まうもく　ナ。盲目。めしひ。めくら。めのみえぬひと。

まうら　ナ。眞裏。まことのうら。たゞしきうら。

まうら　ナ。網羅。あみをもてひきつゝむをいふ。

まうらう　ナ。孟浪。みだりにて、とりとめもなきをいふ。

まうりやう　ナ。亡靈。なきたま。いうれい。

まうれつに　ソ。猛烈。はげしく。きびしく。

まうろく　ナ。老碌。おいぼれたるをよぶことぞ。

まうゐ　ナ。猛威。たけきいせい。つよきいきほひ。

まおもて　ナ。眞面。まむかひ。まことのおもて。

まが　ナ。禍。わざはひに同じ。古事記（訓禍云麻賀）

まかい　ナ。眞楫。かいといふに同じ。万廿（ふせの海に、小船つらなめ、眞可伊かけ、いこぎめぐれば）

まかい　ナ。魔界。あくまのせかい。あくまのゐるところ。

まがかみ　ナ。禍神。まがつび。わざはひをなすかみ。

まがき　ナ。籬。ませがきに同じ。古今（里はあれて、人はふりにし、宿なれや、庭もまがきも、秋の野らなる）

まがきのしま　ナ。籬島。地名。陸奥にあり。古今（わがせこを、都にやりて、鹽竈の、籬の島の、まつぞ戀しき）

まがきぶし　ナ。籬節。小唄の名。大阪の遊女に、まがきといふがありて、うたひいだせる一種の小唄なりとぞ。

まかげ　ナ。目陰。瞬。日のうへに、手をかざすをいふ。とほきかたをみるときなどにする事なり。源藤裏（うしろめたげにけしきばみたる御まかげにこそ、わづらはしけれとて、ひらびきこゆるか）盛衰記廿（たかき峰にのぼり、まかげをさしてみまはせば）

まがこと　ナ。禍事。わざはひ。わろきこと。祝詞式（天能麻我都比登云神乃言武惡事爾）

まかごや　ナ。眞鹿兒矢。まかごをいるや。万廿（たじゆみを、たにぎりもたし、麻可胡也を、たばさみそへて、大久米の、ますらたけをを、さきにたて）

まかす　ワ。カク。シ二。任。ゆだぬ。そのすなはちなす。この語は、地方によりては、まかせると下一段にいふ。新古（やかずとも、草はもえなん、春日野を、たゞ春の日に、まかせたらなん）狭衣四（身をば心にまかせぬやうにて、さてくれ、思ひなげきあつかふめるに）

まかす　ワ。カケ。四。負。まけしむるをいふ。東國にて。

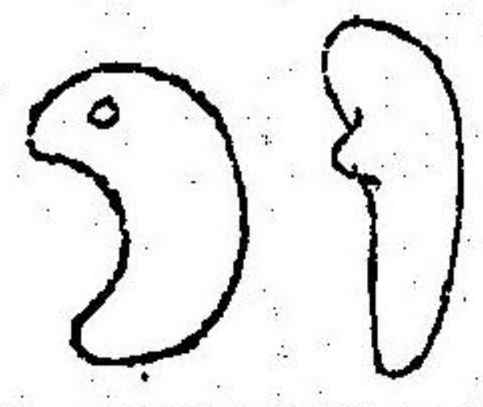
まかず　ナ。間數。いへのうちのまきりのかず。

まかぜ　ナ。眞風。かぜといふに同じ。

まかせる　ワ。カケ。シ一。任。まかすを見るべし。

まかたち　ナ。侍婢。こしもと。古事記（從婢）

まがたま　ナ。曲玉。まがりたるたま。瑪瑙に似たる玉にて、いにしへ、絲にぬきて、頸のかざり、また、手足などよりはじめて、衣服、太刀など、なにくれとなく、飾につけたるもの。



まかぢ　ナ。眞楫。かぢといふに同じ。万三（おほぶねに、眞楫繁貫おろし、いさなとり、海路にいでて）

まかづ　ワ。ヒトリ。シ二。退出。まかりぞく。まかりていづ。源須磨（まゐるひとびとも、みな、たちながらまかづれど）

まがつび　ナ。禍津日神。おほまがつびに同じ。

まかでおんじやう　ナ。退出音樂。まかりぞきまかづるときの、おんがく。紫式部日記（ちやうけいしを、まかでおんじやうにあそびて、山のさきの道をまふ）

まがなし　サプ。麻悲。まことにかなし。万十四（麻可奈思美、さねに我はゆく、かまくらの、みなのせ川に、しほみつなんか）同二十（枕太刀、こしにとりはき、麻可奈之伎、せろがまきこん、つくのしらなく）

まかなひ　ナ。賄。まかなふこと。まかなふひと。とりそへ（御酒まかなひは、中務のめのとさぶらひて）

まかなひ　ナ。賄。くひもの。べんたうのたぐひ。

まかなふ　ワ。カケ。四。賄。とりつくろふ。とりおこなふ。また、くひものなどをあておこなふをいふ。枕草五（とりおろし、まかなひさわぐほどに、雨ふりぬべしといへば）狭衣一（いかにこうじさせ給ひぬらんと、御てづからまかなひすゑてそゝのかしきこえ給へど）

まがなもて　ヤクヲ。眞鉇以。まがなは、鐵をほめていふことにて、鉇は、弓などをけづるにもちふるものなれば、ゆげにかけていふ。万七（眞鉇持、弓削の河原の、埋木の、あらはるまじき、事にあらなくに）字鏡（擬　万加奈不）

まがね　ナ。鐵。くろがね。催馬樂（末加禰ふく、吉備の中山、おびにせる、細谷川の、おとのさやけさ）

まがねふく　ヤクヲ。眞金吹。まがねは、くろがねなり。さて、きびにかゝる冠らするは、吉備、丹生などは、眞金をいだす地なればなり。丹生は、上野國、甘樂郡、丹生郷の事ならんといへり。催馬樂（末加禰不久、支比の中山、帶にせる、細谷川の、音のさやけさ）万十四（麻可禰布久、爾布のまそほの、色にいでて、いはなくのみぞ、わがこふらくは）

まかは　ナ。瞼。まぶた。源紅葉賀（みかへりさるまみ、いたうみのべされど、まかはは、いたく黑みおちいりて）

まがはし　サプ。紛。まぎらはしに同じ。

まがひ　ナ。紛。にせてつくりたるもの。

まがひ ナ。躓。つまづくをいふ。祝詞式（手躓足躓）

まがふ ワ。ヒトリ。四。紛。混。まぎる。みだれておゆ。みだれてちる。万五（妹が家に、ゆきかもふると、みるまでに、こゝだも麻我不。うめのはなかも）源。総木（ほころ、声はくちびるまがひておかしきほどなり）

まかぶら ナ。瞼。まぶち。まなかぶら。宇拾十（左京大夫なるひと云々、色は、浜なりけるやうにて、まかぶらくぼく、鼻の、めざやかにたかくあかし）

まがほ ナ。真顔。まことのかほ。まことめきたるかほつき。

まがまがし サ。ブ。禍々。まがごとめきたり。いまいましくあり。枕草一（いかなる心にかあらん、うちつる人をのろひ、まがまがしくいふもやさし）源。幻（花の宜じし事な、まがくしりのさまやとてふしめはなりて）

まがみ ナ。真神。狼の名。おほかみ。万二（大口の、真神の原に、ふる雪は、いたくなふりそ、家もあらなくに）

まがみのはら ナ。真神原。地の名。大和国、高市の郡にあり。万八（おほくちの、真神之原に、ふる雪は、いたくなふりそ、いへもあらなくに）

まがみふる マクラ。真髪觸。きざみれ、髪なはめていふことぞまで、くしにかけていふれ、髪はふるゝものなれば、櫛といふ物あればなり。神代紀（真髪触奇稲田姫）

まがゐ ナ。屈曲。すつぽんをいふ。周防などにて、

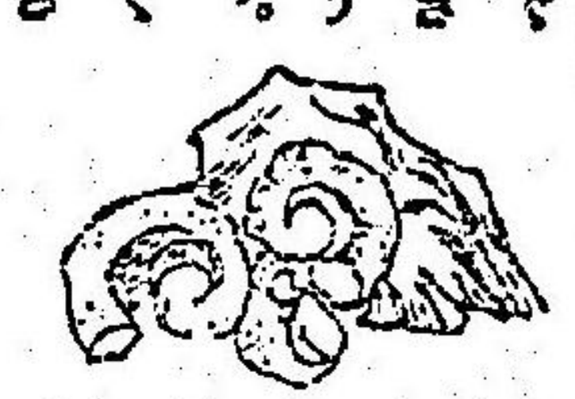
まがも ナ。真鴨。鴨の一種。あをくびに同じ。

まかやき ナ。紫葳。蔓草の名。のせうに同じ。和名（紫葳、一名、陵苕、和名、末加也木、一云陵世宇、蘇敬注云、一名、陵苕）

まかまかふ ワ。ヒトリ。四。目蹴。めにかゞやく。ひかり、めにうつる。山家集（ませならで、なにをあるじに、おもひまし、月もまつよふ、さらしなのむな）

まがり ナ。糫餅。菓子の名。ふそに似たるものにて、形のまがりたるもの。和名（糫餅形如藤葛者也、和名、萬加利）

まがり ナ。麻加利。貝の名。かきのたぐひの介にて、磯辺の岩などにつきていでく。殻の状、まがりくねりて、うづまきの、なからとこぼれたるに似たり。



まがり ナ。麻賀利。器の名。なべのたぐひ。又、あらにしなどにてつくりたるさかづき。空穂物語（酒、そゝんはいれてすゑて、まがりしてもたしつゝのまう）枕草（水をめしけるに云々、かなまりをまゐらせよとて）

まかりいづ ワ。ヒトリ。シニ。罷出。まかるをいふに同じ。

まがりかど ナ。曲角。みちの、まがれるところ。

まがりがね ナ。曲尺。たくみのもつものさしにて、それまがりたるごとくなりたるもの。和名（曲尺、末加利加禰）

まがりくねる ワ。ヒトリ。四。曲折。さまざまにまがる。

まかりでる ワ。ヒトリ。四。罷出。ゆくをいふに同じ。

まかりぢ ナ。罷路。よみぢ。死にてゆくみち。欽紀廿一（美[illegible]之大臣乃桶邇幸等之言謂之八心皆實[illegible]）

まがりさめ ナ。曲[illegible]。それまがりたるもの。

まかりなる ワ。ヒトリ。四。罷成。なるをいふに同じ。盛衰記（長者の娘千手前とて、ことし二十にまかりなる）

まがりのたま ナ。曲玉。まがたまに同じ。

まかりのぼる ワ。ヒトリ。四。罷上。のぼるをいふに同じ。後拾（斎宮よりまかりのぼりて侍りける人に、志のびてかよひける事を、おほやけもきこしめして）

まかりまうし ナ。罷申。いとまごひ。源。薄雲（たきしめさうぞきたまひて、まかりまうししたまふさま、くまなき夕日に、いとゞしくきよらにみえたまふ）

まがりみち ナ。曲路。まがりたるみち。ゆがみたるみち。

まがりもち ナ。糫餅。まがりに同じ。字鏡（餫万加利）

まかる ワ。ヒトリ。四。罷。退。くだる。まりぞく。まゐるのとゝろ見合すべし。万廿（をかせてか、けぶし麻可良ハ、白妙の、袖をふりはへ、みつゝ志のばん）拾遺（初瀬へまうで侍りける道に、佐保山の下にまかりやどりて）

まかる ワ。ヒトリ。四。負。あたひをさげてやすくなす。

まがる ワ。ヒトリ。四。曲。なる。ゆがむ。かゞむ。かゞまる。

まかれ サ。死。まかるといふに同じ。古事記（或有邪心者、天若日子、於此矢麻賀禮云而取其矢）

まがでるし サ。ヒ。明顕。をりをろし。めづらしげにあり。

まき ナ。真木。槇。木の名。いぬまき。まさ、檜、杉などをいふ。和名（被木、今案、又云杉一名也、不名作柀理之、能不窪音也）

まき ナ。牧。うまき。うし、うまなどを、はなちかひにするところ。狭衣三（衣のすそをふみつゝ、すそくはだたれつゝきつれ、牧の駒のこゝちぞしける）

まき ナ。薪。たきゞをいふ。京畿などにて、

まき ナ。巻。ふみなどの、まくごとくしたるもの。まき、ふみなどをかぞふるときのことば。古今序（すべて、千歌はたまき、なづけて、古今和歌集といふ）

まき チ。開木。まきのうへ。なげしのうへ。宇拾二（玉さゝの、まきはさゝげられたるおほきまきてぞあれ）

まき ク。芽巻。ちまきをいふ。女の詞なり。禁裏女房内々記

まき ワ。任。まからせ。万十八（大君の、任のまにまに、御命かふる、越にくだり来）

まきいは ナ。曲岸。まがりいはに同じ。万五（ぬぜいはの、蘇宜保の内は、ひろうちは、さらとはしきて）

まきえい ナ。巻纓。えいの、うらへまきたるもの。装束抄廿（衣冠に、巻纓して、緌なかけたりける）

まきおもて ナ。鹿蹄草。いちやくさうをいふ。大和にて、

まきがみ チ。巻紙。さんぎりの紙なるもの。

まきがり ナ。巻狩。やまのめぐりをかこみてするかり。

まきぎぬ ナ。巻絹。きぬの、まきたるもの。

まきくさ ナ。地膚。草の名。ほゝきぎ。茎れあさのごとく、葉れやなぎに似てちひさし。茎は、帚につくるものなり。和名（地膚、一名、地葵、和名、爾波久佐、一云末木久佐）

まきさく マクラ。真木析。まきれ、檜の木にて、檜れ、いにしへは、宮殿などまでさきてもちひたる事にて、ひにかけていふれ、そのさきたる真木の、檜といふこゝろにてかくるなり。継体紀（枕真木佐具、檜能伊陀図を、おしひらき、われいりまし）

まきずるめ ナ。巻鯣。するめをまきて、こまりにしたるものにて、うづまきのごとくなれるもの。庖丁聞書（うすくりをいふれ、巻鯣をまりきるをいふなり）

まきぞへ ナ。巻添。ひとのつみにかゝりあふをいふ。

まきぞめ ナ。巻染。まきてそめたるもの。きぼりのたぐひをすべていふ。夫木六（ふるさとの、よろこびのはれば、むらさきの、まきぞめ衣、松ろとぞみる）

まきはな ナ。槇花。まきのはな。まみなみのきうら。

まきだけ ナ。巻竹。ゑをまきて、あらをつくるとぞ。

まきたばこ ナ。巻煙草。たばこの、つゝのごとくまきたるもの。葉のみまきたるも、紙にてまきたるもあり。

まきぢく ナ。巻軸。まきものをいふに同じ。

まきつつみ ナ。巻包。おしまきてつゝみたるもの。

まきのうなゐ ナ。牧童。うしかひわらべ。まきのうしうまをかふをさなご。新六（牛とより、牧のうなゐが、ふく笛は、みなきさとりの、あるべきぞきく）

まきのと ナ。槇戸。まきのいたどのかど。源。須磨（むすめすませたるかたは、こゝろことにみがきて、月いれたる槇の戸口、けしきおりしあけたり）

まきのまにまに ッ。随任。つかさにまけらるゝまゝに。万十八（おほきみの、末伎能末尓末尓、とりもちて、つかふる国の、年のうちの、事かたねもち）

まきのをやま ナ。槇尾山。山の名。山城にあり。続古（立のぼる、河瀬の霧や、晴ぬらん、槇尾山を、いづる月影）

まきば ナ。牧場。まき。うしうまをはなつところ。

まぎは ナ。間際。まさにそのきは。そのことのとき。

まきばしら ナ。槇柱。まきのはしら。万二（真木柱、ふとき心れ、ありしかど、このわが心、しづめかねつも）

まきばしら マクラ。真木柱。はしられ、ふときをたふとぶものなれば、ふときにかけていふ。万二（真木柱、太こゝろれ、ありしかど、このわが心、しづめかねつも）

まきはだ ナ。槇肌。ふねのゝめ。檜のあまはだをうちてみて、しきたるものにて、船の板目などにうちこみて、水のさしいるをふせぐなどにもちふるもの。

まきはら ナ。槇原。まきのはやし。玉葉（旅ならき、なかひの山に、霧されて、あらわれそゝる、ひとむらまきはら）

まきふで ナ。巻筆。いとにて、ちくをまきたるふで。

まきめぐる ワ。ヒトリ。四。巻廻。まくごとくにめぐる。

まきもく ナ。巻向。地の名。大和にあり。万七（足引の、山るもたかき、巻向の、きしの小松は、み雪ふりけり）

まきもの ナ。巻物。ふみなどの、まきてなさむるやうにしたるもの。源。梅枝（ぞうし、まきものゝ、みなかゝせさせまつり、よろづにめづらかなる御たからども）

まぎゆ ワ。ヒトリ。シニ。眩。めくるめく。顕戒記（皆迷惑）

まぎらかす ワ。カケ。四。紛。まぎらはすに同じ。十訓六（越国の王の、敵をまぎらかして、臣下のそらをかくしさ

まひけん、世にこえたる御情なるべし)

まぎらはし　サプ。紛。まがはし。まぎるべくあり。この詞は、今は、まぎらはしいと、いをそへていふ。

まぎらはしい　サ。紛。まぎらはしを見るべし。

まぎらはす　リ。カケ四。紛。まぎれしむ。みさきがさきやうになす。枕草四(ただ、とりるとりてくひまぎらはししかれ)浜松二(月いみじうあかき夜、いたうふけて、とうまぎらはしつゝたちよりたまへれ)

まぎる　ワ。ヒトリ。シニ。紛。みさきがさくなる。ゆくへもしられずなる。こゝろのうさをさずる。この詞は、地方は、よりては、まぎれるを下一段にいふ。源若紫(夕暮のいとうかすみたるにまぎれて、かの小柴垣のもとにたちいでたまふ)栄花初花(小姫君の、いたうまぎれなせさせたまふを、わなわせさしと廿けし申させたまふ)

まぎる　ワ。ヒトリ。四。間切。かぜのおひざをきりてやる。船の、横風をうけたるときにいふことなり。

まぎれ　ナ。紛。ものにまぎるゝをいふ。古今(山風に、桜ふきまき、みだれなん、花の紛に、たちとまるべく)

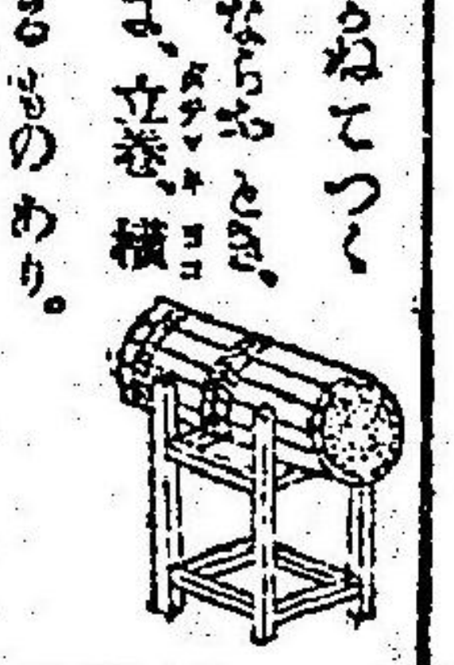
まぎれどころ　ナ。紛所。まぎるべきところ。源紅葉賀(やうくおきかへりなどしたまふ云々、まぎれどころなき御かほつきを、おぼしよらぬ事ましあれど)

まぎれもの　ナ。紛物。ものにまぎれてまさるもの。

まぎれる　ワ。ヒトリ。シ一。紛。まぎるを見るべし。

まぎろくろ　ナ。巻轆轤。ろくろの、まきてうごかすもの。

まきわら　ナ。巻藁。わらをつかねてつくりたるものにて、弓を射ならふとき、的として射るもの。これに、立巻、横巻など、さまぐにまきたるものあり。



まきわり　ナ。薪割。たきぎを、わるにもちふるもの。

まきゑ　ナ。蒔絵。うるしにてかきたる絵のうへに、金粉、銀粉などをまきて、ひかりをみがきいだしたるもの。清輝一(この箱のやうは、今の世のまきゑこそせねとてかきなでたまへれ、阿漕いとにくしとみて)

まきゑし　ナ。蒔絵師。まきゑをなすひと。著聞十一(坊門院は、ときどろめしつかふ蒔絵師ありけり)

まきゑふで　ナ。蒔絵筆。まきゑにもちふるふで。

まく　ナ。幕。ぬのを、ながくひろくつゞりなして、ものへだてにひきめぐらすやうにしたるもの。宇拾一(皮子こひよせて、幕ひきめぐらして)和名(幕和名、萬致)

まく　ナ。膜。たなじゝ。皮下の肉をつゝみたるうすもの。

まく　ワ。カケ四。播。たねを、そこゝにちらす。古今(梓弓、入江の小松、たが世にか、萬代かねて、種をまきけん)

まく　ワ。カケ四。撒。みづ、すななどを、こゝかしこにふりちらすをいふ。今昔廿(前の庭に、籬ゆひて、前栽をなんめでたくうゑて、砂などまきたり)

まく　ワ。カケ四。蒔。まきゑをなす。大鏡五(御硯の箱云々、蓬萊山、手長、足長など、黄金してまかせたまへり)

まく　ワ。カケ四。巻。まろくかさねなす。まろくをれかゝる。壬生二品集(露をいへば、花のとぞみる、さゝさへの、霞にまがるゝ、峰の松原)源須磨(御簾まきあげて、もしのかさはいざなひきこえたまへれ)

まく　ワ。ヒトリ。シニ。負。ちからおとる。かたずしてまくる。また、答にあてらるゝをいふ。價をへすをいふ。この詞は、地方にはよりては、まけるを下一段にいふ。竹取(このよしを奏す、天子きこしめして云々、この女のたぐりにやまけんとおもほして、おはせたまふ)同(この皮衣は、火にやかんに、やけずはこそまことならんとおもひて、人のいふ事にもまけめ)

まく　サ。カナ。四。枕。まくらとす。いざきてふす。万二(沖津浪、きよる荒礒を、敷妙の、枕と巻て、なせる君かも)

まく　リ。カナ。シニ。設。まうく。こしらふ。そなへをなす。よういをなす。万七(夏陰の、ねやの下に、衣たつ、さぎも、設て、さげためたゝば、やゝおほきまたて)

まく　サ。カナ。シニ。任。まからす。みやこをいでて、ひなのつかさにゆかしむ。続紀(蝦夷等平討將軍任賜志)

まく　ヰ。ダスケ。未来をいふ辞。むに同じ。但し、むをのべたる辞なれども、終止にもちひず。万十(大海の、荒礒の渕島、あさなく、見巻ほしきを、みえぬ君かも)

まぐ　ワ。カケ四。覓。もとむ。うなひとる。古事記(八千矛の、神のみことは、八洲國、妻麻岐かねて、とほぐし、越の国に、さかしめを、わりときゝして)宇拾九(いりくるまゝに、目をいからして、人の妻まぐものあり、やうく

そうしといひて、太刀をぬきて)

まぐ　ワ。カケ。シニ。曲。まがらしむ。ゆがましむ。この詞は、地方はよりては、まげるを下一段にいふ。源蜻蛉(世には、心ぎろも、人の心をまげたる事はあらじと思ふを)

まくあひ　ナ。幕間。芝居の、まくをひきたるあひだ。

まくぐし　ナ。幕串。まくをかけてひきめぐらすくひ。

まぐさ　ナ。楣。もんのうつばり。かどのはしらのうへによこたへたるき。和名(楣和名、萬久佐、門戸上横梁也)

まぐさ　ナ。秣。うまにくはするくさ。和名(秣和名、萬久佐)

まぐさかる　マクラ。馬草刈。まぐさは、草を褒めていふ語にて、馬草かるといひて、あらのに冠らするは、荒野はおほければなり。万一(馬草刈、荒野にはあれど、黄葉の、すぎにし君が、かたみとぞ来し)

まぐさきり　ナ。秣切。まぐさをかるかまのたぐひ。

まぐさぐら　ナ。秣倉。くさぐら。まぐさをいるゝくら。

まぐさば　ナ。秣場。まぐさをかりとるところ。

まぐさをけ　ナ。秣桶。まぐさをいれて、うまにかふをけ。

まぐし　ナ。真櫛。くしといふに同じ。万七(少女らが、おる機の上を、真櫛もて、かゝげたくしま、波間よりみゆ)

まくずはら　ナ。真葛原。くずかづらの、ひろくとはえたるところ。万二十(あしがまの、いゆきもがるる、真田葛原、なにのつてごと、たゞにしえけん)

まくたて　ナ。幕盾。やのふせぎにひきめぐらすまく。

まぐち　ナ。間口。いへのおもてぐちのよこはゞ。

まくなぎ　ナ。蠛蠓。かつをむしに同じ。和名(蠛蠓漢語抄云、加豆良布々、日本紀私記云、蠛蠓、末久奈木、小虫乱飛也、陰則天風、喜則天雨)

まくなぎ　ナ。目合。めをみあはするをいふにや。源明石(あけなく、ひとしれぬものおもひさめぬるこゝちして、まくなぎつくらせてはなしおきけり)

まくねしや　ナ。[illegible]。薬の名。炭酸曹達に似て、酸曹達よりも苦くして、まことにかろきもの。金属の酸化したるものなりといふ。

まくのうち　ナ。幕内。すまふとりのすぐれたるもの。

まくは　ナ。真桑。瓜の名。夏のころ、黄いろなる花さきて、瓜は、秋はいさりて熟す。形、まろきものあり、ながきものありて、味きはめてあまし。されば、また、味瓜ともいふ。この瓜は、美濃国、本巣郡、眞桑といふ地よりいだすもの、殊によければ、眞桑とよべり。

まぐは　ナ。馬把。農具の名。まくはに同じ。

まくはうり　ナ。真桑瓜。瓜の名。まくはに同じ。

まぐはし　サプ。妙。美妙。くはし。うるはし。

まぐはひ　ナ。目合。交合。めをみあはするをいふ。また、をとこをんなのまじはり。著聞十二(かたらひちぎりて、まぐはひをなさんとすれど)古事記(爲目合而相婚)

まくむる　ワ。カケ四。[illegible]。ところぐにくゝる。悦目抄(心をあまさずをいふは、たとへば、題なる事をまくらずして、題をはいひそへて、何をなさんとて、いさゝちなる秘曲の事を調ずるなといふなり)

まぐひ　ナ。眞杙。ひきをかくるくひ。万十三(初瀬の河の、上津瀬に、いぐひをうち、下津瀬に、眞杭をうち、いぐひには、鏡をかけ、眞杭には、眞玉をかけ)

まくや　ナ。幕屋。まくをひきめぐらしたるいへ。

まくら　ナ。枕。ふすとき、かしらのしたにおきて、かしらをもたするもの。また、かみのかさをいふ。万二(沖津浪、きよる荒礒を、しきたへの、枕とまきて、なせる君かも)古今(まくらより、あとよりこひの、せめくれば、せんかたなみぞ、とこなかにをる)

まくらかけ　ナ。枕掛。まくらをかさとのおひどにおくちひさきふとんにて、かぜのいるをふせぐもの。

まくらがたな　ナ。枕刀。まくらだちに同じ。

まくらがの　マクラ。麻久良我之。まくらがのまれ、かろくぞへさるにて、くらがといふ語なるべく、くらがれ、つゞむれば、こがとなれば、同音のこがにかぶらせたるなるべしとぞ。万十四(麻久良我乃、許我の渡の、からかぢの、音たかしもな、ねなへ子ゆゑに)

まくらがへし　ナ。枕返。遊戯の名。木枕を、いくつもかさねて、手にすゑて、右にさし、左にさし、或は、そのかさねたる枕を、いくつにてもとりやりするたぐひ。

まくらがみ　ナ。枕上。いねたるまくらのほとり。空穂俊蔭(琴はひきそへたまひつれば、袋にいれて、宮の御まくらがみに、御そもしそへておきつ)

まくらがみ　ナ。枕紙。まくらのうへにおほひたるかみ。

まくらく　ソ。カク。四。枕。まくらとす。まくらをしてふす。万五（いかならん、日のときにかも、こゑしらん、ひとのひざの上、わが摩久良可武）同十（いもが袖、われ枕かむ、河の瀬に、霧たちわたれ、さよふけぬとに）

まくらごと　ナ。枕辭。枕言。あさゆふのてすさみなりともいひ、ことぐさなりとも、ねものがたりなりともいへり。源氏（やまとことのはをも、唐土のうたをも、たゞその筋をぞ、まくらごとにはせさせ給ふ）

まくらことば　ナ。枕詞。いひいでんとする言のうへにかぶらせて、そのことばをとゝのふるもの。山をいはんとて、あしびきをいひ、月をいはんとて、ひさかたをいふたぐひ。されど、歌にはもちひ、ふるくは文章などにはもちひざる事あり。

まくらざうし　ナ。枕冊子。あさゆふのなにとなきことをかきつくるざうし。新六五（こよひおける、まくらざうしの、うへにこそ、むかしがたりの、夢にみえけれ）

まくらざうし　ナ。枕草子。おそくつのゑに同じ。

まくらさがし　ナ。枕探。ぬすみをするうかれめ。

まくらだち　ナ。枕太刀。たちの、そなへには、まくらもとにおきおくるもの。万廿（麻久良多知、こしにとりはき、まかなしき、せろが罷きこん、つくのしらなく）

まくらづく　ソ。枕付。まくらつくれ、枕のならびつくをいふ。さて、つまやにかけていへり。妻屋は、夫婦の寐屋にて、枕のよりそふなりとぞ。万二（枕付、嬬屋の内に、晝はも、うらさびくらし、夜はも、いきづきあかし）

まくらづくゑ　ソ。枕机。まくらがみにおきて、まくらもとにつかふ。六帖六（わがごとく、ものやかなしき、きりぎりす、まくらづくゑに、よもすがらなく）

まくらに　ソ。枕邊。まくらには。まくらもとに。

まくらのしたみ　ナ。枕下磯。なみぢの驛名。

まくらのみね　ナ。枕峰。まくらがみにあるみね。新後拾（山里は、明ゆく鳥の、聲もなし、枕峰には、雲ぞ別るゝ）

まくらのやま　ナ。枕山。まくらがみにあるやま。

まくらばこ　ナ。枕箱。まくらをいるゝはこ。拾遺（京の家は、枕箱などはつきそしけれど）

まくらびき　ナ。枕引。あさりむすびあて、ひらをつきて、まくらをひきあふたはぶれ。嬉遊笑覧（枕引は、京羽二重に、まくらびき、みじかよあけて、さらひけり）

まくらびやうぶ　ナ。枕屏風。ひくきちひさきびやうぶ。

まくらべ　ナ。枕方。まくらがみに同じ。古事記（枕方）

まくらまく　ワ。ヒトリ。四。枕。まくらとす。まくらをしてふす。古事記（みちのきり、こむさをめを、睡のさ、きこえしろしとる、阿比麻久）

まくらもと　ナ。枕許。まくらべ。まくらがみ。

まくらゑ　ナ。枕繪。おそくつのゑに同じ。

まくり　ナ。海人草。海草の名。海の石につきていでくるものにて、昔のたぐひなり。長さ一二寸ありて、枝あり。このもの、腹の虫をころす効ありとて、小兒のうまれざるとき、甘草と煎じてのまする事あり。

まくりで　ナ。捲手。そでまくり。そでをかきあげて、うでをあらはすをいふ。後拾（袖ふれば、露こぼれけり、秋の野は、まくりでにてぞ、ゆくべかりける）

まくる　ワ。カケ。四。捲。まきあぐ。まきてとりのく。枕草二に（くきものの云々、居もさだまらず、ひろめきて、狩衣の前、まきまくりいれてゐるもし）

まぐれ　ナ。目眩。にはかに目のくらむをいふ。

まぐれあたり　ナ。偶中。おもひかけずしてあたるをいふ。

まぐれいる　ワ。ヒトリ。四。紛入。ものにまぎれていりこむをいふ。宇拾一（のけざまにたふれてふしぬ。かしらをうちわりて、まぐれいりてふせりけりぞ）

まぐれざいはひ　ナ。饒倖。こぼれざいはひに同じ。

まぐろ　ナ。眞黒。魚の名。しびをいふ。東京にて。

まくろに　ソ。眞黒。まつくろに。まことにくろく。宇拾五（御烏帽子は、まくろにみえさせおはしましけり）

まけ　ナ。負。かちえぬをいふ。あらそひをへずをいふ。

まげ　ナ。髷。わげ。もとゞりのをりまげたるところ。

まけいくさ　ナ。負軍。いくさにまけたるをいふ。

まげいほ　ナ。曲廬。まがりたるいほをいふ。万五（伏廬の、曲廬の内に、ひたつちに、わらときしきて）

まけいろ　ナ。負色。まけんとするけしき。

まげかど　ナ。曲角。ようつでどをいふ。信濃にて。

まけがた　ナ。負方。まけたるかた。源氏（宰相中將は、まけたるまで、おとなくまうでたまひけるなり）

まけさ　ナ。曲袈裟。やまぶしのかくろけさのたぐひなりといへり。狹衣二（片目あしき僧の云々、紙衣の、いさゝうすきは、まけさといふものきて、うちさらぼひたるほど、まけさはいとらうたきまし）

まけじごころ　ナ。不負心。まけじだましひ。狹衣語（この人、まけじごゝろのいちはやきつよきのなるもの）

まけじだましひ　ナ。不負魂。まけじとするこゝろ。源氏（すこしすゝみたまへる御ほんじやうに、まけじだましひ、みやさ）

まけず　ナ。不負。まけをしみをいふ。勝負などにて。

まけずおとらず　ソ。不負不劣。おなじほどなるをいふ。

まけて　ナ。負人。まくるひと。まけたるひと。

まげて　ソ。枉。しひて。こゝろはいやなれども。

まけのまにまに　ソ。隨任。つかさにまけらるゝまゝに。万十七（おほきみの、麻氣乃麻尓麻尓、ますらをの、こゝろふりおこし、あしひきの、山坂こえて、あまざかる、ひなにくだり来、息だにも、いまだやすめず）

まけばらだち　ナ。負腹立。まけていかるをいふ。

まけめ　ナ。負目。まけんとするとき。男教訓（まけめになりて、何事も、まうでといひて、たちさり給）

まげもの　ナ。曲物。わげものに同じ。

まける　ワ。ヒトリ。シ一。負。まくを見るべし。

まげる　ワ。カケ。シ一。曲。まぐを見るべし。

まけわざ　ナ。負態。まけたるにてするわざ。碁、雙六などの勝負のたはぶれのとき、まけたるより、つぐのひとて、御前などをいだすをいふ。拾遺（らんごとらせたまひけるに、まけわざを、七月七日に、かの宮より、内のだいばんどころにたてまつられける）

まけをしみ　ナ。負惜。まけたるを、まけずといふたぐひ。

まご　ナ。孫子。子のたまごをいふ。豐後にて。

まご　ナ。孫。うまごに同じ。

まご　ナ。馬子。うまのくちをとるひと。

まごころ　ナ。眞心。まことのこゝろ。かざりなきうぶなるこゝろ。かんなかなるまことのこゝろ。枕草三（ほむしなどは、なみえそとて、おのづからみつべきなりけれど、ふるきなどして、まことはみえぬわが、きこえさせ、そらごとしたまふなりけりと）雲花鳥餘情（わたかとよ、まことはつらぬきとて）

まことに　ソ。眞。まことにこそ。古典語（くひあら、ひのみて、うへしこそ、とひたまへ。評評奇聞、とひたまへ）

まごち　ナ。眞東風。まひがしのかぜ。堀川次郎（まこちふく、花の波の風下は、暗ぞをるはき、雪ぞつみける）

まごつく　ワ。ヒトリ。四。惑。まどふ。てまどひす。

まこと　ナ。實。誠。眞。うぶなるをいふ。いつはりかざらぬをいふ。古今（いつはりと、思ふものから、いまさらに、誰がまことをか、われはたのまん）伊勢（男、まことはむつましき事こそなかりけれ、いまはと、いとあはれとおもひけれど）

まことぞ　ソ。實誠。まことは。宮闕陸（たんぶれ、さるまいて、まことぞ、かの物の音いさゝかならせたまへ）

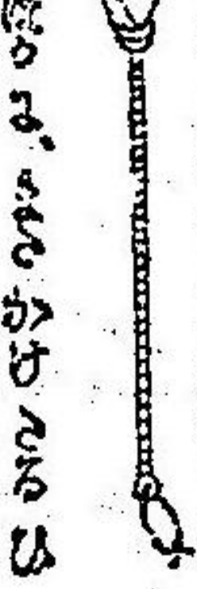
まことし　サ。ブ。實。たゞし。まことなり。狹衣二（されども、七月よりは、まことしうなやましげにて）徒然草（ありさまことは、まことしきふみのみち）

まことしやかに　ソ。實。まことらしく。まことめかしく。

まことどふ　ワ。ヒトリ。四。眞言。まことものいふ。たゞしくものいふ。古事記（眞事登波受）

まことに　ソ。實。誠。げに。たゞしく。かざりなく。六帖六（春駒の、おさる驛の、まこもぐさ、まことはかれを、わきかもやれ君）枕草十（誠はやあらん、昔おぼしけける帝の、たゞそのさき人をのみおぼしめして）

まごのて　ナ。麻姑手。ちひさき杖のさきに、ひとの手のかたちしたるものをつけたるもの。背のかゆきをかくにもちふるものなり。



まごびさし　ナ。孫庇。ひさしの庇に、さらにかけたるひさし。海人藻芥（清涼殿の孫庇を申すは、檜皮葺の外に、また板庇をさゝるゝなり）十訓六（影の如くなるもの、空より飛びまろりて、孫庇に居たりけれど）

まごふのいし　ナ。万劫之石。まんごふのいしを見るべし。堀川次郎（たのめなば、河瀬のいさご、としふりて、まごふの石と、ならん世までに）

まこも　ナ。眞菰。草の名。こもに同じ。古今（まこもかる、

逆の濱木、雨ふれば、宿よりことは、まさるをなこひ）

まこもぐさ ナ。眞菰。こもは同じ。詞花（堀河院、つのぐみわたる、澤邊まで、つながれ駒も、離れざりけり）

まさ ナ。サ。正。まさしきもの。まさしき。まさか。

まさいらく ナ。萬歳樂。まんざいらくは同じ。保延女院（一つまどをを云々、権が枝はきるる うくひす など かなならして、まさいらくなどふきあそぶ）

まさか ナ。正。ゆくすゑはむかへて、いまさしあたりなるをいふ。万廿（梓弓、末はしらねど、愛しみ、君にたぐひて、まさかは、よりましものを）同廿（いかほろの、そひの榛原、ねもころに、奥をなかねそ、まさかしよかば）

まさかづら ナ。眞辟葛。まさきは同じ。堀保歌合（君代は、千の秋かけて、まさかづら、神の宮人、祈りそめけん）

まさかて ソ。實は。よもや。そのときは。

まさかのとき ナ。實時。まことにあやふきとき。

まさかやまつみ ナ。正勝山祇。かぐつちの神の御子。

まさかり ナ。眞盛。まことのさかり。さかりのもなる。

まさかり ナ。斧。をの。和名（鉞和名、佐加利、鉞斧佐斧）

まさき ナ。正木。木の名。まゆみは同じ。

まさき ナ。眞辟葛。蔓草の名。つるくさのときはなるを、のなすべてやらぞ。また、路のたびまで、秋のころ紅葉する、一種の蔓草あり。古今（深山には、霰ふるらし、外山なる、まさきのかづら、いろづきにけり）

まさきく ソ。眞幸。さきくは同じ。万二（磐の岡を、いゆきまくみ、麻佐吉久も、またかへりみん、おほきみの、みことのまにま、ますらをの、こころをもちて）

まさきづら ナ。眞辟葛。まさきのつる。繼體紀（妹が手を、我はまきしめ、わが手をば、妹にまかしめ、麻左棄逗羅、たゞきあざはり、うまいねしとは）

まさきづる マク。眞辟葛。まさきづら、まさきつるるものなれば、あざなるにふけていふ。また、猿の常磐なれば、ときはもかけ、神のむひつぎなるは、つぎまるかく。繼體紀（妹が手を、わがまきしめ、わが手をば、妹にまかしめ、麻左棄逗羅、多々企阿藏播梨、志々矩志呂、うまいねしとは）万七（すめろぎの、神のみやびと、冬過ぎれ、きはねしとは）万七（すめろぎの、神のみやびと、冬過ぎ、まさきのかへりみん）同た（冬過ぎれ、雪消、[illegible]）

まさきのつな ナ。眞辟葛。まさきのつる。後撰（てる月を、まさきの綱に、よりかけて、あかず別るゝ、人をつなかん）

まさぐる ワ。カ。四。弄。もてあそぶ。てすさびにす。蜻蛉（てまさぐりは、すゞしの絲を、ながくむすびて、ひとつむすびては、ひきくしてゆひくして）宇治十（晴明云々、この法師、すこしひきまさぐらんとおもひて）

まさご ナ。眞砂。いさご。波衣四（庭のまさごの、白くほとみえるは、氷草のたふまでも、なべてならずみゆるえだざしは、ふきくる風のおとなひも）

まさごまに ソ。正様。まことのさまは。榮花初花（御さうぶ、なくまさごまはこそみゆれ）

まさし サ。フ。正。たゞしまことなり。たしかなり。古今（かくこひん、ものとはわれも、おもひにき、こゝろのうらぞ、まさしかりける）字鏡（正万佐之支已止）

まさう ナ。麗瞭。なでさするをいふ。

まさつこでぎも ナ。美顔。うつくしきつま。かほうるはしきをとこ。古事記（沖邊には、小舟つらく、くろざきの、麻佐豆古和藝毛、くにへくだらす）

まさでにも ソ。正。まことはも。万廿（鴨とふ、おほならくりの、麻佐低爾毛、來まさぬ君を、ころくとぞなく）

まさな サ。無正。まさなし。枕草八（人の子どもの云々、てづらひまさなくいでてみるこそ、いとにくけれ。それを、まさなとむりいひて）

まさなごと ナ。無正事。まさなきこと。こどものあそび。

まさなし サ。ヒ。無正。よろしからず。空穂國譲（この人こそ、いとまさなけれ、かゝるせざれ、女はせぬものぞや）竹取（こゝろさはなのたまひそ、星のうへにある人どものきくに、いとまさなし）

まさに ソ。正。わに。いかで。六帖三（うき事は、世はふるものを、激津瀬は、まさにうきぬ、たえんものとれ）竹取（わが子を、何人かむかへきこえん、まさにゆるさんやといひて）落窪四（よさりものびてまうらん云々、あのびてをおはすとも、人はまさに知らじや）

まさふ ワ。ヒトリ。四。御坐。います。後撰（けふそくを、おほやけまさへ、萬代は、そなのさかりを心まつるは）

まさまさと ツ。正しく。あきらかに。まのあたりに。

まさめ ナ。正目。もくのすぐにとほりたるもの。

まさめに ソ。正目。まさしく。たしかに。まのあたりに。佛足石歌（よきひとの、麻佐米爾みけん、御跡すらを、をれいえみずて、いはにはゑりつく、たまにはゑりつく）

まさやかに ソ。正。まさしく。たしかに。あきらかに。

まさりおとり ナ。優劣。まさるとおとると。

まさりぐさ ナ。優草。草の名。きくの異名。藻塩草六木卅（寛平御時菊合歌、すべらきの、よろづ代までは、まさりぐさ、たまひしたねを、うゑし菊なり）

まさる ワ。ヒトリ。四。增。優。ましてあり。すぐれてあり。万ロ（衣手は、さりそぼり、なく子にも、益着をれを、おきていかにせん）古今（ときてなる、松のみどりも、春くれば、いまひとしほの、いろまさりけり）

まさをに ソ。眞青。まつさをに。まことにあをく。

まし ナ。猿。獸の名。さるは同じ。堀川次郎（思ふことを、大江山は、世の中な、いかにせましと、三聲なくなる）

まし ナ。汝。なんぢのくもろなるをいふ。

まし カへ。汝。いまし。なんぢ。万廿（この河は、朝菜あらふ子、麻之も我も、よちをぞもたる、いでこたまりこ）厩女（ましが、常にみるらんも、うらやましきを）

まし テダスケ。未來をいふ。むもかる詞にて、むは同じ。但し、むは、末のこころ、まし、未のこころをふくめていふときはもちゆ。古今（ふく風は、あつらへつく

る、ものならば、このひとをし、よきてといでまし）新古（をなみんと、うゑけんひとも、なきやどの、さくらは去年の、春ぞさきまし）

まじ ナ。庭風。西南の山などおひざより、海の上をすこふきとほる風をいふ。船人のいふ詞なり。

まじ テダスケ。サフ。の。ところ。不可。べくなし。べくあらず。べしをうちけしていふことばなり。玉葉（ゆくほども、ながらふまじき、世の中は、ものをおもふぞ、ふるよしもがな）詞花（この世には、またもみるまじ、うめのはな、ちりぢりならん、ことぞかなしき）

まして ナ。猿子鳥。鳥の名。ましてどりは同じ。六木廿（ましてみる、みのくつわたら、うちそむひ、みさそかさてし、むかしこひしも）

ましとどり ナ。猿子鳥。鳥の名。あとこのたぐひなりといふ。雀ぐりのおほきさにて、全身灰色にて、翅は、くろき斑あり。また、尾の末は、あろき羽ありて、胸と腹とは、あかく、嘴はみじかくして、かまびすしくなく。

まじとる ワ。ヒトリ。四。呪ひれて、よこみちはいる。まじなふ。万雲武藏郡寺寺総相口會（天能麻宮部比登云都）

まじし テダスケ。サフ。の。不可。まじは同じ。万四（あらたまの、きつのをやしは、なをたてて、ゆきかつ麻思自、いをさきざきは）繼體紀三（已我醉麻之自祉祭乃牟岐賀位乎麻求米）同卅（過而天助比毛故奈之時比爲且）

まして ノ。況。いはんや。いふまでもなく。枕草三（つま[illegible]なひをとおし、[illegible]の題はましておし）

まじなひ ワ。カタ。四。呪。禁厭。[illegible]ぞて、神佛の力をかりて、あやしきわざをなするをいふ。濱松四（よろづは、まじなひ、いのりなど、おぼしのこすかるなけれど）神代紀（禁厭）

まじなひし ナ。呪師。まじなひをするひと。

まじなふ ワ。カタ。四。呪。禁厭。まじなひす。落窪三（御胸まじなへと、上の、おつけさきまつりたまひつるなり）

まじだ ナ。眞柴。あをとやふは同じ。新千（むしろの、尾上の宮の、あけぼのは、眞柴を掃ふ、袖の露けさ）

まじまり ナ。交。なからひ。まじらひ。つきあひ。

まじふ ワ。カゲ。シニ。交雑。まず。まじらふ。

まじへる ワ。カケ。シ一。交雑。まず。まじへらしむ。

まじろ ワ。ヒトリ。四。交。まじらふ。これかれいりまじる。

まじさ ソ。瞳。むさらきて。めまじろきて。

ましほ ナ。眞潮。うしほといふは同じ。六木廿五（眞潮くむ、庵の濱舟、とまくらて、波路なれせぬ、五月雨の空）

ましまさ ワ。ヒトリ。四。御坐。おはします。後拾（今よりいおちなる心、おぼしますな、花の都は、やしろならめつ）

ましみづ ナ。眞清水。きみづは同じ。源氏總角（汝こそれ、岩もる主人、みし人の、行方はまるや、宿の眞清水）

ましん ナ。麻疹。病の名。むしかは同じ。

ましめなり ソ。眞面目。まことなり。ふしめなり。

まじめに　ソ。眞面目。まことに。ふじめに。

まじもの　ナ。蠱物。さま〴〵のあやしきわざをして、ひとをのろひなどするをいふ。字鏡（蠱物 万自）

まじやう　ナ。魔障。あくまのたゝりのさまたげもの。

まじやうに　ソ。眞正。まことに。まじめに。ふじめに。

まじやうのもの　ナ。殊勝。ましやうといふに同じ。

まじやうめん　ナ。眞正面。まむかひ。まおもて。

まじやうもの　ナ。眞情者。まごころにふるまふひと。

ましやく　ナ。間尺。すんぽふといふに同じ。

まじゆつ　ナ。魔術。まはふをおこなふじゆつ。

ましよく　ナ。間尺。ましやくに同じ。

ましら　ナ。猿。猴の名。さるに同じ。古今（わびしらに、ましらななきそ、あしびきの、山のかひある、けふにやはあらぬ）拾玉（木のもとの、雨になくなる、ましらよりも、そでのうへの、露ぞかなしき）

ましらげのよね　ナ。糳米。まことに、よくしらげたるよね。和名（糳米 之良介乃與禰 精細米也）

まじらひ　ナ。交。まじもり。つきあひ。源若紫（世のひがものにて、まじらひもせず。近衛の中將をすてて）

まじらふ　ワ。ヒトリ。ロ。交。まじる。まじはる。つきあひす。源桐壺（はしたなき事おほかれど、かたじけなき御こゝろざしの、たぐひなきを頼みて、まじらひたまふ）

まじり　ナ。眦。まなじりに同じ。源帚木（まなこゐなど、これは、今すこしつよく、かどあるさままさりたれど、まじりのとぢめをかしう、かをれるけしきなど）

まじり　ナ。雜。これかれいりみだれたるをいふ。

まじりげ　ナ。雜毛。さま〴〵のさしげあるもの。

まじりもの　ナ。雜物。まじりたるもの。また、さま〴〵のものゝまじりたるをいふ。源常夏（おとゞはほいなけれど、まじりものなく、きら〳〵しかめる中に）

まじる　ワ。ヒトリ。ロ。交。雜。これかれいりみだるゝものゝあひだにいる。万二（けふ〳〵と、わがまつ君は、石河の、かひに交て、ありといはずやも）竹取（今はむかし、竹取の翁といふものありけり、野山にまじりて、竹をとりつゝ、よろづの事につかひけり）

ましろ　ソ。眞白。まつしろに。まことにしろく。

まじろぐ　ワ。ヒトリ。ロ。瞬。まゝたきす。源東屋（少將、右近、めまじろぎをして、かたはらいたくぞおぼすらんといふも、たゞなるよりはいとほし）字鏡（瞬 万志呂久）

ましろし　サ。ヒ。眞白。まことにしろし。まつしろにあり。

ましろに　ソ。眞白。まことにしろく。万三（田子の浦ゆ、うちいでてみれば、眞白衣、ふじの高根に、雪は降ける）

まじろふ　ワ。ヒトリ。ロ。交。まじらふに同じ。枕草五（三年四年ばかりのほどを、なりあしく、もののいろよろしうてまじろふは、いふかひなきものなり）

まじわざ　ナ。蠱事。まじものに同じ。水鏡（守屋、いよ〳〵怒をなして、兵をあつめ、さま〴〵のまじわざものをし）宇拾十（陰陽師に、いむべきさまどもをせさせければ、そのまじわざする陰陽師のいたく、物忌して居られ、つゝしむべき日にこそあらめ）

ます　ナ。鱒。魚の名。かたち、鮭に似て、鮭よりはちひさく、鱗きはめてこまやかにて、背は青く、腹は白く、また、背に、赤き斑あり。肉の色、鮭よりもあかし。和名（鱒、一名、赤魚 和名 萬須 兼名苑云、一名、鮅 似鯶而赤目者也）

ます　ナ。升。いりなどをうつもの。また、容量をはかる器にて、一升は、十合の容量をいふ。枕草六（一人して、二人の物をば、いかでもつべきぞ、一升が目に、二升はいるやといふを）和名（升 和名 萬須 十合爲升也）

ます　ワ。カ。ヒトリ。ロ。增。くはゝる。おほきになる。すぐれてあり。千載（としをへて、おなじさくらの、はなのいろを、そめますものは、こゝろなりけり）

ます　ワ。ヒトリ。四。坐。いますに同じ。おはします。万一（御心を、吉野の國の、花ちらふ、あきつの野邊には、みやばしら、ふとしき座ば）古今（君まさで、けぶりたえにし、しほがまの、うらさびしくも、みえわたるかな）

ます　ワ。ヒトリ。ロ。申。まうす。貞丈雜記（御ざります、いさしますなどいふますは、申の略語なり。壬生忠見の家集に、詞書に、或人の、直衣をえさせんとあなる、琴をなん失ひさるとます云々、このますも申す也）

ます　ワ。ヒトリ。シニ。老成。おとなびてみゆ。おとなめきてみゆ。六帖四（やまがつの、かきほにかこふ、ませがきの、ませさりじとも、みえしきみかな）

ます　ワ。チ。ゲ。ロ。坐。ゐまふ。万一（うちそを、をみのおほきみ、あまなれや、いらごが島の、玉藻苅麻須）

ます　ワ。カ。シニ。交雜。まじらしむ。この語は、地方によりては、まぜるを下一段にいふ。尾雅（外山より、あられていさる、松風は、木の葉ふきまぜ、ゆく嵐かな）

ますうのそがひ　ナ。蘇芳小貝。いろのあかきちひさきかひ。西行集（しほの間に、ますうのそがひ、ひろふとて、いろのはまとは、いふにやあるらん）

ますかがみ　ナ。眞澄鏡。ますみのかゞみ。よくすみて、ひかりあきらかなるかゞみ。古今（ゆく年の、をしくもあるかな、ますかゞみ、みる影さへに、くれぬと思へば）

ますかき　ナ。升搔。とかきに同じ。

ますがた　ナ。升形。とがたを見るべし。

ますかひごろも　ナ。麻須加比衣。衣の名にや、さだかならず。夫木七（いそげ田子、ゆきあひのわせの、ふしどうは、ますかひごろも、みしぶつくとも）

ますき　ナ。升木。すりこぎをいふ。藤貝、讃岐にて、

ますぐさ　ナ。升草。かやつりぐさをいふ。常陸にて、

ますぐに　ソ。眞直。まつすぐに。まことにすぐに。

ますげ　ナ。眞菅。かやつりぐさをいふ。安房にて、

ますげ　ナ。眞菅。草の名。すげに同じ。千載（ますげおふる、山下水に、やどる夜は、月さへ草の、庵をさす）

ますげよし　マクラ。眞菅吉。ますげは、菅をほめていふ語にて、よしのしは、たゞかろくそへたるなり。されば、ますげよしといふは、たゞすげよと呼びかけたるにて、それを、そがに冠らするは、すげとそがと、音の似かよひされればなり。万廿（眞菅吉、宗我乃河原に、なくちどり、間なしわがせこ、わがこふらくは）

ますこし　ソ。今少。いますこし。このうへすこし。

ますづきん　ナ。升頭巾。四角にてこしらへたるづきん。

ますとり　ナ。升取。さけをはかるひと。

ますほ　ナ。眞赭。まそほに同じ。

ますほのいと　ナ。眞赭絲。あかきいと。堀川百首（花薄、ますほの絲を、繰かけて、たえずも人を、招きつる哉）

ますほのいろ　ナ。眞赭色。あかきいろ。山家集（花薄、月の光に、まがはまし、ふかきますほの、色にそめずば）

ますほのすすき　ナ。眞赭薄。あかきほのすゝき。長明無名抄（雨のふりける日云々、ますほのすゝきといふは、いかなるすゝきぞなどいひしろふほどに）

ますます　ソ。益。ましにまして。万五（世の中は、むなしきものと、知る時し、いよゝますます、悲しかりけり）

ますみのいろ　ナ。眞澄色。きよらかなるいろ。うるはしきいろ。堀川次郎（てなるれど、扇ぞつらき、わがせこが、ますみのいろを、かくすとおもへば）

ますみのかがみ　ナ。眞澄鏡。よくすみて、ひかりあきらかなるかゞみ。千載（山の端に、ますみの鏡、かけたりと、みゆるは月の、いづるなりけり）神代紀（白銅鏡）

ますめ　ナ。升目。ますにてはかるかず。枕草六（あやしの男や、一人もて、二人の物をば、いかでもつべきぞ、一升が目に、二升はいるやといふを）

ますら　ナ。正卜。まさしきうらなひ。まさしくさだまるうらなひ。堀川百首（おなじやと、龜のますらに、とはればや、戀しきひとを、夢にみつるを）

ますらかみ　ナ。益荒神。たけくをゝしきかみ。出雲風土記（吾御子麻須羅神御子坐者所已号稱世來所坐）

ますらたけを　ナ。益荒猛男。ますらを。たけくをゝしきをのこ。万廿（からくにゝ、ゆきたらはして、かへりこん、麻須良多家乎に、御酒たてまつる）

ますらをれ　ナ。益荒我。ますらをのわれ。万廿（いでて來し、麻須良和禮すら、世の中の、常しなければ）

ますらを　ナ。益荒男。たけくをゝしきをのこ。佛足石歌（麻須良乎の、ふみおける跡は、いそのうへに、いまものこれり、みつゝ、しのべと、ながく、しのべと）

ますらをとこ　ナ。益荒男子。ますらをに同じ。万九（いにしへの、益荒丁子の、あひきそひ、つまどひしけん）

ますらをの　マクラ。益荒男之。たゆひ、たまき、射鞆は、ますらをの、常は、手につくるものなれば、ますらをのといひて、たまきにかけていふ。万三（丈夫乃、手結我浦に、あまをとめ、しほやくけぶり、くさまくら、たびにしあれば、ひとりして、みるしるしなみ）

ますゐ　ナ。麻酔。からだのしびるゝをいふ。

ますゐざい　ナ。麻酔劑。まやく。しびれぐすり。

まぜ　ナ。籬。うませ。ませがき。紫花物（御はうもちは、白銀の御ふくのうへに、ませゆひて、なでしこをうゑさせたまへり）和名（籬和名、荒加岐、一云未世　以柴作之）

まぜ　ナ。艄の名。ふねの、艫より舳に、竪垣ありて、面のかたに、帆柱をたてたるもの。加賀、越前、丹後、但馬などにてもちふるものなり。船用集

まぜがき　ナ。籬。ませ。まがき。六帖四（山賤の、垣穂にかこふ、ませがきの、ませさりしとも、みえし君かな）

まぜかへす　ワ。カケ。四。雜返。かきまず。まぜくます。

まぜくる　ワ。カケ。四。雜繰。まぜかへすに同じ。

まぜこぜに　ソ。雜ぜに雜ぜて。ひとつにかきまぜて。

ませば　チ。ズ。ナ。むせば。せつませば、せりんせばのところ。万二（飛鳥川、志がらみわたし、塞益者、ながるゝ水も、のどにかあらまし）後拾（杉たてる、門ならませば、とひてまし、こゝろの松は、いかゞあるべき）

まぜまぜに　ソ。雜々。とりまぜに、いれまぜに。空穂楼下（かくて、ろうにのぼりたまふべきほどのくれましは、いろくの木をまぜくにつくりて）

まぜら　ナ。玉璽。まぜのところ見るべし。

まぜる　ワ。カナ。シ一。交。雑。まじらしむ。まぜを見るべし。

まそ　ナ。麻蘇。そといふに同じ。そを見るべし。万十四（上野、安蘇の麻素武具、かきむだき、ぬれどあかぬを、あどかあがせん）夫木七（あきぞは、まその志らゆふ、ひきうけて、けふはおなじの、やまつらせよ）

まそかがみ　ナ。真澄鏡。ますみのかがみに同じ。万十九（をとめらか、手にとりもてる、真鏡、ふたかみやまに）

まそかがみ　マクラ。真澄鏡。まそかゞみは、ひかりあきらかなるかゞみなれば、てるきよしなどにかけていふ。また、鏡は見もし、磨もするものなれば、みるとぐとも、かけていふ。また、むかしは、鏡に紐をつけてかけたりし故に、かくともかぶらせ、蓋をおほふ事もあれば、ふたともかぶらせていふ。万七（真十鏡、可照月を、志ろたへの、雲か、かくせる、天津霧かも）同八（銅鏡、清月夜に、たゞひとめ、みせんまでには、ありこすなゆめといひつゝ）同十一（真祖鏡、直見いそめや、かゞうひの、垣岩淵の、かくれたるかも）同四（真十鏡、磨之心を、ゆるしてし、その日のきはみ）同十二（祝部等が、いはふ御室の、犬馬鏡、懸而しのびつ、あふひとごとに）同十九（真鏡、蓋上山に、このくれの、志げき谷辺を）

まそがよ　ナ。真蘇我我。まそがは、蘇我を褒めていふ語にて、そがに冠らするは、同音をかさぬるなり。推古紀（麻蘇餓豫、蘇餓の子等は、馬ならば、日向の駒）

まそで　ナ。兩袖。ふたつのそで。綺子（いろふかく、うつりにけりな、狩人の、まそでにさくる、萩の朝露）

まそほ　ナ。真赭。そほといふに同じ。万十六（佛つくる、真朱たらずは、水たまる、池田の朝臣が、鼻上をほれ）

まそほのいと　ナ。真緒絲。あかきいと。散木（花薄、まそほのいとを、くりかけて、たえずも人を、招きつる哉）

まそほのいろ　ナ。真緒色。あかきいろ。あからちのいろ。万十四（まかねふく、丹生の麻曾保の、いろにいでて、いはなくのみぞ、あがこふらくは）

まそほのすすき　ナ。真緒薄。あかきほのすゝき。徒然草（或者、ますほの薄、まそほの薄などいふ事あり、わたのべの聖、この事を傳へしりたりと語りけるを）

まそみのかがみ　ナ。真澄鏡。ますみのかがみに同じ。

まそむら　ナ。真麻村。あさの、むらくとおひしげりたるをいふ。万十四（上野、安蘇の麻素武具、かきむだき、ぬれどあかぬを、あどかあがせん）

また　ナ。猱。猴の名。むくげざる。猿のたぐひなるべし。但し、ねこまたともいへり。ねこまたのところ見合すべし。和名（猴猨太　猴獅属也）

また　ナ。跨。胯。又。もゝともゝとのあひだ。また、もののとれいでたるあひだ。宇拾一（妻の女に、この由をかたる、穴のいそく、そこのまたこそ さされんずらめと あはするに）和名（胯和名、萬太　兩股間也）

また　ソ。復。さらに。ふたゝび。万六（いはがしり、たぎちながるゝ、初瀬川、たゆることなく、亦も来てみん）

また　ワナギ。又。いまひとつ。そのうへに。そのほかに。

まだ　ソ。未。なほ。いまだ。後撰（いつとても、春のひかりは、とゞかなくに、まだ三吉野の、やまはゆきふる）

またい　サ。全。まったし。ゆるし。おとなし。

またいとこ　ナ。三従兄弟。いやいとこのこ。ふたいとこのこ。

和名（三従兄弟、九族圖云、三従兄弟和名、萬太伊止古）

まだう　ナ。魔道。わしきみち。よこしまなるみち。

またうつし　ナ。轉寫。うつしたるものを、またうつすをいふ。うつしたるものを、かさねてうつすをいふ。

またうど　ナ。全人。すなほなるひと。りちぎなるひと。

またがし　ナ。轉貸。かりたるものを、またかすをいふ。

またがひ　ナ。轉買。かひたるひとより、またかふをいふ。

またがり　ナ。轉借。かりたるものを、またかるをいふ。

またがる　ワ。ヒトリ。四。跨。またぎあり。これかれにわたる。

またき　ナ。又木。きの、またのわかれいでたるもの。

まだき　ソ。豫。ときにさきだちて。六帖一（露をけて、秋ほす間も、なきものを、など秋風の、まだき吹くらん）

またぎき　ナ。轉聞。きゝたるひとよりまたきくをいふ。

まだきに　ソ。豫。ときにさきだちて。中務集（五月、まゆみのもみぢにつけて、時雨それ、まちもつけでや、山の端の、おのれまだきに、もみぢそめけん）

またく　ワ。ヒトリ。四。速。せく。いそぐ。まだきにいそぐ。家持集（せが宿の、槻の木槻の木、月ごとは、つうひれやらん、こゝろまたくな）古今（いつしかと、またく心を、むぎにあげて、天の河原を、けふやわたらん）

またく　ソ。全。まつたく。すべて。もはら。居物語（越朔をほろぼす事は、まつたく、わがこゝろよりおこらず）

またぐ　ワ。ヒトリ。シ二。跨。もゝをわりて、またのあひだにはさむ。宇拾一（寄男、夢にみる様、西大寺と東大寺とを、またげて立ちたりとみて、妻の女に、この由を語る）

またくら　ナ。胯。またといふに同じ。

まだけ　ナ。真竹。たけといふに同じ。竹に、淡竹、孟宗などあるゆゑに、それにことさん爲にかくいへり。但し、真竹は、その皮に、むらさきぐみたる斑ありて、竹子のあぢはひも、淡竹などよりはにがくしておとれり。

またげらい　ナ。又家來。またもの。けらいのけらい。

またげる　ワ。カケ。シ一。跨。またぐに同じ。

またさらに　ソ。又更。またふたゝび。万十二（百磯の、道は来ましを、麻多佐其爾、八十島すぎて、わかれかゆかん）

まだし　サ。ヒ。全。かけたるところなし。すべてまどかなり。万二十（あらたまの、年の緒ながく、かくこひば、まことわがいのち、全有目やも）宇拾二十（わが身をばまたくして、獣を寄せんとおもひされば）

まだし　サ。フ。未。いまだし。ときいたらず。古今（五月こば、なきもふりなん、時鳥、まだしきほどの、聲をきかばや）宇拾四十（笑そさんとあるは、おるかくなしきまふか、それは、物語よりはまさる事にてこそあらめと、まだしきにたらひければ）

またしても　ソ。復。またも。またこりずまに。

またす　ワ。カケ。四。獣。たてまつる。万四（わが衣を、かたみにまたす、志きたへの、枕からさず、まきてさねませ）

またぞろ　ソ。又候。また。ふたゝび。かさねて。

まただい　ナ。又代。武家の役。まただいくわんに同じ。

まただいくわん　ナ。又代官。武家の役の名。守護、または、守護代にかはりて、その事を執りおこなふもの。

またたき　ナ。瞬。まぶたをそらすことをいふ。

またたきのあひだ　ナ。瞬間。またゝきするあひだ。

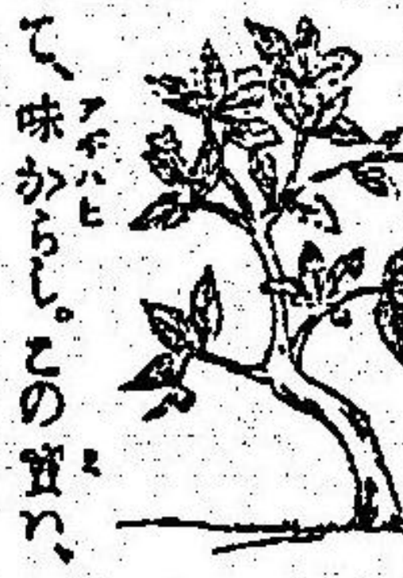
またたく　ワ。ヒトリ。四。瞬。まぶたをそらす。源玉（こら きみのらうたくあはれにおもひきこゆるを、よみぢのほだしは、もてひづらひきこえてなん、またゝき侍るとね ひつゞくれば）字鏡（瞬万志呂久、又目太々久）

またたく　ワ。ヒトリ。四。瞬。ともしびのかげゆらめく。狭衣（御前の方をみいれたまへれば、御とのあぶらきえがてにまたゝきて、おくれくらうて、ものもみえず）

またたくうちに　ソ。瞬間。またゝきするあひだ。

まただのみ　ナ。聰頼。なかうどをたてて、たのむをいふ。

またたび　ナ。木天蓼。灌木の名。とさび、枝やわらかにて、蔓のごとく、葉は、胡頽にて、すこし、やまぐそに似たり。また、花は、梅に似てちひさく、實は棗に似て、味からし。この實は、猫の藥なりとて、常にもちふるものなり。



またとなし　サ。ヒ。又無。たぐひなし。ふたつなし。

まどなり　ナ。又隣。となりのつぎのとなり。

またね　ナ。又寝。よるねざめてまたねぶるをいふ。風雅（あかつきを、いそぐとられ、よふかくて、またねひさしき、あかつきのとこ）夢轍入（かへり来ても、またねの

心もあらばこそ、あらぬなごりを、夢にもみめ）

まだのあした ナ。翌朝。つぎのあした。源蜻蛉（きさのあした、御文とくあり、なやましげてふしさまへれど、ひきぐし、硯などまゐりて、御かへりとくときこゆれど）

まだのとし ナ。翌年。つぎのとし。狭衣四（月日もそうなくすぎて、きさのとしの秋冬は、大原野、平野などの行幸あり、はじめてめづらしき行幸なるにそへても）

まだのな ナ。亦名。ほかのな。べつのな。

まだのひ ナ。翌日。つぎのひ。源蜻蛉（あさましき心地し給ひて、御使、その又の日、まだつとめて参りたり）

まだのや ナ。俣野矢。矢の名。かりまたに同じ。

まだのよ ナ。来世。またうまれてくべきよ。佛足石歌（これの世は、うつりさるとも、とこしへに、さのこりいませ、のちの世のため、またの世のため）

まだのよ ナ。翌夜。つぎのよ。源夕顔（この法事したまひて、又の夜、ほのかに、かのありし院ながらそひたりし女のさまも、おなじやうにてみえければ）

まだばえ ナ。䕡。ひこばえに同じ。夫木廿（夏刈の、あしの古葉の、またばえは、みじくたまる、冬の白雪）

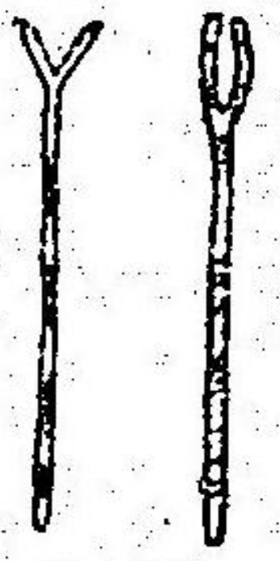
まだまた ツナギ。又將。かつまた。蜻蛉（こゝろみさへおりゆべ、いとつべくましきさまになん、世人もおもはん、さても、世にはものしたまはじ）

まだひ ワ。待。まち。縮紀六（今日加有年、明日加有年此所念食部々待比賀間日、安加良米佐須加祁久）

まだび ナ。眞旅。まことのたび。万十二（旅とへど、眞旅になりぬ、家の妹が、きせし衣は、あかつきにけり）

まだびさし ナ。又庇。またねに同じ。

まだぶり ナ。杈。またのあるえだ。また、つゑの、さきにまたあるもの。源浮舟（つれぐなりける人の志をざをとみえたり。またぶりに、山橘つくりて、つらぬきそへたる枝に）和名（杈和名、末多布里）



まだぶりだま ナ。杈玉。かひだまに同じ。

まだぶりづゑ ナ。杈杖。またぎのつゑ。字拾十四（かさびらをかりきて、中ゆひて、あしざむきて、またぶりづゑといふものつき、小童一人、ともにとして）

まだま ナ。眞玉。よきたま。まことのたま。万廿（いぐひには、かゞみをかけ、まぐひには、眞玉をかけ）

まだまた ツナギ。又々。なほまた。源少女（事はてて まうづる博士才人どもめして、また〳〵、ふみつくらせたまふ）

まだまつく ナ。眞玉付。まことには、玉をほめていふ詞、つくは、玉をつくるにて、なにかけていふ。玉は、緒につくればなり。万十四（眞玉付、彼此かねて、ことはいへど、あひてのちこそ、くいはありといへ）

まだまで ナ。眞玉手。たまでにいふに同じ。古事記（麻多麻傳、たまでさしまき、もゝながに、寝はなさんを）

まだもなく リ。又無。ふたつとなく。千載（またもなく、たゞ一筋に、君を思ふ、戀路にまよふ、我や何なる）

まだもの ナ。又者。またげらい。けらいのけらい。

まだら ナ。曼陀羅。まんだらを見るべし。源鈴虫（持花のまだらかけさせたてまつりて、しろがねのはながめに、たかくことごとしき花の色をとゝのへて）

まだらうり ナ。斑瓜。うりの、まだらなるあやあるもの。和名（虎蹯、一名、狸首和名、末太良宇利、黄斑文以也）

まだらかに ソ。斑。ぶちに。まだらに。

まだらぐも ナ。斑雲。まだらになりたるくも。

まだらげ ナ。斑毛。かげ。さしげの、まだらにあるもの。

まだらごろも ナ。斑衣。まだらにそめなしたるころも。

まだらだけ ナ。斑竹。竹の一種、とらふだけに同じ。

まだらづく サ。ヒトリ四。斑。ぶちにあり。まだらにあり。枕草二（馬は、むらさきの、まだらづきたるあしげ）

まだらなり サ。斑。ぶちなり。かはりたるいろ、まだらなるにあり。字拾四（ふみくへされたる稲の下に、まだらなる小蛇の、きりくとして居されば）

まだらに リ。斑。ぶちに。かはりたるいろまだらに。枕草九（殿衣に、白粉うつりて、まだらならんかし）

まだらねずみ ナ。斑鼠。鼠の一種なり。かさら、常のねずみのごとくにて、毛の色まだらなるもの。

まだらまく ナ。斑幔。まだらなるまく。一隅はしろく、一隅はくろきまく。實方集（月のけちには、まだらまくは、雪のふりかゝれるを）和名（斑幔讃、萬多良萬久）

まだらゆき ナ。斑雪。はだらゆきに同じ。

まだるし サ。ビ。鈍。にぶし。ゆるし。よわし。

まだれ ナ。麻垂。からもじのこしらへにいふ詞にて、麻の字の上にある形のもの。床、宗、庶、庫のたぐひ。

まち ナ。町。たのさかひ。ところのさかひ。また、道法などにいふ所。ちやうを見るべし。源少女（六條京極のわたりに、中宮のふるき宮のほとりを、四町をしめてつくらせたまふ）和名（町和名末知田區也）

まち ナ。坊。いちくらなどのたちこみたるところの、いくすぢもあれたるところ。和名（坊和名萬知別屋也）

まち ナ。襠。衣裳の、きぬになりたるところ。

まち ナ。谷。まづしきをいふ。神代紀（谷所之本）

まちあしだ ナ。待足駄。まちふどのたぐひにて、できあひのあしだをいふにや。拾玉（になひもつ、さうきのいれこ、まちあしだ、世をゆく道の、物とこそみれ）

まちあひ ナ。待合。いであふところにいでおて、たがひに、そこにくるひとをまちうくるをいふ。

まちあひぢやや ナ。待合茶屋。まちあひをするちやや。

まちいしや ナ。町醫者。まちにゐるくすし。

まちいづ ワ。カケ。シニ。待出。まちつく。まちとる。源若菜（もしおもふやうならん、世の中をまちいでたらば）

まちうく ワ。カケ。シニ。待受。まちゐていでむかふ。源柏木（かしこきおこなひびと、葛城山よりさうじいでたるまちうけさせたまひて、加持まゐらせんとしたまふ）

まちかく ワ。カケ。シニ。待懸。まちまうく。源蜻蛉（さるどのの口はまちうけて、中將の君してきこえたまふ）

まぢかし サ。ビ。間近。あひだちかし。古今（ひとしれぬ、思ひやなぞと、蘆垣の、まぢかけれども、あふよしのなき）

まちがたに ソ。待難。まちかねて。古事記（うべなく、君待がたに、わがけせる、おすひのすそは）

まちかね ナ。待兼。こぬるをいふ。女の詞なり。女重寶記

まちかねやま ナ。待兼山。山名。攝津にあり。新古（夜をかさね、待兼山の、時鳥、雲居のよそに、一聲ぞきく）

まちがひ ナ。間違。あやまり。ゆきちがひ。

まちがふ サ。ヒトリ四。間違。たがふ。あやまる。ゆきちがふ。

まちかぶと ナ。待胄。できあひのうりもののかぶと。

まちぎみ ナ。公卿。まへつぎみに同じ。崇峻紀（群卿）

まちくだり ソ。町下。まちのまゝに。拾玉（町下、よるはひゆきて、よをみれば、物の理、みなしられけり）

まちぐち ナ。町口。まちのいりくち。六帖二（その家は、土御門まちぐちなれば、御みちなりけり）

まちくらす ワ。カケ。四。待暮。まちゐて、ひをくらす。源標（昨日まちくらししを、猶あひおもふ、まじきなめり）

まちことば ナ。町詞。あきびとのいふことば。

まちざいそひ ナ。待幸。まちさうけたるさいそひ。績古事談（深方の、賢政をのることは、さきでもなきまちさいそひの、おなじやう哉とぞいひてけり）

まちざかな ナ。待肴。まらうどのつどはんさきに、かねて、さうじりのむしろに、ならべまうけおくをいふ。

まちざけ ナ。待酒。まちてのむさけ。万四（君が爲、かみし待酒、やすの野に、一人やのまん、友なしにして）

まぢち ナ。釣針をまじなひていふる詞。まづしくなれと、とごひていへるなり。神代紀（貧鈎）

まちつく ワ。カケ。シニ。待付。まちおほす。まちてえたり。字拾一（けふなまちつけて、この人をかくせめければ）

まちどき ナ。待時。まつべきとき。後拾（花みると、家路はおそく、かへる哉、まちどきすぐと、妹やいふらん）

まちどしより ナ。町年寄。いちびとのをさ。武家にて、町行につけて、町の事をとらしめたるものなり。

まちどほし サ。ビ。待遠。まつほどひさし。まつほどながし。

まちどほに ソ。待遠。まつほどひさしく。まつほどながく。貫之集（たちぬとは、春をきけども、やまざとは、まちどほにこそ、花はさきけれ）

まちどる ワ。カケ。四。待取。まちうく。まちつく。拾玉（夕立の、雲よりいづる、夏口を、まちとるものは、蟬の諸聲）

まちなみ ナ。町並。まちのいへのならび。

まちにようばう ナ。待女房。よめいりのとき、よめをまちむかふるにようばう。嫁入記（よめむかへのきやくは、まちにようぼうめしつれたまひ候ふ）

まちびと ナ。待人。くるひとをまちゐるをいふ。

まちぶぎやう ナ。町奉行。武家の役の名。市政をとるもので、かねて、非違を捉し、是非を判断する事あり。

まちぶせ ナ。待伏。隠れゐて、くるひとをまつをいふ。

まちぼうけて ツ。待惚。まつにうみて。まちくたびれて。

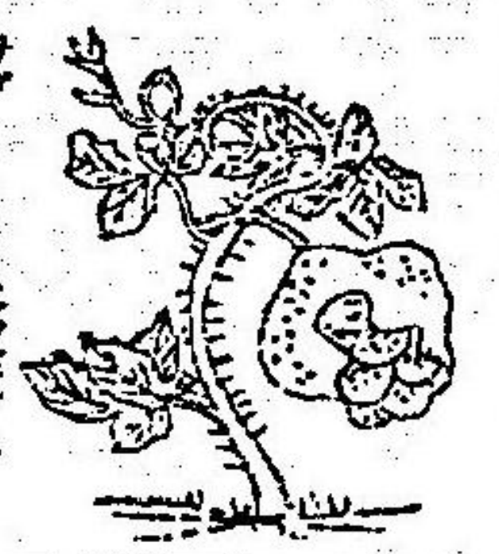
まちまうく ワ。カテ。シニ。待設。こゝろがまへしてまつ。

まちまちに ツ。區々。さまざまに。とりどりに。

まちみる ワ。カケ。カ一。待見。まちうけてみる。源末摘花（雲間まちみんほど、いかにこゝろもとなうとあり）

まちむかふ ワ。カケ。シニ。待迎。まちゐてむかふ。

まちん ナ。番木鼈子。蔓草の名。葉は葡萄に似て、夏のころ、黄色なる花さきて、實をむすぶ。まさ、實はからすうりに似て、からすうりよりもおほきく、核の形、すこし、鼈に似たり。犬の毒となるものなりといふ。



まちや ナ。町家。あきびとのいへ。いちまちのいへ。

まちよろこぶ ワ。カケ。四。待喜。まちうけてよろこぶ。源少女（宮、例の、いひしらずうちゑみてまちよろこびたまふを、まめだちて、物語などきこえたまふついでに）

まちよろひ ナ。待鎧。できあひのうりもののよろひ。貞丈雑記

まちよせる ワ。ヒトリ。四。待寄。まつによせる。まちて、こゝろつくる。新撰古（よなくな、かさねてぞなほ、またれぬる、まちよせる身も、こゝろづよさも）

まちわり ナ。町割。まちのさかひ。まちのさかひさかひ。

まちゐる ワ。カケ。カ一。待居。まちてゐる。

まつ ナ。松。木の名。葉の状、針のごとく、幹は、節おほくして、おほくさくねりまがりて、すぐなるものすくなし。また、幹の皮、あつくあらくしくして、鱗をかさねたるがごとし。春の頃、をなぐさめぎいでて、黄ばみたる蕊のごとき花さき、花ののち、鱗をかさねてまろめたるごとき毬いできて、毬中に、つぶらなる實をふくむ。この木、そのたぐひ、殊におほし。

まつ ナ。松明。たいまつ。ついまつ。源夕顔（御さきのまつほのかにて、いと忍びていでたまふ）

まつ ナ。松。茸の名。まつたけをいふ。女の詞なり。和名（松和名、菘豆）

まつ ワ。カテ。四。待。こんことをのぞむ。あらんことをのぞむ。こんでをのぞみてのぞみえたり。万二（あしびきの、やまのしづくに、妹待と、われたちぬれぬ、やまのしづくに）散木（秋の夜の、鳥のむつねに、つれもなき、人まちし夜の、こゝちこそすれ）

まづ ツ。先。さきに。さくに。古今（きでのやま、やまとをなみてぞ、かへりこし、つらき人より、まづこえじとて）

まついし ナ。松石。まつのいしに同じ。

まつか ナ。眞赤。まことにあかきをいふ。

まつかう ナ。末香。きざみのもの、ちひさくきざみたるものにて、ほとけにたきてたむくるもの。

まつかう ナ。抹額。もちまきしたるひたひのところ。

まつがえ ナ。松枝。まつのえだ。まつのこえだ。

まつがき ナ。松垣。まつのかき。散木（やまざとの、賤の松垣、ひまをあらみ、いたくなふきそ、こがらしの風）

まつかさ ナ。松笠。松の實をつゝみたる毬にて、鱗をかさねてまろめたるに似て、その状、卵のごとし。

まつかさいり ナ。松笠煎。料理にいふ詞なり。下文を見るべし。貞丈雑記（まつかさいりとは、鯛の身を、うろこながらきり、すりひらは、刀目をいれ、ゆびき候へば、松笠に似るなり、たれみそなどにて煮るなり）

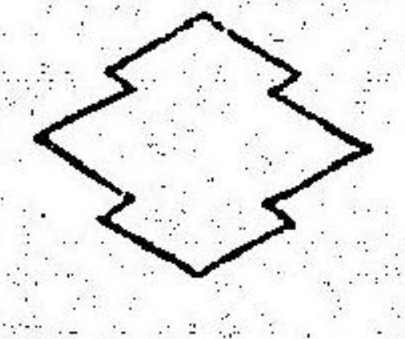
まつがさね ナ。松重。襲の色目の名。表は青くて、裏のむらさきなるもの。西三條装束抄、女官飾抄、胡曹抄、藻鹽草 まさ、表は萌黄にて、裏はむらさきなりともいへり。雁衣抄、布衣記

まつかざり ナ。松飾。かどまつのかざり。

まつかに ツ。眞赤。まあかに。まことにあかく。

まつかはたうさう ナ。松皮疱瘡。はうさうのおもきもの。かさぶたの、まつかはのごとくなれるなるべし。

まつかはびし ナ。松川菱。紋所の名。ひしを、まつかはのごとくかさなりたるさまにゑがきなしたるもの。曽我物語（ちなしといや小袖もさるものなし云々、一面に、松川菱のやうに、箔おきたる小袖なり）



まつかひ ナ。間使。おとづれをするつかひ。万十七（たまぼこの、みちなたどほみ、間使も、やるよしもなし）

まつかふ ナ。眞甲。撫額。まつかうを見るべし。

まつがみ ナ。松紙。まつむらさきにそめたるかみ。

まつくらに ツ。眞暗。まくらに。まことにくらく。

まつくろに ツ。眞黒。まくろに。まことにくろく。

まつげ ナ。睫。まぶさのへりにはえたるけ。枕草九（大蔵卿ばかり、耳ときひとなし。まことに、蚊のまつげのおつるほども、ききつけたまひつべくこそありしか）和名（睫和名、萬豆介、目瞼毛也）

まつご ナ。末期。いまは。しなんとするとき。

まつこんぶ ナ。松昆布。まつむいろのきざみこんぶ。

まつざ ナ。末座。すゑざ。くらじり。むしろのすゑ。

まつさいちゆう ナ。眞最中。まことのさいちゆう。

まつさかさまに ツ。眞倒。まことのさかさまに。

まつさかり ナ。眞盛。まさかり。まことのさかり。

まつさき ナ。眞先。まことのさき。保元（正清、馬にうちのりて、まつさきにこそすゝみけれ）

まつざくら ナ。松櫻。襲の色目の名。表はむらさきにて、裏のうすむらさきなるものをいふ。藻鹽草

まつさをに ツ。眞青。まさをに。まことにあをく。

まつし ナ。末子。むつし。すゑにうまれたるこ。

まつじ ナ。末寺。ほんざんよりわかれたるてら。

まづし サ。フ。貧。たからとぼしくあり。よきかはものたらぬがちなり。この時は、今は、まづしいと、いをそへていふ。万五（されよりも、貧ひとの、ちゝはゝは、うゑさむからん、妻子どもは、こひてなくらん）

まづし サ。ヒ。不味。あぢはひなきをいふ。京畿にて、

まづしい サ。貧。まづしを見るべし。

まつしぐらに ツ。驀直。わきめもせず。まいちもんじに。

まつしま ナ。松島。地の名。陸奥にあり。謡花（松島や、雄島がくれゐる、荒磯の、己がさまざま、みえし千代鶴）

まつしや ナ。末社。ほんしやよりわかれたるやしろ。

まつしや ナ。末社。たいこもちのたぐひをいふとなん。

まつしろに ツ。眞白。ましろに。まことにしろく。

まつすぐに ツ。眞直。ますぐに。まことにすぐに。

まつずみ ナ。松炭。まつをやきたるやはらかなるすみ。

まつせ ナ。末世。すゑのよ。よのうつりゆきたるすゑ。

まつせき ナ。末席。まつざ。くらじり。むしろのすゑ。

まつだい ナ。末代。すゑのよ。よのうつりゆきたるすゑ。

まつたく ツ。全。ふつに。もつぱらに。類聚抄五（頼長公は、まつたく、經をむねとして、世務をほしまゝにして）

まつたけ ナ。松茸。菌の名。おひそめたるころは、みじかき筒のごとくにて、後、やうやく、おほきなる傘をひらく。傘の面は、きばみてうすくろく、背はしろくして、ふかききざみあり。秋の頃、松山にいでくるものにて、香氣きはめてかうばし。散木（おなじひとのもとより、まつたけをそへておくりて侍りける）

まつたし サ。ヒ。全。まさし。かけたるところなし。

まつたゞなか ナ。眞直中。まことのたゞなか。

まつち ナ。待乳山。山の名。大和國、宇智郡にあり。また、下總にもあり。万三（亦打山、ゆふこえゆきて、いほさきの、すみだがはらに、ひとりかもねん）

まつち ナ。燐寸。すりつけぎ。もやうけぎ。

まつちや ナ。末茶。ひきちやに同じ。

まつと ツ。今些。いますこし。なほすこし。

まつな ナ。松菜。野菜の名。すぎなのたぐひ。葉のさま、松に似て、秋のころ、黄色なるいつひらの花さく。

まつなだ ナ。松封。蒲の名。さつさけをいふ。中國にて、

まつのいし ナ。松石。まつの木の、石になりたるもの。

まつのうち ナ。松内。としのはじめの、かどまつのあるあひだ。元日より七日までをいふとなん。

まつのかど ナ。松門。やまずみのひとのいへ。まさ、かどまつをいふ。壬生二品集（ともれんを、ましていますます、まつのかど、みもてんための、秋のゆふぐれ）

まつのくらゐ ナ。松位。三位のくらゐをいふとぞ。古訓栞

まつのけぶり ナ。松煙。松のたいまつの、膠にてかためたるもの。文字などをかくにはもちふるものなり。

まつのこけ ナ。松蘿。苔の一種。ひかげを見るべし。和名（松蘿、一名、女蘿、和名、萬豆乃古介、一云佐流乎加世）

まつのしる ナ。松汁。まつやにのながれいづるもの。和名（松滋和名、松乃之流、取松枝燒其上、承取汁之名也）

まつのとびら ナ。松扉。まつのかどに同じ。月清集（君がすむ、松扉の、雪の朝、猶ふりゆかん、末をこそおもへ）

まつのはる ナ。松春。小唄の名。三味線にてうたふもの。

まつのふで ナ。松筆。なくを、まつにてつくれるふで。

まつのゆき ナ。松雪。襲の色目の名。やなぎの異名。撰集抄

まつのり ナ。松海苔。海苔の一種なり。あまのりのたぐひ。

てて、そのさま、松葉に似たるものなりといふ。

まつのを ナ。松尾。地の名。山城にあり。山家集（玉垣は、朱もみどりも、うづもれて、雪おもしろき、松尾の山）

まつば ナ。末葉。すゑのながれ。すゑぐのながれ。

まつば ナ。松葉。まつのは。伊勢大輔集（奥山の、松葉にこぼる、雪よりも、わが身世にふる、ほどぞはかなき）

まつばいろ ナ。松葉色。まつばのごときいろ。

まつばがみ ナ。松葉紙。まつばのごときちりをすきいだしたるかみ。すきかへしなどにおほきものなり。

まつばぐさ ナ。松葉草。草の名。深山の松の根などにおゆる草にて、葉のさま、松に似て、また、脂あり。根は、ふとくして、人参のごとし。常に、藥にもちふ。

まつはしのうへのきぬ ナ。縫掖。たうの、さきを縫ひたるもの。たうを見合すべし。和名（縫掖和名萬豆波之乃宇倍乃岐奴）

まつはす ワ。ヒトリ。四。纏。まつはる。とはなれずしてあり。源明石（御ゆめなども、たゞおなじさまなるもののみ來つゝまつはしきこゆとみゆるさま）

まつはだか ナ。縦擬。まとさら、まとひのたさゆ。

まつばぼたん ナ。松葉牡丹。草の名。いちれんげのたぐひの草にて、高さ三四寸ばかり、枝ませくして、むらがる。葉のほそながくて、茎にならびつきたるさま、すこし、松に似たり。この草、夏の末、あつきひざかりに、うるはしき花ひらきさく。花は、あかきもの、きろきものなどありて、そのたぐひさまぐあり。

◆

まつばやし ナ。松林。まつの、おほくおひたるところ。

まつばやし ナ。松囃子。まつのうちにするはやしなり。

まつばゆり ナ。松葉百合。山慈姑。草の名。あまなに同じ。

まつばら ナ。松原。まつの、ひろくおひたるところ。神功紀（をちかたの、阿邏々摩菟麼邏、まつばらに、わたりゆきて、つくゆみに、まりやをたぐへ）

まつばらのけ ナ。松原毛。驄の脚の毛をいふなぞ。古訓栗

まつばらやま ナ。松原山。山の名。備中にあり。風雅（村雨の、半はれゆく、雲霧に、秋の日さむき、松原の山）

まつはる ワ。ヒトリ。シニ。纏。まとはりつく。つきゐて、はなれずしてあり。枕草二十（つねよりもおほくふして、ものくせせいとほしげり、その事となく思ひさるは、まつはれつゝしようし、とりもちてあそぶ）

まつびら ソ。眞平。ひらに。ひとへに。

まつふぐり ナ。松毬。まつかさに同じ。

まつぶさに ソ。具。委曲。よく。つぶさに。古事記（そのめきかきるは、まめごころを、まつぶさに、とりよそひ）

まつぼくり ナ。松毬。まつかさに同じ。

まつほど ナ。茯苓。ぶくりやう。松の根のほとりの土中に、ふかくいでくる塊をなしたるものにて、かたち、拳のごとくにて、外は黒く、内は白し。常に、藥にもちふ。和名（松脂淪入地千歳、則爲茯苓和名、麻豆保止）

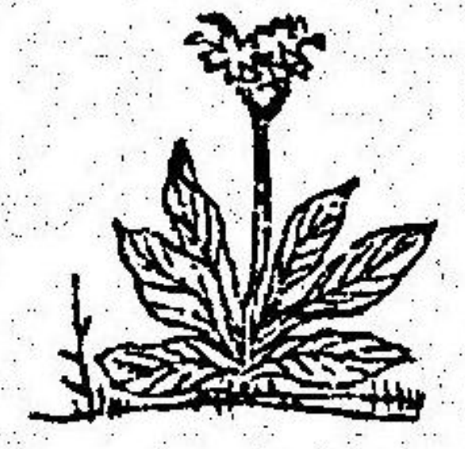
まつま ナ。眞妻。まことのつま。万廿（わが目豆麻、人はさくれど、あさがほの、としさへこゞと、わはさかるがへ）

まづまづ ソ。先々。まづさきに。狭衣（内さまのみやづかへよりも、まづくとまゐりさまひつゝ）

まつみみ ナ。松耳。菌の名。まつたけをいふ。北國にて、

まつむし ナ。松虫。虫の名。すゞむしに同じ。但し、すゞむしは、チンチロリンとなくものと、リンくとなくものとありて、いにしへ、松虫といへるは、リンくとなくものにて、鈴虫といへるは、チンチロリンとなくものなりといふ。古今（紅葉の、ちりてつもれる、わがやどに、たれをまつむし、こゝらなくらん）

まつむしさう ナ。松虫草。草の名。高さ七尺ばかり、葉のさま、薺菜のたぐひに似てちひさくして、夏のころ、茎たちて、その梢に、うすむらさきなるちひさき花をひらく。



まつむしり ナ。松毟。鳥の名。ちひさきとりの、つばさのいろの、ねづみいろなるものなりとぞ。

まつめる ワ。カナシ。シ一。纏。まとむといふに同じ。

まつも ナ。松藻。まつのりのたぐひなるべし。海中の石上にいでくるものにて、そのさま、松の葉に似て、色きはめてあをやかなりといふ。

まづもつて ソ。先以。まづといふに同じ。

まつもどき ナ。松擬。なすびを、ほそながくきざみて、あぶらにていためて、めづるものとしたるもの。

まつものとなし ナ。唐芥子。たうがらしをいふ。越後にて、

まつやに ナ。松脂。まつのやに。和名（松脂萬豆夜邇）

まつやま ナ。松山。山の名。備中にあり。新續古（とくへりの、花さきぬらし、松山の、梢を高み、つもる白雪）

まつら ナ。松浦。地の名。肥前にあり。新續古（松浦山、ゆふこえくれば、玉島の、里のつゞきに、たつ煙かな）

まつり ナ。祭。かみほとけをなぐさむるわざをいふ。

まつり ナ。茉莉。木の名。高さ一二尺ばかり、葉は、まろくして、末のかさとがれり。夏のすゑ、秋のはじめ、しろきちひさき花さく。香氣たかくして、橘に似たり。

まつりう ナ。末流。すゑのながれ。すゑのながれ。

まつりごつ ワ。カケ。四。爲政。まつりごとをす。空穂嵯峨（左大臣のおとゞ、世の中をまつりごち、みかども、まつりごとをあづけさまへるやうにて）

まつりごと ナ。政。ひとをなさめ、くにををさむるわざをいふ。源行幸（まつりごとのおもむきをきこしめしあきらめんことは、むつかしくおもしろげなきやうにおぼえされど）古事記（天下之政）

まつりごとどころ ナ。政所。まつりごとをとるところ。

まつりごとどの ナ。政殿。まつりごとをとるところ。和名（聽政殿萬豆利古止々乃延喜盛也、入御也）

まつりごとはじめ ナ。政事始。一月四日の公事。今年のまつりごとのはじめにて、まづ、神宮の事を奏聞す。

まつりごとびと ナ。判官。すけのつぎにたつつかさにて、長官の命をうけて、よろづの事をおこなふもの。大少をもちてよむときは、大をおほいとよみ、少をすないとよむ。後撰（あそちのまつりごとびとの任をはてて、のぼりまうできてのころ、兼輔朝臣の粟田の家にて）和名（判官云々、神祇曰祐、省曰丞、彈正曰忠、勘解由曰判官、職曰進、寮曰允、司曰佑、内膳曰典膳、近衛曰將監、兵衛衛門府曰尉、内侍曰掌侍、大宰府曰監、鎮守府曰軍監、國曰掾、郡曰主政、家曰從、皆爲萬豆利古止比止）

まつりごとや ナ。政廳。まつりごとをとるところ。

まつりだす ワ。カケ。四。獻。たてまつる。万廿（眞澄鏡、かけて忍べと、麻都理太須、かたみの物を、人にしめすな）

まつりどころ ナ。廳。院廳の、訴訟などをきこしめすところ。

まつりぬし ナ。祭主。さいしゆ。まつりのぬし。

まつりや ナ。祭屋。たまゝつりをするいへ。

まつる ワ。カケ。四。祭。祀。まつりをす。また、神佛を、そこにいはひすうるをいふ。貫之集（榊葉の、いろかはりせぬ、百年の、けふごとにこそ、まつりまつらめ）

まつる ワ。カケ。四。獻。奉。たてまつる。古事記（この御酒は、わが御酒ならず、くしの神、とこよにいます、いはたゝす、少名御神の云々、麻都理こし御酒ぞ、あさずをせさゝ）

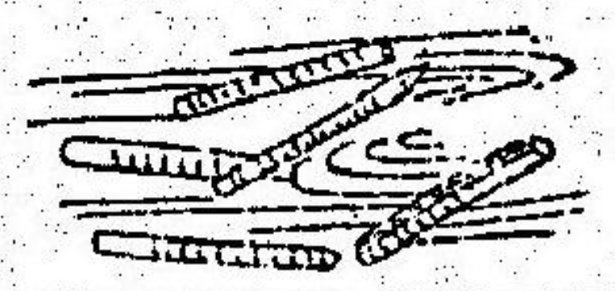
まつる ツケ。ワ。四の。參。たてまつる。万十二（千早振、神をことむけ、まつろへぬ、人をもやはし、はきゝよめ、都可倍麻都里て、あきつしま、大和國の、橿原の、畝火の宮に）

まつろ ナ。末路。ひとのゆくすゑ。よそひのすゑ。

まつろふ ワ。ヒトリ。四。服。したがふ。なびきしたがふ。万二（千早振、人をやはせと、不奉仕、國をおさめと）

まつろふ ワ。カケ。シニ。服。まつろはしむ。したがはしむ。万十二（ちはやぶる、神をことむけ、麻都呂倍奴、ひとをもやはし、はきゝよめ、つかへまつりて）

まて ナ。蟶。貝の名。長さ三四寸ばかり、形、ほそながくして、そのさま、管のきりさるに似たり。また、色は、くろくあをみて、頭のところは、殻の外にいでたり。和名（蟶天蛤屬也、本草云、馬刀、一名、馬蛤、和名上同）



まて ナ。兩手。もろて。ふたつのて。山家集（みたらしに、若菜すゝぎて、宮人の、まてに捧げて、御戸開くなり）

まで ワ。詣。まうで。拾遺（初瀬へまでける道に、佐保山のほとりにやどりて侍りけるに）

まで テ。スエ。迄。ものの、ゆきいたるかぎりをいふことぞ。また、ほど、ばかりのこころにもいふ。万五（天飛や、鳥にもがもや、都まで、おくりまをして、とびかへるもの）古今（あさぼらけ、ありあけの月と、みるまでに、吉野の里に、ふれるしらゆき）

までがた ナ。麻手賀多。あまのまてがたを見るべし。

までく ワ。ヒトリ。カ。詣來。まうでくに同じ。後撰（ともだちの、とぶらひまでこぬ事をうらみつかはすとて）

まてしだし ナ。[illegible]。すこしためらふをいふことぞ。

までつがひ ナ。眞手結。てつがひのところ見るべし。新六（あづさゆみ、まゆみいけふぞ、まてつがひ、あやめの

根さへ、ひきそへみけり）

まてどくらせど　リ。待暮。まちくらせど。まちくるまでど。

までなひと　ナ。眞手人。うちきなるひと。

まと　ナ。的。めあて。ゆみをいるとき、めあてとしてねらふもの。和名（眞和名萬斗、俗用的字　射的也）

まと　ナ。眞砥。といしのとぎの、きはめてこまやかなるもの。和名（砥、一名礪和名末度　細磨石也）

まど　ナ。窓。かべなどに、ちひさきあなをあけて、ひかりをひくやうにしたるところ。新古（ふるき夜の、まどうつ雨に、音せねば、うき世を軒の、忍草なりけり）

まとうを　ナ。的魚。魚の名。かがみいをに同じ。

まどかけ　ナ。窓掛。まどにかけて、光をさへぎるもの。

まどかなり　サ。圓。まろし。かけたるところなし。父子相迎（蓮我あらはれて、法身まどかなれば、されといふおもひの、まどかなる圓融無生の身を得て）

まどかに　ッ。圓。まろく。かけたるところなく。伊勢集（法成寺まで云々、ひさかたの、つきのまどかに、なるほどは、もみぢぞむとも、あきれざらなん）

まとかご　ナ。的籠。いにしへ、やまどるにもちひたるかご。

まとぐし　ナ。的串。やまどるをいふとぞ。古訓栞

まどころ　ナ。政所。まんどころ。いへのうちの、ことをつかさどるところ。また、けいしのたぐひをいふ。蜻蛉（記にの事、こまどころは、まどころにものしつらき）源氏、藤裏葉（西の對、まどころのなどかけて、まどころ、けいしなど、あるべきさまは[illegible]）

まどし　サ。貧。まづしに同じ。徒然草（財おほければ、身をまもるにまどし、害をかひ、煩をまねく）

まどのふみ　ナ。窓書。がくもんをいふに同じ。ことぞよせ

まどのほたる　ナ。窓螢。ものまなび、まろそし、車胤といふ人の、窓のひかりとして、螢をよみし事ありしよりいへり。新千（君が代に、こころのやみの、それゆくや、まどのほたるの、ひかりなるらん）

まとゐ　ナ。的居。いて。ゆみのけいこをするところ。

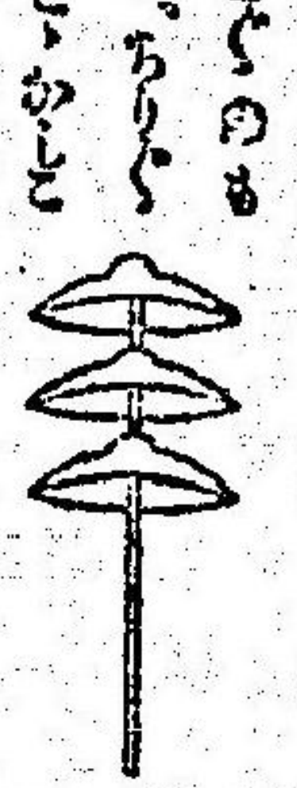
まどはす　ワ。カケロ。惑。まどはす。空穂、藤原君（みしどろきらでまどはしつるも、ともに罪はあらず）

まとゐす　ワ。ヒトリ。圓居。まとゐするに同じ。空穂、藏上（かくてまゐりたまへれば、若君の、このとのに、てゝもとて、むつましうまとゐしてまつりたまふ）

まどはす　ワ。カケロ。惑。まどはしむ。後撰（聲たてて、なきぞ言べき、秋霧に、友まどはせる、鹿にはあらねど）

まとはる　ワ。ヒトリ。纏。まつはるに同じ。

まとひ　ナ。纏。大將の居る本陣の標にたつるものにて、竿のさきに、さまざまのもののなつけたり。これは、ちりぢりになりたる士卒の、ここかしこよりみてあつまるやうにするものなり。



まどひ　ナ。惑。まよひ。こころのくらむをいふ。

まとふ　サ。ヒトリ。回。纏。まきつく。つきあてもなれずてあり。拾玉（身はまどふ、秋の夕霧に、くれよ、それてさうべき、その御法の）源氏、総角（君は、御衣にまとはれてふしたまへるを、せめて出でして）

まどふ　ワ。ヒトリ。回。惑。まよふ。こころくらむ。よしあしもしらずなる。万二（はにやすの、池のつつみの、かくれぬの、ゆくへをしらず、とねりはまどふ）

まどふ　ツ。カケロ。回。惑。みだる。せけなくなる。源、末摘花（いとあはれに、さびしうあれまどへるに、松の雪のみあたたかげにふりつめる、山里のここちして）

まどふ　ワ。カケロ。償。つぐのふ。かへりをいたす。

まどほなり　サ。間遠。あひだとほし。たえだえなり。詞花式部親王集（ときどきくる人、すこしまどほなるころ、花みるを、その人のおそくさう人の許にやるとて）

まどほに　ツ。間遠。あそびとほく。たえだえに。源、夕霧（をりくすざま、まどほにきこえならひたまへる御すみに）

まとはうし　ナ。的串。射場の的のかたはらに居て、射る矢の、的にあたる時に、旗をあげて知らするもの。和名（同時末止萬　乾落司時、中落擧之）

まとまる　ワ。ヒトリ。纏。ひとつにならぶ。

まとむ　ワ。カケ。シモ二。纏。ひとつにまとまらしむ。

まとめる　リ。カケ。シモ一。纏。ひとつにまとまらしむ。

まとも　ナ。正面。まむかひ。まことのおもて。

まとや　ナ。的矢。いそまて、まとをいるやをいふ。

まとり　ナ。眞鳥。鳥の名。わしに同じ。万二十（思

ふといひて、眞鳥すむ、雲梯の森の、神しさらさん）

まどり　ナ。間取。いへのうちの間のくみなしをいふ。

まとりば　ナ。眞鳥羽。わしのはねをいふ。

まどろむ　ワ。ヒトリ。四。交睡。ねむるともなくてすこしねむるをいふ。古今（寝ぬる夜の、ゆめをはかなみ、まどろめば、いやはかなにも、なりまさるかな）源、蓬生（つゆまどろまれず、あくしわびさせたまふ）

まどゐ　ナ。圓居。くるまざにゐることをいふ。ひとつむしろにあつまるをいふ。古今（おもふどち、まとゐせる夜は、唐錦、たたまくをしき、ものにぞありける）

まな　ナ。眞字。からもじを、かなにむかへていふとなへ。榮花、殿上花見（手かき、歌よみ、眞字をさへかかせたまふ）

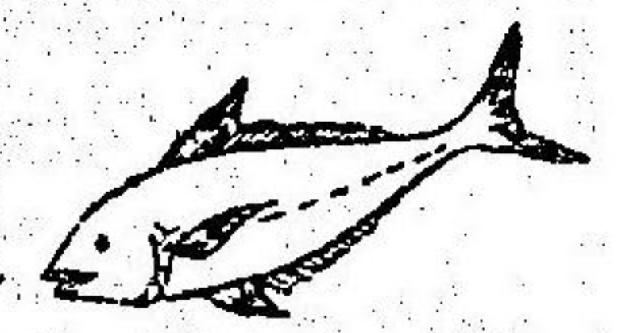
まな　ナ。眞魚。れうりにもちふるうを。

まないた　ナ。眞魚板。爼。うををれうりするだい。空穂、藤原君（たふひ、たのすゑて云々おほくり、まないたどもたてて、いをつくる）和名（爼和名萬奈以太）

まないゑひ　ナ。眞魚醉。ぎよみのいゑひに同じ。

まなか　ナ。眞中。たゞなか。まことのなか。

まながつを　ナ。鯧。魚の名。頭ちひさく、身ひらたくして方なり。また、全身あらそみて、鱗ほそく、身の中央より、尾にとほりて、背にも、腹にも、鰭あり。



まなかひ　ナ。目交。めのさき。めのほとり。万五（麻奈迦比に、もとなかかりて、やすいしなさぬ）

まなかぶら　ナ。瞼。まぶさのへり。和名（瞼和名萬奈加布良）

まながり　ワ。麻那賀理。たがひにてをさしかはしていだくをいふとぞ。古事記（たゝき麻那賀理、眞玉手、玉手さしまき、ももながに、寝はなさんを）

まなぐひ　ナ。眞魚咋。あめのまなぐひに同じ。

まなくり　ナ。眞魚厨。魚の料理する所。字鏡（厨万奈久利）

まなこ　ナ。眼。め。ひとみ。六百番歌合（月のすむ、そらはよそにも、かそらじな、まなこにあまる、ひろさそのいけ）和名（眼和名萬奈古　目子也。一云瞼上訓同）

まなご　ナ。愛子。眞子。まことのこ。めでらるるこ。万廿（おもちちに、眞名子にかあらん、なでしこの、つまにありけん、おもほしき、ことつてんやと、家とへど、家をものらず、名をとへど、名だにものらず）

まなご　ナ。眞砂。すな。まさご。和名（繊砂萬奈古　繊細也）

まなこざし　ナ。眼差。めつき。めの、ものをみるさま。

まなごぢ　ナ。眞砂路。いさごぢ。万廿（衣手の、眞若の浦の、愛子地の、間なく時なし、あがこふらくは）

まなこゐ　ナ。眼皮。めつき。まなこざし。枕草子（鷺は、いとみるめもみぐるしく、まなこゐなども、うたて、萬はなつくしからねど、ゆるぎの森に、一人は寝じとあらそふらんこそおかしけれ）和名（眼皮師説萬比岐、一云萬奈古井）

まなさき　ナ。眥。まなじりに同じ。

まなさき　ナ。眼先。めのさき。まのあたり。

まなざし　ナ。目眦。まびさしに同じ。

まなしかつま　ナ。目無籠。あみめなきかご。古事記（即造无間勝間之小船其船以教曰）

まなじり　ナ。眥。眦。めのえり。めのそしの、みみのかたにむかふところ。字鏡（眥万奈志利）和名（眦和名萬奈之利　目裂也、遊仙窟云、眼尾師説、訓同上）

まなづる　ナ。眞名鶴。鳥の名。つるに同じ。また、たんちやうをいふ。新千（とりのうらや、道をたづねて、まなづるの、まなぶるあとは、まよはずもがな）

まなばし　ナ。眞魚箸。うををれうりするときもちふるはし。字拾二（用意、けふのきうちやうは、つかまつらんといひて、まなばしけづり、刷なる刀ぬいて）

まなはじめ　ナ。眞魚始。ぎよみのいはひに同じ。

まなばしら　ナ。鶺鴒。鳥の名。にはくなぶりをいふとぞ。古事記（麻那婆志良、尾ゆきあへ、にはすずめ、うずすまりゐて）字鏡（鶺鴒万奈波志良、又鴉加利、又万奈柱）

まなぶ　ワ。カケ。四。學。まねぶ。ならふ。けいこす。源、鈴虫（さとならびまなぶねども、すこしもかどあらん人の、耳にも、目にもとまる事、おぼえんはおほけるべし）

まなぶ　ワ。カケ。二。學。まねぶ。ならふ。けいこす。千載序（道をまなぶる者をきくに、文の道をまなびす）

まなぶた　ナ。瞼。まぶさ。めをおほふかわ。万廿（むらきもの、つくれる小田を、むもからす、瞼あれて、てるはこまをり）和名（瞼和名萬奈不太　目瞼也）

まなべいた　ナ。爼。まないたをいふ。悟識さて、

まなむすめ ナ。實女。愛女。まことのむすめ。めでらるゝむすめ。空穂藤原（國後の介のまなむすめ云々、この春、子ひとりなしてかくれましき）

まにあはせ ナ。間合。まあはせに同じ。

まにあひ ナ。間合。紙の名。とりのこのひろきもの。

まにあひ ナ。間合。いつわり。かざりのことぞ。

まにあふ ワ。ヒトリ。四。間合。ときのようにかなふ。

まにし ナ。眞西。まことのにし。まひがしのまうら。

まにま ナ。隨。まゝに。まにく。万廿（かるらくも、きみが麻綺麻綺と、かくしこそ、みもあきらめゝ）

まにまに ナ。隨。まかせて。にまかひて。につけて。万二（梓弓、ひくへ隨意、よらめども、後の心を、知りがてぬかも）土佐（こぎゆくまにく、海の邊にとまれる人もとほくなりぬ、船の人もみえずなりぬ）

まぬ ワ。カケ。シ二。眞似。まねぶ。まねをなす。

まぬかる ワ。カケ。シ二。免。のがる。あらぬやうになる。この語れ、地方によりて、まぬかるゝを下一段にいふ。源松風（後のおぼえも、罪まぬかれなんとし）宇拾四（おもしの石をふみかへしさまひしにたすけられて、石の苦をまぬかれて、うれしきおもひさまへしとぞ）

まぬかれる ワ。カケ。シ一。免。まぬかるを見るべし。

まぬく ワ。カケ。四。開拔。あひざをぬく。あひざのものをぬきとる。徒然草（まさくかぞふれば、かれこれまぬきゆくほどは、いづれものがれざるに似たり）

まぬけ ナ。間拔。おろかなりとのゝしることぞ。

まぬらる リ。所見。のらるゝをいふ。万卅（もしてその、熊来酒屋に、眞奴良留、やつこもし、さすひさて、率て来なましを、眞奴良留、やつこもし）

まぬるし サ。間緩。ゆるやかにて、まにあはずあり。

まね ナ。眞似。それにならひてするをいふ。空穂上樓（のむまねしてうちとほしつれど、いとほしくてえまさらえひず）源鏡八（資朝も、山伏の眞似して）

まねき ナ。機躡。機の具。機のあぜをひく木にて、足にかけてひきあやつるもの。和名（機躡、機下躡躡蹈也）

まねく ワ。カケ。四。招。よぶ。てをあげさげして、こなたへこよといふことをしらす。古今（秋の野の、草のたもとか、花すゝき、穗にいでてまねく、袖とみゆらん）

まねく ソ。多。おほく。万九（さきにほふ、はなたちばなの、かぐはしき、親の御言、朝宵に、きかぬ日眞彌久、あまさかる、ひなにしをれば、あしびきの、やまのたをりに）

まねし サ。ヒ。多。おほし。若けし。万二（うらさぶる、こゝろさまねし、久方の、天の時雨の、ながらふみれば）

まねぶ ワ。カケ。四。學。まなぶ。まねをなす。ならひておこなふ。また、そのさまを、ひとにつぐるをいふ。源明石（いぶせきをもくれかきならし侍りぬるを、あやしう、まねぶものゝ侍るこそ）同若紫（みづからのゆめにはあらず、人の御事をかたるなり、この夢あふまで、また、ひとにまねぶなとのたまひて）

まねみ ソ。多。おほさま。万十九（つれもなく、かれにしものと、人はいへど、あはぬ日眞彌美、思ひぞわがする）

まねる サ。カケ。シ一。眞似。まぬ。まなぶ。まねぶ。

まの ナ。眞野。地名。攝津と近江とにあり。金葉（うづらなく、眞野の入江の、濱風に、尾花なみよる、秋の夕暮）

まのあたり ナ。目前。めのまへ。めにみるをいふ。空穂嵯峨院（これ、まのあたりにてまゐらせよと侍りつる）

まのがる ワ。ヒトリ。シ二。免。まぬかるに同じ。

まのし ナ。目伸。めをみあぐるをいふ。宇拾一（聖、まのしをして、阿彌陀佛申して、とくくいかにもしさまへといひて、あされげなる顔けしきをして）

まのす ワ。ヒトリ。四。目伸。めをみあぐ。宇拾（あさましと、人どもきゝて、山伏が顔をみれば、すこしも、事と思ひさるけしきもせず、すこしまのしさる様にて）

まのたけ ナ。眞竹。まだけ。すぐきたけ。拾玉（人心、節は[illegible]、まのたけの、ゆがまぬ方を、ためてみよかし）

まのまへ ナ。目前。めのまへ。まのあたり。宇拾十（我はおつけまへと、ねんごろにいひければ、げには、まのまへは、ゆゝしき様にてあなんをみえよりいとし）

まのらし サ。ヒ。間緩。まぬるしに同じ。

まは ナ。眞羽。よしのは。矢の羽にいふ語なり。貞丈雑記

まはかす ワ。カケ。四。廻。まはすに同じ。今昔廿八（廻には錦の帳ひきまはらしさり、御前近く、上達部の座あり）

まはぎ ナ。眞萩。はぎに同じ。万代（あさし野の、まはぎ

・おしなみ、まろねして、かさみをたむな、旅衣かな）

まはし ナ。褌。ふどしをいふ。畿内、美濃、近江にて。

まはしがつぱ ナ。廻合羽。ひきまはしてきるかつぱ。

まはしぎ ナ。廻木。すりこぎをいふ。越後にて。

まはしぎり ナ。廻錐。まひぎりを見るべし。

まはしもの ナ。廻者。しのびのもの。ひそかにあひてのかさまやりて、そのようすをうかゞはしむるもの。

まはす ワ。カケ。四。廻。めぐらす。あまねくゆきわたらしむ。夫木廿（やまがらの、まはすくるみの、とにかくに、もてあつかふれ、ころなりけり）

まはぜ ナ。眞沙魚。魚の名。むぜといふに同じ。

まはだか ナ。眞裸。まつぱだか。まことのはだか。宇拾二十（賀茂祭の日、まはだかにて、たふさぎばかりをして、干鮭、太刀にをきて、やせさる牝牛にのりて）

まはたき ナ。瞬。まばたき。まぶたをしばたゝくをいふ。

まはふ ナ。魔法。えうじゆつ。ふしぎのわざをするもの。

まはふつかひ ナ。魔法遣。まはふをおこなふひと。

まはゆい サ。眩明。まばゆしを見るべし。

まはゆし サ。ヒ。眩明。ひかりきらめきてみえきがたし。まさきらくし。もづらし。この語れ、今は、まばゆいと、しなひといふ。空穂俊蔭（あさりひかりかゞやきて、みる人、まばゆきまでみゆ）枕草九（なかく、晝よりけせうはみえて、まばゆけれどねんじて）

まはらなり サ。疎。すきまおほし。あらくなり。ところどころあり。千載（まばらなる、まきのいたやは、おとされひして、もらぬしぐれや、木の葉なるらん）

まはらに ソ。疎。まばらにほどくに。あらくに。ところどころに。夫木四（まばらにわたるの、やまのさくらは、なりにけり、まばらはみゆる、みねのときぞく）

まはり ナ。廻。周圍。めぐりに同じ。徒然草（かなたの庭に、おほきなる柑子の木の、枝もたはゝになりたるが、まはりをきびしくかこひたりしこそ）

まはり ナ。廻。菜。さい。おそせ。おものにそへてくふもの。四季物語（なけらの餅、つぐみの鳥などやきてたてまつり、御かれいひの御まはりにたてまつれば）

まはりあはせ ナ。廻合。うん。あひあはせ。めぐりあはせ。

まはりだい ナ。廻臺。まはりぶたいに同じ。

まはりどうろう ナ。廻燈籠。とうろうに、かげゑをきりて、つぎをおいてまはるごとくしさるもの。俳諧（富筑波集云々、世をいとふ、すぐその月の、かげぼうし、かしこきぬなの、まはりどうろう）

まはりどほし サ。ヒ。迂遠。あせざてみぢかにゆる。

まはりばん ナ。廻番。ぢゆんぢゆんといふに同じ。

まはりぶたい ナ。廻舞臺。ぶたいの、つぎくにまはるごとくしさるもの。芝居の舞臺などにあるものなり。

まはりみち ナ。廻路。ちかみちならぬみちをいふ。

まはりもち ナ。廻持。じゆんばんにてもつをいふ。

まはる ワ。ヒトリ。四。廻。めぐるに同じ。宇拾一（百人ばかりひしめきあつまりて、火を、天の日のごとくにともして、わが居るうつほ木のまへにあつまりぬ）

まひ ナ。眞日。ひといふに同じ。古事記（三栗の、そのなかつえの、ふほつく、眞肥よれあてず、まよがき、こにかきたれ、あそばしをみな、かもがと、わがみし子等）

まひ ナ。幣。ぬさ。まひなひ。おくりもの。やしろにたてまつるもの。万六（あめにます、つくよみをとこ、幣はせん、今夜のながさ、五百夜つぎこそ）

まひ ナ。舞。をどり。ものゝねなどにあはせて、てをあげ、あしをふみて、おもしろくたちめぐるをいふ。源末摘花（我どもならひさるを、その頃の事にて、ものゝねどもよりもみゝらしかましくて）

まひ ナ。間日。そのことのなきひ。

まひあがる ワ。ヒトリ。四。舞上。まひて、そらたかくあがる。京極懐三百首（あそむぎさ、むいりの雲雀、かけりかねて、まひあぐる燃を、いろかとやめん）

まひあふぎ ナ。舞扇。まひのときもちふるあふぎ。

まひいしやう ナ。舞衣裳。まひのときさるいしやう。

まひがし ナ。眞東。まことのひがし。ひがしのたゞなか。

まひかぜ ナ。旋風。つむじかぜ。むきのさだまらぬかぜ。

まひかなづ ワ。ヒトリ。シ二。舞。まひをまふ。榮花御賀（少將たちも、御賀にはまひかなでんとすらんと度々のたまひて）古事記（爲手打膝偏那偏臍奈宋）

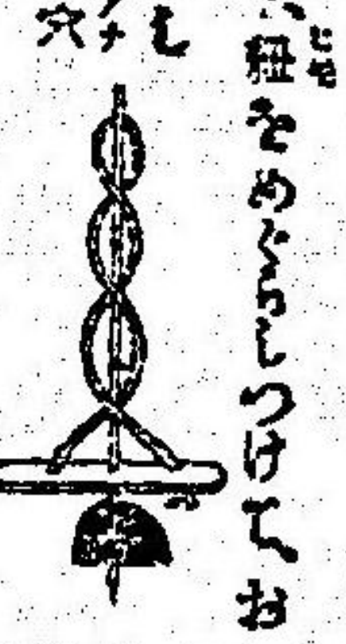
まひ[illegible] ナ。眼皮。まなこゐに同じ。紫詞六（柴束わぬぎさ

れども、たゞ人もなりけり。女房(ニョウバウ)どもも、みな、御(オ)前(マヘ)のまびきにまなびて、まじいづる人(ヒト)もなりければなんみさなくて）和名（麻比師殿、万比岐、一）

まびきな ナ。間引菜。ちひさき菁菜(アヲナ)のまびきとるもの。

まびきぎぬ ナ。擗杵。からざをに同じ。

まひぎり ナ。錐鑽。錐(キリ)の、柄(ツカ)に、紐(ヒモ)をめぐらしつけて、おしめぐらしてきそずやうにしたるもの。ちひさきものに、穴(アナ)をあくるなどにもちふるものなり。



まびく ワ。カナロ。間引。あひだを、ところどころぬきとる。

まひこ ナ。舞子。まひをまふをさなきめのわらは。

まびさし ナ。目庇。めにくるひかりをさふるもの。兜(カブト)、帽子(バウシ)などのひさしのところにつくるものなり。

まひし ナ。舞師。まひてなどに、まひををしふるひと。

まびしやく ナ。馬杓。うまに、みづをあたふるひしやく。

まひたけ ナ。舞茸。菌(タケ)の名(ナ)。ねずみたけのたぐひ。その株(カブ)、ひらたけに似(ニ)て、ひとつの株に、あまたくきだちてかさなりつきていでくるものなり。新撰往来（舞茸(マヒタケ)）

まひて ナ。舞手。をどりて。まひをまふひと。

まひと ナ。真人。姓(カバネ)の名(ナ)。かばねを見るべし。

まひど ナ。舞戸。おしめぐらしてひらくやうにしたると。嫁入記（みづしとの云々、まひどをして、からちやうおろすやうにしたるをいふなり）

まひとごと ナ。真人言。ひとごとといふに同じ。万葉十四（まつげうらに、ぬさとるうらさへ、麻比等其等(マヒトゴト)、吾にもはすなもろ、さにもはのすも）

まひとつ ナ。今一。（いまひとつ。いますこし。）

まひとつね ナ。天目一箇命。あまのまひとつねに同じ。

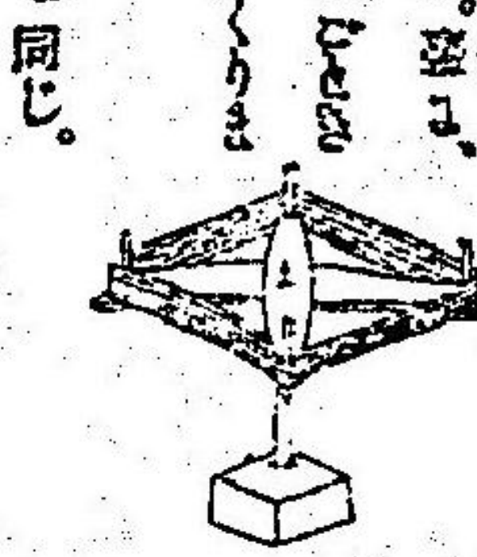
まひどの ナ。舞殿。まひをまふところ。

まひなひ ナ。幣賂。ふやしろにたてまつるもの。また、ひとのこころをとるためにおくるおくりもの。

まひなふ ワ。ヒトリ。四。賄。まひなひす。仲哀紀（幣賂(マヒナヒヘ)）

まひのかしら ナ。舞頭。まひでまふ、ひとの、かしらにかぶるかぶりもの。和名（蘇芳俗云麻比乃加之良）

まひのそ ナ。籰羽。籰耳。そるにくるいとのさくにかけたるを、さくよりまきとるもの。籰(イ)は、みじかき柱(ハシラ)をたて、車(クルマ)の輻(ヤ)のごときものを、十字(ジフノジ)にうちちがへて、くりますやうにしたるものなり。

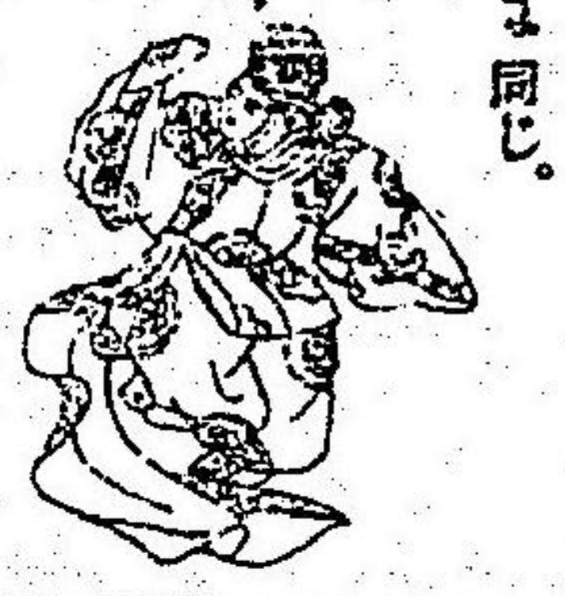


まひぞ ナ。籰羽。籰耳。まひのそに同じ。

まひで ナ。舞袖。まひそでに同じ。

まひびと ナ。舞人。まひをまふひと。拾遺（住吉(スミヨシ)の、国(クニ)の司(ツカサ)の臨時祭(リンジノマツリ)し侍(ハベ)りけるに、舞人(マヒヒト)にて、かむちらけとりて）

まひひめ ナ。舞姫。まひをまふをんな。源少女（舞姫(マヒヒメ)かしづきおろして、遣戸(ヤリド)の間には、屏風(ビャウブ)などたてて）



まひまひ ナ。舞々。ぞうの、りんぐゎなどをときて、ひとをすゝめなどするもの。庭訓

まひまひ ナ。旋虫。まひくむしをいふ。大和(ヤマト)、遠江(トホタフミ)にて。

まひまひつぶら ナ。蝸牛。虫(ムシ)の名(ナ)。かたつぶりに同じ。

まひまひむし ナ。鼓虫。虫(ムシ)の名(ナ)。おほきさ大豆(マメ)ばかりの黒(クロ)き虫(ムシ)にて、背(セ)は、甲(カフ)の如(ゴト)きものあり。常(ツネ)は、水底(ミヅノソコ)に居(ヰ)て、ともすれば、浮出(ウカビイ)でて、水面(ミヅノウヘ)をめぐりまはる。

まひゐ ナ。舞紐。あそびむすびなどのひもにや。中務内侍日記（主上(シュジャウ)云々、御(オン)くびかみ、御(オン)まひゐなり。そのうへに、たらくびの御小袖(オンコソデ)の御(オン)そでをめす）

まひやうし ナ。舞拍子。ときのひやうし。ときのきざみ。

まひらど ナ。開平戸。板戸(イタド)のおもてに、横木(ヨコギ)を、いくつもうちたるもの。おほく、玄関(ゲンクワン)などの戸(ト)に用(モチ)ひたり。

まひらに ッ。真平。まことにひらたく。宇拾廿（蛙(カヘル)の上(ウヘ)にかゝりければ、蛙(カヘル)、まひらにひしげにけり）

まひりぐさ ナ。苦参。草(クサ)の名(ナ)。くららに同じ。

まひる ナ。真昼。まひる。ひるのもなか。

まびろけすがた ナ。衤衣姿。しどけなきすがた。枕草廿（まびろけすがたなるしもうみゆ、まろききぬどものうへに、やまぶき、くれなゐなどをぞ着(キ)たる）

まびろけて ッ。衤衣。しどけなくて。空穂蔵開（さしぬき、なほしなどひきさげて、まびろけていでたり。たれかれみさまひて、いみじうからひさまや）

まびろし サ。ヒ。真広。ひろしといふに同じ。神楽歌（殿(トノ)は、ひろし末比呂之(マヒロシ)、みとしはまけ手(テ)なとりそ）

まふ ワ。ヒトリ。四。舞。まひをなす。まどふ。めぐる。千載（一春(ハル)の夜(ヨ)は、吹(フ)きまふ風(カゼ)の、うつりがは、木毎(コゴト)に、梅(ウメ)とおもひけるかな）源紅葉賀（試楽(シガク)を、御前(ゴゼン)にてせさせたまふ、源氏(ゲンジ)の中将(チュウジャウ)は、青海波(セイガイハ)をぞまひたまひける）

まぶ ナ。間夫。みそかをとこ。いろをとこ。なじみをとこ。

まぶう ナ。魔風。あやしきかぜ。あくまのふかするかぜ。

まぶかに ッ。眼深。めの、ふかくかくるゝばかりに。

まぶかり ナ。魚の名(ナ)。このしろをいふ。京都(キャウト)にて。

まぶくた ナ。山伏(ヤマブシ)のたぐひ。夫木廿（まぶくだが、修行(シュギャウ)にいでし、片袴(カタハカマ)、これこそぬれし、そのかたそでま）

まぶし ナ。射翳。かりびとの、山(ヤマ)などにて、身(ミ)をかくすために、柴(シバ)などをたつるをいふ。夫木廿(レニ)（まぶしさす、さつをの笛(フエ)の、声(コヱ)ぞとも、ならでや鹿(シカ)の、なきあかすらん）曾我物語一（まぶしの前(マヘ)を、三反(サンベン)ばかり、弓手(ユンデ)の方(カタ)へやりすごして）和名（射翳、末布之所以隠射者也）

まぶし ナ。眶。まなぶら。また、めつき。まなざし。深木柏（このひじりも、たけたかうは、まぶしつべたましくて、あらあらは、おどろおどろしく陀羅尼(ダラニ)よむ）

まぶし ラ。ナ。羞明。まぶゆきをいふ。東国(トウゴク)にて。

まぶす ヤ。カケロ。塗。ぬりつくるをいふ。東国(トウゴク)にて。

まぶた ナ。瞼。まなぶた。めをおほふかは。

まぶち ナ。眶。まなぶちに同じ。

まぶりでのそで ナ。真振袖。ふりそで。うちふるそで。長方御集（くれなゐの、やしほのそでの、いもつゝじ、こややまひめの、まふりでのそで）

まぶる ワ。ヒトリ。シニ。塗。まみるをいふ。東国(トウゴク)にて。

まへ ナ。前。おもてのかた。さき。むかし。はじまり。また、神(カミ)のおましどころをいふ。伊勢（道(ミチ)を遠(トホ)くて、うせにし宮内卿(クナイキャウ)もちよしが家(イヘ)のまへくるに、日(ヒ)くれ（ぬ））安方集（ためすは、かぶりぎさまへの年(トシ)の八月(ハツキ)に）

まへ ナ。前。そなへむくるもの。なげてさゝぐるもの。

まへ ナ。前陰。かくしどころをいふ。東京(トウキャウ)にて。

まへいた ナ。前板。とじきみ。くるまのまへのよこぎ。徒然草（嵯峨(サガ)へおそしけるに云々、御牛(オンウシ)を追(オ)ひさりければ、おざきの水(ミヅ)、前板(マヘイタ)まで、さゝとかゝりけるを）

まへうしろ ナ。前後。まへとうしろと。あととさきと。

まへおき ナ。前置。まへとどむ。また、まへのおきもの。

まへがき ナ。前書。まへことをかくをいふ。

まへかけ ナ。前掛。まへだれ。まへにかくるかけもの。

まへがし ナ。前貸。かねを、さきだちてかすをいふ。

まへがしら ナ。前頭。こむすびにつゞくすまうとり。

まへかた ナ。前方。むかし。はじめ。あらかじめ。

まへかど ナ。前廉。まへかたに同じ。おちくぼ物語（落窪(オチクボ)のまへかど、鎖箱(サツパコ)いづこぞやくらくまゐり、衣中(ヱチュウ)うちおかれ、そのあとのた、御簾子(ミスイス)のもとにみえけり）

まへがね ナ。前金。かねを、さきだちてわたすをいふ。

まへがみ ナ。前髪。ひたひがみ。ひさしがみ。

まへからまき ナ。前搦。さぬまきをいふ。東国(トウゴク)にて。

まへがらみ ナ。前絡。さぬまきをいふ。下総(シモフサ)にて。

まへがり ナ。前借。かねを、さきだちてかるをいふ。

まへきん ナ。前金。かねを、さきだちてわたすをいふ。

まへご ナ。迷子。まよひごといふに同じ。俚語

まへごし ナ。前腰。はかまの、まへのこしにあたるところ。著聞十（てあそせして、長居(ナガヰ)、畠山(ハタケヤマ)が小首(コクビ)をつよくうちて、袴(ハカマ)のまへごしをとらんとしけるを）

まへことば ナ。前言。ものごとをいひいだすさきに、まづそのことのあらましなどをのぶるをいふ。

まへしりへ ナ。前後。まへとしりへと。ひだりとみぎと。源若菜（殿上人(テンジャウビト)どもも、つきぐしきかぎりは、みな、まへしりへのこゝろ、こまどりにかきわきて）

まへだれ ナ。前垂。みづしめなどの、ひざのうへにたれさる布帛(ヌノ)にて、衣(キヌ)のよごるゝをふせぐもの。

まへつかた ナ。前方。さき。はじめ。あらかじめ。

まへつぎみ ナ。公卿。くものうへびと。天子(テンシ)の御前(ミマヘ)にさぶらふほどの人(ヒト)をすべていふとなへ。景行紀（朝霜(アサシモ)の、みけの小橋(サヲバシ)、群臣(マヘツキミ)、いわたらすも、みけの小橋(サヲバシ)）

まへつど ナ。前戸。まへのかどのとぐち。古事記（まへつとよ、いゆきたがひ、前戸(マヘツト)よ、いゆきたがひ）

まへのうを ナ。前魚。魚(ウヲ)の名(ナ)。たひをいふ。摂津(セッツ)にて。

まへのもの ナ。前物。かくしどころ。字拾二（まへのものうしなひたまひて、えならひたまはぬなり）

まへば ナ。前歯。くちの、むかひたるおもてにそえたる

を。薄き歯にて、上下に、四枚づゝならびたるもの。

まへだらひ　ナ。前盥。かねを、さきちてたらひをいふ。

まへびき　ナ。前挽。おがの、まへにむかひてひくもの。

まへびろに　ツ。前廣。あらかじめ。かねてより。

まへまうし　ナ。前申。おまへにいでて、ものきこゆるひと。竹取（このまへまうしも、あまりたふれにくゝ、いとほしとおもひて、いふへもなさくせず）

まへまへ　ナ。前々。ひとびとゝいふに同じ。孝徳紀（神名、王名、逐自心之所貪妄付前々處々（前々、人々也））

まへまへ　ナ。前々。まへをいふに同じ。

まへむく　ワ。ヒトリ四。前向。まへのかたにむくをいふ。

まへもつて　ツ。前以。あらかじめ。かねてより。

まへやく　ナ。前厄。まへのやく。やくどしを見るべし。

まへゆるす　ワ。ヒトリ四。前許。まへにいづるをゆるす。枕草九（御前ゆるされたるれ、おぼしめすやうこそあらめ、おもふにたがふれにくきものぞと）

まへわ　ナ。前輪。くらの、うまのかしらにむかひたるかた。平家十（おなじう、壇の浦にて、いけどりにせられたりし二十餘人の侍どももみな、しろき直垂にて、鞍の前輪にしめつけてぞわたされける）

まへわたし　ナ。前渡。まへごし。まへをとほり。

まほ　ナ。眞帆。おひてにかけたるほ。新千（あらせむや、まほにかけつゝ、ゆく船の、一方にのみ、通ふ心を）

まほし　ナ。藍明。まぞゆきをいふ。東京にて、

まほそし　サ。藍明。まぞゆきをいふ。中國にて、

まほたい　サ。眞遜。たゞし。まじめなり。ふしめなり。よくとゝのひたり。千載（そなれぎの、そなれくて、むす苔の、まほならずとも、あひみてしがな）

まほに　ツ。眞穗。たゞしく。まじめに。ふしめに。よくとゝのひて。夫木廿五（紀の國の、なぎさのうらに、ゆく船の、まほにもひきを、あひみてしがな）源總角（女君の御かたちの、まほにうつくしげにて）

まほら　ナ。眞保良。やまなどにて、かこまれたるかごやかなるところ。こもりくのを見合すべし。万九（いぶかしき國のまほらを、つばらかに、ましめしたまへば）

まぼる　ワ。カケ四。守。まもるに同じ。

まぼる　ワ。カケ四。食。まうばる。むさぼりてくらふ。土佐（わかすゝきに、手きる〳〵つんだる菜を、おややまぼるらん、しうとめやくふらん）

まぼろし　ナ。幻。なきものの、あるがごとくにて、ほのかにみゆるこゝちするをいふ。金葉（ころこそ、世をばすてしか、まぼろしの、すがたもひとに、忘られにけり）土御門院御集（まぼろしを、うつゝむかりに、なぐさめて、まださめやらぬ、ゆめのかよひぢ）

まぼろしのよ　ナ。幻世。そらなきよ。ゆめのごときよ。狹衣三（宮、いとゞ、まぼろしの世を、そむきすてさせたまへるのみうれしく、おぼされて、御心のうちすゞし）

まほろば　ナ。眞秀呂場。まほらに同じ。古事記（やまとは、くにの眞秀呂婆、たゝなづく、あをがきやま）

まま　ナ。乳母。めのと。源氏（この人も、ものもきこえやらず、まゝの遺言は、更にもきこえさせず）長門本平家六（若君、手をさしいでて、まゝやくとなきたまふ）

まま　ナ。眞間。地の名。下總にあり。万九（葛飾の、眞間の井みれば、たちならし、水くましけん、手兒奈し思ほゆ）

まま　ナ。飯。おものをいふ。小兒の語なり。

まま　ツ。間。ときどき。をりをり。あまた。

ままいも　ナ。繼妹。はらがはりのいも。古事記（庶妹）

ままえ　ナ。繼兄。はらがはりのあに。

ままおも　ナ。繼母。まゝははに同じ。

ままおや　ナ。繼親。まゝちゝ。まゝはゝ。

ままき　ナ。眞木。木の名。葉は、松に似てひらく、材まろくして、木理こまやかなり。信濃の木曾山におほし。

ままゆみ　ナ。眞卷弓。まゝきゆみに同じ。宇拾十（門部の府生といふ舍人ありけり、わかく、身はまづしくてぞありける、まゝきをこのみて射けり、夜も射けれど）

ままきや　ナ。眞卷矢。矢の名。下文を見るべし。貞丈雜記（まゝきや云々、まゝきゆみにとりなする矢なるべし云々、征矢のたぐひにあらずして、鏃、まされ、鏑にて、やじりをつくりたる的矢なるべし）

ままきゆみ　ナ。眞木弓。弓の名。下文を見るべし。貞丈雜記（まゝきゆみといふ弓あり云々、將弓は、鞆、およびかはをまくなれば、かくいへるなり）夫木廿二（らにせん、

まきのゆみの、ともすれば、ひきそなちつゝ、あたぬこゝろを）和名（細竹此間云和名、[illegible]）

ままこ　ナ。繼子。うみのこならぬこ。源桂樹（ましてかく、末は、すゞろなるまゝこしづきをして）

ままこだて　ナ。繼子立。すごろくの、白黒の石を、二一三 ●○○ ○●●○●○○●○ 五二三四一一三一二二一とならべて、かぞへて、十にあたるをとりゆくたはぶれ。徒然草（まゝこだてといふものを、双六の石にてつくりて、たてならべたる程は、とられん事、いづれの石とも知らねども、數へあてて、ひとつをとりぬれば、その外はのがれぬとみれど）

ままごと　ナ。飯事。こどもの、おものをこしらふるさまをしてあそぶをいふ。[illegible]（堀川狂歌集に、七草は、まゝごとをする、童部の、經花みるも、つめるすゞしろ）

ままし　サ。フ。繼。まゝおやにてあり。まゝこにてあり。

まませ　ナ。繼兄。はらがはりのあに。古事記（庶兄）

ままちち　ナ。繼父。まことのちゝならぬちゝ。そのうへをとなりたるひと。大和（陽成院のすけのこ、まゝちゝの少將のもとに）和名（繼父和名萬々知々）

ままつぶ　ナ。飯粒。めしつぶをいふ。雜俳などにて、

ままと　ソ。儘。ときにしたがひて。撰集抄一（思ひなれし都のすまひもなくて、まゝとすること侍り）

ままに　ワ。ス。隨。まにまに。[illegible]（ときはわかず、月も雪もと、みるまでは、垣根のまゝに、咲ける卯の花）蓑花摘み（つるなどつきて、道のまゝにめぐりあひさきまふ）

ままだえ　ナ。繼絶。ひつぎをいふ。佐渡にて、

ままそれ　ナ。繼母。まことのはゝならぬはゝ。ちゝの、のちぞひとなりたるひと。榮花山（御まゝそゝ、の北の方の、如何しさまひつるとまで、世人申しおもへり）

ままむすこ　ナ。繼息。うみのむすこならぬむすこ。

ままむすめ　ナ。繼娘。うみのむすめならぬむすめ。榮花山花（枇杷の大納言のむすめはおもしければ、いとおとなくしき御まゝむすめのほどなどを）

ままよ　ナジ。如何ともなれ。かまひなし。

まみ　ナ。眞猯。獣の名。みに同じ。常盤嫗物語（しゝ、とり、兎、まみ、むじな、かはうそまでしてくひさるな）

まみ　ナ。目見。めもと。めつき。万七（大船を、あるみにこぎいで、やふねさげ、ともみし子等が、目見はしるしも）

まみおひ　ナ。眉。まゆをいふ。東國にて、

まみなみ　ナ。眞南。まことのみなみ。みなみのたゞなか。

まみゆ　ワ。ヒトリ。シ二。見。ひとにみゆ。ひとにあふ。

まみゆありさま　ナ。目見有樣。めもとありさま。撰集抄一（長月の下の弓張の程、たそがれどきになりて、よはひ六十にあふふきて、まみゆありさま、賢はかしこくやんごとなき僧のいり來て、ものなど申事侍り）

まみる　ワ。ヒトリ。シ二。塗。ぬりたるやうになる。この語は、後世よりでは、まみれると下一段にいふ。大和（血にまみれたる男、まへに來てひざまづきて）

まみれる　ワ。ヒトリ。シ下一。塗。まみるを見るべし。

まむかひ　ナ。眞向。まことのむかひ。たゞしきむかひ。

まむぎ　ナ。眞向。まことのむぎ。たゞしきむぎ。

まむぎ　ナ。眞麥。こむぎ。和名（小麥和名古牟岐、一云末牟岐）

まむし　ナ。眞蟲。蝮蛇。蛇の一種。はみとも、くちばみとも。常の蛇よりも、頭ふとく、頸ほそく、口とがれり。また、色は、黒く黄ばみて、土の色のごとくにて、皮のうへは、まろくまだらなる紋あり。この蛇は、大毒ありて、ものにふるれば、かむ。もし人かまるゝときは、痛はげしくて、ともすれば、命ある事あり。

まむしさう　ナ。眞蟲草。草の名。ひらに同じ。

まむすび　ナ。眞結。ひもを、うちかへて、かさねてむすびて、とけぬやうよしたるもの。嫁入記（ながもちとしらふるやう云々、あさよりまれもして、おほびのまへから、ひとへは、蓋の中は、まむすびにするなり）

まん　ナ。萬。よろづ。千を、十あつめたるかず。

まん　ナ。幔。まくに同じ。雜裝（もや三方に、御簾をかけておろしたるうへに、せんじやうとて、まんのやうなるきぬに云々、御簾のうへにひくなり）

まん　ナ。饅。まんぢうをいふ。女の語なり。禁裏女房內々記

まん　ナ。[illegible]。うん。あはせ。まはりあはせ。

まんいち　ソ。萬一。おほくのうちに、あるまじきがもし。

まんえん　ナ。蔓延。はびこりてゆくをいふ。

まんかい　ナ。滿開。はなの、のこりなくさきたるをいふ。

まんがちに　ツ。我勝。われさきとあらそひて。

まんき ナ。慢氣。まんしんをいふに同じ。

まんぐわん ナ。満願。ぐわんのひかずのみてるをいふ。

まんけいし ナ。蔓荊子。灌木の名。むまむひに同じ。

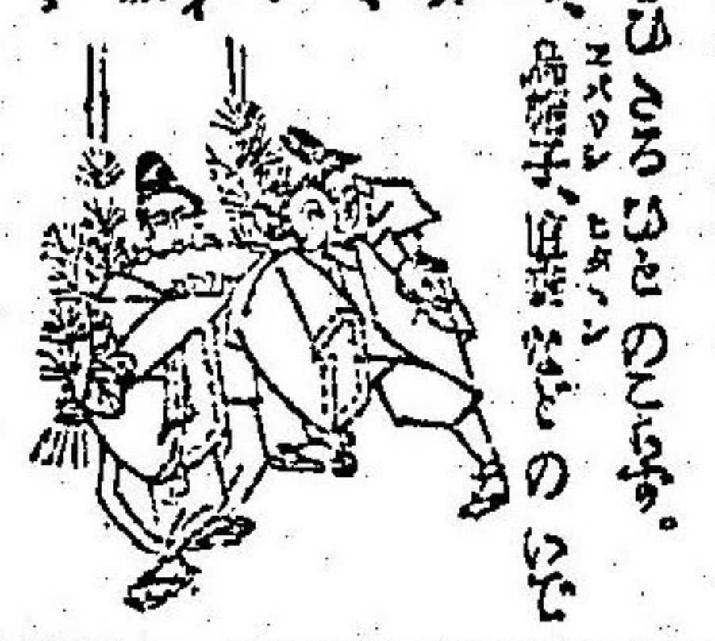
まんげつ ナ。満月。もちづき。まどかなるつき。

まんごふ ナ。萬劫。かぎりなきよ。こふを見合すべし。空穂俊蔭（阿修羅の、萬劫の罪のなやみすぐるまで）

まんごまつだい ナ。萬劫末代。いつのいつまでも。

まんざ ナ。満座。むしろにつどひたるひとのこらず。

まんざい ナ。萬歳。年のはじめ、烏帽子、直垂などのいでたちにて、鼓をうち、扇をかざし、さまぐの祝言をのべ、家をいはひ、人をいはひて、萬歳と、くりかへして、となへありくもの。これ、いにしへの踏歌のなごりなるべし。



まんざいらく ナ。萬歳樂。まざいらく。あらればしり。

まんさう ナ。蔓草。つるくさに同じ。

まんさく ナ。満作。たなつもののよくみのるをいふ。

まんざん ナ。満山。すべてのやまのこらず。

まんさんと ソ。蹣跚。よろめきて。ふらりあしにて。

まんざら ソ。一向はいひなちがさきをいふことぞ。うちけしのことのうへにあらざることなり。

まんじ ナ。卍。天竺の萬の字にて、佛家にて、人をほうむるとき、なきひとの額烏帽子などにかくもの。

まんしん ナ。慢心。うぬぼれ。ぢまん。ほこりかなるこころ。

まんじゆしやげ ナ。曼殊沙華。まんじゆさげに同じ。

まんじりともせず ワ。眠ふらず。まどろまれず。

まんず ワ。ヒトリ。カ。慢。ほまんす。まんしんす。

まんすゐ ナ。満水。みづの、あふるゝばかりなるをいふ。

まんせい ナ。慢性。やまひのひさしくいえぬもの。

まんぞく ナ。満足。こころにたりてふそくなきをいふ。

まんだら ナ。曼陀羅。ぶつざう。まんだらはいろどりたるをむり。また、じやうどのありさまをゑがきたるもの。

まんだらげ ナ。曼陀羅華。てうせんあさがほに同じ。

まんぢう ナ。饅頭。菓子の名。米粉をこねて、餡をつゝみこめて蒸したるもの。七一職人歌合（てうさい、さうさう、まんぢう、さいまんぢう、いづれも、よくむして候ふ）

まんちやくす ワ。カケ。カ。瞞著。ごまかす。めをくらます。

まんてう ナ。満潮。みちしほ。また、さしほ。

まんてんか ナ。満天下。あめのしたすべてをいふ。

まんどころ ナ。政所。まつりごとをおこなふところ。また、摂政関白の家の家人にて、知行所の事などをつかさどるもの。また、武家の、公事訴訟などをさばくところ。源氏紅葉賀（まんどころ、けいしなどをはじめ、ことにわかちて、こゝろもとなからずつかうまつらせたまふ。惟光より外の人れ、おぼつかなくのみ思ひきこえたり）

まんどころだい ナ。政所代。武家の役の名。政所の執事につぐもの。しつじのところ見合すべし。

まんな ナ。眞字。まな。からもじを、かなにむかへていふことば。狭衣四（女君の、まんなや、かんなや、まぎまぎ、うちとけてかいならべるすみつきもじやうの）

まんなか ナ。眞中。まなか。たゞなか。

まんなぶみ ナ。眞字文。まなのふみ。からもじのふみ。紫式部日記（なでふ、女がまんなぶみはよむ、むかしは、經よむをだに、人はせいしきとしりうごと（いふを））

まんねんかづら ナ。萬年葛。苔草の名。あけびのたぐひの蔓草にて、その葉、霜をへてもおちずといふ。

まんねんがみ ナ。萬年紙。うるし塗りの紙にて、文字をかきたる後、ぬぐひて、またかゝる様にしたるもの。

まんねんぐさ ナ。萬年草。玉柏。草の名。濕地、または、岩石の上などにはゆる草なり。高さ四五寸ばかり、枝なくして、梢に、葉あり。葉の状、すこし、松に似たり。

まんねんせい ナ。萬年青。おもとに同じ。

まんぱち ナ。萬八。いつはりをいふ。尾張、上野などにて、

まんびき ナ。萬引。あきびとのみせにゆきて、ものをかひさまをして、ひとめをかすめてぬすむをいふ。

まんぴつ ナ。漫筆。なにとなきことをかきたるもの。

まんびやう ナ。萬病。よろづのやまひ。さまぐのやまひ。

まんぷく ナ。満腹。くひものの、はらにみてるをいふ。

まんべんなし サ。ヒ。遍。あまねし。ゆきわたりくまなし。

まんま ナ。飲水。のみみづをいふ。上総、下総にて、

まんまく ナ。幔幕。まくといふに同じ。

まんまと ソ。旨く。たくみに。おもふまゝ。

まんまんと ソ。漫々。ひろぐと。はてなく。かぎりなく。

まんまるに ソ。眞圓。まどかに。まんまろく。[illegible]（人の心の、まんまるに、みなりあはせ、まどやかに）

まんらん ナ。氾濫。みなぎりて、とりとめもなきをいふ。

まんりき ナ。萬力。まきろくろのたぐひ。

まんりやう ナ。萬兩。灌木の名。高さ一尺ばかり、葉の状、からたちばなに似て、めぐりに刻ありて、梢に、むらがりつけるさま、傘をかざせるごとし。秋の頃、むらさきなる花さきて、つぶらなるあかきの實をむすぶ。實は、くれなゐなるものあり。しろくきなみたるものあり。常は人家の垣根などにうう。

まんろくに ソ。圓。まどかに。また、ほんとうに。

まめ ナ。豆。野菜の名。草の實の、莢の中にあるもの。あづき、さゝげのたぐひ、すべていふとなへ。徒然草（豆のからをたきて、豆を煮ける音の、つぶくとなるをきゝたまひ）和名（大豆、一名、戎菽、和名萬米）

まめ ナ。豆。のいずみ。また、つぶらなるもの。

まめいた ソ。豆板。しろがねの、つぶはしたるもの。いにしへの貨幣にて、銀目をもりてつかひしもの。

まめいり ナ。豆炒。いりまめに同じ。

まめうち ナ。豆打。まめまき。としをとこを見るべし。

まめうゑどり ナ。豆植鳥。かんこどりをいふ。甲斐にて、

まめがに ナ。豆蟹。かにの一種、かたちのちひさきもの。

まめがら ナ。豆殼。まめのさや。まめのくき。徒然草（たくまめがらの、そらくとなる音れ、さがこゝろよりする事なれ）和名（説字亦作萁、和名萬米加良豆莖也）

まめぎ ナ。豆木。果の名。いぬびはに同じ。

まめぎしだ ナ。豆木柴。果の名。いぬびはに同じ。

まめさび ナ。豆茶。たうもろこしをいふ。陸奥、越後にて、

まめぎん ナ。豆銀。貨幣の名。まめいたに同じ。

まめぐち ナ。豆口。鳥の名。いかるがに同じ。

まめごころ ナ。實心。まめやかなるこころ。

まめごと ナ。實事。まめやかなること。空穂秋初（あやしく、まめごときこゆれば、そらめはおぼするかな）

まめざう ナ。豆藏。ざうふざうに同じ。

まめす ワ。カケ。四。塗。ぬる。まみれしむ。

まめぞめ ナ。豆染。染色の名。あをぐろきいろ。また、襲の色目にて、表は白にて、裏のあをぐろきもの。装雅

まめたき ナ。豆敲。鳥の名。いかるがに同じ。

まめだつ ワ。ヒトリ。四。忠實。まめやかはそらく。枕草八（一ひとのいひふるしたるさまにとりなしたまふなど、いみじうまめだちてうらみたまへ）

まめちや ナ。豆茶。さうひいに同じ。

まめつ ナ。磨滅。すれてつぶるゝをいふ。

まめつき ナ。豆搗。きなこ。和名（大豆砂、字亦作麨、和名末女豆木、勿與一歳已上十歳已下小兒、食之氣塞而死）

まめづた ナ。豆蔦。果の名。いぬびはに同じ。

まめつる ナ。豆蔓。菜草の名。葉まろくひらたくして、おほきさ三分ばかり、岩石などにまとひつきておふ。

まめでつぽう ナ。豆鐵砲。かみでつぽうのたぐひ。豆を丸としてうつてつぽう、小兒のもてあそびものなり。

まめどり ナ。豆鳥。鳥の名。いかるがに同じ。

まめなり サ。實。忠實。まめやかなり。古今（まめなれど、何ぞはよけく、刈萱の、亂れてあれど、惡けくもなし）

まめに ソ。實。忠實。まめやかに。空穂藤原（民部卿、いとあはれとみたまひて、おもほしいでずやときこえたまへれ、中納言、いとまめにて、もののたまはず）

まめにんぎやう ナ。豆人形。けしにんぎやうに同じ。

まめのあぶら ナ。豆油。ごを見るべし。

まめのこ ナ。豆粉。きなこに同じ。

まめのはだひ ナ。豆葉鯛。魚の名。いぼだひに同じ。

まめばた ナ。豆畑。まめをうゑたるはた。

まめびと ナ。忠實人。まめやかなるひと。源氏夕顔（かゝるすぢに、まめびとの、みだるゝをりもあるを）

まめふ ナ。豆生。まめばたに同じ。和名（豆田、萬女不）

まめぶみ ナ。實文。まめやかなるふみ。蜻蛉（まめぶみかよひくよひて、いかなるあしたにかありけん）

まめまき ナ。豆撒。まめうち。としをとこを見るべし。

まめまきどり ナ。豆蒔鳥。かんこどりをいふ。東國にて、

まめまはし ナ。豆廻。鳥の名。いかるがに同じ。

まめまめし サ。ブ。實々。まめやかなり。うきたるところなし。源氏若紫（かたじけなくとも、かゝるついでには、まめ〳〵しうきこえさすべき事なんときこえさせ給へば）

まめいげつ ナ。豆明月。ざふさんやに同じ。

まめやかなり サ。實。忠實。まことなり。まじめなり。ねんごろなり。まろらかなり。源氏花散里（ひとしれずおぼしみだるれど、まめやかなる御こゝろなどのあるは）

まめやかに ソ。實。忠實。まことに。まじめに。ねんごろに。まろらかに。落窪一（まめやかにはなほたゞられ、世にはふとれとすれども）枕草五（雨まことにふりぬ云々、まめやかにふれば、笠なきをのこども）

まめやかぶみ ナ。實文。まめやかなるふみ。蜻蛉（まめやかぶみのはしに、かきてそへたり）

まめやかもの ナ。實者。まめやかなるひと。また、つぶらかなるもの。宇拾一（かきあけてみれば、まことにまめやかものゝなくて、ひげむなりあり）

まめをとこ ナ。忠實男。まめやかなるをとこ。また、いろごのみのをとこ。伊勢（それを、かのまめをとこ、うちものがたらひて、かへり來て、いかゞおもひけん、時は三月のついたち、雨そぼふるにやりける）

まめをとこ ナ。豆男。としをとこに同じ。

まも ナ。芋。いもをいふ。女の詞なり。（鎌倉女房内々記）

まもなく ソ。無間。やむときもなく。ときもかはさずやがて。大和（さゞらなみ、まもなくきしを、あらふめり、なぎさきよくば、きみとまれとや）

まもの ナ。魔物。へんげ。ばけもの。えうくわい。

まもらふ ワ。カケ。シニ。守。まもるに同じ。落窪一（あそれは、こゝろぼそげにておもするをまもらへならひて）

まもらふ ワ。カケ。四。守。まもるに同じ。古事記（たゝなめて、いなさの山の、木間よも、い行きまもらひ、たゝかへば、我はや飢ぬ、島津鳥、鵜飼がとも、今すけにこね）

まもり ナ。守。がいあらせじとふせぐをいふ。催馬楽（よもやまの、万毛利はたのむ、あづさゆみ、神のたからは、いましつるかな）古今（たらちねの、おやのまもりと、あひそふる、こゝろばかりは、せきなとゞめそ）

まもり ナ。守。まもりふだ。秋夜長物語（御身をはなさずかけさせ給ひし金襴のほそぞのまもりは）

まもりあぐ ワ。カケ。シニ。見上。めをはなさでうへをみる。宇拾四（疵れ、板敷の下に、柱の許にそゞろまりてあり。目をつけてみれば、この女をまもりあげて）

まもりがたな ナ。守刀。まもりにもつかたな。また、ことに、女のまもりにもつちひさきかたなをいふ。十訓五（大納言行成卿、冠して、守刀より、かうがいぬきとりて、びんかいつくろひてゐなほりて）

まもりづけ ナ。守付。戦場にて、討死を覚悟したるものの、己が姓名を、紙にしるして、髻につくるをいふ。

まもりて ナ。守人。まもりにゐるひと。

まもりぶくろ ナ。守袋。まもりふだをいれおくふくろ。

まもりふだ ナ。守札。ごふ。神佛の御名をあらはしたるふだ。身につけて、禍をさくるなどにもつものなり。

まもりほんぞん ナ。守本尊。そのひとをまもるほとけ。

まもりめ ナ。守目。まもり。めつけ。宇拾四（そのこども、をんなど、二人の子を、船の、まもりめにのせおきて）

まもる ワ。カケ。四。守。みてゐる。めをはなさずてゐる。がいあらせじとふせぐ。伊勢（その通路に、夜ごとに、人をすゑてまもらせければ）大和（下簾のはさまのあきたるより、この男まもれば、わが妻に似たり）

まや ナ。兩下。やねの、まへうしろにふきおろしたるいへ。詞花（あしびたく、まやのすみかは、世の中を、あくがれいづる、かどでなりけり）和名（兩下和名萬夜）

まや ナ。厩。うまや。うしうまをつなぎおくいへ。

まやかしもの ナ。僞物。いつはりてこしらへたるもの。

まやかす ワ。カケ。四。瞞。まぎらかしてあざむく。

まやく ナ。麻藥。ねむりぐすりに同じ。

まやし ナ。僞物。にせもの。まやかしもの。

まゆ ナ。眉。めのうへの、よこになびきたるけ。源氏若紫（つゝゐさり、つらつきいとらうたげにて、まゆのわたりうちけぶり）とりかへ三（まゆぬき、かねつけなど、なんびさせされば）和名（眉和名萬由目上毛也）

まゆ ナ。繭。かひこの、いとをはきて、まろく、つぶらにつくりなして、みづからこもりゐるもの。きぬ、かひこのたまごるいとなるいや。催馬楽（そしりゐの、こがやかりなさめかけ、それはこそ、末由つくらせたい、いとひきなさめ）和名（蠶和名萬由蠶衣也）

まゆげ ナ。眉毛。まゆ。まゆにはえたるけ。

まゆごもり ナ。繭隱。かひこの、まゆのうちにこもりゐるをいふ。万十一（たらちねの、おやのかふこの、眉隱、こもれるいもを、みるよしもがも）

まゆじり ナ。眉尻。まゆのはし。まゆのすゑ。

まゆすび ナ。眞結。まむすびをいふ。東國のいにしへの方言なり。万廿（いへの妹の、我をしのふらし、麻由須比に、ゆすびしひもの、とくらくおもへば）

まゆずみ ナ。黛。をんなの、まゆをそりて、そのあとは、すみにて、まゆをゑがきなすをいふ。金葉（さうとると、かくまゆずみの、いさつらは、こゝろぼそくも、おいけるかな）和名（黛和名萬由須美畫眉墨也）

まゆたれ ナ。眉垂。まゆをそるちひさきかみそり。

まゆとじめ ナ。眉止自女。催馬楽の呂の曲の名。催馬楽（みまくさとりかへ、万由止自女）

まゆとじめ ナ。眉止自女。かほよきをんなをいふとぞ。（山彦冊子）後撰（いにしへの、まゆとじめこも、おそねども、きみれみまくさ、とりてかふとり）

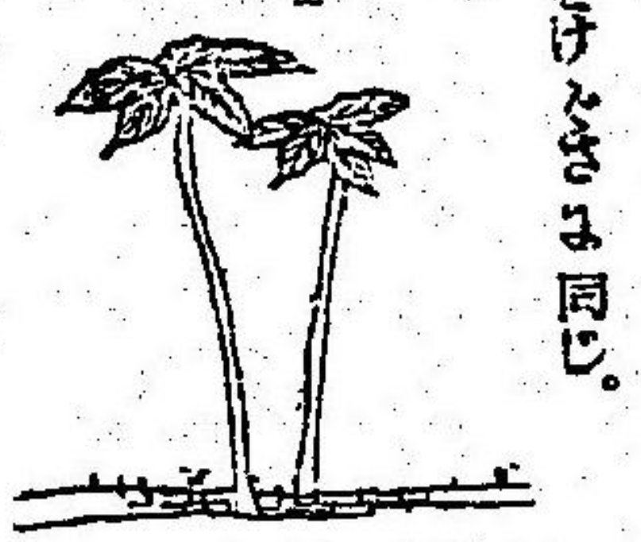
まゆね ナ。眉根。まゆのね。まゆのもと。万十九（青柳の、ほそき眉根を、ゑみまがり、朝顔みつゝ、をとめらが、手にとりさる、まそかゞみ、ふさうみやまは）

まゆねかく ワ。ヒトリ。四。掻眉根。まゆねをかく。いにしへの諺に、ひとにおもはるゝときは、眉根かゆしといふ事あり。また、眉根のかゆきは、思ふひとにあふしるしなりともいへり。万十一（眉根削、はなひひもとき、まつらんや、いつしくみんと、おもふわぎみを）

まゆはき ナ。眉掃。まゆをはらふはけのごときもの。女の、白粉などつけて、化粧するに用ふるものなり。

まゆはけ ナ。眉掃。草の名。まゆはきに同じ。

まゆはけぐさ ナ。眉掃草。草の名。高さ二三尺ばかり、莖のみたかくのびて、枝なく、葉は、莖の末にのみつきて、その状、からかさなどしぼませるがごとし。



まゆびき ナ。眉引。まゆずみをひくをいふ。

まゆみ ナ。檀。灌木の名。葉、ゑんじゆに似て、秋の末もみぢす。また、幹の、外部は、あをくつやゝかにて、内部は、しろきもの、黄色なるものあり。木、ねぞくかたきをもて、古、よく、弓につくれり。和名（檀和名萬由三）

まゆみ ナ。檀。襲の、表は蘇芳にて、裏は黄なるもの。

まゆみ ナ。檀弓。まゆみにてつくれるゆみ。万二（みすゞかる、信濃の眞弓、わがひかば、うまびとさびて、いなといはんかも）古今（みちのくの、あだちの眞弓、わがひかば、やうやくよりて、このびくは）

まゆみのやま ナ。檀山。山の名。常陸國、久慈の郡にあり。堀川百首（ひきつれて、まとゐせんとや、おもふどち、をるれまゆみの、やまはいるらん）

まゆをひらく ワ。ヒトリ。四。開眉。うれひなくよろこびあふ。末木三（うき身には、やなぎをおめる、かひもなし、はちはひとさは、まゆをひらくは）

まゆをひろぐ ワ。ヒトリ。シニ。開眉。うれひなくよろこびあふ。忠見集（よろづよも、ひとのきこゆる、瀬のうへは、まゆをひろげて、ともをまつかな）

まよ ナ。眉。まゆに同じ。万五（つねなりし、ゑまひ麻欲毘伎、さくはなの、うつろひにけり）

まよがき ナ。眉畫。まゆずみをゑがくをいふ。古事記（麻用賀岐、こにかきたれ、あはししをみな、かもがとわがみしこら）字鏡（黛婦人所畫眉黑色也万與加支）

まよけ ナ。魔除。あくまをはらふまもりふだ。

まよなか ナ。眞夜中。まことのよなり。よるのさなか。

まよはかしがみ ナ。迷神。まよはしがみに同じ。宇拾十一（九條のほどより、まよはし神のつきて）

まよはかす ワ。カケ。四。迷。まよはすに同じ。宇拾十一（九條のほどより、まよはかし神のつきて）

まよはしがみ ナ。迷神。ひとをまよはすかみ。

まよはす ワ。カケ。四。迷。まよはしむ。まよはさす。

まよひ ナ。迷。こゝろの、おもひさだまらざるをいふ。また、もののみだれまぎるゝをいふ。緒手（久方の、空は月日の、めぐるこそ、迷なてらす、そしめなりけれ）源少女（夕暮の人のまよひは、闇雨せさせさまへり）

まよひ　ナ。縒。よれ。もつれ。くづれ。万八（今年ゆく、にひさきもりの、あさごろも、肩の間亂れ、誰かとりみん）

まよびき　ナ。眉引。まゆずみをひくをいふ。万五（つねなりし、ゑまひ眉欲毘伎、さく花の、うつろひにけり、世の中は、かくのみならし）仲哀紀（美女之睩（睩此云麻用弭枳））

まよびきの　マクラ。眉引之。まよびきは、よこにひくゆゑに、よこにかけていふ。万廿（妹をこそ、あひみに來しか、麻欲婢吉能、與許夜麻べろの、しゝなすおもへる）

まよひご　ナ。迷子。いへぢなどにまよひたるこ。

まよひごふだ　ナ。迷子札。いへどころなどをかきたるふだ。まよひごとなりたるときのためにとて、をさなびのきぬなどにつくるものなり。

まよふ　ワ。ヒトリ。四。迷。まどふ。おもひさきぐさくあり。また、もののみだれまじるゝをいふ。新千（おのづから、人もをしへぬ、おもひにて、まよひそむるや、戀路なるらん）狹衣三（雪ふりつゝ、こがらしあらくしう、ふきしきたる、燈火もいさうまよひて、ふきつけらるゝをそらひとびつゝ、煙の中よりにげみ（にでたる））

まよふ　ワ。ヒトリ。四。紕。よる。そつる。くづる。万十一（あろうさへの、そでは間細時、とぎるとこか、家のみたりを、やますふりしは）和名（紕、蒿頭布、一云與流、紕紕機也）

まなり　ナ。眵。めやにをいふ。豐後などにて。

まよて　ナ。石炎螺。にしのたぐひ。和名（石炎螺（和萬貝））

まら　ナ。陰莖。をとこのかくしどころ。著聞十（つびは、筑紫つびとて、第一のものといふ云々、まらは、伊勢まらとて、最上の名を稱されども）靈異記（開）

まらうど　ナ。賓客。まれびと。きやくじん。土佐（大和歌、あるじも、まらうども、他人もいひあへりけり）

まらうどがらす　ナ。客鴉。たびがらすに同じ。

まらうどざね　ナ。客實。むねとあるまらうど。伊勢（左中辨藤原のまさちかといふぞなん、まらうどざねにて、その日はあるじまうけしたりける）

まらうどゐ　ナ。客居。まらうどをすうるところ。源氏早蕨（例のまらうどゐの方におはするにつけても）

まらたけりぐさ　ナ。淫羊藿。うむぎなに同じ。和名（淫羊藿（和名宇無木奈、一云夜末比里久佐）羊食此藿、一日百遍、故以名之、一名剛前、蘇敬曰、俗名仙靈毗草是（漢語抄云、仙靈毗草、末比多介里久佐））

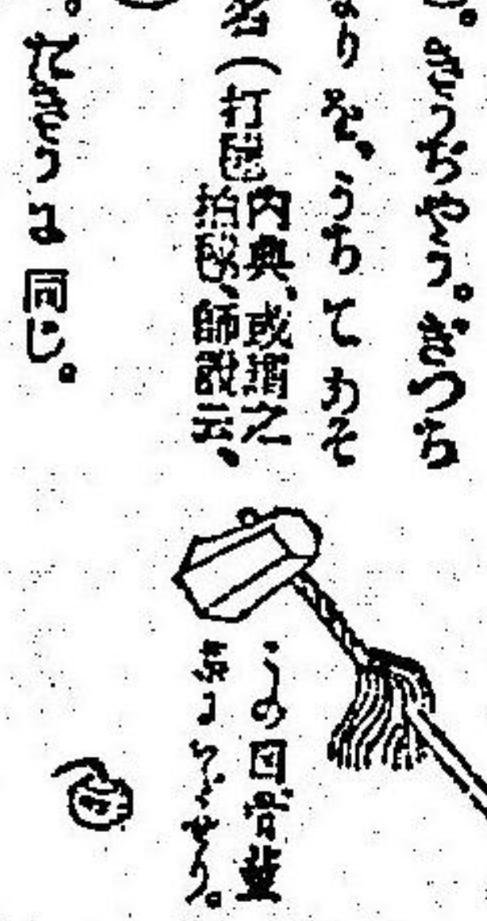
まらびと　ナ。賓客。まれびと。きやくじん。佛足石歌（藥師は、つねのもあれど、賓客の、いまのくすりし、たふとかりけり）和名（玄蕃寮（保宇之萬良比止乃豆加佐））

まり　ナ。鞠。わしをもて、けあげてあそぶものにて、皮をもて、ふくろのごとく、まろくぬひなしたるもの。くゑまりのところ見合すべし。拾玉（花の枝に、かけてかずそふ、まりの庭の、なつまぬほどは、雨そゝぐなり）和名（鞠、字亦作毱、和名萬利、以韋爲之、實以毛而蹴戲之）

まり　ナ。椀。うつはもの。みづなどをもりてのむものをすべていふ。和名（金椀、日本靈異記云、其器皆鋺（俗云、賀奈萬利、今案、椀字所出未詳、古語謂椀爲萬利、宜用金椀二字、椀飾盌字、見瓦器中））

まり　ナ。鋺。かなまりに同じ。

まりうち　ナ。打毬。きうちやう。ぎつちやう。ちやうの、まりを、うちてあそぶたはぶれ。和名（打毬、内典或揣之、拾毬、師說云、萬利宇知毛乃打者也）



この圖骨董集にいだせり。

まりうち　ナ。打毬。だきうに同じ。

まりくくり　ナ。鞠括。まりをつくるたくみ。七一職人歌合（まりくゝり、難波殿は、大形を御このみある）

まりぐつ　ナ。鞠履。まりをけるくつ。七一職人歌合（くつゝくり、まりぐつは、そどくなるがよろきと）

まりしてん　ナ。摩利支天。天竺の神の名。火星の女神なりといふ。されど、今は、軍神の圖をあげけり。

まりのかかり　ナ。鞠懸。くゑまりのにはにうゝるき。

まりば　ナ。鞠場。くゑまりのには。まりをけるところ。

まりや　ナ。摩利矢。ひきめ、かぶらやのたぐひ。神功紀（つくゆみは、末利椰をたくへ、うまびとは、うまびとどち）

まりりかに　ソ。圓。まろらかに。まろやかに。こえふとりて。字鏡（臝奈太良加爾、又曾比也加爾、又万利々加爾）

まる　ナ。丸。圓。全。たまのごときかたち。そのごときかたち。また、ものの、かくるところなくあるをいふ。

まる　ナ。丸。まろをいふに同じ。

まる　ナ。溲器。おのそこに同じ。

まる　ワ。カナ。四。放。かたやにゆく。くそをす。きとをす。竹取（つばくらめのまりおける、ふるくそをにぎりたまへるなりけり）神代紀（送糞、此云倶蘇摩屢）

まるあはび　ナ。丸鮑。のしあはびにせぬほしあはび。

まるあんどん　ナ。丸行燈。あんどんのまろきもの。

まるい　サ。圓。まろしを見るべし。

まるうま　ナ。丸馬。なとてうまをいふ。伊勢にて。

まるおび　ナ。丸帶。をんなのおびの、ひとつきぬをもて、うらとおもてとをりかへしてしたるもの。

まるかがみ　ナ。圓鏡。かゞみのかたちのまろきもの。

まるがた　ナ。圓形。かたちのまろきもの。

まるがち　ナ。全勝。すべてかちたるをいふ。

まるがはら　ナ。丸瓦。ながはらに同じ。

まるき　ナ。丸木。きの、けさにけづりなさぬもの。

まるきばし　ナ。丸木橋。ひとつばし。まるきをうちわたしたるはし。千載（おそろしや、木曾のかけぢの、まるきばし、ふみみるたびに、おちぬべきかな）

まるきぶね　ナ。丸木舟。おほきなる木を、ふたつにきりて、ほりくぼめて、ふねとしたるもの。

まるこ　ナ。丸子。草の名。田圃などにおふる草にて、その狀、すこし、かやつりぐさに似てちひさきもの。

まるごし　ナ。丸腰。こしに、かたなをおびぬをいふ。

まるし　サ。ヒ。圓。まろし。そのごとし。たまのごとし。この語は、今は、まるいとしもいふ。

まるすげ　ナ。丸菅。草の名。まるこをいふ。三河にて。

まるすずし　ナ。全生絹。衣の名。そでの、うらもおもても、すゞしにてしたるもの。宗五大艸紙（まるすゞしの衣、御服は申すに及ばず、大上臈、小上臈めし候ふ）

まるた　ナ。丸太。魚の名。さいをいふ。東國にて。

まるた　ナ。丸太。まろききの、けさにけづりなさぬもの。

まるたぶね　ナ。丸太舟。まるきぶねに同じ。

まるづけ　ナ。全漬。瓜の名。なうりをいふ。東京にて。

まるで　ソ。全。まつたく。すべて。のこらず。

まるどり　ナ。全取。すべてのこらずとるをいふ。

まるね　ナ。丸寢。ひるのきもののまゝにて、おびをもとかずしてふすをいふ。万二十（くさまくら、旅ゆくせなが、麻流禰せば、いへなるわれは、紐ときかねん）

まるのみ　ナ。圓鑿。のみの、まろきあなをゑるもの。

まるのみ　ナ。全呑。うのみ。かまずしてのむをいふ。

まるば　ナ。圓刄。まろば。はまぐりば。

まるはだか　ナ。全裸。あかはだかに同じ。

まるはなだ　ナ。圓縹。襲の色目の名。はなだあを。表も裏も、ともに縹なるものをいふ。

まるばやなぎ　ナ。圓葉柳。木の名。木は、柳のごとく、葉も柳に似てまろく、刻ありて、表あをく、裏しろし。

まるぶな　ナ。圓鮒。鮒の一種。いをに同じ。

まるまうけ　ナ。全收益。のこらずまうけとなるをいふ。

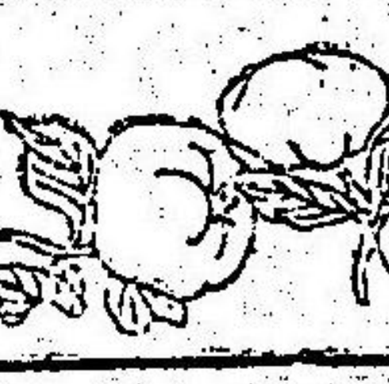
まるまげ　ナ。丸髷。まろまげを見るべし。

まるまる　ソ。全。まつたく。すべて。のこらず。

まるむ　ワ。カケ。シ二。丸。まろむに同じ。庖丁聞書（うめやきといふは、くづしを、梅ほどにまるめ、ゆびき、たれみそにて、おちそひをつけて、背骨を、ころもにつけて）

まるめる　ワ。カケ。シ一。丸。まろめるに同じ。

まるめろ　ナ。榲桲。木の名。果の名。外國よりくるものなり。木のさま、花のさま、海棠に似て、葉は、梨に似たりといふ。また、花の色は、うすあをくして、實は、ぼけのごとしといふ。おほくは、砂糖漬にしてくひものとせり。



まるもの　ナ。丸物。こそでをいふ。下文を見るべし。貞丈雜記（小袖を、丸物といふ事あり云々、小袖を丸物といふ事は、端物に對していふなり。小袖は、表裏を具しきらるゝやうに調へされば、丸物といふなり）

まるやき　ナ。全燒。ものを、そのまゝにてやくをいふ。

まるやけ　ナ。全燒。すべてのこらずやくるをいふ。火事にあひて、家をはじめて、衣服など、みなやくるにいふ。

まるやなぎ　ナ。丸柳。木の名。さだかならず。まるばやなぎなどにや。夫木三（ほりてうゑし、まがきのそひの、まるやなぎ、まさりはけりな、枝もたせゝは）

まるわげ　ナ。丸髷。女の髮にいふ詞。まるまげに同じ。

まるわた　ナ。綿帽。あめをいふ。豐後などにて、とつぎたるをんなのかみのさまをいふ。

まれ　サ。もあれ。踊子輕集（ゆふづくひ、いまの山はきえしまれ、さりそてなく、ほとゝぎすかな）

まれうど　ナ。賓客。まれびと。きやくじん。貫之集（人の家に、まれうどあまた來て、柳櫻のもとにむれゐて）

まれなり　サ。稀。つねにはなし。たまさかなり。めづらしくあり。古今（あだなりと、名にこそたてれ、さくらばな、としにまれなる、ひともまちけり）

まれに　ツ。稀。つねにはなく。たまさかに。めづらしく。源蓬生（たゞ、御せうとの禪師の君ばかりぞ、まれにも、京にいでさまふときは、さしのぞき給へど）

まれびと　ナ。賓客。きやく。まれにくるひと。

まれまれ　ツ。稀々。ことにまれに。伊勢（まれまれかの、高安に來てみれば、はじめこそこころにくもつくりけれ、今はうちとけて）宇拾一（まれまれ、馬にのりたる人どもの、人あまたぐしていできたり）

まれらなり　サ。稀。まれなり。中務集（山里は、まれらなりける、ほとゝぎす、まさともなかぬ、聲をきくかな）

まれらに　ツ。稀。まれに。六帖（世のごとく、人の稀らに思ふらし、白雪ふりき、やまぶきの花）字鏡（稀万良尓）

まろ　カ。麿。われ。おのれ。拾遺（たびとの、かやかりおほひ、つくるても、まろやいひとな、おもひもすること）土佐（あるひとの子のわらはなる、ひそかにいふ、まろこの歌の、かへしせんといふ）

まろがしら　ナ。圓頭。むうすあたま。かみなぞりおとしたるあさま。狭衣一（物見のすこしあきたるより、まろがしらのふとみゆるは、この御車をみるなるべし）

まろがす　ワ。カケ。四。圓。轉。まろくなす。まろばす。源東屋（あづまぎぬどもを、おしまろがしてなげすつ）枕草（そこやまの峰の紅葉、さぞ名のたつくと、かしらをまろがしふふ、いみじうにくけれど）

まろがち　ナ。麿君。まろがきみ。古事記（よくすみ、かみし大御酒、うまらに、きこしもちをせ、麿呂賀知）

まろがなへ　ナ。鋺。かまに同じ。和名（孫和名、鋺鼎閇、一云末路賀奈倍）

まろがへる　ワ。ヒトリ。四。轉。まろぶ。くつがへる。さかさまにかへる。字鏡（溦久豆加戸留、又万呂加戸留）

まろがる　ワ。ヒトリ。シ二。圓。まろくなる。ひとつにこりかたまる。とりかへ（御額髪も、あせにまろがれて、ねぢりかけたるやうに）神代紀（淳沱如雛子）

まろきばし　ナ。丸木橋。まるきばしに同じ。

まろぐ　ワ。カケ。シ二。圓。まろくなす。ひとつにすべくくる。宇拾二（この金をとりて云々、これを、まくにまうつは、七八千枚はうちつ。これをまろげて、みなかてんひとも、がなとおもひて、まづらく、もちたるほどに）

まろぐら　ナ。鞍。こらぐら。よなぐら。和名（弁色立成云、一云屎麻呂久良、一云奥奈久良、一云伊奈久介也）

まろし　サ。ヒ。圓。まるし。たまのごとし。

まろすず　ナ。丸鈴珠。つぶのまろきすず。いらなかすずなどにいふ。堀河集（おもふ事、さすにもまるゝ、まろすずの、露ばかりぞは、かなでましかば）

まろに　ツ。圓。まろく。ふとりて。源宿木（まろにうつくしくこえたまへりし人の、すこしほそやかなるに）

まろね　ナ。丸寢。ひるのきもののまゝにて、おびをもとかずてふすをいふ。万廿（たまくらも、まかず、ひもとかず、まろねをすれば）源東屋（かゝる際のまろねにならひさまはぬこゝちに、をかしうもありけり）

まろは　ナ。圓刄。まろば。そまぐりば。新六七（今は我、まさごとげる、腰刀、世につかはれぬ、身となりにし）

まろばかす　ワ。カケ。四。轉。まろばす。宇拾三（狐、射まろばかされて、なきさびて、腰をひきつつ）

まろばし　ナ。丸橋。まろきばし。後拾（危しと、みゆるとぞえの、丸橋の、まろなどかかる、ふのおもふらん）

まろばす　ワ。カケ。四。轉。まろばしむ。源末摘花（大鼓をさへ、高欄の許にまろばしよせて、てづからうちならし）

まろびあふ　ワ。ヒトリ。四。轉合。まろびてよりあふ。催馬楽（とうとう、さかりて寝たれども、まろびあひけり、とうとう、かよりあひけり、とうとう）

まろびいる　ワ。ヒトリ。四。轉入。まろびている。源蜻蛉（音けむひをきくに、我も、まろびいりぬべくかなしく）

まろびおつ　ワ。ヒトリ。カミ二。轉落。まろびておつ。源御法（夢語にまよふ心地して、車よりまろびおちぬべきを）

まろびのく　ワ。ヒトリ。四。轉退。まろびてのく。源總角（おつき程なれば、すこしまろびのきてふしたまへり）

まろびよる　ワ。ヒトリ。四。轉寄。まろびてよる。狭衣四（せちにためらひたまひて、すこしまろびよりて）

まろぶ　ワ。ヒトリ。四。轉。まろくめぐりゆく。たまのゆくごとくめぐりゆく。六帖五（まろぶ玉、あふ事つひに、あるものを、うちそへこひば、などかとぞおもふ）

まろぶし　ナ。丸臥。まろねに同じ。續世継六（おやの御やまひのほどなども、まろぶしにて、常にあつかひきこえさせまひけるに、うせさまひてのち）

まろむ　ワ。カケ。シ二。丸。まろくす。たまのごとくになす。

まろむし　ナ。丸虫。虫の名。くそむしに同じ。

まろめる　ワ。カケ。シ一。丸。まろくす。たまのごとくにす。

まろや　ナ。丸屋。かりそめにつくれるいへ。金葉（夕されば、門田の稲葉、音づれて、葦の丸屋に、秋風ぞふく）

まろやかなり　サ。圓。○のごとし。たまのごとし。

まろやかに　ツ。圓。○のごとく。たまのごとく。

まろらかなり　サ。圓。○のごとし。たまのごとし。

まろらかに　ツ。圓。○のごとく。たまのごとく。源宿木（かひなをさしいでたるが、まろらかにをかしげなるほども、常陸殿などいふべくもみえず）

まろを　ナ。丸緒。まろくくみたるを。雑装（まろをなつけて、ふさあり、あげまきにむすびて）

まわう　ナ。麻黄。草の名。かつねぐさに同じ。

まわた　ナ。眞綿。まことのわた。蠶の繭をひきたる綿を、木綿、草綿などとわかつためにかくいふ。

まわたし　ナ。間渡。かべのなかの、こまひをつくるよこぎ。和名（欄楯今按、末和多之、功程式云、間度 謂壁中之横材也）

まゐ　ワ。參。まゐるといふに同じ。

まゐく　ワ。ヒトリ。カ。參來。まゐりく。万十二（霜の上に、霰たばしり、いやましに、我れ麻為許年、年の緒ながく）

まゐたる　ワ。ヒトリ。四。參詣。まゐいたる。まゐるといふに同じ。佛足石歌（幸の、あつきともがら、麻為多利て、まさめにみけん、跡のともしさを、うれしくもあるか）

まゐづ　ワ。ヒトリ。シ二。參出。まゐいづ。まゐるといふに同じ。佛足石歌（この御跡を、たづねもとめて、よきひとの、います國には、我も麻胃豆弖、もろもろを率て）

まゐのぼる　ワ。ヒトリ。四。參上。まゐるといふに同じ。

まゐらす　ワ。カケ。シ二。進。たてまつる。枕草六（みくしあげまゐりて、藏人ども、まゐなひの髮あげてまゐらするほどは、へだてたりつる屏風もおしあけつれば）

まゐらず　ツ。カケ。四。ワ。カケ。シ二の進。たてまつる。

まゐりおんじやう　ナ。參音聲。まゐるときのおんがく。榮花ひかげのかづら（まゐりおんじやう、たかみくらやま）

まゐりく　ワ。ヒトリ。カ。參來。まうでく。まゐりきたる。伊勢（むかし、男、ひさしく音もせで、忘るる心もなし、まゐりこんといへりければ）

まゐりもの　ナ。參物。きこしめすもの。源玉鬘（まゐりものなるべし、をしき、てづからとりて）

まゐる　ワ。ヒトリ。四。參。のぼる。いにしへは、賤しきところより、たふときところにゆくを、まゐるといひ、貴きところより、いやしきところにゆくを、まかるといへり。枕草二十（女房の、まゐりまかでするには、車をかるなりもあるに、こころよそひしたるかほはうちいひて）

まゐる　ワ。カケ。四。參。きこしめす。たてまつる。枕草九（御くだものまゐりなどして、御前にもまゐらせさせ給ふ）源若紫（御てうづ、御かゆなどこなたにまゐる）

まを　ナ。眞苧。からむしに同じ。新續古（たなばたに、まをのこいと、ひきかけて、くる事たえぬ、星合のみや）

まをかもめん　ナ。眞岡木綿。さらしもめんのよきもの。下野國、芳賀郡、眞岡といふ地よりいだすもの。

まをごも　ナ。眞小薦。こもに同じ。万十四（人言の、しげきによりて、麻乎其母の、おやじ枕は、我はまかじやも）

まをしか　ナ。眞牡鹿。をじかに同じ。古事記（眞男鹿）

まをす　ワ。カケ。四。申。つげさてまつる。きこえさてまつる。まつりごとにたづさはりさてまつる。万五（茂世には、いましさまひて、天下、麻乎志たまはね、みかどさらずて）

まをとこ　ナ。間男。みそかを。ひとのつまにかよふみそかを。著聞十（この法師、まをとこして、會合しけるところなど、さまぐにかきて、えもいはずいろどりて、ことをつけて、六波羅へもちてゆきて）

み

くちびるにふれていづるひとつのこゑにて、ムとイとかさなれるこゑなり。

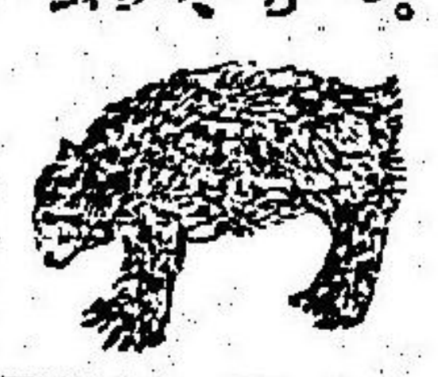
み　ナ。身。からだ。むくろ。しゝむら。もののうつはにある

もの。佛足石歌（いかづちの、光のごとき、これの身は、志にの大君、つねにたぐへり、おづべからずや）後撰（花薄、ほにいでやすき、草なれば、みにならんとは、たのまれなくに）詞花（こと繁れ、我身かくれあ、ぬまくしげ、いかにすれども、あふかたぞなき）

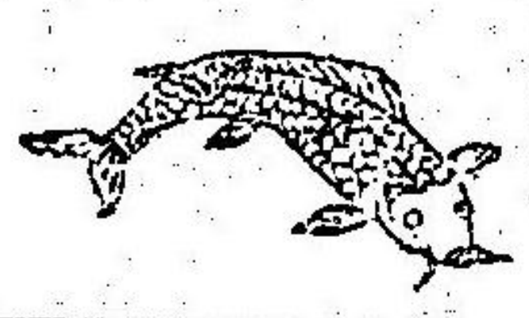
み ナ。身。され。おのれ。続草十（人にもかたりつがせ、身をほめられんとおもふひとのきさなるや）

み ナ。實。草木の、花のあとにむすぶものにて、うらればおひいづべきもの。万廾（ときじくの、かぐのこのみを云々、たちばなの、なれるその實は、ひてりには、いやみがほしく、みゆきふる、ふゆにいたれば）

み ナ。猯。獣の名。まみ。むじなのたぐひ。形、すこし、豕に似てちひさく、足みじかく、口とがりて、耳まひさり。このものの、常は、土穴にすみて、蟻のたぐひの虫をくひ、また、木の實、草の實などをなくらふ事ありといふ。和名（猯 和名美、似豕而肥者也）

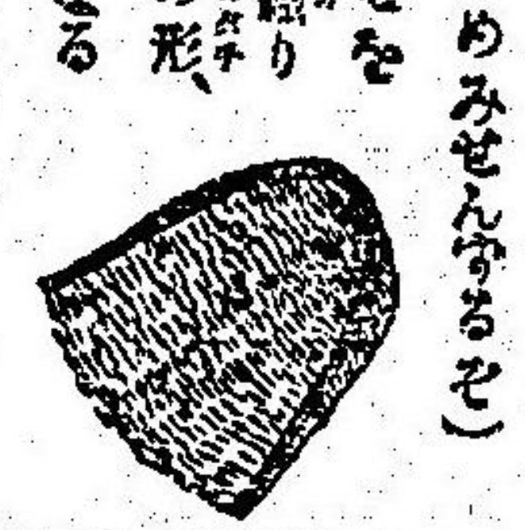


み ナ。[illegible]。魚の名。河、湖水などにいでくるもの、形、こひに似て、身せまくしてながし。また、頭は、鯉よりもながく、鰓は、鯉よりもほそくして、肉の中に、ほそやかなる刺あり。和名（[illegible] 美 鰻屬也）



み ナ。巳。ひよみの名。たつのつぎにあたるもの。また、ひるのよつどき。宇拾一（明日巳の時に、馬ゑるつに、数おきてぐして、男ども、高麗の鐵にまはりあへといへ云々、いまはかからめみせんするぞ）

み ナ。箕。こめ、むぎなどのあらきをふるひのぞくもの。小竹などを織りなしてつくるものにて、その形、本せばく、末ひろがりて、おほきなる舌のごとし。和名（箕 和名美 除糠簸米之器也）



み ナ。三。みつ。みつに、ひとつをあはせたるかず。古事記（一二三四五六七八九十）

み サ。形状言を、名詞、または、副詞にするときにもちふ。伊勢（あさみこそ、袖はひづらめ、涙川、みさへながると、きかばたのまん）古今（春のきる、霞の衣ぬきをうすみ、山風にこそ、みだるべらなれ）

み サ。御。たふとびていふときに、かぶらせていふことば。みこ、みけ、みかど、みかき、みさと、みあらしのたぐひ。

み ナ。眞。まこと。まことの。古今（ふるさとは、吉野の山し、ちかければ、一日もみゆき、ふらぬ日はなし）

み ワ。試。こころみ。万二十（梓弓、引見、縱見、おもひみて、既に心は、よりにしものを）後撰（神無月、ふりみふらずみ、定なき、時雨ぞ冬の、はじめなりける）

みあかし ナ。御燈明。神佛の御前にささげたるともしび。空穂藤原（天竺なりとも、御みてぐら奉らせたまへ、百萬の神、七萬三千の佛に、みあかし、みてぐらたてまつりたまへば、佛神、おのくよりきこえん）

みあぐ ワ。カケ。シニ。見上。たかくみる。あふぎみる。源若菜（花の、雪のやうにふりかかればうちみあげて）

みあつかふ ワ。カケ。四。見扱。こころなくむりて、かへりみあつかふ。源夕霧（いとおそろしきまでものし給ふめりしを、みあつかひ侍りしほどに）

みあつむ ワ。カケ。シニ。見集。これかれと、さまざまにおほくみる。源帚木（くまなくみあつめたるひとのいひし事は、げにとおぼしあはせられけり）

みあてがふ ワ。カケ。四。見充行。ほどをみてあてがふ。

みあはす ワ。カケ。シニ。見合。たがひにみる。なすことをためらふ。宇拾四（守に、目をみあはせたりければ、守こころえて、ひとつてはとらで）

みあひ ナ。見合。みもしみられもするをいふ。

みあふ ワ。ヒトリ。四。みあひをなす。落窪三（いとつつましうて、うつぶしつつみあひたり）

みあへ ナ。御饗。酒肴をもてもてなしたまふをいふ。

みあらか ナ。御舎。たふときひとのすませたまふおほとの。祝詞式（皇御孫之命乃美豆乃御舎仕奉氏）

みあらはす ワ。カケ。四。見現。かくれたるをみいだす。源夕顔（あやしきところにものしたまひしを、みあらはされたてまつりぬる事をおぼしなげくめりし）

みあれ ナ。御阿禮。あれな見るべし。夫木七（けふはそや、みあれの月の、はじめとて、神も社も、衣更せり）

みあれやま ナ。御阿禮山。山の名。山城國、愛宕の郡にあり。名寄（みあれやま、みねをいづる、みそらしは、やどる月さへ、かみさびにけり）

みいだす ワ。カケ。四。見出。そとのかたをみる。たづねえさり。源末摘花（寝殿に参りたれば、まだかうしもさながら、梅の香おかしきをみいだしてものしたまふ）

みいづ ワ。カケ。シニ。見出。みいだすに同じ。

みいら ナ。木乃伊。蜜人。まにびとの、軀にうづめて、年ひさしくなりたるものにて、黒くからびて、枯藥のごとくなりたるを、藥などにもちふ。埃及といふ國よりいづるものにて、その國にて、いにしへ、死人に、藥をぬり、布につつみて、地にうづめたるなりといふ。昔々物語（むかし、六七十年以前、みいらといふ藥、おほきにはやり、歴々衆、大名も、のむ、下々ものむ云々、諸病によしとて、のまざる人なし云々、何か、藥種二三種に、松脂にてねりたるやうなる藥なり）

みいり ナ。實入。みのむすびたるさまをいふ。

みいる リ。カケ。四。見入。ふかくみる。遊書抄（佛祇の白拍子かわへて云々、入道は、始より、横目もせず、うちうなづきく、涙をそぐ、たらしてみいりたまへり）

みいる ワ。カケ。シニ。見入。うちのかたをみる。志ふねんをかく。源生霊（されどこそ、ゆきの道にみいるれど、ひとすみげるなきものをとおもひて）同須磨（され、海の中の龍王の、いといたうものめでするものにて、みいれたるなりけりとおぼすに）

みうけ ナ。身請。うりたるみをあがなひかへすをいふ。

みうごき ナ。身動。みじろき。みのそよぎ。

みうち ナ。身内。からだのうち。また、うからやから。

みうり ナ。身賣。みのしろをとりて、みをうるをいふ。

みえ ナ。外見。かざり。ほかよりみゆるところ。源蜻蛉（なほかのみどりの袖を、みえなほしてしがなど思ふこころのみぞ、やんごとなきよりもまされりける）

みえい ナ。御影。ほとけなどの、ゑにかきたるもの。

みえいだう ナ。御影堂。みえいをまつりたるだう。

みえがくれ ナ。見隱。みえたりかくれたりするをいふ。賴政集（なごのうみ、しほひしほみつ、いそのいしと、なれるきみかも、みえかくれする）

みえかざり ナ。見餝。ほかよりみゆるかざり。

みえきこゆ ワ。ヒトリ。シニ。見聞。みえさせまつる。紫式部日記（世にあるかぎりめしあつめて、八百萬の神も、耳ふりたてぬはあらじとみえきこゆ）

みえぐるし サ。見苦。まみえにくし。わびぐるし。源東屋（すぐろに、みえぐるしりもつらしくて）

みえしらがふ ワ。ヒトリ。四。見えあらはる。つねにめにかかる。枕草四（後には、ならひたるにや、常にみえしらがひてありく、やがて常陸介とつけたり）

みえすく ワ。ヒトリ。四。見透。そこまでとほりてみゆ。

みえひきぐさ ナ。限。獣の名。ねずみの異名なりとぞ。ぞかしき異名なり。秘藏抄（さよふけて、あさくまのねに、おひねるら、みえひきくまの、うらぶれてなく）

みえる ワ。ヒトリ。シニ。見。みゆを見るべし。

みえとかる ワ。ヒトリ。シニ。見分。まぎるることなくみゆ。

みおく ワ。カケ。四。見措。あるべきさまにみおく。源蓬生（雀ども、あるべきさまにみおきてくだりなんとす）

みおくり ナ。見送。おくれてゆくひとをおくりてゆくをいふ。土佐（これかれ、たがひに、國のさかひのうちはとて、みおくりにくる人あまたが中に）

みおくる ワ。カケ。四。見送。おくれてゆくひとをおくりてゆく。ゆくものに、めをつけておくる。また、ゆくするをみおくるをいふ。万十二（松の木の、なみたる見れば、いそびとの、われを美於久流と、たちりしもころ）

みおこす ワ。カケ。シニ。見遣。こなたをみる。竹取（月のいでたらん夜は、みおこせたまへ、みすてたてまつりてまかる空よりも、おちぬべきここちする）

みおとす ワ。カケ。四。見貶。おとれるものとみる。源若菜（かの人のこころをさへ、みおとしたまひつ）

みおとす ワ。カケ。四。見落。みてゐながらもらす。

みおとり ナ。見劣。みるまには、やうくをとろくみゆるをいふ。源総角（年頃は思ひおなづり侍りて云々、ほのかなりしつきづけのみおとりせずはまほならんかや）

みおどろく ワ。ヒトリ。四。見驚。みておどろく。源野分（親などの御けうをも、いかめしきかたさまをたてて、人にもみおどろかさんのこころあり）

みおぼえ　ナ。見覺。みて、おぼえてゐるをいふ。

みおも　ナ。身重。みもち。つはり。くわいにん。

みおやのかみ　ナ。御祖神。おやがみ。かぶろぎ。かぶろみ。

みおろす　ワ。カク。四。見下。高きのかたよりみる。蔑若（こゝかして、僧坊ども、からむにみおろさる）

みか　ナ。瓺。器の名。かめのたぐひ。字鏡（瓺　加）

みか　ナ。三日。ふつかのつぎのひ。また、ひふのみつ。

みかいもり　ナ。御垣守。みかきもりに同じ。

みがいる　ワ。ヒトリ。四。身入。みのる。こゝろ、ふかくいる。

みかうのこ　ナ。御巫。みかんなぎに同じ。空穗藏開（みかうのこなどまひをてて云々、物かづけなどして）

みかき　ナ。御垣。きんちゆうのめぐりのかき。

みかきあぢはひ　ナ。鹹。志ほからきあぢはひ。また、あぢはひの、からくしてつよきをいふ。字鏡（鹹　阿加支阿地波比）

みがきいし　ナ。磨石。みがきずなに同じ。

みがきこ　ナ。磨粉。ものをみがくにもちふるこ。

みがきずな　ナ。磨砂。ものをみがくにもちふるすな。

みかきもり　ナ。御垣守。みかどもり。ゑじのところ見合すべし。詞花（みかきもり、ゑじのたく火の、よるはもえて、ひるはきえつゝ、ものをこそおもへ）

みかぎる　ワ。カク。四。見限。これまでなりとみすつ。

みかく　ワ。カク。シニ。見搔。みそむ。めにつく。めにとまる。

みがく　ワ。カク。四。磨。すりて、つやをいだす。いくさびもなでてひからしむ。榮花花山（堀河殿など、いみじうつくりみがゝせたまひて、内匠のやうにつくりなして）

みかくり　ナ。甕栗。清寧のみかどの大和の宮の名。

みがくる　ワ。ヒトリ。上二。水隱。みづにかくる。古今（河瀨に、靡く玉藻の、みがくれて、人に知れぬ、戀もする哉）

みがくる　ワ。ヒトリ。シニ。身隱。み、もののかげになる。み、みえずなる。大輔（月影に、みがくれにけり、あぢきなしの、あらぬこゝろに、いでてくやしき）

みかけ　ナ。見掛。うはべの、めにみゆるところ。

みかげ　ナ。御影。みさま。たましひ。袖中抄三（みこもくの、せゞ日の本の、母ならべ、けふもみかげに、おもましもの（を））和名（瓱、日本紀云瓱、一云美加、又用甕瓱二字）

みかげ　ナ。水陰。みづのきし。みがくれ。万代（谷河の、みかげにしげる、山菅の、やまずも袖の、ぬるゝころ哉）

みかげいし　ナ。御影石。石の名。いろしろくしてかたく、まゝ、くろくちひさきほしありて、ひかりつやゝかなり。攝津國、武庫郡にそひさる御影村といふ地よりおほくきりいだすゆゑにかくいふ。

みかけだふし　ナ。見掛倒。みかけよりもおとるをいふ。

みかさ　ナ。水嵩。みづのかさ。玉葉（河波は、岸におよびて、さみだれの、みかさに舟の、ほをぞみじろき）

みかさ　ナ。三笠山。山の名。大和にあり。古今（天の原、ふりさけみれば、春日なる、三笠山に、いでし月かも）

みかさやま　ナ。三笠山。大將、中將、少將の異名にいふ。八雲御抄上三（定家侍從、少將になりぬときゝて、よろこびいらべありしを、まだいそで、この雪を、たよりにて申しやりし、みかさやま、さしゆく君が、みちにきて、もならきそふる、けさのあらゆき）

みかし　サ。上二。鹹。からしに同じ。字鏡（鹹　阿加支阿地波比、又加良支志）

みかしほ　マクラ。三日潮。みかしほとも。月のはじめの三日のほどの潮にて、その頃は、潮の、きそめてそやきてころなれば、むやしにかけていふともいひ、また、おこる事を、もるともいへば、もりにかけていへるならんともいへり。仁德紀（瀰箇始報、破利摩波揶摩智、いはくだす、かしこくとも、あれやしなさん）

みがしぼる　ワ。ヒトリ。四。瘦。[illegible]にてなやむ。

みかじめ　ナ。見締。とりしまりをいふ。監役にて、

みかた　ナ。御方。味方。せがかうど。竹崎五郎繪詞（すけみつ申す、御かさつがき候ふらん、御まち候ひて、證人をたてて御かせん候へと申すを）

みかたま　ナ。箱。かたまといふに同じ。万一（かたまもよ、美箱もち、ふくしもよ、みぶくしもち）

みがたり　ナ。身談。みのうへのものがたり。空穗祭使（いつしか、まのあたりにて、つおきなるみがたりも、申しさまらんとなんなげき申す）

みかぢひめ　ナ。御梶姫。あぢすきたかひこねの神の御后。

みかづき　ナ。三日月。みかのよのつき。拾玉（夏引の、いと離れえぬ、契にて、三日月すぎぬ、秋の夜までも）

みかづきの　マクラ。三日月の。みかづきは、形の、割れたるごとくみゆるものなれば、われてにかけていふなるべし。古今（宵の間も、いでていりぬる、みかづきの、われてものおもふ、ころにもあるかな）

みかつて　ナ。身勝手。わがまゝ。おのれのかつて。

みがてり　ソ。見がてり。みながら。みつゝ。万廿（秋の田の、ほむき美我底利、わがせこが、ふさたをりける、女郎花かも）

みかど　ナ。御門。天子。きんちゆうのみかき。また、すめらみこと。また、すめらみことの、おほまつりごとをきこしめすところ。古今（仁和の帝の、御子におはしましけるときに）源明石（ひとのみかども、夢を信じて、國をたすくるたぐひおほく侍りけるを）

みかどう　キヘ。輩徒。ともがら。豐前の人のいふ語なり。

みかどまゐり　ナ。朝參。うちまゐり。古事記（朝參）

みかどもり　ナ。御門守。みかきのまもり。また、みかきにさぶらふゑじをいふ。源朝顏（おどろきてあけさせさまふ、みかどもり、さむげなるけはひうすきいで來て、とみにもえあけやらず）和名（閽人　和名美加止毛利　守門者也）

みかどをがみ　ナ。朝拜。すめらみことを、をがみたてまつるをいふ。また、殊に、朝賀をいふ。てうはい見るべし。

みかなき　ナ。御巫。みかんなぎに同じ。

みかぬし　ナ。瓱主。ささらまひめの命の御親神。

みかねて　ソ。見兼。みるにたへずて、みることをえずて。

みかのはら　ナ。三瓶原。地の名。山城にあり。古今（都いでて、けふみかの原、泉川、河風さむし、衣かせやま）

みかのもちひ　ナ。三日餅。婚禮より三日目にあたる日の祝につくるもちひ。いにしへは、餅を、よつの土器にもりて、伊邪那岐、伊邪那美の二神に奉りをいふ。

みかはあざみ　ナ。參河薊。いたちあざみに同じ。

みかはす　ワ。ヒトリ。四。見交。たがひにみる。伊勢（女のつかうまつるを、常にみかはして）增鏡四（たゞ、目をみかはして、いふさまはせんをおきれぬるは）

みかはち　ナ。木蜂。虫の名。蜂の一種なり。狀、[illegible]はちに似て、土蜂よりちひさくして、木にすくふもの。和名（木蜂　和名美加波知　似土蜂而小、在樹上作房者也）

みかはのいけ　ナ。御溝。みかはみづに同じ。榮花女御藥（宮の御前の遣水を、御河の池となんいふなるを）

みかはみづ　ナ。御溝水。みかきのめぐりのみぞ。賀方集（みかはみづのつらに居てながむるに、武藏入の、ものおもひがほにて、居さるなといへば）

みかはやうど　ナ。御厠人。ひすましのたぐひ。禁中の御厠のきよめなどするをんな。枕草一（なさめ、みかはやうどまで、たびしかはらといふまで、いつかは、それをはぢかくれさりし）發輸集（これは、井出をいふ、みかはやうどに、やまぶきのえなをもさせてこ）

みかはやび　ナ。甕速日神。いざなぎの神の御子。

みがはり　ナ。身代。ひとのみのかはりにたつをいふ。但し、おほくは、神仏の事にいへり。空穗嵯峨院（せが子のみがはりに、我こそならめとふしまろびさまふ）

みかふ　ワ。カケ。シニ。見變。みて、ほかのものにかふ。

みかふつ　ナ。彌加布都命。ふつぬしに同じ。

みかへし　ナ。見返。書籍の表紙のうらがへしなるところ。

みかへす　ワ。カケ。四。見返。みられさることをなす。うしろのかさをみる。宇拾一（まうでは世にはあらじといふに、早く、狐、みかへしくて、さきにたちてゆく）

みかへり　ナ。身返。ふしゐて、むきをかふるをいふ。

みかへる　ワ。カケ。四。見返。うしろのかさをみる。源若菜（猫のいたくなけば、みかへりさまへる、おもゝちもてなしなど、いとおいらかにて、わかくうつくしの人やと）

みがほし　サプ。欲見。みさし。みまほし。顯宗紀（大和邊に、見我保指ものは、おしぬみの、このたかきなる、つぬさしの宮）万廿（山柄や、見我保之加良武、皇神の、すそみの山の、志ぶたにの、さきのありそに）

みかまぎ　ナ。御薪。正月十五日の日、百官より、禁裏にたてまつる薪をいふ。年中行事歌合（もゝしきの、百のつかさの、みかまぎは、民の煙も、にぎはひにけり）

みかまへ　ナ。身構。みのかまへ。みのようじん。

みかみ　ナ。三上。地の名。近江にあり。拾遺（ちはやぶる、三上の山の、榊葉は、さかえぞまさる、萬代までに）

みかん　ナ。蜜柑。果の名。かうじ。木の高さ一丈あまり、枝は、刺おほく、葉のさま、橘に似て、さきとがりて、ひかりつやゝかなり。夏のはじめ、いつひらの白き花さきて、實をむすぶ。實は、冬にいりて熟す。あおそ

ひ甘く、まさなし。このもの、その類、色そめておほし。

みかんいろ　ナ。蜜柑色。あかくしてきぞみさるいろ。

みかんこ　ナ。御巫。みかんなぎに同じ。

みかんなぎ　ナ。御巫。みかんのこ。神祇官に屬せるかんなぎにて、御門の御まつりなどにつかふるもの。

みかんのこ　ナ。御巫。みかんなぎに同じ。祝詞式（座摩乃御巫乃稱辭竟奉、皇神等能前爾白久）

みかも　ナ。水鴨。みかもなすのところ見るべし。

みかもなす　マクラ。如水鴨。かるをいふ。鳥は、水にうかぶゆゑに、みかもといふ。さて、みかもなすは、みかものごとくをいふ意にて、水鳥は、雌雄ならび居るものなれば、ふたりならみゐるに譬らせていふ。万ヨ（そもしきやし、妹がありせば、水鴨成、二人雙居て、たをりても、みせましものを、うつそみの、かりの身なれば）

みがら　ナ。蛹。虫の名。井の水にいでくるちひさきむしなりとぞ。和名（蛹和名、美加良井水中小虫也）

みがら　ナ。身柄。みのほど。みのくらゐ。

みかりの　ナ。御狩野。たかのに同じ。壬生二品集（暮ゆけば、雪さへ深き、御狩野に、疲の雉子、たちよせるなり）

みがる　ナ。身輕。みがろに同じ。

みがろ　ナ。身輕。みのかろくなるをいふ。また、みのそさらきの、こゝろのまゝになるをいふ。

みかを　ナ。甕。さけをかもすおほきなるかめ。祝詞式（天能甕和爾齋許母利氐志都宮爾忌靜米）

みき　ナ。幹。木の、枝をいだし、根をさすところ。

みき　ナ。御酒。さけを、たゝへていふとなへ。神功紀（この御酒は、わが御酒ならず、くしの神、常世にいます、いはたゝす、少名御神の、とよほぎ、ほぎもとほし）

みぎ　ナ。右。ひだりにむかひて、みなみにあたるかた。夫木七（わすれずよ、みぎのつかさの、そでふれし、そなさらぞなや、いまかざるらん）

みきき　ナ。見聞。みるときくと。源夕霧（あけぬれば、人のみきゝもこゝろぐるしきを、かぎりとのたまひそせば）

みきく　ワ。カク。四。見聞。みもし、きゝもす。

みぎのうまのつかさ　ナ。右馬寮。うまのつかさを見るべし。和名（右馬寮美岐乃牟末乃豆加佐）

みぎのふでかた　ナ。右筆方。いうひつに同じ。貞丈雜記

みぎのみさとづかさ　ナ。右京職。みさとづかさを見るべし。和名（右京職美岐乃美佐止豆加佐）

みぎは　ナ。汀。みづのきは。かはぎしなどの、みづまつきさるところ。土佐（ゆくひとも、とまるもそでの、なみだ川、みぎはのみこそ、ぬれまさりけれ）

みきはむ　ワ。カケ。シニ。見極。みきはめをなす。

みきはめ　ナ。見極。みて、たしかにさだむるをいふ。

みぎひだり　ナ。左右。みぎとひだりと。これとかれと。

みきり　ナ。見切。みすつるをいふ。おもひきるをいふ。

みぎり　ナ。砌。のきじた。また、のきじたなどの、ふみいしのあるところ。徒然草（おほみぎりの石をつたひて、雪に、あとをつけず、あまおほひの毛をすこしかなぐりちらして）和名（砌、一名、階、美岐利）

みぎり　ナ。右。みぎに同じ。亭子院歌合記（上達部は、階のひだりみぎりに、みなむれてさむらひたまふ）

みきる　ワ。カケ。四。見切。みすつ。おもひきる。

みくさ　ナ。水草。みづくさ。みづごけ。古今一（わが門の、板井の清水、里とほみ、人しくまねば、みくさおひけり）

みくさのかんだから　ナ。三種神器。あまつひつぎの御しるしにして、八咫鏡、八坂瓊曲玉、天叢雲劍の三種の神寶を申す。玉葉（神代より、みくさのたから、つたはりて、とよあきそらの、まもりとぞみる）

みくさみ　ナ。水觜。にくぶびに同じ。

みくし　ナ。御髮。かみを、たゝへていふとなへ。榮花岩蔭（一條院、御くしおろさせたまへんとて）

みくし　ナ。御首。かしらを、たゝへていふとなへ。

みくじ　ナ。御鬮。くじを、たゝへていふとなへ。

みくしあげ　ナ。御髮上。かみあげを、たゝへていふことぞ。源桐壺（かの御かたみにとて、御さうぞくひとくだり、御くしあげのてうどめくものそへたまふ）

みくしげどの　ナ。御匣殿。禁中にあるところにて、御衣をまさむるところ。源玉蔓（みくしげどのなどにまうけのものめしあつめて、いろあひ、きざまなど、ことなるをとえらせたまへれば、ゐなびさるめどもまゐ）

みくだす　ワ。カケ。四。見下。おとれるものとみる。

みくだり　ナ。三降命。かむみむすびの神の御子。

みくだりまん　ナ。三行半。さりじやう。りえんじやう。

みくづ　ナ。水屑。みづのなかのちり。金葉（四方の海の、波に漂ふ、みくづをも、七瀬の網に、引なもらしそ）

みくに　ナ。御國。わがくにを、たゝへていふとなへ。

みくにことば　ナ。御國詞。みくにのひとのことば。

みくにぶみ　ナ。御國書。みくにのなにくれのふみ。

みくにぶり　ナ。御國風。みくにのてぶり。

みくにまなび　ナ。御國學。みくにぶみのまなび。

みくにやま　ナ。三國山。山の名。越前にあり。万七（三國山、梢にすまふ、鼯鼠の、鳥まつが如、我まちやせん）

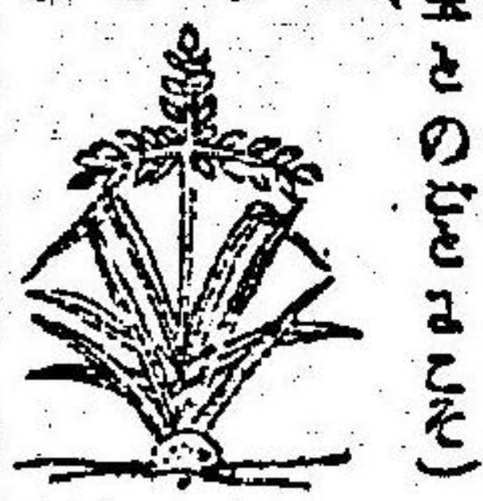
みくにゆづり　ナ。御國讓。御くらゐを、皇太子にゆづらせたまふをいふ。但し、天子の故ありておりゐさせたまふときにいふ事なり。源葵（霜月の二十よ日、御くにゆづりの事になれば、大后おぼしあまりて）

みくびる　ワ。カケ。四。蔑視。かろんず。ないがしろにす。

みくまり　ナ。水分神。いづのめの神の御子にて、水をつかさどりて、雨などをふらしめたまふ大神なり。

みくらぶ　ワ。カケ。シニ。見較。くらべてみる。空穗嵯峨院（おなじ所にみくらぶれば、土と玉とのごとにこそ）

みくり　ナ。三稜草。草の名。菰は、蒲に似て、ひとつの根よりむらがりいづ。夏秋のあひだ、莖をぬきいでて、莖のもとに、葉をいだし、紫の黄ばみさる花をひらく。その狀、穗のごとし。この草、莖、葉、花、實、みな、みつの稜ありて、根は、藥にもちゐ、莖は、席などにおる。枕草五（あじろびやうぶ、みくりのすだれなど、ことさらに、むかしの事をうつしいでたり）和名（三稜草和名、美久里）



みぐるし　サ。プ。見苦。みにくし。みるめくるし。この詞は、今は、みぐるしいと、いをそへていふ。落窪二（御鼻なん、なみにすぐれてみぐるしうおはする）枕草七（顏も、みなあらされて、いかにみぐるしからん）

みぐるしい　サ。見苦。みぐるしを見るべし。

みくるべかす　ワ。カケ。四。見廻。みまはす。空穗藤原（すみやかに、その由を申せと、目を、車の輪のごとくみくるべかし、齒を、つるぎのごとくくひいだしている）

みくねさもそ　ナ。鼠。獸の名。ねずみの異名なりとぞ。をかしき異名なり。呉竹集（さよふけて、あさくさまねは、おひぬるゝ、みくるさもその、うらぶれてなく）

みけ　ナ。御食。みけ。おもの。祝詞式（朝御食、夕御食）

みげうしよ　ナ。御教書。將軍家よりたまふ公事のふみ。政所よりいだす下文にむかへていふとなへ。義經記七（鎌倉殿の御教書にも、甲家、乙家をきらはず、關手をとりて、國守どもの兵粮米にせよと候ふ）

みけし　ナ。御衣。みそ。めしもの。古事記（ぬばたまの、くろきみけしを、まつぶさに、とりよそひ）

みけしき　ナ。御氣色。かほのようすをうやまひていふことぞ。狹衣二（御けしきとらでは、さりとも、なめげなるところのおほけなさは、よもつかひ侍らじ）

みけしきたまはる　ワ。ヒトリ。四。御氣色をうかがふ。ものごとをまうしあぐ。落窪三（殿は、みけしきたまはるべき事ありてなん參りつると、きこえさせたまへば）

みけつ　ナ。未決。いまださだまらずてあるをいふ。

みけつかみ　ナ。御食津神。とようけびめに同じ。

みけつくに　ナ。御食國。にへをたてまつるくに。

みけつくに　マクラ。御食國。みけつくには、贄をたてまつる國にて、奈良の都のころは、志摩、伊勢、淡路の、野島などより、殊にたてまつりしゆゑに、そのところどころに、かぶらせていふ。万六（御食國、志摩のあまならし、眞熊野の、小船にのりて、おきべこぐみゆ）同十三（たかひかる、日の御子の、きこしめす、御食都國、神風之、伊勢乃國は）同六（あさなぎに、かぢのおときこゆ、三食津國、野島のあまの、船にしあるらし）

みけつもの　ナ。御食物。みけ。くご。おもの。

みけねこ　ナ。三毛猫。あか、しろ、くろの、まだらげのねこ。

みけびと　ナ。御食人。みけびとはそなふるおもののことをとりあつかふひと。古事記（[illegible]御食人）

みけむかふ　マクラ。御食向。みけむかふは、御食にむかふにて、きのへ、あむち、あぢふ、みなぶちなどにかぶらせていふ。御食にむかふがごとく、その地の、たちは、前にむかふところなればともいひ、また、御食は

そなふる物に、栗、鰒、河貝子などもあれば、その物の名にいひつくるならんともいへり。万二（御食向、木瓰乃宮を、とこみやと、さだめたまひて）同六（御食向、淡路乃島に、たゞむかふ、みぬめの浦の）同（みる人の、語にすれば、きく人の、みまくほりする、御食向、味原宮は、みれどあかぬかも）同九（御食向、南淵山の、巌には、ふれるはだれか、きえのこりたる）

みけん ナ。眉間。まゆのあひだ。ひたひのなかなり。

みけもち ナ。御食持命。たかみむすびの神の御子にて、工匠のことをつかさどりたまひし大神なり。

みこ ナ。御子。貴人の子をあがめていふことぞ。

みこ ナ。皇太子。ひつぎのみこ。また、おんこうをまうす。古今（仁和の帝、皇太子におましましける時に、人に、若菜たまひける御うた）和名（春宮坊美古乃美夜乃豆加佐）

みこ ナ。神子。かむなぎを見るべし。

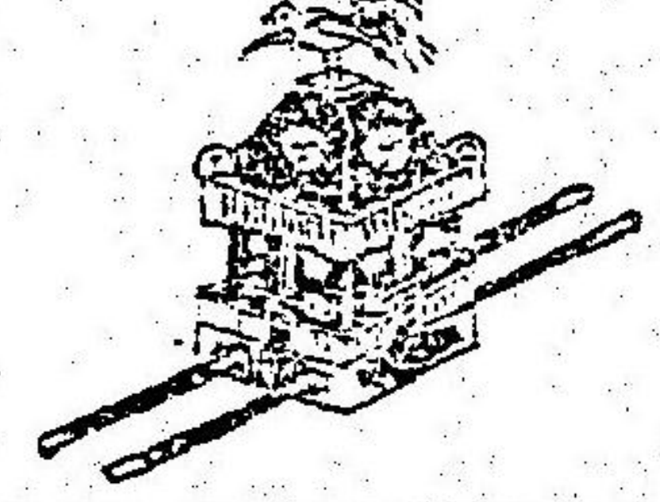
みご ナ。稈心。わらのくきの、かはをのぞきたるもの。

みこき ナ。御國忌。ごくきを見るべし。源椎（霜月のついたちごろ、御國忌なるに、雪いたうふりたり）

みこくき ナ。御國忌。みこきに同じ。

みこゝろを マクラ。御心乎。よしの、ひろき、ながきなどにかけていふ。御心をほめたゝへていふにて、そのこゝろあきらかなるべし。万一（御心乎、吉野乃國の、花ちらふ、秋津の野邊に、みやばしら、ふとしきませば）神功紀（御心廣田國）同（御心長田國）

みこし ナ。御輿。こしを、あがめていふとなへ。但し、今は、おほかた、神をのせたてまつるもののみをいふ。下の圖は神のなり。枕草一（女院御さじきのあなたに、御輿をとゞめて、御消息申させ給ひしなど、いみじくめでたく）



みこしにふだう ナ。見越入道。怪物の名。背の丈、二三丈もあるべき入道の怪物にて、後より、背をかゞめて、人の顔をさしのぞきてみたる圖などをゑがけり。

みこしにふだう ナ。見越入道。あまのじやくに同じ。

みこしぶり ナ。御輿振。みこしをふりゆらめかすをいふ。神祭のとき、いさみとなへてする事なり。

みごしらへ ナ。身拵。みのよそひ。みのかざり。

みこしろ ナ。御子代。こしろを、たゝへていふとなへ。

みこしをさ ナ。御輿長。みこしにつきそひてまつれるひとのをさ。山家集（みこしをさの、こゑさきだてて、くだります、おとかしこまる、かみのみやびと）

みこす ワ。カケ。四。見越。さかひをこしてみる。

みこと ナ。命。神、または、人をよぶたふとき名の下につけて、たふとびてよぶことぞ。万九（ちゝはゝが、なしのまにく、はしむかふ、弟の命は、朝露の、けやすき命、神のむた、あらそひかねて、あしはらの、水穂の國に）神代紀（至貴曰尊、自餘曰命、並訓美擧等也）

みこと ナ。御言。おほせごと。のりたまふことぞ。万廿（すめらぎの、なすくにたれば、美許登もち、たちわかれなば、おくれゐる、きみいあれども）

みごとなり サ。見事。うるはし。じきによし。

みごとに ツ。見事。うるはしく。てぎはよく。

みことのり ナ。詔。勅。みかどのおほせ。みことのらせたまふこと。夫木一（初春の、けふかしこき、みことのり、のべよと千代の、ためしをぞきく）

みこともち ナ。御言持。おかさめしのたぐひ。詔をうけたまはりて、その地ををさむるひと。雄略紀（國司）

みこなす ワ。カケ。四。見熟。みくだす。ないがしろにす。

みこのすず ナ。神子鈴。すゞふりむなをいふ。備前にて。

みこのまひ ナ。神子舞。まひくびしをいふ。美作にて。

みこのみや ナ。春宮。とうぐう。はるのみや。

みこのみやのつかさ ナ。春宮坊。大夫、亮、進、屬などいふ官人ありて、春宮の御事をつかさどるところ。東宮職を見合すべし。和名（春宮坊美古乃美夜乃豆加佐）

みこび ナ。鯥。魚の名。みこに同じ。

みこみ ナ。見込。おもひつき。ふかきかんがへ。

みこみごし サ。フ。神子のごとし。えんぎがまし。安齋隨筆

みこむ ワ。カケ。四。見込。おもひつく。ふかくかんがふ。

みこも ナ。水菰。みづのなかのこも。千載（時しもあれ、水の水菰を、刈あげて、ほさで腐しつ、五月雨の空）

みごもり ナ。孕胎。懐妊。つはり。みもち。くわいにん。

みごもりに ツ。水隠。みづにかくれて。こゝろにこめて。千載（みごもりに、あしの若葉や、もえつらん、玉江の沼を、あさるはるこま）万十一（まこもかる、大野河原の、水隠に、こひこし妹が、ひもとくわれは）

みごもる ワ。ヒトリ。四。身隠。懐胎。みごもりとなる。

みこよせ ナ。神子寄。くちよせに同じ。

みごり ナ。見懲。みてこるゝをいふ。太平六（軍神にまつりて、人にみごりさせよとて、六條河原に引出し）

みごろし ナ。見殺。みなく、死ぬるにまかするをいふ。

みさい ナ。未済。みつぎなどのまだをさまらぬをいふ。

みさいに ツ。微細。こまやかに。くはしく。

みさう ナ。御荘。みしやうゑん。空穂藤原（伊豫のみさうのものも、もてまうできさめれば）

みさき ナ。岬。山の端の、海邊にさしいでたるところ。

みさき ナ。汀。みぎはに同じ。和名（汀左木）

みさき ナ。御先。さきをはらふともびと。

みさく ワ。カケ。シ二。見放。とほくのぞむ。万一（つばらにも、みつゝゆかんを、しばしくも、見放武やまを）

みさぐ ワ。カケ。シ二。見下。おとれるものにみる。

みさけび ナ。三叫。みたびのさけび。猿のなくにいふことぞ。月清集（よるのあめの、うちもねられぬ、おくやまは、こゝろぼそく、猿のみさけび）

みさご ナ。鶚鳩。水鳥の名。形、とびに似て、色うすくして、すこし黄なり。常に、山中、または、江のほとりの巖窟にすみて、魚をとりてくらふ。和名（鶚（和名美佐古）鵰鳩也、好在江邊山中、亦食魚者也）

みささぎ ナ。山陵。みかどの御はか。この語は、正しくは、みさゝぎと、さを濁り、きを清むといへり。枕草一（みさゝぎは、鶯のみさゝぎ、かしはらのみさゝぎ）

みさゞき ナ。鵰鳩。水鳥の名。みさごをいふ。

みさゝぎのつかさ ナ。諸陵寮。治部省の被管。頭、助、允、屬などいふ官人ありて、御歴代の帝の御墓の事をつかさどるところ。和名（諸陵寮美佐々岐乃豆加佐）

みさと ナ。京。みかどのおはしますさと。

みさとづかさ ナ。京職。左京職、右京職あり。二職に、大夫、亮、進、屬などの官人あり。左京、右京の事を務る。

みさのえだ ナ。上枝。ほつえ。うへのえだ。

みさび ナ。水銹。みしぶ。みづのさび。山家集（みさびゐて、月もやどらぬ、濁江に、我すまんとて、蛙なく也）

みさびえ ナ。水錆江。みづのさびたる江。

みざま ナ。身様。みのさま。源若菜（二の宮の御勢ことにて、参りたまひけるを、ふるめかしき御身様にて、たちならびがほならんも、そゞろかなるこゝちしけり）

みさみさと ツ。濡れひたりて。宇拾三（水にぬらして、きせたるやうに、みさみさとなりてありけるを）

みざめ ナ。見醒。みおとりに同じ。源初音（それならざらんひとは、みざめしぬべき御ありさまを）

みさやま ナ。三射山。山の名。信濃國、諏訪郡にありとぞ。玉葉（なれなれく、ほやのめぐりの、ひとむらに、あさしさとある、あきのみさやま）

みさを ナ。操。かたく、こゝろざしをもちてかはらぬをいふ。千載（あはれにも、みさをにもゆる、ほたるかな、こゑたてつべき、この世とおもふに）

みさを ナ。水竿。ふねをつかふさを。拾遺（三瀬川、わたるみさをも、なかりけり、何に衣を、ぬぎてかくらん）

みさをつくる ワ。ヒトリ。四。操をもてなす。源帚木（みしらぬさまに、まのびて、うへつれなく、みさをつくり、こゝろひとつにおもひあまるときは）方丈記（二年があひだ、飢渇して云々、たえてのぼるものなければ、さのみやは、みさをもつくりあへん）

みさをに ツ。操。こゝろざしをかへずに。あらずがほに。みさをつくりて。源帚木（おもてぶせにや思はんと、まぶりて、みさをもてつけて、みなるゝまゝに）

みじかい ナ。短。みじかしを見るべし。

みじかうた ナ。短歌。たんか。ことばのみじかきうた。長歌にむかへて、三十一字のうたをいふ。

みじかし ナ。短。ながくなし。にぶし。ひきし。いやし。この語は、今は、みじかいを、もはらいふ。伊勢（ながゝらぬ、命のほどに、わするゝは、いかにみじかき、心なるらん）榮花物（たかきも、みじかきも、釋迦佛の、かくれたまへるをりのありさまにおとらず）

みじかなり ミ。短。みじかし。枕草六（にはとりのひなの、

おしさうは、きろうおぼしげに、き氣みじかなるさまして、ひよくともかしがましくなきて）

みじかめ　ナ。短目。かたちのみじかくあるをいふ。

みじかやかなり　サ。短。みじかし。ながくなし。

みじかやかに　ジ。短。みじかく。ながくなく。榮花鈴鏡（佛の御うしろは、御かうしをみじかやかにきざして、むらさきのすその御幟にて、泥して書きて）

みじかよ　ナ。短夜。みじかき夜。新葉（あけぬるか、もや影うすし、夏衣、かとりの浦の、みじかよの月）

みじくる　サ。ビトリ。四。身動。みじろぐに同じ。枕草三（もちどちて、おなじ所にもねずみじくりいづるを）

みじたく　ナ。身支度。みのしたく。みのようい。

みしと　ツ。緊しくおすなどにいふことぞ。著聞八（らうさくおぼゆるに、たちながら、きぬごしにみしといだきて云や、さて、きめやかにうちかたらふに、ながき夜もかぎりあれば、鐘の音もそろそろにひびき）

みしね　ナ。米稻。いねといふに同じ。玉葉（古に、いまをくらぶの、里人は、皆々にこえぬる、みしねをぞつく）

みしぞ　ナ。菅。すげの異名。秘藏抄（筑摩江の、ぬまのみしぞを、ふみさけて、なく鴨の聲、あかぬ君かな）

みしぶ　ナ。水澁。みづあか。新古（みしぶつき、うゑし山田に、ひたはへて、またそでぬらす、秋は來にけり）

みしまえ　ナ。三島江。江の名。攝津國、島上の郡にあり。拾遺（みしまえの、たまえのあしを、しめしより、おのがとぞおもふ、いまだからねど）

みしまごよみ　ナ。三島暦。ものごとの、こまやかなるたとへにいふことぞ。むかし、應仁のころ、伊豆國、三島神社よりいださるる暦は、文字の、きはめてこまやかなりしよりいひいでたる語なりとぞ。俚諺

みしまだら　ナ。三島蛇。蛇の名。わたちいなに同じ。

みじまひ　ナ。身仕舞。みじたく。みのけしやう。

みしまゆふ　ナ。三島木綿。ゆふの、伊豆國の三島をいふ地よりいだすもの。神樂歌（見志万由不、かたにはとりかけ、われからみの、からをぎせんや）

みじみじ　ツ。緊しくおすなどにいふことぞ。ものの、おされてたたむさま。夫木廿（夏刈の、あしの古葉の、まさえこき、みじくたまる、冬のしらゆき）

みしん　ナ。未進。みつぎなどのまだをさまらぬをいふ。

みじんまく　ナ。身傾貨。みじさく。みじまひ。みのようい。

みしやう　ナ。實生。みばえに同じ。

みじやう　ナ。身上。みのうへ。うまれつき。みのおこなひ。

みじゆく　ナ。未熟。ものの、まだよくととのはぬをいふ。

みしらず　ナ。身不知。みのほどをわきまへぬをいふ。

みしる　ワ。カカ。四。見知。みてしる。みおぼえあり。源宿木五（みしりさまへることそれと思ふこころときめきには、夜もいたうふけゆくを）七一番人歌合（辻君、上臈いらせさまへ、田舎人まで候ふ、みしりまゐらせて候ふぞ）

みしるし　ナ。御璽。みかどのおしでのたぐひ。

みじろぎ　ナ。身動。みをうごかすをいふ。落窪（六人までのりたりければ、いとせまくて、みじろきもせず）

みじろぐ　サ。ビトリ。四。身動。みをうごかす。源若紫（さすがにむつかしう、ねもいらずおぼえて、みじろきふしさまへり）宇拾六（えぞは、きりをかけて、木の枝をとらへて、すこしもみじろくべきかたなし）

みしろのいね　ナ。糠。いねの、みのまろきものをいふ。和名（糠美之呂乃以禰、糯稻白米也）

みす　ナ。御簾。うるはしくかざりたるすだれ。貴人の御座の前などにかけたるもの。源桐壺（おとなになりさまひて後は、ありし樣に、御簾の内にもいれ給はず）

みす　サ。カク。シニ。見。みさす。この語は、地方によりては、みせると下一段にいふ。千載（みせばやな、をじまのあまの、袖さへも、ぬれにぞぬれし、色はかはらず）

みず　ふ。不見。はりのめ。はりのあな。古訓栞

みすう　サ。カク。シニ。見居。ひきめもせずしてみる。

みすかす　ワ。カケ。四。見透。みぬく。みとほす。

みすぎ　ナ。身過。すぎはひ。なりはひ。よわたり。

みすぐす　ワ。カケ。四。見過。みのがす。みてすぐす。

みすしづめ　ナ。御簾鎭。みすのすそをおさふるおもし。

みずしらず　ナ。不見不知。ゆかりもなきをいふ。但し、下の例は、動詞にいへるなり。風雅（今は只、みずしらざりし、いにしへに、人をも身をも、思ひなさばや）

みすずかる　マクラ。三篠刈。みすずは、篠をたたへいふ語にて、すずは、しぬともいへば、篠をかる篠の野の意にて、しなぬにかかるなるべし。万二（三篠刈、信濃の眞弓、ひかずして、をはくるわざを、しるといはなくに）

みすぢのこと　ナ。三線琴。さみせん。みつなのこと。

みすつ　ワ。カケ。シニ。見捨。すておいてかへりみず。この語は、地方によりては、みすてると下一段にいふ。成通卿集（ちるもなし、みすててかへる、そらもなし、花下陰に、身をつくしてん）源若紫（たゞいま、おのれみすてまつらば、いかで世にはおせんとすらん）

みすてる　ワ。カナ。シ一。見捨。みすつを見るべし。

みすのやま　ナ。三栖山。山の名。紀伊國、牟婁の郡にあり。西行集（まち來つる、やかみのさくら、さきにけり、あらくおろすな、みすのやまかぜ）

みずひさに　ツ。不見久。みぬことひさしく。ひさしくあはず。万四十（あぢのすむ、すさの入江の、こもりぬの、あないきづかし、美受比佐爾して）

みすぼらし　サ。フ。身窄。なりかろし。すがたかじけたり。

みずます　サ。カケ。四。見證。めをつけてうかがひさだむ。

みすまる　ナ。御統。いとにぬきたるたまにて、いにしへ、くびなどにつけて、かざりとせしもの。古事記（おとたなばたの、うながせる、たまの美須麻流、美須麻流にあなだまはや）神代紀（御統此云美須磨屢）

みすまるに　ナ。御統。みすまるに同じ。

みすみす　ツ。看。みるみる。みるまにに。みながら。源葵（日にみすみす、世には、かかる事こそはありけれとうとましうなりぬ）愚管抄六（この女は、ものつきたりとけふ事もなく、みすみすとしてさてやみにけり）

みすみのやま　ナ。三角山。山の名。石見國、那賀の郡にあり。夫木二十（ゆくさきを、みすみのやまを、たのむには、これをぞかみに、たむけつつゆく）

みすもぐさ　ナ。菱。ひしの異名。秘藏抄（こやの池の、岸ふく風の、ゆふまぐれ、波にかさよる、みすもぐさ哉）

みすり　ナ。御摺。すりごろものごとくにてすりつくるをいふ。夫木八（雪そそぐ、をなのみすりの、かりごろも、うちはらへども、むらがへりつつ）

みずゐじんどころ　ナ。御隨身所。院の御所にある一所にて、御所にさぶらふ隨身のよりあつまるところ。

みせ　ナ。店。たな。あきなひものをならべおくところ。

みせあきうど　ナ。店商人。みせにてあきなふあきびと。

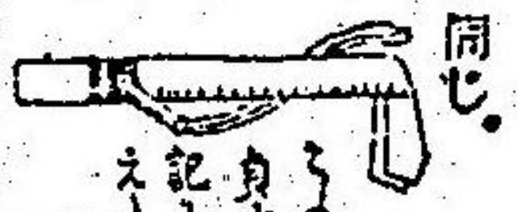
みせかけ　チ。見掛。みえ。かざり。おもてむき。

みせぎぬ　チ。見衣。こしのあさすされなどを、御簾の外にあらはして、飾にかくるをいふとなへ。

みせさき　ナ。店先。みせのさき。みせのいりくち。

みせさきぬすびと　ナ。店先盗人。まんびきに同じ。

みせざや　ナ。見鞘。みじかき腰刀に、錦にてつくりたるながき鞘ぶくろをかけたるをいふ。されば、鞘のさきのそる事あり。貞丈雜記新六（つじまつり、けふたたれども、みせざやの、さきなりけて、ねるはたなきぞ）



この圖、貞丈雜記よりえたり。

みせざね　ナ。見竿。かけざをいふ。下總にて、

みせしめ　ナ。懲戒。みせてこらすをいふ。

みせせり　ナ。身をせるをいふ。みぶるひなどするをいふ。定家卿藻三百首（みづふきて、とはこはつなぐ、朝すゑは、みせせりしつる、たかのふるまひ）

みせびらかす　ワ。カケ。四。衒示。みせてこらひほこる。

みせびらき　ナ。店開。みせを、はじめてひらくをいふ。

みせん　ナ。味煎。甘葛煎。あまづらをいふ。宇拾二（いもがゆ云々、この水とみゆるは、みせんなりけり）

みせん　ナ。未然。いまだあらざるをいふ。

みせもの　サ。見世物。めづらしきものなどをそなへて、ひとをあつめて、ぜにをとりてみするもの。

みせものし　ナ。見世物師。みせものを、業とするひと。

みせものば　ナ。見世物場。みせものをそなへたるところ。

みせる　ワ。カケ。シ一。見。みすを見るべし。

みそ　ナ。味噌。大豆を煮て、つきくだきて、麹と鹽とをまぜて、かもしなしたるもの。和泉式部續集（二日ばかり、みそを、ひとがりやるとて、花はあへど、みそつゆばかり、なしからぬ、あかで春にも、かをりましかば）

みそ　ナ。味噌。ざふすゐをいふ。女の語なり。禁裏女房内々記

みぞ　ナ。溝。みづをながしかよはすために、ほそながく掘りなしたるところ。散木（あくさゐて、きさなきみぞの、水莖は、かきながせども、きどろもどろに）

みそ　ナ。御衣。めしまゐらするもの。拾遺（共政朝臣、肥後守にてくだり侍りけるに、妻のひぜんにくだりけるに、つくしぐし、みそなどたまふとて）

みそあへ　ナ。味噌韲。みそにてあへたるあへもの。

みそう　ナ。未曾有。いまだかつてなきをいふ。

みそうづ　ナ。味噌水。みそづ。こなきざふすゐ。貞丈雜記、散木（ほうしごの、紐をみしまには、もちひれて、みそうづまでも、なりにけるかな）沙石集五（よひくには、もちひみそうづ、いとなみて、餅の穢、もとつともなし）

みそおち　ナ。鳩尾。みづおちに同じ。

みそか　ナ。三十日。つごもり。また、日數の三十をいふ。堀川百首（月よめば、十月あまりて、二月の、みそかはなるゝ、こよひなりけり）土佐（たゞ、日のへぬるかずを、けふ、いくか、そつか、みそかとかぞふれば）

みそかけ　ナ。御衣掛。いかう。きものをぬぎてかけておくもの。催馬樂（ねりをさみその、見我加介にせん、たまやなぎ）和名（蕤字亦作楲、和名美曾加介、懸衣架也）

みそかごころ　ナ。密心。よごゝろ。みそかにおもふこゝろ。源氏（このよなれたる物語などをよみきかせたまひそ、みそかごゝろつきたるもののむすめなどに）

みそかごと　ナ。密事。みそかにすること。

みそかながらに　ソ。竊。みそかにしながら。ものびやかに。しつゝ。古今集（こゝろしき、人にこそ、つけしより、みそかながらに、こひざらるかな）

みそかなり　サ。密。ひそかなり。ものびやかなり。伊勢（東の五條のわたりに、いとものびていきけり、みそかなるところなれば、門よりいえいらで）

みそかに　ソ。密。ひそかに。ものびやかに。大和（みかど、御らんじて、みそかにめしてけり）

みそかぬすびと　ナ。竊盗。かくれゐて、ひそかにぬすむぬすびと。枕草六（もづらしきもの云々、みそかぬすびとの、さるべきくまにかくれ居て、いかにみるらんを、たれかしらん）和名（竊盗和名、美曾加奴須比止）

みそがは　ナ。禊川。みその、みづの、つねになるゝところ。堀川次郎（ゆふざらは、道方の禊川、まりつゝ、ふらぬさとまで、ながれ來にけり）

みそかひ　ナ。溝貝。貝の名。どぶがひに同じ。散木（むらひの江に、さらぬもの、あそびたぶるゝをたづぬれば、みそかひといふ物ひろふなりといふをきゝて）

みそかびと　ナ。密人。みそかを。かくれて、みそかごとをするひと。空穗窟（ゆめにも、人にしられさまさず、みそかびとのやうにてぞきこえさまふ）

みそかゆ　ナ。味噌粥。みそしるにてにたるかゆ。

みそかを　ナ。密夫。ひそかに、をんなのもとにかよふをとこ。後撰（神無月のついたち、女の、密夫しけるを）

みそかをとこ　ナ。密夫。みそかをに同じ。宇拾二（いへあるじの男、せかつきの、みそかをとこするときゝ）

みそぎ　ナ。禊。かぶらなどにいでて、みづをかぶるをいふ。祓のときなどにする事なり。万廿（たまくせの、きよき河原に、身祓して、いのるいのちも、妹がためなり）伊勢（こひせじと、みたらし川に、せしみそぎ、神はうけずも、なりにけるかな）

みそぎ　ナ。御衣木。神佛のかたしろをつくる料の木をいふなりとぞ。新古（ちはやぶる、香椎の宮の、あやすぎは、神のみそぎに、たてるなりけり）

みそぎがは　ナ。禊川。みそぎをするかは。源葵（御心もやなぐさむと、たちいでてまつりし禊川のあらゝりし瀬に、いとゞ、よろづいとうくおぼしいれたり）

みそぎはらひ　ナ。禊祓。おほはらへ。みそぎのならひ。

みそぐ　ワ。ヒトリ。四。禊。みそぎす。万三（久方の、天の河原に、いでたちて、潔身てましを）貫之集（つらき人、忘れなんとて、祓れば、みそぎかひなく、戀ぞ積れる）

みそくぐり　ナ。溝潜。鳥名。さゞきをいふ。豊前、仙臺にて、

みそぐす　ワ。カケ。四。見過。みすぐす。万十四（相模根の、小峰見所久思、忘くる、妹が名よびて、我をねしなくな）

みそこし　ナ。味噌漉。すりたるみそのかすをこすもの。

みそごゐ　ナ。溝五位。水鳥の名。形、ごゐさぎに似て、五位鷺よりもちひさく、色くろくあをみて、頭に、あをきところあり。この鳥、おほくは、溝邊などにすみて、人をみれば、なきさけべども、そこをはなれずといふ。

みそさざい　ナ。鷦鷯。鳥の名。さゞきに同じ。

みそしる　ナ。味噌汁。みそのしる。みそのあつもの。

みそそ　ナ。御衣掛。かけざををいふ。下總にて、

みそぢ　ナ。三十。よそぢのさんじふ。

みそづ　ナ。味噌水。ざふすゐをいふ。加賀、越中、但馬にて、

みそつく　ナ。溝鶲。鳥の名。さゞきをいふ。下野にて、

みそづけ　ナ。味噌漬。みそにつけたるつけもの。

みそつぶり　ナ。溝滓鳥。鳥の名。さゞきをいふ。西國にて、

みそつもの　ナ。御衣津物。みそのたぐひのもの。

みそなえかす　ワ。カケ。四。見行。みたまふ。撰集抄三（佛菩薩のいさゝのたよりにて、善趣をあらそすべき人とみそなむさせたまひて、龜と化して）

みそなはす　ワ。カケ。四。見行。みたまふ。榮花本雫（ゐなかの人々、いみじきおほやけのせめなるすてて云々、この度の事は、みそなはさんとすといひおもへり）

みそなふ　ワ。カケ。四。見行。みたまふ。新古（法の雨、さしてゆく身ぞ、もろ〳〵の、神も佛も、されをみそなへ）

みそぬすみ　ナ。溝盗。鳥の名。さゞきをいふ。陸奥にて、

みそはぎ　ナ。鼠尾草。草の名。葉は、柳のごとく、花は、赤くむらさきにて、ちひさきが、夏の末、莖の端にあつまりさきて、穗の狀をなす。和名（鼠尾草和名美曾波岐）

みそびつ　ナ。御衣櫃。みそをいるゝひつ。源明石（御装束は、ふくもあらず、みそびつあまたかけ候はず）

みそひともじ　ナ。三十一字。みじかうたに同じ。

みそびめ　ナ。御衣紐。きぬの、ひものうへにてむすびとめたるもの。枕草七（とりどころなきもの、形にくげに、心あしきひと、みそびめのぬれたる）

みそまめ　ナ。味噌豆。豆の名。だいづに同じ。

みそみそ　ナ。醬。あへものをいふ。女の語なり。禁裏女房内々記

みそみそ　ソ。濡れそみて。沙石集七（あらゆる蛇、ひとくちづゝかみて、みそ〳〵とかみなして）

みそむ　ワ。カケ。シ二。見初。はじめてみる。はじめてみていふ。この語は、地方によりては、みそめるを下一段にいふ。源夕顏（そらなきものの使にて、頭中將、まだ少將にものしたまひしとき、みそめたてまつりたまひて）

みそむぐら　ナ。溝葎。草の名。むぐらに同じ。

みそむる　ワ。カケ。シ一。見初。みそむを見るべし。

みそやかに　ソ。密。みそかに。ひそかに。ものびやかに。

みそやき　ナ。味噌燒。みその、あぶりやきにしたるもの。

みそら　ナ。御空。そらをいふに同じ。千載（くまもなき、みそらは秋の、月すめば、庭は冬の、氷ぞしく）

みそる　ワ。カケ。シ二。見遁。みしひとをわする。

みそる　ワ。ヒトリ。シ二。霙。みぞれふる。千載（春雨は、ちる花みれば、かきくらし、みぞれし空の、心地こそすれ）

みぞれ　ナ。霙。ゆきの、なかばとけて、あめのごとくなりてふるものをいふ。風雅（かきくらし、ふるゝとみれば、かぜさえて、みぞれになりぬ、うきくものそら）和名（霙雨雪相雜也云々、師說日三音）

みだ　ナ。彌陀。佛の名。あみだ。玉葉（みだたのむ、ひとは雨夜の、月なれや、雲はれねども、西にこそゆけ）

みだい　ナ。御臺。おものをのせるだい。源夕顏（誰も〳〵、御臺まゐりなどして、のどかになりぬるひるつかた）

みだい　ナ。御臺。みだいどころに同じ。

みだいどころ　ナ。御臺所。大臣などの妻をよぶとなへ。

みだいばんどころ　ナ。御臺盤所。みだいどころに同じ。

みたえ　カ。ホ。水絶。みづのたゆるをいふ。貫之集（水絶せぬ、井手の山吹、影みれば、色の深さも、増さりけり）

みたけ　ナ。御嶽。たけをいふに同じ。和名（嶽美太介）

みたけさうじ　ナ。御嶽精進。大和國、吉野郡の金峰山にまうづる人の、千日の間する精進をいふ。仲文集（みたけさうじすとて、石山にこもりたる）

みたけしやうじん　ナ。御嶽精進。みたけさうじに同じ。榮花初花（二月になりて、殿のおきて、みたけしやうじんをはじめさせたまはんとするに）

みたけまうで　ナ。御嶽詣。大和國、吉野郡の金峰山にまうづるをいふ。宇拾二（七條に、むくうちあり、みたけにまうでしけり、まゐりて、かなくづれをゆきてみれば）

みたけやま　ナ。御嶽山。山の名。甲斐國、巨摩の郡にあり。夫木二十四（いにしへの、よし野をうつす、みたけやま、てねのこなも、さこそさくらめ）

みだし　ナ。見出。みいだすしるしにするもの。

みたす　ワ。カケ。四。滿。みたしむ。みつるやうにす。

みだす　ワ。カケ。四。亂。みだれしむ。古今（ゆく秋の、露のかたみも、とめじとや、荻葉を風の、ふきみだすらん）

みだす　ワ。カサ。四。見出。みいだすと同じ。

みたつ　ア。カケ。シニ。見立。みおくる。えらびてとる。

みたつ　ソ、ヒトリ。四。見立。みてたつ。そのものとなずらふ。蜻蛉二（阿清きて、すこしとばかくれてみたてるよ）

みたて　ナ。御楯。きみのまもり。万廿（けふよりは、かへりみなくて、大君の、之許乃美多豆と、いでたつ吾れは）

みたて　ナ。見立。みおくり。みさため。なずらへ。

みたて　ナ。見立。みむかへ。みるかひ。夫木四（潮風に、小島の崎、花さきて、波のみだても、なくぞちりぬる）

みたに　ナ。深谷。ふかきたに。散木（こゝろざし、ふかきみたには、つみためて、いしみゆすりて、おらふ根芹ぞ）

みたぬき　ナ。猯。獣の名。みと同じ。

みたのみくに　ナ。彌陀國。ごくらく。新古（今ぞこれ、入日をみても、おもひこし、彌陀の御國の、夕暮の空）

みだふす　リ。カケ。四。見倒。おとれるものとみなす。

みだぶつ　ナ。彌陀佛。あみだぶつと同じ。常盤嫗物語（めら御湯ほしや、彌陀佛、湯でも水でもすこしたべ）

みたま　ナ。御魂。こゝろ。たましひ。身にやどりて、よろづのはたらきをするもの。万六（天地の、神あひうづなひ、すめろぎの、御霊たすけて）仲哀紀（神霊）

みたましろ　ナ。御霊代。みたまとしてまつるかたしろ。

みたまのふゆ　ナ。恩頼。かみのめぐみ。曾丹集（いとまなみ、かひなき身さへ、いそぐかな、みたまのふゆと、うべもいひけり）神代紀（恩頼）

みたまや　ナ。御魂屋。なきひとのみたまをまつれるいへ。また、墓守などの家をもいふ。栄花とりべの（鳥部野の南の方に云々、たまやといふものをつくりて）

みため　ナ。身爲。みのため。みのとく。

みたもなし　サビ。無見度。みさくなし。みにくし。太平廿四（こゝなる僧の臆病氣なるみたもなさよ）

みたやもり　ナ。御田舎守。たのまもりするものをいふぞ。後拾（みたやもり、今日はさつきに、なりにけり、いそげやさなへ、おいもこそすれ）

みだゆ　ワ。ヒトリ。シニ。水絶。みづたゆ。みづきる。ながれとどまる。公任卿集（白川の、ながれてけふを、せずれめや、みだえてあさき、瀬となるとも）

みたらし　ナ。御手洗。神社のかたへにある、河、池などをいふとなへ。神人などの、手をすゝぎなどするよりいふなるべし。山家集（みたらしは、せられすゝぎて、みやびとの、真手にさゝげて、御戸ひらくなり）

みたらしがは　ナ。御手洗川。河の名。山城國、愛宕郡、賀茂の神山よりながるゝもの。古今（こひせじと、みたらし川に、せしみそぎ、神はうけずも、なりにけらしも）

みたらひ　ナ。御手洗。みたらしと同じ。

みだらをのうま　ナ。騘馬。うまの毛色の、青白まざらなるもの。和名（騘美太良乎乃宇麻 青白雜毛馬也）

みだりあし　ナ。脚病。あしのけと同じ。源椎本（そのもてなしなどは云々、御中道のほど、みだりあしこそいたからめと、いとまめやかにいひつけさせ給へど）

みだりあしのけ　ナ。脚病。あしのけと同じ。空嵯峨院（ひごろは、みだりあしのけにや侍らん、更にふみたてられ侍らず、たちうごきもし侍らぬを）

みだりがき　ナ。亂書。しどけなくかきたるをいふ。

みだりかくびやう　ナ。脚病。あしのけと同じ。空穂上（みだりかくびやういたはり侍るとて）

みだりかぜ　ナ。風邪。かぜけ。かぜのやまひ。栄花花山（内よりめしあれど、みだりかぜなど、さま〲の御さはり申させ給ひつゝまゐらせさせ給はぬを）

みだりがはし　サフ。濫猥。みだりなり。おだやかならず。この語は、今は、みだりがはしいと、いをそへていふ。源橋姫（かきさしたる様にて、いとみだりがはしくて）

みだりがはしい　サ。濫猥。みだりがはしを見るべし。

みだりがまし　サフ。濫猥。みだりがはしと同じ。

みだりごこち　ナ。病心地。やみたるこゝち。空穂上（日頃、みだりごこちのなやましく侍りけるにや）

みだりに　ソ。妄。猥。みだりがはしく。とりしまりもなく。かろ〲しく。後撰（白河の、たきのいとみまほしけれど、みだりにひとは、よせじものをや）

みだりむね　ナ。胸病。むねのやまひ。とりかへ二（みだりむね、いとふくはおこりて侍るほどなればとて、いでずなりぬるがびなしうおぼしきは）

みだりを　ナ。亂尾。みだれたるを。万七（にほどりの、かけの垂尾の、亂尾の、ながき心も、おもほえぬかも）

みだる　ワ。カケ。四。亂。みだれしむ。枕草十（文云々、うすく、くざりせむは、うらうへかきみだりたるを）

みだる　サ。ヒトリ。シニ。亂。つねのかたちをうしなふ。こなさかなるいりまじる。しどけなきさまになる。この語は、地方によりては、みだれると下一段にいふ。古今（あをやぎの、いとよりかくる、春しもぞ、みだれて花の、ほころびにける）栄花月宴（船岡にて、みだれたまふれさまひしこそ、いみじきみものなりしか）

みだれ　ナ。亂。みだるゝをいふ。よのなかのさわがしくてをさまらぬをいふ。源夕霧（なほ、かゝるみだれにそへて、足りなき御心なんいみじうつらき）

みだれあし　ナ。脚病。あしのけと同じ。空穂楼上（くらうど、みだれあしは、うごかれず侍り、みきはかづきさまふものは、みのむしのやうにてやむくめきまゐらん）

みだれがはし　サフ。濫猥。みだりがはしと同じ。狭衣四（さやうはみだれがはしく、こゝろをとくるかたざまなくて、今、二三年ざはすぐしてん）

みだれぐさ　ナ。亂草。草の名。すゝきの異名。藻鹽草

みだれぐら　ナ。亂鞍。鞍の輪に、居木をつけぬもの。貞丈雜記

みだれごと　ナ。濫事。みだりなること。源柏木（えおぼすさまなるみだれごともうちいでさせさまで、やう〱てそれめなれめとおぼしけり）

みだれずり　ナ。亂摺。あをずりなどのみだしたるもの。

みだれそんず　ワ。ヒトリ。カ。亂損。みだれやぶる。そろくなる。十訓五（このほど、世の中みだれそんじて、あいする人もなし、年こすべきやうもなかりしかど）

みだれやき　ナ。亂燒。やきそのあやのみだれたるもの。

みだれよ　サ。亂世。らんせい。みだれたるよ。

みだれる　ワ。ヒトリ。シニ。亂。みだるを見るべし。

みち　ナ。海驢。海獸の名。さざうなす。但し、よくねむるをいへば、あしかならんともいへり。まさ、この獸の毛は、潮みつときは、やはらかになり、潮ひるときは結るともいふ。夫木六（とげ織れ、みちの獸なれ、さめやらぬ、夢なりながら、たえやもてなん）

みち　ナ。蜜。みつ。蜂の、花のしるをとりてかもしなすものにて、飴のごとくにて、あおぞひ、きそめてあまきもの。源鈴虫（荷葉の方をあはせたる名香、みちをかくしほろゝげてたきにほはしたる）

みち　ナ。道。路。ひとのゆきゝするところ。ひとのふみてとほるところ。古今（わが宿は、みちもなきまで、あれにけり、つれなきひとを、まつとせし間に）

みち　ナ。道。方法。ひとのまもるべきすぢ。ひとのおこなふべきすぢ。まさ、ものごとのみち。空穂吹上（すゑふさ云々、學問せさせたる道のひとにもあらず）

みちあへのまつり　ナ。道饗祭。六月十五日におこなはれし祭なり。下文を見るべし。公事根源（道饗祭、これは、疫神の祭なり云々、京城の四角の路にて、鬼魅の、他の方より來たるを、京路にいれざらしめんために、路上に、供物をそなへてまつるなり）

みちかけ　ナ。滿缺。盈虧。みつるとかくると。

みぢかし　サビ。身近。みにちかし。みのほとりにあり。さんぞくめきたり。源帚木（中納言の子は、えさせてんや、らうたげにみえしを、みぢかくつかふ人にせん）

みちかひ　ナ。道交。みちのゆきちがひ。源明石（あやしきすがたにてそぼちまゐれるみちかひにてだに、人か何ぞとだに御らんじとがめらるべうもあらず）

みちがひ　ナ。見違。みあやまり。みそこなひ。

みちがゆく　ワ。ヒトリ。道行。むかどる。らちがあく。

みちぎは　ナ。道際。みちのきは。みちのはし。みちのほとり。新六二（みちぎはの、あぜのかこひに、しめさして、たなゐのたねも、もやまきてけり）

みちくさ　ナ。路草。みちにはえたるくさ。まさ、童部などの、道をゆきながら遊びたはぶれてあるをいふ。

みちくさ　ナ。路草。草の名。おぶらがやと同じ。

みちくらべ　ナ。路競。むしりくらべなどのたはぶれなるべし。和名（弈道云々、和名美知久良閉）

みちしき　ナ。路敷。みちのしきち。みちにしくもの。

みちしば　ナ。路芝。みちにはえたるしば。新古（とふ人も、嵐ふきそふ、秋は來て、木葉の埋む、宿の道芝）

みちしばの　マクラ。路芝之。みちしばは、おどろ〱しくもしげければ、おどろにかけていふ。小大君集（道芝の、おど

ろの髪に、ならされて、うつれる香こそ、草枕なれ）

みちしほ　ナ。満潮。みちてくる潮。さしてくる潮。

みちしるし　ナ。路標。しをり。みちのしるし。

みちしるべ　ナ。路導。みちのしるべ。また、ゆくてのみちのしをりにたてゝあるくひ。千載（ふる雪にたつ、浪をならべ、ひとしれず、標路はまどはず、みちしるべせよ）

みちすがら　ッ。路をゆきながら。千載（みちすがら、心をそらに、ながめやる、都の山の、くもがくれぬる）

みちすぢ　ナ。道筋。みちのすぢ。ものごとのことわり。

みちづくり　ナ。路造。みちぶしん。夫木廿（わが君の、御代の、みちづくり、くはめる身をも、隙とれみよ）

みちつじ　ナ。路辻。みちのつじ。新六二（みちつじの、鳥居はあるし、杉がくれ、この山中に、やしろありとは）

みちつづき　ナ。路続。みちのつゞき。夫木廿（蜑のすむ、里のなぞての、路続、かぎりあらむや、うらみそつべき）

みちづら　ナ。路面。みちべた。みちのかたそら。宇拾五（山科のみちづらに、四宮河原といふところにて）

みちづれ　ナ。路連。つれだちてゆくひと。郷のつと（その夜は、みちづれの侶などあまたありしも、みな、かりその草の枕をむすびてとゞまり侍りしほどに）

みちなか　ナ。道中。みちのなか。狭衣三（足音いとおどろくしく、近うさまよふか、道中よりのけさせさせる）

みちのき　ナ。道記。たびぢのひなみのにき。

みちのく　ナ。陸奥。国の名。とうさんだうを見るべし。

みちのくがみ　ナ。陸奥紙。紙の名。だんしに同じ。枕草三（こゝろゆくもの、白くきよげなる陸奥紙に、いとほそう、かくべくもあらぬ筆して、文かきたる）

みちのくち　ナ。道口。催馬楽の律の曲の名。催馬楽（見知之久知、たけふの国府に、われはありと、おやにはまうしたべ、こゝろあひの風、やさきんだちや）

みちのくち　ナ。国前。くにのいりくち。また、いりくちのところにあるくに。和名（越前古之乃三知乃久知）

みちのくに　ナ。陸奥。みちのく。後三年記（頼義、むかし、貞任をうたんとて、みちのくにへくだりしとき）

みちのくにがみ　ナ。陸奥紙。紙の名。だんしに同じ。源氏末摘花（みちのくにがみのあつごえたるに、にほひばかりはふかうしめて、いとようかきおほせたり）

みちのくの　ナ。陸奥之。みちのくは、よき駒をいだす地なれば、こまにかけていふ。拾遺（あふ事の、片糸しさる、みちのくの、こまほしくのみ、思ふころかな）

みちのし　ナ。道師。姓の名。かばねを見るべし。

みちのしり　ナ。道尻。くにのおく。また、おくのところにあるくに。古事記（美知能斯理、こはだをとめを、神のごと、きこえしかども、あひまくらまく）

みちのそらぢに　ッ。路空。みちのそらに。万廿（ゆきのあきの、ほつてのうらへに、かさやきて、ゆかんとするは、いめのごと、美知能蘇良治、わかれする君）

みちのそらに　ッ。路空。とちゆうに。みちなかに。ゆくてのみちに。小大君集（おそれども、草葉の露や、とこなまし、みちのそらにて、きえなましかば）

みちのながちは　ナ。道之長乳歯神。いざなぎの神の御子。

みちのべ　ナ。路辺。みちのほとり。堀川次郎（みちのべの、木下水を、むすびつゝ、夕陰まつぞ、久しかりける）

みちのまにまに　ッ。道随。みちすがら。枕草子（いつの間にさうぞくしつらん、帯は、道のまゝにゆひて）

みちのり　ナ。道法。みちの、とほさちかさのへだゝり。

みちばうき　ナ。路帚。草の名。おほばこをいふ。甲斐にて、

みちばし　ナ。路橋。みちにかけたるはし。ひとのゆききふさし。催馬楽（市川の、みづはせられし、みちばしを、とざしてけりと、きくぞうれしき）

みちばた　ナ。路端。みちのきは。みちのほとり。

みちばち　ナ。蜜蜂。蜂の一種。みつばち。状、常の蜂よりもおほきくして、色くろずみたり。また、常の蜂のごとく、人を螫さずして、常に、草木の花の蕊をとりて、蜜といふものをつくる。和名（蜜蜂和名美知波知）

みちはづれ　ナ。路外。なかぞらの、みちはかなはぬをいふ。

みちはらひ　ナ。道祓。みちのひとをおひのくるをいふ。

みちはり　ナ。路墾。みちを、あらたにひらくをいふ。

みちひ　ナ。満干。うしほのみつるとひると。

みちびき　ナ。導。みちのしるべ。源氏末摘花（なかく、なるみちびきは、いとほしき事やみえなんと）

みちびく　サ。カク。四。導。みちのしるべをなす。みちをさし

へていざなふ。月詣集（この世をば、うしとこゝろに、かけつれば、みつのくるまに、みちびかれなん）

みちびと　ナ。路人。みちにつどひたるひと。

みちびらき　ナ。道開。みちのしるべ。みちのあんない。

みちぶしん　ナ。路普請。みちのつくろひ。

みちべた　ナ。路端。みちのはた。みちのほとり。

みちまどひ　ナ。路惑。みちをふみまよふをいふ。ゆくてをうしなふをいふ。後撰（よもすがら、ぬれてわびつる、からころも、逢坂山に、みちまどひして）

みちみち　ナ。道々。さまぐのみち。源氏桐壺（いよく、みちくのざえをならはさせたまふ）

みちみちし　サ。フ。道々。みちめきたり。ことわりめきたり。みちだちてことぐし。源氏帚木（おほやけにつかうまつるべき、みちくしきことををしへて）

みぢんに　ッ。微塵。きはめてこまやかに。太平廿八（なぐるつぶての石、大日の眞言にきこえて、かつて、その身にあたらず、あらけてみぢんにくだけける）

みちもさりあへず　ッ。路もさりがたきほどに。みちもよきがたきまでに。古今（梓弓、春の山辺を、こえくれば、みちもさりあへず、花ぞちりける）

みちもせに　ッ。路狭。みちもせまきまでに。みちもさりあへず。千載（ふく風を、勿来の関と、おもへども、みちもせにちる、やまざくらかな）

みちもり　ナ。道守。ちもり。みちのまもり。

みちやう　ナ。御帳。おましのとばり。紫式部日記（御帳の東のおましの際に、御几帳を、おくの御さうしより、ひさしの柱まで、ひきもあらはさずたてきりて）

みちゆき　ナ。道行。みちをゆくをいふ。また、男女の、ひそかに、つれだちてあるくをいふ。長能集（道行に、みれどもあかぬ、紅葉かな、うべこそ人は、家居せりける）

みちゆきうらに　ッ。道行占。みちゆきのうらなひに。みちをゆくときのつじうらに。万十一（たまほこの、路往占に、うらなへば、妹にあはんと、我にはいひつる）

みちゆきずり　ナ。道行摺。くさなどをさけてゆくとき、衣の、草などにすらるゝをいふ。新六（霜さゆる、かもの河原に、駒なべて、みちゆきずりの、山藍の袖）

みちゆきびと　ナ。道行人。みちをゆくひと。六帖（夏山の、陰をしげみや、玉鉾の、道行人も、たちとまるらん）

みちゆきぶり　ナ。道行触。みちをゆくについて、ものにふるゝをいふ。風雅（かへる雁、はねうちかはす、しらくもの、みちゆきぶりは、さくらなりけり）

みつ　ナ。蜜。はちのつくるもの。みちを見るべし。

みつ　ナ。三津。地名。難波にあり。古今（おしてるや、難波のみつに、やくしほの、辛くも我れ、おいにける哉）

みつ　ナ。三。ふたつに、ひとつをあはせたるかず。源氏総角（をんなは、みつにしたがふものにぞあなれ）

みつ　ワ。ヒトリ。四。満。たる。たゝふ。あふるゝ。あまりになる。万三（世の中は、むなしきものと、あらんとぞ、このてる月は、満闕しける）古今（みつ潮の、ながれひるまを、あひがたみ、みるめの浦に、よるをこそまて）

みつ　ワ。カケ。シニ。満。みたしむ。みつる。壬生二品集（うゑみつる、田面の早苗、水すみて、濁なき世の、影ぞ見ける）

みづ　ナ。水。かはなどにありて、ながるゝもの。きはめてあたゝむれば、くものごとくなりて、たちのぼり、きはめてひやせば、すゐしやうのごとくなりて、かたまる。

みづ　ナ。瑞。うるはしくきよらかなるをいふ。祝詞式（高天原爾千木高知弖、皇御孫命乃瑞能御舎乎仕奉弖）

みづあか　ナ。水垢。みづのあか。みづのさび。

みづあげ　ナ。水揚。あきなひぶねの、みなとにいりきたるとき、そのつめるものを、くがにとりあぐるをいふ。

みづあさぎ　ナ。水浅葱。あゐいろの、きはめてうすきもの。

みづあそび　ナ。水遊。みづのあそび。新六（浮鳥の、さながらぬる、水あそび、何ぞいさても、かしらららげぞ）

みづあたり　ナ。水中。みづをのみてあてらるゝをいふ。

みづあつかひ　ナ。水扱。みづあそび。みづしごと。

みつあひ　ナ。三合。みつあはせたるもの。みつぢよりあはせたるいと。万四（わがもたる、三相によれる、いともて、つけてましもの、いまぞくやしき）

みづあび　ナ。水浴。みづにいりてあぶるをいふ。

みづあびせ　ナ。水浴。みづいはひを見るべし。昔々物語（むかしは、正月、みづあびせといふ事ありて、婚姻したるひと、翌年の正月いはふ事なり）